

仮面ライダー電王LYRICAL StrikerS Vol.1 Spring Party

(M I N A)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

生と死を監視する『関所』に送られてきた一通のメッセージ。

『サイキョウウニシテサイアクナルモノ』

それが新たな出会いと戦いの始まりだった。

本来繋がるはずがなかった二つの時間と時間が繋がる時、三度物語が始まる。

目次

機動六課と仮面ライダー

- 第一話 「サイキョウユニシテサイアクナルモノ」 1
- 第二話 「三度目の別世界へ！」 14
- 第三話 「魔導師ランク試験」 24
- 第四話 「電王、ミッドの大地に立つ」 45
- 第五話 「電王と魔導師 三度」 58
- 第六話 「機動六課 前編」 70
- 第七話 「機動六課 後編」 83

本格始動

- 第八話 「初日の夜」 96
 - 第九話 「災害を屠りし者」 115
 - 第十話 「機動六課 始まりの日」 136
 - 第十一話 「オーナーからの贈り物」 154
 - 第十二話 「訓練と訓練まがい？」 174
 - 第十三話 「初対決!？」 200
 - 第十四話 「激戦開始!! 電王 対 ゼロノス」 218
 - 第十五話 「勝負者達が恐れるもの」 236
- ファーストアラート
- 第十六話 「明かされる次元世界最強の戦士」 258
 - 第十七話 「相手は野上良太郎!？」 289
 - 第十八話 「アラートは実戦という旅立ちの汽笛」 319
 - 第十九話 「積み重ねたことが活かされるとき」 337
 - 第二十話 「任務終了と模擬戦終了」 356

世界は時の流れのごとき進む

第二十一話	「司書長と査察官」	392
第二十二話	「進展」	407
第二十三話	「その名は……」	423
第二十四話	「動き出す闇の者達」	446
第二十五話	「機動六課 海鳴へ①」	460
第二十六話	「機動六課 海鳴へ②」	473
第二十七話	「機動六課 海鳴へ③」	487
第二十八話	「機動六課 海鳴へ④」	501
第二十九話	「機動六課 海鳴へ⑤」	518
第三十話	「機動六課 海鳴へ⑥」	532
第三十一話	「機動六課 海鳴へ⑦」	544
第三十二話	「機動六課 海鳴へ⑧」	560
第三十三話	「六課のいないミッドチルダ 前篇」	583
第三十四話	「六課のいないミッドチルダ 後編」	594
ホテル・アグスタ		
第三十五話	「奇妙な縁」	614
第三十六話	「ホテル・アグスタ」	626
第三十七話	「ホテル・アグスタ」	639

機動六課と仮面ライダー

第一話 「サイキョウニシテサイアクナルモノ」

時の列車デングライナー。

次の停車駅は『過去』か『未来』かそれとも三度……

別世界の『時間』か？

*

雨雲もしくは雷雲とも形容できる雲が渦を描いている空間の中心に一つの巨大な物体——キングライナーが佇んでいた。

このキングライナーは『時の空間』で『ターミナル』と呼称されるものとは色彩も違っており、無論役割も違う。

本来の役割は『分岐点』に関する監視を担っている。

そしてキングライナーの色彩は『赤』だが『紫』となっている。

何かを誘うかのような妖艶さが全体から滲み出していた。

現在、紫のキングライナー（以後デッドライナー）は『時の列車』を受け入れる形態である『ステーションモード』になっていた。

管制室では三人——男性一人に女性二人がモニターに映る映像に変化がないとなると各自で自由に行動していた。

男性——喪服のように黒く帽子のエンブレムには髑髏が施されているデッドライナーの駅長（以後・黒駅長）が自前のスプーンセツトを丹念に磨いていた。

女性二人——一人は黒髪で色香と妖艶さを漂わせている黒髪の女性と身長は低い、金色の髪をツインテールにした少女が睨みあっていた。

二人の中央にはチェス盤が置かれていた。

「むづつづつづつづつ」

金色髪の少女——アリシア・テスタロッサがしかめっ面を浮かべて、腕を組んで唸っていた。

黒髪の女性——プレシア・テスタロッサが余裕の笑みを浮かべていた。

この二人、常人ではない。

プレシアは現世では公式で死亡扱いとなっており、デッドライナーで長期間生活しているため『時間』の概念から完全に解き放たれているといういわば後天的な『特異点』である。

アリシアは既に死亡しており、五歳児の肉体のまま成長する事はないが精神は知識を得る事でいくらでも成長できる。

彼女は母親とは違い、『死霊』という常人とは違うものになって生きている。

「アリシア。まだかしら？」

「待つて！まだ考えてるから！」

プレシアの挑発にアリシアは前向きな返事をする。

だが手詰まりである事に変わりはない。

いくら唸つても良策は出てこない。

「よしっ！この手!!」

アリシアは自分の駒を掴んで盤に差す。

だがその手はプレシアにとつては好都合の手であり、アリシアにとつては『死に手』になった。

何故ならプレシアの表情は『勝利』を確信している笑みになっていたのだから。

アリシアの陣営はポーン二個とビショップ一個でキングを囲っているのだが、プレシアはナイトの駒二個でチェックメイトとなつていた。

「うっ……。お母さ〜ん」

アリシアが何かを懇願するかのような声を出す。

『待った』はないわよ。アリシア」

母は娘の願いを容赦なく切り落とした。

アリシアはこれで通算一勝二千九百六十敗という成績になった。

「お茶が入りましたよお」

黒駅長が台車を押しながら、紅茶の入っているポットとティーカップを持ってきた。

「ありがとう！おじさん」

「いつも悪いわね」

アリシアとプレシアは慣れた手つきでティーカップを受け取って、口の中を含む。

紅茶の香りが鼻腔をくすぐる。

「いいええ。私が好きでやっている事ですからあ」

黒駅長はデンライナーのオーナーやキングライナーの駅長より、レディファーストを重んじる傾向があった。

「このところ平和といえれば平和ですねえ。デッドライナーが忙しいというのも考えものですけどねえ」

「そうね」

黒駅長の言葉にプレシアが相槌を打つ。

デッドライナーの役割はキングライナーとは違う。

現世と常世の監視を担っており、常世にあるアルハザードへ向かう一筋の路線に構えている。

つまりアルハザードに向かう為にはデッドライナーを経由しなければならぬし、アルハザードから現世に向かう際にも経由しなければならぬのだ。

プレシアとアリシアはここで黒駅長の仕事を手伝っている。

『時の列車』が停車した場合はアルハザードや現世へと向かう専用チケットを手配したりする。

それが無い場合は、モニターを通して現世と常世の監視をしている。

何が起こっているのかはここにいれば全て丸分かりであって、現世も常世もプライバシーというものは無いという事になる。

一台しか置かれていないファックスがガガガアと音を立てながら、一枚の紙が舌を出すように出てきた。

黒駅長が紙を手にして凝視してからプレシアとアリシアを見る。

「プレシア女史。アリシア嬢」

「なあに？おじさん」

「もしかして忙しくなるのかしら？」

「準備をしてください。ターミナルに向かいますよお」

*

モニュメントバレーを髣髴させる荒野——『時の空間』に幾数ものキングライナーが並列されており、全てがステーションモードになっていた。

その中の一つにデンライナーが停車している。

管制室には二人の妙齢の男がスプーン片手に睨み合っており、一人の女性が両手にお子様ランチのチキンライスの頂点に刺さっている旗を持って応援していた。

二人の男の間にあるテーブルの上に乗っているのは、巨大なチャーハンで旗も頂点に乗っている。

「ほほ。腕を上げましたねえ」

「ぬぬぬぬうううううう」

余裕の笑みを浮かべながら称賛の言葉を述べているのはターミナルの駅長であり、相手をしているのはデンライナーのオーナーである。

そして二人を応援しているのはデンライナーでアルバイトをしているナオミだ。

状況は接戦をしているようにも見えるが、実際にはオーナーに分が悪かった。

オーナーがスプーンをチャーハンに突き刺して、掬い上げてから口の中に放り込む。

自分のターンが終わったという意味表示としてベルを鳴らす。

駅長の番となって、目隠しをしてからその場で回転椅子を一周回転させてからスプーンを突き刺して口の中に放り込み、ベルを鳴らした。

椅子を回転させることで平衡感覚が狂い、目隠しをすることで視覚による情報を得る事も出来ないためオーナーの方が有利といえは有利なのだが駅長の方が一枚上手だった。

ナオミは能天気に応援している。

ピンポンパンポンとアナウンスが鳴る。

『駅長にお客様です。管制室にはあと五分後に到着しまーす』

「わかりましたあ」

駅長はアナウンスに向かって了承した。

「こうなると中断ですか？」

ナオミがチャーハン対決を続行するか否かを対戦者に訊ねる。

「五分以内に決着をつけるのは勿体無いですからねえ。この対決は次回に持ち越ししましょう」

「そうですねえ」

駅長の申し出にオーナーはいつもの表情で応じたが、内心はホッとしていた。

五分後に管制室に足を踏み入れたのは、黒駅長、プレシア、アリシアだった。

「まさか貴方がわざわざごこちらに赴くとは思いませんでしたよお」

「本当に、いつ以来でしょうかねえ」

突然の来訪者達にもオーナーと駅長は動揺一つしていなかった。

「突然の来訪申し訳ありません。何分深刻な事態になっておりますので足を踏み入れさせていただきましたあ」

「何かあまり変わらないね。お母さん」

「そうね。漂う冷気のようなものがないことを除けば私達が生活している『関所』と変わらないわね」

黒駅長はオーナー、駅長とは旧知の間柄らしく互いに挨拶を交わして、アリシアとプレシアはデッドライナー以外の『時の列車』に乗った経験がないため、好奇心を隠さずに周囲を見回していた。

ちなみにプレシアの言った『関所』とはデッドライナーの事を指す。

キングライナーが『ターミナル』と呼ばれているのと意味合いは同じである。

「あの、オーナーこの人達はあ？」

事態についていけていなくても特に気にしないナオミがオーナーに訊ねる。

「この方は『関所』と呼ばれている特殊なキングライナー——デッドライナーの駅長ですよ。その特異性故に……」

「私の事を『死神』と呼ぶ方もいますけどねえ。実はですねえ、ファツ

クスにこのような物が届きましたのでぜひ見てもらいたいですよ」

黒駅長はファックスで送信された紙をオーナー達に見せる。

「何でしょうかねえ」

「短すぎてわかりませんねえ」

「ナゾナゾでしょうか？」

オーナー、駅長、ナオミも顔をつき合わせてその紙を見る。

『サイキョウニシテサイアクナルモノ』

と記されていた。

「災いをもたらす存在という解釈は出来るわよ」

プレシアは冷静に文面を独自に解釈していた。

「災いつてどういう風なのかな？時間？それとも物理的？」

アリシアもデッドライナーで十年近く生活しているだけあって、この文面でそれだけの推測を立てることが出来る。

「その両方が出来るとしたら、まさに『サイキョウニシテサイアクナルモノ』ですねえ」

黒駅長も二人の解釈が間違っていないという前提でそのように結論づける。

「そうなることやはり、彼等にお問い合わせするしかないでしょうねえ」

オーナーはこの謎を説明できる存在を思い浮かべていた。

「お兄さん達だあ！」とアリシアが喜び、「そうね」とプレシアは満足げな表情を浮かべていた。

*

セミが鳴き、降り注ぐ日の光は容赦なく眩しい。

季節は夏であり、薄着で行動している人達がほとんどだ。

自然と街との一体化というコンセプトで植えられている木から生じる影に入って暑さをしのいでいる人達もいた。

その中、一人の青年が両手に買い物袋を持って歩いていた。

野上良太郎。

過去に幾度も仲間達と共に『時の運行』を護り、別世界の『時間』も護った仮面ライダー電王（以後：電王）に変身する青年だ。

現在は姉の野上愛理が経営している『ミルクデイツパー』での買出

しの帰りである。

『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』から一ヶ月が経過しており、時折本世界（自分達の世界）に出現するイマジンを倒していたりするが、概ね平和といえれば平和を満喫していた。

買った物袋の中には食材は入っておらず、キッチンペーパーや洗剤などといった消耗品と呼ばれるものばかりだった。

「メモに書いてある物は全部買ったと……」

良太郎は愛理が記したメモと買った物袋に入っている物を見ながら、確認する。

確認を終えると、顔を前に向き直って歩を速める。

すれ違う人々がある特定の場所で足を停めて、チラリと何かを見てからまた歩き出す様が良太郎の目には映った。

（何だろ……）

こちらに向かってくる人達が好奇の眼差しを向けながら、チラリと見てからすぐに無関係を装うようにしてそそくさと歩いていった。

ビルとビルの間が路地になっていった。

四人の背中が映っており、男女が壁に背を向ける状態のように見えた。

（カツアゲかな）

自身の経験談でそのように判断する。

わざわざ人目のつかない場所で行うという事はそれなりに手慣れて、成功もしているという事だろう。

目に映った以上、ほったらかしにもできないので進行方向を変更して路地を歩き出す。

「あのお……」

良太郎が低姿勢にカツアゲ少年四人組に声をかけると、全員が振り向いた。

外見からして自分と同一年か一、二歳下といったところだろう。

明らかに相手を威嚇するかののような表情と物腰。

『不良』というレッテルが貼られるには十分な少年達だった。

絡まれている男女は恐らくはカップルなのだろう。

年齢は自分と同年もしくは一、二歳くらい上なのかもしれない。この手の荒事にはあまり関わりのない人生を送ってきたのだろうと二人の表情からして察する事が出来た。

(この二人についてもしかして……)

絡まれている二人の顔を見て良太郎は記憶の中から引つ張り出そうとするが、すぐには出てこなかった。

「何よ？お兄ちゃん。お兄ちゃんがこの二人の代わりに恵んでくれるわけえ？」

少年Aが良太郎に向かって言う。

「でもあんまり持つてなさそうだけどうなあ」

「昼飯ぐらいは持つてるんじゃねえのお？」

「ま、いいじゃねーかよ。サイフが増えたんだしよお」

少年B、C、Dが良太郎を見てゲラゲラと笑いながら言う。

自分もカツアゲ対象になっているらしいとわかると、良太郎の目つきも変わる。

(話し合いは終わりみたいだ……)

場の空気でわかった。

この四人は自分を含め、絡まれている二人からカツアゲを成功させる事しか頭がない。

そのためならどんな手段も講じるだろうという事も。

「悪いけど君達に渡すお金はないよ。それにその二人が君達にお金を渡す事もない」

絡まれている男女達も目を丸くしていた。

四人も同じ様に目を丸くしていた。

「!!」

この瞬間、良太郎以外の人間には隙が生じていた。

右手に握られている買い物袋を頭上高く放り投げる。

次に少年Bの襟を右手で掴んで、右腕に力を込めてから引つ張る。

「なっ!?!」

少年Bは自身に何がおきたのかわからなかった。

「ふんー!」

良太郎は強引に引つ張つて後方へ下げると、少年Bの喉仏に素早く肘打ちを食らわす。

「がっ……」

声にならない痛みが襲い掛かっているらしく、喉仏を両手で押さえるが声を出す素振りはなかった。

一人が戦闘不能になると残りは三人となる。

落下する買物袋を右手で受け止めてから、少年Cの眼前に軽く放り投げる。

「なっ!? 見えね……ぶっ!!」

投げつけられた買物袋を顔面に食らった少年Cは払いのけると同時に、彼の目に映ったのは右掌が顔面に直撃した。

そのまま良太郎は地面に叩きつけるかのような勢いで右腕を振る。絡まれていた男女は互いに抜群のチームワークで左右に飛んで、正面から向かってくる少年Cを避けた。

背中を壁に強く打ちつけられたのか、口をパクパクしながらズルズルと崩れ落ちた。

(残り二人。刃物を出される前に終わらせる!)

懐からナイフを出してくると予想した良太郎はそれより速く動く。

速度を活かしたまま、右足を軸足にして腰に少しだけ捻りを加えて、左下段回し蹴りを放つ。

「\$#&!」

少年Aの右足が蹴り一発で麻痺して動けなくなった。

追い討ちとして、左足を軸にして右足を振りかぶってから前蹴りを放つ。

少年Aの前歯が何本か折れ、そのまま仰け反って倒れた。

「わ、わああああ!!」

少年Dは恐怖と虚勢の混じった声をあげながら、こちらを睨んでいた。

良太郎は少年Dを見据える。

身体全身がガタガタと震えており、とてもではないが戦闘が出来るとは思えなかった。

良太郎が一步踏み込めば少年Dは一步退がる。

「ま、まさかアンタ……最近噂になっ……」

少年Dは記憶量の少ない脳みそをフル回転させながら、何かを思い出しているようだった。

最近になってこの街の不良業界では噂の人物が浮上していた。

不良の端くれである少年Dもこの人物の事は耳にしたことがある。

カツアゲの先輩達がいつものように絡んだのだが、返り討ちに遭ったという。

たった一人に。

しかも相手は素手で、格闘技をかじっていた者達を簡単に倒してしまったとの事だ。

格闘技を習っていない自分にしてみればまず関わりたくない相手であった。

だが、その風体までは知らされていなかった。

だからわからなかった。

自分に声をかけてきた青年こそが、不良業界で噂になっている人間なのだという事を。

(こんな……こんなヤベエ奴なんて聞いてねえよ!)

毒づきながらも、助けがくる事はないというのは重々承知している。

全身の震えが止まらない。

(ど、どうすりゃいいんだよ!?)

少年Dはこの期に及んで自分の進退を人任せにしようとしていた。

懐に収めているナイフで切りかかるといふ手もあるが、それよりも速く相手の拳が飛んでくると想像すると出せなくなる。

相手に負けたくはないが、痛い思いはしたくないというジレンマが彼にはあった。

そのジレンマが自身を窮地に陥れている事に気付いてはいない。

「あ……あ……あああ……うわあああああ!!」

結局彼は傷ついた仲間を置いての逃亡という選択しか出来なかった。

「仲間置いてっちゃった……」

良太郎は逃亡した少年Dの背を見つめながらも、自分が倒した三人を一瞥してから絡まれていた男女に歩み寄った。

「もう大丈夫ですよ」

良太郎は安心させるように告げる。

(やっぱり見覚えはあるんだけどなあ……)

既視感のようなものがあるが、どうにも思い出せない。

「もしかして野上君?」

女性は自分の事を知っているような口振りだった。

「本当に野上なのか?」

男性も知っているようだ。

もう一度、カップルを見る。

「あああああああ!!」

二人を指差しながら、ようやく思い出した。

最寄の喫茶店に良太郎とカップルはいた。

助けてくれた礼をしたいとの事だ。

カップルはそれぞれコーヒーとアイスクリームを頼んでおり、良太

郎はオレンジジュースを飲んでた。

この二人は良太郎が高校に在学していた時の同級生だった。

あれから結構な月日が経っているし、思い出しているほど暇でもな

かったというのも確かだ。

「野上君って学校辞めてからはどうしてるの?」

女性(以後:女元同級生)がコーヒーを一口含んでから訊ねる。

「姉が喫茶店を経営してるからね。そのアルバイト」

良太郎はお茶を濁すようなかたちで告げる。

真相を告げたところで信じてもらえない、というよりも信じないか

らだ。

「でも手慣れてるよな。あの動きどう見ても一度や二度じゃないし、

何かやってるのか?」

男性(以後:男元同級生)がアイスクリームをスプーンで掬いながら、先ほどの事を思い出しながら訊ねる。

「特に格闘技はかじってないよ。喫茶店で働いてると、マナーのなつてない人達と揉めたりするからね。それで知らず知らずのうちに、ね」

命からがらの戦闘をして、強くなったとは言えない。

ましてや相手が人外生命体ならなおの事だ。

カタンと空になったグラスをテーブルに置いて、良太郎は席を立つ。

「それじゃ僕はこれで。工作中だからね」

「頑張つてね」

「ありがとな。野上」

買い物袋を持って、良太郎は喫茶店を出た。

*

ミルクデイツパーに戻ると、愛理を目当てに来店している三流雑誌記者の尾崎正義と自称スーパークウンセラーの三浦イツセーがカウンター席の指定席に座っていた。

だが、三浦と愛理が会話を弾んでいる中で尾崎はチラチラと何かを伺っていた。

「あん？何見てんだよ teme エ」

オオカミが愛嬌のある顔とは真逆のドスの効いた声を出す。

「僕達、見世物じゃないんだよお」

ペンギンも同じ様な事を言いながら、睨んでいる。

「ホレ。早よ姉ちゃんと話せんかい」

ゾウも右手でしつしと払う。

「オマエ。おねえちゃん、傷つけたら僕許さないよ」

ドラゴンが尾崎の元に歩み寄って、愛嬌のある顔を押し付けていた。

「あ、あのこれで二度目ですよ。何でここまで……」

尾崎の言うように、着ぐるみ四体（以後：着ぐるみ4）とは二度目であるが何故このような因縁をつけられるのかはわからないようだ。

コハナは愛理のお手製コーヒーを堪能していた。

「ただいま」

買い物袋を持った良太郎が帰ってきた。

おかえりいいいいい。

店内にいる全員が声を揃えて出迎えてくれた。

良太郎も着ぐるみ4もコハナも知らない。

新たな出会いと戦いが始まろうとしている事を。

第二話 「三度目の別世界へ！」

「セミが自らの命を燃やして鳴いている昼。

『ミルクディッパー』も昼休み、もしくはは避暑地として来店している者達で賑わっていた。

野上愛理と野上良太郎、そして着ぐるみ4、コハナは客の応対に忙しかった。

また尾崎正義と三浦イツセーも着ぐるみ4に半ば脅されて手伝わされたりしていた。

助っ人のお陰で、思った以上に早く客を捌く事ができて現在は休憩時間となっていた。

みな昼食を取っていた。

本日の昼食は愛理オリジナルのトンデモ料理（薬膳料理ともいう）ではなく、ごく普通のサンドイッチだった。

良太郎が元の身体に戻ってからは、愛理のトンデモ料理の出現数は少なくなった。

実弟である良太郎も、このトンデモ料理は好きになれなかった。薬膳料理を前提にしているため、ハッキリ言えば不味い。

サンドイッチを頬張りながら、そのような事を考えてしまう。

「ねえ。良ちゃん」

カウンターで人数分のコーヒーをカップの中に淹れている愛理が良太郎に声をかける。

「どうしたの？ 姉さん」

良太郎は愛理から自分の分のコーヒーを受け取りながら姉を見る。

「桜井君は元気してるのかしら？」

『桜井君』とは桜井侑斗の事だ。

ピギーズイマジンの一件以来、愛理は侑斗とは会っていない。

愛理にとって『桜井侑斗』は二人存在しているという認識になっている。

一人は愛理の婚約者であり、良太郎の義兄となるはずだった桜井侑斗（以後：桜井）。

もう一人は十年前の時間からやってきて、仮面ライダーゼロノスに変身して戦っている良太郎と同じ年代の桜井侑斗だ。

前者は既に消滅しており、後者は健在である。

元は同じ人物だが今となっては『同姓同名の別人』という風に捉えられても不思議ではない。

「元気にしてると思うよ」

良太郎も『闇の書事件』及び『ネガタロスの逆襲』以降は会っていないが、そう簡単に倒れるタマではないと思っている。

コハナを見る。

彼女は桜井と愛理の子供であり、『特異点』だ。

つまりどんな経緯でもコハナは誕生するという事になる。

桜井が消失した以上、侑斗と愛理が結婚すればコハナが誕生するというのが定説だ。

だが良太郎は知っている。

侑斗も愛理もその気になれないという事を。

愛理が今でも愛しているのは桜井であって侑斗ではない事を。

また、侑斗も桜井の後釜になるようなかたちで愛理と結ばれるつもりは毛頭ない事を。

良太郎としてもこのまま二人が結ばれても幸せになることはないと考えている。

『時間』という得体の知れないものに操られているしかないからだ。

「どうしたんだよ？良太郎」

オオカミがサンドイッチを食べながら、何かを考えている良太郎を見る。

どこかボーっとしているようにも見えるし、何かを考えているようにも見えた。

「ん？あれから一ヶ月経ってるんだなってね……」

「あれからオッサンも何も言っておねーって事は俺達が出るほどの事はねーってことじゃねーのか？」

「そうかもしれないね」

オオカミの言うとおりで良太郎は考える。

別世界絡みの際には必ずといっていいほどオーナーから連絡が入る。

それがないとなると、別世界では大きな出来事があったとしてもそれは電王や仮面ライダーゼロノスが絡む程のことはではないという事になる。

(次に行くとしたらどの時間なんだろう……)

そのような事を考えてしまう。

一度目は今から十年前の時間で二度目はその半年後の時間だった。もし次に行くとしたら、どの時間なんだろうと思ってしまう。

良太郎のズボンのポケットから音楽が流れ始める。

携帯電話の着メロだ。

ポケットから取り出して、携帯電話——ケータロスを通話状態にする。

「もしもし」

『お久しぶりですねえ。良太郎君』

「オーナー。どうもお久しぶりです」

良太郎の会話から通話相手がオーナーだと知ると、着ぐるみ4とコハナはケータロスに集中していた。

*

月が照らし、昼間に比べると若干涼しいと思われる夜。

二輛編成のゼロライナーが海上に線路を敷設して、停車していた。

二輛目のゼロライナー・ナギナタ（以後：ナギナタ）のデッキから

一本の糸が海に向かって垂れていた。

桜井侑斗が夕食を調達する為に、夜釣りをしていた。

といっても、切羽詰って行っているわけではない。

その証拠に表情は比較的穏やかでありキャンピングチェアに座って、デネブが淹れてくれたお茶を飲みながら行っているのだから。

「侑斗。俺の方は準備できたよ。釣れた？」

ナギナタ内で包丁を研いでいたイマジン——デネブが空になったマグカップにお茶を淹れてくれた。

「駄目だな。今日はさっぱりだ」

侑斗が釣りをするようになったのは別世界の戦いが終わってからすぐであった。

(八神達、いや八神のお陰で侑斗は明るくなった)

デネブは侑斗が以前より前向きになって生きている事が嬉しかった。

その変化の原因は八神はやての存在が大きいと思っている。

「辞めにする?」

「いや、もう少し続ける」

侑斗は淹れてくれたお茶を一気に飲んでから、釣りを続行する。

「八神達。元気にしてるかな?」

デネブは今日のメインディッシュは期待できないと判断したのか、軽い夜食を作り始める。

「……………」

「侑斗?」

即答しない事を訝しんだのか、デネブは侑斗を呼ぶ。

「大丈夫だろ。九歳で大人でも背負わないものを背負う覚悟をしたんだ。ヴォルケンリッターや高町やテストアロッサ、スクライア達がいるんだし何とかなるだろ」

侑斗は黙考した後、答えを口にした。

そのように口に出した侑斗だが、懸念している事もあった。

それは、はやての性格だ。

責任感の強い彼女は他者を重んじるあまりに、自身を軽視する時がある。

自身の軽視。それは人生だったり、命だったり色々だ。

(あいつは自分から貧乏くじを引くタイプだからな…………)

垂れていた釣り糸をリールを巻いて戻しながら侑斗は思った。

ナギナタに設置された壁電話が鳴り出す。

「デネブ」

侑斗は電話を取るように促す。

「もしもし。ゼロライナーです。はい…………はい…………。少々お待ちください」

デネブは受話器の通話口を手で押さええてから、侑斗を見る。

「どうやら趣味に耽れるのは今日で終わりみたいだ」

侑斗はデネブから受話器を受け取る。

「もしもし……」

*

翌日、『時の空間』では二種類の時の列車が並列して停車していた。

一台は一両から四両までが戦闘車両で五両からは非武装車輛となっているデンライナー。

もう一台は二輛編成で黒と緑が目立つゼロライナーだ。

現在、デンライナーの食堂室は賑わっていた。

といっても人数が多いだけでパーティーのような楽しい雰囲気ではない。

そこにいる誰もが真剣な表情をしていた。

食堂室に設置されたテレビには横書きで記されていた。

『サイキョウニシテサイアクナルモノ』

「何だコレ？」

モモタロスは腕を組んで首を傾げて感想を述べた。

「確かに何だコレ？だよね……」

ウラタロスもお決まりのポーズを取って、考えながらも首を傾げていた。

「ナゾナゾか何かか？ヒントないんかい？」

キンタロスもモモタロス同様、腕を組んで首を傾げながら誰と指定することなくヒントを求めた。

「何コレ〜？わかんないよ〜」

リユウタロスも両人差し指をこめかみ辺りに当てながら、思案するが表情は曇っていた。

「カタカナ表示ってのが不気味さを増してるわよね」

「ハッターだと思いたいよね……」

「無理だろうな……」

コハナ、良太郎、侑斗も感想を述べながらも、この文面が誰かのハッターであってほしいと願っていたがそれは無理な願いだとも直感し

ていた。

デネブはナオミの代わりに、全員分のコーヒーを淹れていた。

「オーナー。この文章は一体誰から？」

良太郎が送り主を訊ねる。

『関所』にいる駅長、プレシアさん、アリシアさんからです」

オーナーが告げた名前に侑斗、デネブを除く全員が目を大きくして
しまう。

「野上、誰なんだ？」

侑斗が訊ねるが、良太郎は答えようとはしない。

あの二人の事を思い出しているのだろう。

「フェイトの母ちゃんと姉ちゃんみてーなヤツだよ」

モモタロスが代返した。

その表情は良太郎同様、どこか陰があった。

「モモタロス？」

デネブも普段見せない表情をするモモタロスを見て首を傾げた。

どうやら良太郎とモモタロスにとつて、その二人は特別な何かがあると察すると侑斗はそれ以上は聞かなかつた。

『関所』つてなに？聞き覚えないんだけど」

ウラタロスがオーナーに質問する。

その質問にはキンタロス、リウウタロスも首を縦に振っていた。

『関所』というのは、良太郎君が以前虚数空間に落ちた際に拾つてくれた紫色のキングライナーであるデッドライナーの別の名前ですよ」

オーナーが簡潔に説明してくれた。

「文章が作成された時間を映像で見えますと……」

オーナーの言葉に従うようにして、ナオミがテレビのリモコンを操作して別の映像を映し出した。

『時間』の破壊とは違い、砂漠にはなっていないかつた。

破壊されて傾いたビル。

ひび割れた道路。

線路から脱線して地面に激突した電車。

電柱の落下でひしゃげている自動車。

地面に倒れている人々。

天災が襲い掛かってきたかのような光景だった。

「別世界がこのような状態になると予測されるのは新暦〇〇七五年九月となっっています」

「オッサン。シンレキつてなんだよ？平成の次の年号かよ？」

オーナーが判明した事を話すが、モモタロスが話の腰を折る。

「ああ、すみません。別世界の暦を言ってしまったねえ。わかりやすく言えば今年の九月にこの出来事が起こるといふ事です」

九月!?

全員が大声を出すのは無理もない。

現在は八月上旬、この出来事が九月上旬ならば猶予は一ヶ月を切っており下旬でも一ヶ月ちよつとしかない。

ヒントにならないヒントで目標を搜索するには時間がなさすぎる。

「オーナー。聞いていいですか？」

「何でしょうか？良太郎君」

「時空管理局はどうなってるんですか？こんな状態なるまで何もしなかったわけじゃありませんよね？」

良太郎は尤もな事を問う。

その質問にイマジン五体は便乗する。

「時空管理局は……同時期に壊滅しました」

オーナーがその時期に起きた事実を静かに述べた。

その一言が引き金となり、食堂室内の雰囲気は先程よりも深刻なものになっていった。

「あんな大組織が……」

「壊滅って……」

侑斗とコハナでさえもオーナーの台詞を受け入れるには時間がなかった。

「今回は過去の二度とはスケールが違うものになると思っただけでしょう。タイムリミットである九月を過ぎて、この出来事を無事に避けることが出来たとしてもそれで終わりというわけにはいきませんからねえ」

「何でや？」

キンタロスがテーブルに腰掛ける。

「我々が今回、別世界に行く目的は『サイキョウニシテサイアクナルモノ』を倒すだけではありません。それだけは肝に銘じておいてください」

オーナーは指定席から立ち上がって、ステッキを突きながら中央まで歩く。

他にも何か思惑があるのだろうと誰もが思うが、それを口に出して訊ねようとはしなかった。

きつとはぐらかすとわかっているからだ。

「良太郎君。出発は明日になります。長期になりますのでご家族に挨拶をしておく事をお薦めしますよ」

「はい」

オーナーの気遣いを良太郎は有難く受けた。

*

『時の空間』から『ミルクデイツパー』に戻った良太郎は姉である野上愛理に明日からの事を告げた。

愛理は夕飯を支度していた手を止めて、包丁をまな板の上に置いてカウンター席に座る。

良太郎も隣に座る。

「今回は長くなりそうなのね？」

愛理は弟が『時の運行』絡みで自分に言う事は滅多にないので、わざわざ言うという事は相当深刻な事が長期に亘る事なのだと思ふに想像できた。

「うん」

「そう……」

良太郎はあつさり認め、愛理は席から離れてカウンターの厨房に戻って夕食の支度に取り掛かった。

本日の夕飯はご飯に豆腐とわかめの味噌汁に出汁巻き卵、そしてマグロの刺身という和食だった。

シンプルだが良太郎は好きだった。

刺身を除くどの料理も、出来上がったばかりなので湯気がたつていた。

「良ちゃ……良太郎」

愛理が自分を『良ちゃん』ではなく、本名で呼ぶ事はほとんどない。それは真面目にならなければならないという表れでもある。

「行つてらっしゃい。貴方を必要としている人達の元へ」

「姉さん……」

良太郎が一ヶ月近く外出すると必ずといっていいほど、出かける前よりたくましく成長して帰ってくるころから彼を必要としている人間がそこにいるというは何となく察していた。

そのこと自体は悪い事ではないし、成長の糧になるのならばよいことだと考えている。

だが、たつた一人の肉親が命を落とすかもしれない旅に出る事に心配しないわけではない。

それでも弟を必要としている人達がいるのならばその人達のために送り出す事が姉である自分の務めでもあると思つている。

「はいー」

良太郎も決意の眼差しを愛理に向けて返事をした。

それから二人は姉弟水入らずの最後の夕食を取る事にした。

自室に戻つた良太郎はトロリーバッグの中に着替えを詰めていた。

それ以外のものは特に持つていこうとは思わない。

元々趣味らしい趣味を持たない良太郎は携帯ゲーム機も愛読書も持つていない。

せいぜい持つていくとしたら『運の悪い男でも出来る家事全般』という愛理が入院していた時に購入した本くらいだが、もう読まないでも家事は出来るので持つていく必要はないと感じる。

「荷物はこんなものかな」

良太郎は中身を一通り確認し終えると、バッグを閉じた。

ベッドに寝転がって、窓から見える夜空を見る。

「新暦〇〇七五年。僕達が行つた時から十年経つてる時代かあ……」

あの頃に出会つた人物はみな十年歳を取つているという事になる。

「てことはフェイトちゃん達も僕と同じ年になってるって事か」

十九歳のフェイト・T・ハラオウンがどんな姿なのかと想像しても
霧がかかって全く想像できない。

「会えばわかるか」

布団をかぶって眠りに就こうとする。

『良太郎。好きだよ。大好き！』

閉じていた両目を大きく開いてしまった。

「子供の頃の約束って忘れられて当たり前前って部分があるからね
……」

良太郎は十年前にフェイトに告白されている。

十年後のフェイトがそれを反故にしたからといって自分は責める
つもりはない。

「もし、憶えているままだったとしたら一つだけやらなきゃいけない
ことがある」

両手を後頭部で組んで天井を見上げながら、真剣な表情になってい
く。

フェイトにプレシアが存命している事を伝えなければならない。

これをやらなければ自分はフェイトの告白に真摯に向き合う事が
出来ないと考えている。

その結果、自分が軽蔑されたとしてもやらなければならないと思っ
ている。

いつ実行するかはわからないが、胸に秘めておく事で良太郎は思案
する事に区切りをつけて、今度こそ眠りに就いた。

翌日、チームデンライナー、ゼロライナーは別世界へと旅立った。

目的時間は新暦〇〇七五年四月。

第三話 「魔導師ランク試験」

〇〇七五年四月。

臨海第八空港近隣の廃棄都市街。

晴天であり、外で何かを行うには絶好の日和であり私有地であるかのように一機のヘリコプターが飛んでいた。

その場で瞑想していた濃い青色髪をショートヘアにしている少女——スバル・ナカジマは右手で拳を作り、左掌にパシッと打ちつける。

中腰になって構えてから右、左と正拳を繰り出す。

次に右フック、また右正拳、左正拳と繰り出してから右下段回し蹴りを放つ。

拳にしる蹴りにしろ、素早くキレがある。

その場で跳躍する事でカチャンカチャンと音が鳴る。

コンクリートの床とローラーの車輪がぶつかり合う音だ。

カチャリカチャリとスバルが鳴らしている音とは違う別の音が鳴る。

「スバル。あんまり暴れてると試験中に、そのオンボロローラー逝っ
てしまうわよ」

オレンジ髪にツインテールの少女——ティアナ・ランスターが自作のアンカーガンを手際よく弄りながら、相棒に忠告する。

「ええ〜。ティア〜。やなこと言わないで。ちゃんと油も差してきた
！」

スバルは大丈夫という意味合いがこもった台詞を言いながら、浅い
伸脚運動をしている。

ティアナもアンカーガンを弄り終えたのか、下げていたバレルに
カートリッジを詰め込んでからガシヤリと正位置に戻す。

右手を腕時計を見るように構えると半透明で時刻が表示される。
指定した時間になると、ピーツとアラームが鳴る。

二人の前にモニターが出現する。

そこに映っていたのは、陸士隊制服を着用した銀色の長髪の少女――

——リインフォースⅡ《ツヴァイ》（以後：リイン）だった。

『おはようございます！さて魔導師試験の受験者さん二名。揃ってますかあ？』

「はい！」

リインの確認に、スバルとティアナは横一列に並んで返答する。

『時空管理局陸士三八六部隊所属。スバル・ナカジマ二等陸士』

「はい！」

『同じくティアナ・ランスター二等陸士』

「はい！」

スバルとティアナは返事をする。

『所有している魔導師ランクは陸戦Cランク。本日受験するのは陸戦魔導師Bランクで間違いありませんね？』

リインは手元の書類を読み上げていく。

「はい！」

「間違いありません」

受験者二人はそれぞれ即答する。

『はい。本日の試験官を務めますのは、わたくしリインフォースⅡ空曹長です。よろしくですよお』

リインは自己紹介を終えると、敬礼する。

「よろしくお願いします！」

受験者二人もすぐに敬礼で返した。

ババババとプロペラの音を鳴らしながら、ヘリコプターがその場に留まっていた。

ドアが開き、陸士隊制服でショートボブの女性と少女の中間にあたる八神《やがみ》はやてがヘリコプターのドアを開いて、見下ろしていた。

「お、早速始まつてるなあ。リインもちゃんと試験官してる♪」
満足げな笑みを浮かべる。

現在の彼女の階級は二等陸佐である。

「はやて、ドア全開だと危ないよ。モニターでも見られるんだから」
隣に座っている金髪で長髪、黒をメインとした制服を着たはやて同

様に少女と女性の中間にあたるフェイト・T・ハラオウンが強くはないが、注意した。

風がふぶいているため、金色の髪がなびくため右手で抑えている。「はい」

はやてはフェイトの言葉に従い、ドアを閉じるため側にあるボタンを押した。

ヘリコプターのドアが閉まり、はやてはフェイトの隣の席に座る。背景が淡い赤色のモニターが出現し、スバルとティアナも映し出されていった。

「この二人がはやてが見つけた子達だね？」

モニターを弄りながら訊ねる。

フェイトは、この画面で見るのが初めてとなる。

「うん。二人とも、中々の伸び代《しろ》がありそうなええ素材や」「今日の試験の様子を見ていけそうなら正式に引き抜き？」

はやての『人を見る眼』を信じているフェイトには、はやてのおおよその行動が理解できる。

「直接の判断は、なのはちゃんにお任せしてるけどな。部隊に入ったら、なのはちゃんの直接の部下で教え子になるわけやからな」「そっか」

はやては試験後の予定を話し、フェイトは納得した。

別の場所では一人の栗色の髪をサイドポニーにした、はやてやフェイトとは違う白色がメインとなっている教導隊服を着た高町たかまちなのはが宙に出現している背景が薄い青色のモニターを弄っていた。

スバルとティアナの主なデータが映し出されており、何かを仕掛けるようにモニターを触る。

建造物などの映像に切り替わる。

『範囲内に生命反応、危険物の反応はありません。コースチェック終了です』

「うん。ありがとう。レイジングハート」

なのははスタンバイモードのレイジングハート・エクセリオンに礼を述べる。

「観察用のサーチャーと障害用のオートスファイアも設置完了。私達は全体を見ていようか」

『はい。マイマスター』

レイジングハート・エクセリオンは自身を輝かせて、答えた。

『二人はここからスタートして、各所に設置されたポイントターゲットを破壊。ああ、もちろん破壊したらダメのダミーターゲットもありますからね』

ラインがスバルとティアナに試験概要を説明していた。

モニターの画面が切り替わって、ダミーターゲットが表示される。

『妨害攻撃に気をつけて、全てのターゲットを破壊。制限時間内にゴールを目指してくださいです。なにか質問は？』

この魔導師試験、ちよつとしたアクションゲームじみているといつてもいい。

制限時間内に与えられたミッションをこなせるか否かというのが大まかな流れだろう。

ただし、その中でも細かい部分には減点基準が設けられていると考えた方がいいだろう。

単純に制限時間内にターゲットを破壊するだけなら、ちよつとした力自慢（この場合は魔力）なら誰でも突破できるという事になるからだ。

「ええと……」

「ありません」

「ありません！」

スバルは何かあるかなあと頭を働かせると同時に、ティアナを見るが彼女が毅然とした態度で即答したので自分も下手に考える事はやめた。

『ではスタートまであと少し。ゴール地点で会いましょう、ですよ』
ラインがウインクをして告げてからモニターが閉じられた。

*

荒野を思わせる『時の空間』を一台の連結車輛が走っていた。
デンライナーとゼロライナーだ。

元々行動が同じなので併走する必要はなく、ゼロライナーはデンライナーの後部に連結していた。

線路を敷設・撤去しながら四ヶ月前の時間まで走っていた。

まずは自分達の世界の『時の空間』で四ヶ月前まで遡って、別世界の『時の空間』へと架かっている『橋』を経由して向かうという方法だ。

デンライナーもゼロライナーもタイムマシンではないため、別の世界へ直接行くことは出来ない。

だが、どの世界にも『時間』という概念が存在している限り『時の空間』も存在しているという事は前回、前々回で立証済みだ。

桜井侑斗、デネブはゼロライナーで恒例の二人ババ抜きをしており、デンライナー食堂車にいる野上良太郎を始めとする者達はというと……。

食堂車の中央に巨大な円卓があり、その真ん中には巨大チャーハンがあった。

所謂、オーナーの趣味ともいえる『チャーハン対決』だ。

今回は全員が参加していた。

そもそもこの競技、最終的に旗を落とした者が負けなので大人数で行う方が責任のなすりあいが可能なので有利、不利がコロコロと変わる。

トップバッターはオーナー。

二番手は良太郎。

三番手はコハナ。

四番手はモモタロス。

五番手はウラタロス。

六番手はキンタロス。

ラストはリユウタロスとなっている。

スプーンでチャーハンを突き刺す↓搦う↓スプーンで搦ったチャーハンを食べる↓手元にあるベルを鳴らして次の相手に回す。という工程を繰り返していた。

優勢、劣勢はチャーハンの量が多いうちは誰に傾くというような事

は明確にはならないが、少なくなれば一喜一憂となっていく。

七人の共通点としては自分の番で旗を落とすような状態にならないければいいという事だけだ。

「みなさあん。まもなく別世界の四ヶ月前に到着しまーす」

一人観客を決め込んでいたナオミが、車内アナウンスをした。

チャーハン対決は決着はつかないままだった。

*

青い空には宙に出現するモニターと同じ原理で、モータースポーツ御用達のシグナルが表示されていた。

スバルとティアナの表情が険しくなる。

ビツ。

シグナル三つのうち、一つが消える。

ビツ。

シグナル残り二つのうち、一つが消える。

「レディー……」

ティアナが構えて自身に暗示をかけるようにして眩き、スバルも構える。

ビーツ。

最後の一つが消えて『START』と同時に、ティアナが「ゴー！」と張り上げて二人が駆け出した。

試験をヘリコプター内部という特等席で観覧しているフェイトとはやてはというと。

「お、始まった始まった」

「お手並み拝見っ」と

身乗り出して、受験者二人がどのような行動を取って結果をもたらすのか楽しみにしていた。

駆け出したスバルとティアナは一旦停止していた。

ティアナがアンカーガンのダイヤルを弄ってから、廃ビルの天井付近に狙いをつけてから引き金を絞る。

バシユツとアンカーが射出されて、先端が食い込んだ場所にオレンジ色の魔法陣が展開される。

「スバル」

「うん！」

ティアナが何をするのか理解しているスバルはティアナにしがみつく。

二人同時に駆けてから、引き寄せられるようにして廃ビルへと近寄っていく。

「中のターゲットは私が片付けてくる！」

「手早くね」

「オウケエエエエエイ！」

スバルはティアナから離れると、衝撃に備えて両腕で防御体勢を取りながら廃ビルへと突入した。

窓ガラスが割れて、破片が飛び散っているがスバルは気にせず前へと進む。

今のスバルに映っているのは、障害物となっているオートスファイアだけだ。

ローラーの車輪を回転させて迎撃態勢をとっているオートスファイアに向かっていく。

オートスファイアが放つ光線をローラーを駆使して、巧みに避けていく。

射程範囲に近づくと、跳躍して右手でオートスファイアを殴り飛ばして破壊してから、勢いを殺さずに右側にいるオートスファイアに右踵落としを食らわせて破壊する。

爆煙が晴れる前にスバルは突き抜けていく。

横に滑りながら、オートスファイアは狙いをつけて光線を放つ。

右、左、とローラーを滑らせながら避けていきながらもスバルはオートスファイアを睨む。

「ロードカートリッジ!!」

右拳を振りかぶる。

右腕に装着されているリボルバーナックルの手首付近のスライドカバーが開く。

リボルバーのシリンダーが回転しながら蒸気が噴出される。

スライドカバーが閉じられる。

「リボルバアアアアア!!」

掌を拳に切り替えて、手首付近の二重の歯車——スピナーが回転を始める。

スピナーを基点に蒸気が噴き出る。

「シユウウウウトオオオオオ!!」

左足を前に踏みかえると同時に、右拳を真つ直ぐに突き出す。

ドゥンという音を響かせながら、拳の先から青い魔力弾を放つ。

魔力弾を放った拳は反動で跳ね上がるようにして、持ち上がったいた。

魔力弾は直線上にあるオートスフィアに向かっていく。

スピナーから生じた渦が放った魔力弾を覆うようになっていく。

オートスフィアは『貫かれる』というより『ひしゃげる』というような表現で跡形もなく砕け散っていた。

完全に消滅した事を目視すると、スバルは踵を返してローラーを滑らせた。

アンカーガンで天井まで上ったティアナは自分より斜め下の位置にあるフロアで屯しているターゲット達に狙いをつけていた。

(落ち着いて。冷静に……)

自身に言い聞かせながら、アンカーガンで狙いをつける。

足元にオレンジ色の魔法陣が展開される。

狙いをつけて引き金を絞る。

バアンバアンバアンとオレンジ色の魔力弾がターゲットを破壊していく。

「あっ……」

ターゲットと思いきや、視界に入ったのはダメージターゲットであるため、照準を外してその背後に現れた二体のターゲットに狙いをつけて引き金を絞って破壊した。

全てを破壊し終えると、ティアナは屋上から飛び降りて目標物を見つけるとアンカーガンを構えて、アンカーを発射させる。

アンカーの先端は壁に刺さり、オレンジ色の魔法陣が展開される。

ティアナはそのままロープの動きを読んで、巧みに操って無事に地面に着地を成功させる。

壁から離れたアンカーは鞭のようにしなりながら、シユルルルとアンカーガンのバレルの中へと納まっていった。

フロアの中から出て来たスバルと走りながら、合流した。

「いいタイムだね！」

「当然！」

スバルは『好調で幸先がいい』と言い、ティアナは『自分達ならできて当たり前』という意味がこもっている台詞で返した。

バババババとヘリコプターはプロペラを回転させながら、その場で停滞させていた。

ヘリコプター内でモニターで観覧しているフェイトとはやてはというと。

「うん。いいコンビだね」

「そやけど、難関はまだまだ続くよ」

フェイトは二人の動きや役割分担の的確さを褒め、はやては厄介な障害があるような口振りをしていた。

モニターをはやては触れる。

アップに映し出されたのは今までのオートスフィアの数倍の大きさのものだった。

「特にコレが出てくると、受験者の半分以上は脱落する事になる最終関門。大型オートスフィア」

「今の二人のスキルだと普通なら防御も回避も難しい中距離自動攻撃型の狙撃スフィア……」

「どうやって切り抜けるか知恵と勇気のみせどころや」

二人は受験者がどのような対応をするのかが見物だった。

*

大型オートスフィアは相手が来るまでじっとその場で佇んでいた。

感情があるのならば『デンと構えている』という表現が似合うのかもしれない。

この試験においての『ラスボス』的存在でもある。

そんな大型オートスファイアに小さくピシリと亀裂が走り始めた。

*

スバルとティアナは次のエリアへと走っていた。

「いづくぞおおおお!!」

「スバル。うるさい!」

ノリに乗っているスバルとは対照的にティアナは冷静さを保ち、相棒を注意した。

二人の行く先であるハイウェイ跡地にはオートスファイアがわんさかとなり、迎撃態勢をとっていた。

オートスファイアは二人を視認すると容赦ない攻撃を繰り出していた。

ティアナはアンカーガンのバレル先端にオレンジ色の魔力弾を停滞させたままだった。

オートスファイアの攻撃を防ぐ為に壁に隠れて攻撃の出方を伺っているのだ。

時間無制限ならばひたすら『待ち』という方法を用いる事は出来るが、時間制限があるこの試験では『待ち』という方法は時間の浪費にしかない。

攻撃が止まったと判断したティアナは狙いを定めてアンカーガンの引き金を絞る。

オートスファイアが立て続けに破壊されていく。

攻撃が仕掛けてこないうちに、壁に隠れてアンカーガンのバレルを下ろして装填されている二発のカートリッジを排莖してから、新たなカートリッジを二発バレルのに装填して下ろしたバレルを勢いよく上げて戻した。

すぐさま、引き金を振り絞った。

スバルはローラーの機動力を活かして前面に立っていた。

移動しながらもハイウェイ跡地で利用できそうな地形を判別していく。

(よし!)

使える場所を選ぶと、ローラーの回転を速めて速度を上げる。

「うおおおおおおお!!」

速度が上がり、カタパルトのようになっていた瓦礫の上に乗っかって、眼前のオートスフィアを粉碎する為に右手を振りかぶる。

カートリッジロードをしており、リボルバーナックルのスピナーが回転していた。

距離が限りなくゼロになったところで、オートスフィアの光線を殴って弾き飛ばしてから柱を踏み台にして両脚を踏ん張ってから跳ね上がって、右足を振りかぶって跳び回し蹴りを放ってオートスフィアを地面に叩きつけて破壊した。

すぐさまティアナの背を守るようにしてローラーを滑らせた。

「よし。全部クリア」

ティアナは周辺を確認してから言う。

「この先は？」

スバルはリボルバーナックルのスライドカバーを開いて、装填されているカートリッジをシリンダーごと取り替えていた。

役目の終えたカートリッジ搭載のシリンダーは射出する事で排莖した。

再装填すると、スライドカバーは閉じられた。

「このまま上。上がったら最初に集中砲火が来るわ。オプティックハイドを使ってクロスシフトでスフィアを瞬殺。やるわよ?」

ティアナはバレルを下ろして、カートリッジを詰め替えながらスバルに今後の趣旨を説明した。

「了解!」

スバルは右手でサムズアップして応じた。

*

大型オートスフィアに小さくだがまたピシリと亀裂が走った。

少しずつ動き、ある物へと狙いを定めていた。

*

オートスフィアは迎撃態勢を取っていた。

後は昇ってくる標的を打ち落とせばいいだけだ。

アンカーが天井に突き刺さり、オレンジ色の魔法陣が展開される。

オートスファイアは一斉に下から昇ってくるモノに狙いをつけて光線を発射させる。

カキンバキンカキンという金属が当たる様な音が響く。

道路を何かガーツという音を鳴らしながら、煙と火花を立てていた。

「五！」

ティアナの声がするが、姿はない。

「四！」

何かが、オートスファイアを破壊していった。

その動きはまるで鱈ヒレのみを海上に出している鮫のようにも思えた。

「三！」

何かの正体が次第に明らかになっていく。

何か——スバルは一直線に進んでいく。

透明状態になっていたのはティアナが用いた幻術魔法・オプティックハイドによるものだ。

「二！」

ティアナの合図でスバルは右腕を振りかぶる。

リボルバーナックルのスライドカバーが開いてカートリッジロードされる。

オートスファイアが一斉にスバルに向かって攻撃を仕掛ける。

リボルバーナックルのスピアーが渦を描いている。

スバルは攻撃を避けていく。

「一！」

ティアナのカウントと同時にスバルは跳躍する。

「ゼロ！」

その直後に後方ではティアナの姿が浮かび上がり、彼女の左右と頭上にはオレンジ色の魔力球が浮かび上がっていた。

「クロスファイアアアアア!!」

構えている右手が引き金の役割になっている。

「リボルバアアアアアアア!!」

スバルも右腕を振りかぶって前にかざす。

シユウウトオオオオオオオ!!

青色の魔力弾と衝撃波が飛び、その直後に三個のオレンジ色の魔力球が発射された。

オートスファイアは全て粉碎されていった。

残っているのは攻撃能力のないターゲットのみだ。

ヘリコプターでこの状況をモニターで見っていたフェイトとはやてはというと。

「なるほど。これは確かに伸び代がありそうだね」

「あはは。そやろ」

「残るは最終関門」

はやては自分の見立てが間違っていない事に満足し、フェイトは挑戦的な笑みを浮かべていた。

*

大型オートスファイアのボディに更にピシリと亀裂が走っていた。

そして、先程よりも動いていた。

狙いはまだわからない。

*

「イエーイ、ナイスだよティアー!一発で決まったね♪」

スバルは相棒の立てたプランを褒めながらも、側にあるターゲットを左拳で殴って破壊した。

「ま、あんだだけ時間があればね」

ティアナはアンカーガンを拾いながら、短く答える。

「普段はマルチシヨットの命中率あんまり高くないのに、ティアはやっぱり本番に強いなあ♪」

「うっさいわよーさっさと片付けて次に……!!」

ティアナのいた位置だからこそ、それに気づく事が出来たのかもしれない。

「ん?」

スバルはまだ気付いていなかった。

後ろにオートスファイアがある事を。

光線の発射準備をしていた。

「スバル防御！」

ティアナは告げると同時に、スバルとの距離を詰めてオートスフィアからの攻撃を避けた。

「わっ！」

スバルも状況を理解して、攻撃を避けていく。

ティアナはアンカーガンを構えて、オートスフィアを睥む。

構えて狙いをつけて引き金を絞って放つ。

だが、道路の窪んだ場所に足を突っ込んでしまい、グキツと音が鳴った。

「あぐっ！」

ただ単に転んだわけではないという事を、本人が一番わかっていた。

「ティアア！」

壁に隠れていたスバルが声をかけるが、それより早くオートスフィアがティアナに攻撃を仕掛ける。

ティアナは転がりながら移動して起き上がり、引き金を絞る。

一発目は流れ弾でサーチスフィアに、二発目はオートスフィアに直撃した。

(流れ弾だけど……当たった感覚がない……)

『銃』を主として戦う者には『剣』や『拳』を扱うもの同様に独自の感覚がある。

自分が放った弾丸が、的に当たったか否かというものはわかるのだ。

ティアナには一発目が流れ弾とはいえ、サーチスフィアに直撃した感覚がなかった。

自分の魔力弾が当たったように見えたと思っている。

「ティアア！」

スバルが駆け寄ってくる。

「騒がないで。何でもないから」

ティアナは苦痛の表情を浮かべることなく、スバルに告げる。

「嘘だ！グキツっていったよ！捻挫したでしょ!？」

コンビを組んでいるだけあって、スバルには嘘だとすぐに見抜くことができた。

「だから何でもないって！……痛《つう》!!」

ティアナは立ち上がろうとするが、痛みには耐えられずその場でしゃがんでしまい全身が震えていた。

「ティアごめん……。油断してた……」

スバルは自身の責任と感じて、謝罪する。

「私の不注意よ。アンタに謝られると却ってムカつくわ……。走るのは無理そうね。最終関門は抜けれない」

「ティア……」

ティアナが今自身が必死に自分ができる事で今後のプランを立てていた。

「私が離れた位置からサポートするわ。アンタ一人ならゴールできる」

負傷者を抱えて時間切れ《タイムオーバー》になって、二人とも不合格になるよりは一人でも合格者を出した方がいい。

それに、自身が足手まといになることが何より許せないというのが本音だ。

「ティア！」

スバルが必死な形相でティアナに詰め寄る。

「うっさい！ 次の受験の時は私一人で受けるって言ってるのよ！」

「次って……。半年後だよ!？」

「迷惑な足手まといがいなくなれば、私はその方が気楽なのよ！」

ティアナが憎まれ口を叩いている事はスバルにはすぐに理解できた。

「わかったらさっさと……」

ティアナがふらつきながらも立ち上がる。

「ほら！ 早く！」

それでもスバルは行こうとはしなかった。

時間が刻一刻と迫っているというのにだ。

「ティア。私、前に言ったよね？ 弱くて情けなくて誰かに助けてもら

いっぱなしの自分が嫌だったから管理局の陸士部隊に入った。魔導師を目指して魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事に就いた……」

「知ってるわよ。聞きたくもないのに何度も聞かされたんだから」
そう言いながらも、ティアナはスバルの想いを真摯に受け止めている。

「ティアとはずっとコンビだった……。ティアがどんな想いで魔導師ランクの昇進にどれくらい一生懸命だったのかもよく知ってる……」

スバルは顔を伏せがちだが、告げたい事を告げている。

ティアナはスバルに向けて背を向けている。

「だからこんな所で、私の目の前でティアの夢をちよつとでもかせるなんて嫌だ！一人で行くのなんて絶対に嫌だ！」

スバルは涙目になって、ティアナのプランを拒否する。

「一人で行くのなんて絶対に嫌だ！」

首を横に振る。

「じゃあ、どうすんのよ?!走れないボックスを抱えて残りちよつとの時間でどうやってゴールすんのよ?!」

背を向けていたティアナがスバルへと向き直る。

「裏技!」

スバルの一言にティアナは思わず目を丸くした。

試験で用いられる裏技って殆どが不正行為よね、とティアナは瞬時に考えたりしていた。

「反則取られちゃうかもしれないし、ちゃんとできるかどうかもわからないけど上手くいけば二人でゴールできる!」

スバルが自信に満ちた表情で告げる。

「本当?」

ティアナとて簡単に諦めるほど潔い性格はしていない。

ほんの一部の可能性があるのなら、それに乗ってみたいくらいだ。

「あ、えと……ちよつと難しいかもんだけど……ティアにもちよつと無理してもらうかもだし……」

スバルの自信に満ちた態度がどんどん変わっていく。

手をもじもじさせたり、胸元で両手を合わせたりしていった。

「よく考えると、やっぱり無茶っぽくあるし……その何ていうかその……」

ティアナの中では時間が経つに連れて、可能性がどんどん崩れていくような感じがした。

次第にスバルの仕種に苛立ちまで感じる始末だ。

「ああああああ!!イライラする!!」

堪忍袋の緒が切れたティアナはどうとう叫んでしまった。

素早くスバルに詰め寄って、バリアジャケットの襟を掴む。

「ウジウジ言っても、どうせアンタは自分のワガママを通すんでしょ!? どうせ私はアンタのワガママに付き合わされるんでしょ!? だったらハッキリ言いなさいよ」

ティアナはこれまでもそしてこれからも、スバルとコンビを組む以上はこういうやり取りをするのだろうと確信していた。

「二人でやればきつとできる。信じてティア」

スバルの表情は自信を取り戻していった。

ティアナは襟首を掴んでいた手を離し、右手で時刻を表示させる。

「残り時間三分四十秒。プランは?」

「うん!」

ティアナが自分のプランに乗ってくれる事はスバルにとっては何度経験しても純粋に嬉しかった。

リインとは違う場所で試験監督をしていたのは、眼前のモニターを何度もインターホンを押すようにしているがモニターからは試験の映像が映し出される事はなかった。

「トラブルかなあ? リイン、一応様子を見にいくな」

『はいです。よろしくお願いします』

ゴール地点で待機しているリインに一言告げた。

『私もセットアップしますか?』

レイジングハート・エクセリオンが本格的に活動する事を主に打診する。

「そうだね。念のためお願い」

なのはの周囲に展開されているモニターが全て消えた。
その直後に、なのはの全身が桜色に輝いた。

ハイウェイ跡地をティアナが一人走っている姿をヘリコプター内のフェイトとはやてはモニターで見ることが出来た。

「お、出て来た」

「あれ？だけど……」

モニターにはスバルの姿が映し出されてはいなかった。

光線が窓ガラスを破って、ティアナに向かっていく。

そして、爆発した。

「直撃!？」

「いや、違う」

目の前の出来事に驚いているはやてとは対照的に、フェイトは冷静だった。

更にもういっぱつ光線がティアナに向かっていった。

ティアナはその光線を巧みに避けながら走っている。

「高速回避？違やうな……」

「あの子、ティアナはおとり……」

「ということとは……」

フェイトとはやての脳裏にこの二人の目的が凡そに見当がつき始めていた。

ここにはいないもう一人が『本命』であり、大型オートスフィアの破壊役ということだ。

モニターに映るティアナは光線に直撃したが、更に二人出現してひたすら一直線に走っていた。

瓦礫を壁にしてティアナはしゃがんでオレンジ色の魔法陣を展開させていた。

右手はオレンジ色の魔力光で覆われていた。

両目を閉じて、精神を集中させていた。

「フェイクシルエツト。これメチャクチャ魔力食うのよ。あんまり長くは持たないわよ」

発動させながら、ティアナは呟く。

(一撃で決めなさいよ！でない！と二人で落第なんだから!!)

別の地点に移動を終えているスバルに念話を飛ばした。

「うんー！」

別の地点で下を見下ろすようにしてスバルは立っていた。

足元には水色の三角形の魔法陣が展開されていた。

「私は空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない。遠くまで届く攻撃もない。出来るのは全力で走る事とクロスレンジでの一発だけ！」

左手で拳を作って覚悟を決める。

右手のリボルバーナックルのスピナーが回転していた。

「だけど決めたんだ……」

スバルの脳裏にまるで昨日の出来事のようにして、なのはに助けってもらった事が甦る。

励まされた事。

天井をダイバインバスターでぶち抜いた事。

抱きしめられながら、笑顔を向けてくれた事。

「あの人みたいに強くなるって！涙を流す人を守る自分になるって!!ウイングロードオオオ!!」

右拳を振り上げて、スバルは魔法陣が展開している地面に叩きつける。

水色の魔力で構築された道が一直線に廃ビルの一つへと向かっていく。

幻のティアナを攻撃した光線が飛んだのは、あの廃ビルからだという事は知っているので狂いはない。

スバルは短距離走のクラウチングスタートの体勢をとってから、目標のビルを睨む。

「行ってー！」とティアナが言った様な気がした。

「行つくぞおおおお!!」

右手を振りかぶって、カートリッジロードを終えるとスバルは自身が構築した水色の魔力道をローラーの機動性を活かして、一直線に走り出した。

右拳を振りかぶって、真っ直ぐに放つ。

廃ビルの壁を粉碎して、コンクリートなどの埃が舞うが、お構いなしにそのフロアにいる大型オートスフィアを狙う。

「やああああああああ!!」

勢いを殺さずに、更に右拳を大型オートスフィアの障壁めがけて放つ。

この障壁は固く、割れる兆しは一向にない。

一旦離して連打して殴るより、濃度のある一発の方が早く破壊できるとスバルは考えている。

リボルバーナックルのスライドカバーが何度も開閉してシリンドアが回転し、何度もカートリッジロードをする。

障壁の中に指が入り込んだ。

『壁』から『膜』に変わったようにも思えた。

障壁に亀裂が生じ始め、ガラス破片のように砕け散った。

大型オートスフィアのボディに更に亀裂が走り始める。

スバルにはそれが自身が与えたダメージか最初からそのようなものがあつたのかという事を考えている余裕はなかった。

大型オートスフィアが間髪いれずに、光線を発射する。

スバルは両腕をクロスして防御するが、完全に勢いを殺しきれなかったために後方へと仰け反るが、バック転で上手く切り抜ける事が出来た。

爆煙が晴れると同時に、スバルは構えて足元に魔法陣を展開させる。

リボルバーナックルがカートリッジロードする。

スピナーから蒸気が噴き出る。

「一撃必殺!!」

両腕を大仰に上下に構えて円を描くようにする。

水色の環状魔法陣が宙に出現する。

リボルバーナックルにも水色の環状魔法陣が纏われている。

スピナーが回転を始めている。

「ディバイイイイイーン!!」

水色の魔力球が環状魔法陣中央に出現する。

「バスターアアアア!!」

右拳を放つと同時に、水色の魔力球は光線となって一直線に向かっていった。

大型オートスフィアに直撃し、ボディに更に亀裂が走り始める。

やがて耐え切れなくなり、オートスフィアが爆発を起こした。

ダイバインバスターの余波は大型オートスフィアの後方のガラスを数枚粉砕した。

爆煙がたち、スバルは「やった!」と思った。

後はティアナを負ぶってゴールまで全力疾走すれば終わりだと思っただ。

爆煙が晴れていくと、何も無いのが普通だ。

だが、そこには本来ならいるはずのない、正確にはいいはずのない存在がそこにはいた。

ガチヨウ型のイマジン——グースイマジンがいたのだから。

スバルは陸士訓練校で習った事を行うしかなかった。

『即撤退』を。

第四話 「電王、ミツドの大地に立つ」

スバル・ナカジマは現在全速力でローラーを回転させて、相棒のティアナ・ランスターが待機している場所へと向かっていた。

ビルからビルの屋上を越えていく。

跳んで着地するたびにギヤリギヤリギヤリと不穏な音が鳴り始めているが、気にはしていられない。

(何で!? あんなの試験の内容には聞いてないよ!? ティア! ティア!)

スバルは念話の回線を開いて、今自分が見た事を報告する事にした。

(なに? どうしたのよ? それよりもちゃんとスファイアは破壊したの?)

ティアナから念話が帰ってきた。

(スファイアはちゃんと破壊したけどそれどころじゃないよ! で、出たんだよ!)

スバルは伝えようとするのだが、精神的に余裕がないこともあつて上手く言葉を切り出す事が出来ない。

(出たって何よ? アンタ、お化けが出たとかいってこんな念話してるんだつたらぶっ飛ばすわよ!?)

脚を捻挫しているティアナはその場から動けない事と肝心な趣旨を切り出さないスバルの会話内容に苛立ちを感じているようだった。

(お化けだったらまだいいよ! イマジンが出たんだよ!!)

(え……)

ティアナの剣幕も一瞬で下がってしまった。

スバルは後ろを見る。

グースイマジンがこちらにゆっくりと向かってきている。

グースイマジンとの距離は離れているが、それで安心するつもりはティアナにはない。

(スバルがこの手の事で嘘を言うわけないし、試験にあらかじめイマジンを仕込んでいるなんてことできるわけないし……)

時空管理局の現在の力ではイマジンを『倒す』より難解な『捕獲』と

いうのは不可能だ。

となるとこの場に出現したイマジンは乱入したという事になる。

(でも、試験監督がこの事を見抜けないはずがないし……)

ティアナの中である出来事が甦った。

それは自身が足を挫く原因となった際のサーチスファイアへの直撃だった。

自分が発射した魔力弾は流れ弾で、当たったように見えていたが自身に当たった実感を得る事が出来なかった。

だがそこにイマジンが絡めば納得は出来る。

サーチスファイアを破壊したのは自分の流れ弾でなく、遠距離で狙撃したイマジンなのだ。

あの時、自分の流れ弾に合わせて撃つたのだ。

(それでも腑に落ちない部分もあるのよね……)

どうやって潜伏していたかということだ。

最初からこの試験会場に潜伏しているのならば、その時点で試験は中止になるはずだ。

生命反応のスキヤニングでひっかかるのだから。

引つかからないとなると、上手く誤魔化したという事になる。

だがティアナは訓練士学校時代でも、イマジンに関する事は最低限の事しか教わっていない。

イマジンと出くわしたら、迷わず撤退する事。

イマジンに『契約』を勧められたら、ひたすら無視を決め込む事。

というまるで民間人に対するお触書のような内容しか教わっていない。

『イマジンと戦う』という事さえ許されないのが現実だ。

「ティアー!!」

スバルが全力でこちらに向かってきた。

「イマジンは?」

「ゆっくりとだけど、こっちに来てるよ!」

ティアナはスバルが走ってきたルートを一瞥する。

イマジンの姿は見えない。

全力で走ってきたのだから、イマジンと距離が開いて当然と考えるがティアナはすぐさま切り替える。

「スバル。イマジンはどういう感じでアンタを追いかけてきたのよ？」

「えーつとね、歩いてる感じだった……」

ティアナの質問にスバルは人差し指を顎に当ててから、思い出しながら答えた。

「歩いてる？」

スバルの証言でティアナは安心どころから嫌な予感が増すだけだった。

「とにかく逃げるわよ。あと、絶対に陰に隠れたりしたらその時点で終わりだと思って」

「何で？」

スバルはティアナをおぶりながら訊ねる。

「アレよ。アレ」

空を指差す。

その先にはヘリコプターが一機飛んでいた。

「試験監督のヘリ？」

「多分、私達の試験を見に来てる第三者ってところかしら……」

「助けてもらおうよ！」

「駄目よ。ヘリからのモニターじゃイマジンの存在はまだ確認されていないはず。私達がヘリの視界範囲外になったらその時点でイマジンは私達を狩りに来るはずよ」

ティアナはイマジンが起こそうとする事を予測して、打ち明ける。

「じゃあヘリの視界にイマジンを入れさせることが出来れば……」

「何がしかの処置はしてくれると思うわよ」

自分達がイマジンを相手に生存するにはそれしかない。

ゴール地点で待機してるリインはというと、時刻を見て首を傾げていた。

そろそろゴールしてもいいのに向いて来る気配がないからだ。

「おかしいですう。何かあったんでしょうかあ」

リインは眼前にモニターを出現させて、人差し指で操作する。モニターで視認できる範囲で調べる。

「こ、これって……!? た、大変ですううう!!」

リインがモニターに映し出されたものを見て驚愕の表情と声を上げた。

(なのはさん!なのはさん!リインですう!聞こえますかあ!!)

リインは現地、つまりこちらに向かっている高町なのはに念話の回線を開く。

(聞こえてるよりイン。どうしたの?そんなに慌てて)

慌てているリインに対して、なのはの声は落ち着いていた。

(慌てるですよお!今この試験会場にイマジンがいるんですう!!)

(イマジン!?)

先ほどとは打って変わって、なのはが大声を上げた。

(何体いるかわかる?リイン)

(一体は確実にいると思われるですう。もしかしたら……)

(実体化していないイマジンがいる可能性もあるって事だね。リイン)

(はいです……)

状況を把握しようとするなのはの助けになるように、リインは現段階で得ている情報を全て呈示した。

白いバリアジャケットを纏って青空を駆けているのははリインが告げた内容で、焦りと苛立ちを感じていた。

『焦り』はイマジンの出現について。

『苛立ち』はイマジンと交戦できない事についてだ。

現在の時空管理局は高い魔導師ランク所持者(A-

マイナス

以上)にはイマジン出現の際しては戒厳令が敷かれている。理由としては『〇〇六九年の悪夢』を再現させないためだ。

武装局員五十名に対してイマジンは一体。

数で優勢だった管理局側だがイマジンの奇策によって覆された。

イマジンが武装局員の一人に『憑依』したのである。

このような状況に管理局は対策を練られてはいなかったため、結果は最悪なものとなった。

四十九名の殉職。

一名の自殺。

内容は憑依された武装局員が身内を皆殺しにし、生き残った武装局員はその事を知って自ら命を絶ったというものだ。

この一件が起きるまで、時空管理局全体はイマジンの事は仮面ライダー電王、ゼロノスのように『噂話』程度の認識しかなかった。

リミッター制御を設けられていても、なのはは戒厳令の対象になっているためイマジンと交戦する事ができない。

(悔しいよ……。こんな時に、こんな時にこそ……)
いてほしい者達がいる。

現場に向かう中、なのはの耳に懐かしくもあり最高に頼もしいミュージックフォーンが流れた。

(リイン。へりに乗ってるフェイトちゃん、はやてちゃんに伝えて。あの二人は助かるって！)

なのははリインに念話の回線を開き、返信した。
彼女の表情に『焦り』も『苛立ち』もなかった。

ミッドチルダの青空の一部が歪んで『時の空間』の入口が開いた。
空中に線路が敷設されていき、デンライナーとゼロライナーが連結を解除していた。

デンライナー食堂車のテレビにはゼロライナーに搭乗している桜井侑斗とデネブの姿が映っていた。

『それじゃイマジンのことは任せたぞ。野上』
『野上。頑張つて』

「うん、ありがとう。侑斗、デネブ」
ゼロライナー二名が告げると、テレビは切れた。

「俺達はこの見物と行くぜ。良太郎」
モモタロスの発言に、野上良太郎は目を丸くする。

「まあ僕達が出向けば楽勝だけど、良太郎一人でも十分でしょ」
ウラタロスも見物側に回るようだ。

「良太郎。きばっていきや」

キントロスに至っては食堂車中央にあるターンテーブルに腕を組んで座っている。

「良太郎！がんばれー!!」

キントロス同様にターンテーブルに座っていたリュウタロスはキントロスを押しのけるようにして出てくる。

「じゃあ、行ってきます」

良太郎はヘルメットを被ってから、食堂車内全員にサムズアップしてから一号車へと向かった。

食堂車内にいる全員は返すようにしてサムズアップをしていた。

一号車にはコントローラーとしての役割を持っているマシンデンバード（以後：デンバード）の他に、良太郎専用のバイクであるマシンデンバードⅡ（以後：デンバードⅡ）がある。

デンバードⅡのキーボックスにライダーパス（以後：パス）を挿しこむ。

起動音が鳴ると、右人差し指でボタンを押す。

デンバードⅡが前輪と後輪が九十度回転してから、車体が滑るようにしてスライド変形した。

デンバードⅡのみに搭載されている機能『モード2』である。

飛び乗ると、一号車の発射口が開く。

良太郎の右手にはデンカメンソードが握られている。

『良太郎。前にテレビでやってたヤツ、やれよ』

「アレ、すんごく恥ずかしくない?」

良太郎が『モモソード』になっているデンカメンソードの提案を渋る。

『オマエのネーミングセンスよりは断然いいと思うけどな』

サラリとモモタロスの声（以後：モモボイス）で告げた。

良太郎が最近気にしている事を。

「わかったよ。言えればいいんでしょ」

良太郎は観念してから、真剣な表情をする。

「野上良太郎。行きます!!」

デンライナーから一筋の光が発射された。

ヘリコプター内でリインから伝言を受けたフェイト・T・ハラオウンと八神はやては、その情報が俄かには信じられなかった。

だが、それが本当なら受験者二人が助かる可能性はグンと上がる。

「リイン。なのはちゃんは本当にそう言ったんやな?」

「はいです!・なのはさんは確かにそう言ったです!」

はやては確認するように、リインに訊ねる。

「一体どういふことなんですか!?!リインにはさっぱりわかんないです!?!」

リインは仲間はずれにされたかのように、憤慨する。

（リインが知らないのも無理はないよ。リインが生まれる前に来た人達だからね……）

はやての代わりに、フェイトが念話の回線を開いて代弁する。

その声は震えていた。

声だけではなく、全身が震えていた。

はやてにはその『震え』がなんなのか理解できていた。

『歓喜』によるものだ。

「……夢じゃないんだよね?」

「ん?」

はやての耳にそのような声が入った。

隣のフェイトが訊ねているのだ。

「それはもうすぐわかる事やで」

はやては、フェイトの頭をポンポンと優しく叩きながら告げた。

ティアナをおぶったスバルはまだグースイマジンから追われていた。

ハイウェイ跡地を寿命寸前のローラーで全力疾走していた。

「ティア。ヘリに乗ってる人達から何もないよ……」

「揉めてるのかもしれないわね」

「え?」

ティアナの予想にスバルは訊ね返す。

「相手はイマジンよ。選り抜きの武装局員が来るなんて事は期待でき

ないわよ」

この場に送り込めば、即座に死体になるか肉体を乗っ取られるかのどちらかしかない。

それがわかっているとところに命懸けで来るような人間はいない。

もちろん、誰だつて自分の命は大切だ。

『究極の護身』とは『危険から避ける』事なのだから。

「そんな〜」

スバルは気弱な声を出す。

両脚のローラーから妙な臭いがし始めた。

「ねえ。スバル……」

「なに？ ティア」

「アンタのローラーからヤバイ臭いしてない？」

ここで『オンボロ』とつけなかったのはティアナなりの気遣いだろう。

もくもくと煙までたっている。

「……気のせいだよー」

スバルは間を置いて答えた。

「ヤバイんでしょ!? 怒らないからハッキリ言いなさい。ヤバイんでしょ?」

ティアナの詰問にスバルが耐えられるはずもなく、項垂れながらボソリと呟く。

「……ものすごくヤバイ」

泣き顔で答えた。

ボンツという音が鳴った後、ローラーの車輪は慣性だけで回転しておりやがて停止した。

スバルはおぶっているティアナにこれ以上の怪我をさせないために、自分が前のめりになって地面に伏す。

機能停止をしたローラーはもはやデッドウエイトにしかならない。起き上がって二人は後ろを向くと、グースイマジンが歩いている。

「鬼ごっこは終わりか?」

急いだ様子もないグースイマジンが二人前に立った。

「……………」

スバルもティアナもイマジンと戦って生存できるとは思っていない。

自分よりも高い魔導師ランクを持つ者達が次々と骸となったのだ。自分達では瞬殺だろう。

だから『睨む』という抵抗しか出来ない。

「なら、狩り取ったりいいいいいい!!」

グースイマジンは両手から二振りの銃剣をフリーエネルギーで作り出して、振り下ろす。

だが、このイマジンの攻撃が叶う事はなかった。

後方へと吹っ飛ばされたのだから。

「何アレ……。ティア、知ってる?」

「私を知るわけないでしょ……」

二人の前には謎の人物がいた。

妙な乗り物に乗っていて、私服着用でこの場にいるのだから管理局員ではないと思われる。

右手には肉厚のあるアームドデバイスらしきものを握っていた。

グースイマジンを後方へと吹っ飛ばした張本人——デンバードⅡに乗っている良太郎はスバルとティアナに背を向けるように立っていた。

デンバードⅡから降りると、良太郎はスバルとティアナに向き直る。

デンバードⅡはバイク形態である『モード1』に切り替わる。

被っていたヘルメットを脱いで、デンバードⅡに引っ掛ける。

「大丈夫?」

良太郎はしやがんでスバルとティアナの目線になって話しかける。

「え、はい……」

「大丈夫、です」

スバルとティアナは当たり障りのない返事をする。

「よかった」

良太郎は安堵の笑みを浮かべる。

「……………」

スバルとティアナは目を丸くしていた。

「君達はここから動かないで」

良太郎は背を向けて、グースイマジンが吹っ飛ばされている方向を睨む。

「あの……………」

「待ってください。もしかして戦うつもりなんですか!？」

スバルは声をかけようか否か悩む中、ティアナは良太郎を呼び止めた。

「そうだけど……………」

良太郎は不思議そうに、スバルとティアナを見る。

「無茶ですよ！相手はあのイマジンなんですよ!!」

「そうですよ！早く逃げてください！」

怪我人の少女が自分のことをそっちのけで「逃げろ」と言ってくる。

その口振りが良太郎には、彼女達が『学生』ではなく『社会人』のようだと位置づけるものだった。

(僕よりも年下だと思っただけ……………)

この世界の社会がどうなっているかはわからないが、ハイウェイ跡地でイマジンと遭遇しているところからして『命』が常に危険にさらされている職場に就いているのだろうと推測する。

「もしかして時空管理局の人達?」

良太郎は疑問に感じた事を直に二人にぶつける。

スバルとティアナは顔を見合わせる。

「はい……………」

「そうですけど……………」

それだけ聞ければ今は十分だった。

「二、三聞きたいことがあるけどいいかなって……………」

『それは無理みてえだな。良太郎』

良太郎は真面目な表情になり、デンカメンソードがモモボイスで言う。

グースイマジンが起き上がってこちらに駆け寄ろうとしていた。

「いいね？もう一度言うけど、ここから動いちゃ駄目だよ」

良太郎はグースイマジンに向かって歩き出した。

(ねえ、ティア)

イマジンに向かって歩いていく青年を見ながら、ティアナに対して
念話の回線を聞く。

(何よ？正直、イマジンに向かって歩いていった人のことを聞かれて
もわかるわけないわよ)

これはティアナの本音だ。

彼女の周りでイマジンに正面きつて歩いていく人間は知らない。

ましてやそれが自分とは違う性別——異性ならなおの事だ。

それはスバルにしても同じ事だということがわかる。

その証拠にスバルは青年の背中を追っていた。

(あの人、本当にイマジンと戦うつもりなのかな？)

(あの口振りや態度から多分、そうでしょ)

(勝てると思う？)

(私ができるわけないでしょ！)

ここから先は自分達が知る常識の範囲外のことだという事だけは
わかっていた。

ヘリコプター内のモニターにはイマジンと対峙している人物の映
像が映し出されていた。

「良太郎……」

フェイトは両目に涙をいっぱい浮かべて全身を震わせていた。

「フェイトちゃん」

はやてにはフェイトの気持ちほど痛いほど理解できていた。

十年間も会えなかった想い人が現れたのだ。

色々な感情がめぐるのは当然だった。

(侑斗さんも来てくれるんかな……)

はやては、良太郎よりも侑斗の方が優先される。

彼女にとって侑斗は唯一の『素の八神はやて』をさらけ出せる数少
ない人物だからだ。

涙を流しながらフェイトはモニターに映っている人物から目を離

していなかった。

「お前、何者だ!?何をしにここにきた!？」

グースイマジンが良太郎に向かって声を荒げる。

「別世界より。この世界の『時の運行』を護る為に」

良太郎は静かに、決意を込めて短く告げた。

『さあて、さっさと片付けちまおうぜ。良太郎!』

「うん!」

良太郎は首を縦に振り、ポケットの中に収まっていたパスを取り出す。

右手に握られているデンカメンソードと同時に頭上に勢いよく掲げる。

パスをデンカメンソードのパススロットルに挿し込む。

「変身!」

デンカメンソードが光り輝き、掲げていた両腕を下ろす。

良太郎の腰元にケータロス装着型のデンオウベルトが出現して、自動的にカチリと巻かれる。

本来は黒色と銀色なのだが、赤色と白色が目立つプラットフォームの電王（以後：プラット電王）へと変わっていく。

頭上から半透明のデンライナー（以後：オーライナー）が出現して、滑るようにしてプラット電王に向かって下っていく。

キングライナーをモチーフにした赤色、黒色、白色、金色のオーラアーマーが胸部と肩部に出現して装着されていく。

頭部にはデンライナーをモチーフにした電仮面が出現して、装着されていった。

グースイマジンが銃剣を構えて、攻撃を繰り出そうと間合いを詰める。

銃剣を振り下ろすより、グースイマジンがまた後方と吹っ飛んだ。衝撃波などで飛ばされたのではなく物理的にだ。

吹き飛ばしたのは左拳だ。

左拳を放った正体は野上良太郎だったものだ。

今は仮面ライダー電王ライナーフォーム（以後：ライナー電王）と

なつたものだ。

「貴様！仮面ライダー電王!?!」

グースイマジンが動揺したが、両手に握られている銃剣を構えて駆け出す。

ライナー電王も、応じるようにしてデンカメンソードを構えて駆け出した。

第五話 「電王と魔導師 三度」

ハイウェイ跡地で魔導師ランク試験のゴール地点では一人の小柄な局員がモニターを開いていた。

「見た事がない仮面ライダーですう!!」

リインは小さい全身をあたふたさせながら、自身が展開したモニターに映っているイマジンと対峙している戦士を見ていた。

(リイン。今映ってるのが仮面ライダー電王やで)

念話の回線を開いたのは、八神はやてだ。

その口調は母親が子供に何かを教えるように優しい。

「フェイトさんの初恋の人なんですネ!」

(そうやで。あ、フェイトちゃんもこの念話聞ってるみたいやから顔赤くなってるわ)

はやては楽しそうに自分の隣でころころと表情を変えているフェイト・T・ハラオウンを実況していた。

(もう!はやてもリインも今はそんなこと言ってる場合じゃないよ!)

フェイトが二人に、注意をした。

(まあまあ)

「まあまあです!フェイトさん」

(うううううう)

はやてとリインがフェイトを宥めるが、それは決して効果的とはいえなかった。

(不思議ですう。イマジンがいるのにこんなに落ち着いていられるなんて、コレがはやてちゃん達がよく言っていた『別世界の仮面ライダー』なんですネ!)

イマジンがいるのに、こんなにも能天気な会話ができる事にリインは妙に納得していた。

*

「……………」

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターは今、目の前で起こって

いる出来事に目を疑った。

自分達を助けてくれた青年がバリアジャケットとは違う何かを『着用』もしくは全く別の何かに『変身』したのだ。

『青い狩人』じゃないわね。青くないし」

「うん。でも魔導師や騎士でもないよね。てことは……」

二人はある結論に到達して、同時に口を開く。

「仮面ライダー!!」

『P・T事件』、『闇の書事件』の真相を知らない者は『仮面ライダー』が関わっている事は噂話程度でしか知られていない。

噂話であるため、半信半疑になるのも無理はないことだった。

この二人も半信半疑でしかなかった。

目の前でグースイマジンと戦っている戦士を見るまでは。

二人の前ではライナー電王がデンカメンソードでグースイマジンの剣戟を受け止めていた。

弾いてから、反撃に移る。

「イマジンと対等に戦ってるなんて……」

「デタラメすぎるわよ……」

ただただ二人は今日の前で起こっている出来事を焼き付けるしかなかった。

デンカメンソードと銃剣がぶつかって火花が飛び散る。

鏢迫り合い状態だが、押しているのはライナー電王だ。

一歩一歩ゆっくりとだが、進んでいる。

「ぐっ！な、何て力だっ!?!」

グースイマジンは二振りの銃剣で防ぐだけで精一杯で、ズルズルと後方へと下がっていく。

ライナー電王の左手はデンカメンソードのデルタレバーを握って引っ張る。

『ウラロッド』

ガシヤンとターンテーブルが回転する。

デンカメンソードを引っ込めて、左足を軸にして腰に捻りを加えて右上段回し蹴りをグースイマジンのこめかみに狙いをつけて放つ。

速くそして重い一撃を。

「ぶっ!!」

グースイマジンは踏ん張ることもできずに、左へと飛ばされる。

『うん、悪くない蹴りだね。パワー、速度、タイミングどれをとってもいいと思うよ』

ウラタロスの声（以後・ウラボイス）で先程の蹴りを称賛していた。

「ありがとう。ウラタロス」

ライナー電王は褒められた事に素直に喜ぶ。

「ぐっ! やつてくれるなあ!!」

二振りの銃剣を上段に構えて同時に振り下ろす。

（来る!）

デルタレバーを引つ張る。

『キンアックス』

ガシャンとターンテーブルが回転し、ライナー電王は直立になる。

振り下ろされた銃剣のうち一振りはデンカメンソードで弾き飛ばして、もう一振りは左手で受け止めていた。

ギギギと銃剣がきしむ音が響く。

「ぬううううう!!」

ライナー電王の銃剣を握る力が強くなる。

「離せ! 離せ!!」

ドスつと弾き飛ばされた銃剣はグースイマジンの後方に突き刺さった。

ミシミシミシと握られている銃剣に亀裂が走る。

「ああああああ!!」

左手を完全に握ると同時に、銃剣が砕けて先端が地面に突き刺さった。

グースイマジンは残っている銃剣の位置を確認すると、握っている銃剣を手放して後方へと素早く下がって突き刺さっているもう一振りを引き抜く。

グリップを一度握ってから、クルリと順手から逆手へと持ち替える。

グリップの下部部分が銃口になっており、強く握る事でフリーエネルギーの弾丸が発射される。

(間に合わない！なら！)

左腕を前に出して、弾丸を防ぐ。

「ぐっ！」

バコオンと爆発音が鳴り、爆煙が立つ。

「やったか？」

グースイマジンは倒れてほしいと思ったが、爆煙が晴れるとそこには左腕で防御したライナー電王が立っていた。

「おのれえ！仮面ライダー電王!!」

デンカメンソードのデルタレバーのグリップを引く。

『リュウガン』

堂々とした立ち振る舞いから、軽快な足取りに切り替わる。

デンカメンソードの刃をグースイマジンに突きつける。

先端から紫色のフリーエネルギーが収束されて、弾丸として発射される。

ドオンドオンドオンと三発ほど弾丸が飛ぶ。

「ぶっべっぽっ！」

三発とも直撃して、仰向けになって倒れていった。

「す、凄い……。イマジンを追い詰めてる……」

「……………」

間近で観戦しているスバルとティアナはただただ呆然と一人と一体の戦闘を目にそして記憶に焼き付けていた。

魔導師や騎士では戦う事は出来ても『追い詰める』ことや『倒す』ことは至難の技だ。

それをあの戦士はたった一人でやってのけた。

自分達にとってイマジンは最早、『天災』のようなものだからだ。

『天災』を前に敗北する事は決して恥じる事ではない。

今まではそのように思っていた。

それは決して変わることはないと思っていた。

だがそれが変わろうとしていた。

異世界からやってきた戦士——仮面ライダーに。

「コレって勝てるんだよね？」

「黙ってて。今は瞬きするのも惜しいから」

「う、うん」

スバルはティアナ同様にイメージが倒されるという歴史的瞬間を焼き付ける事に専念した。

『モモソード』

デルタレバーを引っ張ってデンカメンソードのターンテーブルが回転する。

『へっ！止めと行こうぜ！良太郎！』

「わかったー！」

デルタレバーを押し込んで『モモソード』と電信音が発して、デンカメンソード先端からフリーエネルギーで構築された黄金の線路——オーラレールが出現する。

ライナー電王は助走をしてから飛び乗る。

オーラレールの上を滑るようにして進み始める。

デンカメンソードを右中段に構え、後はグースイマジンに向かっていくのみ。

「ぐぐぐ……！！」

起き上がるグースイマジンだが、自分に次の一手がないとわかると後退を試みる。

「電車斬りiiiiiiii!!」

グースイマジンとの距離がほぼゼロになると、デンカメンソードを横一線に振るう。

ライナー電王が走り抜けて停止し、デンカメンソードを軽く振る。

「うおおおおおおおおお!!」

グースイマジンの腹部に横一文字に切り傷が刻まれ、基点となつて膨大なフリーエネルギーが注ぎ込まれていき、爆発した。

ライナー電王が振り向くとグースイマジンの姿はなく、爆煙がもくもくとたっているだけだった。

デンオウベルトを外すと、野上良太郎へと戻る。

デンカメンソードも光り輝き、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスに分離した。

良太郎は歩み寄ってスバルとティアナの前に立って、二人と同じ視線になるようにしゃがむ。

「さっきの続きだけどいい？」

「は、はい」

「な、何でしょうか？」

先程とは違い、二人とも恐縮していた。

(さっきの戦いを見てたら無理もないか……)

二人をリラックスさせるためにも仕切り直しをすることにした。

「自己紹介がまだだったね。僕は野上良太郎」

「ティアナ・ランスターです」

「ス、スバル・ナカジマですっ！」

ティアナが冷静さを取り戻しつつあるのに対して、スバルは緊張しているままだった。

「単刀直入に聞くよ。フェイト・T・ハラオウンって名前に憶えはないかな？」

二人は顔を見合わせるだけだ。

「なら高町なのは、八神はやってって名前は知らない？」

「失礼ですけど、その……貴方はその方々とどういった関係で？」

良太郎の質問にティアナは無礼を承知で訊ね返す。

「友達。もしくは仲間、かな」

良太郎は嘘は言っていないと思っている。

「あー！へりとゼロライナーがこっちにくるよー」

リュウタロスは頭上を見上げながら指差していた。

「ホンマやな」

キンタロスも腕を組んで見上げる。

「ボクちゃんがへりの人と上手くやってくれたのかもしれないね」
ウラタロスは冷静に判断する。

「ま、上出来じゃねーか」

モモタロスは首を鳴らしていた。

「リイン！」

白色が目立つバリアジャケットを纏った高町なのはが、青空から地上に着陸した。

「なのはさん！イマジンが……イマジンが……その……」

「落ち着いてリイン。倒された、って言いたいんだね」

「は、はいです！仮面ライダーが倒しちゃったんですよ！」

こんな間近で戦闘を見た事がないリインが興奮するのも無理はないと、なのはは思う。

「あの人達なら当然、だよ」

なのはにしてみれば電王がイマジンを倒す事なんて当たり前のことのように捉えている。

十年前にもそのような光景を見ているのだから。

「受験生二人が怪我してるかもしれないから行くよ。リイン」

「はいです！そろそろ、はやてちゃん達も到着するはずです！」

「はやてちゃんが？となるとフェイトちゃんは良太郎さんと会えたのかな……」

「感動の再会ですう！」

三度目の出会いを『再会』と呼んでいいのかわからないが、なのははリインに指摘をしなかった。

ゼロライナー一号車であるドリルでは、桜井侑斗とデネブがヘリコプターの搭乗者達と通信をして、ひとしきりのことを伝え終えて通信を切った。

「今の声ってもしかして八神？」

「だろうな」

デネブが訊ねてきたので侑斗は即答した。

「元気でよかった」

デネブがうんうんと首を縦に振って喜んでいた。

「ああ」

侑斗も笑みを浮かべていた。

父親のような世代間を越えた友人の笑みともとれた。

なのはとリインが現場に到着すると、フェイトとはやてが乗ってい

るヘリコプターの隣にはゼロライナーが並列していた。

「わわっ!?イ、イマジンがいっぱいいるですう!!」

モモタロス達を知らないリインはなのはの後ろに隠れた。

「あのイマジンさん達は味方だよ」

なのはは安心してさせるように短く告げる。

「あれ?あのお姉ちゃん。僕達を見てるよ?」

「美人だねえ。でも誰かに似てるような気がするんだけど……」

リュウタロスとウラタロスがこちらの視線に気付いたのか、顔を向けてきた。

「カメの字の記憶が曖昧なんやから俺等が知ってるわけないやろ……」

キンタロスが腕を組んで首を傾げる。

「カメ。頭振ってやるから頑張って思い出せ。クマ、小僧。手え貸せ」

「おっしや!」

「はーい!」

「そんな事したら僕の頭、センパイになっちゃうじゃない!!」

モモタロスの提案にノリノリのキンタロスとリュウタロスに対して、ウラタロスは狼狽する。

(変わらないなあ)

そんな四体のコント的会話を見ながら、なのはは十年前に会った時と全く変わってない事を内心嬉しかった。

自分にとってはユーノ・スクライアとは違う意味での『師』だからだ。

「モモタロスさん、ウラタロスさん、キンタロスさん、リュウタ君。お久しぶりです!」

なのはは笑顔で四体の前で挨拶してから軽く会釈した。

「「「久しぶり?」」」

四体がこちらを見たまま、今行っている事(ウラタロスの頭を振る)を中断する。

「なのはです。高町なのはです!」

なのはが告げると四体が一瞬だが完全に停止した。

ええええええええええ!!

この声には良太郎とイマジン四体は目の前の女性と自分達が知っているなのはとのギャップに。

リイン、スバル、ティアナは、なのはが良太郎とイマジン四体が顔見知りであった事に。

「なのはちゃんがお姉ちゃんになってる!？」

「頭の尻尾が一本になってるぜ!？」

リユウタロスとモモタロスは現在のなのはの見た目を大声で言う。

「たまげたなあ」

「うーん。ユーノも随分と釣り甲斐のある魚に出会えたもんだねえ」

キンタロスとウラタロスは各々の感想を述べる。

「にはははははは」

なのはは久しぶりに聞く四体のコメントを聞きながら笑ってしま
う。

イマジン四体に軽く会釈してからスバルとティアナに歩み寄る。

「二人ともお疲れ様。試験が滅茶苦茶になっちゃってごめんね」

なのははイマジンの乱入を許してしまった事は自身の監督不行き届きであるとしており、受験生二人に謝罪する。

「ランスター二等陸士」

「は、はい」

「ケガを治療するからブーツ脱いで」

「治療ならわたしがやるですう」

なのははティアナの治療に取り掛かろうとするが、リインが買つて
出た。

「あ、やっぱり小さい」

リインを見たティアナの眩きをなのはは耳に入ってしまった、笑いを
こらえるのに必死だった。

「なのは……さん」

「ん?」

スバルの眩きをなのはは聞き逃さなかった。

「高町教導官二等空尉!」

ガチガチにスバルは固まっていた。
なのはは笑みを浮かべて歩み寄る。

「なのはさん、でいいよ。みんなそう呼んでるから。四年ぶりかなあ」
なのはの言葉に、スバルが震えていた。

「背伸びたね。スバル」

スバルの双眸の涙腺が緩み始める。

「また会えて嬉しいよ」

なのはは左手をスバルの頭にポンと手を置く。

「ううっ……ぐすっ……」

スバルは嗚咽を漏らし始めた。

ヘリコプターの車輪が陸地にボムツと触れた。

ドアが開いて、フェイトとはやてが降りる。

「さ、フェイトちゃん」

はやてに促されるようにして、フェイトは一步一步歩き出す。

涙は既に拭き終え、この日に備えて何千回とイメージトレーニングをした事を思い出す。

今の自分を見てもらう為に。

もうみつともない姿をさらしてオロオロしていた頃と違う。

逢いたかった青年の背中が大きくなっていく。

距離が近くなっている事だ。

徐々に、徐々に。

青年——良太郎がこちらを向き、目と目が合った。

「良太郎……」

良太郎の顔を見て、名を呼ぶのは十年ぶりだ。

それだけで心臓の音が高鳴る。

『良太郎。好きだよ。大好き！』

十年前に告げた告白が甦ってくる。

（ど、どうしよう。今までのイメージトレーニングが無駄になりそうだよ）

心臓の鼓動が激しくなっているのがハッキリとわかる。

周りには自分の親友がいる。

信頼できる別世界の仲間達もいる。

でも今は、今だけはこの者達は自分の味方にはなってくれない。

「久しぶり、だね。良太郎」

フェイトが切り出した。

「もしかして……フェイトちゃん？」

良太郎は確認するようにおそるおそる訊ねてきたので、首を縦に振って回答する。

ええええええええええ!!

イマジン四体は、なのはの時と同じ様に驚きの声を上げた。

「え？なに？どうしたの？」

急に驚かれたので、フェイトは眼を大きく開いてしまう。

「驚くのも無理ないよ。十年で人ってこんなに変わるんだなって思ってたね」

良太郎がイマジン四体が驚いた理由を教えてくれた。

「私、変わった？」

良太郎は人差し指で頬を掻いていた。

良太郎は人差し指で頬を掻きながら、フェイトを見る。

幼かった頃の『儚さ』のようなものはなく、それが『強さ』に変わっているようにも思えた。

（プレシアさん。貴女が全てを懸けて守ったフェイトちゃんは幸せを手に入れてますよ）

届くとは思えないが、デッドライナーでアリシア・テストタロッサと暮らしているプレシア・テストタロッサにそのように告げた。

同時に『決意』も改めて固まってくる。

フェイトにプレシアの事を告げる事を。

たとえそれでフェイトに軽蔑される事になろうとも、だ。

「あの……良太郎？」

黙りこくっているフェイトは沈黙に耐えられないのか、不安げな表情を向けてきた。

「フェイトちゃん」

「なに？」

良太郎は右手をフェイトの頭に置いてから優しく撫で始める。

「大きく……、そして立派になったね」

良太郎は万感の思いで短く告げた。

「!!」

その一言にフェイトは胸を貫かれるような感覚に襲われた。

双眸から散々流したと思われる涙がまた溢れ始める。

「うっ……」

全身が震える。

「ううっ……」

嗚咽が漏れ始める。

ヨロヨロと自然に良太郎に歩み寄ってゼロ距離になると、こてんと額を良太郎の右肩に置いてから両手で彼の服を掴む。

「良太郎おお!!うわああああああん!!」

我慢も限界を超え、フェイトは人目を気にすることなく大声で泣いた。

良太郎の手のぬくもりに背中に伝わってきた。

戸惑いながらも泣いているフェイトを安心させるための優しい抱擁だった。

第六話 「機動六課 前編」

仮面ライダー電王がミッドチルダの大地を踏み、イマジンを倒したという現実をティアナ・ランスタールは受け入れようとした。

人目も憚らず号泣しているフェイト・T・ハラオウンを優しく抱きしめている野上良太郎を見る。

とてもイマジンを倒した仮面ライダーと同じ人間とは思えない雰囲気放了つていた。

その場にいるだけで安心するという表現が最も適切なものだろう。そして彼と共に現れた四体のイマジンも見る。

(世界を恐怖に叩き込む存在、なのよね……)

口コミやニュースで報道されている情報を聞く限りではそのような印象になっている。

だが目の前にいる四体はそんな事をしそうな外見をしてはいるが、そんな事をしそうな思考を持つているとは思えなかった。

持つていれば、高町なのはが敬意を持つて挨拶をするはずがないからだ。

「どうしたの？ ティア。難しい顔してるよ」

隣で自分ほどではないが、自体を受け入れようとしていたスバル・ナカジマが声をかけてきた。

「スバル……」

ティアナは知っている。

自分の相棒は一見能天気に見えるが、実は考えるとところは考えているという事を。

普段の明るさとは裏腹に、人には公表できない『闇』を抱えている事を。

「何か凄い事になってきてるよね」

「私達の試験結果がどうなったのかがあまり気にならないくらいね」

「あー！」

スバルは指摘されてから、イマジンが乱入した事がどのような結果を招くのか想像して頭を抱えて蹲《うづくま》っていた。

「本当どうなっちゃうのかしらね……」

ティアナはこれから起こる事が自身の常識を覆してしまうような予感がしていた。

*

時空管理局本局に移動した良太郎達はこちらに向かってくる視線が気になって仕方なかった。

誰も彼もが好機の眼差しを向けていた。

無理もないといえば無理もないことだ。

私服姿の二人の青年と一人の少女に五体のイマジンなのだから。

モモタロスが見てくる局員に睨み返している。

ウラタロスが女性局員を見境なしに声をかけていた。

キンタロスは腕を組んでいびきをかいていた。

リュウタロスは周囲をキョロキョロしていた。

デネブは局員一人一人にデネブキャンディーを配ろうとしたところを桜井侑斗にバスケットを丸ごと没収されてしまった。

侑斗は没収したデネブキャンディーを一口の中に頬張っていた。

良太郎は視線を感じたので、顔を向けると先程イマジンに襲われていた魔導師二人だった。

バリアジャケットから陸士隊の制服を着ていた。

(この二人にしてみたら居心地悪いだろうなあ)

良太郎はそのような事を思いながら、二人と目が合ったから軽く会釈する。

二人——スバルとティアナも返してきた。

八神はやたとフェイトが新設される部隊の大まかな経緯を話していた。

(八神さんの言い方からしたら、いかにもって感じだ……)

自分の身内の中では、はやととは一番付き合いの長い侑斗の顔を見る。

同じ様な表情をしていた。

わざわざ部隊創設までの経緯を話すというのは一見すると、美談に思える。

だがここは海千山千の連中が跳梁跋扈している時空管理局。

美談こそ『真実』を隠すためのカモフラージュには最適なものだと考える事も出来る。

侑斗と目が合う。

侑斗は首を縦に振ってくれた。

「あとは任せろ」という意味がこもっていた。

スバルは眼前の二人——はやてとフェイト、そして横に座っている得体の知れない面々などを見てから自分が結構緊張している事を自覚した。

(ハリノムシロって言うのかなあ。こういうの……)

時空管理局に籍を置いている以上、この手の現場に出くわす事はあると覚悟を決めているがそれでもイメージと現実では違うものだと痛感した。

正直に言えば、はやてとフェイトが語っている内容の殆どが頭の中に入っていないかったりする。

先程軽く会釈してくれた青年を見る。

はやての話に真剣に耳を傾けていた。

(この人達も関係あるのかな……)

スバルは新設部隊にこの集団も関わるのだろうかと思像してみる。

(?)

首を傾げる始末だ。

つまり、あまりに現実離れしているような気がしてスバルの処理能力では追いつけないのだ。

隣の相棒に念話の回線を開いてみようと思えるが、凄く真剣に聞いているので後でお小言を言われるのは想像できるので今は控える事にした。

はやては新設される部隊の説明をしながらも、二つの視線を気にしていた。

侑斗と良太郎だ。

あれから十年経って口達者になったとしても、この二人に自分の真意を勘付かれる可能性は充分にあると思っている。

(この二人を相手には『狸』と呼ばれてる私でも自信ないわ)

イマジンの契約者を捜すというのは優れた洞察力や観察力、そして推理力も必要になってくる。

この二人はそれらを誰から教えられたという事もなく、『現場』で培ってきたのだ。

訓練で得た知識というのは時と場合によつては枷になる事もあるというのも、自分は知っている。

そしてそれが『純度』を濁らす事になる原因になっているという事もだ。

(野上さんや侑斗さんにも関係あるかもしれへんしね)

はやてとしては自分が内々に秘めている事は、デンライナーやゼロライナーにも大きく関わりがあるものだと睨んでいる。

あの内容はそう思わせるには充分なものだからだ。

しかし、それはあくまで自分の想像の範囲内ではない。

フェイトが説明の補足を始めたので聞き手に回りながら、頃合と見計らって締めくくろうとする。

「四年ほどかかってやっとそのスタートを切ることが出来た……、というわけや」

軽く口にしていた紅茶のカップを皿に置く。

「部隊名は時空管理局本局遺失物管理部『機動六課』！」

ソファの背もたれに器用に座っているラインが締めくくった。

「登録は陸士部隊。フォワード陣は陸戦魔導師が主体で特定遺失物の捜査と保守管理が任務や」

はやては機動六課の主な概要を説明した。

「ロストロギア関連ってこと？」

良太郎が切り出して、はやては首を縦に振る。

別世界の人間でも過去に二度もロストロギア関連の事件に関わっているだけあって聡い。

ティアナが先に告げようとした事に目を丸くしていたが、すぐに平静に戻る。

「でも広域捜査は一課から五課までが六課《ウチ》は対策専門」

フェイトが補足する。

スバルがティアナに何かを訊ねようと念話の回線を開こうとしているが、睨まれて中断となったのが仕種から見てわかった。

そんなやり取りを見ながらも、この二人を選んで間違いないとはやては確信した。

「そこでや。スバル・ナカジマ二等陸士、ティアナ・ランスター二等陸士」

「は、はいっ！」

いきなりフルネームで呼ばれて、二人は恐縮する。

「私は二人を機動六課のフォワードとして迎えたいと考えてる。厳しい仕事にはなるやろうけど濃い経験は積めると思うし、昇進機会も多くなる。どないやろ？」

食いついてくるかどうかは、ハッキリと言えば二人次第だろう。

二人が向上心がなければ断りを入れるだろう。

だが自分には魔導師ランク試験を見た限り、そしてそこに行き着くまでの経緯を見る限りではこの二人が確実にこの勧誘に乗ると睨んでいた。

「あ、ええと……」

二人揃っていきなりの話なので、あたふたしていた。

「スバルは高町教導官に魔法戦を直接教われるし」

「はい……」

「執務官志望のティアナには私でよければアドバイスとかできると思うんだ」

「あ、いえ。とんでもない……」

フェイトがスバルとティアナに六課に入った際のメリットを話す。

「あの、取り込み中だったかな……」

両手で試験結果を抱えていたなのはが姿を現した。

「平気だよ」

はやては、なのはが座れるように席を作った。

モモタロスは退屈に感じたので、深刻な話をしている面々の方に視線を向けていた。

イマジンとは人間よりもあらゆる面が優れているので、この程度の距離なら全て耳に入ってくる。

「お、なのはまでが入り込んできたぜ」

なのはが回覧板に乗っかっている資料を凝視しながら、スバルとティアナを見据えていた。

内容から察するに、試験の結果らしい。

(アレ、試験の最中だったのかよ)

イマジンでも『試験』というものが何なのかは知っている。

合格したらおめでたいというもので、不合格なら悲しいものだ。

試験そのものに縁がないともいえるイマジンにとっての認識はこのくらいでしかない。

(俺達が割り込んだら、不合格になるんじゃないやねえのか。あの二人)

イマジンとの戦闘も試験内容に含まれているのならば、明らかに自分達のはたことは『不合格』という烙印を押されても仕方のないものだ。

(ま、いいか)

モモタロスはそれ以上は考える事を中断した。

席に座ったなのはは、早速自分の仕事に取り掛かることにした。

「とりあえずは試験の結果ね」

なのはは先程までとは違う真剣な表情をしていた。

「二人とも技術は問題なし。でも危険行為や報告不良は見過ごせるレベルを超えています」

二人の表情が報告ごとによって変わっていくが、なのはは続ける。

「自分やパートナーの安全や試験のルールも守れない魔導師が人を守るなんて、できないよね」

言い方は穏やかだが、受験生二人にはグサリと来るものだった。

「はい……」

ティアナは素直に受け止めていた。

「だから残念ながら二人とも不合格、なんだけどね……」

「え!?!」

それで終わりというわけではなかったので、スバルとティアナは目

を丸くする。

「二人の魔力値や能力を考えると次の試験まで半年もCランク扱いは却って危ないかもしれないし、それにイマジンの乱入で試験そのものが

無効になっても仕方がないというのが、私と試験官の共通見解」

「ですう〜」

リインもそれで納得している。

「ということでコレ。特別講習に参加するための申請用紙と推薦状ね」

なのはは、テーブルに二人分の資料と封筒を差し出した。

「コレを持って本局武装隊の特別講習を三日間受ければ四日目に再試験を受けられるから」

「え？え？」

なのはの説明にスバルの許容量は超え始めていた。

「来週から本局の厳しい先輩からしっかりと揉まれて、安全とルールをしっかりと学んでこよう。そうすればBランクなんて楽勝だよ。ね♪」

なのはは笑顔で締めくくった。

「あ、ありがとうございます!!」

二人は同時に感謝の言葉を述べて、頭を深々と下げた。

「合格までは試験に集中したいやろ。私への返事は試験が終了するまでってことにしとこか？」

はやては勧誘の返事はすぐでなくてもいいと言う。

「すみません！恐れ入ります!!」

スバルとティアナはその場で立ち上がって、敬礼した。

その時、互いに「やった♪」という心情が少しだけ表に出ていたりするのだが、誰もそれを詰問しようとは思わなかった。

スバルとティアナがその場から離れても、まだそこには人とイマジンが残っていた。

「十年ぶり……ですね。侑斗さん、野上さん」

はやてにしてみればこれからが本腰を入れなければならないもの

だと考えている。

紅茶を一口飲んでから、真面目な表情になる。

付き合いがある分、彼等が本世界（はやて達からすれば）に来た凡その理由はわかってる。

「そう……だね」

「俺達にしてみれば一ヶ月ぶりなんだけどな」

良太郎と侑斗はそれぞれの言葉で返答する。

「来た理由は観光、じゃないですよね？」

「まあね」

はやてがおどけた事を言い、良太郎は苦笑する。

「お前達のことだから見当はついてるんだろ？」

侑斗は笑わないかわりに、おどける必要はないと言う。

「やっぱりイマジン絡み、なんですか？」

なのはの質問に良太郎が首を縦に振る。

「イマジンなのかもしれないし、違うかもしれないってのが僕たちの今のところの見解、かな」

良太郎は上着の懐から一枚の紙を取り出して、広げて呈示する。

「手掛かりがそれしかないからな。野上の言う事もわかるだろ？」

侑斗が付け足す。

良太郎が広げた紙を凝視する三人。

『サイキョウニシテサイアクナルモノ』

という短い文章だった。

「？」

なのはとフェイトは意味がわからないので、首を傾げている。

対して、はやてはというと。

「……………」

一瞬だが、青ざめていた。

それが何かを知っているものだと言った良太郎と侑斗は見逃さなかった。

（八神の表情が一瞬だが変わった……）

何かあると侑斗は踏んでいるが、それを今すぐ問おうとは思わな
い。

幼馴染二人がいる以上、適当にはぐらかされる可能性もあるからだ。

「僕達としては正直、ミッドチルダに関する地理や常識は全くといっていいほどないに等しいから付き合いのある君達に協力を頼みたいわけ」

良太郎は自身が別世界ではまったくの門外漢だという事は重々承知している。

「イマジンを倒すんだったら俺達の力はアテにはしていいぜ」

侑斗が自分達を加えることへのメリットを言う。

はやてとしてみれば電王とゼロノスでイマジン対策は解決したよ
うなものだった。

（侑斗さんが訊ねてきたら、打ち明けるしかないやろな）

自分が内に秘めている事を近いうちに桜井侑斗は辿り着くだろう。

そうなればはぐらかさずに打ち明けようとははやては決めた。

「もちろん、皆さんの力は重々承知してますんで私等としては願った
り叶ったりです。でも今までのような感じにはならないということ
だけはご理解いただきたいんです」

はやては予めの注意事項として、二人に告げる。

「何か形式ばったことがあるのか？」

「そうなんよ。今まで侑斗さん等は『未来』から来たことを考えて、情
報等は一切公開されてへんけど今回はっきりはそういうわけにはい
かへんのや」

「情報を一切公開しない協力者なんて不審者みたいなものだもんね」

はやての忠告は的を得ていると良太郎は素直に受け取る。

「どうする？・侑斗」

「機動六課絡みなら八月になるまで、俺達の事は伏せてもらうしかな
いが俺達絡みだったら仕方ないだろう。隠蔽のしようがない」

「やっぱりそうなるよね」

侑斗に訊ね、的確な方針を述べられた良太郎はその方針に同意し
た。

「そう言うてもらえると助かります」

はやてとしてはこれで駄々をこねられたらどうしようかと考えていたくらいだ。

「おい。話は決まったのかよー？良太郎ー」

と離れた場所にいたモモタロスが良太郎を呼んでいた。

「まあねー」

と良太郎が軽快に返した。

チームデンライナーとゼロライナーが機動六課の協力者という立場になった。

*

スバルとティアナは本局の中庭で寝転がって、六課勧誘の話を思い返していた。

魅力的な話だとは思える。

自分達にもそれなりのメリットがあるので、願ったり叶ったりだ。だが、やはり迷う部分もあった。

「ねえティア」

「何よ？」

「新部隊の話、どうする？」

スバルは自分より冷静に物事を捉えている相棒の意見を参考にしようと考えた。

「アンタは行きたいんでしょ？なのはさんはアンタの憧れなんだし、同じ部隊なんて凄くラッキーじゃない」

ティアナはサラリと答えてくれた。

でもそこにはティアナ自身はどうなのかというのとはわからないまままだが。

「まあそうなんだけどさ……」

スバルはそれでもどこか迷っている節があった。

やっていける事が出来るかという不安もあるのだ。

「私はどうしよっかな……」

（遺失物管理の機動課っていえば選り抜きのエリートが集まるところよね……）

場違いではないのかと思ってしまう。

自身が特出した技能を持ち合わせていないから余計にだ。

「そんな所に行って今の私がちゃんと働けるのかなって……。ん？」
視線を感じたので見てみると、訳知り顔のスバルが自分を見下ろしていた。

「何よ？ 気持ち悪い」

真剣な表情で見つめられているわけではないが、あまり見つめられ慣れていないティアナは少しだけ顔を赤くする。

「えへへえ」

その直後、スバルは右手を拳にして両目をわざとらしくくらいに輝かせる。

「そんなことはない！ ティアアもちゃんとできる！」

言った直後にスバルの両目は異様な輝きから普通の輝きに戻っていた。

「って言ってほしいんだろ〜？」

そのスバルに対してティアナの反応はというと。

青筋を立てて、スバルのお尻を思いつきり抓っていた。

とりあえず気が済むまで抓るとそっぽを向く。

「ねえティアア」

今度くだらない事したら、さっきの倍の力で抓ってやろうと心のうちに決めながらスバルのほうへと顔を向ける。

「口では不貞腐れた事を言うけど、本当は違うんだって。フェイト執務官にも内心ではライバル心メラメラなんですよ〜」

「ラ、ライバル心とかそんな大それたものじゃないけど……。知ってるでしょ？ 執務官は私の夢なんだから……。勉強できるならしたいって気持ちもあるわよ」

ティアナは照れながらも本音を打ち明ける。

「だったらさ、やろうよティアア！」

スバルが移動してティアナの正面に立つ。

「私は、なのはさんに色んなことを教わってもっともっと強くなりたい。ティアアは新しい部隊で経験積んで自分の夢を最短距離で追いかける！」

こういふときのスバルの言葉は異様に説得力がある。

(コレ、褒めたら絶対に付け上がるから言わないけど)

「それに、当面まだまだ二人で一人前扱いなんだしき。まとめて引き取ってくれると嬉しいじゃん♪」

スバルは心のそこから嬉しそうに言う。

対してティアナはというと。

青筋を浮かべて、背後からスバルの頬を抓る行動を取った。

気が済むと、立ち上がって腕を組む。

「まあいいわ。上手くこなせれば私の夢への短縮コース。アンタのお守りはゴメンだけど、ま、我慢するわ」

そのような事を言うティアナをスバルはクスクスと笑みを浮かべていた。

その笑みが何となく癪に障っているのだが、スバルに詮索する事がまたドツキ漫才になる事をティアナは直感したので理性を抑える事にした。

*

時空管理局本局のとある休憩室ではというと。

良太郎、イマジン四体、コハナ、フェイトがいた。

ミッドチルダの通貨を持っていない良太郎達はフェイトの奢りでジュースを飲んでいた。

その中で一人、フェイトは頭を抱えていた。

(ど、どうしよう……。十年ぶりだからってあんな……。あんな……)

人目も憚らず、大泣きして良太郎に抱きついてしまった事だ。

久しぶりだが、穴が入ったら入りたくなった。

隣に座っている良太郎は心配げな表情をしていた。

(十年経ってもみつともないよ……)

成長した自分を見てもらおうと思つたのに、駄目な部分しか見せていないと自己分析する。

「あの……。フェイトちゃん」

良太郎が声をかけてきた。

「な、なに？良太郎」

「さつきからどうしたの？頭抱えてさ、もしかしてさつきの……事？」
「……うん」

わざわざ誤魔化す必要もないので、フェイトは顔を赤くしながら素直に首を縦に振る。

「ま、まあやってしまった事を後悔しても仕方ないよ。それにナカジマさんだって、なのはちゃんと再会できたことにその泣いてたし……」

「う、うん……」

良太郎も顔を赤くしながらフォローにならないフォローを言う。

意味合い的には同じといえば同じだと良太郎は考えているのだから。

「でも何かホツとしたよ」

「え？」

「十年経ってるから別人みたいだと思ったけど、そうやって顔を赤くしたりあたふたしたりするところを見るとフェイトちゃんはフェイトちゃんだつてね」

「もう……」

良太郎の一言にフェイトは俯きながら、軽く良太郎の右肩を叩いた。

第七話 「機動六課 後編」

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターのドツキ漫才的やり取りを見ている者達がいた。

高町なのは、八神はやて、桜井侑斗、デネブである。

「あの二人は確定か？八神」

「まず間違いあらへんね」

侑斗の問いに、はやては満足げな笑みを浮かべる。

「なのはちゃん、嬉しそうやね？」

なのはが喜色の表情を浮かべているのは、誰から見ても明らかなのだった。

「二人とも育てがいがありそうだし、時間かけてゆっくり教えられるしね」

腕を組んで戦技教導官としての眼差しを向けて告げた。

「それは確実や」

はやても笑みを浮かべて返す。

「八神、高町」

デネブはいつの間にか取り出したデネブキャンディーをなのはとはやてに渡した。

デネブの素早い行動に、二人は掌に乗っているデネブキャンディーを見る。

「デネブからの餞別だ。受け取ってやってくれ」

侑斗はそう言いながら、デネブキャンディーを口の中に放り込んだ。

二人も侑斗に倣って、デネブキャンディーを口の中に放り込んだ。「この味や〜♪十年経ってもデネブちゃんのこの味は出せへんねんなあ〜」

はやては至福の表情を浮かべている。

「桜井さん。このキャンディーって本当にデネブさんが作ってるんですよね？」

なのはがカラコロと鳴らして舐めながらも、侑斗に確認する。

「疑いたくなる気持ちはわかるが、間違いなくデネブが作っているぞ」
「凄いですよねえ」

「あのごつい手でどうして作れるのか俺も疑問に思うよ」
「あー！」

侑斗とデネブ談義をしていたのははある事を思い出して、はやてを見る。

「新規のフォワード候補はあと二人だけ？そっちは？」

「二人とも別世界（この場合はミッドチルダとは違う次元世界のこ
と）。今シグナムが迎えに行ってるよ」

スバルとティアナ以外にも『フォワード』というポジションに組み
入れる人員は二人予定している。

「なのは、はやて、桜井さん、デネブ。お待たせ」

フェイト・T・ハラOWNを始めとする野上良太郎にイマジン四体、
コハナ、そしてフェイトの肩に乗っているリインがやって来た。

イマジン四体は何故か沈んでいた。

「お待たせですう」

リインは、はやて側へと浮遊しながら移動する。

「あのフェイトちゃん。モモタロスさん達どうしたの？」

「ええとね。私達が住んでる場所を話したら、その……この通りに
なっちゃって……」

フェイトは苦笑いを浮かべている。

良太郎も似たような表情を浮かべており、コハナはやれやれと呆れ
ていた。

「こいつ等ね、なのはちゃんの家で厄介になる気マンマンだったのよ」
「私の家、ですか？」

「正確には今、なのはちゃんが住んでる所じゃなくて『海鳴』のだけど
ね」

良太郎が詳細を告げると、なのはは「ああ、なるほど」と納得した。

「プリンが食えねえ……」

「桃子さん。美由希さん……」

「サッカーができない……」

モモタロス、ウラタロス、リュウタロスの落胆ぶりは見ていて痛いものだった。

キントロスも落胆はしているが、三体ほどではなかった。

「すまんなあ。なのは」

キントロスが、なのはに謝罪する。

「何か三人を見てると、一人暮らしを始めた事に罪悪感が……」

なのはとて自身のやりたい事を叶える為に、ミッドチルダへと移住したのだ。

そのことに後悔はないが、こうしてかつて世話になった者達の望みを容赦なく断ってしまったと知ると罪悪感が湧いて来るものだ。

「気にしたら負けよ。こいつ等の術中に取り込まれるわよ」

コハナは、なのはにイマジン達を作り出す領域に取り込まれないように注意する。

「確かにこいつらの言うとおりだな。俺達毎度毎度だが根無し草だからな」

侑斗も自分達の住居先には常に頭を抱えていた。

彼は以前は八神家で厄介になっていたが、今回もそういうわけにはいかないと予想する。

「侑斗さんとテネブちゃんなら、私の家で何とかなるけど野上さん達までは正直難しいで。野上さん達が来るってわかってれば寮での準備もできたんやけどなあ」

はやては自身の見通しの甘さを呪うが、その場にいる誰もが責めはしなかった。

誰も予想できる事ではないからだ。

「八神さん。僕達の部屋ってどのくらいでできるの?」

「着替えて寝るだけやったら、遅くても明日の正午までにはできますけど」

「それをお願いしますよ」

「わかりました。そない言うておきます」

良太郎が部屋の設備が完了する時間を訊ねると、はやてが最速の時間を見せてくれた。

「なあ良太郎」

今まで凹んでいたモモタロスが顔を上げる。

「どうしたの？モモタロス」

「侑斗とおデブはオカン（はやて）のところだけだよ。俺達今日はどうなるんだよ？まさか野宿かあ!？」

「ええっ!?!無理だつて!」

「修行の一環やと思えば何とでもなるかもしれないけどなあ」

「いやだいやだ!野宿なんていやだああ!!」

それに連なるようにして、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスも野宿で一泊過ごす事には断固拒絶していた。

別世界での暮らしが本世界より快適だったという証明である。

駄々をこねる四体にコハナは指をバキボキと鳴らしていた。

鉄拳制裁の準備運動である。

「よくてデンライナーの中で、最悪の場合は野宿だね」

良太郎とて寝袋で寝たいとは思わないが、年頃の女の子の部屋に堂々と入り込んで一泊を過ごせるほど豪胆ではない。

「なあオカン。俺達が明日から生活できる場所ってどこにあるんだよ?」

モモタロスが、はやてに明日から自分達が生活できる場所を訊ねる。

「ちよいと待って。モモタロスさん」

「何だよ？オカン」

「確認しますけど、その『オカン』って私の事やないでしょうね？」

はやてはそうであつてほしくないと思いつつも、モモタロスを見る。

「オメエ、赤チビ（ヴィータ）やその銀バエ（リイン）の親みてえなものだろ？だったらオカンじゃねえーかよ」

おおおおお!!

モモタロスがはやてを『オカン』呼ばわりする理由が判明すると納得する声がでていた。

「ムキー!!」

妙な奇声が響き、同時にモモタロスの眉間に何かが直撃した。

「あでっ！何しやがる!?この銀バエ!!」

モモタロスには眉間を押さえながら、自分に蹴りを入れたリインを摘み上げてから睨む。

「リインは今まで『妖精さん』とか『ちっちゃいカワイイ何か』とか言われたですけど、よ、よりによって『ハエ』はなかったです!!」

リインは両肩を上下に揺らして、「ふーふー」と息を乱しながら抗議する。

「センパイ。女の子なんだから『ハエ』はないんじゃない?」

「せめて『蛾』の方がよかつたんとちゃうか?」

「妖精さん』でいいんじゃない?」

ウラタロスがダメ出しをして、キンタロスが別の虫に例えればいいのかは言い、リュウタロスはリイン自身が告げていた『妖精さん』で憶えようとしていた。

誰一人としてリインの本名を訊ねなかったりする。

「リインは……、わたしはリインフォースⅡです!だからハエでも蛾でもないです!!」

摘み上げられている状態から解放されたリインは堂々と胸を張って自己紹介をした。

「あーわーつたよ。銀バ、じゃなかった銀チビ」

訂正したが、『銀バエ』から『銀チビ』になっただけであまり変化はなかった。

無視から人間に進化したと考えればまだマシンだが。

「銀チビじゃないです!リインです!!」

リインとイマジン達のやり取りを見ている者達はというと。

必死で笑いをこらえていた。

イマジンの世界観に引き込まれたら最後、中々出られない事を知っているからだ。

結局、デンライナー一同は翌日から使用できる寮の前でテントを張って野宿という事になった。

なお、夕飯はバーベキューの予定だったりする。

なのはとフェイトの二人は駐車場に足を運んでいた。

「まさか私達まで参加する流れになるなんてね……」

デンライナー一同と別れたなのはは自身の今夜の予定が流れ的に決まった事に苦笑するしかなかった。

「ハナの言うとおり、流されたら抜けられなくなるね」

フェイトも笑みを浮かべて答えた。

「ま、久しぶりに賑やかな夕飯が食べれるのは嬉しいけどね」

なのはも笑みを浮かべて言う。

二人は黒色がメインカラーとなっている自動車です足を止める。

外見は外国車だが、内部構造は日本車となっていた。

前に立つと、フェイトはキーで操作をするとロックを解除する。

フェイトは運転席に、なのはは助手席に乗り込む。

ドアをボタンと閉じると、フェイトはアクセルを踏んで車を発進させた。

「でもフェイトちゃんはよかったの？」

「え、何が？」

ステアリングを握りながら、前を見たままフェイトはなのはに訊ね返す。

「だって十年ぶりに良太郎さんと会えたんだしその……、積もる話もあつたんじゃ……」

十年間待ち続けた末にやっと会えたのに二人は随分と素っ気無いから、なのはは心配をしていた。

「うーん、何て言ったらいいのかなあ。会うまでは色々と話したい事とか聞きたい事もあつただけど、しばらくはいてくれるみたいだから追々聞こうと思ってるしね」

「ふーん。そうなんだあ」

フェイトの言い分に、なのはは異議を唱えるつもりはなかった。

そもそも、今のなのははこの手の分野に関しては説得力のある発言は出来ないに等しい。

「それに良太郎を紹介したい子達もいるしね」

フェイトはそう言いながら助手席側にモニターを展開させて、なの

はに紹介する。

十歳前後の少年と少女だった。

「それってもしかしくなくてもフオワード候補のこの子達？」

「うん。紹介するのは問題ないんだけど、今後に関してはおちよつと心配なんだけどね」

「でも能力的には問題なさそうだし」

「能力とかで心配してるわけじゃないんだけどね」

フェイトは一瞬だが、真面目な表情になっていた。

付き合いの長いのはでも見た事のないものだった。

子供を心配する『親』の表情をしていたのだから。

「私の隊だし、一緒なら少しは安心かなとは思ってるんだけどね」

フェイトのアクセルを踏み込む足の力が強くなった。

自動車が速度を増して、目的地へと向かっていった。

*

ミッドチルダの空港ではエリオ・モンディアルが腕時計を見ながら周囲を見回していた。

(まだかな……)

待ち人は予定時間が差し迫っているの来る気配がない。

正直、こうなると自分が時間を間違っているのではないかと疑ってしまう。

エスカレーターから、桃色の長髪をポニーテールにした女性——
シグナムが上って来た。

「お疲れ様です！私服で失礼します。エリオ・モンディアル三等陸士です」

エリオはシグナムに敬礼した。

その口調はともその年齢相応の子供のものではなかった。

シグナムは一瞬面食らったが、すぐに平静に表情を戻す。

「ああ。遅れてすまない。遺失物管理部機動六課シグナム二等空尉だ。長旅ご苦労だったな」

近辺を見ながら、フェイトに聞かされていた人数より一人足りない事に気付く。

「もう一人は？」

「はい。まだ来てないみたいで……」

敬礼の姿勢を崩さないまま、エリオは表情を暗くしていく。

「あの地方から出てくるとの事で、迷ってるのかもしれない。捜しにいったもよろしいでしょうか？」

「頼んでいいか？」

エリオの申し出をシグナムは笑みを浮かべて任せることにした。

「ルシエさん。ルシエさん！管理局機動六課の新隊員のルシエさん！」

エリオは叫びながら、広大な空港内を同僚となる人物を捜す。

といつても移動しながら顔のわからない人間を叫びながら捜すというのは『人捜し』としては決して賢明とはいえない。

『考える』より先に『動く』が優先されたエリオは『受付に行つてアナウンスで呼び出し』という考えは持っていなかった。

「いらつしやいませんかー！」

エリオはひたすら声を上げて、捜すが何の反応もない。

そのまま駆けて捜しまわる事を続行する。

親子連れやカップル等いろんな人が行き来しているが、それでもエリオは目当ての人物を見つけないことが出来ない。

(もしかして誘拐!?)

管理局員といつても、私服姿で街を歩いていけば民間人と何ら変わりがないのでそのような考えを持つても不思議ではない。

(でも管理局員がそんな簡単に誘拐されるだろうか……)

自身の考えは相手に対してあまりに失礼なのではないかとエリオは考えてしまう。

「ルシエさん!!」

下りのエスカレーター前で呼んでみる。

「はーいいーわたしですー！」

声のする方向に、身体を向けてみるとフードを深く被って両腕で持つのがやっとの鞆を持って危ない足取りでエスカレーターに下っている一人の少女がいた。

「遅くなりましたあー」

少女は謝罪しながらも、下りのエスカレーターなのに駆け下りてくる。

「ルシエさんですね。よかった」

エリオは目当ての人物を見つけることが出来て、安堵の息を漏らす。

「あー」

少女が足を踏み外した。

「!!」

『ソニックムーブ』

エリオが少女を助けなければならぬと判断した瞬間に、腕時計に時刻ではなく『Sonic Move』と表示されていた。

その直後に、エリオの全身は稲妻の如く駆け始めた。

その場にいる人間にはまさに『目にも留まらぬ速さ』というものだった。

進行方向は一直線ではなく、左右の壁に弾かれるようにしてジグザグとしたものだった。

少女のいる場所へと金色の光は向かっていく。

がしつとエリオは少女を掴んだ感触があった。

だが……。

「あー!」

勢いが余ってしまい、そのまま踊るようにして回るが足がもつれてよろけてしまう。

(このままじゃルシエさんが!)

エリオは咄嗟に自分が仰向けに倒れる姿勢を作ろうとする。

それは少女を自身で守る現段階の最良の手段と判断したからだ。

やがて、エリオと少女は倒れてしまった。

ガタンと少女の持っていた鞆が地に伏した。

「あ、ててて。すみません。失敗しました……」

側から見れば少女を助けているのだから充分に成功しているのだがエリオにしてみれば失敗だ。

「い、いえ。ありがとうございます。助かりました」

少女は感謝の言葉をエリオに告げる。

(よかった)

「ん？」

少女はエリオに掴まれている部分を見る。

胸だった。

エリオは『助ける』という目的とはいえ、女性の胸を掴んでいると今になって自覚した。

(わああああああ!! 本当に失敗だああああ!!)

エリオの表情から血の気が失せ始めていた。

(たしか女性の胸を無断で掴んだ男はビンタ等の暴行なら寛大な方だつて……)

自身にどのような仕置きが来るかはわからないが、エリオは覚悟する事にした。

「あ、すみません。今どきます」

少女は特に羞恥心をあらわにすることなく、エリオから退いた。

「い、いいいいえーこちらこそすみません! 覚悟は出来ています!」
「?」

少女はエリオが何を言っているのか理解できなかった。

少女の鞄からモゴモゴと動き出して、それは正体を現した。

「キュー」

白い小型の翼の生えた生き物だった。

(コレって竜?)

エリオにしても確信がないので、下手な事は口に出さない。

「あ、フリードもゴメンね。大丈夫だった?」

「キュー」

フリードと呼ばれた生物は翼をパタパタと羽ばたかせて宙に浮く。

「竜の子供、ですか?」

エリオが耐え切れなくなったのか、気になっていたことを口に出してしまった。

「あの、すみませんでした。エリオ・モンディアル三等陸士ですよね

？」

「あ、はい」

エリオは即座に返事する。

少女は被っていたフードを脱ぐ。

「はじめまして。キャラ・ル・ルシエ三等陸士であります」

少女——キャラは自己紹介しながら敬礼した。

「それからこの子はフリードリヒ。わたしの竜です」

キャラの元に先程の生物がパタパタと舞い降りた。

「キユクー」

フリードリヒはぺこりと頭を下げた。

「行きましよう。ルシエ三等陸士。シグナム二等空尉が待っています」

「はい」

「はい」

エリオはキャラとフリードリヒを連れてシグナムが待機している場所まで向かった。

シグナムのいる場所までキャラとフリードリヒを連れてきたエリオは無事に自身に課せられた任務を完了したとホッとした。

「キャラ・ル・ルシエ三等陸士であります。私服で失礼します！こちらはフリードリヒです」

「キユクー」

キャラとフリードリヒはシグナムに敬礼する。

「ああ。遺失物管理部機動六課シグナム二等空尉だ」

シグナムもキャラとフリードリヒに自己を紹介する。

「テストロッサが予約しているホテルがある。今日はそこで休むといい」

「はいー」

子供二人が元気よく返事を返す。

「ん？もしもし」

着メロが鳴ったので、シグナムは携帯電話を取り出す。

「もしもし、主はやてですか。え、はい。本当ですか!?!……失礼しました。はい。わかりました」

シグナムが何を聞いて突然大声を上げたのかはわからないが、聞き終わると携帯電話を切った。

「シグナム二等空尉？」

「すまないな。古い知人が急にやってきたものでな」

エリオの問いに、シグナムは今までにないくらいの笑みを浮かべて返す。

「……………」

その笑みを二人は見た事があった。

自分達の保護者であるフェイトがある決まった話をする時に、時折見せる笑みだ。

（たしか…………）

エリオとキャロは特に打ち合わせなどをしたわけでもないのに、同じ答えに行き着いた。

野上良太郎。

と。

*

機動六課の寮前ではもくもくと煙が上がっていた。

良太郎、イマジン四体、コハナ、なのは、フェイトがバーベキューをしていた。

一泊過ごすように、テントも張っていた。

「みなさん。できましたよー」

「たくさん焼いておいたからねー」

テントを張り終えて恒例ともいえるババ抜きをしていた二人と四体に、なのはとフェイトが呼びかけた。

ここにいる連中は全員健啖家といってもいいくらいなので、本当に何でも食べる。

その食べっぷりは作った側にしても、『作ってよかった』と思われるには充分なものだった。

モモタロスが牛肉を食べる。

ウラタロスがとうもろこしを食べる。

キンタロスがイカを食べる。

リュウタロスが鶏肉を食べる。

コハナはピーマンやタマネギを食べる。

良太郎は『戦ったからたくさん食べる』という事で皿には肉も野菜もたくさん乗せられていた。

焼き係になっていたなのはやフェイトも皿を手にして自分の分をキープしていく。

もきゅもきゅと皆頬張っていきながら、今度は各々が好き勝手に好みの食材を焼き始めた。

「この食材。どこから買ってきたの?」

フェイトはトングを持って、鶏肉と牛肉をひっくり返ししながら同じく現在は焼き係になっている良太郎に訊ねる。

「……デンライナーの食料保管庫から少々」

良太郎の代わりにウラタロスがボソリと呟いた。

今頃ナオミが保管庫の中身の少なさに驚きの声を上げているかもしれない。

「ん?」

モモタロスが空を仰ぐようにして鼻をクンクンさせる。

「モモタロス?」

良太郎は箸を止めて、臭いをかいでいる仕種をするモモタロスを見る。

「イマジンの臭いがしやがるぜ」

モモタロスの短い一言にチームデンライナーを始めとする雰囲気はがらりと変わった。

夜はまだ始まったばかり。

本格始動

第八話 「初日の夜」

時間を夜から少しだけ夕方へと遡る。

時空管理局本局『無限書庫』ではというところ。

司書長室では、主であるユーノ・スクライアと彼の契約したイマジ
ン、プロキオン（フェレット）時空管理局査察官ヴェロツサ・アコー
スの二人と一匹がテーブルに置かれて

いる盤上のゲームの駒を動かしていた。

「魔導師ランク試験にイマジンが乱入して更に別世界から来た仮面ラ
イダーが撃退、ですか」

ユーノが自分のターンになったので駒を動かす。

「ええ。聞いた時は貴方が撃退したものだとはかり思いましたよ」

「残念ですけど、こここのところは某鬼提督の請求でてんでこ舞いだつ
たので動けなかつたんですよ」

ユーノの目の下には隈ができており、それがどれだけ激務なのかを
物語っていた。

実際こうしてチェスをしていても、ユーノの繰り出す手は本人とは
思えないくらいに単調なものだった。

欠伸を何度もしている。

プロキオンにいたっては思いつきりたれて、テーブルの上でゲーム
の邪魔にならないように爆睡していた。

「では彼等が貴方の言っていた……」

「はい。誰もが認める仮面ライダーですよ」

駒をカタンと盤上に置きながら、ユーノは懐かしさと同時に尊敬が
籠った眼差しで口を開いた。

ヴェロツサはユーノが他者に素直に敬意を払う感情を表に出すの
を初めて見た。

この二人、このようにゲームをするまでに友好を深めるのにかかつ
た日数は約二ヶ月と意外に短い。

「今月に入つてのカードの消費枚数は一枚ですよね？」

「ええ。出撃した後はアルフとプロキオンにチェックされてますから……」

ユーノは五年前から仮面ライダーANOTHERゼロノス（以後：Aゼロノス）に変身できる。

その変身システムは『ゼロノス』と称されるように、ゼロノスカードを用いて変身する。

その消費代価は桜井侑斗が変身する仮面ライダーゼロノス（以後：ゼロノス）同様に『自身に関する記憶』である。

かれこれ、彼は五年も使っている。

それだけイマジンが出現したという証明にもなる。

せめてもの救いは『記憶』の定義づけだろう。

この『記憶』の定義は『顔と名前が一致している』はもちろんの事、『顔は知っているが名前は知らない』や『顔は知らないが名前は知っている』も『記憶』として定義づけ

されている。

といっても五年も使っていればその甘い定義でもそれなりに失われるものがある。

現に彼は自分の故郷ともいえる『スクライア族』には戻っていない。

何故なら彼を憶えている人物が一人もないからだ。

「これで貴方に関する事を忘れる人の数が少しは緩まるといいのです
が……」

変身代価が金銭では到底支払う事の出来ないものだという事を
知っていないなければ言えない台詞をヴェロツサは吐く。

「お気遣いありがとうございます。でも変身して戦うと決めた時から
覚悟はしていますので、あまりお気になさらないでください」

ユーノはヴェロツサの気遣いをありがたく受け取ると同時に、自身
の意思を表示する。

「今の僕を見たらあの人達はどう思うのかな……」

ユーノにしてみれば自分がAゼロノスになって戦う事になったの
は決して自慢げに告げられるようなものではない。

動機が動機なのだから余計にだ。

(僕の大元の動機は『護る』ための戦いじゃなく『復讐』の戦いだからね)

思い出すだけでも、抑え付けている怒りの炎が燃え上がってくる。

「スクライア先生」

「すみません……」

ヴェロツサに呼び止められてユーノは我に返って謝罪する。

それでも彼の怒りの炎が治まるのはもう少し時間がかかるとヴェロツサは判断した。

同時に今のこの姿を、八神はやて達には到底見せられないと確信した。

司書長室に設置されているイマジン出現警報機が鳴ったのはそれから三時間後の事だった。

*

機動六課の寮入口前では高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、コハナは後片付けをしていた。

「ねえなのはちゃん、フェイトちゃん」

コハナは紙皿をゴミ袋の中に放り込みながら、グリルを洗浄している二人を見る。

「どうしたの？ハナ」

「ハナさん？」

コハナが神妙な表情をしているので二人は顔を見合わせる。

「良太郎達ってここまでの地図って持ってたかしら？」

コハナの一言で、なのはとフェイトのグリルを洗浄する手は止まった。

「だ、大丈夫ですよ！モモタロスさんがいますし！」

なのはは十年前と同じ様に、コハナに対して敬語で話している。

「モモの鼻ってイマジンの臭いしか鋭くならないのよ」

「あ……」

コハナの指摘に、なのはは思い出して間抜けた声を出す。

「だったらデネブを連れてきたら……」

「モモって身内と判断したイメージの臭いはかぎ分けのないのよねえ」
フェイトの案にも、コハナはダメだしをする。

「良太郎達はここまで帰って来る方法って……」
「手探りしかないわね」

風が三人の頬を舐めるように吹いた。

春なのに、冷たかった。

桜井侑斗とデネブは、はやととリインの案内で八神家へと案内され
ていた。

リビングのソファで座っている侑斗は気を紛らわせる為に、テーブ
ルの上に置かれている新聞を手にする。

ちなみにデネブは、はやとと雄藩の献立を考えている最中だ。

ミッドチルダの言葉で書かれており、侑斗がわかるはずもなく畳ん
でテーブルへと戻す。

天井を目的もなくボーっと見ていると、何かが視界を遮ってきた。

大の字になっているリインだった。

「何だよ？」

侑斗でなくても大の字になって視界を遮ってきたらそのように訊
ねたくなるだろう。

「貴方がはやとちゃんが言っていたユウトさんなんですか？」

リインが確認するかのように侑斗の顔を見る。

「八神が言っていたってのはどういう意味だよ？」

リインの言い回しが気になるため、侑斗は回答を急かす。

「はやとちゃんは言っていました。ユウトさんは愛想もなくて意地悪
で椎茸が大嫌いな人だって」

リインがはやとが自分に言っていて聞かせた事をそのまま告げた。

「あいつ、そんな事を言っていたのか……。他には何か言っていなかっ
たか？」

「えーとですねえ。後はとても思いやりがあつて優しい人だって言っ
てましたあ」

リインの一言に、侑斗は照れたのか天井を仰いでいた。

「優しい、か……」

侑斗は呟いてから、キッチンでまだ献立を考えているはやてを見た。

「お前の主の方が優しいさ。いや、八神のは『優しい』じゃなくて『懐が深い』んだろうな」

「深いですか？」

「ああ。お前の主はどんな辛い現実も受け止められる奴なんだぜ。それが他人の事でも自分の事のようにな」

現実を受け入れるという事がこの世の中で最も大切で最も人が背きたくなるものだ。

「他人の事ってのはわからないです」

リインは首を傾げる。侑斗の言っている事が理解できていないのだろう。

「自分以外の人間にも辛い事の一つや二つはあるだろ？ それを知ったら大抵は同情と憐れみで終わりだ」

侑斗のはやてを見る表情が優しくなっていた。

「でも八神はそういう事実を知っても同情や憐れみではなく、対等に付き合うんだ。コレってなかなかできることじゃないんだぜ」

「まるでユウトさん自身のことを言っているみたいですよ」

リインは侑斗の言っている事が、まるではやてが侑斗にした事のように解釈できたしそれが正しいものだと思っている。

「八神（あいつ）には言うなよ。調子に乗るかもしれないからな」

侑斗はリインにそう告げると、ソファに寝転がる。

「夕飯が出来たら言ってくれ」

「了解です♪」

侑斗の頼みの言葉にリインは敬礼して快諾した。

キッチンでは、はやてとデネブが夕飯に取り掛かりながらリビングにいる侑斗とリインのやり取りを見ていた。

「リインと侑斗さん。何を話してるんやろ？」

はやては澄まし汁を焚きながらチラチラと気にしていた。

「後で侑斗かりインに聞いてみたら？」

デネブが本日のメインである鯛を刺身にしていた。

相変わらずごつい手だが包丁捌きは玄人裸足である。

「どうやろなあ。侑斗さんは絶対に話さへんしラインがポロツと言うのを待つしかないかなあ」

澄まし汁をおたまで掬って、小皿に垂らして味見をする。

「よっ♪」

はやては自信作だと確信してから、もう一度おたまで掬って小皿に乗せてデネブに渡す。

それはまるで「私の十年の成果を見せるときが来たで」といわんばかりだ。

小皿を受け取った瞬間にデネブは、はやての意図を理解した。

「八神……」

受け取った小皿とはやてを交互に見ながら、デネブはこの挑戦を受ける事にした。

デネブにとってははやては『友人』であるが、同時に料理に関しては『ライバル』でもある。

しかも『最大』という言葉がついている。

温厚であり他人と競うという事が、野上良太郎と同じくらいに似合わないデネブが初めてライバル心を剥き出しにしている。

それだけ、はやての料理の腕が凄いという事になる。

小皿に乗っている澄まし汁をデネブは飲む。

「!!」

デネブの反応を見て、はやては「やった!」と小さくガッツポーズを取る。

「八神。俺の切った刺身を食べてみて」

デネブが小皿に醤油を入れてから、促されてはやては箸で掴んで鯛の刺身を一つちよんちよんと醤油につけて食べてみる。

「!!」

はやては先程のデネブと同じ反応をしていた。

この瞬間、一人と一体は同じ考えをしていた。

(腕を上げてる!!)
と。

夕飯を終えた侑斗は風呂場の掃除をしていた。
床を洗い終えて、湯船を洗う。

以前の八神家でも庭の草むしりと新聞受けに入っている新聞を取る事と風呂掃除は侑斗の仕事だった。

洗剤とたわしを用いて綺麗に掃除する。

「侑斗さん」

背後からはやての声が出た。

「風呂ならまだだぞ」

侑斗は振り向くことなく、現状を告げる。

「わかってるて。そんなん」

はやては去ろうとしない。

侑斗はたわしを使ってゴシゴシと湯船を洗う。

「で、何だよ？」

「何だよって用があらなここにいたらアカンの？」

はやての声に怒気が含まれる。

「面白いものでもないだろ。人が風呂掃除してる姿なんて」

侑斗の手は止まっではない。

「それを判断するのは私次第やで」

はやてはやんわりと反論する。

水道の蛇口を回してシャワーから水が出る。

湯船に付着している泡は綺麗に洗い落とされていく。

「手際ようになってるね」

はやては侑斗の清掃作業を素直に褒める。

「お前に散々しごかれたからな」

侑斗が初めて八神家の風呂掃除を任された時に、はやては徹底的に侑斗をしごいたのだ。

その時侑斗は文句をぶちぶち言いながらも、こなしたりする。

つまり風呂掃除においては、この二人は師弟にもなったりする。

掃除を終えて蛇口を閉めると、侑斗の背中に今までにない感触があった。

人の感触だった。

柔らかい感触——はやてだった。

はやてが侑斗に抱きついているのだ。

侑斗はチラリと見てみるが、はやての顔は見えないが全身が震えているようにも見えた。

「……泣いてへんよ」

くぐもった声ではやては侑斗が何かを言う前に先手を取った。

「八神？」

「十年もほったらかしにした人が急に來たからって泣いてへんもん！」

侑斗が何かを言う前に、はやてがまたも言う。

はやてが泣いている事はわかる。

それを茶化す気は侑斗にはなかった。

「ああ……。泣いてないな」

侑斗は、はやてを立てるようにして穏やかに言う。

自分をしっかりと掴んでいるはやての手を見る。

それは「もうどこにも行かないで」とか「やっと会えた」と物語っているようにも見えた。

はやての嗚咽が風呂場を支配していたが、それを遮ろうとする者はいなかった。

*

ミッドチルダの夜は眠る事を知らないのか、ビルの照明等は点灯しているままだった。

それらの光は天空に輝く星々に挑戦するかのようにも思える。

道路には車は殆ど走っていない。

「そのイマジン。待ってください！」

楕円型の機械兵器を引き連れて逃亡している一体のセミ型のイマジン——シケイダイマジンプロキオンの声が呼び止めようとする。

『わかってた事だけど、逃げてる奴に『待て』って言っても止まってくれないね』

白いロングコートのプロキオンクロークを纏った青色がメインの

仮面ライダーゼロノスに酷似した仮面ライダーがビルの屋上で見下ろしていた。

プロキオンが主人格となっている仮面ライダーANOTHERゼロノスシリウスフォーム（以後：Sゼロノス）だ。

ちなみにSゼロノスにダメ出しをしたのは、深層意識の中にいるユーノだ。

シケイダイマジンもSゼロノスを見上げている。

「貴方にはその機械兵器をどこで手に入れたのかを教えてくださいませ」

ビルの屋上から道路へと飛び降りて着地する。

プロキオンクロークがなびくが、すぐに元に戻る。

「お前、『青い狩人』か!?!」

シケイダイマジンも次元世界のイマジン。自分達の『天敵』とも呼べる者の通り名くらいは知っている。

叫びながらも、両腕からフリーエネルギーで構築された二本の爪を出現させる。

Sゼロノスも応じるようにして、両腕からフリーエネルギーで構築された三本の爪——プロキオンクロークを出現させる。

両者共に中腰になって構える。

「シャアアアアアア!!」

シケイダイマジンが吠えながら、間合いを詰めると同時に右腕を振り上げて一気に下ろす。

（プロキオン！）

「はー!」

Sゼロノスは避けようともせず、シケイダイマジンの右腕を左腕で受け止める。

すかさず右腕を掬い上げるようにして繰り出す。

「!!」

素早くそして威力のあるアッパーだと瞬時に判断したシケイダイマジンは仰け反るようにして避ける。

だが三本の爪による傷痕は体に残っていた。

小さく火花がバチツと飛ぶ。

「ぐっ！」

シケイダイマシンが苦悶の声を上げるが、Sゼロノスが攻撃をやめる事はない。

「はああっ!!」

左足を軸足にして、右中段回し蹴りで左脇腹を狙う。

「ぐっ！」

右手で左脇腹を押さえて痛みを必死でこらえながらも、左爪で反撃を繰り返すがSゼロノスはすかさず後方へと退がる。

「あの機械兵器、イマジンを味方するつもりはないようですね」

(関係は僕が思っているのと逆かもしれないね)

ユーノの予想では機械兵器がシケイダイマシンを護っていると考えていた。

だが実際にはシケイダイマシンが機械兵器を護っていたのだ。

(となると、あの機械兵器にはそれだけ価値があるって事かな……)

「どうします?」

(イマジンは確実に倒そう。機械兵器は管理局が何とかしてくれるかもしれない……)

他力本願は主義に反するがイマジンと機械兵器、天秤が傾くのはイマジンだ。

両腰に収まっているデュアルガツシャー(以後:Dガツシャー)のバレットモードのグリップ(以後:バレットグリップ)を握って、その下に収まっているDガツシャーの

パーツに連結してから素早く引き抜く。

Dガツシャー・バレットモード(以後:Dバレット)を構えてからそして引き金を絞る。

一直線に六本のフリーエネルギーの光線がシケイダイマシンに向かっていく。

六本の光線をシケイダイマシンは両腕をクロスして防ぐ。

両腕から煙が昇るが、見た目ほどダメージを負ってはいない。

Dバレットの光線は数が多いが一発の威力は決して高くない。

致命傷を負わせるには少なくとも十倍の数をかさねなければならぬ。

Dバレットをだらりと下げてから頭上へと手放す。

宙に浮かぶDバレットを視界に入れて素早く、ダガーモード時のグリップ（以後：ダガーグリップ）を逆手に握る。

Dガツシャー・ダガーモード（以後：Dダガー）へと切り替える。

デンガツシャーやゼロガツシャーのようにパーツの組み換えをせずにモードチェンジすることができるのが、Dガツシャーの特徴だ。

前に構えてから、一気に間合いを詰める。

先程とは段違いの速度なため、土煙が舞う。

「!!」

双刃を掬い上げるようにして切り上げる。

ガキンつと爪で防ぐ。

「ぐぐぐぐぐ……」

シケイダイマジンに精一杯力の限り、拮抗状態に持ち込もうとする。

「てえええい!!」

Sゼロノスの両脚が一步一歩進んでいく。

『歩き』からやがて両脚は『走り』に切り替わる。

「ぐおおおおおお!!」

必死で抵抗するシケイダイマジンだが、ずるずると道路が削りながら退がってしまう。

「がつー!」

ビルの壁に背中を打ち付けられる。

強く打ち付けられた痛みが全身を襲い掛かるが、単純な力比べに負けたことによる悔しさの方がシケイダイマジンを支配していた。

反撃を繰り出される前に、Sゼロノスは間合いを開ける。

「もう一度お訊ねします。あの機械兵器と貴方との関係は?」

「さてね。てゆうか俺はあの機械兵器がある場所まで運ぶように言われただけだぜ。関係も何もねえよ」

「どう思います?」

Sゼロノスはシケイダイマジンの言葉の真意を深層意識のユーノに訊ねる。

(ウラタロスさんみたいに頭が回るようなイマジンには見えないね。嘘は言っていないと思うよ)

ユーノとてこの五年間、イマジンと何度も^{わた}渉り合っている。性格のようなものは何となくではあるがわかってきている。

(もう一つ聞いてみたいことがあるから聞いてみて)

「何ですか？」

(運ぶように指示したのは誰って事だよ)

「わかりました」

ユーノの指示を聞いてから、Sゼロノスはバレットグリップからダガーグリップへと持ち替えてモードチェンジする。

「最後に一つだけお訊ねします。貴方にあの機械兵器を運ぶように指示したのは誰ですか？」

「変な服来た女と金髪の優男だったぜ」

ここまで喋るといふ事はこのイマジンに契約者はいないという事になる。つまり『はぐれイマジン』だ。

壁にめり込んでいた身体を起こして、シケイダイマジンにSゼロノスを睨んでから向かっていく。

はぐれイマジンであるからこそ、依頼主の事をペラペラ喋ってもプライドに傷がつくことはない。

しかし『力』とりわけ『暴力』が支配するのがイマジン社会であるため、コケにされたとなつては生きていけなくなる。

自身のイマジンとしてのプライドを誇示するためにも、あらん限りの力を振り絞って、Sゼロノスに向かっていく。

Dダガーを縦に連結して、Dガツシャー・ランスモード(以後：Dランス)へと変える。

ゼロノスベルトのフルチャージスイッチを押す。

『フルチャージ』

機械音声が発した直後に、ゼロノスカードを引き抜いてからガツシャースロットへと挿入する。

Dランスの刃にバチバチバチと青色のフリーエネルギーが充填されていく。

そして、横に放り投げる。

Dランスはプロペラのように回転していきながら、シケイダイヤモンドに向かっていく。

上刃が腹に触れ、すぐに下刃が同じ箇所を狙いをつける。

火花が飛び散り始め、やがて斬撃箇所は肥大していき上半身と下半身が真つ二つへとなった。

斬られた二つの部位から火花が噴き出る。

「き、斬られてるうううう!!」

シケイダイヤモンドは原型を耐えることができずに、爆発した。

爆煙がミッドチルダの漆黒の夜へと昇っていった。

投げつけたDランスを右手でキャッチする。

(逃げていった機械兵器を追いかけるよ)

「はいー!」

Sゼロノスは右足を強く踏み込んで跳躍する。

夜空へと翔けた。

『青い狩人』の狩りはまだ終わっていない。

イマジンの臭いを辿って街中へと足を踏み込んだチームメンライナーはというと。

「臭いが消えちまったぜ……」

夜空を仰ぐようにしてイマジンの臭いを嗅いでいたモモタロスの足が停まった。

「消えたって事はそのイマジンは……」

「倒されたって事になるよね」

野上良太郎の台詞をウラタロスが繋げた。

「となると俺等がここに来た人は無駄骨やったんかもしれんなあ」

キンタロス腕を組んで、結果を言う。

「じゃあ帰ろうよ。僕お腹すいたしー」

リュウタロスが両手で腹部を擦って、空腹をジェスチャーする。

「あ……」

「どうした？良太郎」

間拔けな声を上げた良太郎をモモタロスは彼を見る。

「僕達ってどうやってここまで来たわけ？」

「オメエ、何言ってるんだよ。俺が臭い嗅いでここまで来たんじゃねえか」

「キンちゃん。地図もらった？」

「リュウタ」

「持ってないよー」

冷たい風が一人と四体の頬を舐める。

「「「……………」」」

その場にいる全員が自分達が置かれている状況を理解した。

地図一枚持っていないので、帰り道が完全にわからなくなってしまうのだ。

「アレ、何だろ？」

リュウタロスが指差す方向にはドーム状の何かが出現していた。

ドーム状の魔法結界が都市の一部を覆っていた。

緑色のベルカ式の魔法陣を展開しながら、シヤマルは結界内の状況を念話の回線を開いて、追跡を行っている一人と一匹に伝えていく。

意識を集中するため、双眸を閉じている。

(ザファイラ、追い込んだわ。ガジェットI型、そっちに三体！)

シヤマルの閉じていた双眸が開かれた。

それはボードゲームでいう『詰み』になったという意味になる。

機械兵器——ガジェットI型が三体逃げていた。

ギョロリと中央のカメラアイが動き、正面に何がいるのかを把握しようとする。

正面にいたのは青色が目立つ大型の狼——ザファイラだ。

「テヨワアアアアアアアアアアアア!!」

ザファイラの咆哮が響く。

咆哮自体に効力はない。

これは相手に魔法を発動させる事を気取らせないための略式だ。地面が抉れ、白光の柱が無数に出現する。

その内の一つがガジェットI型に貫通していた。
許容範囲のダメージを受けた為に、爆発する。

残り二体は躊躇わずそのまま逃走を続ける。

「てやああああああああ!!」

武装隊アンダースーツを着用しているヴィータがグラーフアイゼンを振りかぶって突っ込んできた。

一体をハンマーで捉えると、そのまま壁に叩き込む。

(手答え、あり!)

地面に着地すると同時に確実に致命傷へと持っていった感触があったとヴィータは感じたので、そのまま残り一体を追いかけることにした。

ガジェットI型はブスブスと煙を立てながら爆発した。

爆煙の中を残り一体のガジェットI型突き抜けてそのまま空へと避難するように、飛翔する。

ザフィーラとヴィータは目が合う。

ザフィーラは無言で首を縦に振り、ヴィータは足場を大地から宙へと切り替える。

「アイゼン!!」

ヴィータはグラーフアイゼンを叫ぶ。

『シユワルベフリーゲン』

グラーフアイゼンが主に応えるようにして、ヴィータの左掌にゲートボールより大きい鉄球を出現させた。

左手で受け取ってから、軽く上に投げてグラーフアイゼンのヘッドで叩き込む。

鉄球は紅色の魔力を帯びて、ガジェットI型に向かっていく。

ガジェットI型は防御の為にAMFを展開するが、魔力を防ぐ事は出来ても鉄球そのものの威力は消す事は出来ない所以で侵入を許してしまい、身体をぶち抜かれた。

空中で爆発を起こして爆煙が立つ。

「片付いたか?」

「シヤマル、残りは?」

ザファイラとヴィータが残っているガジェットI型の確認をする。

「残り一体。あ、残存反応はなくなったわ」

(なくなった?どーいう意味だよ)

シャマルの妙な実況に、念話の回線を開いていたヴィータは訊ねる。

「残りの一体は仮面ライダーが破壊したからよ」

(『青い狩人』が?まだいる?)

シャマルの探査魔法ではイマジンはもちろん、仮面ライダーも捜す事は可能になっている。

(イマジンを倒してそのまま追いかけてきたってところかしらね)

Sゼロノスが結界内でガジェットI型と交戦している経緯をシャマルは予想した。

その予想はまさに正解だったりするがそう証明してくれる者はここにはいない。

(シャマル。アイツの場所はわかる?)

ヴィータが場所の催促をしてきた。

「ヴィータちゃんとザファイラのいる距離からなら時間にして二分くらいで辿り着けるわよ」

(わかった。アイツには聞きたい事が山ほどあるからな!)

ヴィータはそれだけ言うと、念話の回線を切ってきた。

「ふう……。正直身内に隠し事をするのは疲れるわね」

現在八神家の中でAゼロノスの正体を知っているのは彼女とザファイラだけだ。

シャマル自身、ここまで正体が隠蔽できるとは思わなかったというのが本音だ。

ユーノが立ち上げた『プランAZ』は長くて半年くらいで頓挫するものだと勘繰ってたのだ。

だが実際には四年ももってしまっている。

(こうなると、明るみになった時の後が怖いわね……)

シャマルはこのままやり通せるとは思っていない。

「覚悟は決めておきましょう」

自身に言い聞かせるようにシヤマルは告げた。
敵もいなくなつたので、結界を解いた。

ガジェットI型を破壊したSゼロノスは中身をこじ開けていた。
イマジン一体を護衛に使っているほど価値があると考えている以上、何かを組み込まれているのではと推測する。

わざわざ爆発させずに破壊したのもそのためだ。

「ありませんね。イマジン一体を護衛に使うほどの価値あるものは……」

Sゼロノスは細心の注意を払いながら、部品を丁寧にバラしている。

（僕がこう思うように仕向けたのかもしれないね。相手は……）

「だとしたら、僕達はムダボネをしたんですか？」

（イマジンを倒しただけでも充分さ）

沈みがちな声で言うSゼロノスを深層意識のユーノが励ます。

「オイ。Aゼロノス！」

「ん？」

頭上から声がしたので見上げるとヴィータが夜空から見下ろしていた。

素早く地上に着陸してグラーフアイゼンを右肩にもたれさせながら、歩み寄る。

「イマジン退治の専門家がガジェットの分解つてのはどういう見だよ？」

「イマジンとこの機械が一緒に行動していたんです。しかもイマジンを護衛するのではなくイマジンがこの機械を護衛していたので……」

「それで中身をバラしてイマジンが護るほどの価値があるものを物色中ってか？」

「はい」

ヴィータの質問にSゼロノスは素直に答える。

「で、あつたのかよ？」

ヴィータの問いにSゼロノスは首を横に振る。

「ふーん。ならば、あたしの質問に答えてもらおうか？」

Sゼロノスが立ち上がって、ヴィータを見る。

ヴィータの表情は『質問』の前に『職務』という熟語がついているものだった。

「答えないと言ったらどうします?」

「その時は、少々手荒になるけど局にまで来てもらう事になるぜ」

(一つだけ適当に答えたら、さっさと退散するよ)

ヴィータの言葉に、深層意識のユーノはSゼロノスに指示を告げた。

「あたしがまず最初に聞きたいのはな、オマエ何者だよ? どーみても侑斗達の世界から来たとは思えねーんだよ。局のことやらイマジンの出現地点にピンポイントで現れる

手際のおよさとかから見てもな」

グラーフアイゼンを突きつける。

ヴィータとてそれなりに推測や仮説は立てていた。

だが自分の性分に合わないことや理路整然としているシャマルやザフィーラに比べると、単純思考であることもあるため大つぴらにはしなかった。

「詳しい説明は出来ませんが、一つだけ答えられることがあります。

僕は貴女の言うように桜井侑斗さん達の世界からは来ていません」

「てことは他の別世界から来たつてののか!？」

ヴィータの言う『別世界』とは次元航行艦で行き来できる世界とは違う。

まさに、時空管理局の技術では行き来できない完全な別世界の事だ。

「いえ、僕達はこの世界の住人ですよ」

「ここまでは答えても差し支えないことだ。

(コイツ。肝心なところは全部はぐらかしてやがる……)

自分よりも一枚も二枚も上手の存在だとわかっただけでもヴィータとしては上出来だと思ふ事にした。

「それじゃ僕はこれで、あと八神はやてさんにプレゼントを贈りましたので」

頃合を見計らっていたSゼロノスは足場を浮かせて、そのまま夜空へと翔けた。

それから五分後。

二人と一匹が合流すると、ガジェットI型の残骸とAゼロノスの事について話し合っていた。

「どう？何か聞けた？」

「ダメ。あたしじゃ全く相手に出来ねーよ」

シャマルにとってヴィータの反応は予想通りだった。

「奴は何か言っていたか？」

ザフィーラが更に問う。

「はやてにプレゼントを贈ったって言ってた」

ヴィータの答えに、シャマルとザフィーラは顔を見合わせて首を縦に振る。

静かになろうとした雰囲気を着メロが鳴った。

ヴィータはアンダースーツのポケットから携帯電話を取り出す。

「もしもし。なのはか。どうした？うん、え、ああわかったよ。すぐに見つけてそつちに届けてやる」

短く告げるとヴィータは、携帯電話を切った。

「どうした？」

「ヴィータちゃん？」

「シャマル、ザフィーラ。もう一仕事できた」

仕事の割にはヴィータの全体から緊張感がなくなっていた。

「別世界から来て早々に迷子になったバカ達を捜すぞ」

仕事の内容を聞いた途端に、シャマルとザフィーラの緊張の糸も切れた。

迷子になったチームデンライナーがヴィータ達に発見されるのはそれから五分後の事である。

第九話 「災害を屠りし者」

未開の地でイマジンを倒しに行くと思卷いたが、頼りであるイマジンの臭いが途絶えてしまい迷子になってしまったチームデンライナーはというと。

ヴェータ、シャマル、ザファイラ（獣）に保護されて無事に機動六課の寮前まで送られていた。

「あたしは正直、今まででこんな情けない仕事をした事ねーよ！良太郎！お前がいながら迷子になんかなくてんじゃねーよ!!」

腰に手を当てて強制的に正座をさせられているチームデンライナーは全員が顔を俯いていた。

ヴェータの言い分に誰もが反論できないからだ。

「……弁解のしようもありません」

代表で野上良太郎が呟くだけだった。

ちなみにイマジンと遭遇して倒したとしても、地図を所持していない彼等は同じ末路を辿っていたりする。

どちらにしてもヴェータの説教を食らっていたという事になる。

「あの、ヴェータちゃん。地図を渡し忘れた私やフェイトちゃんにも落ち度はあるんだし……」

「もうそれくらいでいいんじゃないかな……」

高町なのはとフェイト・T・ハラオウンがヴェータを宥めようとする。

「二人とも甘えーんだよ！叱る時に叱つとかねーとまた何やらかすかわかんねーんだからな!!」

ヴェータはある意味尤もな事を言う。

それはそこそこに付き合いのあるからこそわかる事だ。

「まあこれ以上、説教してもしようがねーからこれで終わりにしてやるよ」

ヴェータもこれ以上はただの粘着質的な嫌味になりかねないので終わりにすることにした。

（一回の説教でどうにかなるほどのタマじゃねーしなあ）

正座しているイマジン達の中で、自分を刺すように見ている視線があった。

(コイツは十年経ったにも変わらず……)

あれから十年経ち身体の成長はないが精神は成長していると自負している自分だが、モモタロスのこちらを睨むような表情を見るとどう何かが湧き上がってくる。

「オイ、赤チビ。説教終わったんだったら俺達は寝るぜ」

モモタロスには痺れた足でフラフラと立ち上がろうとする。

「十年経ってもその呼び方変える気はねーみてーだな。赤鬼……」

「テメーは見てくれも中身も変わってねーじゃねーかよ。赤チビ」

互いの額に青筋が浮かび上がって、睨みあっている。

「テメエ……」

「潰す!!」

それでも睨みあっている一体と一人。

互いに手が飛んでこないだけマシだとそこにいる誰もが判断すると、正座をしていた残りの面子もゆっくりと立ち上がって寝る準備を始める。

それぞれが寝袋を手にしてテントに入り込む。

「センパイもいつまでもヴィータちゃんと睨みあってないで、さっさと寝たら?」

ウラタロスがモモタロスに向かって寝袋を投げつける。

手前で寝袋はボスツと落ちる。

互いに興ざめたのか、背を向ける。

「命拾いしたな。赤鬼」

ヴィータはこの成行きを見守っていたシャマル、ザフィーラと共に八神家へと戻っていく。

「ケツ。次こそはテメエの頭をエビフライにして食ってやるぜ」

モモタロスは寝袋を手にしてテントの中へと入っていく。

互いに笑みを浮かべながら。

テントの中に入って眠りをつこうとしている良太郎だが、キンタロスのいびきのせいで眠りにつけなかった。

寝袋から抜け出して、テントから出る。

外は変わらず夜であり、気温も少しだけ下がっているのか肌寒さを感じた。

機動六課の隊舎前まで気晴らしに散歩をする。

「ん？」

人影が見える。

(この時間帯で？誰だろ?)

姿がハッキリ見える距離まで良太郎は歩む。

そこにいたのはフェイトだった。

「フェイトちゃん」

「良太郎？寝てたんじゃなかったの？」

背後から声をかけられ、フェイトは驚きながら振り向くがすぐに平静へと表情を戻す。

「中々寝付けなくてね」

「来て早々大変だったもんね」

フェイトの言い方は『迷子』か『イマジンとの戦闘』のどちらかを判別するのは難しい。

「……まあね」

良太郎としても曖昧に答えるしかなかった。

立ちっ放しも正直疲れるので、二人は自然とその場に座る。

「僕達ってこれからどうなるの？今までみたいにはいかないってのはわかるけど」

「うーん。昔のなのは様に民間協力者って事になると思うよ。良太郎達の事を知ってる人達って限られてるからね」

「限られてる？」

「うん。義母さんやレティ提督が良太郎達の事を事件関係者以外には口外禁止にしているからね」

「リンディさん。気を遣ってくれたんだ」

「本来なら世界を二度救ったのは良太郎達だから、色々褒賞も与えられるはずだったんだけどね」

「僕達の都合でそうもいかなかったわけだしね」

二度に亘って救ったといっても全ては十年前の時間でのことだ。タイムパラドックスを考えて良太郎達は自分達がその時間にいたという『足跡』は極力残さないようにしていた。

そのため、『P・T（プレシア・テスタロッサ）事件』と『闇の書事件』の記録には良太郎達の存在は全く記載されていない。

彼等の存在は事件関係者の『記憶』の中でしか存在しないのだ。年月が経ち、自身のした事により代価を得るようになってからはこの『知られていない英雄』扱いが不憫でならなかった。

今の自分達を救ったのは間違いなく隣にいる彼を始めとした者達なのだから。

「六課絡みの事件ならこれからも良太郎達の名前は出さないようにするけど、あまり期待はしないでね」

「火のない所に煙はたたないってヤツ？」

「うん。どんなに隠蔽をしてもやっぱり隠しきれるものじゃないからね。そうなると思し訳ないけど……」

「それなら仕方ないよ。そっちの顔を潰してまでやってもらうわけにはいかないからね」

フエイトが申し訳なさそうに言い、良太郎としては了承の返事はしておいた。

彼としては『八月』までは何とか誤魔化してほしいというのが本音だ。

（それでも上手くないのが『時間』だけどね……）

人の力で『改竄』や『修正』を行ったとしても、それを上回るのが『時間の流れ』というものだ。

もはや自然脅威みたいなものであり、中途な考えを持って関わると悲惨な結果になるのはわかりきっているものだ。

良太郎は両手を後頭部に組んで、その場で寝転がる。

フエイトもつられて横で寝転がる。

「綺麗……」

夜空には満天の星が光っていた。

「侑斗が見たら喜ぶかもね」

フェイトの感想に良太郎は多分一番喜ぶ人物の名を挙げる。

「ミッドチルダで生活してそれなりになるけど、こんな風に夜空を見たのは初めてだよ」

フェイトの瞳には夜空が美しく輝いていた。

それは決してプラネタリウムで拝めるものではなかった。

「僕だって自分の世界で寝転がって夜空なんて見上げた事はないよ」

良太郎の瞳にも、今は満天の星空しか映っていなかった。

「綺麗だね」

「うん」

良太郎の感想にフェイトは頷いてから、起き上がって上着のポケットから懐中時計を取り出して時刻を見ていた。

「もうこんな時間だ。良太郎、私そろそろ帰るね」

「その時計ってもしかして……」

良太郎も起き上がりながら、フェイトが持っている懐中時計に目がいく。

「うん。十年前に良太郎がくれた物だよ」

「うん。あ、それ持ってきてくれたんだ」

十年前の時間で、良太郎がハラオウン家へ養子に行く祝いとしてプレゼントしたものだ。

大切に扱ってくれた事を良太郎は嬉しかった。

「私の宝物だもん。絶対に手放さないって」

自信を持って胸を張ってフェイトは豪語する。

「あとね」

フェイトは良太郎の正面に立って、視線を向ける。

その視線から良太郎は逃げようとは思わなかった。

「私の気持ちは十年前と変わってないからね」

そう言うと、フェイトは背を向けて自身の住居先へと戻っていった。

「……………」

良太郎はフェイトの言葉を脳裏で反芻していた。

「おやすみ。良太郎。これから頑張ろうね」

フエイトは一度振り向いてそう告げてから歩き出した。

「これから……か。色々起こりそうだな」

良太郎は自身に何かが降りかかるのではないかと予想していた。

できるなら降りかかってほしくはないなあと思うが、やっぱり降りかかってしまいうんだろうなあとも。

*

翌朝となり、外が騒がしかった。

「ん……」

目覚まし時計がないので、喧騒が代わりとなる。

「よお起きたかよ。良太郎」

既に起きていたモモタロスが声をかけてきた。

「外が騒がしいんだよ。ま、立派な建物の前にテント張ってたら見に来たがるってのはわからなくはないけどね」

既に起きているウラタロスが騒がしい原因を説明してくれた。

「それにしても皆同じ格好してるで」

日頃は誰よりも寝ているキンタロスが珍しく起きていた。

「何かうるさいなあ。良太郎あいつ等やつつけていいーい？」

喧騒に苛立ちを感じているリュウタロスは武力行使をしようとしていた。

「だ、ダメだよ！リュウタロス。そんな事したら僕達ずーっとテント暮らしになっちゃうよ」

「じゃやめる」

良太郎の最悪の予想をリュウタロスは想像してあっさり武力行使を断念した。

「とりあえず、みんなはテントの中に入れて。僕が様子を見てみるよ」

そう言うと同時に良太郎はテントの外を出る。

そこには陸士隊服を着用している数十人の男女がいた。

自分がテントから出たことで半歩ほど全員が下がったように思えた。

(この感じからして僕達の事を知らないんだ)

知っているならもつと違う反応をしていたらだろう。

「良太郎」

別のテントからコハナが出てきた。

今まで出てこなかったのは着替えていたからだろう。

「ここにいる人達の反応からして私達の事を知らないって見た方がいいのよね」

コハナは自身を認めさせるように言う。

良太郎は首を縦に振った。

隊舎前で人だかりが出来ており、かき分けながらスバル・ナカジマとティアナ・ランスターはその原因を自らの目で見ようとしていた。

「二あ」

その原因が何なのか二人は瞬時に理解した。

「ティア。あの人……」

「野上さんよね。てことはテントの中に仲間のイマジン達もいるって事になるわね」

二人は昨日に初めて良太郎達と出会い、彼が電王に変身してイマジンを撃退する姿を目の当たりにしている。

現在二人は六課の隊舎の場所を確認する為に、本局に赴く前に訪れていたのだ。

自分達以外の局員も、今後はこの『機動六課』に席を置く予定もしくは確定している者達ばかりなのだろう。

それが揃って今日に集まるとなると、シンクロニシティでも起こったのではないかと思ってしまう。

昨日の『魔導師ランク試験イマジン乱入事件』は世間には出回っていないが、時空管理局内では有名なものになってしまっている。

仮面ライダー電王に変身する一人の青年。

自然災害扱いであるイマジンを倒した仮面ライダー電王。

そして電王となる青年に協力しているイマジン。

イマジンの在り方を覆すイマジン達には恐い物見たさで来る者も決して少なくないだろう。

「誰も何かしようとはしないね」

スバルは膠着状態に自然となっていることに疑問を感じていた。「無理もないと思うわ。イマジンを倒せるってそれだけで大事なんだから」

ティアナの言っている事は決して誇張ではない。以前にも述べたようにこの世界でイマジンとは『自然災害』のようなものだ。

自然災害に正面からファイティングポーズを取って特攻する人間はいないだろう。

結果はわかりきっている。絶対に勝てない、と。理屈ではなく本能で。

もし、その自然災害に正面からファイティングポーズを取って特攻して勝つ人間がいたらどうだろう。

周囲の人々はその者を『英雄』と扱うか『腫れ物』として扱うかという事になる。

大抵は後者だろう。その理由としては『触らぬ神に祟りなし』で。それでも遠巻きで見ると『英雄』として扱う事もありうる。(なのはさん達はあの人やイマジン達を凄く信頼してるんだよね?) (それがわからないのよね。なのはさん達とイマジンやあの人ってどういう繋がりなのかしら?)

念話の回線を開いてスバルとティアナはチームデンライナーと自分達の上司となる人物達の繋がりを考える。

この二人は『P・T事件』や『闇の書事件』の事は公式での記録でしか知らないのも無理もないことだ。

「スバル」

ティアナは嫌な予感がしながらも、相棒の横顔を見る。

何かを決意した表情。

こうなると、自分はその決意を最善の方向に持っていくしかない。止められないのだから。

「行くんなら私も行くわよ。アンタの尻拭い出来るのは今の所は私だけなんだから」

ティアナの台詞がスバルの背中を押したかたちとなり、二人は良太

郎の元へと歩み寄った。

*

「何かしら？」

機動六課の寮を管理する寮母を任されているアイナ・トライトンはいつもより早めに出勤してみると、機動六課の隊舎の人だけに目を丸くしていた。

彼女が本日、早目に出勤したのは昨日八神はやてから連絡があったからだ。

古い知り合いが住居先がなくて困っているので、寮の部屋をセツティングしてほしいとの事だ。

部屋は全部で四室を考慮しており、その内二室は個室であり残りの二室は共同部屋にとの事だ。

セツティングするだけなら今日の午前にまでは可能なので早速仕事に取りかかる事にした。

まさか、隊舎の人だかりの原因を作っている者達がこれから宿泊するのだろうとアイナは想像するはずもなかった。

*

人だかりの中から二人の少女が自分の前に立っていた。

陸士隊制服を着込んでいるが、昨日に初めて会った二人だ。

「ナカジマさんとランスターさん」

良太郎は二人の少女の名前（正確には姓）を口にした。

「憶えててくれたんですか♪」

「おはようございます」

スバルは憶えていてくれた事に純粹に喜び、ティアナは社交辞令として挨拶をする。

「これは一体どういう風になってこのように……」

「僕もよくはわからないんだよ。朝起きたらこんな感じに……」

ティアナの質問にも良太郎は曖昧な回答しか出来ない。

「そうなんですかあ」

スバルは能天気にな得するが、ティアナは考え込んでから視線を良太郎に向ける。

「もしかして……。あの野上さん、一つお聞きしていいですか？」

「僕で答えられる範囲なら」

「野上さん達はミッドチルダを始めとする次元世界でのイマジンの扱
いってご存知ですか？」

「イマジンの扱い？」

ティアナの質問に良太郎は首を傾げる。

良太郎のその態度にティアナは驚きはしなかった。

どこか予想通りだとも思えた。

「ティア。どうしたの？野上さんはイマジンに関しては私達よりずつ
とプロだよ？」

スバルはどうしてティアナがそのような事を訊ねているのか理解
できなかった。

「ランスターさん。もしかして僕とランスターさん達とは認識が違
うって事？」

「はい」

ティアナは良太郎の質問に即答した。

スバルはティアナと良太郎の顔を交互に見ている。

良太郎にとってイマジンとは『時の運行』を乱す存在であり、人間
的感情を強く持った怪人なので平和的な解決（話し合い）が可能な怪
人だ。

無論、平和的な解決の見込みがない場合は戦わなければならないわ
けだが。

モモタロス達と共に戦っている事を考えても『人類の敵』という認
識は持っていない。

「私達にとってイマジンは『天災』と同じなんです」

「天災と同じ？」

「はい」

ティアナが決して大袈裟で言っているのではない事は良太郎は彼
女の表情を見てわかる。

先程からやり取りを見ているスバルにしても同じ様な表情をして
いた。

「立ち話もなんだからテントに入らない？腰を落ち着けて聞きたいんだ」

良太郎も真剣な表情となって、二人にテントに入らないかと勧めた。

二人は互いに顔を見合わせてから頷いた。

スバルとティアナはテントの中に入ると、間近で見るイマジン四体に気圧されていた。

「オイ、俺達が台風とかと同じってどういう事だよ？」

「ひっ!？」

「……………」

モモタロスが彼なりに普通に訊ねるが、スバルとティアナはそれだけで恐縮していた。

「センパイ。女の子に凄んじや駄目だっけいつも言ってるじゃない。ゴメンね。僕達イマジンが天災と同じって理由を聞かせてくれない？」

ウラタロスがモモタロスの非礼を詫びながら、二人に話すように促す。

「私達、厳密に言えば魔導師や騎士はイマジンを確実に倒す事が出来ないんです」

「なのは等でも無理なんか？」

キンタロスがティアナの意見に疑問を感じて訊ねる。

「……………なのはさん達は戦えないんです」

スバルが悔しそうな表情で言う。

「どうして？なのはちゃんやフェイトちゃん達なら絶対に戦うと思うな」

リユウタロスが、高町なのはの性格を思い出しながら言う。

「魔導師ランクで高ランクのなのはさん達は戒厳令に抵触してしまうんです」

「戒厳令?」

ティアナが放った単語に、テントの入口にいたコハナが聞き返した。

「コハナクソ女。オメエ、自分のテントはどうしたんだよってぶっ！」
コハナはモモタロスに一発拳骨を繰り出してから腰掛ける。

「もう片付けたわよ。それよりもランスターさん、さつき言ってた戒厳令って?」

「あ、はい！高ランクの魔導師はイマジンの特殊能力である憑依の餌食にされやすいって事で被害を拡大させないための措置なんです」

コハナが当たり前のようにモモタロスを殴った光景を目の当たりにし、ティアナとスバルは口をポカンと開けていたが平静に戻る。

「という事はランクの低い魔導師達がイマジンと戦わなければならぬいわけ?」

良太郎はティアナの言った内容の逆を告げると、彼女は首を縦に振った。

「それ無茶すぎるよ。イマジンなめてるんじゃないか言いようがないね」

ウラタロスの指摘は現職管理局員であるスバルとティアナにはグサリと来るものだった。

「自殺しに行くようなもんやな」

キンタロスも腕を組んでサラリと感想を述べる。

「ねえねえ」

「なあ」

リュウタロスとモモタロスが良太郎を見る。

「カイゲンレイってなに?」

「戒厳令っていうのはね。厳重に注意、警戒する事をしく命令の事なんだよ。この場合だとランクの高い魔導師はイマジンが現れても現場に出る事が出来ないって事だね」

良太郎が二体に大まかな意味を説明した。

「出たらどうなるんだよ?良太郎」

「そうなる現場に向かった人の責任になるね。仮にイマジンと戦って命を落としたとしても、戒厳令を敷いた側としてはは知らぬ存ぜぬを貫くか『警告はしましたけど聞

いてませんでした』って言うかもしれないね」

自分の世界で実際に起きた組織内のケジメのつけ方の一例を良太

郎は述べた。

「命令違反して死んだヤツはホンマに犬死になるんやな」

キンタロスは想像とはいえ、やりきれない表情をしていた。

ティアナは黙って頷く。

「イマジンの戦闘力の高さで倒せないって理由と、人命を優先した策が結果として最悪な状況を招きどうやって倒せなくなっている。だから『天災』なんだね」

イマジンⅡ天災のたえを良太郎達は理解した。

「でも、どうやって今までこの世界の時間って護られてたの？僕達も侑斗も前に別世界に訪れて以来は一度も来てないよ」

イマジンが蔓延っているのに、この世界の時間は変に改竄されたという事はない事に良太郎は疑問を感じる。

『『青い狩人』が倒してくれてるんです』

今まで口を開かなかったというより、説明が上手く出来ないからティアナに丸投げするかたちで黙っていたスバルが口を開いた。

「青い狩人？」

「はい。野上さん達以外でイマジンを倒せる謎の戦士なんです」

「謎の戦士ってどういう事かしら？」

良太郎がその呼称を訊ね、スバルは説明するがその中で疑問が生まれたコハナが訊ねた。

「イマジンが現れたら、必ず現れて倒していく事しかわかっていないんです」

「その謎の人が今までこの世界の時間を護ってきたって事？」

「はい」

スバルの説明を良太郎は聞き、確認の際に訊ねてきたが彼女は首を縦に振った。

「青い狩人ってダイオキシンかよ？」

モモタロスは『青』というところからそれなりに因縁のある者のニックネーム？を言う。

「あのドロボウさん？それはないんじゃないの」

ウラタロスはその者の関与を否定した。

「自分の目的の為に動くやろうけど、ボランテアに近いんやで。あいつがそんな目的で動くとは思えんしなあ」

「ドロボウだもんねえ」

キンタロスとリュウタロスもその人物を思い出しながら、やっぱり否定した。

「もしかして幸太郎とか……」

コハナは『青』をそのまま受け止めずに、それに近い系統の色である『藍色』のカラーリングをしている仮面ライダーであり、良太郎の孫である野上幸太郎（のがみこうたろう）

ではと考えてみた。

「幸太郎がここに自分から乗り気で来るとは思えないよ。それに幸太郎はこの世界とは全く関係ないんだし」

関係上、祖父である良太郎がその意見に首を横に振った。

「……………」

スバルとティアナは話の内容についていけておらず、沈黙するしかなかった。

「ひとつだけわかってる事があるよ。その青い狩人が僕達に味方かどうかはわからないけど、この世界の『時の運行』を乱そうとするなら……………」

「やるって事だろ」

モモタロスが良太郎の言おうとしている事を続けると同時に、サムズアップしていた右手をさかさまにした。

テント内の温度が何度か下がったような感じがした。

「あの……野上さん」

スバルがおそろおそろ右手を挙手した。

「ん、なに？ナカジマさん」

「えと皆さんは、なのはさん達と古い知り合いのように思えるんですけどどういった経緯で知り合ったんですか？」

スバルはもしかしたらヤバイ部分に触れてしまうのではと思いいながらも、訊ねる事にした。

そもそも、彼女が一番の目的はコレなのだから。

全員が顔を見合わせてから、首を縦に振った。

『話しても問題ない』という合図なのだと思う。

(どんな経緯で知り合ったと思う？ティア)

(さあそればかりは聞いてみないとわからないわよ。それにしてもアンタの思い切りのよさは本当に参るわ)

魔導師間の念話はチームテンライナーに傍受される心配はないという事を知っているわけではないが緊張の糸が解れているのか、スバルとティアナは念話での交信を始めた。

「僕達が彼女達と知り合ったのはこの世界の時間でいえば十年くらい前になるんだ」

良太郎の一言にスバルとティアナは即座に首を傾げる。

「あの失礼ですけど、野上さんお歳は？」

ティアナは失礼と感じながらも、訊ねてきた。

「十九だよ」

「今が十九歳となると、九歳の時になのはさん達と知り合ったって、あれ……？」

ティアナは違和感を感じ、腕を組んで考え始めた。

(ティア。ティアー…どうしたの。急に考え込んだりして)

スバルは急に黙って思案している相棒に対して肉声ではなく、念話の回線を開いて訊ねた。

ちなみにその仕種は良太郎達にしてみればアイコンタクトを取っているようにも思える。

(なによ。今ちよつと考えを整理してるんだから)

(野上さんとなのはさん達が知り合ったことに何か疑問があるの?)

(腑に落ちないのよ。フェイト執務官の野上さんに対しての態度はどうも私が考えてるのは違いすぎるもの)

(違う?)

仕種ではなく、声の音量の微妙な変化で感情を出てくるのが念話の特徴だ。

(野上さんは今から十年前にフェイト執務官達と出会っているってのは本当だと思うの)

(だったら疑う必要ないじゃん)

(スバル。アンタは野上さんとフェイト執務官は同じ年齢で知り合ったって思ってるの?)

ティアナはスバルの考えを参考にしようとする。

(え、今から十年前なんだからそうなんじゃないの? ティアは違うって思ってるの?)

十九ー十〇九という単純な引き算だ。

(九歳の時に出会った二人が十年ぶりに会ったって感じの雰囲気じゃなかったわよ。アンタだって昨日の事なんだから憶えてるでしょ。野上さんは今のフェイト執務官の

姿に驚いてたけど、フェイト執務官は今の野上さんの姿を見ても大して驚いてなかったわ)

(フェイト執務官はクールだからじゃ……)

(馬鹿。それじゃその後のフェイト執務官の行動は矛盾しちゃうのよ。それにフェイト執務官は野上さんが仮面ライダーに変身した事にも驚いてないところからすると、

九歳の野上さんと知り合ったんじゃないかと今野上さんと出会ってるって事じゃないかしら)

(それって野上さんは嘘をついてるって事?)

スバルは良太郎は自身の年齢を十九歳と言った事を思い出す。もしこの年齢が嘘なら彼は二十九歳という事になる。

(嘘は言っていないと思うわよ。ただ普通の方法で知り合ったとは考えにくいわね)

ティアナの推測ではお互いが九歳の時に知り合ったのではなく、何らかの方法を用いて十九歳の良太郎が九歳のフェイトと知り合ったと推測している。

そうになると、何の為にとなってしまうわけだがそこまではわからない。

「あの野上さん」

「なに? ランスターさん」

「もしよろしければいいんですけど、私の推測を聞いていただい

よろしいでしょうか？」

ティアナは畏まりながらも、視線を良太郎に向ける。

「はい」

断る理由もないので、良太郎は了承した。

イマジン四体やコハナも興味があるのか黙って聞くことにしていた。

「野上さんとなのはさん達が十年前に知り合ったっていう事に嘘はないと思います。でも、フェイト執務官の野上さんに対する態度が妙に引つかかったんです」

「あ、ああ。あれね……」

公衆の面前で女の子に泣かれながら抱きつかれた事を良太郎は思い出しており、頬が赤い。

「十年ぶりに再会したのに、野上さんの姿を見てもフェイト執務官は驚かなかったって事は既にその姿をご存知だったって事になります。対して野上さんは誰なのかわから

なかつた態度を取っていたとなると本当に十年近く会ってないって推測する事が出来るんです」

傍聴側は黙って聞いており、ティアナは続ける。

「そして私とスバルとリインフォース曹長以外は野上さんが仮面ライダーである事がわかってても驚かなかったところからして、何らかの事件の中で知り合った可能性が高い

という風にも考えられるんですけど……」

そこで饒舌が詰まった。

「どうやって今の僕が九歳のフェイトちゃん達と知り合ったのがわからない、と」

良太郎が代弁してティアナは首を縦に振った。

スバルも首を縦に振るが、これはティアナに釣られての事だというのは誰の目から見てもわかる事だった。

(僕達が過去に関わった事件に関して知らされてないんだ……)

彼女達もいわば部外者なので、自分達が過去に海鳴で起こった二つの事件に関与している事を知らないのも無理もないことだ。

(ここで僕達がデンライナーを使って今から十年前の時間に来たって事を話すわけにはいかないからなあ)

良太郎個人としては話してもいいのだが、ここで話してしまうと折角自分達の為に緘口令を敷いてくれたリンディ・ハラオウン達の顔を潰す事になるのでそれは避けたかった。

「ランスターさんの言っている事はほとんどが正解だよ。僕は九歳で彼女達と知り合ったんじゃないやなくて今のままで九歳の彼女達と知り合ったんだ」

良太郎は真相は告げないが、ティアナの推理は正解だと告げる。

「どうやって来たのが、まだわかりません」

スバルが拳手をして訊ねてくる。

(上手くはぐらかそうとしたんだけどなあ……)

サラリと突いてくるスバルをあながち油断できないと考えを改める良太郎を始めとするチームデンライナー。

「僕達が彼女達と知り合った方法はね。悪いけど今のままじゃ教える事は出来ないんだ」

「えと、どうしてですか?」

スバルは更に訊ねる。

「僕達の事を知って事はこれから関わっていくって事になるんだ。なにせある意味では世界の真実を知ることになるからね」

良太郎は穏やかだが、真剣な口調で二人に告げた。

「……………」

良太郎から放たれる雰囲気には圧されたのか二人はそれ以上は訊ねようとはしなかった。

*

アルト・クラエツタとルキノ・リリエもまたこの機動六課の隊舎前に設置されているテントを眺めていた。

スバルとティアナが良太郎に招かれて入っていたのも彼女達は見ていた。

「中に入ってから結構経ちますよね」

「そうですね……」

まさか捕食されているのではと想像してしまうが、悲鳴一つ上がってこないところからすると何かを話しているのだろうと推測する。

「あの、アルトさん」

「何ですか？ルキノさん」

ルキノがアルトに視線を向ける。

「あのテントの中に入っている人達が昨日の……」

「イマジンを倒した人達なんですよね……」

ルキノの質問にアルトは答えるが、自身もにわかには信じられないようだ。

このように捉えているのは何もこの二人だけではない。

目の前というよりは映像で映し出されたものを見ても、散々苦しめられた存在を倒す存在を受け入れるのには時間がかかるものだ。

「何だ。オメエ等もやっぱり来てたのかよ」

背後から男性の声がしたので二人は振り向く。

ヴァイス・グランセニツクだ。

「ヴァイス陸曹！」

「もしかして……」

アルトが名を呼び、ルキノは来訪目的を言おうとする。

「ここに来た目的はオメエ等と一緒に。好奇心だよ。何せシグナム姐さんを倒したってんだからな。生で見たいじゃねえか」

「ええっ!?!」

ヴァイスの発言に、アルトとルキノは目を大きく開いて驚く。

「私とて無敵ではない。勝つ事もあれば負ける事もあるさ」

更に後からロングコートを羽織って、陸士隊服を着用した二人の子供を引率しているシグナムが歩いてきた。

連れられている子供——エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは大して驚いている様子はなかった。

「お前達は驚かないな」

エリオとキャロの反応を見てシグナムはそのようにこぼす。

「え、あの……フェイトさんから……」

「聞いたことがありますから……」

フエイトと関わっている以上、その経由で電王やゼロノスのことを聞かされているのはなんら不思議な事ではない。

「出てきましたぜ」

テントをじつと凝視していたヴァイスが口を開いた。

テントからスバルとテイアナが出てきた。

「話は終わったみてえだな」

この人だけりがなくなるのはこれから三十分後の事になる。

*

「あの、すみません。野上良太郎さんでしょうか？」

寮で部屋のセッティングをしていたアイナがテントの外で身体を動かしている良太郎達に声をかけた。

「はい。そうですけど貴女は？」

「私、機動六課の寮母を担当する事になりましたアイナ・トライトンと申します。八神部隊長より部屋のセッティングをするように仰せつかっており、準備が整いましたので

ご案内しますがよろしいでしょうか？」

「あ、そうなんすか。ありがとうございます。みんな！部屋の準備が出来たって」

「うーい！」

モモタロスが代表して、テントから良太郎を除く全員が出てきた。流星にイマジンがいるとは思わなかったので、出てきたときアイナは内心ビクビクしていた。

「テントを片付けますんで、ちよつとだけ待ってていただいてもよろしいですか？」

「え、ええ。まあ。急ぐ事でもありませんので……」

良太郎の申し出をアイナは快く引き受けた。

それから十分後にテントの片づけが終わり、チームデンライナーは今夜から拠点となる場所へと案内された。

*

「コレがヴァイターが言ってたAゼロノスさんからのプレゼントやな……」

八神はやての私室にある端末には一通のメールが受信されていた。差出人は『AZ』となっている。

「文面そのものに怪しいものはなし、と。添付されてるモノが怪しいな」

感想をもらしながらも、はやては操作していき添付されているデータを開く。

「コレって……。凄い……。私が作りたかったモノや……」

『この添付したものが貴女方の助けになる事を信じて送ります。生かすも殺すも貴女次第です。AZ』

「あ、マリーさん。はやてです。実はですね。ぜひ見てもらいたいのがあるんですけど……」

旧知の知り合いであるマリエル・アテンザに連絡を取る事にした。はやてが驚愕しマリエルに即座に連絡を取ったものは……。

ゼロノスカードの模造品、ダミーゼロノスカードの設計図だった。

第十話 「機動六課 始まりの日」

チームデンライナーを始めとする異世界の仮面ライダー達がミッドチルダの大地に足を踏み入れてから約二週間が経過した。

その間にはスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスターは高町なのはの紹介状を手にして時空管理局本局で武装隊の特別講習を受けて、再試験を受験し見事に魔導師ランクBへと昇格した。

野上良太郎達もただボーっとしているのではなく、『サイキョウニシテサイアクナルモノ』に該当するような事を過去の新聞やゴシップ記事などで徹底的に探っていた。

だが、ミッドチルダの文字を良太郎達が読めるはずもないのでフェイト・T・ハラオウンに頼んで辞書を貸してもらい、訳しながらの作業なので相当に時間がかかったのは言うまでもないことだろう。

八神はやてはAゼロノスから送られてきた設計図を本局第四技術部主任であるマリエル・アテンザに見せた。

マリエルはその設計図の精巧さに驚愕し、同時に欠点を敢えて消していなかった事に疑念を感じていた。

*
*
そして古代遺失物管理部『機動六課』発足の日が来た。

*
機動六課の寮の一室では良太郎が目覚まし時計を停めてから、目をこすりながら欠伸をしてベッドからゆっくりと起き上がろうとしていた。

洗面所まで個室で別れているのはありがたい。

(さすがに二週間近くも生活していると、慣れてくるね)

当初は『寮』の一室というよりも『ホテル』の一室ではないかと疑ったくらいだ。

歯磨きをしてうがいをする。

ガラガラガラと喉元を鳴らしながら、ペッと口に含んでいた水を吐

く。

三日前にナオミから貰った服へと着替えて広間へと向かう。

この寮は殆ど寝るか寛ぐかしかなく、食堂はない。

そのため現在、彼等は寮母のアイナ・トライトンの厚意に甘えて広間で食事を取っているのだ。

「おはようございます。アイナさん」

「おはようございます。あら、今日は私服ではないんですね」

アイナは笑顔で挨拶を返し、良太郎の服装の違いに目を大きく開く。

「はい。今日は機動六課発足の日だと聞いていますので一応正装しておこうと思いましたが……」

良太郎の服装はいつもの私服とは違い、上下黒色のスーツだった。

「よくお似合いですよ」

「ありがとうございます」

お世辞だろうけど、言ってくれるのは嬉しいので素直に笑みを浮かべる。

「オース」

「モーニン♪」

「おはようさん」

「おはよー♪」

「おはようございます」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、コハナも部屋から出てきて広間へと入ってきた。

ちなみにコハナの服装は良太郎と同様に私服ではなく、正装——
かつて『デンライナー署』を発足していた際に着ていた女性用のスーツだ。

「おはようございます。みなさん」

アイナが朝食の準備をしながら、挨拶を返す。

本日の朝食はご飯と味噌汁とだし巻き卵と漬物という和風だった。

ミッドチルダの料理文化は日本と同じらしく、洋風もあれば中華もあるし深いところまで探ればマイナーなものであるとのことだ。

「「「「いただきます」」」」」

全員が合掌して箸を手にして、食事を始める。

「ここで食事を取るのも今日が最後かもしれないね」

アイナは味噌汁をすすってから言う。

「え？どうしてですか？」

コハナが何故そのような事を言うのかわからない。

「本来この寮はあくまで就寝と遊興が目的の施設で、食事は隊舎の食堂がありますからそちらで取るのが本来の姿なんですよ」

「夜に腹減ったらどうなるんだよ？寮の母ちゃん」

アイナが寮の存在目的を話すと疑問に感じたモモタロスが訊ねる。

「私が起きている間でしたらお夜食を作る事は出来ますけど、それよりも後となると自炊していただくしかありませんね」

アイナの回答に「うー」と唸りながらも納得していた。

「僕、自分で作るの苦手なのに」

「オメエ、自分で作れねえじゃねえかよ」

リュウタロスの呟きにモモタロスはサラリと指摘する。

その間、二体の手にする箸は全く止まっていなかった。

「それにしても僕達って機動六課で何するんだらうね」

ウラタロスが尤もな事を告げる。

天災的存在となっていてイマジンに仕事を回してくれるとは到底思えないという意味が含まれてもいる。

「やる事なかったら寝るか修行しかあらへんな」

キンタロスは食後のお茶を飲みながら自分にできることを言う。

「ランスターさんの言ってた事が本当ならアンタ達って時空管理局では相当肩身がせまいってことになるわよね」

コハナは空になった食器を積みながら、モモタロス達の扱いを言う。

「んなもん気にしてられっかよ。俺達は俺達だぜ」

モモタロスは特に気にする様子もなく、椅子にもたれて天井を仰いでいた。

「みんなだけじゃないよ。僕や侑斗も下手をすればバケモノ扱いされ

るかもしれないね……」

良太郎は自分も例外ではないと考えている。

スバルやティアナの前で変身したライナー電王は主人格が自分であるため、『仮面ライダーに変身する人間』と認識されるがそれ以外の電王に変身すると『イマジンに肉体を

憑依させて戦う命知らずの人間』という認識が飛び交うのではと予想してしまう。

(それでもやっていくしかないんだけどね)

上着のポケットに入っているパスを擦る。

それから十分後に全員が機動六課の隊舎へと向かった。

*

時空管理局遺失物対策部隊機動六課隊舎。

部隊長オフィスには現在三人と一体がいた。

桜井侑斗、デネブ、八神はやて、リインである。

はやては自身のデスクを人差し指でなぞっていた。

その仕種はまるで昼ドラに出てくる和服の似合いそうな姑のようだと侑斗は思ったが、口には出さなかった。

デネブと侑斗は来客応対のソファに寝転がっていた。

「侑斗さん。折角決ってるんやから皺になるようなことをしたらあかんで」

はやては椅子に腰掛けながら、侑斗に注意する。

「八神の言うとおりで侑斗。スーツはクリーニング屋に依頼しないとキッチンとまらない」

対面のソファで腰掛けているデネブが家庭的なことで侑斗にダメ出しする。

「あーまったく、お前等俺の保護者かよ?」

寝転がっていた侑斗は分が悪いと判断して起き上がる。

「侑斗さんがだらしないから私も心を鬼にして言ってるんやで」

はやての言葉を耳に入れながら、侑斗は彼女の顔を見る。

その表情は険しいものではなく、嬉しそうな笑みだ。

「あーそーですかー」

侑斗は右から左へと聞き流した。

侑斗の服装はスーツだが、上下が白でシャツが黒色というどうみてもサラリーマンが着そうにないものだった。

ネクタイは銀色であり、侑斗が着ていると充分に様になっているものだった。

「うふふふく〜♪」

先程から会話に参加していなかったリインが専用の椅子をクルクルと回転させていた。

「このお部屋もやつと隊長室らしくなつたですね〜」

回転を止めて、はやてへと顔を向ける。

「うん。そうやね。リインのデスクも丁度ええのが見つかってよかつたなあ」

はやてが笑顔で返した。

穏やかな雰囲気の流れる中、それを壊すかのようにビーツと音が鳴った。

隊長室から音が鳴り出す数十分前に遡る。

上下共に黒色のスーツで赤色のネクタイを締めている良太郎を始めとするチームデンライナーの面々が『機動六課』の隊舎に入ると、それだけで雰囲気が変わった。

どこか和気藹々としているような雰囲気が一瞬で張り詰めたものへと変わったのだ。

「何だか敵地に入り込んだような気分よね」

身体にヒシヒシと来る視線に耐えかねたコハナが良太郎に小声で言う。

「主な人達以外は僕達の事を知らないんだから警戒心を抱くのは仕方ないんだけどね」

良太郎も視線を感じながら、尤もな事を言う。

「あー鬱陶しいったらありやしねえぜ！」

モモタロスが苛立ちを表に出して、声を荒げるとそれだけで隊舎内にいる局員達は数歩後退していた。

「女の子の視線からはいくらでも受け入れるけど、男に視線向けられ

るのはいい気分じゃないね」

ウラタロスはおどけて言うが、モモタロス同様に視線を鬱陶しく感じていた。

「俺等別にとって食うわけやないんやけどなあ」

キンタロスは右親指で首を捻る。

「僕達、怖くないんだよー」

リュウタロスがアピールするが、彼の容姿が災いしたのか余計に後退してしまった。

「あ、良太郎。みんな」

「みなさーん」

フエイトとなのはが一行を目にすると声をかけてくれた。

このやり取りだけで周囲はざわめき始める。

隊長二人と顔見知り!?

一体どんな関係!?

何て声が出始めていた。

(無理もないか……)

下手に何か言うと、確実にややこしくなるのはわかっているので沈黙を取る事にした。

「おはよう二人とも。昨日とは服が違うね」

良太郎は昨日とは違う二人の外観から会話に入る。

「うん。今日からだけどね」

「私達は、はやてちゃん。いえ八神部隊長の部下になるわけですから」

なのはは公私をハッキリさせておく為に幼馴染を名字で呼ぶ。

「それにしても僕達のことをどうするつもりなのかな? 彼女もしかして口の巧いタイプ?」

ウラタロスの言う『彼女』とは、はやての事だ。

「え、ええ。はやてちゃんその……て呼ばれますし……」

なのはが途中聞こえない声で何かを言った。

「なのはちゃん。何かボソツと言ったよ」

リュウタロスは、なのはが何かを言った事を追求しようとする。

「なのは。言いたい事は声をハッキリして言うた方がええで」

キンタロスはそれを悩みと思ったのか論ず。

「キンちゃん。なのはちゃんが小声で言った事ってオカンさんにとっては不名誉なことなんじゃないの？もしかしたら蔑称とか……」

ウラタロスはキンタロスの考えは違うと指摘しながら、独自の推測を打ち明ける。

「カメ。スケベで女好きのオメーがオカンのことを『オカン』って呼んでるぞ……。で、なのは。何なんだよ気になるじゃねえか。教えろよ？」

モモタロスは珍しく女性をニツクネームで呼んでるウラタロスに指摘しながら、なのはを問い詰める。

「？なのはとフェイトは左右を見回してから側に寄るように手招きする。」

「はやてちゃん。実は上層部の人達から『タヌキ』って呼ばれてるんですよ」

それを耳にした途端にイマジン四体は笑い出し、良太郎とコハナは必死で笑いをこらえていた。

「はやても自分で言う時もあるけど、あまり言っちゃダメだよ。気にしてるからね」

フェイトが全員に忠告する。しかし、その表情は必死で笑いをこらえているから説得力は皆無に等しい。

「それで二人はこれから何処に？」
「隊長室。挨拶にね」

「なら僕も行つていい？お世話になる以上、挨拶はしとかないといけないしね」

「わかった。じゃ、ついてきて」

二人の引率で良太郎は隊長室へと向かった。

廊下を歩く中、三人は黙ったままかというところではなかった。

話題は良太郎の服装だ。

彼女達がいつも見ているのは私服姿であり、スーツのような正装は初めてだった。

「そのスーツは持ってきたんですか？」

「いや、三日前にナオミさんが『オーナーからです』って言って置いていったんだよ」

なのはの質問に良太郎は答える。

「多分、オーナーさんはこういう機会もあると見越して良太郎にくれたんだと思うよ」

フェイトはオーナーの意図を想像しながら言う。

「だと思っよ」

良太郎は首を縦に振った。

本当のオーナーの真意はわからない。

出会ってそれなりの月日は流れているが、それでもオーナーという人物はわからないという評価しか出来ないのだ。

「センスがいいという事だけはわかったよ。凄く似合ってる」

「あ、ありがとう……」

実は『服を着ている』というより『服に着られている』という感覚が強かった良太郎にしてみれば救いであった。

隊長室の前に立つと、二人は身形を整える。

良太郎は開いていた上着を閉じる。

「待って」

なのはが入ろうとするとところをフェイトが止めた。

彼女の視線は正面の隊長室ではなく、隣の良太郎だった。

「ネクタイ曲がってるよ」

フェイトは良太郎の前に立って、ネクタイを直し始めた。

「あ、えと……」

「動かないで。ちゃんと直せなくなるよ」

「は、はい……」

自分と同年代の女の子とこんなに至近距離になったことはない。

ましてや身形を整えてくれるなんて事をしてもらった事もない。

(本当に十年経ってるんだ……)

もう彼女に合わせて自分がしゃがむ必要はないのだと痛感させられてしまう。

心臓の鼓動が激しくなっているのが、理解できた。

「はい。できたよ良太郎」

フェイトの声に良太郎はいつもより遅く反応した。

「あ、ああ。ありがとうフェイトちゃん」

礼を述べるが、心臓の鼓動は中々収まってくれない。

顔は赤いままだ。

「どうしたの？良太郎」

「え？」

反応が微妙に違っていている事をフェイトが見逃すはずがない。

「顔赤いけど……」

赤くした原因を作った者が訊ねる。

「赤くなると思うよ。同年代の女の子にいきなりネクタイ整えられたりしたらさ……」

野上良太郎はこういうときはサラリと真実を打ち明けてしまう青年だ。

「!!」

そう告げられた時、今度はフェイトの顔が赤くなった。

その後、時間にして二、三分ほど「あうあう」とあたふたしているフェイトを良太郎となのはは、苦笑しながら見ていた。

ビーツと鳴った直後、隊長室のドアが開いた。

「はい。どうぞ」

はやてが入室許諾の返事をする。

「失礼します」

良太郎、フェイト、なのはの三人が入ってきた。

「お着替え終了やな。野上さんは正装なんやね」

はやてが立ち上がって、入室者達の服装を見る。

「お二人とも。素敵ですう」

リインが両手を前に組んで、なのはとフェイトを称賛した。

「にやははは」

「ありがとう。リイン」

なのはは笑い、フェイトは笑顔で礼の言葉を述べる。

「三人で同じ制服姿は中学校の時以来やね。何や懐かしい」

はやてとリインが二人の側まで寄る。

「侑斗の服もオーナーから？」

「三日前にナオミさんが届けてくれたんだ」

女性陣が盛り上がりつついる中、良太郎が侑斗の身形を訊ね、デネブが答えてくれた。

「センスは悪くないと思うがな。何でこの服なんだよ……」

オーナーのセンスに文句はないが、選んだ服はどうみても裏社会《アンダーグラウンド》な方々が好んで着るようなスーツだった。

カタギの人間が着るようなものではない。

「似合ってるからいいじゃない」

良太郎はそのようなコメントしか出せなかった。

ソファにもたれていた侑斗も腰を上げてから、首を二、三回左右に動かす。

ピキピキつと音が鳴る。

二人が世間話をしている中で、空気がガラリと変わった。

なのはとフェイトが敬礼しているからだ。

「本日ただいまより、高町なのは一等空尉」

「フェイト・T・ハラオウン執務官」

「兩名とも機動六課に出向となります」

「どうぞよろしくお願いします」

「はい。よろしくお願いします」

はやてとリインが敬礼で返した。

三人は敬礼が終わると同時に笑みを浮かべあっている。

職場、やり慣れているとはいえ違和感のような物を感じたのかもしれない。

隊長室のドアがまたビーツと鳴った。

入ってきたのは眼鏡をかけた長身で陸士隊服を青年——グリフィス・ロウランだ。

グリフィスは、部隊長であるはやてに報告の為に訪れる事になった。

(今日からあの人達とも一緒に働くんだな……)

グリフィスにとって、なのはやフェイト達と働く事は光栄なことであり、自身を研鑽するにはもってこいだった。

だが二週間前に突如現れたあの連中が来てからは、そちらに意識が持っていかれたという自覚があった。

母であるレテイ・ロウランやその友人であるリンデイ・ハラオウンから聞かされていた。

彼は二つの事件に彼等が関わっている事も知っている。

だが、グリフィス自身は彼等とは一面識もなかった。

顔を見たくても、映像は一切消去されているためどんな顔なのかもわからずだった。

二週間前の事件の際に彼等は現れた。

自分達にとつては『恐怖の対象』をあつという間に倒したのだ。

そんなデタラメな存在と一つの部隊で行動するのだ。

不安もあるが、期待もあった。

(僕は、僕のできることをやるだけだ)

そう決意して隊長室へと踏み込む。

ドアがビーツとなって開いた。

「失礼します。高町一等空尉、テストロツサ・ハラオウン執務官。ご無沙汰しています！」

予期せぬ来訪者を見て、グリフィスは敬礼する。

だが二人は首を傾げるという反応だった。

(あれ?)

もしかして自分が誰なのか理解していない?と思ってしまう。

「ええと……」

フェイトは思い出そうとする。

「もしかしてグリフィス君?」

なのはは、自信なく名を告げている。

(外見変わったかな?僕)

グリフィス自身、イメチェンをした憶えはないのだが二人が首を傾げるという事は何か変化があったという事になるのだろう。

ちらりと自分と同一年ぐらいのスーツを着用している青年二人と

イマジン一体を見る。

「はい。グリフィス・ロウランです」

名前を知らない二人と一体のためにも自己紹介をすることにした。

「うわあ。久しぶりー！てゆうか凄く成長してる〜」

なのはがグリフィスの成長振りに驚いていた。

「うん。前見たときはこんなちっちゃかったのに」

フェイトが当時のグリフィスの身長を右手で表現する。

（いや、そこまでは小さくないと思うんですけど……）

心の中でツツコミを入れてしまう。

「そ、その節は大変お世話になりました」

「グリフィスもここの部隊員なの？」

「はい」

フェイトの問いにグリフィスは短く答える。

「私の副官で交替部隊の責任者や」

「運営関係も色々お手伝ってくれています〜」

はやてとリインがグリフィスのポジションを説明してくれた。

「お母さん——レティ提督はお元気？」

「はい。おかげさまで」

フェイトが実母——レティ・ロウランの近況を訊ねてきたので差し障りのない返答をした。

「あ。報告してもよろしいでしょうか？」

グリフィスは仕事顔に戻る。

「どうぞ」

はやては首を縦に振る。

「フォワード四名を始め機動六課部隊員、スタッフ。全員揃いました。今はロビーに集合、待機しています。あと……」

グリフィスは表情に難色を表してから、良太郎を見る。

「モモタロス達、何かやらかったですか？」

毎度の事のように告げる彼の口調を聞き、グリフィスは心底頼もしく感じた。

「その……お連れの子に四名とも静められたんですけど、どのよ

うにします?」

自分のもてる経験、知識をフルに回転させたのだがやはり妙案は出なかった。

「そのままにしておいて下さい。あと、皆さんの邪魔にならないように隅の方に寝かせておけば大丈夫です」

慣れているようにして良太郎が告げた。

「わかりました」

グリフィスは安堵の息を漏らしてから、快諾した。

「ほんなら、まずは部隊のみんなにご挨拶や」

はやての言葉に、なのは、フェイト、侑斗、デネブ、リインは頷いた。

*

はやて達より早く、ロビーに足を踏み入れた良太郎はまずコハナによって気絶させられたイマジン四体を隅へと運んでいた。

この作業には侑斗とデネブも協力してくれた。

「あ、あの……」

「よろしければお手伝いしましょうか?」

そんな二人と一体に勇気を振り絞るかのような声が聞こえた。

自分よりも明らかに年下の少女と少年だった。

キャロ・ル・ルシエとエリオ・モンディアルだ。

「ん?もう片付いたからいいぞ。気を遣わせてすまないな」

侑斗が二人の申し出をありがたく思いながらも、既に事を済ませた後だ。

「コイツ等、かなりストレス溜まってるわね……」

「僕達の世界とは違うからね」

自分達の世界ではモモタロス達が素の姿でうろついていたとしても、あまりの常識外の存在であるため無関心を決め込む人間が多数であるためストレスに感じることはない。

だが、このミッドチルダを始めとする次元世界では違う。

好奇、敵意、恐怖といった感情が入り混じった目で見てくるのだ。しかも何かしようと考えるだけで警戒心を剥き出しにする。

自分がモモタロス達でもストレスを感じるだろう。

「この状況。何とかしないとね……」

「そうね。このままじゃ私達が『サイキョウニシテサイアクナルモノ』
になってしまうわね……」

コハナは自分達がその気になれば時空管理局を崩壊させる手がある事を知っているのです。そのような事をいつてしまう。

無論、冗談だが。

「野上。本当にモモタロス達は寝かせたままでもいいのか？」

デネブがオロオロしながら訊ねてくる。

「起きたってまたストレスを感じるかもしれないからね。しばらく寝かせておいてあげて」

「わかった」

良太郎の頼みをデネブは聞き入れた。

「ノガミ……」

キャラが呟いた。

「あの、失礼ですけど貴方はノガミさんというのですか？」

「うん。そうだけど」

エリオが訊ねてきたので、良太郎は答える。

「あ、あの……もしかしてノガミリョウタロウさん、ですか？」

キャラが期待を込めた眼差しでこちらを見る。

「僕が野上良太郎だけど、君達は一体？面識はないはずだけど……」

「じ、自己紹介が遅れて失礼しました！エリオ・モンディアル三等陸士
です!!」

「お、同じくキャラ・ル・ルシエ三等陸士であります!!」

二人は良太郎の前でピシッと敬礼した。

「ちよ、ちよっと！僕は管理局の人間じゃないから、敬礼なんてしなくてもいいって」

良太郎は二人にすぐにやめるように言う。

このような事をされるのは慣れていないのだ。

「野上。それにお前達も話があるなら後にしとけ。八神達が来たぞ」
談話をしていたロビーにいる全員は一瞬で沈黙した。

はやてが急場で作られた壇上に立った。

(コレ作った人はええ仕事してる)

内心、製作者に感謝の言葉を述べていた。

ちなみに壇上に立っているのは、はやてを含めて計四名だ。

なのは、フェイト、グリフィスだ。

「機動六課課長。そしてこの本部隊舎の総部隊長、八神はやてです」

はやての自己紹介にロビーにいた全員が拍手で返した。

「平和と法の守護者——時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を護つていく事が私達の使命であり、なすべき事です。実績と実力に溢れた指揮官陣。若く可能性に

溢れたフォワード陣。それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。そしてイマジン討伐のスペシャリストでもあるチームデングライナーとゼロラ

イナーの皆さん。全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています」

はやては緊張を解いた表情になる。

「ま、長い話は嫌われるんで以上ここまで。機動六課課長及び部隊長、八神はやてでした」

そう言つて手を挙げて挨拶を終了した。

また全員が拍手で返した。

はやての挨拶が終わった後、良太郎はエリオとキャロから話を聞いていた。

「君達はフェイトちゃんに保護されたんだ……」

「はいー!」

(この十年で子供の面倒を見るようになったなんて……)

この二人を見ていると、十年前のフェイトにダブって見えた。

「フェイトさんが言っていました。今の自分があるのは良太郎さんのお陰だつて」

「本当の『強さ』を持った人だ、とも言っていました」

子供二人の純粋な眼差しとフェイトの自分に対しての評価に良太郎は何も言えなくなってしまう。

(過大評価しすぎだよ……)

自分はそのように言われるほど、立派な人間ではない。

ミッドチルダに足を初めて踏み入れた日の夜の事を思い出す。

あの時、彼女は自分に対しての想いは十年前から変わっていないと言っていた。

それは裏を返すと、彼女の『恋愛』に関する青春を自分が十年も奪ったことになる。

良太郎はミッドチルダに訪れるまで、フェイトの告白は憶えていたがそれを十年間ずっと抱いているとは思っていなかった。

子供の頃の告白を忘れたところで、誰も責めない。

「二人とも、フェイトちゃんのこと好き？」

良太郎は自分を輝いた瞳で見ている二人に訊ねてみる。

「はい！」

事前にそのような打ち合わせをしたわけでもないのに、エリオとキヤロは声を揃えた。

「そっか」

二人が言った『好き』は家族愛的なものだということはずぐにわかった。

良太郎は二人が迷うことなく言ってくれた事が嬉しかった。

なのは達以外にもフェイトの繋がりを持つ者達がいることにだ。

六課の廊下をフェイトとシグナムが歩いていた。

「お久しぶりです。シグナム」

「ああ、テストタロツサ」

この二人、直接会うのは半年振りとなっていた。

その間、電話などでやり取りはしていたが。

「同じ部隊になるのは初めてですね。どうぞよろしくお願いします」

「こちらの台詞だ」

フェイトの挨拶にシグナムは返す。

「それにお前は私の直属の上司だぞ」

「それはまあ何というか、その……落ち着かなくて」

シグナムの指摘にフェイトはどこか居心地の悪そうな表情をする。

「上司と部下だからな。テストロッサに『お前』呼ばわりはよくないか。敬語で喋った方がいいか？」

どこかからかいが混じっていた。

「そういうイジワルはやめてください。いいですよテストロッサでお前で」

フェイトもシグナムがからかっているのはわかっていたのでサラリと返した。

「そうさせてもらおう。ところでテストロッサ」

「何ですか？シグナム」

「野上とは会ったのか？」

「はい。二週間前に一度」

二週間前——彼等が初めて足を踏み入れた時だ。

フェイトはそれ以降は仕事云々で会う機会が得られなかった。

「シグナムは会ったのですか？良太郎に」

「いや。来ているという話を主はやてに聞いたただけだ。直に見たのは今日が初めてだ」

シグナムもフェイト同様に仕事云々で会う機会を得る事はなかった。

「テストロッサ」

歩を進めていたシグナムが止まる。

「シグナム？」

フェイトは急な事なので、何歩か進んでから止まる。

「負けるつもりはないぞ」

シグナムがどういう意味を込めて言ったのかフェイトには瞬時に理解できた。

「私입니다。戦うからには必ず勝ちます」

フェイトもそのように返した。

互いに牽制しあっているような見える。

二人とも笑みを浮かべながらだが。

*

「はつくしよん!!」

エリオとキヤロを見送った後、良太郎は背筋に寒気のようなものを感じたのかくしやみをした。

「風邪か？」

「野上、大丈夫？」

「空気が合わなかったの？良太郎」

侑斗、デネブ、コハナに心配されるが良太郎は首を横に振る。

「何か僕絡みで起こる前兆かもしれない」

野上良太郎。

『時の運行』を護り、別世界の『時間』も護る仮面ライダー電王。

同時に不幸の女神に最も愛された男、でもある。

第十一話 「オーナーからの贈り物」

機動六課隊舎の廊下を高町なのははこれから教導するフォワード四名を連れていた。

(そういえばこういうケースは数少ないなあ)

なのはの教導は大概が一《自分》対多数(十名以上)のものであり、四名というのは少ない部類に入る。

利点とすればそれぞれの長所と短所に徹底的に向き合えるという事だ。

欠点は少人数ゆえに短所が浮き彫りになりやすいという事だ。

(でもやりがいがあるのは確かだけどね)

なのははチラリと自分の後ろを歩いている四人を見る。

(頑張らないと!)

人に何かを教えるのに必要なモノと何だろう?と訊ねられて即答できる人間はそうはいないと、なのはは答えるだろう。

彼女とて『教導に王道はない』と考えているので、『こうすればいい』とか『コレさえやってれば完璧』というようなものがあえて持たないようにしている。

後から会話が一つもないのに、なのはは不思議と感じた。

(もしかして……)

フォワードというポジションに就く事になっている四名はまだ互いに自己紹介をしていないのではないかと。

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターは数年間コンビを組んでいるので、今更する必要はない。

だが残りの二人——エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエは違う。

フェイト・T・ハラオウンの話ではこの二人は二週間前に知り合っただばかりなのだ。

もちろん、この二人がこれからフォワードというポジションで苦楽を共にするスバルやティアナを知っているはずがない。

「そういえば自己紹介はした?」

なのはは訊ねてみる事にした。

「え、えと……」

「名前と経験やスキルの確認はしました」

「あと部隊分けとコールサインもです」

スバルがどもるが、ティアナとエリオが報告した。

ちなみにキャラは発言した三人の顔を見ながら黙ったままだった。

(そこまでやってたんだ……)

なのははまだこの四人の人間関係は『仲間』ではなく、『同僚』か『知り合い』レベルだと認識する事にした。

(これから変わっていくんだね……)

「そっか。早速だけど訓練に入りたいんだけどいいかな？」

「はい！」

全員が声を揃えて返事をして、姿勢を正した。

*

コハナに気絶させられていたモモタロス達はというと。

「あーあ。イマジンぶちのめしてえ」

満天の青空を見ながら、隊舎の外の芝生で寝転がっているモモタロスは別世界《ここ》の住人が聞いたら卒倒してしまいそうな事をサラリと告げた。

「センパイ。気持ちわかるけどもう少し言葉を選んだ方がいいって。僕達ただでさえ、立ってるだけで恐れて逃げられちゃうポジションにいるんだしね」

ウラタロスはモモタロスを窘めるものの、ここ数週間で不必要に怖がられている事には内心穏やかではなかった。

「さっさと『サイキョウニシテサイアクナルモノ』をぶちのめして、帰りたくなるなあ」

比較的細かい事には気にしないキンタロスも露骨に恐れられる事にストレスを感じており、自分達の『使命』をさっさと切り上げたがっていた。

「ふあーあ。僕もう一眠りするね」

シャボン玉銃で遊んでいたリユウタロスも飽きてしまい、芝生に寝

転がって睡眠を取ろうとしていた。

「アンタ達ついていっても、私もやることないのよね〜」

ミッドチルダの文字に慣れようと新聞を読んでいるコハナも、新聞を畳んで枕代わりにして寝転がっていた。

チームデンプライナーはあぶれていた。

正式な局員でもないので時空管理局の仕事をさせてもらえるわけがないというのも重々承知しているが、『退屈を埋めたい』という欲求を抑えるのは至難の業かもしれない。

「赤チビや銀チビでもからかいにいくか？」

「やめなつて。ボコボコにされちゃうよ」

モモタロスの思い付きをウラタロスがダメ出しする。

「なのはの修行の現場に行ってみるってのはどうや？」

「僕行くー!!」

キンタロスの提案にリュウタロスは即座に乗った。

「迷惑かけるんじゃないわよって、私も行くこと」

寝転がっていたコハナもキンタロスの案に乗り気になっていた。

チームデンプライナーは退屈しのぎに、なのは達の訓練を見学する事にした。

*

「はい侑斗さん。私からの饞別や」

八神はやてはへりの発着場へと向かう中で桜井侑斗に三枚のカードを渡した。

そのカードは、ゼロノスを知る者ならば誰もが見覚えのあるものだった。

黒い本体に緑色と黄色のカラーが施されているカード。

本体色は同じだが、緑色と赤銅色のカラーが施されているカード。

黄色と赤銅色のカラーが施されているカード。

計三枚をはやては侑斗に渡していた。

「ゼロノスカード？」

口を開いたのは野上良太郎だ。

「お前が作ったのか？というよりお前、作れたのか？」

侑斗がそのような事を言うのも無理のないことだった。

使用者である侑斗も実を言えばゼロノスカードがどのような構造になっているかなんて全く知らない。

それはF1レーサーが自身のマシンのメカニズムがどのようなになっているかを事細かく知らないのと同じ様なものなのかもしれない。

「間違えたらアカンのはコレをゼロから設計したんは『青い狩人』なんよ。それでここまで作ったんはマリーさんや」

「マリーさん？」

良太郎と侑斗は首を傾げる。

「はやて。良太郎達はマリーさんを知らないって」

フェイトがはやてに指摘する。

「ああ、そやそや。堪忍な。このカードを作ったんはマリーさんことマリエル・アテンザさんなんよ」

それでも二人の青年は首を傾げるだけだった。

「会った事がないんじや無理もないけどね」

フェイトは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「で、このカードにはどんな効力があるんだ？」

侑斗が三枚のカードを一瞥してから、はやてを見る。

「外見は侑斗さんのゼロノスカードそのものといってもええ出来になってるけど、そのカードはダミーゼロノスカード（以後・ダミーカード）なんや」

「ダミー？てことは劣化品ってことか？」

「欠点がある以上は劣化品といわれても仕方あらへんね。何せそのダミーカードはある場所限定のカードなんよ」

侑斗の評価にははやては首を縦に振る。

「ある場所限定？」

「陸戦空間シュミレーター限定のカードや」

「フェイトちゃん。陸戦空間シュミレーターってなに？」

良太郎は隣のフェイトに訊ねる。

「リアル体感できるシュミレーターームって言えばわかる？」

「現実に近い設定で色んな訓練が出来る部屋ってこと？」

「うん。それで合ってるよ。なのはがスバル達を連れていつてるのもその部屋なんだ」

「そのカードがあれば侑斗さんはシユミレータ内やったら無代価で変身が出来るわけや」

良太郎とフェイトが話し合っているが、はやては気にせず侑斗に説明を続ける。

「仮に外で使ったらどうなるんだ？」

「多分やけど、動かへんと思うで。試しようにも試せる人がおらへんかったからわからへんのが本当の話なんや」

はやては自身の失態のように申し訳ない表情をしている。

「限定的だが無代価で変身できる、か……。訓練にはもってこいかな」

良太郎を一瞥してから手にしている三枚を侑斗は凝視する。

「ユウトさん。くれぐれもなくさないようにするですよ！なくしたら、紛失届けとかを書かなきゃいけなくなるですから」

はやての隣で浮遊しているリインが釘を刺してきた。

「わかってる。ありがとな八神」

「え、ええって。私と侑斗さんの仲やん。今更お礼なんか言われたら私照れてまうって……」

侑斗に素直に礼を言われて、はやては顔を赤くしてしまう。

憎まれ口の叩き合いくらいが自分達にはちょうどいいコミュニケーションと感じているからだろう。

「はやてちゃん。お顔が真っ赤ですう〜」

「本当だ。これは、なのはとシャマルに報告しておかないと」

リインは純粹にはやてのリアクションを見てはしやぎ、フェイトは普段弄られている仕返しとしてこの手の話に興味津々のなのはや三度のおかずよりもこの手の話が大好きな

シャマルに報告しようとしていた。

「ちよっ！やめてえ！私の威厳がなくなるやん!？」

「そんなのお前にはないに等しいものだろ」

はやてがフェイトに抗議するが、侑斗はサラリとキツイ事を言う。

「なっ?! 侑斗さん、すぐそういう意地悪言う!!」

「事実なんだから仕方ないだろ」

「むー!!」

侑斗を睨みながら言うが、睨まれている側はどこ吹く風の調子で受け止めていた。

発着場に着くと、ヘリコプターのジャイロが回転しながら騒がしい音を奏でていた。

ヘリコプターの側でヴァイス・グランセニックはこれから搭乗する三人を待っていた。

まだその三人の姿は見えていない。

「仮面ライダーかあ……」

これから同じ職場で手を取り合っていく相手を眩く。

ヴァイスにとっての『仮面ライダー』は電王やゼロノスではなく、『青い狩人』のAゼロノスの事を言っている。

彼及び機動六課のスタッフほとんどが『P・T事件』や『闇の書事件』に電王やゼロノスが深く関わっていた事を知らない。

いきなり現れてこれから仲間と言われても戸惑うのが当然だ。

（確か電王——野上さんの方がシグナム姐さんを倒したって人なんだよなあ）

ヴァイスは良太郎の顔を思い浮かべる。

印象としては『優男』という感想だった。

とてもあのシグナムを倒せる力を持っているとは思えなかった。

だが見かけで判断してはならないという事は管理局に勤めて八年の彼は知っている。

現に自分の上司となる存在はみな、その例に当てはまるからだ。

（そっぴや野上さんの事を話す時のシグナム姐さん、今までに見たことねえ表情《顔》するんだよなあ）

シグナムとて女性。色恋沙汰に縁がないわけではない。

（どっちなかつーと同姓にモテるんだけどなあ）

過去に何度かシグナムが女性局員に花束やらプレゼントなども

らっている現場を目撃した事がある。

(ま、まさかシグナム姐さんって野上さんに……)

ヴァイスは『まさか』の予想をする。

(でも野上さんってフェイトさんのフィアンセって噂が……)

そしてそれは決して外れてはいないという事を彼は知る由もなかった。

「あ、来た」

これから乗せる三人と見送りに来た二人が発着場へと足を踏み入れてきた。

「あ、ヴァイス君。もう準備できたんか？」

「準備万端！いつでも出れますぜ!!」

はやての言葉にヴァイスは即答する。

「うわっ。このへり、結構新型なんじゃない？」

フェイトが新型が機動六課の御用達のヘリコプターを一瞥しながら訊ねる。

「JF七〇四式。一昨年から武装隊で採用され始めた新兵器です。機動力も積載力も一級品ですよ！」

ヴァイスが誇らしげに語る。

やはり自分はヘリコプターの話をしている時が一番『生きている』という実感があるようだ。

「こんな機体に乗れるってのはパイロットとして幸せですねえ」

ヴァイスが悦に浸ろうとした時だ。

「むっ！ヴァイス陸曹!!」

リインが前に現れた。

「ヴァイス陸曹はみんなの命を乗せる乗り物のパイロットなんですか
らあ！ちゃんとしてないとダメですよー！」

リインがヴァイスに自身の責任を再確認させる。

「へいへい。わかってまさあね！リイン曹長」

とヴァイスは特に恐縮するわけでもなく返す。

「あのお」

ヴァイスはヘリコプターの周辺を見回している二人が目に入る。

その二人とは、フェイトとはやてではない。

良太郎と侑斗だ。

「何やってるんスか？お二人は……」

「え？」

良太郎と侑斗は同時にヴァイスのいる方向に顔を向けて、声を出した。

揃ってはいるが、狙って行ったわけではないというのはすぐにはわかった。

「僕達の世界ではヘリなんてテレビくらいでしか見れないから」

「生で見るなんて貴重な体験だからな。この際……」

良太郎達はいくらイマジンと戦っている『仮面ライダー電王』、『仮面ライダーゼロノス』といっても世間での立場は『一般人』である。ハッキリ言えば、ヘリコプターを拝めずに一生を終えてしまうことも別段おかしくない事だった。

「侑斗さんだつて持つてるやないの。ヘリ」

はやてが言っているのはゼロライナー二輜目『ナギナタ』である。

「アレは俺が操縦するわけじゃないし、電車からヘリになるわけだしなあ。純粹にヘリを見るなんて初めてなんだよ」

「僕もデンライナーやら『時の列車』は結構見てるんだけどね」

良太郎も庶民的な感想をもらす。

「マジッスかあ!？」

ヴァイスが信じられないという表情をしている。

フェイトやはやても同じ様な表情をしていた。

「ヴァイス君には悪いけど、ヘリよりも高性能な乗り物を取り回して
る人が……」

「デンバードⅡ(マシンデンバードⅡの略称)なんて近未来的なバイク
を持つている人が……」

「ヘリに乗ったことがないなんて……」

「もしかして君達の中では僕達つてその手の乗り物に乗つて当たり前
前つて思つてるの？」

「うん」

良太郎の台詞にフェイトとはやては即座に首を縦に振った。

「あのな、俺達がいくら電王やゼロノスに変身できるといっても、軍人でも政治家でもマスコミでもないんだからそんなへりなんて当たり前のように乗れるわけないだろ」

侑斗は、自分の世界で主にヘリコプターに乗る機会が多い職業の方達を述べる。

「フェイトちゃん達だつて管理局に入らなかつたら多分、ヘリとかに乗る機会なんてなかつたと思うよ」

「そう言われると……」

「領けてまうんやなあ」

良太郎の指摘にフェイトとはやては納得する。

「あのお、そろそろ時間おしてますんでいいですかい？」

「遅れちゃうですよ！」

ヴァイスとリインが時間を見ながら、盛り上がっている四人に割り込みをかける。

「「あ、すみません」」

それから三十秒後に発着場から一機のヘリコプターが飛び立った。

「どうしょ……」

「今更俺達の事を説明しろつてのも難しいよなあ……」

はやてがヘリコプターに乗り込む前に、告げた事を思い出した。

「はあ……」

退屈にはならないが、どのようにして六課スタッフに上手く説明できるかで頭を悩まされる事になった。

*

教導隊制服に着替えたなのはと暇つぶしとして先に来ていたイマジン四体とコハナは海に浮揚している異様な物体を見ていた。

六角形のパネルが繋がって海上へと敷設されていた。

海上に敷設されている幅からすると人工島と呼ぶにはあまりにも狭い。

何かのテレビ番組でやっていた『武舞台』に似ていた。

「広えな。あそこで戦うのかよ？」

「戦うって……。まあ間違っってはいませんけど、ちよつと違いますね」
モモタロスの質問に、なのはは笑みを浮かべながら返す。

「ドームみたいになってると思ったけど、雨とかで訓練できるの？」
ウラタロスの言うように、海に浮揚している場はどう見ても訓練場に
適しているとは思えなかった。

「ちよつとした仕掛けがあるんですよ」

なのはは笑みでやっぱり返す。

「でも何で海に浮いとる感じになつてもたんや？」

「他に適した場所がなかったんです。でも環境破壊はしてませんから
大丈夫ですよ」

キンタロスの質問に、なのはは環境に関することも告げる。

「壊れたりしないー？クマちゃんやモモタロス、バカ力だからだよ」
リュウタロスは耐久について心配する。

「にやはは。大丈夫大丈夫。モモタロスさん達の衝撃にも耐えられる
ように設計されているからね」

なのはにしてみればリュウタロスの意見は予想の範囲だったので
自信を持って答えることが出来た。

キャリーバッグを持った陸士隊服を着た女性——シャリオ・フィ
ニーノが手を振りながら歩み寄ってきた。

「シャリーー！」

そして陸士隊服から動きやすい服装へと着替え終えたフオワード
四人が走ってきた。

スバルとティアナはシャツの色が白色で、エリオとキャロは黒色の
シャツを着ていた。

全員が揃うと、なのははシャリオに目で合図を送り四人のデバイス
を返していった。

「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入っているから
ちよつとだけ大事に扱ってね」

なのはが返却したデバイスが以前とは若干違う事を説明した。

「それとメカニックのシャリーーから一言」

なのはが視線をシャリオに向けた。

「えーメカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシヤリオ・フィニーノ一等陸士です」

シヤリオは軽く会釈する。

それだけの仕種なのに、モモタロス達は拍手を送った。

だが事が進まなくなるのではないかと危惧したコハナに全員拳骨で沈められた。

頭を抱えて蹲っている四体のイマジンを見て、なのはとコハナを除く全員が一瞬だけ呆然としたがすぐに平静を取り戻した。

「みんなはシャリーと呼んでいますので、よかつたらそう呼んでね」
シヤリオは笑顔で薦めた。

「チャ……ってオイ構えんじゃねえよ!?コハナクソ女!」

モモタロスが何かを言おうとしたが、コハナが拳を握っていたので中断した。

「アンタ。次に下らないこといったら問答無用で沈めるわよ」

一体と一人のやり取りを見ながら、シヤリオはなのはに歩み寄る。

「なのはさん。あのハナつて子は何者なんですか?イマジンを平気で拳骨で沈めるなんて並の魔導師よりも強いと思いますよ」

「にやはは……。私もよくは知らないんだよね。ハナさんつて初めて会ったときからモモタロスさん達に拳骨とか蹴りとか繰り出してたから……」

なのは自身も、コハナの戦闘力に関しては一度訊ねてみようかと考えた。

「ゴホン。みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので訓練を見せてもらったりもします。あ、デバイスに関する相談等があったら何でも言っつてね」

「二はい!!」

フォワード四人は揃って返事をした。

「じゃあ、早速訓練に入ろうか」

「は、はい……」

スバルは返事をしたものの自分のいる場所が訓練に適しているとは思わないので戸惑っている。

「でも、ここにですか？」

ティアナの反応に、なのはは内心では『待つてました！』という声を出していた。

「シャリー♪」

なのははこれからすることをシャリオに任せる。

「はい♪」

シャリオは右手を上から下に滑らせるように動かす。

直後に彼女の周囲に数種類のモニターが展開された。

フォワード四人は特に驚く事はないが、モモタロス達やコハナに見ればまるで手品のようなので、大きく目を開いた。

「機動六課自慢の訓練スペース。なのはさん完全監修の陸戦用空間シミュレーター」

シャリオはこれから披露するものの説明をしながら、両手はカタカタとモニターを操作していた。

モニターの一つに『Stage Set』と表示されて、シャリオは人差し指で押す。

六角形のパネル物体が輝きだしていく。

その場の空間が歪むようにして、まるで蜃気楼が現れていくようにしてある物が出現していく。

出現していくものとは『都市』の一部分だった。

これには誰もが口をポカンと開けてただただ驚くしかなかった。隊舎屋上に一人の青年が立っていた。

侑斗だ。

ちなみにデネブはというと、食堂で厨房スタッフと共にミッドチルダの料理に関して話を弾ませていた。

イマジン達の中では意外に人と順応するのが早いのが、デネブだったりする。

「アレが八神が言っていたシミュレーターか」

侑斗は出現した仮想都市を見てから、はやてから渡されたダミーカードをポケットから取り出した。

「コイツを唯一使える場、か」

「ソレもらつてたんだ。侑斗」

侑斗の背後から声がしたので振り向くが、そこには誰も姿がなかった。

侑斗は視線を見下ろす。

おさげ髪の少女で『見た目は子供、頭脳は辛うじて大人』ともいえるヴィータがいた。

「知っていたのか？」

「うん。はやてがマリーに早く作るように急かしてたくらいだから」

ヴィータは大まかにダミーカード誕生の経緯を話す。

「今回は相手が相手だからな。いくら俺が強くて運があつたとしても、用心に越した事はないかもしれないな」

「相変わらずだなあ。お前」

ヴィータは侑斗以外が言ったら嫌味にしかならない台詞を聞きながらも視線は仮想都市を見ていた。

「そっぴや良太郎は？」

「あいつなら八神が言つてた仕事をしてるんじゃないか？」

「どんな事？」

「俺達の事を六課の連中に教えるって仕事だ」

「ソレ、ギガ難しくくない？」

「大まかなことさえわかれば問題ないだろ。俺達だって事の全てを知ってるわけじゃないしな」

侑斗にしても『時の列車』がどのように製造されたのかとか、ゼロノスや電王は誰が考え出したものかはわからない。

自分達はその『力』を使う事が出来るから使い、その『力』がおいそれと振るつていいものではないという事も何となくはわかっていてるだけだった。

「考えてみたら得体の知れない力を使ってるんだよな。俺達……」

ダミーカードを器用に人差し指でクルクルと回転させながら、呟く。

「もしかして侑斗、怖えの？」

ヴィータは侑斗の真意を訊ねてくる。

「事実を受け入れてなけりやゼロノスになんてなれねえよ」

侑斗はヴィータの質問を曖昧にぼかしながら答えた。

否定してないが、肯定もしてない答えだった。

*

機動六課の隊舎でチームデンライナーとゼロライナーに設けられた部屋で一人、良太郎は天井を仰ぎながら椅子を傾けていた。

「僕達の事を説明するっていつてもねえ……」

良太郎も侑斗同様に自分達が行使する力を全て把握しているわけではない。

自身がわかっていない事を他人に伝えるというのは極めて至難な事だ。

「みんな、ずるいよ。外に出ちゃってるもんなあ」

ここにはいない仲間達に愚痴をこぼしながら机上の紙を見下ろす。

どのような事を説明すればいいかというプランを立てようとしているのだが、紙は白紙だった。

「あーあ……」

いくら唸つても腕を組んでも、天井を仰いでもいいアイデアは出てこない。

「とりあえずこの三つくらいかなあ」

良太郎はボールペンでサラサラと書いていく。

箇条書きで三つの事が書かれていた。

電王やゼロノスの事。

イマジンの事。

特異点の事。

ボールペンをカタンと置くと、今度は窓から外を見る為に席から離れる。

「あれ？あんなところに街、あつたっけ？」

良太郎は突如出現した都市に目を丸くする。

「気分転換に見にいつてみるか」

気が滅入るので、気分転換の為に外に出て仮想都市を見に行く事に良太郎は決めた。

部屋を出て、廊下を歩くと見慣れた女性が両腕にアルミケースを手にしてこちらに歩み寄ってきた。

機動六課といういわば一つの組織の中で自分や侑斗、モモタロス達よりも目立つ服装をした女性——ナオミだった。

「あ、良太郎ちゃん。ここにいたんですかあ」

ナオミがやつと見つけたというような表情で、こちらを見ていた。

「ナオミさん。どうしたんですか？その荷物は何？」

「あ、これは良太郎ちゃんと侑斗君にとってオーナーからの贈り物だそうですよ」

「僕と侑斗に？中身は何だか聞いてます？」

「いいえ。私はコレを良太郎ちゃん達に渡すようにと言われただけなんで」

ナオミは首を横に振りながら、自分は職務を全うしに來ただけという感じで答える。

「わかりました。ちょうど侑斗やみんながいると思われる所に行こうとしていたんです。その時に渡しておきます」

「助かります。それじゃ私はこれでえ」

ナオミはアルミケースを良太郎に渡し終えると、適当なドアを開けてそのまま『時の空間』へと戻っていった。

良太郎は今の光景を見られていないか、周囲を見回す。

ナオミが帰っていく光景はある意味、魔法だが明らかに別世界『ここ』での魔法とは違うものなので見られた日には説明するのに骨が折れる。

「よかった。誰も見てない」

更に廊下を歩くと、見知った女性がこちらに向かって歩いてきた。

長身で桃色の髪をポニーテールがトレードマークともいえる女性、シグナムだ。

「野上」

「シグナムさん」

「久しいな。かれこれ十年、いやお前にしてみれば一月ぶりか？」

「侑斗から聞いてるんですね」

「ああ。それは？」

シグナムは良太郎が両手に抱えているアルミケースに目がいった。

「オーナーから僕と侑斗についてナオミさんが」

「デバイス、か？ いやお前も桜井も魔法は使えないからデバイスを有していても意味はないか……。しかし野上、質量兵器は禁止だぞ」

「質量兵器？ 何ですか？ ソレ」

聞き慣れない単語に首を傾げる。

「お前が知らないのも無理はないか。質量兵器というのはわかりやすく言えば魔力以外で使用する武器、つまりお前達で言えば拳銃や刀剣になる。それらの使用は原則厳禁となっている」

「あの、シグナムさん」

シグナムの説明に良太郎はある疑問を感じた。

「それじゃ魔法を使えない人、ええとこの場合は局員の人達はどうなるんですか？」

「現場に出ることはないし、その局員が高官だったとしたら魔導師や騎士が護衛につく事になる」

良太郎の真面目な質問に、シグナムも真面目な表情になる。

もつとも彼女の場合、少し表情を引き締めただけなのだが。

「裏をかかれたらひとたまりもありませんね……」

つまり暗殺とかになるとひとたまりもないという事だ。

「ああ。それにイマジンの事もある。その対策として質量兵器の使用許可を働きかけている動きがあるという話も出ているしな」

「それって可決されるって事は……」

「正直わからない。質量兵器が認められれば必ずといっていいほど『死の武器商人』と呼ばれるような輩やソレを中心とした犯罪組織が確立されるのは間違いないだろうからな」

シグナムの表情からして質量兵器の全面禁止は必ずしも良策とはいえないらしい。

『一般市民に武器を持たせない事によって殺生がなくなる』——その一点だけで見れば良策だろう。

しかし、裏を返せば『魔力を持たない者達は魔力を有する者達から

自身を護る術がない』という事が露呈されているのも事実だ。

「禁止されていたとしても、自身を護る手段として裏取引をしてでも手に入れようとする人達は後を絶たないでしょうね……」

法が護ってくれないなら、自身で護る。たとえ法を犯す事になってもという考えに行き着くのは決して大袈裟なものではないだろう。

「ああ。そういった者達を取り締まなければならないのは胸が痛むな」

「シグナムさん……」

「すまない。愚痴っぽくなってしまったな」

「いえ、気にしないでください」

「それで野上。お前はどこに行くつもりだ？」

「侑斗やみんながいる所に行こうと思っています。コレを侑斗に渡さないといけませんし」

良太郎は左手に握られているアルミケースをシグナムに見せるようにして持ち上げる。

「なら、心当たりがある。よければいいが案内しようか？」

シグナムの申し出に良太郎はというと。

「わかりました。お願いします」

笑顔で応じた。

「ん？シグナム。良太郎」

隊舎屋上で侑斗と一緒にフォワード達の訓練風景を眺めていたヴィータは後からシグナムと良太郎が新たに入ってきたので、顔をそちらに向けた。

「やはりここだったか。ヴィータ、それに桜井もいたか……」

「侑斗が一番に来てたけどね。ん？良太郎、何持ってんだよ？」

ヴィータは目ざとく良太郎の手に行っているアルミケースを見る。

「オーナーからの贈り物だよ。侑斗、コレ」

そう言いながら、左手で握っているアルミケースを侑斗の前に差し出す。

「何だよ？コレ」

侑斗は受け取って、アルミケースを一瞥してから良太郎に視線を向

けた。

「わかんない。中身は見えないし」

良太郎はしゃがんでアルミケースを地面に置いてから、ガチャリとストッパーを外してから開く。

中に入っていたのはスチロールで収められていた黒いパーツが四個とそれを収めるためのホルスターが入っていた。

「コレは電王の際に使っていた武器だな……」

「ホントだ……」

良太郎の横で覗き込んでいるシグナムに釣られてヴィータも覗き込んでみる。

過去に散々手痛い思いを遭わせられれば嫌でも憶えているというものだ。

「てことは侑斗の方も……」

ヴィータは侑斗のある身ケースの中身も覗きこむ。

中にはスチロールで収められている二等辺三角形の黒い物体ともう一つ黒いパーツがあり、その二つを収めるホルスターがあった。

それはゼロガツシャーだとヴィータはすぐにわかった。

「手紙だ……」

侑斗は閉じられている手紙を開く。

「ええと。『これからの戦いは電王やゼロノスになって戦うばかりではない状況に追い込まれるかもしれません。そのため、護身用として変身前限定で使用可能なデンガツシャー』

とゼロガツシャーを送ります。有効に役立ててください。追伸：もし、局員の人達に訊ねられても『アームドデバイス』と言っておけば大丈夫なので安心して持ち歩いてください。オーナー』

何したんだ……。あの人」

侑斗が同じ様に、手紙を見ている良太郎を見ていた。

「まあ……いいんじゃない。正直、変身できない状況で武器なしってというのは正直きついしね」

「あのオッサンが何したのか気にならねーのかよ？良太郎」

ヴィータは侑斗と対照的に楽天的な返答をした良太郎を見る。

「オツサンって……。ヴィータちゃん、モモタロスみたいだよ」

「なっ!? あ、あんな脳みそ空っぽの赤鬼と一緒にすんじゃねーよ!!」

ヴィータは自分の中で同列されると最も屈辱になる者の名前を挙げられて憤慨した。

「ところでヴィータ。お前はいいのか?」

ヴィータの怒りが収まった頃を見計らってシグナムは口を開いた。

「四人ともまだヨチヨチ歩きのヒヨッコだ。あたしが教導を手伝うのはもうちよつと先だな」

ヴィータは平静を取り戻しており、フワード四人の現状を見てから適した事をいう。

「それに自分の訓練もしたいしき……。同じ分隊だからな。あたしは空でなのはを護ってやらなきゃいけないし、それに……」

「ん?」

ヴィータが何かを言おうとして押し黙り、シグナムは声に出して訊ねはしないが何をいいたいのか気にはなっていた。

「アイツをあのバカ鬼を倒すのは、あたしだから……。借りはきっちり返してやる……」

「そうか……」

シグナムは納得してくれたようだ。

「そういえばシャマルは?」

ヴォルケンリッター『湖の騎士』の所在を訊ねる。

「自分の城にいる」

シグナムが短く答えた。

*

シャマルが掌を合わせて、喜色の色を浮かべていた。

「うーん。いい設備♪」

笑顔で机を擦っていた。

「これなら検査も処置もかなりしつかりできるわね♪」

「本局医療施設の払い下げ品ですが、実用にはまだまだ充分ですよー」

「みんなの治療や検査。よろしくお願いしますね。シャマル先生」

「はーい。いつでも私の仕事がたくさんあるって褒められる事じゃな

いでしょ」

払い下げ品の最終チェックをしているルキノ・リリエとアルト・クラエツタの言葉に返事で返すが、即座に突っ込んだ。

いわゆる『ノリツツコミ』というものだ。

シャマルの仕事は医療だ。

主にスタッフの身体管理及びメンタルケアなどだ。

暇な時は、湯呑みに茶を淹れて和菓子を食べながら唯一寛ぐ事の出る場でもある。

しかし訓練などの時は怪我人が出やしないかと胃をキリキリしてしまう事もあるが。

「訓練初日で怪我人は出ないでしょ。多分」

なのはの訓練で医務室に運び込まれるとしたら相当なものはずだ。

しかし、シャマルは自分の読みの甘さを知る事になる。

これより三時間後に。

第十二話 「訓練と訓練まがい？」

シュミレーターで作られた仮想都市にフォワード四人とイマジン四体にコハナ、シャリオ・フィニーノ、高町なのはは足を踏み入っていた。

とてもまがいものとは思えないくらいに精巧な造りだった。

ガラスを壊せば音が鳴って破片が飛び散るだろうし、ビルの壁に爪を立てて引っかければ生理的に寄せ付けない音も鳴りそうなくらいリアルなものだった。

もちろん、この地面で躓いたら膝をすりむく。

「みなさん。凄く驚いてますねえ」

ビルの屋上にいるシャリオは周囲をキョロキョロしている地上の四人と四体のリアクションを楽しんでいた。

「この顔を見る為に、ひたすらリアルに追求したかいがあったよねえ」
なのはは満足げな表情を浮かべていた。

思い起こせばこのシュミレーターを作る際に、色々な苦労があったとなのはは振り返る。

全てがリアル体感できるという事はそれらを数値化させる為に、実験が行われていた。

なのはが監修しているといっても、彼女の性格からして後ろで腕組んであれやこれやと仕切る事などはせずにはほとんどが彼女が被験体となっていた。

つまり躓いて膝がすりむいたりビルの壁に爪を立てて生理的に寄せ付けない音が鳴るのも全て、なのはが直に味わったものだという事になる。

後は何人かに声をかけて付き合ってもらったりもしていたわけだが。

その体験者達いわく『もう二度と体験したくない』とのことだ。

「なのはさん」

シャリオが腕を組んで、空を見上げているなのはに声をかける。

「みんなの血と汗と涙と笑いがこのシュミレーターを生んだんだよ。あ

りがとう……」

「なのはさん、血と汗と涙はわかりますけど笑いは関係ないような……」

なのはの呟きにシヤリオは冷静にツツコミを入れた。

「何だよココ。ビルばつかじゃねーかよ」

仮想都市を見回しながら、モモタロスは感想をもらした。

「センパイ。訓練を想定する街にコンビニがあるわけないじゃない」

ウラタロスが、店を探し回って現在は愚痴っているモモタロスに指摘する。

「確かにリアルに出来てるかもしれへんけど、あんまり面白みのない場所やで。ただ建ってる物がリアルに出来てるだけやもんなあ」

キンタロスは親指で首を捻ってから腕を組む。

「ここで訓練するっていつても何も無いよー。ビルでも壊すの?」

リュウタロスは愛銃リュウボルバーを喚び出して、ジャキリとビルに向けて構える。

「それじゃ管理局の訓練にならないわよ」

コハナは服装はそのままだが、軽く準備運動はしていた。

彼等はフォワード四人とは違う場所にいる。

「何にもねーからこうやって寝転んでもいいんだよな?」

モモタロスは道路で寝転び始めた。

「道路で寝転ぶなんて貴重な体験だけどセンパイ。空から襲い掛かってきたらどうすんの?」

「なのはの性格からして不意打ちなんてしねーだろ」

そう返した。

「訓練だからっていきなり予告なしに襲い掛かってくるような事をする子じゃないのはわかってるけどね」

ウラタロスも道路に座り込んだ。

「なのはも十九やで。管理局に十年おるんや。子供と思ったら大怪我するかもしれへんで」

キンタロスがエア突っ張りをしながら言う。

「なのはちゃん。尻尾が一本になったから大人になってるもんね」

リュウタロスはリュウボルバーの銃口を空や斜め上などに構える。引き金は絞ってはいない。

「どうしてなのはちゃん。私達とあの新人さん達をバラバラにしたのかしら……」

コハナはオープンフィンガーのグラブを指に通しながら、疑問に感じた。

「よしつと。みんな聞こえる?」

ビルの屋上でシャリオとこれからの準備をしていたなのはは仮想都市にいる全員に声をかける。

全員の返事が返ってきた。

「じゃあ早速ターゲットを出していこうか。まずは軽く八体から」

そう言うとシャリオに顔を向ける。

「動作レベル一。攻撃精度二つとところですかね」

シャリオが両手で器用にカタカタと宙に浮かんでいるモニターを操作していく。

「私達の仕事は搜索しているロストログアの保守管理。その目的の為に私達が戦う事になる相手は……コレ!」

なのはが言い終えると、地上ではフォワード達の前に水色の魔法陣が展開されて、楕円形で中央に黄色の目がある機械兵器が出現した。

「自律稼働型の魔導機械。コレは近づいてきたら攻撃してくるタイプね。攻撃は結構鋭いよ」

シャリオが機械兵器の特徴を説明しながら若干脅しに似たコメントももらす。

「では第一回模擬戦訓練。ミッションの目的、掃討するターゲットの破壊もしくは捕獲。十五分以内に!」

なのはがそのように告げると、フォワード四人の返事が返ってきた。

「それでは……」

「ミッション……」

「スタートオオ!!」

シャリオとなのはが同時に声を揃えて言うと同時に訓練が始まっ

た。

「なのはさん。フオワード達の訓練が始まったのはいいですけど、その……」

シャリオは展開しているモニターをチェックしながらも、気になっている事を打ち明ける事にした。

「モモタロスさん達のこと？」

なのはがシャリオが言いたい事を先に言った。

「はい。その……どうするんですか？同じ様に訓練をするんだったらわざわざ別の場所に移動させる必要なんてないですよね？」

「正直に言うかね。今モモタロスさん達と訓練をさせたら、その……間違いなく……」

なのはは歯切れ悪く口ごもっている。

「あの子達が確実に自信をなくすと思う……」

「イマジンを倒す事にですか？それともこれから一緒に戦う事に、ですか？」

「……両方だよ」

なのはは一番最悪な事を告げた。

「モモタロスさん達と一緒に訓練して、今のあの子達が知ってしまった事はまず『自分達では逆立ちしてもイマジんに勝てない事』と、モモタロスさん達との戦いに介入しても『手伝う』どころか『足を引つ張る』かたちになってしまう事、だからね」

「じゃあ、野上さん達と訓練すれば……」

シャリオの打診に、なのはは首を横に振るだけだ。

「それも効果はないよ。仮に良太郎さん達と訓練しても、それは『良太郎さん達とあればイマジンを勝てる』であってあの子達自身が成長する事には影響があるとは思えない」

よ。私もそうだったしね……」

なのはは、初めてイマジンを戦闘した時の事を思い出していた。

「なのはさんは確かスクライア司書長と一緒にイマジンを戦った事があるんですよね」

「今思い出しても、あの時一緒に戦ってたのがユーノ君じゃなかった

「私は無事じゃなかったかもしれないね」

「なのはは無限書庫のトップで業務に勤しんでいる青年の顔を思い出す。」

「シャリー。モモタロスさん達にはさっきの十倍の数を用意してあげて」

「じゅ、十倍?! 本気ですか!？」

「なのはの申し出に、シャリオは思わず返してしまおう。」

「うん。本気だよ」

「なのはの瞳に迷いはない。」

「ここで八十体の機械兵器が出現すると、仮想都市の中には計八十八体の機械兵器がいる事になる。」

「ちよつとした戦争になっちゃいますね……」

「シャリオは苦笑するしかなかったが、なのはの命に従い出現させた。」

「その直後に立て続けに爆発音が鳴り、爆煙がたつのを見てシャリオは口元を引きつるしかなかった。」

「やはり問題にはならんな」

「仮にもあたし等を倒した奴等だぜ。あんな機械に負けるかよ」

「隊舎の屋上で仮想都市の戦況を見学していたシグナムとヴィータが空に昇っていく爆煙を見ながら感想をもらった。」

「二人は爆煙を起こしたのがフォワード達ではないという事はすぐにわかった。」

「残酷な事を言えば、あの四人ではとてもではないがこの短時間では破壊など出来ないからだ。」

「少しはストレス発散になってるといいけど……」

「オーナーから貰った護身用デンガツシャーをソードモードにして素振りをしている野上良太郎も仮想都市を眺めながら言った。」

「あいつ等だけじゃなく、俺達も肩身は狭かったしな」

「護身用ゼロガツシャーをボウガンモードにして、発射の構えを取っている桜井侑斗も同意した。」

「ならお前達も参加したらどうだ?」

「いいんですか？」

「新人達の訓練が終わって休憩してる時にやればいいじゃねーか。あの妙なオツサンがくれた武器の試運転とか侑斗だったら、はやてから貰ったカードを使うって名目があれ

ばさ、なのはも納得するかもしれねーし」

シグナムの打診に良太郎は問い返し、ヴィータがなのはが納得するかもしれない言い訳の例えを二人に教えた。

「な、何だよ？」

じつと見ている良太郎と侑斗を見て、ヴィータは睨む。

「ヴィータちゃんそんな事を言うなんて……」

「十年経って賢くなったんだな。お前……」

二人のあまりの言葉にヴィータはというと。

「お前等!! あたしをどんな風に見てたんだよ!？」

両腕を高らかに挙げて、吠えた。

「モモタロスと似たもの同士かなって……」

「というより、同類だろ」

良太郎は穏便な感じで言うが、侑斗はストレートに言った。

「あたしを赤鬼と一緒にするんじゃないじゃねえええ!!」

更に吠えた。

「そういう所がモモタロスと同類だと言われる所以なんだがな」

三人を見ているシグナムが腕を組んでヴィータの耳には届いていないと判断して呟いた。

*

時空管理局ミッドチルダ地上本部中央議事センターの会議室の一つは昼間なのに、異様に暗かった。

太陽の光が入らない部屋のため、常に証明機器が必要なのだが本日はとある目的の為に証明は全てオフにされていた。

そこには地上本部のお偉い方達が数名とフェイト・T・ハラオウンと八神はやてがいた。

本日は機動六課の設立趣旨を発表する為に席を設けたわけだ。

(はやて。イマジンの事はわかるけど、良太郎たちのことも話さない

といけないのかな……)

フェイトは良太郎と十年ぶりに会った際の夜のやり取りを思い出しながら、念話の回線を開く。

(気持ちはわかるでフェイトちゃん。野上さんのお願いを聞いてあげたいって気持ちは。私かてできれば侑斗さん等の内部事情は打ち明けたくないんや)

はやてとて、異世界から来た仮面ライダー達の事情は承知している。

だが、隠蔽となつてくると後々でその辺りを突っついてくる輩がないとも限らない。

この手の事で最善の策となるのは『隠し通す』ではなく『先に暴露する』になる。

早い内に痛いところはつつかれた方がマシというのは既に歴史が語っている。

機動六課において一番叩かれて痛いところは間違いなく『異世界の仮面ライダーの存在』だ。

高ランクの魔導師が何人でかかってても倒す事が出来ない存在——イマジンを唯一倒すことが出来る戦力を独占していると見られていて間違いないだろう。

(それにフェイトちゃんもわかってるやろ？野上さん等がイマジンと戦えば戦うだけ、マスコミやら何やらは絶対につついてくるって。完全に隠し通すことは不可能やって事も)

(う、うん……)

良太郎達がイマジンと戦えば戦うだけ望む望まない関係なく知名度は上がっていく。

それが時空管理局と縁があると思われる人物ならば好奇心が湧かないわけがない。

その好奇心が純粹か邪かは別にしてもだ。

(始めよか)

(うん)

はやてはこれ以上の念話はグダグダ、つまり何の進展もないことだ

と判断した。

フェイトもそれには同意し、念話の回線を切った。

「本日はこのような席を設けさせていただき、誠にありがとうございます。それでは始めさせていただきます」

フェイトが最初の挨拶をし、二人はこの場に集まった面々に頭を下げた。

「搜索指定遺失物——ロストロギアについては皆さん、よくご存知のことと思います」

はやては、愚問に近い事から切り出した。

「様々な世界で生じたオーバーテックノロジーの内、消滅した世界や古代文明を歴史に持つ世界において発見される危険度の高い古代遺産……」

その場にいる誰もが、はやての説明に対して「何を今更」とか鼻で笑うような小馬鹿にした態度は取っていないなかった。

それだけロストロギアが脅威だという事になる。

はやてが説明している間も、大型スクリーンの映像は切り替わっていく。

会議室にいる誰もが映像を目で追いながら、耳ではやての言葉を聞いている。

「特に大規模な災害や事件を巻き起こす可能性のあるロストロギアは正しい管理を行わなければなりません。盗掘や密輸による流通ルートが存在するのは確かです」

盗掘にしろ密輸にしろ共通している事はロストロギアが『金のなる木』だという事だろう。

自身が巨万の富を得る事やロストロギアを兵器として用いようとする者達は世界の一つや二つ、滅んでも構わないと思っっている事も否定できないというのも事実だ。

スクリーンは過去に存在したロストロギアの事例から一つの赤い結晶体へと切り替わる。

「さて、機動六課が設立されたのには一つの理由があります。第一種搜索指定ロストロギア……通称レリック……」

「このレリック。外観はただの宝石ですが、古代文明時代に何らかの目的で作成された超高エネルギー結晶体であることが判明しています」

はやてからフェイトへと交代し、スクリーンはレリックと呼ばれている宝石の詳細が表示されていた。

「レリックは過去に四度発見され、そのうち三度は周辺を巻き込む大規模な災害を引き起こしています」

フェイトの説明と同時にスクリーンはレリックによって引き起こされた過去の災害が映像で映し出されていた。

室内にいる面々がどよめく。

「そして後者二件ではこのような拠点が発見されています」

スクリーンには研究施設らしきものが映し出された。

『らしき』というのは、映像に映し出されているものは原形を留めていないからだ。

スクリーンにカーソルが出現して、ある一部分をクリックする。

「極めて高度な魔力エネルギー研究施設です」

拡大表示されてから更に画面が切り替わる。

画面には研究施設が破壊された廃墟が映し出されていた。

「発見されたのはいずれも未開の世界。こういった施設の建造が許可されていない地区で、災害発生直後にまるで足跡を消すように破棄されています……」

フェイトは少しだけ移動してから足を止める。

「悪意ある少なくとも法や人々の平穏を護る気のない何者かがレリックを収集し、運用している広域次元犯罪の可能性が高いのです」

フェイトの口調にはどこか棘があった。

まるで、この事件の首謀者を知っているようにも感じられる。

スクリーンに映し出された映像が消える。

「そして、何者かが使用していると思われる魔導機械がこちら……」

消されたスクリーンがまた映し出される。

それは楕円形で一つ目の機械兵器だった。

「通称ガジェットドローン。レリックを始め、特定のロストロギアの反応を捜索し、それを回収しようとする自律行動型の自動機械です……」

フェイトとはやての機動六課設立趣旨の説明はまだ続く。

*

ギユイイインと車輪が回転している。

車輪とはスバル・ナカジマが履いているローラーの車輪だった。

彼女は見た目に反して素早く逃亡している楕円形の自動機械――
「ガジェットドローンを追いかけていた。

「はあああああああ!!」

スバルは跳躍して、リボルバーナックルを装着している右腕を振りかぶる。

彼女の視界には四体が固まって逃走しているガジェットドローンが見えた。

振りかぶった拳をその中央に放つように照準を決める。

リボルバーナックルのスピナーが回転する。

一直線に拳を放つと同時に、水色の魔力弾が発射された。

魔力弾は一直線に向かうが、ガジェットドローン四体は後ろに目でもあるようにして、素早く四方に分かれた。

爆煙がたつが、それは魔力弾が地面に直撃したものであり破壊によつて生じたものではなかった。

着地して、ローラーの回転に流れるようにして進むスバルは停止する。

「何コレ!?動きめっちゃ速い!」

スバルとしてはあそこまで速いとは想像していなかった。

更に爆煙がたっていた。

「モモタロスさん達、だよね……」

一応自己紹介は終わっているのですが、イマジン達の名前は知っている。外見だけならば間違いなくイマジンだ。

しかし態度や挙動を見るかぎりでは、人間と大して差がないように思えた。

むしろ人間よりも人間臭く感じる。

イマジンだから『敵』という認識を持っていないわけではないが、彼等が敵と思う事は出来なかった。

仮に戦う事になったとしても、勝てる見込みはゼロだが。

(はっ！今は訓練に集中しないと!!)

スバルは前方を見る。

そこには標的であるガジェットドローンの姿は当然あるはずもなかった。

エリオ・モンディアルは槍型アームデバイス『ストラーダ』を構えて、眼前に向かってくるガジェットドローンを見据えていた。

(来る……)

時空管理局に身を投じると覚悟を決めた以上、戦わなければならないという事も理屈では理解していた。

そしてエリオにとって、これは人生初の限りなく実戦に近い模擬戦だ。

緊張が本人の意思とは裏腹に身体全身を支配していた。

(大丈夫。やれる……)

自分に言い聞かせるようにして、エリオは心中で呟く。

ガジェットドローンの飛行音がエリオの両耳にはつきりと聞こえてくる。

眼前に現れたガジェットドローン四体が魔力弾を数発発射させた。

素早く避けながら前進して、視線を左斜めへと向けて高く跳躍する。

宙に浮いた状態でストラーダを冗談に構えてから振り下ろし、さすが第二撃として右に薙ぎ払うようにして振るう。

魔力で圧縮した金色の刃が二つ、縦と横でガジェットドローンに向かっていく。

ガジェットドローンは予期していたかのようにして、難なく避けて前進する。

エリオが放った二つの刃はビルの一階に激突して、爆煙をたてながら消失した。

着地してから、その場から離れていくガジェットドローンに視線を向ける。

自分の中では結構いい具合に『捕らえた!』という感触があった。「駄目だ……。フワフワ避けられて当たらない!」

両肩を上下に揺らして、息を整えながらエリオは言う。

(モモタロスさん達はこれだけ速い動きをするヤツを始まって早々に一体、破壊してるなんて……)

同じ場所にいる以上、姿はわからなくても爆煙を起こしたのが自分達ではないのだから消去法ですぐにわかる。

だから破壊とまではいかなくても、ダメージを負わせるぐらいはできると思っていた。

だが現実には自分の攻撃を相手はあざ笑うかのように、避けてしまったのだ。

正直、シヨックといえばシヨックだ。

歴然とした差のようなモノがハッキリとわかってしまったのだから。

(だけど、くさってたって仕方がない!)

気持ちを切り替えて、対策を考える事にした。

「前衛二人。分散しすぎ!!ちよつとは後ろの事も考えて!」

(は、はいっ!)

(ごめん!)

数あるビルの屋上でキャロ・ル・ルシエと共に後衛のポジションについていたティアナ・ランスターは前衛二人を叱り、エリオとスバルは念話で謝罪の返事をした。

アンカーガンを移動しているガジェットドローンの背中に狙いをつける。

オレンジ色の魔力球がアンカーガンの銃口に収束されていた。

「チビッコ。威力強化をお願い」

「はい!ケリュケイオン!」

ティアナの指示に従い、キャロは左手に嵌められているグローブ——インテリジェントデバイス『ケリュケイオン』に命じる。

ケリユケイオンの核ともいえる珠が輝いて主の命に従う。

『Boost Up』

ケリユケイオンが発すると、桃色の魔法陣がキャロの足元に出現する。

ティアナに力を振り分けるための動作なのか、左手を振り払うようにする。

直後、オレンジ色の魔法陣を足元に展開させたティアナに今までにない力が宿る。

(これが強化……)

ティアナにしてみれば知識で知っていたとしても、体験はそうそうにないことなので身体に妙な感覚が走った。

「シユウウウウウトオオオオオ!!」

アンカーガンの引金を振り絞る。

銃口で収束されていたオレンジ色の魔力球は四発の魔力弾となつて、ガジェットドローン四体に向かっていく。

照準はバツチリの直撃コースとなっていた。

(行ける!!)

ティアナはこれまでの経験からして確実に貫けると思った。

だが……

魔力弾とガジェットドローンとの距離がゼロになった時に、予測も出来ない事が起きた。

ガジェットドローンの機体を護るようにして、何かが展開されてティアナが放った全弾を消滅させたのだ。

「バリアッ!」

「違います。フィールド系!」

ティアナの推測が間違いであるようにキャロが即座に返した。

「魔力が消された!」

それは念話越しにスバルにも伝えられた。

(そう。ガジェットドローンにはちよつと厄介な性質——機能があ
るの。攻撃魔力を掻き消すアンチマジックフィールド——AM
F。普通の射撃は通用しないし……)

なのはの解説を聞きながらも、スバルの目には四体のガジェットドローンの姿が目に入った。

壁に登っていくようにして、ビルの上へと逃げていく。

「っのお!!」

スバルは追いかけるようにして水色の魔力で構築された一筋の道を出現させて、空中に敷設させていく。

水色の魔力道——ウイングロードに乗っかって、ローラーを回転させてガジェットドローンを追いかけた。

スバルがウイングロードを伝って、ガジェットドローンを追撃しようとする姿はティアナの目にも映った。

「スバルー馬鹿ー危ない!!」

AMFを使用できる機械兵器に真正直に魔法を用いる事が得策とは思えなかった。

だが、スバルにティアナの注意が聞こえるはずもなかった。

(それに、AMFを全開で展開されると……)

なのはの解説はまだ続いていた。

「あ……」

スバルが展開したウイングロードがガジェットドローンまで前進するが、先端が歪み始めていた。

それどころか今迄一直線に空中に敷かれていた部分までグニャングニャンと動き始めていた。

AMFの影響で、ウイングロードは原型を留める事が出来なくなり始めていた。

そうなる上に乗っているスバルにしてもバランスが一気に崩れてしまう。

「わっ、ひゃああああああ!!」

完全に留められなくなってしまったウイングロードにスバルは弾かれ、前方のビルに激突した。

スバルが激突した際には無難、窓ガラスが割れる音も聞こえた。

「凄いいリアル……。本当に徹底してるんだ……」

このシュミレータのリアルさと、なのはの拘りにティアナは改めて

舌を巻くしかなかった。

(飛翔や足場作り。移動系魔法の発動も困難になる……。スバル、大丈夫?)

派手にガラスの割れる音がしたが、ティアナはスバルの安否に関してはさほど心配していなかった。

「な、何とか……」

と返事する事はわかっていたのだから。

「AMFか……」

「対魔法対策としては最高のものだな」

護身用のデンガツシャーとゼロガツシャーを独自で振り回していた良太郎と侑斗はガジェットドローンが展開させた魔法に対抗策はあるのかと、思考を張り巡らせる。

「だけどんなモノでも完璧じゃねーってのが」

「世界の常識だ」

ヴィータとシグナムはAMFを使用するガジェットドローンには倒せる方法があるような口振りをする。

「僕達だったら……」

「魔法を使えない以上、AMFの摘要範囲外だから簡単に壊す事が出来るってわけだ……」

対策の一つとは言い難いが、一つといってもいい。

有無を言わせぬ物理破壊。

圧倒的な力を有する者のみに許される手段。

イマジンを倒し、魔導師や騎士とも互角以上に戦える仮面ライダーのみに許される手段だ。

「あいつ等はそんな事考えずに実行してるけどな」

腕を組んで、ヴィータはシミュレータ内を見る。

その視線に映るのはフォワードではなく、イマジン四体だった。フォワードが考えながら、ガジェットドローンに対しての策を練っている中でモモタロスをはじめとするイマジン四体とコハナはという。

「四十九っ!!」

モモタロスが破壊したガジェットドローンをカウントしながら、専用武器であるモモタロスオードを上段に振り下ろして真つ二つにした。

バチバチと火花を散らして爆発した。

「五十ツとお」

ウラタロスがサッカーボールを浮かせるようにして、地面に転がって起き上がるようにしているガジェットドローンを蹴り上げた。

「ばーん!!」

リュウタロスがリュウボルバーの銃口をウラタロスによつて宙に浮かされたガジェットドローンに狙いをつけて引金を絞った。

紫色のフリーエネルギーの弾丸が機体の腹部を貫いた。

空中で爆煙がたつ。

「おっしやー！十体！気倒しや!!」

キンタロスは突っ込んでくる一体を両手で受け止めてから、右手で片手持ちする。

ボウリングの球を持つような姿勢になっていた。

親指、中指、薬指に力が入っており、握られているガジェットドローンには三箇所がめり込んでいた。

「行くでええええ!!」

右腕を大きく振りかぶつてやや前傾姿勢となり、左足を前に押し出して振りかぶっていた右腕を前へと振った。

ブオンという空を裂く音が鳴り、脳天に三本の穴が出来ているガジェットドローンが迫ってくる同機に向かっていく。

一体に激突して爆発する。

隙間なく並んでいたガジェットドローンは避ける事も出来ずに誘われるようにして爆発していった。

その光景は花火のようにも見えた。

もっとも花火のように人を魅了するような美しさは欠片ほどにもないが。

「おっしやストライクや!!」

キンタロスはガッツポーズを取って喜ぶ。

「やるじゃねえかクマ！俺も負けてられねえぜ。カメ、手頃なヤツ一匹持つてこい！」

感化されて対抗意識を燃やしたモモタロスにはウラタロスにガジェットドローンを一体持つてくるように言う。

「手頃なヤツつて……センパイ、こいつ等言っておくけど魚じゃないんだよ？」

そう言いながらも、ウラタロスはモモタロスに一体のガジェットドローンを蹴りで宙に浮かす。

その軌道はモモタロスへと向かっていた。

「小僧！合わせろ!!」

リュウタロスに叫んで跳躍する。

「え？う、うん！わかった！」

モモタロスにいきなり指名されたリュウタロスはリュウボルバーを投げ捨てて、同じく跳躍する。

モモタロスは右脚、リュウタロスは左脚を宙に浮いているガジェットドローンに狙いを定める。

「いつけええええ!!」

二体は同時のタイミングで振り上げて脚をガジェットドローンに直撃させる。

イマジン二体分のフリーエネルギーを帯びたガジェットドローン十九体に向かっていく。

避ける事もなく、激突する。

一体の爆発が連鎖反応の如くドオンドオンとけたたましい音を立てながら爆発していく。

「あーあ、終わっちゃったわね」

間近で傍観していたコハナはイマジン四体を作り出した惨状を見ていた。

ビルのガラスは破壊され、八十体のガジェットドローンは胴体を裂かれたり、貫かれたり、内部の部品が地面に転がったりしていた。

「凄いね。こんな惨状までキチンと表現されてるなんてさ……」

「真面目なのはらしいっていえばらしいわなあ」

ウラタロスとキンタロスは目の前の光景を見ながら、なのはの監修に感心する。

「おーい。なのはあ！メガネの姉ちゃん！終わったぞー！おかわりくれー！」

「くれー！」

モモタロスとリユウタロスは、なのはとシャリオがいるビルに向かって催促した。

「おかわりい!?!」

宙に出現しているモニターに映し出されているモモタロス達の映像を見て、シャリオの眼鏡がずるりと落ちた。

「開始十分で八十体が全滅なんて……」

一分間に八体破壊しているという計算になる。

「それでもまだ本気にはなっていないんだからね」

なのはもモニターを見ながら、四体のイメージを見ながら微笑ましく見ている。

(あれから十年。全然変わってないなあ)

十年前に自分が彼等を見て、『得たい』と思った強さは更に成長しているようにも思えた。

「なのはさん。どうします？おかわり出した方がいいでしょうか？」

「うーん。いくら出しても結果はわかりきってるしね。退屈になるかもしれないけど、こっちに戻ってきてもらおうっか」

「わかりました。すみませーん。こっちに戻ってきてくださいーい」

シャリオがモモタロス達がいる場所にモニターを展開させて、告げた。

モモタロス達が不満をこぼすのは、なのはにしてみれば予想の範囲内だった。

なのは、シャリオとイメージ達のやり取りはフォワード達にも伝わっていた。

「……………」

ティアナとキャロは何もいう事が出来なかった。

わかつてはいた事だが、戦闘力に差がありすぎると改めて突きつけ

られた。

正直、魔導師ランク試験の時にライナー電王に助けてもらってよかったと安堵する。

でなければ、自分はこの場にはいないのだから。

(でも、いつまでも逃げ回ってるってワケにはいけないのよね……)

今は電王が助けてくれるかもしれない。

だが、そういうわけにはいかないというのも確かだ。

いずれは自分達で何とかしなければならぬ。

そのためにもまずは、眼前の課題である『十五分以内にガジェットドローンを破壊、捕獲』を突破しなければならぬ。

ティアナは後方のキヤロを見る。

その瞳には『諦め』や『ヤケ』というものは含まれてはいなかった。むしろ『闘志』が更に上がっているようにも思えた。

(諦めるより足掻く、か。チビッコなんて言えないわね)

「チビッコ。名前何て言ったっけ？」

ティアナは展開しているモニターに映し出されているガジェットドローンとモモタロス達が繰り広げた跡地を見ながら、キヤロに訊ねる。

「キヤロであります」

「キヤロ。手持ちの魔法とそのチビ竜の技で何とか出来そうなのある？」

「キユワー」

地に足着けてフリードリヒは翼を広げていた。

それは『呼んだ？』か『出番？』というジェスチャーにも思える。

「してみたのがいくつか……」

「私もある」

キヤロの気持ちは今の自分と同じだった。

(スバル)

念話の回線を開いた。

ウイングロードが消失した勢いで、ビルに突っ込んでしまったスバルは起き上がっていた。

「オツケー。エリオ」

ティアナとの念話は会話らしい会話はなかったが、意図は理解できた。

何かをやるうとしているのだろうか。

そうなる、自分と似たポジションに就いている少年にも伝えなければならぬ。

スバルはエリオへ念話の回線を開く。

「あいつ等に先行して足止めできる？」

(え？ええと……)

エリオはその意図がわからないので戸惑っている。

「ティアが何かを考えているから時間稼ぎ！」

簡潔に説明をした。

(やってみます！)

エリオも了承してくれた。

その直後、スバルはビルから飛び出した。

ティアナの作戦を成功させる為に。

小石が隣ビルの貯水タンクにカンと当たっていた。

「おしっ！当たったぜ!!」

小石を投げたモモタロスがガッツポーズを取っていた。

「それじゃ僕もー！」

リュウタロスも振りかぶって小石を隣ビルの貯水タンクに向かって投げた。

やはりカンと当たった。

「よし。この手や！」

パチンとキンタロスは将棋盤でウラタロスと二人で将棋を指していた。

ちなみにこの将棋盤もこのシユミレーターの建造物同様に実物ではない。

「フフン。引っかかったね。キンちゃん♪」

わざと不利になるように指していたウラタロスは狙いを定めるかのような手を指していた。

コハナは、なのはの隣に座っている。

「それにしてもみんな、よく動きますねえ」

シヤリオはモニターを操作しながら感想をもらす。

「危なっかしくてドキドキだけどね〜」

なのはにしてみれば危うさ満載というところなのだろう。

「ん？どうしたんですか？ハナさん」

なのはは先程から感じる視線の元であるコハナを見た。

「教官なんだなあって」

「え、えへへ」

コハナの一言に、なのはは照れが入って笑ってしまう。

「そ、それよりシヤリリー。デバイスのデータは採れそう？」

なのはは気を取り直して、シヤリオに訊ねる。

「いいのが採れてます。四機ともいい子に仕上げますよお」

シヤリオの瞳が輝いているのは決して気のせいではないだろう。

「レイジングハートさんもご協力お願いしますね」

『オーライ』

シヤリオの言葉に、なのはの首元に吊られている赤珠で待機状態のレイジングハート・エクセリオンは輝かせて答えた。

スバルとエリオは先回りして、ガジェットドローンが来るのを待ち構えていた。

スバルは地上で。

エリオは歩道橋でだ。

エリオのいる場にガジェットドローンが四体移動してきた。

「行くよ！ストラーダ！」

迫り来る四体をエリオは睨む。

「カートリッジロード!!」

『エクस्पロージョン』

ストラーダはガシャンと音を立ててから、スライドカバーからカートリッジを排莢する。

エリオの足元に金色の三角形の魔法陣が展開される。

ストラーダから稲光が帯びている。

両手で抱えて、豪快に振り回す。
ブンブンと空を裂くような音が聞こえてくる。
ひたすら回す。

(来い。来い……)

ガジェットドローンが来るのを待つ。

距離が近くなり、こちらの間合いに入ると同時に、

「でええええええええええええいいいい!!」

頭上で振り回していたストラダーを片手持ちにして、右、左、左、右
というように足元の歩道橋を斬りつけていく。

そのたびに、破片と埃が舞う。

完全に切り裂いた感触を得ると、エリオはその場から離れるように
して跳躍する。

ガジェットドローン四体はそのまま引き寄せられるようにして
真っ直ぐに進んでいく。

土埃と砂煙が辺りを舞う。

その内、二体がその中から突き出てきた。

ローラーで助走をしたスバルは跳躍して、リボルバーナックルを振
りかぶってから真っ直ぐに放つ。

「潰れてろお!!」

ガジェットドローンに直撃するが、AMFを展開しているためにダ
メージには繋がらない。

弾かれてしまい、スバルはバック転を宙でしてから地面に着地す
る。

「やっば、魔力が消されちゃうとイマイチ威力が出ない」

ぼやきながらもどうしたらいいかはわかっていた。

「そんなら!!」

ローラーを上手く操り、背後に立っているガジェットドローンへと
方向転換する。

その場で軽く跳び上がって、ガジェットドローン相手にマウントポ
ジションを取ってからリボルバーナックルを振りかぶる。

「ううりやあああああああ!!」

拳はガジェットドローンの機体にめり込み、やがて貫く。バチバチと音がスバルの耳に入ってくる。

ガジェットドローンが許容量のダメージを受けたという事だ。

(よしっ！)

乗っかっていたスバルはすぐに飛び上がって前方に着地した。

直後にガジェットドローンが爆発し、爆煙がたった。

「よしっ!!」

スバルは今度は口に出していた。

「連続行きますー!」

ビルの屋上にいるキャラはその場にいるティアナ、もしくは違う地点で見ているなのは達に告げるようにして言った。

「フリード。ブラストフレア!」

キャラはフリードリヒに標的を指差してから命令する。

「キュワー!」

フリードリヒは翼を羽ばたかせながら口元で炎の球を出現させる。

「ファイアー!」

キャラの指示と共にフリードリヒは出現させた炎の球を吹きかける。

炎の球はそのまま一直線に飛んでいく。

ガジェットドローンの足元を火の海とさせた。

バチバチと稲光が生じて、動きが停止する。

キャラの足元から桃色の円形魔法陣が展開される。

「我求めるは戒めるもの。捕らえるもの。言の葉に応えよ」

詠唱をすると同時に桃色の魔法陣の輝きが増していく。

「鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚!!アルケミックチェーン!!」

ガジェットドローンの足元に桃色の魔法陣が出現し、中心部から鋼鉄の鎖が無数出現して生き物のような動きで三機のガジェットドローンを捕縛した。

キャラの召喚した鎖は魔力で構成されているものではないので、MFの摘要範囲外という事になる。

ティアナはキャラの捕縛から逃れた二機を追跡していた。

通常の魔力弾による射撃はAMFの餌食となってしまう。

「こつちだつて射撃型。無効化されて、ハイそうですかかって下がってたんじゃ生き残れないのよ!!」

アンカーガンの銃口を移動しているガジェットドローンに向ける。バンバンと二発発砲音が鳴るが、空砲ではなくカートリッジロードをしたのだ。

カートリッジが排莖されないため、傍目には少々わかりづらい。

ティアナの足元にオレンジ色の円形魔法陣が展開される。

(スバル!上から仕留めるからそのまま追つて!!)

(おう!!)

ティアナは念話の回線を開いて、指示をする。

スバルが追跡している限り、ガジェットドローンは逃げ続ける。

その隙をティアナは狙うわけだ。

アンカーガンの銃口にオレンジ色の魔力弾が形成されていく。

しかし、すぐに発射はしない。

このまま発射しても先程と結果は変わらないからだ。

(攻撃用の弾体を無効化フィールドで消される膜状バリアで包む。フィールドを突き抜ける間だけ、外殻が持てば本命の弾はターゲットに届く!!)

オレンジ色の弾丸は更なるオレンジ色の膜で包まれていく。

フィールド系防御を突き抜ける多重弾殻射撃はAAランクの技術である。

ティアナはこの技術を既に習得しているという事は、それだけ射撃型として生きていく『覚悟』があるという表れということだろう。

(固まれ……)

ティアナの瞳はオレンジ色の魔力弾に集中している。

(固まれ!)

オレンジ色の膜はもう少しというところで遅々としてしか動かない。

(固まれえええ!!)

ティアナは更に内にある力を引き出す。

「うわあああああ!! ヴァリアブルシュートオオオオ!!」

膜は完全に覆われ、ティアナはすぐに引金を振り絞った。

ドオンという音を響かせて、オレンジ色の魔力弾は追走しているスバルを抜く。

魔力弾はガジェットドロンのAMFに引つかかる。

しかし、魔力弾はAMFを抜けてからそのまま一直線に腹を貫く。

一機を破壊すると、魔力弾は消滅せずに残り一体にも向かっていく。

蛇のようなうねりをしながらも残りの一機もAMFを展開するが、抜けて先程の一機と同様に腹を貫かれた。

二機ともバチバチと音を立てながら、原型を留められずに爆発した。

(やった……)

ティアナは二機を破壊できた事に安堵し、全身の力が抜けてそのまま仰向けになった。

側には誰もいないのがせめてもの幸いかもしれない。

スバルが念話の回線を開いて喜んでくれるが、今のティアナには、

「……スバル。うっさい」

というぐらいいしか元気が残されていなかった。

フォワード四人の最初の模擬戦の所要時間、十四分五十二秒。

この事は隊舎屋上で傍観していた四人にもすぐに伝わった。

「まだまだだな」

ヴィータは所要時間がわかると、無愛想な表情で呟いた。

「これからだろう」

シグナムは今後に期待する事にした。

「あ、そうだ。侑斗、良太郎。なのはにはさつき話通してさ、使っていないって」

ヴィータは念話で、なのはに侑斗と良太郎のシミュレータの使用許可を申請し、許可が下りたことを告げた。

「!!」

ヴィータの言葉にその場で素振りをしていた侑斗と良太郎の胸中に何か跳ね上がった事を誰も知らない。

第十三話 「初対決!？」

野上良太郎と桜井侑斗がフォワード四人が休憩に入ったと同時に、シミュレーターの中に入った。

二人は「これが仮想?」という言葉が口から出かかっていた。

「そういえば何かの本かテレビかでこんな事が書いてあったな……」
「ん?何が」

風景はまがいものでも空だけは本物なんだ、と思っている良太郎は侑斗の口から聞き慣れない言葉を口にしたので顔を向ける。

「科学っていうのは度を超すと魔法と変わらない、だそうだ」

「相反する二つ、なのにな」

『科学』と『魔法』、全く間逆のものだが根底は繋がっているという事になるのかもしれないと考える事も出来る。

電王やゼロノスも科学とも魔法ともいえない存在なのだから、二人がこの説を頭ごなしに否定する事は出来ない。

侑斗は護身用ゼロガツシャーをサーベルモードにしており、両手で正眼に近い下段に構える。

重量があるので、正眼に構えるとそれだけで体力が消費するからだ。

対して良太郎は、護身用デンガツシャーをソードモードにして右手でだらりと下げている。

『無形の位』で応じる気だ。

ちなみに二人とも、スーツ姿ではなく一応フォワード達が着用しているトレーニングウェアである。

アンダーのズボンはフォワードと共通で、トップは良太郎はエリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエ同様に黒色のシャツであり侑斗は黒色に金の十字の模様が施されているものだった。

シャツのカラーはまるで、今後関わっていくチームを表しているようだった。

「お前とするのはいつ以来だ?」

「いや、多分初めてだよ」

侑斗は過去の事を思い出しながら言おうとするが、良太郎は即座に否定する。

「そうだったか?」

「そうだよ」

この二人のやろうとしている事はオーナーに渡された武器の試運転のようなものだ。

だが、その組み合わせがシミュレーター内でも外でも好奇心を駆り立てるものだった。

野上良太郎と桜井侑斗。

互いにこの次元世界の中で『最強』という地位に限りなく近い二人だ。

性格的なものからか、二人がぶつかる事はほとんどない。

良太郎は厭戦的で、侑斗は無駄な事はしないというところからだ。

こうして二人が訓練とはいえ、武器を持って向き合うのは本当に初めての事になる。

互いに視線が合うと同時に、両者が手にしている武器が相手に向かって放たれようとしていた。

「始まりやがったな……」

「正直、こういうのってちょっと興味あったんだよね」

ビルの屋上で見下ろすかたちでモモタロスとウラタロスは地上でならしをしている二人を見ながら、感想をもらした。

「良太郎と侑斗が戦う、か……。そこそこの付き合いになってきたしなあ。どっちが強いかわかれるとようわからんで」

「そういや、アイツ。僕と決着つけてない!!」

キンタロスは良太郎と侑斗、それぞれ違った『強さ』を持っているためどちらが強いのかハッキリ判断する事が出来ない。

この中で侑斗と戦った事があるのはリュウタロスだけであり、結果は彼の言うように『どっちつかず状態』のままだった。

白黒ハッキリつけたがる性格ではないのでリュウタロス自身もこの光景を見るまで忘れていた事だ。

同じビルの屋上で休憩をしているフォワード四人もじっと見てい

る。

「ハナさん。あの二人つてどちらが強いですか？」

電王、ゼロノスの姿を見たことがなく、噂程度でしか知らないシャリオ・フィニーノは、なのはの隣で座って観戦しているコハナの隣に座って訊ねる。

「単純な腕っぷしなら侑斗の方が上でしょうね。でも……」

「でも、何ですか？」

「いくら侑斗でも本気でキレた良太郎が相手だとどうなるかはわからないわね」

コハナの口にした『キレた良太郎』という言葉に、なのはとイマジン四体は何かを思い出し、一瞬背筋に悪寒が走ったのは仕方がないことなのかもしれない。なかった。

「あの……どうしたんですか？みなさん」

スバル・ナカジマは場の雰囲気が変わった原因を作ったコハナに訊ねる。

「……思い出しちゃったのよ。キレた良太郎をね」

コハナの表情もどこか怯えていた。

「おっかねえぞ……」

「アレは正直あんまり見たくないよね」

「見る者に恐怖、相手には恐怖と地獄を与えるというても大げさやあらへんなあ」

「僕、あの時の良太郎、やだ〜!!」

怖いもの知らずと認識しているイマジン四体が総出でビビッている姿を見たフォワード四人は念話の回線を開く。

(キレた良太郎さんってどういう事なんでしょう?)

(さあねえ。いくら仮面ライダーっていつでも人間なんだからあり得ると思うわよ)

エリオ・モンディアルの質問に対してティアナ・ランスターは超人ではないと前提して言う。

(でも、なのはさんやハナさん。それにイマジンのみなさんまで本気で怖がってたよね)

(相当おっかないってことなんでしようね)

スバルとエリオは頑張つて自身の想像力を駆使する。

(で、でも本当にその良太郎さんがその……プツツンなんてあるんでしようか……)

キャロ・ル・ルシエは信じられないようだ。

(そう言われると、自信がなくなるわね……)

先程『超人ではない』と言い張ったティアナだが、野上良太郎の人物像を考えると疑ってしまう。

『キレル』とは理性を弾き飛ばして、目の前に敵がいるのならばいかなる手段を用いても屠る状態だ。

温厚な人間には最も結びつきにくいものだといってもいいだろう。

(あ、始まるよ)

スバルの一言がフォワードの念話会議の終幕となった。

「妙な期待をしてる奴らがいるかもしれないけど、俺達がするのはあくまで……」

「オーナーからもらった武器のならば、でしょ?」

「わかってるなら……いい!!」

鏢迫り合いから両者は同時に距離をとる。

その間に、互いのDソードとZサーベルから火花が飛ぶ。

地面に足を着けると同時に、良太郎は一気に間合いを詰める。

Dソードを上段には構えず、中段で引いているような構えで『突き』を繰り出そうとしている。

対して侑斗は良太郎に応じず、離れた位置のままZサーベルを楯のようにして構える。

肉厚のあるZサーベルだからこそできる手段といってもいい。

「!!」

Dソードの刃は侑斗には届かずに、防がれてしまう。

だが良太郎の表情には落胆の色はなかった。

そうなることはあらかじめ分かっていたかのようにぐらいに落ちて着いていた。

素早くDソードを引き戻してから、右薙に狙いをつけて切りつけ

る。

「無駄だ」

侑斗は軌道がわかつているので、Zサーベルを少しだけ移動させて防ぐ。

侑斗の足が少しだけずるつと後方に下がるところから威力は十分にある。

これ以上の攻撃は却って危険が孕む可能性があるかと判断した良太郎は距離をとって下がる。

構えは上段でも中段でもない、最初の時と同じ無形の位だった。

「さすがに固い、ね」

「お前に破られるほどヤワならイマジンに勝てねえだろ」

侑斗は余裕の笑みを浮かべる。

「そりゃそうだね」

良太郎はDソードを右肩にもたれさせる。

「剣の使い方としては申し分はないな。ま、変身していないからどうしても重くなっちゃうのが欠点つていえば欠点だが」

Zサーベルは見た目通りに重量はある。

ゼロノスに変身して、やっとマシに扱える程度だ。

ゼロノスベガフォーム（以後：Vゼロノス）なら普通の片手剣同様に扱えたりする。

護身用のゼロガツシャーは侑斗の力量に合わせてセッティングを施されている。

威力はイマジンを葬るには弱い、身を守るとい点では及第点になっっている。

それは良太郎が現在手にしているデンガツシャーも同様だ。

このデンガツシャーも電王時に用いるより物より性能はデチューンされている。

威力はゼロガツシャー同様に、イマジンを葬ることはできないが身を守るとい点では及第点を得ている。

それがオーナーが二人に与えた護身用武器であるガードデンガツシャー（以後：GDガツシャー）、ガードゼロガツシャー（以後：GZ

ガツシヤー)である。

侑斗はGZサーベル(ガードゼロガツシヤーサーベルモード)を地に突き刺してから、グリップ部分を引き抜いてからパーツを逆にする。

突き刺しているパーツを左手で握ってから、グリップ部分と連結させる。

刃となっていた部分を自分の方向へとスライドさせて弓の弦にする。

ガードゼロガツシヤーボウガンモード(以後：GZボウガン)に変形を終えると、先端を良太郎に向ける。

そして引き金を絞る。

フリーエネルギーで構築された矢が飛んでいく。

「!!」

良太郎は自身に向けられた瞬間に、反射的に右に避けた。

「ヤロオ。完全にオツサンがよこした武器モノにしてやがるぜ」

モモタロスが侑斗の動きを見てそのように言う。

「武器の変形パターンが二種類しかないってのはある意味では強みになると思わない?」

ウラタロスはフォワード達に考えさせるように言う。

詐欺師的な性格をしている彼だが、この四体の中では何かと面倒見のいい性格をしているのも彼だったりする。

「野上さんの手にしているデバイスはどのくらい変形できるんですか?」

ティアナは率先して訊ねる。

電王に対しての対抗意識のようなものなのかもしれない。

(ふーん。ただ単に悔しがってるだけじゃないってわけか)

ティアナだけではない。

他の三人もティアナと同じ眼差しをしていた。

この侑斗との模擬戦で良太郎——電王の力を研究しようというハラなのだろう。

「さっきのランスターさんの答えだけだね、主に四つだよ。本当は五

つあるんだけど、そのうちの一つは良太郎にとっては使用経験が圧倒的に少ないからあえて省いてるけどね」

「四つですか……」

エリオが反芻するようにして呟く。

デバイスのモードチェンジで四形態というのは決して珍しいことではない。

しかし、それでもその四形態が全くの別物ということもない。なにがしかの法則性のようなものがあるのだ。

たとえるならばヴィータのデバイス——グラーファイゼンだと。基本形態のハンマーフォーム。

ハンマー先端にピックとロケットが搭載されているラケーテンフォーム。

大型のギガントフォーム。

ラケーテンフォームを巨大化させたようなツェアシュテールングスフォーム。

というように四つの形態がある。

形態は四つだが、どれもハンマーとしての特性からは逸脱していない。

だがデンガツシャアの四形態は根本的な部分が完全に区別されているため、事実上別物と言った方がいい。

それらを扱うためにはその特性を知っておかなければならないという事だ。

ひとつの武器で様々な顔を持つ場合は、数が少ない方が理解が早いというのは誰にでもわかることだろう。

数が多ければ便利にも思えるが、多彩な機能が逆に足を引っ張るというのも誰もが一度は体験していることだろう。

「良太郎からしたら武器が二種類しかないから、対処そのものはさほど難しいもんじゃないなあ」

キンタロスが腕を組んで、GZガツシャア対策の難易度を語る。

「でもアイツからしたら難しいよねー。何せ四つもあるんだしー」
リュウタロスは侑斗の視点で語る。

隊舎屋上で傍観しているシグナムとヴィータはというと。

「場数を踏んでいるだけあって、野上もやるな」

「何だよ？シグナム。惚気？」

シグナムが良太郎の動きに賞賛の言葉を贈ると、隣のヴィータはすかさず茶化す。

日頃から子供扱いでからかわれていることが多いので、その仕返しだ。

「お前、野上達が来てから随分と言うようになったな」

「こーゆー時じゃねーとからかえねーじゃん」

シグナムがジロリと睨むが、ヴィータはどこ吹く風だった。

「で、シグナム。マジな話、侑斗と良太郎。どっちが勝つと思う？」

ヴィータは真剣な表情で訊ねる。

「十年前、私達が知ってる野上と桜井ならば予想を立てることができ
るが……。今の二人が私達が知っている頃の二人とはとても思えん。
それに今二人が行っていることはオーナー殿から

貰った武器のならしのようなものだろう。お前達が思っているよ
うなことまで発展するのか？」

「ま、あたしもあの二人の性格からしてそうはならねーと思ってるけ
どよ。赤鬼達はあの二人がやり合うとマジで思ってるらしいけど」
「ならなるかもしれないな……」

モモタロス達がそのように考えているのならば実現するのかわし
れないとシグナムは考える。

仮面ライダー電王 対 仮面ライダーゼロノス。

「やはり奴等が来ると熱くなるな……」

「まーた始まった。その性癖、どうにかしねーと良太郎に嫌われちま
うぞー」

拳を作ってわなわなと震わせていたシグナムをヴィータは窘めた。

*

時空管理局ミッドチルダ地上議事センターの会議室では、機動六課
の設立趣旨についての説明が終わりにかかろうとしていた。

地上本部のお偉方も今のところ黙って聞いているところからして

こちら側のロジックに隙がなかったと考えていいのだろう。

少なくともここまでは二人にとっては予定通りだ。

問題はここからだろう。

二週間前に現れた別世界の仮面ライダーについてだ。

次元世界で脅威となっているイマジンを唯一倒すことができる存在。

それは捉え方によっては『次元世界で最も危険な存在』ともいえる。

(フェイトちゃん。ええね?)

(うん。わかってるって。はやて)

八神はやてが回線を開いて、フェイト・T・ハラオウンと念話の交信をする。

「続きまして私達、機動六課と現在協力体制をとっている仮面ライダーについて説明したいと思います」

はやての一言に、お偉方達の目の色が変わったのは決して気のせいではないとフェイトは確信している。

次元世界を守ることも破壊することもできる存在。

「皆さんもご存じのとおり、二週間前起きた魔導師ランク試験に乱入したイマジンをたった一人で撃退した戦士——それが仮面ライダーです」

フェイトが言うと同時に、スクリーンにライナー電王が映し出されていた。

その場にいるお偉方全員は大きく目を開いた。

「あれが仮面ライダー……」

「我々が手を持って余しているイマジンを撃退できるという……」

「次元世界最強の戦士といわれている……」

お偉方がひそひそと言っている。

(やつぱり、色々言われてるんだね……)

(無理もあらへんと思うで。侑斗さん等にとってイマジンを倒すんは私等が犯罪者取り締まるんとはほぼ同じようなもんやけど、組織が何も受けへん相手を個人でやってるわけやしね)

どちらも一般感覚からは大きく離れていたりするが、そのことを指

摘してくれる者はここにはいない。

「八神部隊長」

お偉方の一人が挙手をした。

「はい。どうぞ」

「このスクリーンに映し出されている仮面ライダーの名称は？」

「仮面ライダー電王です」

フェイトが即答した。

「なお、この電王を魔導師ランクだと最低でもAAA+となっていない」

はやての言葉に誰もが何も言えなくなってしまう。

時空管理局は大組織ではあるが、その実態としては高ランクの魔導師というのはさほど多くはない。

全体の五パーセント程だといわれている。

つまり一人だと仮定すると、五百人しかいないという事になる。

千人だと五十人だ。

「最低でと言ったが、これは本来のものではないという事かね？」

「はい。仮面ライダーの能力を魔導師ランクで計測しようとしても、どうも精神状態やその時のコンディションで大きく左右されてしまうんです。だからこの確認されているものは戦闘開始前です」

精神的にも安定している状態が出た結果なんです」

「それはつまり……」

「全く本気にならずにそれだけの力を有しているという事です」

はやての一言は、彼等の微かな野心さえ打ち砕く結果になったという事になった。

「現在のところ、仮面ライダー電王ともう一人の仮面ライダーであるゼロノスは機動六課の民間協力者というかたちで協力体制をとっています。でも、時空管理局が某かの行為で彼らの逆鱗我がに触れることになれば……」

フェイトの一言に、その場の空気が冷えたのは気のせいではない。

その場にいる誰もが安易に想像できた。

時空管理局の崩壊。

お偉方が全員顔を青ざめてしまっていた。

(はやて。もしかして……)

(ちよっと効きすぎたかもしれないね……)

はやてとフェイトとしてはちよっと脅すだけでよかったのだが、必要以上に効いてしまったらしい。

(でもこれでフェイトちゃん……)

(うん。良太郎達に妙なちよっかいをかけてくることはない、ね)

デンライナー、ゼロライナー来訪から懸念している事があった。

彼等の懐柔もしくは変身メカニズムの解析だ。

前者が失敗した場合、法の名のもとに身柄を拘束して、身体検査と使用して何故電王やゼロノスに変身できるのかを解析し、あわよくばそれらの技術を管理局の発展に使おうと考えている者は決して少なくないだろう。

だから、もし実行した場合のことを先に話して、あり得る最悪の結末を想像させたのだ。

結果としては二人の目論見はとりあえず成功したのだ。

二人はとりあえず気づかれないように胸をなでおろした。

よほどの野心家ではない限りはデンライナー、ゼロライナーに干渉したりはしてこないだろうと。

*

GZボウガンから放たれる矢を良太郎は直に避ける事はせずに、建造物を壁代わりにして隠れながらもある作業をしていた。

GDソードからガードデンガツシャー・ガンモード(以後：GDガン)へと切り替えているのだ。

電王の姿ならば宙に放り投げてフォームチェンジかデンカメンソードのターンテーブルでの切り替えで手動以外に使えるのだが、変身前の今の状態だとその方法は難しい。

使えなくはないが、体力の消費が激しくなるのだ。

いざという時にしか使えない。

GDガンへと切り替えを終えると、隠れることをやめて侑斗の姿を見つげるために駆け出す。

「来たか!!」

「これなら!!」

こちらの姿を確認すると同時に、侑斗はGZボウガンを構えてフリーエネルギーの矢を放つ。

迎撃するようにして、GDガンの銃口を向けてから引き金を絞る。

フリーエネルギーの弾丸が発射される。

矢と弾丸が宙でぶつかって、爆発する。

視界がまぶしくなるが、もう一回引き金を絞る。

放った場所に侑斗がいるとは限らないが、それでも威嚇射撃として放つ。

弾丸が建造物にぶつかった音しかしないとすると、侑斗はそこにはいないという事になる。

(逃げた? いや……)

良太郎はGDガンを下げてから、その場に立つ。

GDガツシヤーを分離させて別の形態へと切り替える。

(僕の考えが外れてなければ……)

ガードデンガツシヤー・ロッドモード(以後:GDロッド)へと切り替えを終えると、その場に立つ。

心臓が高鳴る。

自分の直感が当たれば、『勝ち』になるが外れば『仕切り直し』になる。

自分の全神経を集中させる。

足音が耳元に入ってくる。

その音は次第に大きくなっていく。

GDロッドを構える。

両目を閉じて、意識を集中する。

「そこだあ!!」

GDロッドを槍投げのようにして構えて、投げる。

その反応はというと。

いると思った場所に投げたのに、何の反応もない。

GZガツシヤーで弾く音も。

侑斗自身に直撃したような感覚も。
何もなかった。

「いない？」

「誰をお捜し、かなあ!!」

声が出た方向は良太郎の予測の位置だが、GZボウガンを構えた侑斗が間合いを詰めながらも、矢を数発放つ。

上段、中段、下段へと矢が飛んでいく。

GDロッドを手放している良太郎に防ぐ手段はない。

右手をGDロッドに向けてかざす。

(電王の時にはできたけど、リュウタロスの力なしにできるのか……)
矢は無情に接近しているのは確かだ。

「やるしかない!!おいで!!」

良太郎は突き刺さっているGDガッシャーに向けて叫んだ。

「来い」ではなく「おいで」なのが彼らしいといえれば彼らしいことだった。

「良太郎さん。何してるんですか？」

幾多の魔導師の教導を行ってきたのはだが、良太郎の行動は今ひとつわからなかった。

だからこそ良太郎に戦闘の手ほどきをしたモモタロス達に訊ねるしかない。

「あのデンガッシャーを呼びつけてるんだよ」

答えたのは意外にもリュウタロスだった。

「そんな事できるんですか？」

スバルがおそろおそろ訊ねる。

「うーん。僕教えたけど難しいんだよねー」

良太郎が今からやろうとしている事を教えたのはリュウタロスだ。「リュウタが教えたのはエネルギーの扱いの中では最上級クラスになるんだよ。なにせ遠距離から任意のものを呼び寄せるのってセンパイやキンちゃんはもちろんのこと、僕でさえ使えないんだ」

リュウタロスが特技とする能力——何かを操る力はフリーエネ

ルギーを用いている。

この『何か』とは万物つまり何でも操れるという事だ。

それはGDロッドを良太郎のもとに呼び寄せることもまた『操る』という力の一つになっている。

「おいカメ。俺やクマはもちろんの事ってなんだよ？オメエだってできねえじゃねえかよ」

「そうやで。カメの字。自分もできへんにそういう言い方はアカンでえ」

モモタロスとキンタロスが指の骨をバキボキと鳴らしてから、ウラタロスの右肩と左肩をつかんでいる。

もちろん力を込めてだ。

「痛い！痛いって!!マジで痛いよ!!センパイ、キンちゃん!!」

モモタロスとキンタロスに仕置きを受けているウラタロスを尻目にかけてからリュウタロスは、なのは達に視線を向ける。

「良太郎だったらできるって♪だって誰よりも強いんだしー」

リュウタロスは楽観的に言うが、その言葉には強い『信頼』が含まれていた。

「誰よりも強い……」

その言葉をフワード四人は反芻していた。

仲間にそのように思われるってどのようなものだろうと考えてしまふ四人だった。

(アイツ。何をするつもりだ?)

GZボウガンを構えて引き金を三回絞ってから、侑斗は良太郎の行動を訝しむ。

自分の横にある。GDロッドを引き寄せようとしているのならば無茶な行為と言ってもいいだろう。

(イマジンでもそれができるのは<rb>リュウタロ
</rb><rp>(</rp><rt>お子様</rt><rp
</rp><rb></rb><rp></rp><rt></rt><rp
</rp><rb></rb><rp></rp><rt></rt><rp

無謀な挑戦だと思う。

馬鹿にする気にはならないが、今この場でやるにはあまりにも愚か

だ。

(だが今更、手加減はできない!!終わるか?仕切りなおすか?どつちだ!?!野上!!)

三本の矢にこれからどうなるかを侑斗は託す。

良太郎の目を見る。

諦めていない。

「ん?」

横に刺さっているGDロッドを見る。

カタカタと震えていた。

風がなびいているわけでもないのにだ。

(まさか……)

信じられない事だ。

ずるつとGDロッドがひとりでに引き抜かれていく。

「来るんだ!!」

良太郎の叫びに反応するようにして、GDロッドが引き抜かれて侑斗が手にしようとする瞬間を与えることもなく飛んでいった。

自らの叫びに呼応したGDロッドはこちらに飛んで、右手でキャッチする。

すぐさま両手で頭上に振り回してから、前面へと持っていき三本の矢を叩き落とす。

「よしー」

悠然とGDロッドを振り回すのをやめる。

振り回す際に生じる微弱な風も、空を裂こうとする音もない。

「仕切り直し、か」

そう言う侑斗の表情は笑みだった。

「嬉しそうだね。侑斗」

「そう見えるか?」

「うん」

侑斗は好戦的というわけではない。

無駄なこととはしないのが彼の信条のようなものだ。

そうになると、手合せとか模擬戦などは彼にしてみればやる必要のな

い行為になる。

「シグナムが言っていたことは本当のようだな」

「？」

侑斗はGZボウガンからGZサーベルへと切り替えながらも、こちらを見たままだ。

「お前は俺が知っている野上ではない、という事だ」

侑斗のセリフに良太郎は首を傾げる。

「当然だな。幾多の戦いをしてきて勝ってきた人間がいつまでも弱いままなわけがない」

侑斗の表情は笑みを浮かべたままだ。

GZサーベルを構える気配はない。

「侑斗？」

侑斗の言い方は自分を褒めているようにも思えた。

「今までのだってそうだ。武器と武器がぶつかっただけでお前は何一つダメージを負っていない。まあ武器のならしとしてはそれでもいいんだけどな」

「だったら……」

これで打ち切りにしようと良太郎は言おうとする。

「だからこそ……」

侑斗の表情から笑みが消えていた。

彼の腰元にはゼロノスベルトが出現していた。

「だからこそ今のお前の『強さ』、見せてもらう！」

腰に装着されているカードホルダーからではなく、ズボンのポケットからゼロノスカードに酷似した黒いカード——ダミーカードを取り出す。

「侑斗!？」

良太郎の両目が大きく見開く。

「勘違いするな。このカードは八神が俺にくれたこのシミュレータ専用のカードだ」

バックル上部にあるチェンジレバーを右にスライドさせる。

和風のミュージックフォーンが流れ出す。

「変身！」

侑斗はダミーカードをゼロノスベルトのクロスディスクに挿入する。アップセット

『チャージ&アップ』

ゼロノスベルトが電子音声で発すると同時に、侑斗の身体がオーラスキンに覆われていく。

赤銅色のオーラアーマーが装着されていく。

肩部に胸部に装着されていくと、最後に頭部の電仮面が装着されていく。

牛の頭が変形されるような変形ではなく、赤銅色の電仮面がただ装着されていった。

仮面ライダーゼロノス・ゼロフォーム（以後：Zゼロノス）だ。

Zゼロノスは良太郎を指さす。

「言っておくぞ。カードはダミーでも俺はかーなり強い!!」

Zゼロノスは左手で右上腕をパンと叩いて、力の強さを誇示するように見せた。

赤銅色のエネルギーが吹き出し、良太郎に向かっていく。

身構えるが、それだけだ。

『恐ろしい』とか『怖い』というものが心中から出てくるが、『逃げる』というものは出てこなかった。

「わかっているとは思うけど、逃げようなんて考えるなよ。ここから無事に出るにはやることは一つしかないんだ」

「わかっているさ……」

良太郎も応じるようにして、腰元にケータロス装着型のデンオウベルトを身体エネルギーのチャクラを用いて出現させる。

ポケットからパスを取り出す。

「変身！」

良太郎はパスをケータロス装着型デンオウベルトのターミナルバックルにセタッチする。

『ライナーフォーム』

電子音声で発すると、良太郎の姿は赤白黒色のトリコロールカラー

のオーラススキンで覆われたプラット電王へと変身する。

肩部、胸部もトリコロールカラーでキングライナーをモチーフにしたオーラアーマーが装着されていく。

デンライナー・ゴウカをモチーフにした電仮面が頭部に装着された。

右手にはデンカメンソードが握られている。

ライナー電王は対面のZゼロノスを見据える。

「準備はできたよ」

ただそう告げると、今まで構えなかったZゼロノスはZサーベルを構えた。

本番はこれからだという事を見ている誰もが瞬時に理解した。

第十四話 「激戦開始!! 電王 対 ゼロノス」

時空管理局ミッドチルダ地上本部中央議事センターで機動六課の設立趣旨と仮面ライダーに関する釘刺しを無事に終えた八神はやてとフェイト・T・ハラオウンはヴァイス・グランセニ

ツクが操縦するヘリコプターに乗って、機動六課隊舎への帰路をたどっていた。

「お疲れ様っす。首尾はどうでした？」

ヴァイスは操縦桿を操作しながら、はやてとフェイトに訊ねる。

「まあまあかな。六課の方はかなり前から入念に練ってたから問題なしだけど、仮面ライダーの方は二週間しか期間がないとはいえない方だったと思うよ」

「そうやね。これで侑斗さん達に余計な茶々を入れてくることも当分はないやろうね」

フェイトは先ほどの件に関しては良好だと自己評価し、はやては自分の間は異世界の仮面ライダー達もそれなりに平穩に過ごせるだろうと言う。

「異世界の仮面ライダーが来て、もう二週間になるんスねえ。その間にイマジンが一匹も出てこないってのは何か意味があるんスカねえ」
ヴァイスは管理局入局歴八年になるが、イマジンに関する知識に関しては一般市民に毛が生えたくらいだ。

だから野上良太郎達が来訪してから全く音沙汰なしになっていることは何かの前触れではないかと疑ってしまうのだ。

「多分、それは関係ないと思うよ。イマジンって人間に限りなく近い性格してるしね」

「気分屋さんがおらへんと否定することはできひんのは確かやね」

フェイトとはやては、何も関係ないとヴァイスに告げる。

「あ、缶コーヒーありますけど飲みますか？」

ヴァイスは時間が空いていたから人数分購入していた缶コーヒーを座席にいる二人に勧めてみる。

「いただきます」

フェイトとはやては断る理由もないので、受け取った。

プシュツと三人で同じタイミングでタブをこじ開けてから、一口ぐびつと飲む。

「「ぶはー」」

と三人同時に安らぎの息を吐く。

「そういえば、なのはちゃんの訓練はどうなっとるんやろね？」

「いい具合に盛り上がってるんじゃないかな？」

「回線開いてみます。なのはさん。ヴァイスです。近況はどうですか？」

モニターに高町なのはが映し出されていた。

『あ、ヴァイス君。どうしたの？』

「フェイト執務官と八神部隊長が訓練の方はどうなってるのか気になってるそうで……」

『ふえっ!?!』

モニターに映し出されているなのはの表情が一瞬ひきつった。

「なのはちゃん。どうしたんや？」

「なのは？」

はやてとフェイトは乗り出して、モニターを見る。

『ええとね。その……訓練は上手くいってるんだけどね……』

なのはは凄く歯切れが悪い。

「もしかしてモモタロス達何かやらかしたの？」

フェイトの予想に、なのはは首を横に振る。

「まさかヴィータやシグナムが乱入したんか？」

はやての予想にも、なのはは首を横に振る。

「じゃあ、一体何なんでしょうねえ」

ヴァイスは想像がつかないので何も言わずに、なのはが言うのを待つ。

『ええとね。その驚かないで聞いてね』

なのはが深刻な表情をしている。

『今、良太郎さんと桜井さんが全力全開状態なんだよ』

なのはの一言に、フェイトとはやては口に含んだコーヒを盛大に吹いた。

*

ライナー電王と乙ゼロノスは対峙したまま、全く動こうとはしない。

互いに相手の出方をうかがっているようにも思えた。

その異様な光景をビルの屋上で、傍観している者達は固唾を飲んで見るしかなかった。

「全く動きませんね……」

「動かないのか動けないのか、正直どっちなのかしら……」

エリオ・モンディアルとティアナ・ランスターは二人の仮面ライダーが何故動こうとしないのかを独自で探ろうとする。

「キユクー」

フリードリヒも動物の本能が勝り、主であるキャロ・ル・ルシエの後ろに隠れていた。

「フリード。大丈夫だからね」

キャロは後ろに隠れているフリードを抱きかかえて頭をなでる。

「なのはさん。これはどっちなんですか？動けないんですか？動かないんですか？」

スバルがなのはに訊ねる。

「両方だね……」

なのはの回答に、フォワード四人とシャリオ・フィニーノは目を丸くし、イマジン四体とコハナはうんうんと首を縦に振っていた。

「あの二人が今からやろうとしていることは殺傷設定の魔法戦と変わらない戦いだね」

殺傷設定。

非殺傷設定が義務付けられている時空管理局局員にしてみたらタブー中のタブーだろう。

非殺傷設定でも打ち所が悪ければ一生背負わなければならない後遺症を背負わなければならないこともある。

殺傷設定なら打ち所が悪くなくても、『死』に限りなく近い場所まで

連れて行かれるだろう。

(刃引きをしていない真剣同士の戦いになるんだよね)

なのはは日本での感覚で二人のこれからの戦闘を予測する。

「なのはさん。記録残しましょうか？」

「お願い。シャーリー」

シャーリオの気遣いを、なのはは受け入れた。

*

乙ゼロノスは対面の相手と対峙する。

(こうして見ると、出会った頃とは別人だな)

対面の相手——ライナー電王はデンカメンソードを無形の型で構えている。

(隙がない……)

出会った頃なら同じ構えをとっても、隙だらけだ。

乙サーベルを正眼に構えても攻めに入ろうとは思わない。

迂闊な攻撃は全て自身の敗北につながると予感しているからだ。

カツンとライナー電王の右足が右に一步動いた。

すかさず自分も右足を右に一步動く。

ライナー電王が引きずるようにして、左足を右に動かす。

乙ゼロノスも引きずるようにして、左足を右に動かす。

視線を外せば負ける。

乙ゼロノスは本能的に感じながら、右足と左足を動かす。

ただそれだけの動作なのに、疲れを感じる。

神経が極度にすり減っているようだった。

移動するだけで、ここまで疲労感を感じるのは初めてだ。

(一瞬の気の緩みが即敗北、か……)

やがて二人の視界を奪うかのようにビルの壁が現れる。

それでも二人は同じ足運びをする。

乙ゼロノスはビルの外、ライナー電王はビル内という構図になる。

規則的に鳴っていた靴音が鳴らなくなった。

(停めた……)

壁越しとはいえ、視線を外すことはできない。
壁の向こうにはライナー電王がいる。

正眼に構えたZサーベルを左へと引いてから、『突き』の姿勢へと構えを転ずる。

「……………」

Zゼロノスのフリーエネルギーがそれだけで、吹き出していた。
壁の向こうにはZゼロノスがいる。

ライナー電王はデンカメンソードを『突き』の姿勢へと構える。
一瞬でも遅れれば、Zサーベルが心臓部を貫く。

(狙いは一回。外せば終わる……………)

ライナー電王の中では既に今行っていることが『模擬戦』だという事は失念していた。

いや、敢えてその事を忘却しようとしていた。

模擬だと認識すると、油断が生まれるからだ。

心臓がどくんどくと高鳴る。

この鼓動が壁越しのZゼロノスに聞こえているかと言われると、聞こえてはいない。

「ふうふう」

息を整える。

鋭く壁の向こう側にいるZゼロノスを睥む。

デンカメンソードを握る手が力んでしまう。

過剰に力を加えることは却ってマイナスになることを右腕に言い聞かせる。

スツと右腕に余分な力は抜けた感じがした。

(今だっ!!)

溜め込んでいた力を解き放つようにして、ライナー電王はデンカメンソードを突き出した。

「うおおおおおおお!!」

ライナー電王がデンカメンソードを突き出すと同時に、ZゼロノスもZサーベルを突き出していた。

遮蔽物となっている壁は二振りの剣先が起点となって、壁に亀裂が

入っていく。

ライナー電王もZゼロノスもそれぞれの武器を押し込めるように押す。

さらに壁に亀裂が入り、瓦礫となって両者に向かって飛んでいく。やがて壁らしき原型はなくなり、残っているのは互いの刃が触れないようになっていいるほんのひとかけらしかなかった。

「くううううう!!」

「ぬううううう!!」

壁だったものの最後のひとかけらにも亀裂が走り始める。形を維持できなくなり、完全に碎ける。

パラパラと粉末になって、地面に落ちていく。

ライナー電王はデンカメンソードを両手持ちにすする。

同じようにZゼロノスもZサーベルを両手持ちに構える。

互いに振りかぶって、刃と刃がぶつかる。

バチバチと火花が飛び散る。

ライナー電王が攻めると、Zゼロノスが後方へと下がる。

Zゼロノスが攻めに入ると、ライナー電王が後方へと下がってしまう。

そのたびに二人の足元から粉塵が舞う。

ライナー電王がデンカメンソードのデルタレバーを引く。

『ウラロッド』

デンカメンソードのターンテーブルが電仮面ソードから電仮面ロッドへと切り替わる。

「はああ!!」

鏝迫り合い状態のまま、右足を軸にして左足で前蹴りを繰り出す。

蹴り技を得意としているウラタロスの能力の状態の蹴りなので、それは速くて重い。

「!!」

Zゼロノスもその事は重々承知しているので、蹴りのモーションが見えた瞬間からすぐに飛びのいた。

その間にZサーベルを手放す。

ガシャンという音を立てながら、Zサーベルは地面に着く。
Zゼロノスの両足が地に着いた瞬間に、消えたように見えた。
(何か来る!!)

そう予感したライナー電王は握られているデンカメンソードのデルタレバーを引っ張る。

『キンアックス』

電仮面ロッドから電仮面アックスへと移動する。

「!?」

Zゼロノスに腰回りを両腕で抱え込まれる。

「食らえええええ!!」

グシャアアアアンという音が耳に入った。

景色が逆さまになり、焦点が合うと空を見上げていた。

全身がマヒしたかのように痺れていた。

「あ…………ぐ…………」

*

ビルの屋上で、シャリオが展開しているモニターを見ているイメージ
ン達はというと。

「アイツもサボってたってわけじゃねえってか…………」

モモタロスはZゼロノスの動きを見て感心していた。

「まさか実戦で拝めるとはね…………」

ウラタロスもお決まりのポーズをとり、いつもの口調で言うが内心
では驚いていた。

「アレはまともに食らってるで…………。下手したら終わりやな…………」

キンタロスも腕を組んでライナー電王を見ている。

「ん、あれ?良太郎まだいけるんじゃない?」

リュウタロスはキンタロスとは反対のことを言っている。

「確かに動いてはいるけど…………」

コハナはリュウタロスの一言を半信半疑で見ている。

「なのはさん。この後ってどうなるんでしょうか?」

シャリオが、黙ってモニターを凝視しているなのはに訊ねる。

「魔法を用いない戦い。でも、その質は魔法戦よりも上。個人として

も教導官としても興味は尽きないよ」

「なのはさん。嬉しそうですね」

「そっかな。だったらやっぱ嬉しいのかもかもしれないね」

「シャリオの質問に、なのはは少しだけ考えてから答える。」

「どうしてですか？」

「良太郎さんやモモタロスさん達の戦いつてね。見ている側には色々な気持ちを感じさせるんだよ」

「どういう気持ちなんですか？」

「私が子供の時に感じたのは、『安心』かな。今は色々感じちゃうね」
十年経てば、精神的に成長し現在に至るまでに得た知識や知恵などが総動員して様々な視点で感じる事ができる。

「今は味方という視点なら、『恐怖』や『絶望』かなあ……。どちらでもない視点なら『不安』だね」

なのはの感想を聞いているのは、シャリオだけでなくフォワード達もだ。

「オメエ等。授業もいいけどよ。また面白くなってきたぜ」

モモタロスの声により、なのはのプチともいえる教導は中断した。

*

体全身に痺れが支配していたが、少しずつだが自分が体を動かしている感覚がよみがえりつつあった。

（何をされたのかはわかる……）

自分がどのような技を食らったのかを思い返す。

抱えられての反り投げ——スープレックスだ。

（キンタロスの状態にしたのはよかった）

投げられる前に、切り替え^{チェンジ}をしておいたのは正解だった。

でなければ、瞬間的な麻痺だけで済むはずがない。

このように意識を保っていられるわけがない。

「はあ……はあ……はあはあ……」

息を吐き、次の手を考える。

（動ける。動けるなら……、僕はまだ……）

開いていた両掌に、十本の指に力が入っていく。

(闘える!!)

握られていたデンカメンソードを離し、頭上の両手首をガシツと握った。

(決まったな)

Zゼロノスは先ほどのフロントスープレックスは最高の出来だと確信していた。

今までデネブと特訓をしていた時にもこのような実感はなかった。これがイマジンならばこの一撃で、致命傷に持つていけるだろう。

(実戦でこの手の技つてのはそうそう使えないな)

使ったZゼロノスも疲弊していた。

肉体よりも精神的な疲労が割を占めていた。

(ん?)

両手首に掴まれる感触を感じた。

しかも力強くだ。

(まさか……)

Zゼロノスが驚いているのは、反撃をしてくる事よりもその対応の速さだった。

自分が起き上がって、Zサーベルを拾うくらいまでの猶予はあつたと踏んでいた。

自身が持ち上げられていく感触を感じた時には視界が動いた。

「ぐ……う……りゃああああああ!!」

ライナー電王はZゼロノスの両手を掴んだまま、起き上がる。

ゆつくりとだが、両足はきちんと地を踏んでいる。

完全に起き上がると同時に、その勢いを利用して前方へと投げる。

「うおおわああああ!!」

グシャアアアンという音を立てながらアスファルトの地面が割れて、瓦礫となっていく。

Zゼロノスが地面にたたきつけられた音だ。

「はあ……はあはあ……はあ……」

激しく両肩を揺らして、息を整えようとするが中々戻らない。

眼前に映るデンカメンソードを手にするためにゆつくりと足を運ぶ。

拾い上げてから、瓦礫の下敷きになっているZゼロノスを見る。
(侑斗がこれくらいで参るわけがない……)

自分の知っている桜井侑斗ならばまだ立ち上がってくる。

カチャンという音が耳に入る。

カチャンカチャンと音が騒がしくなっていく。

やがてガシヤンという大きな音が鳴ると同時に、Zゼロノスが立ち上がっていた。

「はあ……はあ……はあはあ……」

両肩を激しく揺らして息を整えながらも、こちらから視線を外そうとはしない。

「どうした？今がチャンスだぜ。何故、こない？」

乱れる息が徐々にではあるが、回復していく中で挑発をしてくる。

「そんな余裕はないさ」

ライナー電王は返す。

「武士道精神や騎士道精神なら俺にはお門違いだぜ」

「わかってるよ。侑斗は武士でも騎士でもないからね」

自分もZゼロノス同様に、武士道や騎士道を重んじることはない。

何故なら『戦士』だからだ。

Zゼロノスは地に落ちてしているZサーベルを拾い上げる。

「少しだけ本音を言ってみようよ」

Zサーベルを右肩にもたれさせる。

「俺もサボってたわけじゃないんだぜ。お前ならその意味、わかるだろう？」

Zゼロノスの言葉を聞き、ライナー電王はどこか安心したような気がした。

陰で特訓をしていたのは自分だけではなかったという事に。

侑斗が日頃から言う大言壮語にはそのような背景があった事に。

「そうだったんだ」

「八神には言うなよ。アイツ、茶化すかもしれないからな」

「うーん。僕は言わないけどさ。今この会話は全部、なのはちやん達に筒抜けだと思うよ。シャリオさんが記録してたら八神さんに知れるのも時間の問題だね」

ライナー電王は、Zゼロノスの希望を壊すようなことを冷静に告げた。

「迂闊だったな……」

天を見上げながら、Zゼロノスは呟く。

『リュウガン。モモソード』

ライナー電王はデンカメンソードのデルタレバーを二回引く。

電仮面アックスから電仮面ガンに、そして電仮面ソードへとターンテーブルが移動した。

「今度はこちらから行くよ!!」

ライナー電王はZゼロノスに向かって駆け出した。

*

「シグナム。どうする?」

「主はやてには今回の映像が知れ渡るのは時間の問題だから仕方あるまい。桜井らしからぬ迂闊さだったな」

隊舎屋上で二人の戦いを観戦していたヴィータとシグナムにも先ほどの会話内容は知られていた。

「侑斗の言うように、はやては茶化すのかな?」

「どうだろうな。茶化すというより、お前やリインにするような事をするのではないか?」

シグナムの仮説に、ヴィータは想像したのか頬を赤く染める。

「うわー。あたしやリインならいいけどよ。侑斗はちよつと恥ずかしくね?」

「そうかもしれないな」

ヴィータの言葉を聞きながら、シグナムは苦笑していた。

*

ライナー電王の宣言通りだった。

彼は『こちらから行く』と言った。

そして、Zゼロノスの顔面に右飛び膝蹴りを食らわしていたのだ。ライナー電王が着地した直後に、Zゼロノスは仰向けになつて倒れている。

見事な一撃としか言いようがなかった。

「不意打ち、じゃないわね。宣言してたし……」

宣言した攻撃がこうも見事に決まるものなのだろうか。ティアナは目の前の出来事を疑ってしまう。

「スバル。アンタならどう？」

自分は肉弾戦タイプではないので、相棒に訊ねてみる。

「無理だよお!!宣言して成功させるなんて、相手の隙を完全に狙わないとできないって!」

スバルは首を横に振って、強く否定してから理由を告げる。

「桜井さんに隙があったとは思えないですよ……」

「でも良太郎さんは攻撃を当てたって事は隙があった、のでしょうか？」

エリオはZゼロノスに隙があったとは思えず、キャロはそれでも攻撃を当てたのだから自分達では見つけられない隙があったという事ではと、自信なさげに言う。

「さつき僕達が戦ったガジェットドローンの何倍くらい強いんだろう……」

エリオが比較対象を言いながら、考えてみるが答えは恐らく出てこないだろう。

何故なら、イメージであるモモタロス達が十倍の数のガジェットドローンを十分に倒してしまつたのがつい先程だ。

電王やゼロノスがイメージ達と対等に戦い、そして勝つ事ができるという事からして仮にガジェットドローンと戦つたとしたら似たような結果が出ているだろう。

「比べる対象を間違えてるわよ」

ティアナはガジェットドローンで比較するだけ無駄だとエリオに言う。

「あ、今度は桜井さんから動き出した」

「反撃ですね」

スバルとキヤロはモニターに映し出されているZゼロノスが、今度は攻撃を繰り返そうとしているのを凝視していた。

*

右飛び膝蹴りを食らってからすぐに起き上がって、Zサーベルのパーツを外し、上下を逆転にしてから連結させてからサーベルの刃をスライドさせて弓の弦状にするとフリーエネルギーに

よって肥大化してZボウガンにした。

「この空間内でしか体験できない面白いモノを見せてやるぜ」

そう言うと、Zゼロノスゼロノスベルト上部のフルチャージスイッチを押す。

『フルチャージ』

ゼロノスベルトが電子音声で発すると、ダミーカードをクロスディスクから引き抜いてZボウガンのグリップ部分にあるガツシャースロットに挿入する。

「ふううう。おりゃああああ!!」

叫びと同時に、ZゼロノスはZボウガンの引き金を絞る。

Zボウガンから、金色のフリーエネルギーで構築された『A』という文字の矢が発射された。

「!!」

ライナー電王が正体に気付いた時には遅く、防御する間もなく後方へと吹っ飛んだ。

ビルの壁を四、五枚ほどぶち抜いてライナー電王は背中から倒れた。

ガシャツと音を立てて、ガツシャースロットからダミーカードを抜き取る。

そしてゼロノスベルトのチェンジレバーを右にスライドさせてからクロスディスクにダミーカードを挿入した。

このシミュレータ空間限定の現象だ。

「二つ試してみるか」

かつて仮面ライダー電王ソードフォーム（以後：ソード電王）が二

回連続でフルチャージをしたことがある。

ゼロノスである自分にはこの芸をした事がない。

理由としてはリスクを考慮しての事だ。

電王と違つて、ゼロノスは変身システムに常に『代償』が付きまとうので冒険ができないのだ。

だが、今の状態ならかねてより試してみたいことができる。

それが二回連続のフルチャージ（以後：ダブルチャージ）だ。

ゼロノスはゼロノスベルト上部のフルチャージスイッチを二回押す。

『フルチャージ。フルチャージ』

ゼロウガンに二回分のフリーエネルギーが充填されて、バチバチバチバチと稲妻のように喧しく輝く。

「吹っ飛ばえええええ!!」

ゼロウガンの引き金を絞ると、二発の矢が発射された。

それは先ほど起き上がったライナー電王に向かっていた。

(二発!?)

状況を把握する前に攻撃を繰り返されたので、じつくりと検証する間もない。

(叩き切るには、こっちの威力がなさすぎる。打ち消すにはレバーを三回引かなければならないから間に合わない……)

素直に直撃するか、防御するしかないのかとライナー電王はデンカメンソードを楯のように構える。

バシィツと一発目を防ぐ。

ダメージは防げても、威力が消えているわけではないのでライナー電王の両足はズルリと下がる。

さらに二発目が飛んできたので、防ぐ。

同じようにダメージを防ぐ事はできたが、同じように両足がズルリと下がった。

背中にはビルの壁に数センチの距離だった。

「はあはあ……はあ……はあはあ」

ゼロノスを見ると、ゼロウガンからダメーカードを抜き取ってゼ

ロノスベルトに挿入しているところが見えた。

(この空間なら侑斗は僕達と同じように何回もフルチャージができる……)

距離が開いており、間合いを詰めようとしても必ず相手は迎撃するだろう。

それをダメージゼロでよけきる自信は今の自分にはない。

「!!」

ライナー電王は覚悟を決めて走り出す。

Zゼロノスがダミーカードを抜き取った状態で、引き金を絞る。

フリーエネルギーで構築された矢が数本発射される。

バシユンと左肩アーマーにかする。

バスツと右脇腹にかする。

「ぐっ！」

アーマーにあたってダメージが軽減されたわけではないので、苦悶の表情を浮かべる。

だが変身しているのでその表情は相手にはわからない。

ある程度、間合いを詰めると両足を強く大地に踏んで跳躍する。

デンカメンソードを上段に構えてから、一気に振り下ろす。

だがZゼロノスの手に握られているのは、ZボウガンではなくZサーベルだった。

ガキンという音が剣と剣がぶつかる。

だがこの状態で鏢迫り合いはこちらに分が悪い。

何せ自分は空が飛べないから足場がないのも等しい。

となると今の状態で優勢なのはZゼロノスだ。

Zゼロノスが押し勝ち、宙に浮いていた両足は地に着地する。

Zゼロノスの左拳が飛んでくる。

デンカメンソードを楯替わりに防ぐ。

その直後に、身体が傾いた。

そう認識すると、左足首に痛みがあることを知った。

Zゼロノスが右足払いをしたのだ。

不意打ちに近い状態で、左を支えている軸足を奪われたため傾きを

止めることができない。

視線を相手に向ける。

Zサーベルを上段に構えるが、刃を向けてはいない。

こちらに向けているのは日本刀という側金^{がわがね}、切断力がない部分を向けていた。

『真つ一二つに斬る』のではなく、『叩きつける』のが目的なのだろう。

何を叩きつけるのか？

ガンという鈍い音が自分の顔面に襲い掛かってきた。

地面にめり込む勢いで叩きつけてきた。

そう、自分をだ。

*

「終わりました……?」

なのはは、黙ってモニターを凝視しているコハナに訊ねる。

「決まった、そう思ってもいい状況よね……」

コハナとしては善戦した方だと思っている。

以前の、それこそ電王に成りたての頃からすれば十分すぎるくらいの戦いだった。

コハナはモモタロスを見る。

モモタロスはコハナが何を考えているのか、大まかに理解したらしくウラタロス、キンタロス、リユウタロスに声をかけて立ち上がる。

「ま、まさかハナさん。モモタロスさん達は桜井さんに仕返しをしようとしてるんじゃない……。だ、駄目ですよ!!絶対に駄目です!!教導官としてそれは認めません!」

なのはは、コハナがモモタロス達に某かの合図のようなものを送ったのはわかっていたので、その内容を口にする。

フオワード四人達はその内容に、大きく目を開いてからどうしようかとオロオロしていた。

教導官のなのはを止めれないし、イマジンであるモモタロス達を止めることもできない。

何せどちらも自殺行為なのだから。

「バーカ。何勘違いしてんだよ。俺達はあそこでぶっ倒れてる良太郎

を拾いに行くだけだぜ？」

モモタロスの言葉に、なのはは自身が早とちりをしていたことを知って顔を赤らめながらもほつと安堵の息を漏らしていた。

「あ、あのー」

スバルがおそろおそろと手を挙げていた。

「何だよ？ハチマキ女」

モモタロスの安直な呼び方に、スバル以外の全員が吹き出しそうになるが必死でこらえていた。

「野上さん。立ち上がってるんですけど……」

スバルの一言に、全員が「え!？」という間抜けな声を出してしまったが誰も笑うものはいなかった。

*

立ち上がって何ができるんだろうと思う。

やれる事は全てやったのでは？と自身に問いかける。

だが『やった』とも『出し切っていない』とも返答は何一つなかった。

(そっぴやまだ一回もフルチャージ使ってないな……)

意識が朦朧とする中でこの戦闘の中で、自分はまだ必殺技とっておきを用いていない事を思い出した。

(アレ、使ってみよう。上手くできるかどうかはわからないけど……)

自分にまだ『やり残したことがある』と言い聞かせると、ライナー電王の両腕、両脚に力が入ってくる。

「タフだな」

Zゼロノスの『呆れ』とも『称賛』とも取れる台詞を聞きながら、ライナー電王は睨む。

フラフラで本当に戦えるのかどうかはわからない。

「次で……」

睨む力はまだ弱まっていない。

「次で全部だ……」

ライナー電王は手にしているデンカメンソードのデルタレバーを引いた。

『ウラロッド、キンアックス』
電仮面ソードから電仮面ロッドを経由して、電仮面アックスで停止
した。

第十五話 「勝負者達が恐れるもの」

ミッドチルダの青空を一機のヘリコプターがジャイロを高回転させながら、機動六課の隊舎に向かっていた。

ヴァイス・グランセニツクは缶コーヒーを飲みながら、ヘリコプターの速度を上げていた。

「ヴァイス君も気になるんやな？」

速度を上げていることに気付いた八神はやては、率直に訊ねる。

「そりゃあ気になりますよ。仮面ライダー同士が戦うなんて、見れるんだったら金払ってでも見たいものですからねえ」

ヴァイスは本音を告げる。

「そこまで大袈裟なものじゃ……」

フェイト・T・ハラオウンはヴァイスは大仰に言っているのでは、と受け止めている。

「いやあ、それは見慣れてる人の感想っすよ。俺達、仮面ライダーが戦闘してるところなんて全くないんですからねえ」

「あ……」

ヴァイスの一言は彼だけのものではない。機動六課のスタッフのほとんどの者達の意見と言ってもいいくらいのものだ。

「でも私等が見たんも今から十年前に数回やで。あれから同じ力のまあって事はないやろね」

「底なしに成長するんすか？ただでさえ強いのに……」

「うん。電王やゼロノスよりも強い仮面ライダーがいたしね」

はやては以前に会ったままの強さではないと言い、ヴァイスはその事に恐れをなし、フェイトは十年前に一度だけ出会った敵方の仮面ライダーの事を思い出した。

「マジですか!？」

「うん。フェイトちゃんの言う通りやで。電王やゼロノスがかかっても互角どころか圧倒的に優勢を誇ってた仮面ライダーがおったで」
「でもそんな仮面ライダーをよく倒せましたね……」

ヴァイスが興味を持つのは無理もないことだと、はやてとフェイト

は思う。

「勝てた原因は良太郎、じゃなかった野上さんかな」

「フェイトちゃん。公私つけない気持ちにはわかるけど無理はせんでもええで」

はやてはフェイトの無理な呼び方にダメ出しをする。

「う、うん」

フェイトは頬を赤らめながら首を縦に振る。

「あの、ひとつ聞きたいことがあるんですけどいいですか？」

ヴァイスが前を向いたまま言う。

「なに？ヴァイス陸曹」

「フェイト執務官と野上さんって婚約してるんですか？噂になってますよ。フェイト執務官に婚約者がいるって、それが野上さんでは？って……」

「え？」

ヴァイスの言葉にフェイトは両目を大きく開く。

「あ、それなら私も聞いた事あるで。中には直に私に聞いてきた人もおったなあ」

はやてが言うには、そのように訊ねてきたのは一人や二人ではないとの事だ。

「ええええええええええええ!!そ、そそそそんな恐れ多い!わ、私と良太郎が婚約してるってどういう事お!？」

フェイトは大声で叫んでしまう。

「フェイトちゃん。ちよつとうるさいで」

ヘリコプターの中というのはちよつとした密閉空間で声が反響して、正直響く。

「あ、ご、ごめん。でもそんな噂、私聞いた事ないよ？」

「そりやそうやろ。その辺はみんな気を遣ってたんやと思うで。ハツキリ言えばフェイトちゃん当人に聞くには失礼と言えば失礼やもんね」

はやてを始め、機動六課の主な面々はフェイトが野上良太郎に特別な想いを抱いていることは知っている。

本来ならば十年分の空白を埋めたいと思っているのだ。

だが、彼女の生来の生真面目さや他者を気遣ってばかりという損な性分がそれをさせない。

(もつと奔放になつたらええのになあ)

それが、はやてが現在フェイトに抱いている感情だ。

「それに私の片想いだし……」

フェイトの呟きに、ヴァイスはそれ以上の事を何も言わなかった。

「まあ、今は色々忙しい時期やら落ち着いたら野上さんとゆっくり話をしてもええと思うで」

それがはやてが今、彼女にかけてあげられる一言だった。

*

機動六課隊舎内でグリフィス・ロウランもライナー電王とZゼロノスの戦いを見ていた。

無論、この時に二人の戦闘力をデータとして記録することも忘れてはいなかった。

そして、過去に出現したイマジン達のデータと比較する。

「こうして数字で見ると、改めて思い知らされるな……」

グリフィスの呟きにデータ採集をしているスタッフ達は首を縦に振る。

全ての数値がイマジンを超えているのだ。

これでは魔導師や騎士は逆立ちしても勝てない事が証明されたわけだ。

「コレ、記録しておきますか?」

スタッフの一人がグリフィスに顔を向けて訊ねる。

「そうだな。とりあえず記録を残して、その後の判断は八神部隊長に任せよう」

「わかりました」

現在は四月なので、異世界の仮面ライダー達からすれば『過去』の時間になってしまう。

映像や写真というような彼等にしてみれば『足跡』となってしまうものは残しておくわけにはいかない。

タイムパラドックスの可能性があるためだ。

この事は、はやてから釘を刺されている。

詳細を見てから、消去しても遅くはないと判断した。

*

ライナー電王は満身創痍と呼称されてもおかしくない状態だった。

両肩は激しく上下に揺れて、息を整えているが体力が回復するには時間がかかる。

先程、Zゼロノスに告げたように次に繰り出す攻撃が自分の限界だ。

キンアックス——キンタロスの能力が表面化される状態で、今の自分でできる事はアレしかない。

(原理は極めて単純。でも、失敗すれば確実に僕の負け……)

命を懸けた戦いならば『負け』は『死』に直結する。

だが、これは死力を尽くしたとしても模擬戦。負けても『恥』にはならない。

(だけど……)

以前ならば負けてもいいと思えた。

模擬戦なのだから。訓練なのだからと。

でも、今は違う。

(僕を、こんな僕を信じている人がいる。信じてくれる人達がいる……)

両拳に力が入る。

右人差し指でケータロス装着型デノオウベルトのチャージ&アツプスイッチを押す。

『フルチャージ』

身体全身にフリーエネルギーが纏われる。

さらにもう一回押す。

『フルチャージ』

さらにもう一段階、フリーエネルギーが纏われる。

「二回、か……。何をするつもりかはわからないが受けて立ってやる」
Zサーベルを突き刺して、指をバキボキと鳴らしてから首を鳴らし

ながら言う。

「……………」

もう一回押す。

『フルチャージ』

パチツパチツと身体全身から稲妻のようなフリーエネルギーが身体全身からあふれ出している。

「三回？お前一体……………」

三回連続のフルチャージ（以後：トリプルチャージ）となつてくると、何が起るかわからない。

だが自分がこれからする事にはあと一回フルチャージ、つまり四回しなければならぬ。

そして最後に一回、チャージ&アップスイッチを押した。

『フルチャージ』

稲妻の数が先ほどよりさらに増えた。

（準備はできた……………。後は……………）

ライナー電王はZサーベルを握って警戒しているZゼロノスを睨む。

（放つだけ……………）

*

「俺の状態でフルチャージを四回やて？良太郎、まさかアレをやる気か!？」

キンタロスは珍しく焦りの感情を表に出していた。

「アカン！アレは今の状態の良太郎がやったらどうなるかわからぬ!!」

「さつきから何を焦ってんだよ？クマ公」

モモタロスがいつもと違うキンタロスに面倒ながらも訊ねることにした。

「良太郎は『一撃必殺の極意』をやるつもりや……………」

キンタロスは静かに言う。

イチゲキヒツサツノゴクイ？

キンタロスを除く全員が首を傾げながら言った。

「一撃必殺という空手などの究極の命題ですよね？」

いち早く反応したのは、高町なのはだった。

「あの、イチゲキヒツサツって何なんですか？」

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエの二人が声を揃えて、なのはに質問した。

「たった一撃で相手を確実に葬ることよ」

なのはの代わりに、コハナが説明してくれた。

「でもそれって結構コンディションが最高の状態じゃないと無理なんじゃないかって……」

ウラタロスが記憶を引っ張り出しながらキンタロスに言う。

「そうや。心身ともに最高でないと、上手くはいかんやろな……」

「クマちゃん。それって良太郎、失敗するの？」

「それはわからへん」

「ま、ここでビクビクしてても仕方ねーだろ。黙って見てよーぜ。な？」

あれやこれやと外野が言っても仕方ないことだと判断したモモタロスは全員に言った。

*

デンカメンソードをその場において、ライナー電王は構えを一つも取らずに直立していた。

その行動がZゼロノスの警戒心を更に煽ることになった。

今のライナー電王は隙だらけだ。

どこからでも狙いをつけることができる。

しかし、それがこちらを誘い込むための罠のようにも思える。

「どこからでも来い、か……」

Zサーベルを正眼に構えたまま、円軌道で移動しながらライナー電王のうかがう。

体力の消耗が激しくなるが、慎重に動かなければならない。

(多分野上は次で終わらせに来る。となると俺もこの一撃で終わらせらる!!)

Zゼロノスはゼロノスベルト上部のフルチャージスイッチを押す。

『フルチャージ』

電子音声が発してからダミーカードをゼロノスベルトのクロスディスクから抜き取り、Zサーベルのガツシャースロットに挿し込む。

Zサーベルの刃からバチバチとフリーエネルギーが充填される。円軌道で移動しているが、先程のような軽やかなステップではない。

ゆつくりとしかし、獲物を狩るような動きだ。

「正面から斬りにいくなんて、俺のガラじゃないんだけどな」
「……………」

Zゼロノスの言葉に、ライナー電王は何も返してこない。

正面から斬りにいくのは自分のスタイルではない。

効率よく、いわば相手に本気を出させずに勝つというのが自分のスタイルだ。

デネブからは「卑怯すぎる！」と抗議を受けることはしばしばだが。上段に構えてから、ゆつくりとだがライナー電王との間合いを詰めていく。

(あと二歩…………)

警戒しながら間合いを詰めていくというのは必要以上に体力を消耗する。

(正直、神経まで削られている気分だぜ)

もう一歩詰める。

自分が踏み込めるのはあと一歩だ。

それ以上踏み込むと、向こう側の領域エリアになる。

温度が二、三度下がったような気がする。

*

ビルの屋上で観戦している全員が口を開かなかつた。

正確にはいつ決着がつくかわからない状態なので、一瞬でも見逃したくないのだ。

張りつめた空気がこちらにも伝わってくる。

普段は明るいノリをしているイマジン達も何も言わない。

(手え出してミスった方が負けになるからなあ。良太郎も侑斗もまるで動こうとしねえ)

モモタロスの言うように、ほんの一瞬の判断ミスがこの戦いの終わりになる。

カチャカチャとシヤリオ・フィニーノがモニターを操作する音だけが聞こえた。

*

「行くぞ」

「うん」

短く応答するZゼロノスとライナー電王。

「終わりだ!!」

ZゼロノスがZサーベルを一気にライナー電王の脳天に向かって振り下ろす。

全てを切り裂き、滅する勢いで。

「野上iiiiiiii!!」

ライナー電王は数ミリの間隔で太刀筋を見切つて、避ける。

傍から見ればZゼロノスがわざと外しているようにも見えるほどだ。

相手をとらえ損ねたZサーベルの刃に充填されているフリーエネルギーは、地面を走る。

その証明として、一本の線が地面を抉って終着点としてビルまで走り、結果としてL字で跡を作っていた。

左足を前に出して、しっかりと地面を踏む。

フリーエネルギーを纏った右拳をZゼロノスの腹部に狙いをつけて放つ。

「うわああああああああああ!!」

半ば悲鳴に近い叫びをあげながら、放った拳を抉りこむようにして打つ。

「#\$\$%&!!」

Zゼロノスは声にならない声を上げる。

右拳を引き抜く。

腹部を両手で抱え、くの字になりながらもこちらを睨んでいる。

(もう右手は使えない。あと三発……)

ライナー電王の右手は先程の一撃でボロボロになっており、拳として放つという事は不可能——死に腕になっていた。

動かないZゼロノスの前に歩み、左拳を振り上げる。

顔面に放つ。

踏ん張る力がないのか、弧を描きながら後方へと吹っ飛ぶ。

ビルの壁をぶち破る。

コンクリートの粉塵が舞う。

そこから人影が出てくる。

Zゼロノスが立ち上がる。

こつちを見ているだけで、何もしようとはしない。

(まだ立つ?)

ライナー電王はZゼロノスに歩み寄る。

両腕は使えない。

しかし、フルチャージを四回しておりあと二回放つことができる。

それはあくまで理論上でのことだ。

実際に両拳は使えなくなっているし、自身を支えている両脚があるが実質的に攻撃として放てるのはあと一回だ。

両脚を使うと、立てなくなる。

それを覚悟しているなら、使うことができる。

「胃の中のものが全部出そうな気分だったぞ……。そんな隠し玉を持ってたのかよ」

「余裕がないと使えないんだけどね……」

互いに睨み合ったまま動かない。

「攻撃手段があるならさっさと撃てよ。こつちはもう両腕も両脚もガクガクきてるんだよ」

よく見ると、Zゼロノスの両腕と両脚は激しく震えていた。

反撃する力がないというのも本当の事だろう。

「あるけどさ。もう撃てないよ」

身体に纏われているフリーエネルギーが徐々に消えていく。

「やっぱり身体全身に纏わせても、すぐに使わないと消えちゃうみたいだね」

ライナー電王ももう反撃の手はない。

蹴りを放つことはできるが、それはいくら放つても決定打にはならないだろう。

「そうかよ……」

緊張の糸が切れたのか、乙ゼロノスはその場でへたり込んでしまった。

「……はあ……」

ライナー電王も座り込んでしまった。

「野上？お前どういうつもりだ？」

「侑斗の言う通り、隠し玉はあと二回は使えるよ。でもそれを使うと僕の身体がもちそうにないしね」

「俺は意識はあるけど、両腕、両脚が動きそうにない。だったら今回は……」

乙ゼロノスの言いたい事はライナー電王には理解できた。

「引き分け」

告げたと同時に乙ゼロノスが仰向けになって倒れていくのが見えながらも、ライナー電王も意識を手放した。

*

野上良太郎が目を開くと、そこは見知らぬ天井だった。

「よお、目え覚めたみてえだな」

周囲をも回そうとしたが、モモタロスの声のする方に顔を向ける。

モモタロスが座っていた。

「モモタロス……」

「まあ上出来じゃねえのか。色々ダメ出しする部分は多いけどな」

良太郎が言う前に、モモタロスが今回の評価を告げた。

「みんなは？」

「カメ、クマ、小僧にコハナクソ女ならオメエの仕事やってるよ」

「え!？」

良太郎はその返答に不安を感じずにはいられなかった。

「何だよ？俺達がオメエの代わりに仕事するのがそんなにイヤなのかよ？」

「そうじゃないよ。だって皆ミッドチルダの文字書けるの？てゆうか読めるの？」

「オメエ、俺達の事舐めてるな？二週間いればそんなくらいできて当たり前だろ？」

良太郎の質問に、モモタロスは自信を持って答えた。

どうみても虚勢ではない。

「いや、普通はたった二週間で異世界の読み書きなんて早々できるもんじゃないんだけどね」

たとえるならばアメリカに行った日本人が二週間で読み書きを理解できるかと言われると、ほとんどの人が『ノー』と答えるだろう。

「で、こんな感じで進めるんだとよ。おい侑斗、オメエも見とけよ？」

黙って天井を見上げていた桜井侑斗にもモモタロスは持ってきた紙を渡す。

「俺もか……」

「オカンから言われてるんだろ？俺達の事を紹介しなきゃなんねえつてよ」

「期日はまだ余裕あったはずよな？」

侑斗が確認するようにモモタロスに訊ねる。

「明後日だとよ」

「そのことだけど、変更になったわよ」

モモタロスの答えを否定するようにして陸士隊服の上に白衣を着こんだシャマルが入ってきた。

「二人が盛大に戦ってできた傷を完治するには最低でも三日はかかるの」

シャマルはかかる日数を先に述べてから、カルテを読み上げている。

「良太郎君及び侑斗君の今回の喧嘩による怪我は……」

「シャマルさん。僕達一応訓練したいなことをしていたわけで……」

あくまで『喧嘩』ではなく『訓練』だと主張をする良太郎。

最後あたりになると、声がかすれていた。

挨拶をする元気もないのに、わざわざしてくれるのはありがたいが見ていて痛々しいものだった。

四人はトボトボと寮へと入っていった。

「お疲れ様……」

良太郎は労うように返した。

彼らに聞こえていると思いたかった。

自分が本格的に仕事に取り掛かるのは明日からであり、今日はとりあえず後は入浴して眠るだけだった。

しかし、眠るには早すぎる。

「そーいや、少しお腹すいたな……」

電王に変身すると、極度に体力を使うので軽く食べた程度では足しにはならない。

六課隊舎にある食堂がまだ開いていることを祈りながら、良太郎は歩を進めた。

「照明がついているからまだ大丈夫かな……」

六課隊舎に入ると、照明が切られていないところからしてもしかしたら食堂は開いているかもしれないと勘繰る。

良太郎が食堂に入ろうとした時だ。

「良太郎」

女性のしかも、自分にとっては聞き覚えのある声だった。

声のする方向に顔を向けると、そこにはフェイトがいた。

彼女は目があった瞬間に、不機嫌そうな表情をとっていた。

その理由はわかつていたので、何を言われても仕方ないと覚悟をすることにした。

「あー、えーと……」

いつものように声をかけれない。

自身にやましいことがあるのだから当然と言えば当然だ。

「もしかして、私が昼間の事で怒ってるって思ってる?」

フェイトがじーつとこちらを見ながら言う。

表情は、あからさまに『私は怒ってます』だ。

「怒ってないわけ……ないよね?」

良太郎はおそろおそろ訊ねる。

「当たり前だよ!!」

多分知っている人なら『信じられない』という表情をしているだろう。

「良太郎が桜井さんと戦うって聞いたときは驚いただけで済んだけど、その結果がその怪我じゃ怒るよ!!」

多分、フェイトの怒った姿を見るのはこれが初めてだと思う。

「……ごめんなさい」

良太郎は素直に謝罪した。

下手な言い訳は男らしくないと思ったし、何より怒ってはいるが涙目になっているフェイトを見ると胸がチクチクと痛む。

「悪いって思ってる?もし、場を取り繕うためだったら本当に怒るよ……」

「心配かけたこと、本当に反省してます。ごめんなさい」

良太郎はもう一度頭を下げて謝罪した。

「……じゃあいいよ。私からは何も言うことはない」

そう言うと、フェイトはハンカチを取り出して目尻を拭いていた。拭き終わるとハンカチをしまいこんでこちらに視線を向けていた。

「で、どうしたの?シヤマル先生が言うには本来なら医務室で大人しくしてないといけないんじゃないの?」

フェイトの表情は元に戻っていた。

「いやその……お腹すいちやって……。それに皆の夜食でも作れたら作ろうと思ってるね」

良太郎は来訪目的を素直に打ち明けた。

「怪我してるの?」

「まあその……」

フェイトに問い詰められるとぼつが悪そうな表情になってしまう。軽いものでいいなら私が作るよ」

そんな自分の表情を見かねたのかフェイトは自分が作ると言い出した。

こつちを氣遣つての事だという事はすぐにわかる。
相変わらず損な性分だと思つてしまう。

「じゃあお願いしようかな」

「何が食べたい？」

「フェイトちゃんに任せるよ」

断つてもこれ以上はこじれるだけだと判断した良太郎はフェイトにすべてを任せることにした。

「設立趣旨の説明はどうだったの？」

食堂に入った良太郎とフェイトは厨房が空になつていたので、入つて夜食の支度をしていた。

小さい皿と大きな皿の二つを用意する。

一つは自分用。

もう一つは現在も仕事をしている仲間達の分だ。

「で、何を作るつもり？」

「夜食の定番といえばおにぎりでしょう」

フェイトが準備をしながら、訊ねてきた良太郎に回答した。

「おかずとかもつけた方がいいかな？」

「まあ、あつた方がいいかもしれないね」

イマジン達も自分同様に健啖家だ。好き嫌いらしいものはない。

強いて挙げれば『まずいものが嫌い』というくらいだろう。

「あの、やっぱり僕も手伝つた方が……」

「ダメ」

フェイト一人に夜食作りをさせるわけにはいかないのです、手伝おうと言うがあつさり却下されてしまった。

「それにその手で、食材手摺みはダメだつて」

良太郎の両手は包帯で巻かれていた。ハッキリ言つて食べる側からすればあまりいい評価は受けないだろう。

フェイトは慣れた手つきでおにぎりを作り始める。

厨房はすごく静かだった。

(こういう時、何か話しかけた方がいいのかな……)

作業中の人間に話しかけるのはマナーとしてはどうかと思つてし

まうが、退屈なものは退屈だ。

隣に料理をしている人間がいるので、フケが落ちるかもしれないので後頭部を搔けない。

「そういえばさ、執務官になったんだよね。おめでとう」

沈黙に耐えられなくなった良太郎は思い出した事を言う。

「……ふっ。それ今になって言う事じゃないよ」

黙々と作業をしていたフェイトが手を止めて、吹き出した。

口元はちゃんと手で押さえていた。

「ごめんごめん。何か君に言わなきゃいけない事があるとは思ってたんだけど、あれやこれやで、ね」

「それで今になってって事？」

「まあ……」

フェイトは笑みを浮かべたまま、作業を続ける。

良太郎はあたふたとしているが言いたい事は言ったので気分は晴れ晴れだった。

フェイトの手はおにぎりを作る手は止まっていない。

既に七個目になっていた。

「手際いいね。作り慣れてる？」

料理をしている手つきを見られているというのは、改めて考えると結構恥ずかしかったりするが褒められているので羞恥の感情は表面化されていなかった。

「執務官試験の時にはお世話になったからね」

今となつてはいい思い出とフェイトは割り切れるが、体験したいかと言われると『ノー』と答えるの自然の摂理の様なものだ。

「良太郎」

「ん？」

「また強くなった？」

なのは經由でライナー電王対乙ゼロノスの模擬戦の映像を一部始終を見ていたので率直な感想を訊ねてみる。

この間もおにぎりを作る手は止まっていない。

「イマジンは戦ってたし、モモタロス達との特訓は続けていたから

ね。少しは強くなったと思うよ」

良太郎は、鼻の頭を人差し指で一搔きしてから答えた。

(少し!?!映像を見たけど十年前よりはるかに強くなってるよ……。実戦と特訓だけであそこまで強くなれるのかな……)

良太郎が強くなった要因としては、彼の口から述べた二つが説得力があるといえはある。

だがそれだけで強くなったのではないと、フェイトは考えている。人はあることがきっかけて今までにないくらいに急激に成長を遂げることがある。

日々の鍛練はそれを引き出すためのきっかけのようなものだともいわれている。

それとも今、良太郎は『成長期』なのではとも思っている。

(『成長期』って言葉で今はくくつてるけど、それだけでは済まないような気がしてくる……)

十年たった現在の自分は十年前の自分よりも強くなったと自負しているが、あの映像を見たらそんな気持ちを持つことが『傲慢』だと思わされるくらいだ。

電王、仮面ライダーと最初に戦闘をしたのは自分だ。

(今、戦えばどうなるんだろ……)

『勝つ』か『負ける』かというと、わからない。

確実に『勝つ』とはいえない。

相手はイマジン討伐のプロフェッショナルにして限りなく『最強』に近い存在だから。

だからといって『負ける』という前提で戦うのは相手に対して、失礼だ。

(『勝つ』気持ちでは挑めないね。まだ……)

それが今のフェイトの素直な気持ちだった。

『まだ』挑めない。

(でももう一度再戦してみせる。貴方の背中を護れるくらい強くなつてみせる。いつまでも護られっぱなしじゃなくて、ね)

時空管理局執務官としてではなく、エリオ、キャロの保護者でもな

くフェイト・T・ハラオウンとしての素の目標だ。

「フェイトちゃん」

隣の良太郎に声をかけられた。

「!!え!?どうしたの?」

おにぎりを作りながらも、考え事をしていたので意識はそこにはなかった。

「夜食の量を超えてるよ。絶対に……」

良太郎の言うように、いくらイマジン達が大食漢でも仕事の際の『夜食』なので食べすぎはよくないと思ったのだが、作りすぎたらしい。

「ううう。やつちやつたあゝ」

フェイトは赤くなつた顔を良太郎に見られまいとしながらも、頭を抱えた。

結局、作りすぎた夜食もイマジン達が食べることになったという。

良太郎とフェイトは夜食を渡し終えた後、食堂へと移動していた。

フェイトがトレイで持っているのは良太郎の夜食である。

おにぎりではなく、茶碗に入ったご飯と厚焼き玉子だ。

適当な席があつたので、二人は座る。

席に着くとフェイトはトレイに乗つかつて二つをテーブルに置く。

「はい。どうぞ」

「いただきます」

作り主から食べるゴーサインが出たので、良太郎は合掌をしてから箸を手にする。

「ご飯を一口、卵焼きを一口食べる。」

「おいしい……」

良太郎は短く、しかし素直に述べた。

「ありがとう。久々に作ったんだけどね」

フェイトは笑みを浮かべる。

食事を終えて、フェイトにお茶を淹れてもらい啜っていた。

「今日の設立趣旨で、仮面ライダーと協力してるって事を上層部の人

達にも打ち明けたから」

「思い切ったね……。八神さんの発案？」

「うん。隠ぺいするよりも早い内に暴露する方がいいってね」

正論だと良太郎は思う。

「反応はどうだったの？」

「うーん。下手な干渉はしてこないとは思うよ。表立っては、けどね」

「僕達個人を呼びつけて勧誘とかはあるって事？」

良太郎のたとえにフェイトは首を縦に振る。

「うん。そうなると私達は身元保証人的存在だけど、良太郎達を拘束する権利はないからその……」

「勧誘に乗っても構わないと？」

「う、うん。だ、大丈夫だよ。仮に良太郎達がいなくなっても……いなくなっても……」

フェイトの声がどんどん弱弱しくなってきた。

「全然平気だから!!」

と、言っているが全身は震えて涙目になっているので説得力のかけらもない。

「あー、大丈夫。下手な勧誘に乗るつもりはないから安心していいよ」

「本当？」

「僕達の手だけが目当ての勧誘なんだったら、お断りだね」

良太郎は自身の意思をきちんとフェイトに伝える。

「それに機動六課以外にモモタロス達と付き合っていけるとは思えないしね」

良太郎の一言は、あまりに説得力のあるものだった。

機動六課以外の遺失物管理課はそれなりに規律がある。

『規律って何？』を地で歩くようなイマジジン達をそれで縛る事なんてできはしないだろう。

「確かに。モモタロス達と付き合えるのって機動六課だけかもね」

フェイトも納得してしまった。

涙目でなくなり、笑顔に戻っていた。

(十年前と想いは変わってない、か……)

フェイトと正面から会話をしていると自分をそのように思っている事に『嬉しい』と思う反面、『申し訳ない』という気持ちもあつた。

良太郎とフェイトが機動六課の隊舎を出た後の話になる。

侑斗は、隣で母親のごとく説教しているはやての言葉をウンザリしながらも聞いていた。

「まったく、野上さんに喧嘩ふっかけて怪我するんはシグナムだけやと思うてたのに……。侑斗さんまで……」

「シグナムはいいのかよ?」

「しょうがないやん。シグナム、強い人見たら戦いたがる性癖なんやから」

「年頃の娘が性癖なんて言うな。せめてサガって言え」

説教を聞きながら、はやての言葉に侑斗は注意する。

「それでも今の野上さんを見ても、戦いたがらへんところを見ると我慢強くなつたんやなあ。あ、違うわ。あつちかあ……」

何かを思い出しながら、はやてはほくそ笑んでいた。

「何一人で思い出し笑いしてるんだよ?」

「ん?何でもあらへんよ」

「シグナムが野上に気があるんだろ?」

侑斗の一言に、はやてはその場で動きを止めて目を開いていた。

「知ってたん!？」

「俺は野上ほど鈍くはないぞ」

侑斗はしれつと言う。

食堂に入ると、ヴォルケンリッターとデネブが食事をしていて。

ヴィータとデネブが手を振っていた。

シヤマルとシグナム、ザフィーラ(狼)は軽く頭を下げていた。

「侑斗さん」

「わかっている。俺も馬に蹴られて死ぬつもりはないからな」

そんな話をしながら、侑斗とはやては席に着く。

「みんなでお食事かあ?」

「はい。打ち合わせがてら」

はやての質問に、シヤマルが笑顔で答えた。

「はやてと侑斗はご飯食べた？」

はやてはザフィーラを撫でており、侑斗は腕を組んでそんなやり取りを見ていた。

「お昼抜きやったからもうお腹ペコペコや」

「俺は食べたが、小腹がすいた」

「それは大変ですね。すぐに注文してきましょう。桜井、お前は軽いものでいいな？」

「ああ。頼む」

「お茶二人分追加しまーす」

二人が空腹だと聞くと、シグナムとシヤマルが注文に行った。

「おおきになあ」

はやては二人に礼を言いながら、背中を見送った。

注文した料理が届き、八神家＋ゼロライナーで食事をとることにした。

ちなみにリインはというと。

「すぴー。くー」

はやてが下げているバッグを開けると、そこにはリインが眠っており、中身は眠っている彼女専用の私室にカスタマイズされていた。

「よく眠ってるなあ」

「まあ一生懸命働いてくれてるからなあ」

ヴィータはリインの寝姿を、呆れ半分で見ながらバッグのふたを閉じた。

食事をしながら、本日の出来事を皆で報告しあっている。

「中央の方はどうでしたか？」

シグナムがフォークを置いて、はやてに訊ねた。

「まあ新設部隊とはいえ、後ろ盾は相当しっかりしてるからなあ。そんなに問題はないよ」

「やつぱり、あつたんだな。後ろ盾」

侑斗は機動六課がバックボーンもなしに、設立できるとは到底思え

なかった。

『出る杭は打たれる』の法則だ。

「後見人だけでもリンディ提督にレティ提督にクロノ君、じゃないクロノ・ハラオウン提督」

「そして最大の後ろ盾。聖王教会と教会騎士団の騎士カリム。ま、文句の出ようはありませんね」

(それでも圧倒的な暴力には屈するんだよな……)

侑斗はこれから起こる五か月後の未来を映像で見ている。

そこには機動六課の隊舎は影も形もなかった。

(こいつらの『夢』護りたいよな)

夢を持たない自分にしてみれば夢を持っている彼女達が羨ましく思う。

だからこそ、護りたいという気持ちがある侑斗にはあった。

こうして一日は終わっていく。

ファーストアラート

第十六話 「明かされる次元世界最強の戦士」

桜井侑斗は現在、居候先である八神家で割り当てられた部屋で夜空を眺めていた。

「どうしたん？侑斗さん、天体観測かあ？」

寝間着姿の八神はやてが、部屋に入ってきた。

ワインボトルとグラスが二つ乗っているトレイを持ってきていた。

「お前、十九だろ？未成年の飲酒を認める気はないぞ」

といつても侑斗も軽く舐める程度には飲めてたりする。

「ミッドでは低年齢でも飲酒はOKなんやで。色々付き合いもあるから習慣といえは習慣やね」

そう言いながら、はやては侑斗にワイングラスを渡す。

「黙認だろ。ほとんど」

郷に入つては郷に従えということかもしれないと判断し、侑斗は受け取る。

「親御さんがいたら微妙な顔をするぞ。年頃の若い娘が男と酒飲んでるからな」

「ま、ま、侑斗さんどうぞ」

はやてはあえて、聞かないふりをしながらワイングラスにワインボトルを傾ける。

ドクドクとグラスの中にボトルの中身が入っていく。

「赤ワインか……」

「私、これ好きやねん」

はやては自分の分もグラスに注ぐ。

「八神ー。おつまみ持ってきたよー」

とデネブがおつまみを乗せた皿を持って部屋に入ってきた。

「お前、デネブに作らせていたのかよ？」

「私がお酒持って、侑斗さんのところに行くって言ったたらデネブちゃ

んがおつまみ作るって言うてくれたからご厚意に甘えよと思うて……」

呆れ半分の侑斗に対して、はやては照れ顔で内情を説明した。

デネブが持ってきたおつまみとはビーフジャーキーとチーズだった。

「それじゃごゆっくり」

デネブは気を利かせてくれたのか、おつまみを置いて部屋から出ていった。

「たく……」

妙な空気だけは読んだよなあ、あいつ。とデネブの背中を見送りながら侑斗は思う。

乾杯の音頭は取らずに、侑斗とはやては互いのタイミングで飲み始めた。

しばらく経つての事だ。

「侑斗さん」

「ん？何だよ」

「何で野上さんと戦おうって思ったん？オーナーさんから貰った武器のならしで済ませれてたはずなのに……」

はやてが訊ねてきたのは本日の野上良太郎との戦いの事だ。

「確かめたかったのかもしれないな」

「何をや？」

「野上の蓋が開いたかどうかをさ」

侑斗は告げると、チーズを口の中に入れる。

「で、侑斗さんはどない見たん？」

訊ねないところからして、自分が言う『蓋』という意味を彼女は理解しているのだろう。

「開いたな。でなきや『ならし』の段階で終わってたと思うぜ」

GZガツシャーとGDガツシャーのならし運転といえば、楽なようにも感じるが侑斗は全力とまではいかないが七割以上は出していたのだ。

対する良太郎がそれより下だとは思えないが、それでも全力で『な

らし』をしていたとは考えにくかった。

電王に成りたてのままの良太郎だったら、確実に終わっていたと断言できる。

「八神」

「ん？なあに侑斗さん」

「今の野上は強いぞ。本当の意味で、な」

「本当の意味？どういう事なん侑斗さん」

訊ねてくる事からして今度は意味を理解できていないようだ。

「じっくり考えてみな」

侑斗は、その答えを見つけることを楽しむように言いながらグラスの中に入っているワインを口の中に入れた。

しばらくして、はやての声が聞こえなくなると彼女はすーすと寝息を立てていた。

布団をかけてから、侑斗は後頭部を搔きながら部屋を出た。

「リビングで寝るか……」

そう呟いて。

*

翌朝になると、機動六課隊舎の一室のドア入口には『関係者以外入室禁止』とミッドチルダの文字で書かれている張り紙が貼っていた。

「あー眠いー」

「僕、徹夜のできる体質じゃないんだけどねー」

「ぐおおおおおがああああああああああ」

「クマちゃん。うるさーいいい」

モモタロスとウラタロスが机に突っ伏しており、キンタロスはそこから爆睡中でリュウタロスが睡眠妨害で原因に文句を垂らしていた。「アンタ達く、寝る前にちゃんとどの画像がいいか決めときなさいよ」。ふあーあー

モニターを前にして、リモコン操作をしているコハナはあくびをしながらも作業を続行していた。

現在、四体と一人は過去の映像を編集して、電王やゼロノスの紹介をするための資料を作っていた。

最初のうちは自分たちの過去の戦いを見てはしゃいでいたのだが、今までの分全部となるとその量は馬鹿にならないものとなっている。つまり彼らは次第に飽きはじめ、そして眠気が襲来し今まで睡魔と闘っていたのだ。

それは今一人で作業をしているコハナも同じことだが。その中で良太郎は自分を含めての人数分のコーヒーを作っていた。コーヒーをカップに淹れて、なんとか頑張つて起きている面々に渡していく。

そしてその場にいる全員が同じタイミングで一口飲む。

ぷはー。

と何とも気の抜けそうな声を出す。

「それでどのくらいまでできてるの?」

映像の編集をしているコハナに訊ねる。

「さっすがにどの映像を使えばいいかってなると、結構悩むのよねえ。それにしても私達つて結構戦ってきたのよねえ」

感慨深く語りながらも、コハナは視線をテレビに向けたままだった。

「コーヒー一杯飲んだ程度ではどうやらあまり効果はないらしく、彼女の両目は半分閉じようとしていた。

「ナオミさんのコーヒーを作った方がよかったかなあ……」

そう良太郎が呟くと、コハナは激しく首を横に振った。

目が覚めるのは一瞬で別の意味で意識を持ってかれてはたまらないからだ。

「映像を見せた方が早いってのはわかるけど、古い映像見せたら詐欺にならない?」

「古い映像といっても、ここまで派手に戦ったのは一年ちよつとだからどれも『古い』と呼べないわよ」

コハナの言葉に良太郎は思い出す。

急速に桁外れな強さを手に入れたとはいえ、良太郎達の戦闘キャリ

アは二年を超えていないのだ。

それだけで、あれだけ強くなつたという事は内容が一回の戦闘の内容がいかに凄まじいものかという事を理解できるものだ。

生きているって素晴らしいと改めて思い知らされる。

「別世界＜rp＞（＜rp＞（＜rt＞（＜rt＞（rp＞（rp＞＜rp＞＜rp＞での戦闘映像ってないの？」

「あるけど、それにする？私達の今後に影響する可能性は大だと思うけど……」

別世界、つまり海鳴市での戦闘映像をメインにするという事はイマジンだけでなく、魔導師や騎士との戦闘も映し出されている。

それを映すという事は自分達が『魔導師や騎士を凌駕できる存在』という事をアピールしていると受け止められる事もある。

機動六課にも魔導師や騎士に憧憬の念を抱いている局員達はあるだろう。

その者達にとっては決して面白くない事になるのは間違いない。

「僕達の事を知ってもらおうつてのはある意味では誰かの常識を徹底的に潰す結果になるのかもしれない……。でも……」

「でもっ。」

「僕達が流す映像から目を背けたら別世界でこれから起きる出来事には決して立ち向かえない……」

良太郎は『サイキョウニシテサイアクナルモノ』という単語を思い出しながら、静かに厳かに語る。

「そうね。下手な誤魔化しは後で悲惨な結果を招きかねないものね」

コハナは意を決したように、『本世界中心のでの戦闘記録』から『別世界中心の戦闘記録』へと変更した。

侑斗は部隊長室で自身が担当するゼロノスの紹介に関する原稿を執筆中だった。

しかし、進行状況は芳しくなく紙をクシャクシャに丸めてゴミ箱にポイの繰り返しになっていった。

それをはやては半分面白く、半分は感心しながら眺めていた。

リインは純粹にゴミ箱に百発百中で入っていく様を見せて「すごい
ですう」と賞賛していた。

何故、彼がここでこのような作業をしているかという答えは簡単
だった。

モモタロス達に茶化されることを避けての事だ。

ちなみにデネブも侑斗の隣で自身の事と侑斗の事について、せつせ
と書いていた。

「侑斗。できたよ」

と隣で書いている契約者に見てもらおう。

裁定はというと。

「デエネエブウ!!」

顔を真っ赤にした侑斗がデネブの書いた原稿を丸めてポイしてか
ら素早く背後に回り、両掌を合わせる形で両手を組んで手首や前腕を
デネブの喉にあて締め上げ始めた。

「ゆ、侑斗！痛い！やめて！締まってる締まってる!!」

デネブが慣れた具合に締め上げている侑斗の腕を両手で軽く叩く。

「お前、自分の紹介に何で俺を紹介するような内容を入れてるんだよ
!!」

「だって八神達以外の人にも侑斗の事を知ってもらおうと思って
……」

締められながらもデネブは自分の言い分を主張する。

「お前に紹介されなくても、俺の事は俺の今後の行動でわかるもんだ
ろ?」

侑斗は気が済んだので、デネブを解放する。

「ユウトさん!!」

侑斗とデネブのやり取りを見ていたリインが浮遊しながら、侑斗の
眼前に現れた。

「おデブさんはユウトさんの事を想ったの事をしたんですよ!!どうし
て、こんな酷い事をするんですか!」

「あ、リイン。あのな……」

はやてが言おうとする前に、リインは侑斗に説教を始めていた。

「いくらおデブさんが頑丈なイメージさんだからといって、問答無用で締め技をしていい事なんてないんですよ!!」

「あ、ああ」

「わかってるんですか!?!」

「まあ……」

リインに、侑斗は圧されていた。

ここまで自分に叱ってくるとは思わなかったのだ。

小さな身体で精いっぱい声を張り上げている。

「八神。どうしよう……」

「どないしよってデネブちゃん……。私にもどないにもならんで」

デネブとはやての声が入る中、侑斗はリインにこの後一時間近く説教を受ける事になった。

昼休みとなり、食堂で良太郎は午前の訓練を終えて昼食をがついているフォワード達と顔を合わせた。

スバル・ナカジマとエリオ・モンディアルの皿には一人前とは思えない量の料理が乗っていた。

それを二人はリスのように頬を膨らませて、食べていた。

ティアナ・ランスターとキャロ・ル・ルシエは一人前の料理を食べていた。

二人に比べると、食が進まないのは食欲よりも疲労の方が勝っているからだと思われる。

「相席いい?」

良太郎は自分の料理をトレーに乗せたまま、フォワード四人の中でリーダー的存在であるティアナにお伺いを立てる。

「どうぞ」

ティアナは良太郎と目を合わせてから、了承の返事をした。

「ありがとう」

口元をゆるませて、笑みを浮かべてから座る。

全員の視線が自分に向けられていた。

「ええと、何、かな。そう見られると食べられないんだけどね……」

良太郎が手を付けようとする料理の量は決して多くはないが、少ないともいえない。

ティアナやキャロよりは多いが、スバル、エリオに比べると少ない量だ。

「あのお、それだけで足りるんですか？」

スバルが食べる事を中断して、訊ねてきた。

「身体を動かしたわけじゃないから、このくらいで十分だよ」

嘘偽りのない意見で返す。

良太郎は箸を手にして、日替わり定食を食べ始める。

それでも四人の視線が付きまとう。

「どうしたの？冷めちゃうよ？」

良太郎は四人の食が止まっているので、食べるように促してみる。

四人が同じタイミングで再開する。

だが、それでもチラチラと視線を向けてくる。

(やっぱり昨日の事かな……)

間近で自分と侑斗の戦いを見ていたのだ。何か聞きたい事があるのかもしれない、と考える。

「もしかして、僕に何か聞きたい事とかあったりする？」

自分から質問しやすいように切り出してみた。

四人は互いに顔を見合している。

その間に、唇からは一言も声が発せられていない。

(念話、かな)

フェイト・T・ハラオウン経由で魔法の事はそれなりに教わっているので予想を立てる事はできる。

魔導師ではない自分には四人が念話で交信をとっているのかはわからないが、アイコンタクトではない事だけはわかる。

見合わせている時間が長いからだ。

アイコンタクトのメリットは一瞬、目を合わせて互いの意思疎通を行う事だ。

つまり第三者に気取られた時点で『失敗』という事になる。

この場合、四人がアイコンタクトをしているとしたら自分に気取ら

れているので失敗という事になるわけだ。

「あ、あの野上さん」

「なに？ナカジマさん」

切り出してきたのはスバルだ。

「あ、スバルでいいですよ。あのですね。野上さんって戦いのキャリアあって長いんですか？」

そのような事を訊ねてくるとは思わなかった。

「長いか短いかで言われると、正直わからないけど一年と八か月くらいかな……」

コハナ(当時はハナ)と出会い、モモタロスと出会って仮面ライダー電王ソードフォーム(以後：ソード電王)に変身してバットイマジックと戦ったことから自分の戦いの歴史が始まったと言える。

良太郎の返答に、四人は視線を合わせている。

一年八か月。

社会人が『会社』という組織で身を置く数字としては決して長いとは言えない。

職場にとつては『一人前』と評されるし、『ヒヨッコ以下』とも評される。

良太郎が現在、身を置いている『戦いの世界』でこの日数は『一年八か月も生き残っている』という解釈ができるが、『一年八か月しか戦っていない』という解釈をとることも可能だ。

四人がどのような解釈をとれているかは念話やテレパシーなどが無縁な良太郎には永遠にわからない事だった。

良太郎はこれ以上は質問がないと判断したのか、黙々と食事をつけた。

食事を終わると良太郎はモモタロス達と交替で部屋に戻り、作業に戻ることにした。

「野上い。作業は進んでる？」

しばらくしてからデネブが近況を知るために入ってきた。

デネブキャンディーを持参してだ。

「ぼちぼちとね」

「この手の事では当たり障りのない台詞で返す。」

「そつちは？」

「俺も侑斗も結構難航している。自分の事を人に伝えるって難しい……」

「デネブが難色の色を浮かべていた。」

「誰でもそうだと思うよ。自分のことほど人に伝えるのって難しいものはないからね」

「デネブを元気づけられるかどうかはわからないが、良太郎はそういうに言う。」

「うん……。コレみんなにね」

「デネブは元気を取り戻したのか、持参したデネブキャンディーを良太郎に渡して部屋を出て行った。」

*

コハナは昼食を終えた後、イメージン達とは別行動をとっていた。

彼女が現在足を踏み入れているのは、ミッドチルダでもなければ海鳴市でもない。

「モニユメントバレーを髣髴させる荒野——『時の空間』で停車しているデンライナーにいた。」

「さつきも飲んだが、ナオミの厚意を無下にするわけにはいかないの
でコーヒーを飲む。」

「(ミッドチルダ(むこう)で美味しいのを飲むと、余計に違和感感じ
ちゃうわね)」

「ナオミには決して言えない事だった。」

「ここに来た目的はひとつ。」

『サイキョウユニシテサイアクナルモノ』の新しい情報が得られたかどうかだ。

「待つこと五分。」

「オーナーがステッキをつきながら脇に抱えている紙束を持って食堂車へと入ってきた。」

「どうもお。お待たせして申し訳ありませんねえ」

オーナーは詫びを述べながら、コハナの向かいに座る。脇に抱えていた紙束をテーブルに置く。

「あの、オーナー。この紙束は一体？」

「あれから私達もターミナルの駅長とともに『サイキョウニシテサイアクナルモノ』について調べていくとこんな風になってしまったのですよ」

自分達が別世界で行動を始めてから一か月も経っていないのにこのような紙束ができるという事にコハナは目を丸くするしかなかった。

「まず私達はあの文章を作った主について調べる事を始めました。この文面はどうやら今の時間より五年前に作られたものですねえ」

「五年前、ですか。その時間って何かあったんですか？」

五年前の別世界の時間に自分達は行った事がないので、何が起こったのかは知らない事だ。

「大きな出来事はありませんねえ。ただ、ある出来事が起きましたがそれはこの『サイキョウニシテサイアクナルモノ』とは関係がないといえられないので、気にしないでください」

「は、はあ……」

何か誤魔化されているような感じがしたが、口先の勝負でオーナーに太刀打ちできるはずもないので渋々頷くことにする。

「次にこの単語は一つの単語として記されているものなのか、何かの文章の一部なのかを調べてみる事にしました。その結果がこれです」
オーナーは一枚の紙をコハナに見せた。

(こういうところが文明の違いを見せつけられちゃうのよね……)

ミッドチルダなら、宙にモニターが出現してタッチ操作で出現するという光景になるわけだが。

コハナは目を通していく中で、ある部分で目を大きく開く。

「オーナー。これって……」

「いずれ時間が経過すれば解決することなので、良太郎君達以外には口外無用ですよ」

「わかりました……」

デンライナーのドアから『時の空間』を抜けて、機動六課隊舎へとコハナは戻ってきた。

その光景を局員達が目撃し、目を点にしていた。

ちなみに魔導師達は転送魔法を用いる事ができるが、それとて人物出現の前に魔法陣が展開されるので驚きの原因にはならない。

(あーそっかあ)

コハナは自身の迂闊さを呪いながら、周りの局員達を見る。

窓からいきなり外にはいない人間が出てきたら驚くのは当然だろう。

しかも魔法を使っていないのだから。

「あはははははは……。お仕事がんばってください」

苦笑いを浮かべながら、その場を走り去った。

*

夕方となり、映像の編集はあらかた完了したので後は文章作成だけとなった。

はやてから与えられたタイムリミットは五日だ。

今日に映像編集が完了できたのは、ひとえに皆の協力があつたからだと良太郎は思う。

編集した映像を一通り見たチームデンライナー、ゼロライナーはとうとうと。

よっしやああああああ!!

という歓喜の雄たけびを上げた。

「後はそれぞれの自己紹介の文章作成だけだね」

と良太郎が告げると、途端に暗くなってしまった。

誰一人として作り上げていないという事が丸わかりだった。

ちなみに良太郎は一番最初に作り終えていたので、彼の仕事はすでに終わっている。

余裕があるので、皆の手伝いをする事はできる。

(明日からでいいか)

一つの工程が完了したので気持ちに余裕ができたのでそのような気持ち芽生えた。

野上良太郎は決して仕事の虫(ワーカホリック)でも真面目人間でもない。

ただの人間だ。

疲れもすれば、怠け虫に支配されることだってあるのだ。

ましてや夕方だ。

イマジンの集中力が人間並みだと仮定すると、そろそろ緊張の糸が切れかかっている頃合いだからだ。

「まあ文章作りは明日からでも十分に間に合うし、今日はもう終わろう」

その一言に室内にいる全員が緊張の糸が本当に切れてしまった。

イマジン達とコハナが食堂で夕食をとっているなか、良太郎と侑斗はもう一度映像を見ていた。

「俺達も随分と戦ってきたな……」

「そうだね……」

侑斗の言葉に良太郎は相槌を打つ。

「今じゃ俺達はバケモノ扱い、か……」

侑斗も表面には出さないが、それなりには気にはしていたらしい。

「仕方ないよ。仮に僕達が別世界(ここ)の住人だったとしても、同じような反応をしていたと思うよ」

良太郎は誰かが悪いわけではないと言う。

「野上」

「ん?なに?侑斗」

場を沈黙が支配しようとしていた時に先に破ったのは侑斗だ。

「八神のやつ、高町やテスタロッサにも打ち明けていない事があると思っ」

「八神さんが?」

内容に反応した良太郎は侑斗のいる方向に顔を向ける。

彼の表情は真剣なものだった。

「あいつが自分の夢だけに『機動六課』を設立させたとは思えないんだ」

「何か裏があるって事？」

「裏か。あいつが親友を裏切って疾しいことをするはずがないから、内々に秘めておきたい理由があるんだと思う」

「その理由って、僕達と繋がりにあると思う？」

「ないとは言い切れないな。確実にあるという自信もないが」

推測や勘の域だと良太郎は判断した。

「俺もそろそろ上がる。今日は八神家総出で夕食だ」

「そうなんだ。お疲れ」

今夜の予定を告げる侑斗の背中を良太郎は見送った。

室内の照明をオフにして部屋を出ると、フェイトと会った。

「良太郎。今日はもう終わり？」

「うん。とりあえずひと段落はついたからね」

「そうなんだ。あ、ご飯食べた？」

「いや、これから食堂で食べようと思ってるけどフェイトちゃんは？」

「私はフォワードの皆にはちよつと悪いけど外食しようと思ってるんだけど……」

フェイトはそう言いながら、ちらりと良太郎を見る。

「なに？」

「良太郎。あのね。その……もしね、よかったらでいいんだけどさ。私と一緒に行かない？」

言葉を述べながら、フェイトの頬は赤くなっている。

「どこに？」

良太郎は確認するように訊ねる。

「私の行きつけの店」

フェイトは即答する。

「モモタロス達も連れて？」

良太郎はさらに訊ねる。

「良太郎と私の二人で！」

フェイトはまたも即答した。

声が大きくなると同時に、頬だけでなく顔全体が赤くなっているようにも見えた。

「えーっと……それって、その……デートって事？」

確認するような感じで、確信が持てないので自信なく訊ねる。

フェイトは今度は即答しない代わりに、どんだん顔を赤くしていた。

今、体温計で熱を測らしたら一発で破壊できそうだというくらいに。

「……う、うん」

短く、こくりと首を縦に振る。

良太郎は自身の体温が高くなっている事がハッキリわかった。

体内の血液が急激に流れが速くなっている事も。

心臓の鼓動も先程よりも激しくなっている事も。

生まれてから十九年。異性——女性にデートを申し込まれたことはなかった。

生まれもつての不運体質を自覚した時から意識的に避けていた。

女性とは『友達』になる事はできない、と。

ましてや『恋人』になんてもつての外だ、と。

女性に知り合いはいるが、『友達』と呼べるか否かというところだ。

学生時代では女子を『クラスメート』としてくくっていた。

以前に再会した澤田さんも、クラスメートであって『友達』かどうかといわれると微妙なものだ。

眼前で顔を赤くしながら、こちらを見ている少女を見る。

彼女が自分に告白したのは今より十年前の事だ。

(かわいいい……)

自分にとってフェイトはプレシア・テスタロッサ、アリシア・テスタロッサに託された『護るべき存在』であり、性別間を超えた『戦友』だ。

それに彼女を『かわいい』と思う事は多々あったが、そこに『異性』としての意識』はなかった。

今感じた『かわいい』は紛れもなく、『異性』としてのものだった。

男女交際なんてどこかの遠島にでも置いてきたくらいに縁のない良太郎だが、フェイトの勇気を振り絞ったの厚意を無碍する気はなかった。

「わかった。僕でよかったら一緒にいこう」

良太郎の良い返事に、フェイトが笑顔になったのは言うまでもないことだった。

*

それからチームデンライナー、ゼロライナーはひたすら頭を振り絞って、残っている作業を完成させることに専念した。

*

そして、期限の五日が終えて翌日のこと。

機動六課の一室には隊長、副隊長、フォワードやバックヤードはもちろんのこと、前線に出る事のない内勤局員や厨房のコック達まで着席していた。

まさに機動六課全員がこの部屋に集まっているのだ。

良太郎も侑斗も服装はスーツである。

「そういえば八神さんが挨拶してた時に思ったけどさ、六課って人数的にはどうなの？」

「多すぎるとは言えないな。八神が言うには機動一課から五課はもう少し多いらしい。六課は設立されて間がない上に実績もないから、今のところ人数の補充をする予定はないみたいだ」

「潰しは利くの？」

良太郎の問いに、侑斗は首を横に振る。

「野上さん。そろそろお願いします」

他愛のない会話が盛り上がりうとしていた時に、はやてが割り込んだ。
だ。

「わかったよ。それじゃみんな、準備はいいね？」

良太郎の一言にイマジン達とコハナは親指を立ててサムズアップで返礼した。

「みなさん、おはようございます。本日はお忙しい中、僕達の説明にお付き合いたいだけ誠にありがとうございます」

良太郎はマイク片手に、挨拶を始める。

「最初の話が長くなると、皆さんも眠たくとなると思いますので早速本題に入りたいと思います。まずはこちらの映像をご覧ください」

挨拶を切り上げると同時に、良太郎は少しだけ歩いて全員にスクリーンが見えるように移動する。

スクリーンには『イマジンとは?』というタイトルが出ていた。

「皆さんにとってイマジンとはどのようなものでしょう。並の武装局員が束になっても勝てない相手、高ランクの魔導師が戒厳令を出されて出撃不可させるほどの危険な存在など色々な受け止め方ができると思います。しかし、それらはイマジンの能力のほんの一端でしかありません」

良太郎の一言に室内はざわめく。

スクリーン表示が切り替わる。

『イマジンとは?』から『イマジンの主な行動目的』へと。

「その前にイマジンには大まかに分かれて四つのタイプがあると思っ
てください。ひとつは普通のイマジン。二つ目ははぐれイマジン。
三つ目は先の二つに該当しない特殊なイマジン。四つ目は悪い集団
の中でリーダー格に手足のようにこき使われてイマジンです」

スクリーンにも良太郎が告げた内容が表示されていた。

「ここで説明するのは一番最初に述べたイマジンについてです。スク
リーンをご覧ください」

良太郎は皆にスクリーンを見るように促す。

簡略されてはいるが、イマジンの目的が表示されていた。

良太郎は最初のポイントをレーザーポインタで指す。

「スクリーンの内容を補足しますと、イマジンとは未来の時間の人間の
精神体です。つまり人間がいる限りイマジンの存在は切っても切れ
ないモノという事になります」

イマジンに関しての真実を機動六課の中で知っているのはごくわずかで隊長、副隊長などのような役職持ちしか知らされていない。

人類が減ばない限りイマジン絶滅はあり得ないという事を知り、動揺の色は隠せないようだ。

「イマジンの目的は過去の時間に遡って現在や未来の本来あるべき時間を改竄することが主な目的です」

この一言は今までイマジンに苦汁を与えられた管理局員に更に恐怖を与えるには十分だった。

過去に遡行して、時間を改竄するというのは現在の時空管理局のテクノロジーでも防ぐ事は不可能だ。

「イマジンの過去への遡行方法はそんなに多くはありません。ひとつは『時の列車』と呼ばれている電車、わかりやすくいえばタイムマシンを使用すること。もうひとつは契約者の望みをあらゆる手段を用いて完了させて契約者の過去を基準にして遡行することです」

良太郎はレーザーポインタで『契約者』という部分を指す。

そこには『イマジンと契約を交わした人間』と解説されていた。

『契約』といわれて難しく考えるかもしれませんが、要は自分が一番叶えてほしい事を叶えてくれるわけです」

これだけの説明だとイマジンが『悪』と断定していいのかわからなくなり始めている頃だと考える。

「ただし、ほとんどが暴力行使ですけどね」

イマジンの契約執行方法はほとんどが暴力的なものだ。

例えば『お金持ちになりたい』と言えば、金持ちの家に強引に運び込んで住んでいる金持ち達を追い出すくらいの事は平気でやる。

「イマジンが『時の運行』を乱そうとするなら僕達が動くわけですが、過去に遡ってしまったイマジン達を追いかける手段は一つしかありません」

良太郎が言った直後に、スクリーンの表示が変わる。

『時の列車について』となっていた。

そこでコハナとバトンタッチするように、レーザーポインタを渡した。

「ここからは私、ハナが説明させていただきます。先ほども言いましたようにイマジンが過去に遡行されると『時の運行』が変わる。つまりタイムパラドックスが起きます。普通の人は改竄前と改竄後の記憶を共有することはできませんので変化を知ることとはできません」

スクリーンは『時の列車について』のままだ。

「過去に遡ってしまったイマジンを私達が追いかける唯一の方法が『時の列車』を用いての時間航行です」

コハナが言うと同時に、スクリーンにはモニUMENTバレーを髣髴させる荒野——『時の空間』が映し出されていた。

「今、映し出されている風景が『時の空間』と呼ばれるもので、『時間』という概念が存在する限りどのような世界にも存在します。私達もこの場所を経由してこちらのミッドチルダに来ているわけですからね」

スクリーンには『別世界への移動方法』として簡略化された図が表れていた。

「次に『時の列車』についての説明に移りたいと思います」

コハナが話題を切り替えるタイミングと同時に、『時の列車』というタイトルへとスクリーンが変わった。

スクリーンには先程と同じように『時の空間』が映し出されていた。

違うのは大地に線路が敷設されている事だった。

その上を一台の電車が走っていた。

(これ、どうやって撮ったのかしら?)

という疑問を抱きながらも、コハナは口を開き始める。

「現在『時の空間』を走っている電車、これが私達が常時使用しているデンライナーです」

更に映像が変わり、空の上を線路を敷きながら走っている姿が映し出されていた。

「私達が使用している『時の列車』はただのタイムマシンではなく、このように線路を敷設できる場所ならどこでも移動が可能です。また……」

映像が変わると、今度は巨大な怪獣ともいえる——ギガンデスヘルと戦っているデンライナーが映っていた。

「このように戦闘能力も備わっています」

映像だよりの説明をしながら、コハナは周囲が驚きの声を上げている事が気になる。

デンライナーの性能は現在の時空管理局のテクノロジーをはるかに上回っているのだから、驚きの声くらいは出るものだと予測していた。

(あ……)

機動六課のほとんどの面々が両目を大きく開いて、口をポカンと開けていた。

声がないのは、声を出せないくらいに驚いているという事だと理解した。

自動車、ヘリコプター以上の機動性を持ち、タイムトラベルという別世界で言えばロストログアに匹敵するテクノロジー。

そして巨大な怪物と対等に戦うことができる戦闘能力。

時空管理局で開発、配備されているいかなる乗り物よりも優れているのだから無理もない事だろう。

「また、私達が使用しているデンライナーにはこのような種類もあります」

映像には『時の空間』に三本の線路が敷設され、三種類の『時の列車』が並走していた。

青色がメインカラーの一両編成のデンライナー・イスルギ（以後：イスルギ）

金色がメインカラーのイスルギと同じく一両編成のデンライナー・レッコウ（以後：レッコウ）

最後にイスルギ、レッコウと違い二両編成で紫色がメインカラーとなっているデンライナー・イカズチ（以後：イカズチ）

「この三種類と先程紹介したデンライナーとで……」

コハナは説明を切る。

イカズチの一両目が先頭を走り、二両目と切り離されている。

レツコウとイスルギが縦に連結してから、デンライナーへと縦に連結されていく。

デンライナー最後尾にイカズチの二両目が縦連結され、最後にイカズチの一両目がレツコウと縦連結された。

イカズチの頭部がドラゴンのように伸びるとレツコウの両端から斧が出現し、イスルギの上部が開きデンライナーの五両すべての武装が展開された。

機械仕掛けの龍——電光石火（以後・デンコウセツカ）の完成だ。「他にもターミナルと呼ばれているキングライナーという大型の『時の列車』もあつたりします。他にも色々な『時の列車』がありますがこれ以上説明すると聞いている側も疲れてくると思いますので、簡単な紹介をさせていただきます」

コハナが告げると同時に、デンコウセツカからこれまでに明らかになっっている『時の列車』が映し出されていた。

ゼロノスが用いる二両編成のゼロライナー。

仮面ライダーガオウ（以後・ガオウ）が用いていたガオウライナー。死郎が使用していた物質透過能力を持っている骸骨が頭部の幽霊列車。

一度は倒され、復讐のために立ち上がったRネガタロスが改修したネガNEWデンライナー。

（結構戦ってきたわね。私達……）

敵方の『時の列車』を見ながら、そのような感慨に一瞬耽ってしまった。

「少々、端折ったりもしましたが以上で『時の列車』についての説明を終わります。次はこちらです」

コハナは頭を下げてから、次の説明役であるモモタロスにレーザーポインタを渡した。

「俺、参上!!」

とモモタロスは左手を前に右手を後ろにして、針時計にして四時のポーズを取っていた。

場内は静まり返り、何のリアクションもなかった。

「あり？」

思わず首を傾げてしまうモモタロス。

「センパイ。なのはちゃん達みたいに冗談が通じる相手ばかりじゃないんだって……」

次の番であるウラタロスが近寄って耳打ちしてきた。

「マジかよ……」

やりづれえ、とモモタロスは本気で思った。

ミッドチルダに来てから、イマジンであることから遠目で恐怖がこもった目で見られることは多々あった。

空間シミュレーターでストレス発散としてガジェットドローンを破壊しまくるが、それもさすがに飽きはじめていた頃だ。

(あー、面倒くせえなあ……)

適当にパパツと終わらせてやろうかとも考えたが、そんな事したらプリンが食べれなくなるだけでなく、コハナからの鉄拳制裁もある。

「真面目に……、真面目に……」

小声でつぶやきながら、モモタロスは説明を始める事にした。

スクリーンには『電王ソードフォームについて』と表示されていた。

タイトルからすぐに、赤色が目立つ電王——ソード電王の全体写真が映し出されていた。

「俺と良太郎でこの姿にもなれるし、パスさえあれば俺だけでもこの姿に変身することもできるぜ」

映像が縦に分割される。

右にはデンオウベルトを巻いた良太郎、左には同じくデンオウベルトを巻いたモモタロスが映っていた。

それぞれが「変身!!」と叫んでから、パスをセタツチする。

『ソードフォーム』とデンオウベルトが電子音声で発すると、プラット電王からオーラアーマーが宙に浮かんで出現して、それぞれの部位に装着されていく。

最後に頭部に電仮面が走り、『仮面』の役割を果たす位置になると停

止してパカリと桃が割れたような形になった。

左右のソード電王が同じタイミングで、右親指で自身を指してから右手を後ろに左手を前にした大仰なポーズをとる。

「俺、別世界でも参上!!」

とソード電王が高らかに叫んだ。

それから戦闘を繰り広げている映像へと切り替わった。

九歳のフェイトとの戦闘。(第一部参照)

レイイマジンとの戦闘。(第二部参照)

ヴィータとの戦闘。(第二部参照)

ソード電王の戦闘の中で、別世界側となるとこの三つが代表的なものだろう。

「フェイトや赤チビと戦って思ったけどよ。魔法使える奴つてのズリーよなあ。空は飛ぶわ、飛び道具ぶっ放してくるわでいつもと違うからやりにくいっいたらなかったぜ」

これはモモタロスの本音だ。

フェイトにもヴィータにも勝ってはいるが、それが一番強く残っていた。

「まあ見ても分かるように、俺は剣をメインにして戦ってるってわけだ。最初に言っとくけど誰かに習ったわけじゃねえぞお」

モモタロスには付け足すようにして、自身の戦闘スタイルを打ち明けた。

「さあてと俺の説明は終わりだ。次はカメだかんなあ」

モモタロスはウラタロスからレーザーポインタを受け取った。

「センパイったら適当なんだから……。て言っても僕も似たようなことしか説明できないからね」

ウラタロスが警告のようなセリフを言う。

「名前を知らない人は初めまして。僕はウラタロス。ちなみにさっきの脳味噌干物で赤鬼顔のはモモタロスだからね」

自己紹介をすると同時にモモタロスの紹介も一応しておいた。

「僕も先程のセンパイと同じように良太郎の中に入り込んで僕のスタ

イルに合った電王に変身できるし、パスさえあれば僕だけでも変身できるんだ」

スクリーンには『電王ロッドフォームについて』となっていた。

映像も先程のモモタロスと同じように、変身パターンが二つになっていたが結論は同じで左右ともに青色がメインカラーとなっている電王ロッドフォーム（以後：ロッド電王）となっていた。

「お前、僕に釣られてみる？」

と決め台詞もかぶっていた。

「僕はセンパイと違って魔導師や騎士と戦ったことはないけど、間近で見た感想としてはセンパイと同じでいつもと違うからやり辛いってのは本当だね」

ロッド電王として別世界で戦った相手は全てイマジンだ。

チーターイマジン（第一部参照）とシー・ブリームイマジン（第二部参照）と戦った映像が映し出されていた。

「僕は主にロッドと蹴りを主にして戦うね。当たると結構痛いから気を付けてね？」

気遣ってるのか脅しているのかわからないようなことを言いながら、ウラタロスは使わなかったレーザーポインタをキンタロスに渡した。

「それじゃ、キンちゃんよろしく」

レーザーポインタを受け取ったキンタロスは腕を組んで、首を捻っていた。

「なあ良太郎」

「なに？キンタロス」

「俺の紹介、ハッキリ言っただけ二番煎じにしかならへんと思うねんけどええんか？」

キンタロスが紹介する内容も、ハッキリ言えば先の二体と大して変わりはない。

「聞いている側としても、そう感じるとは思うけどさ。それでもやつておかないとね……」

「む……」

キンタロスは唸りながらも、良太郎の言い分も尤もだと納得してしまふ。

(とは言うても、俺もリュウウタの紹介も新鮮なもんとは言えへんで……)

モモタロス、ウラタロスに続いての紹介なので見ている側も退屈しているのでは？と思ってしまふのはある意味では芸人気質だ。

もう一度、この部屋にいる別世界の者達を一瞥する。

(退屈しとるような目はしてへんな)

ならばこちらもそれ相応の態度で接しなければならぬわけだ。

「俺が説明するんもモモの字やカメの字と大して変化はあらへん。戦い方が若干違うくらいやからなあ」

スクリーンには『電王アックスフォームについて』と表示され、すぐに左右に画面が分割して良太郎とキンタロスが映し出されていた。

ロッド電王と同じように、分割された二つの画面の結末は金色がメインカラーの電王——電王アックスフォーム(以後・アックス電王)だった。

「俺の強さにお前が泣いた!!」

映像の中のアックス電王が相撲取りがとる仕草をしながら言った。

ウィッチドッグイマジン(第一部参照)、レイディバードイマジン(第二部参照)との戦いが映し出されていく。

「俺の得物は斧や。リーチは短いけど一発の威力は大きいでえ」

自身のスタイルを説明する。

「それじゃリュウウタ。出番やで」

キンタロスは親指で首をくいと捻ってから、レーザーポインタをリュウウタロスに渡した。

「やーっと僕の番♪」

堪え性のないリュウウタロスはキンタロスからレーザーポインタを受け取って、人の目はばからずに諸手を上げて喜んでいた。

その場でくるりとターンをしてから、指をびしっと指す。

「これからは僕が行くよ？いいよね？答えは聞いてない!!」

と言うと直後にスクリーンは『電王ガンフォームについて』という表示になっていた。

リュウタロスは左手にレーザーポインタを持ち替えて、右手にフリーエネルギーを収束させて紫色の銃——リュウボルバーを出現させた。

「僕が使う武器はこの通り、銃だよ！これでどんなヤツでもバンバン撃つちゃうんだ！」

そう言いながら、ジャキンとリュウボルバーの銃口を前へと構える。

『イマジンが銃を構える』という行為が、どれほど脅威になるものかをリュウタロスが知っているわけがない。

リュウタロスも本気で撃つわけではないので、すぐにリュウボルバーを引つ込めた。

「僕の戦い方は今から流れるえーぞーを見たらわかるからね」

スクリーンにはくどいかもしれないが、左右に分割されて良太郎とリュウタロスの変身シーンへとなっていた。

互いにパスをセタツチしてから、電王ガンフォーム（以後：ガン電王）へと変身した。

左右のガン電王は先程のリュウタロスと同じようにその場でくりとターンをしてから、右手を前に出す。

「オマエ、倒すけどいいよね？答えは聞いてない!!」

ガン電王が決め台詞を吐き、そのまま戦闘映像へと切り替わっていった。

シープイマジン（第一部参照）、レイディバードイマジン（第二部参照）の戦闘が映し出されていく。

その戦闘方法は『銃』というものを主武装とする者達の度肝を抜くような戦い方だったというの言うまでもないだろう。

「僕のお話はこれでおしまい！次は良太郎の番だよ♪」

リュウタロスは良太郎にレーザーポインタを渡した。

リュウタロスからレーザーポイントを受け取った良太郎は本日二度目のナビゲーターを務める事になる。

「僕が説明する電王はこちらの二種類です」

スクリーンには『電王クライマックスフォーム、ライナーフォームについて』と表示されていた。

すぐに電王クライマックスフォーム（以後・クライマックス電王）とライナー電王が映し出され、クライマックス電王がアップになっていた。

「まずこちらの電王ですが、これは先に説明してくれたモモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロスの力を一つに集約された電王といっても過言ではありません」

それを聞いた局員達は驚きの声を上げる。

ただでさえ、強い電王の上がいると聞けば驚くのも無理はないと思う。

「ただ、この電王にも欠点もいくつかあるのは確かです。一つは先に言った四人の『想い』がを一つにならないと、この姿になる事はできません。もう一つは力が集約されていますが人格はそのまま残っている状態です」

クライマックス電王の主な主導権はモモタロスだが、他の三体も身体を操作しようと思えばできる。

そうなってくると、主導権争いが起こることも十分にあり得る。

それでもこれまで上手くやってこれたのは、無意識レベルではあるが互いが互いを尊重している部分もあるからだと言太郎は最近考えていたりする。

双子のコッドイマジン（第一部参照）、ゼブライマジン&ゴリライマジン&ジラファイマジン（第二部参照）の戦いが映し出されていた。

（改めてみると、こっちが不利の状況が多いような……）

複数対一が目立つ戦闘ばかりだと改めて過去の映像を見ながら、思ってしまう。

スクリーンはまた、二種類の電王を映し出した状態へと戻って今度はライナー電王がアップになった。

「こちらが僕が主人格で変身する電王です。こつちも先程の電王と同様に四人の力を使うことができます」

ライナー電王の長所はクライマックス電王と同様に、四体のイメージの力を使うことができる事だ。

「唯一の違いは先程の電王がモモタロス達の人格も体内に収まっているのに対して、この電王は体に収まっているのは僕の人格のみであること、そして純粋に力だけを使うことができる事です」

レーザーポインタの光がライナー電王が握っているデンカメンソードに重なった。

「この剣を介して四人はアドバイスをしてくれます」

告げると同時に、良太郎はレーザーポインタの電源を切った。

「二見欠点のないようにも見えますが、この電王にも欠点があって主人格である僕が彼等四人の力をきちんと把握していないと完全に発揮することができないという事です」

自身が体験している事だから嫌でもわかる事だ。

特性と欠点を把握して戦闘スタイルを切り替えなければ能力に振り回されて自滅なんてことも十分にあり得る。

(今の僕でどれだけ扱えてるか……)

良太郎の思案をよそに、ライナー電王としての主な闘いの記録が映し出されていた。

ファルコンイマジンとの戦い。(第一部参照)

プレシア・テスタロッサとの戦い。(第一部参照)

シグナムとの戦い。(第二部参照)

仮面の男との戦い。(第二部参照)

仮面ライダーネガNEW電王(以後：ネガNEW電王)との戦い。

(第二部参照)

先程のクライマックス電王との戦いを見た時もそうだが、改めて自分の戦いを映像で見ると『運がいい』と思わずにはいられないものがあった。

(よく生きてたなあ……)

良太郎は映像を見ながら、自身がこの場に足ついて生きていること

を感謝せずにはいられなかった。

どの戦いも下手をすれば確実に死ぬようなものばかりだからだ。見ている管理局員達も今まで以上に真剣なものになっていった。

特に仮面の男とネガNEW電王の戦いを、だ。

(後はジークを含めた電王だけど……。アレはジークがいないと成立しないし、常に変身できるわけじゃないから下手に紹介するわけにいかないしね)

クライマックス電王にジークというイメージを含めた電王――

電王超クライマックスフォーム(以後：超電王)がある。

しかし、良太郎はこの電王の紹介をするつもりはなかった。

最大の理由としては常に使えるわけではないという事だ。

今までの電王の中で最強の力を有していると言ってもいいのだが、難解な条件付きの電王に頼られるのは後々危険だと判断したうえでのことだ。

「以上で僕からの紹介は終わります。次はゼロノスについてです」

良太郎は頭を下げてから、最後になる侑斗にレーザーポインタを渡した。

電王の紹介の後、ゼロノスの事について話すというのがかねてよりの事だった。

(迂闊だったぜ。電王の形態は俺よりも倍以上あるじゃねえかよ)

ゼロノスの形態は全部で三つ。対して電王は最弱形態のプラット電王、神出鬼没といってもいい電王ウイングフォーム(以後：ウイング電王)そして最強形態の超電王を抜いたとしても六形態もある。

知らない側はその手の話を聞いたら、面白いかもしれないが知っている側としてみれば退屈なことこの上ないのは確かだ。

「トリを飾らせてもらおう桜井侑斗です。俺が変身するゼロノスは形態は三つあってそのうち、主人格が俺なのはこの二つです」

侑斗が言った直後に、スクリーンに表示されていた『ゼロノスについて』から緑色がメインカラーのゼロノス・アルティムフォーム(以後：ゼロノス)と赤銅色のZゼロノスが映し出されていた。

「どちらに変身するにしても俺には相応のリスクが付きまといまいます。野上のようにパスを用いて変身するのではなく、このカードを用いるわけですから」

スーツの懐から黒いカードケースを取り出して蓋を開けて、三枚のゼロノスカードを取り出した。

アルタイル（A）フォームを表す緑色／ベガ（V）フォームを表す黄色。

緑色／ゼロ（Z）フォームを表す赤銅色。

黄色／赤銅色。

という三種類だ。

「このカードを用いて俺はゼロノスに変身するわけですが代償があります。それは……」

デネブが不安げな表情でこちらを見ている。

だが、これは誰かが言ったところで真実味を帯びないものだ。

もつとも自身が口にしたところでも真実味があるとは思えないものだが。

「俺に関することを皆さんが忘れていく事です……」

侑斗の一言にこの事を知らない局員達は一瞬にして顔面を蒼白させていた。

自分達の意識もなく、一人の人間を忘却してしまう事実だ。

「これは俺自身が覚悟している事です、皆さんは気にしないでください。それに別世界は俺が住んでいる世界よりもカードの効力が甘いからよほどの事がない限りは、皆さんが忘れるところまでには至りません」

慰めにならない事を侑斗は告げる。

下手に同情されるのは自分の性には合わない。

何故なら自分は自分の意思でゼロノスになったのだ。

忘れ去られることに慣れていくわけではないが、その事で他人に憐れみをかけてもらって喜ぶことはない。

誇りに思うほど、大げさなものではない。

ただ、自分がゼロノスになる事の当然の代償として割り切つてはい

るが。

「以上で俺が主人格のゼロノスの紹介は終わります。デネブ」

「了解！」

侑斗の声にデネブはレーザーポインタを受け取った。

「初めまして。デネブです」

今までのイマジジン達とは違い、軽く頭を下げる。

手にはデネブキャンディーの入ったバスケットはない。

侑斗が先日口を酸っぱくして注意をしておいたからだ。

「俺が主人格となるゼロノスは一つだけなんだ。後は侑斗が赤いゼロノスになるときは俺はこんな武器になっているんだ」

スクリーンにはVゼロノスとデネビツクバスター（以後：Dバスター）の二つが映っていた。

この二つはデネブに大きく関係あるものだ。

「Dバスターになっている俺の弾丸の一発は大した威力がないけど連射、つまり数で勝負してるから十分に戦えるんだ」

デネブは自身が武器化した姿の事を説明した。

「以上で俺達ゼロノスの説明を終わります」

侑斗が言った直後に、良太郎、コハナ、モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リユウタロスも歩いて一列に並んだ。

「礼!!」

モモタロスが発し、全員が頭を下げた。

「ご清聴ありがとうございます。」

と、感謝の言葉を述べた。

その場にいる誰もが拍手を送ってくれた。

こうして『次元世界最強の戦士』と呼称される仮面ライダーについての説明会は幕を閉じた。

第十七話 「相手は野上良太郎!？」

訓練場の中央で、野上良太郎は眼前の相手を見てはいた。しかし、心はここにあらずだった。

「あー」

そんな間抜けた声を出す、何かが変わるわけでもなかった。

(どうして僕はここにいるんだろう?)

訓練場で足を踏み入れた時からすでに数回にわたって同じ事を問答していた。

訓練だと思つて割り切る事はとりあえずはできる。

相手はやる気満々だ。

自分と戦える事に喜びでも感じているのかもしれない。

(そんな価値があるとは思えないよ)

良太郎は自分と戦う事に対して、相手が過大評価しているのではと考える。

今までの戦いで強くなったという自覚はある。

だが特訓でモモタロス達に勝ったことは一度もない。

これから一戦交える相手は、高町なのはの教え子達だ。

そこいらのチンピラや不良達とはワケが違う。

苦戦はするかもしれない。

四人はまだ知らないだろうけど、実は電王には変身できないのだ。

何せパスを没収されているのだから。

「はあ……」

溜息をついてから良太郎はこうなる経緯を振り返る事にした。

*

「全員せいれーっ!」

白いバリアジャケットを纏い、レイジングハート・エクセリオンを右手に握っている高町なのはは教え子四名を召集した

ガーツとローラーの車輪を滑らせながら寄るスバル・ナカジマを筆頭に、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ルシエそして翼竜のフリードリヒも集まった。

なのはのバリアジャケットとは対照的に四人の全身はあちこち土埃が付着していた。

また、なのはが息一つ乱していないのに対し、四人は両肩を上下に揺らして呼吸を整えていた。

「じゃあ本日の早朝訓練ラスト一本。みんな、まだ頑張れる？」

「はい！はい！」

なのはの言葉に四人は即答した。

その瞳にはまだ『闘志』が残っていた。

(うん。いい目してる)

四人の瞳を見て、なのはは満足してから唇を動かし始めた。

「じゃあシュートイベーションをやるよ。レイジングハート」

『オーライ。アクセルシューター』

レイジングハート・エクセリオンを前に構えてから、足元に桜色の円形のミッドチルド式魔法陣が展開される。

なのはの周りに桜色の魔力球が数個出現される。

「私の攻撃を五分間被弾なしで回避しきるか、私にクリーンヒットできればクリアー。誰か一人でも被弾したら最初からやり直しだよ」

ルール説明をするなのはの周囲には桜色の魔力球が自律しているように、宙をグルグルと飛び回っていた。

それは全てが、なのはの意思でコントロールされているものだという事はこの場にいる全員が知っている。

しかしその動きを見たらどう見ても、制御下に置かれているようには思えなかった。

前に構えていたレイジングハート・エクセリオンを引っ込めてから、四人を見る。

「準備はオツケーみたいだね。それじゃあ……」

なのはが右腕を振り上げると同時に、飛び回っていた桜色の魔力球は静止して引っ張られるようにして上っていく。

「レディイイイゴオオオオ!!」

右腕を振り下ろすと同時に、桜色の魔力球が光線となって四人へと向かっていった。

「このボロボロ状態で、なのはさんの攻撃を五分間捌ききる自信ある!?!」

手製のアンカーガンを構えてから、ティアナは前にいるスバル及び後方のエリオ、キャロに訊ねた。

「ない!!」

「同じくです!」

スバルとエリオは意味合いが全く同じことを告げた。

口には出さないが、キャロとフリードリヒも同じだろうとティアナは考えている。

その事に関してはティアナ自身は異論を唱えるつもりもないし、三人を叱咤するつもりはなかった。

何故なら、自分も同じようなものだからだ。

「じゃあ何とか一発入れるわよ!」

「はい!」

ティアナのこれからのプランにキャロが返事する。

スバルとエリオは返答なしだが、反対意見をしないところからして賛成だろう。

「よーし!行くよエリオ!」

リボルバーナックルを装着している右腕を上げる。

「はい!スバルさん!!」

エリオもストラダーダを構える。

なのはが右腕を振り下ろすと同時に、無数の桜色の魔力球が光線となつて向かってきた。

「全員撤退回避!!二分以内に決めるわよ!!」

ティアナが告げたと同時に四人が全員魔力を帯びた光となって散開した。

なのはが狙いをつけた場所には土埃が立っているだけで四人の姿

はなかった。

「!!」

なのはの肌に魔力流が伝わってきた。

誰かまではわからない。

目つきが鋭くなり、戦いに対しての心構えはできている。

後は迎え撃つのみ。

振り向くと空中に水色の魔力で構築された道が出現していた。

(スバル!)

特殊な魔法なので、使い手が誰なのかはすぐにわかった。

「うおおおおおお!!」

水色の魔力道——ウイングロードの上をスバルがお手製のローラーを滑らせながら右腕を振り上げて向かってきていた。

なのはの両耳に、何かが収束されている音が入ってきた。

挟み込むようなかたちで陣形をとっているティアナがアンカーガンを構えて、魔力を収束させていた。

「アクセル!」

『スナイプショット』

レイジングハート・エクセリオンが飛び回っている桜色の魔力球をコントロールする。

なのはが左腕を振ると、左右にある桜色の魔力球がスバルとティアナへと向かっていった。

スバルは紙一重で上体を動かして避けて、ティアナには直撃した。

「幻術<rp><</rp><</rp><<rt>>シルエット</rt><</rp><</rp><<…:。やるねティアナ」

避けたスバルも直撃したティアナもその場には影も形もなかった。

ティアナの用いた幻術では視認では判別がきわめて難しい。

安全策としては解析魔法などを用いるのが常套なのだが、それは距離がある程度離れている時という条件もつく。

つまり、今のなのはの距離では幻術か否かを判別するには一発くらわせるという乱暴な方法しかないわけだ。

それでもなのははアクセルシューターで行っているため、近接で判別するよりは遥かにリスクは低いわけだが。

「!!上ー」

横ではないとしたら頭上か真下か逆側かのどれかにはなるが、逆側はビルなのでウイングロードを生かせる場ではないので除外する。

真下というのもウイングロードを敷くだけならば問題ないし、攻撃をするという点でも死角になりやすいがローラーが上り坂を昇るという行為が魔力でコントロールしているといっても平地を走行するよりも消耗が激しいため、疲労困憊状態では使えるものではない。

となると、頭上からの攻撃に絞られてくる。

ウイングロードを下り坂にして、ローラーの機動力+慣性で攻撃力を向上させることもできるし、今の状態ならこの手が一番ベストともいえるだろう。

「!!」

なのはは空いている右手をスバルに向けてかぎす。
掌を中心に桜色の魔法陣が展開される。

「くづろくろくろくろく!!」

障壁に向かって拳を向けているスバルが声を上げているが、変化はない。

その中で、なのはは眼前的のスバルに視線を向けてはいるが頭の中では別の事を考えていた。

飛ばしていたアクセルシューターのうちの二つの軌道を変更していた。

向かう先は眼前のスバルだ。

両サイドから何かに向かってくるとスバルは本能的に察知したのか、攻撃を中断して下がった。

左右から飛んできたアクセルシューターは見事に躲されたが、なのはの表情は笑みを浮かべていた。

「いい反応♪」

なのはの手にチェックリストの様なものがあれば、間違いなく『よかったです』というシールを貼ってもおかしくない動きだった。

「わっ!? え!？」

スバルが後方に下がってウイングロードに着地したが、ローラーが言う事を聞かずにずるずると滑り落ちていこうとしていた。

ローラーがスバルの魔力と意思でコントロールできるため、市販されているローラースケートのような事は滅多には起きない。

だが例外というものもある。

それはローラーの耐久力がスバルの魔力についていけなくなっている事や単純な老朽化だ。

ガリガリガリつと音を立ててはいるが、なかなか停まらない。

それでもバランスを保ちながら、体勢を立て直してから追撃してくるアクセルシューターから逃走する。

(スバル! 馬鹿! 危ないじゃないの!!)

「ご、ごめーん」

念話の回線を開いて叱咤してきたティアナに謝罪しながらもローラーに魔力を込めて全力で逃走した。

(待ってなさい。今撃ち落とすから!)

ビル内に潜んでいるティアナはスバルにそのように告げてから、アンカーガンの銃口をスバルの背を狙っている二つのアクセルシューターに向ける。

銃口にはオレンジ色の魔力球がキュイイイイインという音を立てながら収束されていく。

「よー!」

アクセルシューターを打ち消すだけの威力まで練り上げられたと実感すると、引き金を絞る。

カチン。

「いつ!? 不発!？」

アンカーガンはティアナの意思とは逆に練り上げたオレンジ色の魔力球を発射しなかった。

「ティアあー、援護おおく!!」

逃走しているスバルからの援護要請が飛んできた。

念話ではなく地声で。

「この肝心な時に!!」

ティアナはアンカーガンに装填されているカートリッジ二つを排莢してからすぐに新しいカートリッジを二つ再装填する。

銃口をアクセルシューターに向けて、すぐにオレンジ色の魔力球を練り上げる。

そして引き金を絞る。

銃口から四発のオレンジ色の魔力弾が発射された。

「来た!!」

ティアナからの援護が来たことがわかると、スバルは滑っている状態から跳躍した。

二つのアクセルシューターはまだ追尾しているがさらにオレンジ色の魔力弾が追尾しているかたちになっていた。

残りの二発は、なのはを狙っていた。

なのはの後ろでは、エリオとキャロが攻撃の準備をしていた。

「我請うは疾風の翼。若き槍騎士に駆け抜ける力を」

キャロは両腕を広げて詠唱する。

彼女の両掌には桃色の魔力光が帯びていた。

両手に嵌めているグローブ型インテリジェントデバイス——ケリュケイオンが輝きだして、左手に桃色の魔力光が収束される。

『ブーストアップ。アクセラレーション』

ケリュケイオンが発し、キャロは左腕を薙ぎ払うようにして振り上げた。

黄金の三角形のベルカ式を足元に展開させて、ストラーダを構えているエリオに向けた。

ストラーダ全体に桃色の魔力が纏われていき、やがてストラーダ全体が何もなかったかのように戻っていく。

左右のリアブースターが噴射する。

「あ、あの……。かなり加速がついちやうから気を付けて……」

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから!!」

キャロの気遣いがありがたく受け止めてから、エリオは顔を宙に浮いているのはに向ける。

「行くよ。ストラーダ!!」

ストラーダは主の意思に答えるようにして、さらに左右のリアブースターを噴射した。

いつでも発射は可能だった。

なのははティアナが放ったオレンジ色の魔力弾を宙に浮いているという利点を生かして避けていた。

フォワードの中で唯一単体飛行ができるフリードリヒが口を開いて頭上から火の弾を二発噴いた。

(フリードも翼竜だから単体で空飛べるんだよね……)

知らなかったわけではないが、失念していたのは確かだ。

キャロと常に行動しているのも、主から離れての行動はしないと考えていた。

フリードリヒはキャロの言う事を理解して、自身で考えて行動したのだろう。

単純な主従関係ではできない事だ。

(キャロがやろうとしている事を完全にするために、自身ができる最大の事を果たそうとしている)

フリードリヒにも『よくできました』のシールを貼ってあげたいくらいだった。

(見つけた)

桃色のミッド式魔法陣を足元に展開しているキャロと、ベルカ式魔法陣を展開しているエリオが視界に入った。

そのまま急がずだが、慎重に向かつていく。

「エリオ！今!!」

ビルの物陰からティアナが現在唯一勝機を見いだせるエリオに向かつて言った。

エリオはストラダを右腕一本で持つてから、少しだけ振りかぶつてから向かってくるのはを睨む。

(後は一直線に向かっていくだけ。外すわけにはいかない……)
成功すれば本日の訓練は終了となり、失敗すればまた五分間やり直しになる。

難度は先程よりも高くなるだろう。

同じ手を通じさせてくれるほど、高町なのはは決して甘くはない。だからこの一撃を外すわけにはいかない。

(絶対に……)

ストラダを握る右腕を中心にしてカタカタと震えが始まる。今更ながらプレッシャーが襲いかかってきた。

震えはやがて全身へといきわたる。

ゴクリと固唾を呑む。

(絶対に!!)

プレッシャーから生じる震えは収まっていく。すうつと息を吸い込んでから吐く。

「行つけえええええ!!」

ストラダのリアブースターがぶわつと噴射する。

『スピーア・アングリフ』

エリオの両足が宙に浮き、そのまま標的へと向かっていく。

仮想とはいえリアルに再現されているため、地面のアスファルトからの粉塵が舞った。

(当てる当てる当てる当てる……)

エリオの全身をその一念が支配していた。

ストラダの噴射がさらに増しているように体で感じた。

まるで自分の意思に伝えてくれるように。

(当てる!!)

向かってくる標的——なのはどの距離がほぼゼロになった時、エリオの両目には信じられないものが見えた。

互いの距離がゼロになって衝撃が起こり、塵が舞った。

塵が集まって煙状となり、その中からエリオが抜け出て近辺にある

ビルに着地して重力に逆らうようにして必死で止めた。

(手応えは……あつたと……思う……)

ストラダーの尖端は、なのはに触れたような感触があつた。

それがなのはに直に当たったのか、彼女が展開したバリアの膜で止まったのかを判別できるほど自分は玄人ではない。

(向かってくる時のなのはさんの顔……)

宙に舞う煙を睨みながら、なのはが浮かべた表情を思い出す。

(笑ってた……)

その理由が何なのかはエリオにはわからなかつた。

「エリオ！」

「外した!？」

ウイングロードに乗ってこちらに来たスバルは吹っ飛んだエリオを心配し、事の顛末を見ていたティアナはなのはが煙から飛び出ないところから察して失敗を口にした。

見上げているキャロも不安げな表情だつた。

煙が晴れていくと、宙にたたずんでいるのはがいた。

『ミッシェンコンプリート』

レイジングハート・エクセリオンが結果を告げた。

その場にいる誰もが耳を疑つたため、呆然としていた。

「お見事。ミッシェンコンプリート」

なのはがもう一度、訓練の結果を告げた。

「本当ですか？」

エリオが代表してもう一度訊ねた。

なのはには目立った外傷が見当たらないからだ。

「ほら。ちゃんとバリアを抜けてジャケットまで通つたよ」

なのはは、右手でバリアジャケットの左胸部分を指さす。

そこには白色がメインのバリアジャケットには似合わない黒い煤が付着していた。

エリオの一撃が通つた証明だ。

その一言で、フォワードの誰もが笑顔になつた。

バチと稲妻状に魔力が漏れており、コゲ臭かった。

「あああ!!やっちゃったあああ!!」

自身の不手際とはいえ、長年使ってきたローラーがオシヤカ寸前になってしまうと悲痛の表情を浮かべてしまう。

「オーバーヒートかなあ。後でメンテナンスツプに見てもらおう」

「はい……」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい?」

なのはは同じように自作デバイスを持つティアナにも訊ねてみる。

先程の訓練でもアンカーガンが限界を迎えているのでは、と薄々となのはは感じていた。

正常ならもう少し早くアクセルシューターを落とすし、追尾する魔力弾を用意できていたからだ。

「はい。だましましたです……」

見栄を張っても仕方がないのでティアナは正直に告げた。

なのはは四人を一瞥する。

「みんな、訓練にも慣れてきたし……。そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ……」

なのはの目からしても、ローラーとアンカーガンは恐らくもう駄目だろう。

仮に修復できたとしても、その場しのぎの応急処置に近いもので『全快』というものにはならないだろう。

「新……」

「デバイス……」

スバルとティアナが二人で、なのはの一言を復唱した。

なのはを引率者として、フォワード四人は機動六課隊舎へと向かっていった。

その間もなのはを含めた世間話や、フォワードだけのバカ話など会話の内容は色々だった。

「じゃあ、シャワーを浴びてから着替えてロビーに集まろうか?」

なのはが今後を提示すると、フォワードは即答した。

返車の声色からして新デバイスの事が気になって仕方がないと
いったところだろう。

(気持ちはわかるけどね)

なのははレイジングハート・エクセリオン以外のデバイスを所持したことはないがそれでもバージョンアップやカスタマイズしても
らった時の興奮や感動ははいつまでも冷めないのだと思っっている。

ブオオオンというエキゾーストが歩いている五人と一匹の耳に
入ってきた。

ギャツとタイヤを鳴かせて自動車とバイクがは五人と一匹の近く
で停車した。

黒色がメインカラーの自動車だ。

普通自動車であり、かなり高級な部類に入るものだった。

少なくとも中古市場では今のところは出回ってはいない。

バイクの方は白色が目立つがフロントカウルに角の様なものが二
本ついていた。

こちらも中古市場では出回っていない。

自動車のハードトップ(車の屋根)が収納され、同時にドアガラス
も収納されると運転手と助手席に座っている人物の顔がハッキリし
た。

「フェイトさん！八神部隊長！」

キャラが運転手と助手席に座っている人物の名を挙げて、

「後ろのバイクの人は……」

バイク——マシンゼロホーン(以後：ゼロホーン)に乗っている
運転手もヘルメットを脱ぐ。

「桜井さん」

エリオがゼロホーンに跨っていた人物の名を挙げた。

「すつごーい！これフェイト隊長の車だったんですか!？」

スバルが高級車を前にして、驚きを隠さなかった。

「うん。地上での移動手段なんだ」

フェイト・T・ハラオウンが答えた。

「みんな、練習の方はどうや？」

助手席の八神はやてが近況を訊ねる。

「ああ……ええと……」

「頑張ってます」

スバルが戸惑う中、ティアナは当たり障りのない回答で返した。

「エリオ、キヤロ。ごめんね。私は二人の隊長なのに見てあげられなくて……」

「あ、いえそんな……」

「大丈夫です」

申し訳ない気持ちを持って謝罪するフェイトに対して、エリオとキヤロは笑顔で返した。

「四人ともいい感じで慣れてきたよ。いつ出動があっても大丈夫」

「そうかあ。それは頼もしいなあ」

なのはがお世辞ではなく、本心を挙げている事を知っているはやては素直な意見を述べた。

「三人はどこかへお出かけ？」

なのははフェイト、はやて、侑斗を一瞥する。

「うん。六番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や。それに侑斗さんにも紹介したいしな」

フェイトが行先を、はやてがその目的を告げた。

「私と侑斗さんは夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼はみんなと一緒に食べようか？」

「二はいー」

フェイトの打診に、フォワード達は快諾した。

「高町。野上は？」

「今日は見てません。桜井さんは怪我の方は？」

侑斗の怪我の原因は数日前に良太郎と戦ったことが原因だ。

「鈍る事に危機感を感じるくらいには良くなっている」

侑斗は、皆に元気だと見せるように右腕をグルグルと回してから腰を捻ったりしていた。

「イマジンの戦闘回数ならあいつの方が上だからな。俺よりも早いかもしれないな」

ゼロノスカードの制限がある以上、侑斗が踏む場数は限られてくるのだから仕方ないことだ。

「おっと。長話がすぎたみたいやな。それじゃあみんな行ってくるで」

はやての一言が合図となり、侑斗はヘルメットをかぶってアクセルを噴かしてフェイトも自動車のアクセルを踏んだ。

自動車とバイクが再発進する姿をなのは以外の者達は敬礼で見送った。

女性陣がシャワーを浴びている頃、カラスの行水のごとく終了して陸士隊服へと着替え終えたエリオはフリードリヒと共に階段に座り込んでいた。

「まだかなあ。みんな」

頬杖をついてから、隣で二本足で器用に立っているフリードリヒに呟いた。

「キユク〜」

フリードリヒがどのような返事をしてくれたのかはエリオにはわからない。

マスターであるキャロではないのだから、当然といえば当然だが。

「キユツ」

退屈を感じたのか、フリードリヒは翼を広げてパタパタと飛んで行った。

「フリードも退屈に感じてたんだ……」

飛んでいったフリードリヒを責める気はエリオにはなかった。

自分もどこか散歩でもしようかと考えてしまう。

「あれ？エリオ。一人？」

階段上から声がしたので、顔を向けてみるとそこには訓練服を着て右手にはジュエラルミンケースを握っている良太郎がいた。

「良太郎さん」

「他のみんなは？」

階段を下りながら、エリオと同じ段になると腰を下した。

「シャワーを浴びてます」

エリオの報告に良太郎は何とも言えない表情をしていた。

「あの、どうしたんですか?」

「それってどのくらい前?」

「十分くらい前です」

良太郎の質問にエリオは腕時計——待機状態のストラダーダを見ながら現在時刻から逆算して答えた。

「そうなるかと三十分は出てこないね」

良太郎は即答した。

「え?どうしてわかるんですか?」

断言に近い発言なのでエリオは訊ねる。

「女の子は僕達と違って身だしなみに気を遣うからね。その分、手間もかかるんだよ」

「そうなんですか……。でも良太郎さんはどうしてそんな事を?」

「姉がいるからね。それでわかるようになったんだ」

良太郎は『姉』と呼んでいた人物を思い出しながら語っているのだとエリオは理解した。

「良太郎さんはどうしてそんな服を?その、訓練は終わりましたよ」
自分達と参加するつもりならそれはもう無理なことなので、正直に告げる。

「ん?いや違うよ。僕はコレの訓練をしようと思ってね」

ジェラルミンケースを見せてきた。

「?」

ジェラルミンケースを受け取って、見上げたり見下ろしたりするが何か仕掛けがあるとは思えない。

「中身中身」

良太郎の指摘に、エリオはケースを開けようとするが手を止める。
(いいのかな……)

ロックを解除していいのか躊躇ってしまふ。

「開けていいよ」

「はいっ!」

良太郎は笑顔を向けて勧めてくれた。

ジェラルミンケースを開けると、四つの黒い部品の様なものとそれらを収めるためのホルスターが入っていた。

「これは一体……。デバイスですか？」

エリオは首を傾げてしまう。

「エリオも見てるんだけどね」

「？」

良太郎は苦笑しているが、エリオには本当に見覚えがないものだ。

「外に出よう。見せてあげるよ」

「あ、はい」

良太郎が促し、エリオは後をついていった。

隊舎を出て、中庭には良太郎とエリオの二人しかいなかった。

良太郎の腰にはジェラルミンケースに入っていた黒い部品――

GDガツシャーが装備されていた。

エリオが興味津々にこちらを見ている。

その瞳には『強くなる秘訣を探る』というより『純粋な子供の好奇心』という部分が強かった。

「それじゃ、行くよ」

「はい！」

エリオに呼びかけてから良太郎はGDガツシャーの左側二つのパーツをホルスターから抜き取って、横に連結させる。

それから頭上に放り投げる。

宙に浮いているパーツが落下する前に、右ホルスターに収まっているパーツ二つを抜き取って、両手で握る。

落下してくるパーツを左右の手で握られているパーツで上下で挟む。

ガチャンという音が良太郎の耳に入ってきた。

（よしー！）

両手に向かって、自らのエネルギーをGDガツシャーに注ぐ。

感覚で一定量注ぎ込めたと判断すると、先端から赤色が内に塗られ

て両刃が白色のオーラソードが出現した。

「あー！」

GDソードを目の当たりにすると、エリオは大きく目を開いていた。
「思い出した？」

「はい。桜井さんと戦う時に使っていた武器ですよね！」

GDソードを見ているエリオの目は輝いている。

「うん。でもね、これはまだこの武器の顔の一つでしかないんだ」
「え？」

エリオが訊ねるより早く、良太郎はGDソードのグリップを外す。
直後にオーラソードが霧散する。

外したグリップを宙に放り投げる。

その間に、横連結していた部分を縦連結へとするためにパーツを外して組みなおす。

落下してくるグリップ部分を右手でキャッチすると、縦連結したパーツ三つの最後尾に連結する。

オーラソードを出現させた要領で、エネルギーをGDガツシャーへと注ぐ。

短かった黒い棒は、良太郎の背丈を越すほどの長身のGDロッドとなった。

「ストラーダより長いですね……」

「持つ人間の身長にも影響されるからね」

長身の道具というものは使用者の身長も影響している。

エリオがGDロッドを持っても使いこなすことは不可能に近いし、良太郎がストラーダを持っても不足を感じてしまうのだ。

ぐるぐるとGDロッドをバトンのように振り回してから、ダンと地面に置く。

水平に握ってから、中心部をぱきつと曲げる。

折れるのではなく外れる。

二つに分離したものをさらに二つに分離させて、元の四つのパーツに戻した。

「バラバラに？」

「残りの二つはゼロからの方がやりやすいからね」

訊ねてくるエリオに良太郎は笑みを浮かべて、バラバラにしたパーツを手取る。

右手と左手のパーツを縦に連結してから、右手でパーツを掴んでさらに縦に連結させる。

最後に余ったパーツを縦連結したパーツの一番上に横連結する。

後はエネルギーを注ぐと、全体が『武器』としての役割を持つほどの大きさになってから、斧の刃が出現した。

「!!」

右手にずしりと重みが襲いかかってきた。

自分が考えていたよりは重量があった。

思わず顔をしかめてしまったので、エリオが心配そうな表情を浮かべる。

「大丈夫ですか!？」

「ああ大丈夫。想像してたのより重たかったからびつくりしただけ」

GDアックスを両手で握って、上下に振ってみる。

GDソードやGDロッドに比べると、重量があるため身体全体が重たく感じる。

(キンタロスのようには無理か。僕が使うとしたら護身よりも災害救助などの障害物駆除あたりかな……)

役割を決めると、GDアックスを分離して四つのパーツにする。

地面に落ちているパーツの二つを拾い上げて、横連結してからさらにもう一つのパーツを先程のパーツの後ろ斜めに連結させる。

最後に余ったパーツを先端に縦連結させてGDガンを完成させた。

右、左にキャッチボールするようにして投げては受け止めるという行為を繰り返していた。

ジャキンという音が聞こえた。

GDガンを構えるが良太郎は引き金を絞らない。

一発の威力が明らかに通常の実弾よりも高いので、無暗には撃てない。

地面に小さなクレーターを作ったら始末書を書かされる可能性は高いだろう。

「護身用としては一番使い勝手がいいのかもしれない」
構えながら、良太郎は感想を漏らす。

「持ってみる？」

じーっとエリオが見ているので、GDガンを渡す。

「あ、はい！」

GDガンを貴重品のようにしてエリオは受け取る。

「……結構重たいんですね」

「使用者のために作られているデバイスとは違うからね。持ち主にも相応の力は求められているんだよ」

デバイスは持ち主と共に成長するものだと言った良太郎は見ている。

GDガッシャーは『今』の自分だからこそ持つことができるものだと思います。

電王に成りたての自分が持つても間違いなく、デッドウエイトにしかならない。

「さて、紹介は終わったし訓練を始めるよ」

GDガンをエリオから取って、バラバラにする。

組み立てを始めようとするが、それをじっと見ているエリオが視界に入る。

「女の子達はまだみたいだし、付き合ってくれる？」

「はいっ!!」

良太郎の申し出にエリオは笑顔で快諾した。

良太郎がエリオに頼んだことはGDガッシャーの組み立てにかかる時間の記録係だった。

女性陣が着替えを終えて、出てきたのはそれから十五分後の事だった。

良太郎は現在、精密機器室へと場所を移していた。

エリオとなのはの押しに負けたかたちでだ。

他の部屋とは違い、必要最小限の照明しかなく薄暗くていかにも

『秘密の研究室』という呼称が似合うような場所だった。

テーブルの上に、四つの装飾品が宙に浮いていた。

それらは待機状態になっているデバイスだった。

「わあ、これが……」

「私達の新デバイス……」

スバルとティアナが後に自身の相棒になるデバイスの待機状態を眺めていた。

スバルの新デバイスは水色のクリスタルをペンダントのように施されており、ティアナの新デバイスは色々をメインカラーとしてポイントカラーと模様には赤色が施されているカードだった。

「そうです♪設計主任は私！協力はなのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんにリイン曹長」

シャリオ・フィニーノがスバルとティアナの背後で挙手をしながら、自身をアピールするために背伸びまでしていた。

「ストラダーとケリユケイオンは変化なし、なのかな……」

「うん。そうなのかな……」

エリオとキャロは宙に浮いている腕時計と宝玉と羽が装飾されているブレスレットを見ていた。

「違いまーす♪」

言った直後にエリオの頭に乗ったのはリインだった。

「変化なしは外見だけですよ」

「リインさん♪」

キャロも可愛いモノ好きなので、自然と笑みを浮かべていた。

「そうです♪」

キャロに返事してから、エリオの頭から離れて宙に浮いて二人の視界が入る場所に移動した。

「二人はちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです」

「あ、あれで最低限!?!」

「本当に!?!」

リインが口にした衝撃の事実にはエリオとキャロは驚きを隠すことはできなかった。

「みんなが扱う事になる四機は六課の前線メンバーとメカニックスタッフが技術と経験の粋を集めて作った最新型。部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにティアナの個性に合わせて作られた文句なしに最高の機体です」

リインの意思に従うようにテーブルの上に浮いているデバイス四機はリインのもとへと集まる。

「この子達はみんな、生まれたばかりですが色々な人の想いや願いが籠められてて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです」

四機のデバイスはそれぞれの主へと飛んでいく。

「ただの道具や武器とは思わずに大切に……だけど性能の限界まで思いつきり、全開で使ってあげてほしいです」

リインの表情が子供を送り出す母親のようにも見えた。

「この子達もね。きつとそれを望んでいるから」

シヤリオが締めくくるように付け足した。

(ただの道具や武器とは思わずに、か……)

良太郎はデバイスと共に戦う彼女達が少し羨ましく感じた。

「そういえば野上さんもデバイスを持っているんですよ？」

シヤリオが唐突に訊ねてきた。

「デバイスってわけじゃないけど、コレでしょ？」

良太郎はジェラルミンケースをテーブルの上に置いてから、ケースを開く。

エリオを除く全員が興味深く見ている。

好きに触っていいように、ケースから取り出してパーツを置いていく。

「何だかすごく武器って感じがしますよね……」

シヤリオが素直な感想を述べる。

「そりゃあ武器だからね」

その乾燥に良太郎は苦笑混じりに答える。

「四つのパーツに分かれてるって事はこれを組み立てて武器にするっ

てことはわかりますけど、組み立てはご自分で?」

シヤリオの質問はGDガツシヤーに興味を持つている者たち全員
の意見だ。

「マニュアルには自分で組み立てが主だけど、他にもエネルギーを利
用しての自動組み立てもできるみたいだよ」

「でも、さつき訓練してた時はずっと手で組み立ててましたけど……」

エリオは先程の事を思い出していた。

「エネルギーによる自動組み立てって事は組み立てて武器として活
す他に更にエネルギーを消耗するから、今の僕には不向きなんだよ」
「あ、わかった!今の野上さんにはそれを使っちゃうとエネルギーに
余裕がないって事ですわね!」

スバルは良太郎が言った『不向き』という言葉を理解し、声に発し
た。

「この馬鹿!もう少し気を遣いなさいよ!野上さんすみません。この
子無神経で……」

ティアナがあまりにストレートな物言いをした相棒の後頭部を叩
いてから、掴んで自分も一緒に謝罪した。

「あ、いやスバルちゃんの言う事は間違っていないし事実だからそんな
に気にしないで」

頭を上げるように言うと、今度は全員がこちらを見ていた。

「ん、どうしたの?」

「スバルちゃんって……わ、私の事ですわね?」

スバルが自身を指差して訊ねる。

心なしか全身が震えているようにも見える。

「この部屋に君以外にスバルちゃんはいないでしょ?」

「え、ええまあその……」

スバルの様子が先程からおかしかった。

「野上さん。確認するようで申し訳ないですけど本当にこの子の事
ですわね?」

ティアナがスバルを指差しながらこちらを見ている。

「ランスターさんまでどうしたの?」

良太郎は先程から彼女達が何が言いたいのか理解できない。

「あのお野上さん。彼女はスバルって呼ばれることを望んでたんじゃ……」

シャリオが硬直しているスバルを一瞥してから、呼び捨てが最も望んでいる呼ばれ方ではないかと推測する。

「シャリー。それは無理な注文ですう」

リインが即座に否定した。

「何故ですか？リインさん」

いち早く反応したのは意外にもキャロだった。

「シグナムやユウトさんから聞いた話ですと、ノガミさんは女性を呼び捨てできないそうです」

「本当なんですか？」

ティアナは信じられないという表情で確認してきた。

「恥ずかしながら……。どうも女性を呼び捨てするのって何かその苦手で……」

良太郎が照れが入りながら素直に答える。

「スバルさん。固まっています」

キャロがつんつんとスバルをつつくが全くといっていいくらい動いていない。

「エリオ。どうしよう……」

「どうしましょう……」

一回り近く年齢が離れている少年に訊ねても良策が出てくるとは思わなかったが、やっぱり出てこなかった。

良太郎もエリオもこの手の事に関しては何となく答えを出せるほど、経験豊富ではないのだから。

自動ドアが開くと、なのはは精密機器室へと足を踏み入れた。

「ごめんごめん。お待たせ」

遅れてきた事に謝罪をするが、室内にいる者達は誰一人として気を悪くする者はいなかった。

「なのはさん!!」

リインは喜びながら宙を駆け、なのはの傍まで寄った。

「ナイスタイミングです。ちょうどこれから機能説明をしようかと」

「そう。もう、すぐに使える状態なんだよね？」

なのはは四機のデバイスの製作に協力はしてはいるが、詳細までは知らない。

その辺りはシャリオとリインの管轄になるからだ。

「はいー」

リインは頷く。

シャリオが連携で、モニターを展開させて四機のデバイスの詳細データを出現させていた。

「まずその子達全部に何段階に分けて出力リミッターをかけているのね。一番最初の段階だとそんなにビックリするほどのパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら私やフェイト隊長、リインやシャリーの判断で解除していくから」

「ちょうど一緒にレベルアップしていく感じですね」

なのはがリミッター解除となる条件を、リインがその流れをわかりやすいたとえで説明した。

「あ、出力リミッターといえなのはさん達にもかかっていますよね？」

(噂話で流れたのかな……)

自分から話したわけではないので、あり得る可能性をなのはは想像する。

知っておいて損もないし、そういう実態がある事を知っておくのも大事だと判断して口を開く。

「うん。私達の場合はデバイスだけじゃなくて、私達自身にもだけだね」

なのはの告白はフォワード四人にしてみれば衝撃的だった。

「なのはちゃん達の場合は、どちらかという拘束具やギブスに近いモノ？」

「そうですね。それに近いものがありますね」

「しかもそのギブスは、決して強くなるためのモノでもないんでしょ？」

(鋭い!!)

良太郎はたとえから始めて、なのは達が設けられているリミッターの意図を推測した。

彼が細かいことまで知って言っているのではないという事はわかる。

恐らくは彼自身が持っている情報と予想を組み合わせての事だろう。

「良太郎さんの言う通りです。私をはじめとする隊長と副隊長にかけられているリミッターには『強くなる』という意味で設けられているものではありません」

なのはは良太郎の推測に肯定した。

「そうになると、なのはちゃんとフェイトちゃんとヴィータちゃんにシグナムさん。後は八神さんも？」

「はいですう」

ラインが頷いた。

「何のために？」

良太郎にしてみれば何故そんな事を施さなければならないのかわからないようだ。

それはスバル、エリオ、キャロもだ。

四人とも似たような表情を浮かべているからだ。

(良太郎さんは知らないんだけど、スバル達は完全にド忘れだね) 管理局員といえども、自分に縁のないことなら綺麗さっぱり忘れてしまうのは当然といえれば当然だろう。

自分がスバル達と同じ立場でも多分そうなっているという自信があつたりする。

自身に降りかかっているから理解しているだけなのだから。

「ほら、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まっているじゃない」

シヤリオが、隊長クラスのリミッター設定の理由を告げると良太郎

は理解してド忘れ三人組（スバル、エリオ、キャロ）は白々しい笑顔を見せた。

「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は上手く収められるように魔力の出力リミッターをかけるですよ」

「まあ裏ワザつっちゃあ裏ワザなんだけどね」

ラインが説明し、シャリオは苦笑いを浮かべながらぶつちやけた。「機動六課の場合だと、はやて部隊長だと4ランクダウンで隊長達だと2ランクダウンかなあ」

なのはの右手を掌にして話を進めるうちに四から二へと指を曲げていた。

「四つ!?八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としているって事ですか……」

ティアナが右手で指折りをしながらダウン後のランクを数えるなか、エリオが先に結論を出した。

「はやてちゃんも苦労してるですよ」

自身が持つて生まれた力を組織が敷いたルールに則るために意図的に弱体化するというのは決して楽なものではない。

なのはも自分の事なので、初めてリミッターをかけられた時はもどかしさがあったものだ。

今でもたまたまに妙な淀みのような感じたりするが。

「なのはさんは?」

「私は元々S+だったから2.5ランクダウンでAA。だからもうすぐ一人でみんなの相手をするのは辛くなるかなあ」

笑顔で嘘偽りのない答えを言う。

スバルは何か思う事がある表情をしているがそれが何なのかは、なのはにはわからない事だった。

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司であるカリムさんか部隊の監査役であるクロノ提督の許可がないとリミッター解除できないし、許可は滅多な事でない限りは下りないそうです」

ラインが口に出した内々の事情に一同は『組織が定めたルール』が

部隊長、隊長、副隊長の弊害になっている事を知り複雑な表情を浮かべていた。

（許可が下りる場合は割と即決というのがありがたいことなんだけどね）

余程の相手でない限りはリミッター状態でもなんとかかなるといのが本音だ。

「隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。今はみんなのデバイスの事だからね」

なのはは変に気にする必要はないように言う。

「新型もみんなの訓練データを基準にしているからいきなり使っても問題ないんだけどね」

シヤリオが四機のデバイスが映し出されているモニターを見ながら、カチャカチャと操作する。

「午後の訓練時でもテストして微調整しようか」

なのはは午後の予定を告げていきながら、良太郎を見る。

「そのための仮想敵もいるし、ね」

「ハナさんが言ってたのって冗談じゃなかったんだ……」

「もちろんです♪」

良太郎に向けて、なのはは満面の笑顔を向けた。

「やれるかなあ……」

仮想敵なんてやったことのない良太郎は天井を仰ぐ。

「大丈夫ですよ。良太郎さんは普通に戦う感じでしたくれればいいですから」

教導の際の仮想敵のマニュアルすら読んだことのない良太郎に高度な事は望んでいない。

なのはが良太郎に望む事は『魔導師でなくても強い相手』だ。

自分では魔法抜きとなると、こういう場合の仮想敵はあまりに不向きだからだ。

（私、単純な運動能力だったらフオワードこの子達より下かもしれない……）

魔法なしとなると体力はあっても、運動能力が凡人並がなのはの実態だ。

「遠隔でも調整はできますから、手間はそんなにかかりませんよ」

「便利だよねえ。最近は」

「便利ですよ」

なのはの呟きにリインは諸手を挙げた。

「なのはちゃん、オバサンみたいだよ」

「ふええっ!? ひどいですよお!」

良太郎のツツコミに、なのはは驚きの声を上げて口を手で押さえ
た。

失言を控えるためのとつきの行動である。

「スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能もうまく設定で
きてるからね」

「本当ですか!? あ、ありがとうございます!」

新デバイスだけでなく便利機能まで設けられている事にスバルは
感謝した。

「持ち運びが楽になるように収納と瞬間装着の機能も付けておいたか
らね」

ただ単に新型のデバイスを作るのではなく、持ち主の今までの負担
を改善するための機能も加える事を怠らないのがシャリオ・フィニー
ノが信頼を置かれている理由であることを、なのはは知っている。

「なのはさん」

「なに? ティアナ」

「午後からこのデバイスを使つての訓練ですけど、本当にその……相
手は野上さんなんですか?」

「うん、そうだよ。魔法は使えないけど良太郎さんは強いからね。油
断はできないよ」

魔法が使えなくても、対等にいやそれ以上に戦う事が出来るのが彼
等だ。

持てる力と知恵と現状を把握して瞬時に適応する能力はある意味
では魔法よりも脅威だろう。

イマジンと戦うというのはまさに状況に追い込まれることになる。
少なくとも同じ魔導師で似たことをした人物を知っている。

今ではなく、十年前の事だが。

(元氣してるかなあ)

その人物の事を思い出しながら、なのはは教え子達と異世界の協力者を見ていた。

*

良太郎は自分がフォワードの相手になるまでの経緯を振り返り終えてから、ふうつと息を吐く。

本来ならば昨日の午後の事を事件が起きたので、本日の午前の訓練に持ち越されていた。

仮想敵役になるのは今回が初の事となる。

普段通りでいいと言われているが、それでも気を遣ってしまうだろう。

なにせ相手は女の子と子供だ。

遠慮なく戦っていいといわれてもやりにくいことに変わりはない。

オマケに対戦者達は一つの実戦を終えて間もなく、異様にやる気満々だった。

手が抜けそうな相手ではないし、舐めてかかるつもりはないが油断すればこちらが潰されるだろう。

(実戦を一つ潜り抜ける事で今まで積み重ねていたものが解放されて、飛躍的な進化を遂げたのかもしれない。でも……)

良太郎はもう一度、四人を見る。

「怖くはないんだよね……」

四対一という傍から見たら圧倒的に不利な状況にもかかわらず、良太郎は落ち着いていた。

まだ戦闘開始のシグナルは鳴っていないかった。

第十八話 「アラートは実戦という旅立ちの汽笛」

一対四。

フオワードチームには優勢であり、野上良太郎には圧倒的に不利な状況となった。

傍から見ればの話だが。

実際には目で見ただけ通りというわけではない。

「野上が戦うには珍しくホームの展開になるな」

桜井侑斗が腕を組んで、空間シュミレータにいる良太郎を見下ろしていた。

「ホーム？どうみてもアウェイやと思うけど？」

隣でリインのためにデネブキャンディーの袋を開いてあげている八神はやては首を傾げた。

一対四の状況で何故、良太郎がホームになるのかわからない。

「そうですね。ノガミさんには不利だと思うです。あの子達も初めての实戦を無事乗り越えていますから今までとはちよつと違うですよ」

デネブキャンディーを両手で持って少しずつ味わっているリインもはやてと同じ意見だった。

「お前等。野上が電王に変身している時だけ強いって認識だったら、あいつを舐めてる証拠だぞ？」

侑斗もデネブキャンディーの封を開いていた。

「桜井の言う通りです。主はやて」

頭上から声がしたので、振り向いてみるとシグナム、ヴィータがいた。

「シヤマルとザフィーラ、あとデネブは？」

「シヤマルは医務室でザフィーラはその護衛、おデブは厨房で厨房スタッフと何か話してた」

「あいつ、その内シエフとかになりそうだな」

「それは負けられへんな」

ヴィータがここにはいない一人と一匹と一体の所在を説明し、侑斗はありえそうなデネブの未来を想像してはやてはそれに対抗意識を燃やした。

「それよりもシグナム。さっきの侑斗さんの言う通りってのは？」

「そうでしたね。私は十年前に電王に変身していない野上と剣を交えたことがあります。レヴァンティンを用いなかったことを差し引いても、決して軽い相手ではありませんでした」

「マジ!？」

ヴィータが驚きの声を上げるのも無理はなかった。

シグナムが良太郎と剣道場で戦った事を知るのはザフィーラだけなのだから。

「今の野上はあの頃よりもさらに強くなっているでしょう。仮に私が戦ったとしても楽に勝てるとは言えません」

「ノロケかよ?シグナぶっ……」

ヴィータが何かを言おうとしたが、シグナムの拳骨で噛んでしまった。

「つてーなあ!!何すんだよシグナム!!」

殴られた頭を両手で押さえながら、ヴィータは涙目で睨む。

「次に余計な事を喋ったら一発では済まさんぞ?」

頬を少しだけ朱に染めながらシグナムはヴィータに忠告した。

「圧勝はない、てことやね?」

「はい」

はやてはこれ以上刺激するのは危険だと感じたので結末を予想して訊ねると、シグナムは首肯した。

「私等は結構気楽な立場で見れるけど、あつちはどうなんやろな……」
はやての言う『あつち』に全員が視線を向ける。

そこにはどこか落ち着きのないフェイト・T・ハラオウンがいた。

フェイトの心は落ち着いていなかった。

このように落ち着きがないのはいつ以来だろうと振り返ってしまいたくなる。

自分が保護した子供達二人と自分の想い人がこれから戦うのだ。それを落ち着いてみる事は今の自分にはできそうにないようだ。

(エリオ、キャロ、良太郎……)

これは模擬戦だ。命を落とすことはよほどの事でない限りはまずない。

理屈ではわかっていても、心配してしまうものだ。

何せ三人のうちの一人は不幸の女神に愛されている男だ。

『よほどの事』というものが起こってしまうという疑念が膨らんでしまふのも無理のないことだった。

(エリオやキャロもいつかはこんな気持ちになっちゃうのかな……)

自分が良太郎と戦う事になれば二人は今の自分と同じ気持ちになるのだろうか。

保護者と言っても親子ではないのだから何とも言えないのだが。

自分が心配しても向こうが心配するとは限らないからだ。

(親って結構損な部分もあるんだね。良太郎)

損得勘定を出すつもりはないが、ふとフェイトはそう思ってしまった。

(みんな、頑張って)

ライトニングの隊長として部下の無事と一人の女性として想い人の無事を籠めて願った。

フェイト、侑斗、はやてはこれから始まろうとする戦いを前に昨日の任務及びそこに至る経緯を誰の指図を受けることなく振り返る事にした。

*

機動六課を離れてから数キロ、フェイトはステアリングを握り自動車を運転していた。

隣のはやては快適な表情で流れる景色を見ていた。

「フェイトちゃん。運転上手いなあ」

「そうかな。普通だよ」

余所見をするわけにはいかないので、視線は前を向いたままだ。

「桜井さんもきちんと追走してるね」

バックミラーには真後ろでゼロホーンに乗っている侑斗の姿が見えた。

「バイクに乗るんもええかもなあ。気持ちよさそうやし」

はやては助手席からちらりと後ろを見ながら言った。

「うん。気持ちいいよ。車と違って風と一体になっている気分になるんだ」

「フェイトちゃんは乗ったことがあるん？」

「あるよ」

フェイトはウインカーを点滅させて、右にステアリングを切った。

八車線の道路で左右の区切りとして縁石というよりも壁が設置されていた。

自動車は一番左から中央へと車線を移動する。

ゼロホーンも釣られるように移動した。

それからもいくつかの世間話をした後で、話の内容は現在向かっている場所にいる人物の事になっていった。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官。カリム・グラシアさんか。私はお会いしたことないんだけど……」

「そうやったねえ……」

はやてにしてみれば身近に感じる人間でも、フェイトにしてみれば縁遠いという事だ。

「はやてはいつから？」

「私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時でリインが生まれたばかりのはずやから……、八年くらい前かなあ」

「そっか」

「カリムと私は信じてるモノも立場もやるべき事も全然違うけど、今回は二人の目的が一致したから……」

助手席のはやては、運転しているフェイトと違ってシートベルト着用とはいえある程度は体の自由が許されている。

「そもそも六課の起ち上げは実質的な部分をやってくれたんはほとんどカリムなんよ」

「そうなんだ」

フェイトとしてはさして驚くほどの事ではなかった。

誰か協力者がいたのでは？というような考えはあったからだ。

「おかげで私は人材集めに集中できた」

はやての表情は心底感謝していた。

「信頼できる上司って感じ？」

「うーん。仕事や能力は凄いいんやけど、あんまり上司って感じはせえへんなあ。どっちかっていうと『お姉ちゃん』って感じやね」

はやての回答にフェイトは思わず声を出して笑う。

「そっか」

一通り訊ねる事は訊ねたので、フェイトとしては今のところ質問はない。

「レリック事件が解決して一段落したら、ちゃんと紹介するよ。なのはちゃんやフェイトちゃんとも気が合うよ♪」

「うん。楽しみにしてる」

フェイトの右足がさらにアクセルペダルを踏んだ。

ミッドチルダ北部ベルカ自治領『聖王教会』大聖堂。

聖王教会に到着した侑斗とはやては、フードを被っていた。

身元を偽るような扮装だった。

フェイトは、役目を終えているのでここにはいない。

(カリム・グラシア。八神が高町やテスタロッサ達に何かを隠している理由に無関係とは言えないな)

被り物をするように案内人の男に指示されているところかすると、管理局員やその助っ人が大っぴらでこの場所に足を踏み入れる事はよしとはしていないようだ。

「侑斗さん。くれぐれも粗相のないように頼むぞ」

「言われなくてもわかってる」

釘を刺された侑斗は、むすつとした表情で答える。

案内人の足が止まり、自分の前を歩いているはやての足も止まった。

ここに本日の目当ての人物がいるのだろう。

案内人がドアを叩く。

「どうぞ」

と部屋から声がしたので、両扉の右側を開く。

待ち受けていたのは、金色の長髪で落ち着きのある雰囲気を纏った女性だった。

（騎士？）

『騎士』と呼ばれているのだから威厳のある雰囲気想像していたのだが、どうみても戦場に出て戦う事が出来るような人物とは思えなかった。

（シヤマルに近いタイプだな）

自分の中で知っている騎士と照らし合わせた。

「カリム。久しぶりや」

はやてはフードを脱いで、顔を露わにする。

「はやて。それと……」

カリムは、はやてを一瞥してからこちらを見ていた。

フードを脱いで、顔を露わにする。

「カリム。この人が桜井侑斗さん、仮面ライダーゼロノスや。侑斗さん。この人がカリム・グラシアさんやで」

はやてが仲介人として互いを紹介してくれた。

「桜井侑斗です」

「初めまして。カリム・グラシアと申します」

互いに一礼をした。

一人のシスターがお菓子と三人分の紅茶を用意してくれた。

はやてとカリムが座り、侑斗ははやての隣で立っていた。

「ごめんなあ。すっかりご無沙汰してもうて」

「気にしないで。部隊の方は順調みたいね」

「カリムのおかげや」

カリムはクッキーを、はやては紅茶の味を楽しんでいた。

「そういう事にしておくと、お願いもしやすいかな」
(ただの世間話ですむわけないと勘繰っていたけど、まさかドンピ
シャとはな……)

侑斗はこの騎士とはやてが逢うという事には最初からただの平和
的な話ですむわけがないと考えていた。

今のところは口出しする気はないので、静観することにした。

「何やあ？ 今日会ってお話するんはお願い方面かあ？」

カリムの穏やかな表情が真剣なものになっていった。

宙にモニターを展開させて、触って操作していく。

ガーツと室内のカーテンが自動的に閉じられた。

途端に、はやての表情も真剣なものになった。

彼女も分かっているのだろう。

『世間話』の時間は終わったのだと。

宙に六つのモニターが展開されていた。

妙な箱がクルクルその場で回っているものや、ガジェットドローン
一体と同型と思われる妙な機械兵器が二体

それとこちらの世界で書かれている文章と何かを分析していたと
思われるグラフだ。

侑斗がわかるのはガジェットドローンとそれと同型と思われるタ
イプがいるという事だけだ。

イマジンが表示されていないところからして、それはわかっていな
いという事だろう。

「これガジェット……。新型？」

「今までのI型以外に新型らしいのが二種類。戦闘性能はまだ不明だ
けどコレ……」

カリムが眼前に展開しているモニターをさらに操作すると、ガ
ジェットドローンの新型の一体がアップで映し出された。

完全な丸型だ。

「III型は割と大型ね」

丸型のガジェットドローンはIII型と呼称されており、人と対比して
みると大型というのがわかる。

「本局にはまだ正式報告はしていないわ。監査役のクロノ提督にはさわりだけお伝えしたけど……」

（提督？あいつ出世したのか……）

侑斗にしてみれば会った回数はわずかだが赤の他人というわけでもない間柄だ。

「これはー」

はやての視線は妙な箱に行っていた。その表情はさらに険しくなっていた。

聞いてみたいところだが、話の腰を折るわけにはいかなので事の成り行きから情報収集することにする。

「それが今日の本題。一昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物……」

「レリック……やね」

「その可能性が高いわ。Ⅱ型とⅢ型が発見されるようになったのも昨日からだし……」

「ガジェット達がレリックを見つけるとの予想時間は？」

「調査では早ければ今日、明日」

カリムとはやてから自身でもわかる言葉とえば、ガジェットドローンくらいだ。

推測するに、『レリック』というのはロストログアにカテゴライズしても構わないものだという事だろう。

「せやけどおかしいなあ……。レリックが出てくるんがちよつと早い」

「だから会って話がしたかったの。これをどう判断するべきかどう行動するべきかを……。レリック事件もその後起こる事件も……。そして……」

その場の空気はますます重くなっていく。

「サイキョウニシテサイアクナルモノも……。対処を失敗するわけにはいかない」

カリムが発した言葉で侑斗は一つの確信を得た。

自分や良太郎が手にしたあのメモ書きを彼女達は知っているとい

うことを。

(俺の予想、当たっちゃったぜ。野上……)

そろそろ静観することを侑斗はやめにすることにした。

はやてはこちらを見ていた。

「侑斗さん……」

という思いが入っている。

侑斗も視線ではやてを見る。

「覚悟を決めてるんだろ？」

という思いで返した。

はやてはカリムの眼前にあるモニターを自分の方に寄せて操作する。

自動的に閉じられていたカーテンが開く。

室内が急に明るくなったので、一段と日差しがまぶしく感じる。

「まあ、何があってもきつと大丈夫。カリムが力を貸してくれたおかげで部隊はもう何時でも動かせる。即戦力の隊長達はもちろん新人フワード達も実戦可能。それにイマジンが来ても仮面ライダーがおる」

はやては自信に満ちた表情でカリムに言う。

「予想外の緊急事態にもちゃんと対応できる下地はできてる。そやから大丈夫！」

(そろそろ質問できる頃合いか……)

侑斗は一步下がった状態から自身を解放することにした。

「騎士グラフィア。貴女に訊きたい事がある」

「何でしょうか？桜井様」

カリムは質問されることを予期していたのか驚いている様子はない。

「貴女や八神のさっきの口調からして、これから起こる事をまるで知っているかのような口ぶりだったんで気になって……」

カリムやはやてを見る。

恐らくは種明かしをしていいかどうかを伺っているのだろう。

「カリム。侑斗さんは大丈夫や。それにどちらかという侑斗さん等

はその手の事の実体験もしてるんやし……」

カリムの持つている秘密が、自分の考えている通りのものならば『経験済み』と断言できるだろう。

カチャンという音が響く。

カリムがカップを手にした音だ。

一口飲んでから視線をこちらに向けた。

そして、閉ざしていた口を開き始めた。

六番ポートにはやてを送り終えたフェイトは機動六課へと帰路をたどっていた。

横に誰もいないとなると、気を遣う必要もないので運転も個人向けのものになる。

スピードメーターもはやてを同席している時よりも速い数値を表示していた。

ステアリングを握る両手の力は、強すぎず弱すぎずという絶妙なものであった。

(はやて。いいなあ)

フェイトは不謹慎である事は承知だが、はやてと侑斗が四六時中一緒であることは羨ましかった。

これがもし自分と良太郎だったらどうだろう。

きっと保てないかもしれない。

公私混同しない自信はあるが、それでもどこか浮ついているだろうという事は安易に想像できた。

(そういえば今日は良太郎を見てないような……)

一人の異性に依存しているわけではないが、いつも見ている顔を見ていないとなると落ち着かないものだ。

今日は朝から一度も顔を合わせてはいない。

同じ場所にいなながらも、立場が違うから機会がないのも当然なのかもしれない。

自分は正規の局員で彼は民間協力者だ。

会社で言うならば正社員とアルバイトの様なものだ。

(正社員に恐れられているアルバイトつてのも変な話だね)

自分のたとえ話にぷつと小さく吹き出してしまふ。

その間もステアリングは握られており、運転ミスはしていない。

「六課の方はどうなってるんだろ……」

今のところは警戒態勢も取ったことはないし、イマジン出撃の話も出ていないので平和と言えれば平和だがそれが永遠不変というわけでもない。

自分の経験上、一時間前が平和でも現在に事件が訪れるなんてことはよくある事だ。

フロントガラス部分に、モニターが展開される。

モニターの大きさは運転の邪魔にならない程度の大きさだ。

表示されているのは物ではなく、人物だった。

眼鏡をかけた男性——グリフィス・ロウランだ。

『お疲れ様です』

「お疲れ様。はやては無事に着いていると思うよ」

『そうですか』

モニターに映るグリフィスは安堵の息を漏らしていた。

「私はこの後に公安地区の捜査部に寄って行こうと思うんだけど、そっちは何か急ぎの用事とかあるかな？」

『いえ、こちらは大丈夫です』

グリフィスが虚勢を張る必要はないので、その言葉は真実なのだろうと今ならわかる。

これが初日ならば嘘で誤魔化しているのだと疑っていた。

人というのは環境に慣れる動物だと聞いた事がある。

イマジンと共闘している機動六課は時空管理局の中では極めて異色と言ってもいいだろう。

今となつては機動六課でモモタロスをはじめとするイマジン達を露骨に恐れる者はいない。

彼等の人となりを知ること、変に身構えたりすることがバカらしくなったというのが最大の原因だったりする。

フェイトはウインカーレバーを上げて、右を指示してからステアリ

ングを切る。

自動車は操られるようにして、右へと車線を変更した。

『副隊長二人は交代部隊と共に出動中ですが、なのはさん、野上さんをはじめとするチームデンプライナーも全員いらっしやいますのでイマジンが出現しても大丈夫です』

そのような会話が進もうとしていた時だった。

『ALERT』

とグリフィスが映し出されているモニターの隣に、新しく出現した背景色がマゼンタカラーのモニターに白色で表示されていた。

フェイトの表情が一変して険しいものになった。

その表情は『エリオとキャロの保護者』でも『野上良太郎を一途に想う女性』でもない『时空管理局執務官兼ライトニング分隊長』の顔だった。

聖王教会でもこの『ALERT』の表示は確認されていた。

カリムの言っていた事は本当に起こったのだ。

現在、はやてとカリムが無数に展開させているモニターを駆使して調査している。

こうなると、侑斗は蚊帳の外であってできる事は何もない。

ふと気になったことがあるので、調査中とは憚られるがはやてに訊ねる事にした。

「なあ、八神」

「どうしたん？侑斗さん」

「お前等が追っているレリックってヤツはロストロギアとみていいのか？」

はやては侑斗の方へと向かず、答える。

「そうやね。そうみても構へんよ。それがどうしたん？」

侑斗の中での想定内の返答だった。

「ソレって売ったら金になるのか？」

この質問で、はやてのタッチ操作していた手がピタリと止まった。「なりませんね。上質なロストロギアなら高額で取引されていたりしま

す」

はやての代わりにカリムが答えてくれた。

「となると、野上さん等も出動してもらった方がええんやろなあ……」

「出てこなきやそれでいいけど保険として、な」

「わかってるて」

侑斗とはやての会話は進んでいく。

「何か？」

そのやり取りをじっと見ている視線を感じたので、顔を向ける。

言うまでもなく、カリムだ。

「保険とは一体何のためのものでしょうか？」

自分とはやてには先程の会話だけで殆どがわかるが、外野からしてみたらわからない事だらけらしい。

「イメージにだ(や)」

侑斗とはやては声を揃えて答えた。

カリムは笑みを浮かべている。

「カリム。お仕事中やで」

「ごめんなさいね。はやて。でもおかしくって」

「笑いを取るつもりはないんだが……」

侑斗は腕を組んでから、次に自分ができる事がないかを考える事にした。

調査を終えたはやては、報告として機動六課隊舎と現在車で移動しているフェイトに向けて通信を発信した。

「はやて。この件は私達、『聖王教会の依頼』として正式にお願いするわ」

「了解や。なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちら、はやて。聞こえるか？」

はやての眼前に、三つのモニターが出現した。

映っているのは、呼びかけた三人だ。

『状況は？』

フェイトが切り出してきた。

「教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった。場所はエイレム山岳丘陵地区、対象は山岳リニアレールで移動中……」

『移動中って……』

『まさか……』

フェイトとなのはが思わずそのような台詞を出してしまうのも、はやては無理はないと思った。

物品強奪をするなら、強奪者はリスクなく事を成し遂げたいというのがセオリーだ。

そうになると、移動中よりも強引に停止させて奪う方がリスクは高くなるが強奪者の生存率はそれなりに高くなるだろう。

だが、今回の場合は移動中にもかかわらず成し遂げようとしている。

そうなつてくると、犯人はリスクを覚悟の上で行える命知らずか、そんな事を気にせずに平然と行える人外の者という事になってくるわけだ。

前者の可能性は薄いだろう。

山岳リニアレールの速度はどう見ても魔法を使える人間が行うからこそ可能というものだが魔力反応が出てこなかった。

となると、後者の可能性が高い。

そして、その考えが正解であるように山岳リニアレール（以後：リニアレール）が映し出されているモニタには人外の者が張り付いていた。

ガジェットドローンだ。

「そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで車両の制御が奪われてる。リニアレール車両にいるガジェットは最低でも三十体。大型や飛行型の未確認タイプも出ているかもしれない」

はやては状況を一通り告げてから、一拍おいてからもう一度真面目な表情になる。

「いきなりハードな初出動やけど、なのはちゃん、フェイトちゃん。行けるか？」

『私はいつでも！』

『私も！』

フェイトとなのはが即答した。

この二人は自分の中では想定内の事なので問題はない。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。みんなもオツケーか？」

この四人の実力は未知数だ。

正直、訓練が優秀でも実戦ではてんで駄目という事は珍しいことではない。

だがこの四人なら自分が期待している返事が出るだろうという確信があった。

『『『はい!!』』』』

四人は自分の期待通りの返事をしてくれた。

「よしっ！いいお返事や。シフトはAの3、グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制。なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮。それと野上さん」

六課のメンバーに粗方指示を終えると、はやては良太郎に向ける。

『何？八神さん』

「モノがモノだけにイマジンが出現する可能性は否定できません。もしもに備えてですけど出動をお願いしたいんですけどよろしいですか？」

『わかりました』

良太郎も即座に快諾してくれた。

「ほんなら、機動六課フォワード部隊及びチームデンライナー。出動!!」

この一声で本格的に今回の任務が始まった。

フェイトが自動車に設置されているボタンを押して屋根部分にパトランプを出現させてからギアを操作して加速した。

ヴァイス・グランセニックが上着を羽織りながら、ヘリポートへと踏み込んでヘリコプターに乗艦した。

良太郎がイマジン四体を集めて事情を話していた。

「シャツハ。はやてを送ってあげて。機動六課の隊舎まで最速で」

カリムがモニターを展開して、映し出されているシスター——
シャツハ・ヌエラの指示を出そうとしていた。

『かしこまりました。騎士カリム』

そう言い終えると、シャツハを映し出していたモニターは消えた。

「あ、カリム。シスターシャツハ。気遣いはありがたいんやけどその点は大丈夫や」

「どういう事？はやて」

ここまでは、はやては自家用車で来ているわけではない。つまり、機動六課隊舎までは飛んで帰るかスタンバイしているシャツハに送ってもらおうしかないわけだ。

「侑斗さん」

「もうそろそろ来る」

「？」

はやてが望んでいる事や侑斗の言っている事にカリムは首を傾げていた。

汽笛のような音がどんどん大きくなっていった。

やがてプシューツという音が鳴って停車した。

停車場は聖堂の裏、つまりシャツハのいる場所だ。

『き、騎士カリム!!未確認物体がて、停車しましたっ!!』

モニターが出現して、シャツハが動揺を隠さずにカリムに告げてきた。

カリムはこの時、はやてと侑斗が言っていた事の意味が理解できなかった。

「シャツハ落ち着いて。その未確認物体がはやてと桜井様が待っていたものらしいのよ」

『そうなのですか?』

「だから、手は触れてはダメよ。あと攻撃もしないように」
『……かしこまりました』

そう告げると同時に、またモニターは消えた。
(攻撃しようとしてたな……)

侑斗とはやてはシャツハの間の置いた返答からしてそのように推察した。

二人は入室した時と同じように、フードを被っていた。

「カリム。お茶ごちそうさま」

はやてはカリムに礼を言う。

「どういたしました、はやて。あと桜井様」

カリムは笑みで返しながら侑斗を見る。

「はやての事をよろしくお願いします」

「了解した」

即答で答えてから、背を向けて二人は聖堂の裏側へと通じる道を歩き始めた。

未確認物体——ゼロライナーが発進したのはそれから五分後の事だ。

*

「あの時ゼロライナーに攻撃してなかったんは運が良かったというしかあらへんね」

「全くだ」

これから始まる模擬戦を見ながら、はやてと侑斗はシャツハとゼロライナーの事を思い出していた。

二人はその時のシャツハを責めようとはしなかった。

得体の知れないモノがいきなり現れて無警戒というのは重要人物の警護を任されている身としては褒められることではないからだ。

ゼロライナーを見て警戒心を抱いたのは至極当然の事だと思っているくらいだ。

「侑斗さん的にはこれから始まる模擬戦、どうみる？」

はやては隣に座っている侑斗に訊ねる。

「あの四人が今の野上をどう見ているかで勝敗は決まるだろうな」

「どう見ているか？」

「ああ。野上をザコとみるかラスボスとみるかで勝敗は決まる」

侑斗は答えてから、フォワード四人を一瞥してから良太郎を見た。

第十九話 「積み重ねたことが活かされるとき」

高町なのはは、自分の教え子達を見下ろしていた。

相手は自分が知る限りでは二番目に戦いたくない相手だ。

そんな相手にこれから戦おうとする四人を自分がセツティングしたとはいえ、称賛したくなる。

(言いたいんだけど言えないんだよねえ)

教導官という立場としては簡単に言うわけにはいかない。

『褒め言葉』というのは使いどころを間違えてしまうと、その人物の成長を大きく妨げてしまう要因になる。

今回の模擬戦に至っての褒め言葉は『教導官』ではなく、『高町なのは』として言ってしまうからだ。

だから、なのはは口には出さない。

(訓練通りの事をこなすことができれば、何とかなるかもしれないでも……)

なのはの中で一つ不安要素があった。

それは相手が、野上良太郎であることだ。

電王ならば対策のしようがあるが、良太郎となると話は違ってくる。

何故なら良太郎の『力』を自分は全く知らないからだ。

以前に桜井侑斗と戦った際の戦いを思い出すが、相手が相手だけにすべての手の内がさらけ出されているとは思えない。

強者同士となると、『いかに相手に全力を出させる前に潰す』というのが暗黙の法則となってくる。

良太郎と侑斗も『実戦経験者』であって、『戦闘狂』ではない。

だから相手の土俵に立つ事を嬉々とはせず、相手を引き込んで叩くという手段をとる。

(私が戦うとしたらどうなるかなあ……)

自分が戦うとしたら、自身は『全力全開』で戦うが相手に全力を出させる前に叩くという結論にいきつく。

「なーに難しい顔してんだよ？ オメエ」

「モモタロスさん」

モモタロスは当然の様な顔で、なのは隣の立つ。

なのは自身も十年ぶりだった。

そして、彼女にとつて最も戦いたくない相手というのがこのイマジ
ン四体である。

あれから強くなったという自負はある。

それでも戦ったら確実に『勝てる』とは断言できなかつた。

『魔法の師』といえるユーノ・スクライアには既に数年前に卒業を言い
渡されているが、『生き様の師』とも呼べるこのイマジン四体にはまだ
一人前としての言葉をもらつてはいない。

このイマジン達はユーノにとつても『師』と呼べる存在だという事
は、なのはだけが知っている。

「オメエはどっちが勝つと思つてんだよ？」

モモタロスはどこで売られているのかはわからないが、串刺しに
なっている鶏のから揚げをなのはに渡す。

受け取つてから、なのはは軽く頭を下げる。

「正直に言うかわからないんです。良太郎さんが電王として戦うとい
う前提なら勝算はハッキリしますけどね」

口には出さないが、フォワードが勝つ事はない。

勝てばイマジンを倒すことも可能になるという裏付けにもなる。

「良太郎にしてみれば五分くれえの勝負になるだろうーな」

「五分、ですか？」

自分の考えている割合とは違う数字だった。

「どうしたよ？」

モモタロスが怪訝な表情をしているこちらを見ていた。

「あ、いえ……私が考えている割合とは違つてるなあと思つて……」

「オメエの予想はどのくらいなんだよ？」

「良太郎さんの勝算は二分くらいだと……」

なのはがこのように少ない数字を出した事には理由がある。

最初に出てくるのは数による不利だ。

次に挙げられる理由は四人が全員、魔法を使えるという事だろう。

いくら相手が仮面ライダーでも多数の魔導師を相手にしたことはないはずだ。

最後の理由としては、戦う四人が電王に関する情報を有している事だ。

対して良太郎は四人の情報を持つてはいても、それは片鱗程度のものでしかないと考えている。

実際、彼が訓練を見る事はあっても四人にこれまで課してきたのは基礎訓練の部類なため、手の内をすべてさらけ出しているわけではない。

「ま、オメエの言うように一対四って数字じゃ良太郎は不利だらうな。でもよ、アイツもバカじゃねえんだぜ？」

「そうですね。だから怖いんですけどね……」

モモタロスの言葉に、なのはは首を縦に振る。

彼の言っている意味が理解できるからだ。

「ところで、モモタロスさん」

「何だよ？」

「コレってどこで買ったんですか？出来立てですし……」

「あそこ」

なのはは左手で持っている鶏のから揚げの出所を訊ねる。

コンビニや祭りの屋台でしか中々お目にかかれないものだ。

モモタロスの指差す方向には機動六課には絶対ないものがあった。

「ふえええっ!?いつの間に来てたんですかあ!？」

機動六課には絶対ないモノ。

それは屋台だった。

屋号はひらがな表示で『でんらいなあ』となっていた。

先程から姿を見ていないウラタロス、キンタロス、リユウタロスが仕切っていた。

「ちなみに開店日は俺達が気が向いた時やイベントの時で、金は全品こんなもんだ」

お品書きを見せてきた。

「安いですね……」

値段を見て、彼らがお金儲けを目当てでやろうとしているのではないという事がわかった。

本当に気まぐれなのだという事もだ。

「さあて、目え離すなよ?」

「はい! わかってます」

『教える側』に回った自分だが彼等の前だとまだ『教えられる側』にいるのだと、なのはは実感した。

本日の空もあの時と同じくらいの蒼天だった。

*

ヴァイス・グランセニツクの操縦でヘリコプターが一機、空を浮上していた。

中にいるのは、なのはとフォワード四名にモモタロスとリュウタロスである。

何故イマジンが二体この場にいるのかというと、単純に「ヘリに乗りたい」という理由からである。

その言葉を聞いたとき、ヴァイスが感激の涙を流していたりする。

残りのキンタロス、ウラタロスと良太郎はデンライナーでヘリコプターの横に並んで並走していた。

本来ならば中々お目にかかれないシチュエーションである。

「新デバイスがぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

なのはが初めての实战で緊張と萎縮してしまっている四人を励ます。

「は、はい……」

ティアナ・ランスターが気丈にふるまうがそれでも内に蠢く不安を隠すことはできなかった。

「頑張ります!」

スバル・ナカジマは下手な事を言うと、ボロが出ると察したのか今

後の抱負じみた台詞で応じた。

「エリオとキャロ、それにフリードもしつかりですよ！」

なのはの横で浮遊しているリインが両手を拳にして緊張しているエリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエを励ます。

「はい!!」

「キユクー」

二人と一匹も余計なことは言わずに、返事で返した。

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびつくりじゃなくて思いつきりやつてみよう!!」

「なあなあ、へりって動かすのにこんなややこしいのかよ？」

「僕にも触らせてよー。へりのおじさん」

操縦しているヴァイスに絡んでいるのはこの中では最も緊張感のないモモタロスとリュウタロスだった。

「お、おじさん!?俺、野上の旦那とそんなに歳は離れてないっすよ!」

「ノガミノダンナってだれー?」

ヴァイスの抗議の中に聞きなれない言葉があったので、リュウタロスは首を傾げる。

「良太郎の事じゃねえのか?でもよお、何で『旦那』なんだよ?アイツは独身だぜ」

モモタロスの中では『旦那』という言葉は『既婚者』のみにしか許されない言葉らしい。

「でも、ハラオウン執務官とはイイ仲なんですよ?いずれは……そう
いう風と呼ばれてもおおしくないんじゃないですか?」

「さあなあ……」

モモタロスは良太郎が抱えている事情を知っているだけに即答はできなかった。

リュウタロスも何かを言おうとしたが、思い出したのか両手で口をふさいでいた。

「モモタロスさん、リュウタ君。イマジンが出てきた場合はお願いします
ますって、何の話してるんですか?」

「何の話って世間話?」

訊ねられたので答えるモモタロスだが、明確なジャンルが浮かばなかったので一番適当なものにした。

「イマジン、出てくると思います?」

なのはの表情が真剣なものになったので、モモタロスは鼻をクンクンとする。

する事、大体二、三分で行動を終えた。

「いや、イマジンの臭いはしねえ。でもいいのかよ?」

「何がですか?」

「出てきたとして、俺達が倒しちまったらよ。契約者はわかんねえまだまだぞ?」

モモタロスの言いたい事を、なのはは理解した。

出現したイマジンを倒す事で、契約者への足取りは途絶えてしまうと言いたいのだ。

「わかってます。今のところ局は契約者の事にはあまり積極的には行動していないんです」

「契約者は逮捕しないの?」

なのはが語る現状に、リュウタロスは当然そうなるだろうという末路を訊ねた。

「イマジンと契約者がベツタリだったら逮捕できると思いますが、今のところはその前例がないんです」

「それに契約者とイマジンだったら、どちらを優先させるかという事にもよるんです」

なのはの言葉に続くように、リインが言う。

「ま、イマジンだろーなあ」

「どうしてさ?モモタロス」

モモタロスの即答にリュウタロスは首を傾げる。

「契約者は人間だし、イマジンに頼ってテメエの願いを叶えさせようって根性なしだから気にすることはねーだろ。でもイマジンを放ったらかしたら色々やばくなるだろ」

「ああ、そっかあ。イマジンが契約叶えちゃったら、なのはちゃん達じゃ無理だもんね……」

リュウタロスも時空管理局の技術では『時間逆行』できない事は知っている。

「お恥ずかしい限りです……」

なのはが自身の恥のようにしてつぶやく。

「俺達が魔法使えねーようにオメエ等は時間を渡れねえ。だから俺達手え組んでんだろ？だから気にすんなって」

モモタロスはそう言っつて、なのはの頭をポンポンと叩く。

「もう！髪が乱れますからー！」

一体のイマジンと教導官のやり取りを、リインは叱り、ポカンとした表情でスバルとティアナは見ていた。

「ん？」

そんなやり取りの輪に加わっていない者達の姿をリュウタロスの視界に入った。

エリオとキャロとフリードだった。

デンライナーの食堂車の窓から並走しているへりを見ながら、コハナは息を一つ吐いた。

「何？ため息？」

目ざとく見ていたのはウラタロスだ。

「ため息もつきたくなるわよ。あの二人、なのはちゃん達の邪魔をしななければいいんだけど……」

「邪魔はせんやろうけど、バカはやりかねへんからなあ」

コハナのため息の理由に、キンタロスは椅子から立ち上がって食堂車の窓から見えるへりを一瞥してから告げた。

「センパイとリュウタだもんねえ。何が起こってもおかしくないしねえ」

インテリのポーズをとりながら、ここにはいない二体のイマジンが何をやらかすかをウラタロスは想像していた。

「みんな、言いすぎだよ」

良太郎は食堂車に設置されているモニターで外の現状を見ながら、苦笑していた。

「良太郎。外はどう？」

「今のところは何もいないね。快適の空の旅、かな」

「それで済めばええんやけどなあ」

コハナの問いに良太郎は目を離さないまま答え、キンタロスは腕を組んでどっかりと席に着いた。

「ブレイクしよっか？」

カウンターを無断で使っているウラタロスがコーヒーを淹れていた。

ヘリとデンライナーが山岳地帯付近に踏み込んだ頃、雲一つない青空に無数の何かがこちらに向かっていった。

「モモタロス」

「ああ。何かきやがったぜ……」

今までおちやらけていたリュウタロスとモモタロスの表情がガラリと変わった。

「……………」

なのほも二体に劣らないくらい真剣な表情になっていた。

「ヴァイス君。私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を抑える！」

「ウスーなのはさん、お願いします」

ヴァイスは、了承してからヘリのメインハッチを開ける。

内部に風が入り込み、髪がなびいていた。

「じゃ、ちよつと出てくるけどみんなも頑張つてズバツとやつつけちやおう！」

「二はいー！」

「はいー！」

スバル、ティアナ、エリオが揃って言ったがキャロだけは遅れた。

「キャロ。大丈夫。そんなに緊張しなくても」

飛び降りようとしたのはだが、元気づけるために歩み寄って両手をキャロの両頬に添えて優しい表情を浮かべる。

「離れてても通信で繋がってる。一人じゃないから。ピンチの時は助け合えるし、キャロの魔法はみんなを守つてあげられる。優しくして強

「い力なんだから、ね？」

「キャラに今告げておきたい事を終わると、なのははメインハッチへと駆ける。」

「モモタロスさん、リュウウタ君。イマジンが出たらお願いします!!」
「なのはは、へりから飛び降りた。」

*

「やっぱり魔法つてズリーよなあ。パラシュートなしでも平気なツラしてられるんだからよお」

「にやはは……。ヤケにパラシュートに拘ってますね……」

モモタロスの魔法に対する見解は深くは知らない者の台詞だ。
実際にはそんなに便利というわけではない。

できない事はできないのだから。

「もしかして何かあったんですか？」

「……聞くなよ。思い出したくねーんだからよ」

「凶星のようだった。」

「なのはとしては深く訊ねるといふ底意地の悪いことはしないので、ここで打ち止めにした。」

「はむ」

モモタロスから貰った鶏のから揚げを一口食べる。

「美味えだろ？」

「美味しいですねって、アレってリュウウタ君……」

「ん？フェイトのところに行ってるな……。エリキャラの事だろーな」

「エリキャラって、二人はコンビですけどそれだとお笑いのコンビ名みたいですよ……」

また変な通り名が浸透するなあとなのはは予感した。

「そういえば初任務からですよね？三人が仲良くなったのって……」

「そーいやそうだよな。ま、小僧にしてみてもいいダチ公ができたんだからいいんじゃないか」

「そうですね」

一体と一人が納得すると、揃って手に持っているから揚げをかじって恍惚の表情を浮かべていた。

「フェイトちゃん」

モモタロスと同様に、串刺しになってる鶏のから揚げを数本持ったリュウタロスがフェイト・T・ハラオウンの元へと寄った。

「リュウタロス」

「はい」

「あ、ありがとう」

リュウタロスから受け取ることが当然というようなノリで受け取ってから礼を言う。

「もうすぐ始まるね」

「うん。そうだね」

から揚げを美味しく食べているリュウタロスに対して、フェイトの表情は明るくはなかった。

「心配？」

「うん」

リュウタロスがフェイトを覗き込んで見ながら、訊ねた。

「難しいねー」

フェイトが首を縦に振ってから、リュウタロスは短くも正直な本音を口に出した。

「矛盾してるよ。エリオとキャロが負ける姿は見たくないけど、良太郎が負ける姿も見たくはないんだよね……」

両方がぶつかれば勝敗がつく。

この場合、運が良ければ引き分けという事になるがそうなる可能性は極めて低いだろう。

「どっちも応援すればいいんじゃないのー?」

リュウタロスは二本目の鶏のから揚げを食べていた。

「!!」

フェイトにしてみれば先程の言葉は目から鱗が落ちるようなもの

だった。

「うん。そうだね。ありがとう！リュウタロス」

「？」

何故感謝の言葉を述べられたのかリュウタロスは理解できなかったようだ。

*

駐車場に車を停めて、飛行許可を得てバリアジャケットへと換装を終えたフェイトはバルディッシュ・アサルトを右手に持って、大空を駆けた。

空を飛ぶ。

飛行魔法を有している魔導師ならば至極当たり前の感覚だが、ひどく懐かしく感じた。

こここのところ、デスクワークまがいの事ばかりしていたからかもしれない。

じっとするより体を動かす方が性に合っているというのは自己分析だ。

(気ままに空を飛ぶって事はもうないんだよね……)

時空管理局で働くようになって十年経つ。

得たものもあるが、失ったものだってある。

時空管理局執務官としての『力』を得て、自身の力でありながらも勝手に行使できない事、『自由』を失ったのだ。

(一人で飛んでると、ついこんな事を考えちゃうね……)

一人、小さく笑みを浮かべてからお仕事モードの表情になる。

「ライトニング1、フェイト・T・ハラオウン!!行きます!!」

身体全体を金色の魔力で覆って、飛行速度を上げた。

ドオンという音速を超える音が聞こえた。

へりから飛び降りて地上にまっさかさまになっているのはは、バリアジャケットへと換装して左手にレイジングハート・エクセリオン

を握っていた。

両足首に展開されている桜色の双翼が彼女に空を飛ぶ力を与えている。

「イマジンらしい姿はなし、か……。ラッキーと言えばラッキーのかな」

残酷な現実だが、今の自分ではイマジン一体と対等に戦う事は不可能だ。

身体全体に錘をつけている状態ではわざわざ死にいくようなものだ。

「目には見える敵を倒さないと、だね!!」

『その通りです』

「スターズ1、高町なのは!!行きます!!」

なのはは足元の桜色の双翼を羽ばたかせて、こちらに迫っている謎の物体に向かっていった。

へりに残っているイマジン二体とフワード四人にちいさな上司はというと。

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、そしてレリックを安全に確保すること」

ラインが真剣な表情で概要を告げると、モニターを展開させた。

それは現在ガジェットドローンに占領されているリニアレールの現状を表しているものだった。

「ですからスターズ分隊とライトニング分隊、二人ずつのコンビでガジェットを破壊しながら車両前後から中央に向かうです」

「しつもん」

「何ですか？赤鬼さん」

「オメエはどうすんだよ？俺達みてえにイマジンが出てくるまで留守番かよ?」

体育座りをしているモモタロスが挙手をした。

「ラインは現場に降りて管制を担当するですよ」

そのように告げてから、くるりとその場でターンしてから陸士隊服

から白色が目立つ騎士服へと換装した。

「……………」

「な、何ですか？赤鬼さん、ドラゴンさん」

リイン自身は自分がこれから行う事を間違っただけではない。いい。

なのに何故、疑わしい眼差しで見ているのだろうか。

「オメエ大丈夫なのかよ？」

「巻き添えになるかもしれないよ？」

二体の言葉はどうみても、リインが戦闘中の何かの巻き添えを食らうのではという意見だった。

「リインはそこまでドジじゃありません！大丈夫です!!」

強く二体のイマジンの想像を否定する。

「本当かよ？ウロウロしてこうベチツと叩かれたらオメエ即オダブツだぞ？」

モモタロスがまるで虫でも叩いて地上に落とすようなしぐさをする。

「「「ぶっ!!」」」

今まで黙っていたフォワードと操縦に集中していたヴァイスが一齐に噴いた。

キャロの肩に乗っていたフリードリヒは地面に伏して呼吸困難になっていた。

「じよ、上官をダシに笑うなんてひどいですう!!」

リインが涙目になって怒るが、みな笑いを止める事はしなかった。

この笑いがフォワード達の余計な緊張を解いてしまったことは言うまでもないことだ。

「こつちの空域は二人で担当する。新人達のフォローをお願い」
『了解しました』

飛行中のフェイトは、六課隊舎のロングアーチに向けて指示を送った。

(おんなじ空は久しぶりだね。フェイトちゃん)

「うん。なのは」

念話の回線を開いてきたなのはの言葉に、答える。

自分より低い位置になのはと彼女の後を追う新型ともいえるガジェットドローンの姿があった。

一人が乗つかれるくらいのもので、大きさを訓練で仮想敵として用いられるガジェットドローンに比べると大型だ。

イメージとして定着させるとすれば、『小型のステルスジェット機』か『尾のないエイ』といったところだろう。

「目的はレリックの奪取でそれ以外の排除、か」
ガジェットドローンの目的はわかっている。

「!!」

背後から音が聞こえてきたので、立ち止まらずチラリと見る。

先程自分の下を飛行していた同型のガジェットドローンが四機、陣形を組んで向かってきた。

(フエイトちゃん)

「わかってる。行くよ!!」

迎え撃つことにした。

デンライナーでもなのはとフエイトがガジェットドローンを撃墜している姿が映っていた。

「始まったわね」

「出てきているのは空飛ぶガジェットだけで、イメージは出てないね」
モニターから映し出されている映像にはイメージの姿はなかった。

だが食堂車にいる誰もが安堵の表情を浮かべていなかった。

「良太郎は今回イメージが出てきたとしたら、その契約者は六課の人間が追いかけてる連中と繋がってると思う?」

ウラタロスが今回イメージが襲撃してきた場合のイメージの契約者の正体を訊ねる。

「繋がっている可能性もあるし、繋がっていないともいえるね」
「曖昧やなあ。どうしたんや?」

キンタロスが座ったまま、顔だけを良太郎に向ける。

「この任務は言い換えればお宝争奪戦だからね。レリックを狙っているのが六課が追いかけている人達だけとは限らないよ」

「だから、繋がっている可能性もあるし繋がっていないともいえるって言ったのね」

良太郎の曖昧な返答の理由を聞いて、コハナは納得した。

「俺らの出番いらんな……」

「あれでリミッターかけてる状態なんだからね……」

キンタロスの素直な感想を聞きながら、十年で成長している別世界の魔導師二人の姿を見ながら良太郎は呟いた。

挟み撃ちの陣形をしいてきたガジェットドローンが光線を発射してきた。

なのはは魔法障壁を張るより、単純に避ける方が次の攻撃に転ずることができると判断すると、前進しながらもくるりと身体を捻ってからレイジングハート・エクセリオンを構えて桜色の魔力砲を発射した。

魔力砲は一直線に向かっていき、ガジェットドローンの一機に直撃して爆発した。

立ち込める爆煙を避けるようにして、ガジェットドローンが散開する。

(視界を封じられる事を恐れて避けた!?)

機械兵器にしては妙に人間臭い動きだと、なのはは感じた。

だが陣形が崩れてくれたのでこっちにしてみれば好都合だった。

くるりとターンして、後ろにいたガジェットドローン三機を睨んで標的とする。

レイジングハート・エクセリオンがカートリッジを排莖する。

『アクセルシューター』

飛行状態から体を切り替えて、レイジングハート・エクセリオンを両手で握りしめて、桜色の魔力球を展開させて一斉に発射する。

全てがガジェットドローンに向けて光線となって飛んでいく。ガジェットドローンの身体を貫いていく。

三機は同時に爆発を起こして、煙をたてた。

「よし。フェイトちゃんは……」

ライトニング隊長の安否を気遣おうとした時だ。

ガジェットドローンの一機が光線を放ってきた。

「大丈夫だよね」

そう短く結論付けてから、なのはは攻撃を仕掛けてきたガジェットドローンを迎撃した。

空にたちこめる爆煙を突き抜けて、フェイトはバルディッシュ・アサルトを両手で構えて両断していた。

『ハーケンフォーム』

告げると同時に、バルディッシュ・アサルトのシリンダーが回転してカートリッジを発動させていた。

「はあああああっ!!」

フェイトは稲光を纏った黄金の鎌刃を出現させて、大きく振りかぶる。

そして、薙いだ。

黄金の鎌刃がバルディッシュ・アサルトから発射され、黄金の輪となって飛んでいく。

縦一直線に並んでいるガジェットドローンに向かっていく。

前にいる一機を何事もないように縦に両断する。

両断されて爆発が起こる前に後ろの一機も勢いを殺すことなく両断していた。

黄金の鎌刃が消えると、爆煙が起こった。

「まだいる……」

リミッターをかけられているといっても、この程度なら問題ない。

「数が多い以上、無駄な動きはできない。効率よく倒さないで!」

フェイトはバルディッシュ・アサルトから黄金の鎌刃を出現させる。

そして、ガジェットドローンに向かって黄金の魔力を纏って向かっていった。

直後、一機が爆発した。

「いいなあ。なのはちやんとフェイトちゃん」

「俺達、もしかして出番なくなるかもしれないねーなあ」

リユウタロスとモモタロスがヘリの窓越しに外の風景を眺めながらぼやいていた。

「さあて新人ども。隊長さん達が空を抑えてくれてるのおかげで安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!？」

「はい!!」

ヴァイスの煽りともいえる台詞に、フォワード達は揃って返事する。

「おーおー。吠えてるぜ」

「ヘリのおじさん。どうしたんだろーねー」

ノリについていかなかったイマジン二体はヴァイスのヤンキー的なノリを一步退いたかたちで見ている。

「ちよつとノツてくれたっていいじゃないっすかあ!!そんな冷めた風に見える俺イタイ人じゃないですか!？」

「えー」

ヴァイスの抗議にイマジン二体は凄く嫌そうな顔をしていた。

ハッチの前ではなびく髪を押さえようとせずにスバルとティアナが降下ポイントを睨んでいた。

「スターズ3、スバル・ナカジマ!」

「スターズ4、ティアナ・ランスター!」

「行きます!!」

スバルとティアナがヘリから飛び降りた。

二人の身体が輝き、陸士隊服からバリアジャケットへと換装した。

「次、ライトニング!チビども準備はいいな!？」

しかしスターズの二人とは違って手間取っていた。

キャラが躊躇っているのだ。

「一緒に降りようか」

エリオが気遣うように右手をキャラの前に出した。

キャラは右手を見る。

「うん！」

覚悟を決めて、エリオの右手をとる。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

二人は手をつないだまま、ハッチを駆けだす。

「行きます!!」

ハッチから飛び降りると、二人が同時に輝きだす。

陸士隊服からバリアジャケットへと換装した。

フォワードが全員、リニアレールの屋根へ足を着けたのがモモタロスとリュウタロスの視界に入った。

「何か臭うな……」

臭いの発信源が空からなのかモモタロスは天井に向けて鼻クンクンをしていた。

「イマジンだね……」

リュウタロスはモモタロスが何の臭いを掴んだのか理解していた。

「ああ、面白くなってきたぜ！小僧、準備はいいか!？」

「もち!!」

モモタロスの気合の入った声にリュウタロスはパスを持っている右手を振っていた。

「マジですかい……。イマジン相手ですか？」

「あ？だから何だよ」

「いつもやってる事だしねー」

イマジンと戦える事に嬉々しているモモタロス達とは対照的に、ヴァイスは狼狽していた。

モモタロスとリュウタロスは準備運動をしていた。

「僕、エリオとキャロちゃん、フリードの方に行くね！」

「じゃあ、俺は青髪と銃の姉ちゃんの方だな」

互いの降下先を告げると、二体のイマジンは迷うことなくハッチの前に立つ。

「チームデンライナー、モモタロス！」

「チームデンライナー、リュウタロス！」

二体はフォワードの真似を始める。

「行くぜえ!!」

「行くよお!!」

飛び降りた。

*

訓練場でフォワードが円陣を組んで最終確認を行っているのが、なのはとモモタロスには見えた。

「まさか、はやてちゃんの予想が的中するとは思いませんでしたけどね……」

鶏のから揚げが刺さっていた串を、なのはは指揮棒のように持っていた。

「俺達にしてみれば願ったりかなったりだけだな。ただの付添だったら退屈でかなわねえ」

モモタロスは串を煙草のように口で銜えていた。

「エリオとキヤロ、フリードにとっては初めてで、スバルとティアナは二度目ですけどね。イマジンとの遭遇は……」

イマジンの存在を『実戦』という場で肌で感じた事は成長の材料になっっていると考えながら、なのははフォワードを見る。

「俺達以外のイマジンを見たから化けるってか?ありえるかもしれないけどよ。なのは、お前イマジンよりずっと恐ろしいのこの世にいるって知ってるか?」

モモタロスは良太郎を見ながら、なのはに質問した。

「え?一体なんですか?」

「ま、オメエが管理局を辞めるまでの俺からのシククダイってやつだ。頭のいいオメエだからすぐにわかんだろうよ」

モモタロスは『回答』を明確には出さなかった。

「さあ、パスなしのオメエの実力見せてもらおうぜ?良太郎」

誰にも聞こえない声で発した。

第二十話 「任務終了と模擬戦終了」

フオワード——スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒは円陣を組んでいた。

「いい？ 私達の今日の相手は間違いなく『最強』といってもいい人よ。出し惜しみなんてしてたら簡単に蹴散らされちゃうわよ……」

これから戦う相手がどんな存在なのかをティアナは全員に確認させる。

「ティア、質問」

「何よ、スバル」

スバルが拳手はできないが、心の内で拳手をした。

「野上さんとなのはさんってどっちが強いの？」

ティアナはスバルの胸中を察した。

彼女にとつて、高町なのはが『最強』の存在なのだろうと。

「直に戦っている姿を見ているわけじゃないから、何とも言えないわよ。ただ……」

「ただ、なに？」

「野上さんがリミッター状態なのはさんに勝るとも劣らないって考えておいた方がいいんじゃないしら」

明確な答えを発することができなかった事にティアナはむず痒さを感じるが、それが現在出せる回答なのだからと納得させることにした。

「あの、ティアさん」

拳手はできないが、心の内で拳手したのはエリオだ。

「はい、エリオ」

「もし、僕達がこの模擬戦で良太郎さんに勝つ事が出来れば僕達はその……」

「なのはさんに勝つ事も夢じゃないって事になるわね」

言いながらも、そういう解釈に直結しているのだとティアナは確信

している。

「あの……」

形式化しているのか次に、心の内で挙手をしたのはキャラだ。

「いいわよ。キャラ」

「良太郎さんは変身するんでしょうか……」

キャラの一言は、全員をさらに緊張させるに十分だった。

失念していたわけではないが、野上良太郎は仮面ライダー電王に変身できるという事を再認識する。

対比も『リミッター状態のなのは』電王』ではなく、『リミッター状態のなのは』(?) 良太郎』だという事もだ。

「どうかしらね。変身した時点で模擬戦終了になるだろうけど、『実戦』という事を考慮したなら電王になった方がリアリティはあるわね……」

キャラの質問に対しても、どっちつかずな返答になる事にティアナは自身の『読み』のなさを悔やむしかない。

「いい？ 相手が野上さんでも私達は以前の戦いで実戦の中でイメージの存在を感じ取ったのよ。知らないと知ってるでは大きな違いがあるわ」

それが自分達の自信になるのだと、自分に言い聞かせると同時に三人にも告げた。

顔を上げて、準備運動をしている良太郎を見る。

(私達がこれから戦う相手は……。あの二人に勝るとも劣らない人……)

ごくりとティアナは固唾を飲んだ。

*

へりから飛び降りて、無事にリアレールの屋根に足を着けていたフオワードとモモタロス、リュウタロス。

ラインがへりから『飛び降りる』という表現が似合わないくらいのゆっくりした降下速度でリアレール屋根まで降りた。

バリアジャケットのデザインが自分達が想像しているものと違っていた。

スバル、ティアナのバリアジャケットは、なのはのバリアジャケットに用いられるデザインやカラーリングがされていた。

エリオ、キャロのバリアジャケットはフェイト・T・ハラオウンのバリアジャケットに用いられているデザインやカラーリングがされていた。

リインがその事を蛇足とは思いながら説明しておいた。

任務に支障がきたす程の事になるとは思えないが、一応念のためである。

「さあ、任務スタートですよ!!」

リインは二手に分かれた四人と二体と一匹に告げた。

「スバル、感動は後!!」

バリアジャケットのデザインが、なのはによるものだと感激していたスバルをいち早く現実を目を向けていたティアナが注意した。

リニアール内部からボコボコと屋根を持ち上げているものがあった。

「おいでなすったぜー!」

モモタロスが何が来るかまではわからないが、少なくとも自分達の味方でないという事だけはわかった。

下から青い光線が発射された。

屋根を破って出てきたガジェットドローンが出てきた。

「シュートオオオ!!」

ティアナがアンカーガンに替わる新型デバイス——クロスミラーージュを構えて引き金を絞る。

オレンジ色の魔力弾が銃口から発射される。

ガジェットドローンは防御としてAMFを展開する。

しかし、魔力弾はAMFを侵蝕していく。

ガジェットドローンのAMFがガラスのように砕けて、魔力弾が直撃した。

爆発して、煙が立った。
それが戦闘開始の合図だった。

「うおおおおおお!!」

連なるようにしてスバルが穴の開いた屋根へと突入していく。
降下しながら右腕を振りかぶって、リボルバーナックルを回転させる。

寝そべって触手のような腕をウネウネとさせているガジェットドローンに向けて叩きつける。

グシャリと拳がめり込み、ガジェットドローンの全体がバチバチと火花を散らしていた。

爆発するが、スバルは残骸を掴んだままで新型ローラー——マツハキヤリバーを以前に使っていたローラーと同じ要領で使う。

ローラーが回転して、狙いをつけるようにして内部に潜伏している一機を睨む。

睨まれたガジェットドローンが腕を伸ばして、スバルに攻撃を仕掛ける。

「りゃああああああ!!」

襲い掛かってくる腕を避けながら、スバルは右手で掴んでいる残骸を腕を蜘蛛のようにして動かしているガジェットドローンに向けて投げつける。

直撃してガジェットドローンは爆発して、爆煙が立つ。

まだ破壊されていないガジェットドローンがスバルに向かって青い光線を放つ。

中腰でやや前傾の姿勢になってマツハキヤリバーを走らせる。

ガジェットドローンの攻撃をかわしながら、走行場所を壁へと変えていく。

走りながらもリボルバーナックルを構えてナックルスピナーを回転させて、次の攻撃を繰り出す準備をする。

対面には青い光線を放っている天井に張り付いているガジェットドローンに向かっていく。

「うん？」

マツハキヤリバーの言っている事は間違いではない。

ただ何かが違うようにも思えた。

そのように思えたのは、上官であるのはと専用デバイスであるレイジングハート・エクセリオンのやり取りを見ているからかもしれない。

互いを尊重しているように思えたのだ。

自分とマツハキヤリバーの関係はまだそこまで行き着いていない。

(ま、当然か。まだ会ったばかりだもんね)

そのように自身を納得させた。

「うん。でもマツハキヤリバーはAIとはいえ、『心』があるんでしょ。だつたらちよつと言ひ換えよう」

前傾姿勢になっていたスバルはゆつくりと上半身を起こす。

髪が風でなびく。

「お前はね。私と一緒に走るために生まれてきたんだよ」

先程開けてしまったリニアレールの穴を見ながら言う。

『同じ意味に感じます』

「違うんだよ。色々〜！」

マツハキヤリバーの即答に、スバルも負けじと否定した。

『考えておきます』

しばらくしてからマツハキヤリバーが返答した。

多分今までの言葉の中で『心』が入っているようにスバルは思えた。

「うん！」

ガジェットドローンを数機倒しただけなので、任務はまだ終わっていない。

(ティアナ。どうですか?)

リニアレール内は必要最小限の照明しか照らされおらず、周囲は薄暗かった。

「駄目です。ケーブルの破壊、効果なし！」

クロスミラー・ジユで一機破壊したティアナは念話の回線を開いてきたリインの質問に返した。

（了解。車両の停止は私が引き受けるです。ティアナはスバルと合流してください）」

「了解！」

リインとの念話の回線が切れて両手に握られていたクロスミラー・ジユのうち、左手に握られていた方が消ええた。

『ワンハンドモード』

クロスミラー・ジユがそのように告げた。

「おおっ。左手に握られた方が消えた!? 手品かよ!？」

現在、リニアレール内にいるのはティアナだけではない。

モモタロスもいるのだ。

「モモタロスさんの武器と同じ原理と思えばいいと思いますよ」

「ふーん」

モモタロスは愛剣であるモモタロスオードを見てから頷いた。

「で、モモタロスさん」

「何だよ? 銃の姉ちゃん」

「銃の姉ちゃん? ああ……」

ティアナは自身の呼称の要因を探るように見るが、右手に握られているクロスミラー・ジユを見て納得した。

「イマジンの臭いってまだあります?」

「ん? あー、するにはするんだけどな。こうして襲い掛かってこねえところからするとオメエ等がコミックだっけか? それを狙ってる可能性はあるぜ」

（襲い掛かってこない? イマジンの精神は確か人間と遜色ないって言ってたから漁夫の利を狙う事も考えられるわけね）

モモタロスの話を聞いて、ティアナは周囲を警戒しながら考える。

「レリックですよ」

ティアナは真剣な表情のまま、間違いを指摘した。

「急いでスバルと合流しましょう」

『了解』

「おう」

自然とそのような指示を出してしまったが、クロスミラージュはともかくモモタロスも特に何も言わなかったことに、ティアナは内心ほつとした。

場所は現場から機動六課司令室へと変わる。

『スターズ F フォワード 交戦中。ライトニング F 交戦中』

現場にいるラインの報告がコンソールを入力しながらモニタを見ているシャリオ・フィニーノの耳にも入っていた。

「スターズ1、ライトニング1。制空権獲得」

「ガジェットII型。散開開始。追撃サポートに入ります」

隣にいるアルト・クラエツタが敵方の動きを報告する。

司令室のドアが開き、八神はやたと桜井侑斗が入室してきた。

「ごめんな。お待たせ」

軽く詫びのあいさつを入れるはやてに対して、侑斗は軽く頭を下げて入室してきた。

「八神部隊長。桜井さん」

グリフィスが喜色と安堵が混じった表情を浮かべて迎えてくれた。

「お帰りなさい」

「ここまでは比較的順調です」

はやては席に着きながらグリフィスの経過報告を聞き、シャリオの挨拶には軽く手を振って返した。

「イマジンの存在は？」

侑斗がこの任務での一番の厄介者を訊ねる。

「ライン曹長からの報告ですと、モモタロスさんが言うには『いる』そうです」

「フィニーノ通信主任」

「はい、何ですか？」

「このモニターじゃ、敵イマジンとモモタロス達を分別することは？」
「今のところは無理ですね。モモタロスさん達が私達の味方といって

もマーキングもされていない以上映し出されるとしたら敵方のイマジンと区別がつかないんです」

「せめて、仮面ライダー電王になってくれれば判別は可能なんですけど……」

シヤリオとアルトが侑斗の疑問に答えてくれた。

ちなみにアルトが見ているモニターのリニアレールに映し出されている反応はガジェットドローンとフォワード四人だけでありイマジン二体の反応は映し出されていないかった。

「ライトニングF、八両目突入……」

シヤリオが見ているモニターにはリニアレール八両目がデジタルワイヤーフレームで映し出されており、そこには巨大な丸型のガジェットドローンが待機していた。

「エンカウント、新型です!!」

「ふわーあ」

リュウタロスが間の抜けた欠伸をしながら、愛銃のリュウボルバーを片手に持ってエリオとキャロの後ろを歩いていった。

「暇だな〜」

今回現場に出れば退屈しのぎになると思ったのだが肝心のイマジンは襲い掛かってこないし、ガジェットドローンは撃退してはいけなさと良太郎に言われていた。

さすがに十二両目からスタートして今の八両目になるまで、一回も身体を動かしていないと退屈で仕方がない。

「今までよりおっきいのが来た」

ガジェットドローンなので、やっぱり撃退はエリオとキャロ、フリードリヒに一任するしかない。

自分達の前にいるガジェットドローンが攻撃を繰り出してきた。

I型のような細かい触手じみた腕ではなく、このガジェットドローンが繰り出してきた腕はベルトコンベアを伸ばしたような太い腕だった。

二人と一体はその直線的な攻撃をしっかりと見切って後方へと下

がった。

後方へと下がったキャロはそのまま攻撃態勢へと入る。足元には桃色の魔法陣が展開される。

「フリード。ブラストフレア!」

ガジェットドローンに向けて放つように、キャロはフリードリヒに命じる。

フリードリヒは口を開き、炎を練り上げて火炎球を構築させていく。

「キョクー」

一定の大きさになると、そのまま吐き出した。ドオンと放たれる。

しかし、ガジェットドローンは火炎球を器用に腕で弾き飛ばした。弾き飛ばされた火炎球は山岳に向かっていって直撃した。

爆煙が立った。

「うおりゃあああああ!!」

ストラダーの先端に稲光を放出させて、エリオはリアール内にいるガジェットドローンへと向かっていった。

落下の勢いと攻撃を繰り返すタイミングを狙って、ストラダーを一段に構えて振り下ろす。

ガジェットドローンの機体に先端は当たるが傷一つ、破片一つも飛び散らなかった。

「か、硬い!!」

エリオは苦い表情を浮かべてしまう。

ガジェットドローンがAMFを展開させる。

それだけでストラダーの先端の稲光が消滅し、キャロの足元の魔法陣も消滅した。

「あ、消えるヤツだ」

後ろで見ていたリユウタロスがガジェットドローンが何をしたのかを自分なりの解釈で口にした。

「AMF!?!」

「そんな!?!こんな遠くまで……」

二人にしてみれば訓練外の出来ことだった。

「助けちゃダメなのー?」

リュウタロスが上空のデンライナーに顔を向けた。

デンライナー内部の良太郎、ウラタロス、キンタロス、コハナはと
いうと。

「これってマズイ状態じゃないの!？」

「助けた方がいいんだけど、それをしたら……」

コハナとウラタロスは良太郎がどのような指示を下すか待つ。

「助けたら間違はなく、あの二人の顔を潰すことになるやろな……」

キンタロスはここで助けに入れば、二人にしこりを残す結果になると想像する。

「リュウタロス。二人は弱音を吐いた?」

良太郎はモニターに映るリュウタロスに、一つの質問をした。

『ううん。全然、まだ頑張れるみたい』

モニターのリュウタロスは首を横に振った。

「だったら、大丈夫。リュウタロスはそのままだイメージが出てくるまで待機してて」

『ええ。まだ戦っちゃダメなの?』

良太郎は二人にまだ闘志がある以上、割り込むべきではないと言
う。

「モモタロスが言うには、イメージがいるんでしょ?」

『うん。まだ見てないけどね』

「まだ見てない? 襲い掛かっても来ないってこと?」

『うん』

リュウタロスの言葉に、良太郎は手を顎に当てて思案の仕草をす
る。

「どうしたの? 良太郎」

ウラタロスが見る。

「イメージの目的はレリックじゃないのかもしれない……」

「[[?]]」

良太郎の思案の結果に二体と一人が首を傾げる。

「仮にモモタロスとリュウタロスが参加しなかった場合、イマジンにしてみれば好都合になると思わない?」

「一番の脅威がないから?」

ウラタロスの回答に良太郎は頷く。

「イマジンにしてみればフォワードの四人を倒すことは決して難しいことじゃない。なのにそれをしないって事が気になってね」

「イマジンの目的がレリックなら手に入れる前でもあとでも大して差はないってことよね?」

イマジンがフォワードに倒されるという仮説は彼等にはない。

それは過小評価ではなく、現実だからだ。

四人の戦闘能力ではイマジンと戦っても、一分は持たないだろう。最悪の場合、出会った直後に最期を迎える可能性は十分にある。

「モモタロス。イマジンの臭いはずっと同じ場所?」

モニターをリニアレール内に切り替えてスターズと行動しているモモタロスに訊ねてみる。

『ああ。そんな感じだな。嗅ぐ度に臭いが強くなってって事はよ。俺達が近づいている証拠だろうな』

「そっか。ありがとう。モモタロス、くれぐれも……」

『イマジンと出くわしたらアイツ等を守れってんだろ。わかってるよ』

良太郎はモモタロスが自分が何を言いたいのか、理解してくれていてたようだ。

「七両目にイマジンが潜伏していて、動く気配が全くない。となると、結論は一つしかないね」

「何や?」

腕を組んでいるキンタロスが訊ねる。

「イマジンの目的はレリックじゃなくて、それを確保しようとしている僕達だよ」

「目的はなんなの？」

「僕等を倒して名を上げようってのが一番最初に出てくる動機だね」

「俺等もそれだけの価値があるほど、有名になってもたわけやな」

結論を出した良太郎に替わって、ウラタロスとキンタロスが説明した。

エリオは力のある限り、ガジェットドローンと力比べをしていた。

といつても、体格差から生じる重量差は当然存在するので彼の方が不利になろうとしていた。

「く、ううう……」

ストラダーダを横に構えてガジェットドローンが繰り出す両腕の攻撃を防いでいた。

かなり苦悶の表情を浮かべていた。

踏ん張っている両脚が徐々にではあるが、後方へと下がってきている。

「あ、あの……」

屋根から不安の感情隠さずにキャロがエリオに声をかけてきた。

弱音を吐くわけにいかない。

(僕が弱音を吐いたら、あの子はもっと不安になる……)

押し掛かってくる力にぶつかりながらもキャロを気遣う。

「だ、大丈夫!!任せて!!」

短いが、エリオが今できる精一杯の強がりだった。

ガジェットドローンが何かを仕掛けてくることが見えたエリオは力比べをやめて飛び上がる。

エリオの予想通り、青い光線を放ってきた。

光線はエリオを追うかのように機体を傾ける。

光線の威力は凄まじく、天井がドロドロに溶解していた。

ガジェットドローンを飛び越えて、空中で体を捻りながら向かい合うようにして着地する。

「!!」

エリオの反応よりも速く、ガジェットドローンが巨体に似合わず一

気に間合いを詰めてきた。

すかさず、青い光線を今度は一度に三発放つ。

避けるために後方へと下がるが、バランスを崩して横に伏してしま
う。

それでもガジェットドローンが攻撃を緩める事はなく、ひたすら光
線を放ってくる。

エリオは転がりながら、避けていく。

(諦めるな。必ず、必ず勝機があるはず!!)

劣勢に追いやられながらも、エリオの瞳に『諦め』は宿っていないかっ
た。

ガジェットドローンが右腕を振り上げてエリオに向けて叩きつけ
る。

「うわあああああああ!!」

転がって避けていたエリオは吹っ飛ばされて、壁へと叩きつけられ
た。

「ぐっ」

ズルリとエリオは滑るようにして崩れ落ちた。

(っ、強い……)

眼前に立つ相手をエリオはまだ睨んでいた。

エリオの苦悶の声は外にいるキャロとフリードリヒ、リュウタロスの
の耳にも入った。

キャロはこの中で、エリオを助ける事ができるリュウタロスを見
る。

「キャロちゃん?」

「あ、あの……」

キャロはリュウタロスに助けを求めようとするが、上手く口にでき
ない。

「キャロちゃん。それ以上は言っちゃダメだと思う」

リュウタロスはキャロの隣まで歩んで、座り込んだ。

「え?」

キヤロがリュウタロスに顔を向ける。

「よくわかんないんだけどね。ここで僕がキヤロちゃん達を助けたらダメになるって思うんだ」

リュウタロスは精一杯考えながら言っているように、キヤロには思えた。

「リュウタロスさん……」

「キユクー」

パタパタと翼を動かしているフリードリヒが励ますように鳴いていた。

「フリード……」

キヤロにはリュウタロスの言いたい事が理解できた。

ここで自分の力を信じずに、他人の力に頼りきったら何にも出来なくなってしまう事を。

一生、自身の力に怯え続けて逃げ続ける事になる事も。

その呪縛を解くには、自身の力を信じて向き合うのは今しかないという事もだ。

(今しか……今が……その時……)

キヤロが決意しようとしたとき、目の前の景色が変わった。

「確かに凄まじい能力を持つてはいるんですが、制御がろくにできないんですよ」

「竜召喚だつてこの子を守ろうとする竜が勝手に暴れまわるだけで、とてもじゃないけどまともな部隊で働けませんよ」

「せいぜい、単独で殲滅戦に放り込むしか……」

キヤロの目に映るものは床から天井まで真っ白の空間で、陸士隊服を着た男性が数人と執務官服を着た一人の女性が対面の位置で立っていた。

相棒のフリードリヒはここにはいない。

キヤロが一人で椅子に座っていた。

(これはフェイトさんと初めて逢った時の……)

現在のキャラが過去のキャラを見下ろしている状態になっていた。この時にはこの何とも厄介者の紹介はあまり気にしてはいなかったが、今になると結構グサリと来るものだ。実際、楔になっているのは確かだからだ。

「ああ。もう結構です。ありがとうございました」

自分を引き取りに来た女性執務官は男性局員の説明を強引に止めた。

(フェイトさん。怒ってた……)

今振り返ってみると、あの時の女性執務官——フェイトの言葉の中には『怒り』が混じっていた。

見ず知らずの人間のためにこの人は怒っているのだ。

「では……」

男性局員の予想はフェイトが引き取りを『拒否』するものと予想していた。

この時の自分も、同じ考えだったからだ。

しかし、

「いえ、この子は予定通りに私が預かります」

その答えは、その場にいる男性局員達と自身の予想を裏切るものだった。

「え？」

決して大きな声量ではないが、そのような声を発してしまった。

外は雪景色。

偏境と呼ばれても不思議ではないここでは雪が降って、積もる事は珍しいことではなかった。

「わたしはどこに行けばいいんでしょう？」

この時はフェイトの人柄を知らないわけであって、どこかにたらい回しにされるのかもしれないと思っていた。

実際、今までがそうだったのだから仕方がない。マフラーを巻いてくれているフェイトが言った。

「それは君がどこに行きたくて、何をしたいかによるよ？」

「キャラはどこに行つて、何をしたい？」

そのように言われても、わからなかった。

（フェイトさんは、わたしにまず最初に考える事の大切さを教えてくれたんだ……）

今までは、そのような事を考えたことはなかった。

自分がいてはいけない場所があつて。

自分がしてはいけないことがあるだけだった。

「うわああああああ!!」

エリオの苦悶の声が、キャラを現実へと引き戻した。

ガジェットドローンがエリオを掴んで、壁に叩きつけていた。

メリメリメリと腕がリニアールの屋根を破っていく。

そして、空に向けてエリオを放り投げた。

エリオに反撃する意思はない。

正確には意識が飛んでおり、反撃できないのだ。

宙に浮いたエリオはそのまま重力に逆らうことなく、落下していく。

（死んじゃう……）

フェイト以外で自分を気遣つてくれた少年が。

自分と同じようにフェイトから仮面ライダー電王の話をかされ

ている少年が。

(エリオ君……)

心中で名を呼んでも意味はない。

キャラの心の中にかかっている枷がビシビシと亀裂が入ろうとしていた。

(助けたい。助けたい！助けたい!!)

枷に更に亀裂が入っていく。

あと一押しで完全に砕け散る。

(エリオ君を助けたい!!)

決意と覚悟が完全に一致した時、キャラは駆け出してリニアレールから飛び降りた。

「エリオくううううん!!」

キャラの行動に、誰もが驚きの表情を隠せなかった。

だが、これは実をいうと『正解』なのだ。

ガジェットドローンと微妙な距離を取っている限り、AMFの干渉範囲内におかれ存分に力を発揮することができない。

発揮するためには干渉範囲外に出れば、存分に使える。

もつともキャラはそこまで考えての行動ではないが。

(守りたい。わたしに笑いかけてくれる人達を！)

キャラとフリードリヒは落下していく中で、巧みに体を動かしてエリオのそばまで寄っていく。

「自分の力で守りたい!!」

ガシツとキャラの右手がエリオの空いている左手を掴んだ。

キャラのデバイス——ケリユケイオンが桃色に光り輝いた。

まるで、抑圧されていた力を解き放つように。

桃色の魔力の球にキャラとエリオとフリードリヒが包み込まれる。気を失っているエリオを優しく抱き留める。

「あ、いえそんなこつちこそ……」

キャロが赤面して謝罪する反応に、エリオも伝染してしまい同じように顔を赤くしてしまう。

リニアレール内にいたガジェットドローンが両腕を上手く使って外へと出てきた。

「フリード、ブラストレイ!!」

気を取り直したキャロはフリードリヒに命じる。

ケリユケイオンから桃色の魔力光が飛び出して、フリードリヒの足元へと飛んでいく。

口元には、火炎を凝縮した球体が練り上げられていく。

フリードリヒの足元には、桃色の魔法陣が展開されていた。

「ファイア!!」

キャロの掛け声とともに、フリードリヒは炎の球をガジェットドローンに向けて放つ。

ブラストフレアとは比べものにならない魔力量と威力がこもった炎だ。

しかし、ガジェットドローンに直撃はしたものの効果的なダメージは得られなかった。

「やっぱり硬い……」

「あの装甲形状じゃ砲撃じゃやり辛いよ。僕とストラーダがやる」
「うん」

互いに次に何をやるかは意図が見えていた。

「我が請うは青銀の剣、若き槍騎士の刃と祝福の光を」

左手のケリユケイオンが輝きだす。

「猛きその身に力を与える祈りの光を」

右手のケリユケイオンが輝きだす。

両腕を水平に広げると同時にケリユケイオンにこもった魔力が球

となつて、キャロの両掌の前で浮かびあがっている。

「いくよ、エリオ君！」

「了解、キャロ！」

フリードリヒの頭部辺りでエリオはすでに準備を完了していた。

「たあああああああ!!」

エリオが駆けて、フリードリヒから飛び立ってガジェットドローンへと向かう。

「ツインブースト、スラッシュ&ストライク!!」

告げた直後に、キャロは左右の魔力球をエリオに向けて投げつけた。

ストラーダにキャロの補助魔法が伝導されていくのがエリオにはわかった。

(これならやれるかも、いや、やってみせる!!)

ストラーダの先端に桃色の魔力光が纏われる。

大きく振りかぶる構えに転じる。

こちらに向かってくるガジェットドローンの二タイプの腕を薙ぎ払うようにして斬りつけると、桃色の先端は伸びて鞭のように柔らかくしなりながらも腕を切断していった。

リニアレールの屋根に両足を着地させると、桃色の先端は縮めて元の大きさに戻っていた。

直後に、ストラーダからカートリッジが二本排莖される。

足元には金色のベルカ式魔法陣が展開された。

雷がバチバチと魔法陣から出現される。

ストラーダを『刺突』の構えにする。

「一閃必中!!」

やや前傾姿勢になって叫ぶと同時にストラーダの噴射口から噴射される。

ザシュツとストラーダの先端からガジェットドローンに突き刺さ

る。

尖端は完全に貫いており、証拠として桃色の尖端がガジェットドローンの背部から生えていた。

「せえやああああああ!!」

エリオは突き刺したストラダーをそのまま身体のバネを生かして、持ち上げていく。

ガジェットドローンの身体がケーキを切るようにして切断されていく。

やがて頭頂部まで切り上げると、ストラダーの姿が全て露出した。それはガジェットドローンが両断されたことを意味していた。

エリオの背後ではガジェットドローンが機体維持をできずに爆発して、爆煙を起こした。

「やった♪」

フリードリヒに乗っているキャロが喜びの声を上げた。

「やったね♪エリオー!」

爆煙の中から出てきたのはリュウタロスだった。

「リュウタロスさん」

「あ、リュウタロスでいいよ。キャロちゃんもフリードもすごいね〜」
大きな翼を羽ばたかせているフリードリヒに乗っているキャロを見る。

「僕も負けてられないや!」

そう言うと同時にリュウタロスはリニアレール内に入り込んだ。

「リュウタロスさん、その……」

「ん、どうしたの? キャロちゃん」

キャロがフリードリヒから降りて、リニアレールを覗き込んでいた。

「ありがとうございます!」

「ん? 僕何にもしてないよ。それにリュウタロスでいいよ。あとエリオと話す感じていいからね」

「じゃあ、リュウタ君でいい?」

リュウタロスは右親指をぐつとサムズアップした。

『了承』という意味だ。

「リュウタロス、頑張つて！」

エリオの掛け声をリュウタロスは振り向かず、手を挙げて応じた。その直後、爆発音がエリオの耳に入った。

エリオ、キャロは顔を見合わせてしまったが不安を感じる事はなかった。

「あの二人には救援はもう必要ないですから、こっちはこっちで行くですよ」

ラインの指示でスバル、ティアナ、モモタロスはリニアレール内部に入り込んで、レリックのある七両目まで向かっていた。

七両目車両手前で足を止める。

「ここにレリックがあるですよ」

「んでもってイマジンまでいやがるぜ」

ラインとモモタロスがスバルとティアナに告げる。

この二つの情報は事前に分かっていた事なので、二人が驚くことはない。

「とにかくよ、俺がイマジンと戦ってる間にオメエ等はトリックを守ればいいってことだな」

「モモタロスさん、レリックですよ」

指摘したのはスバルだ。

「細けえ事は言うなよ青髪。あんまり気にしてっと赤チビみてえに成長できねーぞ？」

モモタロスの一言に、三人が思わず吹き出してしまった。

ここにヴィータがいたら全員がグラーフアイゼンで叩かれていただろう。

「んじや、行くぜえ!!」

モモタロスは七両目へと通じるドアを蹴破った。

ドアが七両目内へと吹っ飛んでいくが、真つ二つに斬り落とされた。

ドアが左右にガランという音を立てる。

「来たか。待ちくたびれたぞ」

そこには二体の同型のイマジンがいた。

モモタロスと向き合う形になっているイマジンの両手には両刃の剣が握られていた。

「あ、モモタロスー」

向かいの入り口からリュウタロスが単身で入り込んできた。

「小僧、チビ二人はどうしたんだよ？」

「外にいるよ。で、こいつ等が僕らの相手？」

「だろうな。ちようど二匹いるしよ。一匹ずつと行こうぜ？小僧」

「んじゃ、僕はコイツと!!」

リュウボルバーを構えて、リュウタロスは対面にいる二丁の拳銃を持ったイマジンに銃口を向けた。

「スバル、ティアナ。戦闘が始まる前にレリックを回収するです」

「了解!!」

この間、イマジン二体が妨害に出る事は一切なかった。

この事からこの二体はレリックを目的にしているわけではないという事がわかる。

七両目には凄まじいまでの殺気が満ちていた。

二体のイマジン——隼型のペレグリンイマジンがそれぞれの武器をモモタロスとリュウタロスに構える。

直後、七両目の天井が爆発した。

「行くぞ。仮面ライダー電王!!」

ペレグリンイマジンが一斉に攻撃を仕掛けてきた。

二刀流のペレグリンイマジンがモモタロスとの間合いを詰めて、切りかかる。

右の剣でモモタロスの逆袈裟を狙う。

モモタロスオードで受け止めるが同時に、空いている左の剣でモモタロスの右薙ぎに狙いをつけて横一文字に斬りつけてくる。

「くっ!!」

両手持ちから片手持ちに切り替えて、右薙ぎに狙いをつけている剣

を右手で握りしめた。

「なっ!?この連撃に反応した!?!」

「おいおいこの程度、戦いだったらよくある事だろうがよ」

攻撃を二撃とも受け止められた狼狽するペレグリンイマジンに対して、モモタロスは平静だった。

掴んでいた剣を握りしめてベキリとへし折った。

フリーエネルギーで構築されているため、折れた剣先は地面に刺さると粒子となった。

モモタロスオードを押し出す。

モモタロスは握っている愛剣を左手から右手に持ち替える。

左手を前に出してクイツクイツとする。

「まさかこれで終わりじゃねえだろうな?俺と戦りにきたんだろ……。だったら来いよ。全力でな」

モモタロスは余裕で挑発する。

「ぬかしたなあああ!!」

殺気を漲らせて、折れた剣をフリーエネルギーを急速に再構築させてから切りかかろうとする。

だが、

「オラアアア!!」

ベシヤツとペレグリンイマジンの顔面にモモタロスの右足が直撃して、仰向けになって倒れる。

「どうも調子狂っちゃうなあ……」

剣を用いたとしても、使える手段はとことん使う事が黙認されるのが戦いだ。

だが、眼前のイマジンはどうも今まで戦ってきたイマジンの中でも、物足りなさを感じる。

最初の二撃はいいものだったことは確かだ。

だが、それでも今の自分にしてみれば簡単に対処ができる。

「うーん」

モモタロスにしてみれば今まで戦ってきたイマジンや仮面ライダーや魔導師や騎士の方がよっぽど強いように思えた。

「オメエ、弱くはねえけど俺の敵じゃねえな」

モモタロスは思ったことをストレートにぶつけた。

「な、何だと……」

「それともそれで本気かよ？ だったら悪い事言っちゃまったな。悪いな」

「殺してやるうううう!!」

倒れていたペレグリンイマジンは起き上がり、背中から閉じていた翼を広げた。

足で屋根を蹴ってから、翼を羽ばたかせて空へと場を移していた。

「行くぞおおお!!」

二振りの剣を構えて、そのまま急降下する。

剣を前にして突き出しているところからして、『刺突』が来るのは丸わかりだった。

「……………」

ひらりとモモタロスは避ける。

ペレグリンイマジンはまた空へと戻って体制を整える。

「悪いけどな。オメエとじゃれてる暇はねえんだよ。今度はこっちが本気で行かせてもらうぜ!!」

モモタロスは宣言すると、自らのフリーエネルギーでデンオウベルトを出現させてカチリと腰部に巻きつける。

モモタロスオードを突き刺して、モモタロスはパスを取り出す。

「変身!!」

『ソードフォーム』

パスをセタッチしてデンオウベルトの電子音声が発して、モモタロスは黒と銀色が目立つ電王プラットフォーム(以後プラット電王)へと変わる。

胸部あたりに赤色をメインカラーとしたオーラアーマーが出現し

て、三百六十度回転してから装着される。

最後に頭部に桃をモデルにした電仮面が走り、定位置になると停止して。パカッと横に割れて『仮面』の形状となる。

全身から赤いフリーエネルギーが噴出して風のように起こる。

左腕を前に出して、右腕を斜め後ろに構えて歌舞伎役者のようなポーズを取る。

「俺、別世界でも参上!!パート3!!」

仮面ライダー電王ソードフォーム（以後：ソード電王）がミッドチルダの大地に足を踏んだ。

「テメエの望み通りに仮面ライダー電王に変身してやったぜ」

ソード電王は言いながら、腰部に収まっているデンガツシヤーを手にして、カチャカチャと組み上げていく。

左側パーツを横連結させてから、右側パーツを上下で挟む。

フリーエネルギーを注ぎこむと『武器』としての大きさになって赤色のオーラソードが出現した。

「さあ、行くぜ行くぜ行くぜえ!!」

屋根の上を少し助走してから、足に力を入れて飛び上がる。

ペレグリンイマジンより高く飛び上がったから、右腕を振りかぶって脳天に狙いをつけて素早く振り下ろす。

ベシヤツという音がして、ペレグリンイマジンは落下してリニアレールに落ちる。

対照的にソード電王は見事に着地する。

「ぐ、くっ……」

起き上がろうとするペレグリンイマジンをソード電王は攻めない。

「貴様、何故攻撃せん!?!」

「オメエ、俺と対等だとも思ったのかよ?俺が攻撃したのはたった二回だけ?それでそんなへロへロじゃ話にならねえよ」

ペレグリンイマジンが怒りがこもった瞳でこちらを睨みながら、起き上がる。

「じゃあ、締めと行くぜ!!」

ソード電王は間合いに入り込んで、Dソードを両手で下段に構えてからペレグリンイマジンの逆風に狙いをつけて掬い上げる様にして振るう。

剣戟ではなく、振るった際に生じる風圧で浮かび上がる。

ほとんど無防備状態なので虚を突かれてはどうしようもないだろう。

ホバリングをすることは可能だが、今のペレグリンイマジンには翼を飛ばたかせるだけの余力もなかった。

というより、唯一の持ち味である『空中戦』もあっさりと破られてしまったのだ。

彼には他に手がなかった。

心が折れてしまっているのだから。

『フルチャージ』

パスをデンオウベルトにセタッチしてから、放り投げたらコハナに何を言われたものかわかったものではないので、きちんとしまいこむ。

両脚にぐつと力を入れてから、飛び上がる。

飛び上がった位置は宙に浮いているペレグリンイマジンと同位置だ。

フルチャージしたことによって、Dソードの刀身であるオーラソードにはフリーエネルギーが伝導されており、バチバチと稲光が纏われていた。

「俺の必殺技……」

ソード電王は空中で八相の構えを取ってから、振り上げる。

「空中殺法おおおお!!」

袈裟から右切上と斬りつけてから右薙ぎから左薙ぎへと真横に斬りつけてから、逆袈裟から左切上へと斬りつけてから逆風から唐竹へと掬い上げる様にして斬りつける。

最後に唐竹から逆風へと縦一閃に斬りつけた。

「言っただろ。オメエは俺の敵じゃねえってよ」

ソード電王が告げた直後に、屋根に着地するとペレグリンイマジンは攻撃に耐えきれずに爆発した。

空中で起こった爆発を見て、二丁の銃を構えたペレグリンイマジンは動揺の色を隠せなかった。

「まさか兄者が……」

「モモタロスがやつつけちゃったんだね」

リュウボルバーを構えてから、リュウタロスは引き金を絞る。

ドオンという音を響かせてフリーエネルギーの弾丸が発射される。

リュウボルバーはDガンに比べると、精密な射撃には向いていないのが欠点だ。

対してペレグリンイマジン（弟）の銃は手ごろな大きさだ。

あの大きさなら持ち手の負担にはあまりならない。

発砲に生じる反動で無防備状態になることもないだろう。

「よそ見してる暇ないんじゃない？オメエの攻撃ってさ、僕にひとつも当たってないもんね」

リュウタロスの言う通り、ペレグリンイマジン（弟）（以後：ペレグリン弟）の攻撃は一発も当たってはいない。

単純に射撃の腕が下手というのもあるが、リュウタロスが巧みに避けているというのもある。

「おのれえええええ!!」

逆上したペレグリン弟が二丁の銃を構えて、リュウタロスに狙いをつけた引き金を絞る。

無数のフリーエネルギーの弾丸が発射される。

リュウタロスは右へ左へ斜めへ上へ下へと巧みに避けていく。

「やーいやーい。へったくそー♪」

弾丸を避けながら、即興で作った歌まで歌っておちよくっていた。

更にムキになったペレグリン（弟）が発射を放つ。

リュウタロスはそれらを先程同様に簡単に避けていた。

「おしーりペンペン♪」

後ろを向いて、お尻を叩きながら挑発までしていた。

「ん？チャージが必要か……」

いくらフリーエネルギーの弾丸といえども、一定量を放てば銃に貯蓄されているエネルギーが切れるのも当然だ。

「じゃあ、次は僕の番だけどいいよね？」

「ちよ、ちよつと待て！今からチャージをして……」

「答えは聞いてないって」と

リュウタロスを持ち前の台詞を言ってからフリーエネルギーを用いて、デンオウベルトを出現させる。

右手にはリュウボルバーではなく、パスが握られていた。

「変身！」

『ガンフォーム』

デンオウベルトをセタッチすると、リュウタロスの身体がプラット電王へと変わる。

オーラアーマーが出現して、三百六十度回転してから胸部に装着される。

頭部に紫の龍をモデルにした電仮面が走る。

定位置になると、ガチガチつと形状を変えて『仮面』となっていく。

電仮面が光り、その後全身から紫色のフリーエネルギーが噴出す。

紫色が目立つ電王——仮面ライダー電王ガンフォーム（以後：ガン電王）がその場にいた。

「オマエ、倒すけどいいよね？」

告げると同時に、ガン電王はその場でくるりとターンする。

「答えは聞いてない!!」

右人差し指で相手を指して、高らかに無慈悲な事を告げる。

ペレグリン（弟）は二丁の銃を構えて、引き金を絞る。

銃に一定量のフリーエネルギーが貯蓄されたのかもしれない。

ガン電王は軽い足取りで、間合いを詰めていく。

弾丸を避けながら、デンガツシャーの右と左のパーツを一つずつ抜き取って投げつける。

狙うは銃を握っている手だ。

「がっ！ぐっ！」

投げつけた二つのパーツはペレグリン（弟）の手に直撃して、銃を二丁ともガシヤンと落す。

投げつけたパーツはガン電王の手元に戻って、横連結させて左手で握る。

抜き取っていない右パーツを更に手にして、投げつける。

狙いはペレグリン（弟）の眉間だ。

コンツという間抜けた音が響き、パーツはそのままガン電王の手元に戻る。

戻ってきたパーツは横連結させたパーツの斜め後ろに連結させる。

最後に余った左パーツを手にしてから今までと同じように投げつけてコンとぶつける。

投げつけたパーツはクルクルと回転しながら連結しているデンガツシャーの先端に連結された。

ガシヤンという音が鳴り、フリーエネルギーを注ぎ込むことで武器としての機能を持つ。

デンガツシャーガンモード（以後：Dガン）の銃口を向けてから引き金を絞る。

フリーエネルギーの弾丸が数発発射される。

それらは全て相手に直撃する。

「がががががががが!!」

その姿を見ながら、ガン電王は「はあっ」とため息を吐く。

「オマエ、弱すぎだよ。それで僕達に勝とうなんて言えるね」

声の中には『落胆』が含まれていた。

無論、ガン電王がそのような意識をしているわけではないが。

うつぶせになっているペレグリン（弟）が手元に落ちている銃に手をかけようとする。

拾って反撃をさせてあげるほど、ガン電王は慈悲深くはないのですかさずDガンで狙いをつけて銃を二丁破壊した。

「最後、行くよ」

ガン電王はDガンを左手に持ち替えて、パスを右手に握ってデンオウベルトにセタツチする。

『フルチャージ』

紫色のフリーエネルギーがデンオウベルトから発して、Dガンに伝導されていく。

ペレグリン（弟）がよろよろとなりながらも、起き上がる。

命乞いをしているようにも見えるが、何を言っているのかわからない。

だが、こちらを睨んで向かってくる事からして命乞いではなかったらしい。

「答えは聞いてない」

左右の胸部にあるドラゴンジエムとDガンの銃口で三角形を象り、フリーエネルギーで紫色の球を構築させていく。

そして、一定量の大きさになると引き金を絞った。

ドオンと発射されて一直線に向かっていく。

球はペレグリン（弟）を食らうがごとく勢いでぶつかっていく。

「うおわあああああああ!!」

やがてペレグリン（弟）の肉体を食らいつくすと、爆発して煙が立った。

Dガンをくるくると器用に回してから、チャキツと構えた。

「よお、終わったみてえだな。小僧」

ソード電王が屋根にできた穴を飛び越えながら、こちらに寄ってきた。

「うん。何か弱っちゃったよね」

「オメエもそう思うのかよ？」

「うん。だって全然大したことないんだもん」

走行していたリニアレールが停車し、そこからレリックが入っている箱を手にしたスバルがティアナと共に水色の魔力で構築された道——ウイングロードに滑るようにして渡っていく姿が見えた。

その後、スターズの三人とリインはヘリで回収された後、そのまま中央のラボまでレリックを護送することになった。

ライトニングとデンライナーは現場待機となり、現地の局員達に事後処理の引き継ぎとなった。

こうして機動六課の初任務は白星を飾る事になった。

*

フオワードは全員でこれから戦う相手を睨んでいた。

相手——良太郎はGDソードを無造作に振っていた。

それだけでこちらとしては緊張の材料になる。

真っ白の風景だった訓練場は今までの市街地ではなく、草原だった。

下手な隠れ場所も何もない。

自分達の実力がいい意味でも悪い意味で露見される場だ。

『みんな準備はオーケー？』

なのはの声が訓練場から聞こえてくる。

「二はい！二」

四人は同時に返答する。

対して、良太郎は首を縦に振るだけだった。

『じゃあ、第一回対人模擬戦……』

なのはが告げると同時に、宙にモニターが出現してカウントが始まる。

『3』

フオワードが構えを取る。

『2』

良太郎が深呼吸をして、こちらを睨んでいた。

『1』

参加者も傍観者も緊張が最高潮になっていた。

『GO』

ビーツという音が鳴った。

その瞬間、四人の視界に良太郎の姿が近づいてきた。

ただし、尋常ではない速度で。

GDソードを右手に持って、良太郎はシグナルが鳴った直後に全速力で間合いを詰めることにした。

「スバル！」

こちらの狙う相手をティアナは叫ぶ。

だが、すでに遅かった。

GDソードでスバルの左太ももに一撃を加える。

「あぐっ！」

痛みをこらえる声が良太郎の耳に入るが、気にせずに次なる相手の打ち込む箇所を目を光らせる。

狙うはティアナの右薙ぎと右太ももだ。

「ぐっ！」

迷いなく、打ち込んで通り過ぎるとエリオ、キャロ、フリードリヒを見る。

身長差があるのでスバルとティアナに打ち込むような事ができない。

素早くしやがみ込むと同時に左手に持ち替えてエリオの左ふくらはぎに叩きこんでから、GDソードを離して右手に持ち直してキャロの右ふくらはぎへと打ち込む。

「がっ！」

「きゃっ！」

立ち上がるのと同時に、フリードリヒの顎もとに狙いをつけてGD

ソードを持った右手で叩きこむ。

「キュッ！」

いきなり、真下から狙われては対処もできることなく吹っ飛ぶ。

良太郎はフリードリヒへのアッパーカットの体勢から宙に浮いたままだが、身体を丸めて前転をしてから両脚を着地する。

四人と一匹のいる方向に向きを変える。

誰もが驚愕の表情を浮かべていた。

魔法が使えない、それに仮面ライダー電王にも変身していないただの人間にどうして不意打ちに近い状態を許してしまったのか、という表情だ。

(これは魔法でも何でもない。人なら誰でもできる方法……)

人には物事に反応する『速度』が存在する。

自動車などで運転する際に、青信号になると異常に速く動いている自動車を見た事がある方もいるはずだ。

これは『青になったらアクセルを踏む』と停車中に自分に暗示をかけて体が反応するように前準備をしていたからできる現象といつてもいい。

逆に青信号になったにもかかわらず、一向に前進しない自動車というのを見たことがあるだろう。

これは『青信号になる↓青になったと自覚する↓アクセルを踏む』というように三工程に分けてしまったために身体がその都度反応していく結果で生じる現象だ。

同じ行動をしたとしても、次の目的がハッキリしている場合としていない場合ではこのように雲泥の差が生じる。

この場合、良太郎は『シグナルが鳴ったら間合いを詰めて、スバルの左太ももに狙いをつけて攻撃する』という暗示を予め身体にかけていたのだ。

対して、フォワード達は『シグナルが鳴る↓良太郎が来る↓間合いが詰まったら攻撃する』というように三工程に分けてしまったから対応に遅れてしまったのだろう。

数では負けているのだから、それ以外で戦うしか方法がない。

特殊能力がなく、電王にも変身できない状態で彼女達とそれとなく善戦するには『速さ』しかないのだ。

四人と一匹がこちらを見ている。

まだ戦意を失ってはいなかった。

だが、

『それまで!!』

なのはの言葉で今回の模擬戦が終了した。

(なのはちゃん。僕の意図がわかってくれたんだ……)

刃引きをしているGDソードでいくら攻撃しても『刺突』にならない限りは存命できる。

しかし、審判のなのはが『実戦』を想定した模擬戦ならば自分が行った行為を察してくれるはずだと踏んでいた。

「多分、この手は二度も通じないね」

四人と一匹はきつとこれからも任務をこなし、なのはの訓練をこなす事で今回自分がした事にも瞬時対応するだろうと思った。

「僕も進まなきゃね」

闘う事は嫌いだが、話し合いで物事が片付くことがないことも知っているからこそ、良太郎は強くなる事に迷いを持たなかった。

世界は時の流れのどきどき進む

第二十一話 「司書長と査察官」

時空管理局本局にある無限書庫。

日中、暇なく司書達が無重力空間を飛び回っている場所である。

職場は前線の現場と違う意味で忙しないが、ギスギスしている様子はない。

司書達は互いに労い、励まし合って仕事をこなしていた。

「武装隊とは全く違いますね。彼等は手を取り合ってはいても、表面上という部分が見え隠れしています」

時空管理局査察官ヴェロツサ・アコースはモニターに映し出されている映像を見ながら、テーブルに置かれている盤上に駒を指した。

パチンという音が響く。

「対して、無限書庫は本当に手を取り合っています。理想的な職場です」

「ありがとうございます。でもワーストランキングが覆らないのも現実ですけどね」

ヴェロツサの称賛に、無限書庫司書長ユーノ・スクライアは称賛を受けながらも苦笑を浮かべていた。

時空管理局には局内のみで発行されている報道誌がある。

誌名は『管理局日報』であり、局員達は略して『カンニチ』と呼んでいる。

カンニチの『絶対に就きたくない職場ワーストランキング』というコーナーでは無限書庫は稼働し始めてからずっと一位だったりする。

ユーノはソファに置かれているカンニチを手にする。

トップ面には『機動六課。イマジンと機械兵器を見事撃退!!』と大きく書かれていた。

「イマジンを撃退したのは間違いなく、良太郎さん達ですね」

書かれてはいなくても、読者の誰もがそのような思っている事をユーノは口に出す。

「ええ、確か彼等の存在は極力隠しておく必要があるんですけどよね?」
「はい。恐らく今の時間より未来から来ているはずですからね……」
直接聞いたわけではないが、存在の秘匿を他者に要請するところから推測できることだ。

ユーノはパチンと駒を盤の上に置く。

「前々から不思議に感じていたのですが、今より三時間後でも『未来』になるんですよね?」

ヴェロツサとしてはこの考えにまだ慣れない。

「そうですね。未来というと数年後のことを前提にしてしまうのが普通ですけど、『時の運行』に関わると今の時間より後でも『未来』と考えられますからね」

「まだまだ僕はそちら側には行けていないわけですね」

自嘲しながら、ヴェロツサは駒をパチンと盤の上に置く。

「来ない方がいいですよ。来れば間違いなく後戻りできなくなりま
す」

ユーノはヴェロツサにこれ以上、こちら側——『時の運行』関連
に関わらないように警告する。

彼には今の立ち位置でいてほしいという願いもあった。

「……軽率でした。すみません」

ヴェロツサは対面の人物が『力』を手にした代償に失ったものがある事を思い出し、謝罪した。

「いえ、覚悟はしていた事ですから」

頭を下げるヴェロツサに上げるように、ユーノは促す。

「それで今日はどうしたんです? わざわざ将棋を指しに来たわけではないでしょうに」

ユーノとヴェロツサが遊んでいたのは将棋だった。

ちなみに持ってきたのはヴェロツサだったりする。

「アコースさんは地球に行った事があるんですか?」

今まで黙って観戦していた白い毛並みに青いメッシュの入った
フレレット——プロキオンが訊ねてきた。

「いや、はやてから教えてもらったんだよ。対戦相手がほしいという

理由でね」

ヴェロツサはプロキオンに自分が将棋のルールを知っている理由を告げた。

「タヌキさんがですか？」

「ロツキー、それ当人の前で言っちゃダメだよ」「？」

いくら知的なフェレットでも性格は子供なため、無邪気に大人がグサリとするような事を言う時もあるのでユーノは釘を刺しておくことにした。

「脱線してしまいました、こちらを見てください」

ヴェロツサは数枚の紙と写真をユーノに見せる。

「何です……これ……」

紙を受け取っているユーノの手が震えていた。

「見ての通りです。ここ数日で管理外世界が二つほど、壊滅寸前まで追いやられています」

「ロストロギア、ではないですね……」

ユーノは定番の回答を口にしながらも否定し、ヴェロツサは首を縦に振った。

「これ等は次元航行艦から発進した監視マシンが写した写真です」

「この事を他の方達は？」

ユーノの質問にヴェロツサは首を横に振る。

「管理外世界の事ですからね。ロストロギア、もしくはイマジンでも絡めば話は別なのかもしれませんが」

ヴェロツサの説明にユーノは唸るような表情をしている。

「壊滅寸前の原因としてロストロギアもしくはイマジンとの因果関係は認められず、ですか」

「じゃあ誰がこんなひどい事をしたんですか？悪い魔導師さんでしょうか？」

ユーノの肩に乗っかって、覗き見ているプロキオンがヴェロツサに第三の可能性を提示する。

「それも有り得ないね。魔導師が行っているならそれなりに証拠が残

るからね」

「証拠ですか？」

ヴェロツサの言っている事にプロキオンが首を傾げる。

「これだけの破壊活動を行うとなると、巨大な魔力を使用することになる。そうなると必ずと言っているほど探査には引つかかるからね」
「でも、引つかからなかったんですね」

「そう。だからあり得ないって言ったんだよ」

ヴェロツサの解説にプロキオンは腕を組んで納得した。

「スクライア司書長。この事、機動六課が追いかけている一件と関わりがあると思いますか？」

「ない、と言いたいですね。絡んでたらただでさえ相手は尻尾を出していないのに余計厄介になりますよ」

ユーノの一言に、そこにいる全員が黙る。

「ロツキー、アコース査察官」

「何ですか？ユーノさん」

「どうしました？」

「気晴らしに外に行きませんか？」

ユーノの申し出に、プロキオンとヴェロツサは顔を見合わせた。

*

二人と一匹が赴いたのは、空き地だった。

大きさとしてはかなり大きな豪邸が建てれる程のものだった。

「首都のクラナガンにこんな空き地があるなんて……」

「違いますよアコースさん。ここには元々大きなビルが建ってたんです」

ヴェロツサは空き地を見て、クラナガンの不動産事情では空き地が存在している事は考えにくいことを思い出す。

「でも今は空き地だけ……」

「ユノさんがここに建っていたビルを壊したんです」

「壊した!？」

「元々、ここは次元犯罪者がアジトに使っていたところだったんですよ」

ユーノがヴェロツサに説明しながら空き地に踏み込む。

「ここを買い取る時に不動産屋さんが諸手を挙げて喜んでくれましたね。ビルを倒壊させてもいいし、好きなように使ってもいいという好条件もくれたんですよ」

「土地を売る側としてはいわくありげな土地を手放せるし、懐も温かくなるからいいことづくめという事ですね」

ヴェロツサの言葉に、ユーノは首を縦に振る。

「だからここは僕が安値で買い取り、改造したんですよ」

空き地のとある場所ですやがむとガーッと一部がスライドしてカードリーダーが出現する。

ユーノは懐から管理局発行のIDカードを取り出してカードリーダーにスキヤニングする。

直後にゴゴゴゴつと音が響き始める。

やがてガーッと大きく響いて土をこぼしながら空き地の一部分に隠れていたハッチが開いた。

「こ、これは……」

「僕の私設訓練場です」

人からは『大物』だと言われているヴェロツサだが、彼と関わるようになってから驚くことばかりだった。

二人と一匹が入るとハッチが閉じられる。

同時に照明が点灯される。

そこには三両編成の『時の列車』——ANOTHERライナーと端末が乗っかっている机が一つと休憩用のリクライニングチェアがあるだけだった。

「司書長室とここは繋がっていたんですか……」

「正確には司書長室に地下を作った際に繋がったんですよ」

「結構かかったのでは?」

ヴェロツサは私設訓練室を見まわしながら、ここまでの施設にするのに莫大な費用がかかったのではないかと訊ねる。

「いやあ、それが最初から八割近く完成していたんでそんなにかからなかったんですよ」

ユーノは照れ笑いを浮かべながら実情を語る。

「八割近く？その犯罪者、本局にテロでも仕掛けるつもりだったんですか？」

「いえ、後で調べてみたんですけどここを作ったのはその犯罪者ではないみたいなんです。でも、多分目的は先程おっしゃったようにテロだと思われます」

「外部だけの人間ではできませんよね。内通者がいると思えて仕方がないんですけどね……」

ヴェロツサの表情が『査察官』になっていた。

「内通者ですか。否定できませんね」

ユーノはヴェロツサの言うように、管理局の中に犯罪者と密接な繋がりを持っている者が存在している事を否定はしなかった。

「アルフレッド。内通者と思われる局員っている？」

ユーノは手を仰ぐようにして、誰かに向かって言う。

『カラー識別でいきますと、ブラックの特定には時間がかります。グレーと思わしき人物なら百十五名はいます』

私設訓練室から声が響いた。

「そう、ありがとう。あとブラックは調べる必要はないからね」

『かしこまりました』

そう告げると、声は消えた。

「百十五人もいるみたいですよ。内通者」

腕を組んで、隣で頭を抱えているヴェロツサに視線を向ける。

「ブラックの数まで特定されたら、査察部は間違いなく無能者の集まりと言われてしまいますよ」

ヴェロツサには『ブラック』や『グレー』という意味合いは理解できているようだ。

彼は驚かない。

先程の姿なき声の正体を知っているからだ。

姿なき声、それはユーノの専用デバイスといえるA I『アルフレツド』だ。

情報収集能力は下手な調査活動が得意な管理局員よりも優れていたりする。

また、対話能力も従来のデバイスよりもずっと人間的だったりする。

つまり冗談や皮肉も言えるという事だ。

「これはゼロノスカード……。こんな無造作に散らかしていいんですか？」

ヴェロツサは机の上に散在しているカードの一枚を手にして、ユーノに確認する。

「ああ、それはダミーカードですよ」

「ダミーカード？」

ヴェロツサにはこれが偽物とは簡単には信じられないようだ。

「正確には空間シュミレーター内で変身が可能なゼロノスカードなんですよ」

「ゼロノスタイプは確か、変身に代償が付きまとうと聞いています」

ヴェロツサは、はやてからゼロノスの変身システムは聞かされている。

ゼロノス、ANOTHERゼロノスの両方を知っている彼は『代償を付きまとう時の運行を守る仮面ライダー』を『ゼロノスタイプ』と呼んでいる。

「ええ、迂闊に訓練もできません。しかし、変身をしてでも訓練をしたいという要望は必ず出てきますからね。それで作ったんですよ」

ユーノはヴェロツサが握っているダミーカードを指差す。

「空間シュミレーター限定で無代償で変身できるカードをね」

「少し前に機動六課で仮面ライダー電王と仮面ライダーゼロノスが派手な激戦をしたと聞きましたが、それに関係ありますか？」

「ええ。まず間違いなく、はやて経由で侑斗さんの手に渡って使ったんでしょね」

ユーノは特に驚くことなく、確信を持って言う。

「はやて経由で？」

「はやてにダミーカードの設計図を送ったのは僕ですからね。侑斗さんがあちらにいる以上、何かと役に立つと思ひましてね」

ユーノは立ちっぱなしに疲れたのか、椅子に座る。

「そうですね。あ、そういえば近々ホテル・アグスタで骨董品のオークションが開催されることをご存知ですか？」

「いえ、初耳ですね」

ヴェロツサがダミーカードからこれからの世事へと切り替えた。

「出品されるものの中には価値のあるものからガラクタ同然のものまでであると聞きますね」

「中にはロストログイア指定を受けているものもあるかもしれませんがね」

「おっしゃる通りです」

ユーノの導き出した仮説に、ヴェロツサは首を縦に振る。

「おーくしょんって何ですか？」

わからない言葉なのでプロキオンが挙手して訊ねてきた。

「オークションっていつでも色々あるからね……」

ユーノとしては持てる知識を全て教えると、プロキオンが混乱する可能性もあるので誰もが想像できるものを脳内で選出した。

「二つの物品を買い手同士が最もいい条件を提示して競い合わせる事なんだよ」

世間一般に知れ渡っているオークションは先程ユーノ述べたように『買い手同士が最もいい条件を提示して競い合わせる』ものだ。

この方式を『イングリッシュ・オークション』といわれている。

通常のオークションが『いい条件』を提示する事を競い合わせる事だが、中には売り手が最高価格をあらかじめ提示して、順番に価格を下げて買い手が

適当な価格で落札するという『ダッチ・オークション』というもの

ある。

ホテル・アグスタで行われるオークション方式は『イングリッシュ』だろう。

「ヴィンテージ物のワインとかあれば僕も参加するんですけどねえ」

ヴェロツサは手を顎に当てて、出品物を想像する。

「もしかするとあるかもしれないですね。骨董品というのがどのあたりまで粹づけられているかにもよりますけど」

ユーノは笑みを浮かべながら言う。

「アコース査察官」

「わかってますよ。オークションの出品品の中にロストログア関連があるか否か調べてみましょう」

「お願いします」

ヴェロツサは快諾し、ユーノとプロキオンは頭を下げた。

*

ヴェロツサと別れ、昼食を食堂かそれとも司書長室までデリバリーしてもらおうか否かと一人と一匹は話し合っていた。

「ユーノ、ロツキー」

その中で提督階級の服を着た青年が一人と一匹に声をかけてきた。

「やっぱりデリバリーしてもらった方がいいと思います。僕が食堂にいと、女の人達がジロジロ見るんです」

プロキオンはデリバリー派だった。

「しかし、司書長室で食事っていうのもねえ」

不満はないが、そろそろ衆人環視の前で姿を現さないと『死んだ』とか『消えた』という噂が立ちかねない。

生きているのに、勝手に噂で故人扱いされるのは気分のいいものではないのでそろそろ頃合いとしていた。

「おい」

青年がもう一度声を出して、視線を一人と一匹に向けた。

だがやっぱり、一人と一匹は廊下を歩いている。

「おい！」

怒号まじりに、青年はすたすたと歩く一人と一匹に視線を向ける。

「そのフェレットとフェレットもどき！」

一人と一匹がピタリと会話を止めて、青年の方に顔を向ける。

「やあ、クロノ」

「こんにちは。クロイノさん」

一人と一匹——ユーノとプロキオンは爽やかな表情で、挨拶する。

「その爽やかな表情はやめろ。わざとらしいんだよ」

青年——クロノ・ハラオウンは額に青筋を立てていた。

「お前の顔を見ると、嫌な事を思い出したくなる僕等の身にもなつてくれ」

ユーノの一言に、肩に乗っかっているプロキオンは首を縦に振る。

「僕はそんなに君の部署では嫌われているのか？」

時空管理局という職場は警察のように『人に恨まれてなんぼ、嫌われてなんぼ』という部分があるが、それはあくまで外部からのものだ。

内部で嫌われているというのは精神的にいいものではない。

「特に休みがお流れになったときとかはね」

「クロイノさんの請求で、慰安旅行がお流れになった事もありましたね」

ユーノとプロキオンは思い出しながら、呟く。

「あー」

クロノとしてもそのように言われると、後ろめたさが出てくるものだ。

人命がかかっている重要な案件だという事を考慮してもだ。

「その……すまない」

「いいよ。もし、詫びる気があるなら忙しくない時に何か持ってきてよ」

「わかった。僕も忙しいときに無限書庫に入り込む勇気はない……」

無限書庫での『忙しい』時というのはまさに『修羅場』という言葉が相応しいものだった。

人が『ヒト』でなくなる時期であり、クロノは過去にその状況の際に立ち寄った過去がある。

その際、彼は見てしまったのだ。

無限書庫で跳梁跋扈している『人の姿をした獣』を。

「捕食される側になったのは初めてだよ……」

クロノは思い出したのか、背筋に何かゾクツと走ったようだ。

雰囲気は暗くなり始めたので、二人と一匹は深呼吸をする。

「ところで昼食はまだか？」

「まあね。食堂に行くか、デリバリーにするか悩んでいるところだよ」

「そうか。なら司書長室で食べないか？ フェイト達の話もあるしね」

「いいけど、エイミイさんの手作り弁当でも持ってきてるの？」

「……」

凶星のようだった。

「もしかして、僕に対するあてつけ？」

「それは違うと断言しておく」

二人と一匹は無限書庫の司書長室へと向かった。

クロノがエイミイ・リミエツタ（現在はエイミイ・ハラオウン）と結婚して子供をもうけてからは『仕事人間』だの『仕事虫』だのと揶揄されなくなったというのは割と有名な話だったりする。

このエイミイとの結婚だが、数多の局員達に知れ渡るとクロノは男性局員から怨嗟の視線をひたすらぶつけられていた。

家事全般オールオツケーで気さくで人当たりもよく明るいいし、仕事も有能で顔立ちもいいのだから男性からの評価は高い。

エイミイが休職する際にも、彼女の人柄ゆえに男女問わずに盛大にもてなされた程だ。

反対にクロノは怨嗟と皮肉を込めて『昼の仕事は有能だが夜の仕事は超有能』だと囁かれていたりする。

「ハート型じゃないんだ」

ユーノがクロノの弁当を覗き見ながら、漏らす。

「……殴るぞ」

結婚して数年経っているのに、いつまでも新婚気分ではないのだ。だからといって倦怠期というわけでもないのだが。

ドアを叩く音がした。

「どうぞ。開いてますよ」

食堂のスタッフがユーノが頼んだ日替わりランチと鶏のから揚げを持ってきてくれた。

「ありがとうございます」

代金を受け取って、スタッフは司書長室を出て行った。

「はい」

「ありがとうございます。ユノさん」

鶏のから揚げを受け取って、感謝の言葉を述べるプロキオン。

「君が食べるのかい？」

「そうですよ。このくらいならラクシヨーです！」

クロノが訊ねてきたので、プロキオンは余裕の表情で返す。

「二いただきます」

二人と一匹が合掌して、昼食に手を付けた。

「六課の話は聞いているか？」

「まあちらほらと……」

クロノがわざわざこのような席にしたのは単に愛妻弁当を見られるのが恥ずかしいだけというわけではない。

「なのは達、活躍してるね」

「ああ、本局でも彼女達の話聞かない日はないな」

会話をしながらも、二人の箸は止まっていない。

「フェイトやはやては、やっぱり舞い上がってたりする？」

「いや、二人とも仕事は普通にこなしているようだ。でも内心では君の言うように心弾んでいるだろうな」

二人ともフェイト・T・ハラオウンと八神はやての想い人を知っているからこそ言える会話だろう。

「十年ぶりに会うんだからね。無理もないけど」

「まあその事に僕から何かと言うつもりはないがね」

二人の会話は弾み、プロキオンは五個入りのから揚げのうち、二つを食べ終えていた。

「ところで、君となのははどうなんだ？」

「えっ？」

そのように切り出してくるとは思わなかった。

「ほら、お互い忙しい身だし中々会う機会もなければ、もちろん話す機会もないしね」

「それは現在の話だ。六課が本格的に動く前は機会があったはずだろ？」

「まあ……ね」

確かに機会はあった。

だが、ユーノ自身には積極的に会おうという気にはなれなかった。

自分が抱えている代償を知っているからだ。

(カードを使い続けて五年。正直みんなが僕を憶えていること自体、奇跡に近いのに……)

箸を持っている右手に自然と視線が向く。

自分の手には『プランAZ』を起ち上げてから四年で数多のイメージの命を奪った感覚があった。

それに自分はすでに『脛に傷ある身』だし、これからもそれは進行していく。

意識しているからこそ、余計に避けてしまうのだ。

「どうした？」

「いや、何でもない」

箸が止まっていたので、ユーノはもう一度動かした。

プロキオンには契約者の心中が痛いほど理解できていた。

それからしばらくして、司書長室での昼食は終わった。

クロノが退室してから、ユーノとプロキオンは専用端末を操作していた。

司書達が完成させた資料を検分して、ミスがないかをチェックする

のが主な業務だ。

ミスがあればそこにサインを入れて、担当司書に戻して再検索させる。

「最近ミスもほとんどないから、僕としてはちよつと寂しいね……」
二足の草鞋を履いて生活をしていく上で自ずと個人の能力が上がっていくものだ。

それは彼にとってもプラスになる事だ。

「いいじゃないですか。その間に調べ物ができるんですから……」

机にちよこんと座っているプロキオンも端末を見ていた。

二人が現在行っている調べものとは、ある村についてだった。

「やっぱりわからない……」

「データ不明ってありえないですよー」

ユーノとプロキオンは難色の表情を浮かべる。

次元世界があり、その中に『村』や『町』が存在している以上は必ずそれらのことは『情報』として無限書庫の中に入ってくる。

それこそ一日に無限書庫に入ってくる情報は、大抵の局員が逃げ出したくなるくらいのものだ。

情報量という事だけならば間違いなくトップレベルの無限書庫でもわからない事があるのも確かだ。

それらの情報は全て『過去に某かのかたちで存在していたもの』ということだ。

つまり最初から『存在していない』ように無限書庫に認識させれば『存在しないもの』として取り扱われるということだ。

この無限書庫の『穴』は無限書庫のスタッフは全員知っているが、それ以外の局員達は知らないし知られてもいない。

「偶然でできるものじゃないしね」

「じゃあ、確信犯ですか？」

「まず間違いないね」

「手詰まりですねー」

ユーノとプロキオンは腕を組んで、天井を仰ぐ。

（僕の目的を達成させるためにも、あの村の真実を知らなきゃいけな

い。でも無限書庫の情報にはないとなると……)

物事を進める一手が出てこない以上、手をこまねいているだけだ。

司書長室のドアを叩く音が聞こえた。

「どうぞ」

「失礼します、司書長。本日の新しい情報が入ってきましたので目を通してください」

「わかった。ありがとう」

「では」

男性司書が入り、報告をしにきたので作業を中断した。

入ってきた情報に目を通していく。

「ん？これは……」

ある部分で流し読みをしていたユーノの目が止まる。

項目は『ガジェットドローンに関する情報』だ。

「ガジェットドローンの製作者は……」

ユーノが読み上げようとすると、端末のディスプレイに『ALER T』と表示された。

『第二十六管理世界でイマジン反応あります』

端末からアルフレッドの声で伝えてきた。

席を立ちあがって、宙にモニターを展開させる。

「みんな、イマジンが出てきたからプランA Zを発動するよ」

モニターに映し出されているのは無限書庫内部だ。

ユーノは司書達に指示を出すと、司書達は全員応じた。

本棚がスライドして私設訓練場へと通じる地下へのエレベーターが出現した。

「さあ、行くよ」

「はいー」

一人と一匹の表情はイマジンを狩る『狩人』のものになっていた。

幼馴染み達を偽ってでも、成し遂げようとする一人の若者の旅路に終点はまだ遠い。

第二十二話 「進展」

カタカタと休憩室で通称『小さな上司』、別称『銀バエ』で通っているリインが内容を呟きながら指を動かしてキーを叩いていた。

「五月十三日。部隊の正式稼働後、初の緊急出動がありました。密輸ルートで運びこまれたロストロギア——レリックをガジェットが発見、

移送中のリニアールを襲撃。それを阻止。レリックを回収する任務という事でしたが、六課前線メンバーの活躍もあって無事に解決」

リインの前にモニターが出現して、スターズ&ライトニングの副隊長を除く全員が代わる代わる映し出されていた。

「その際にイマジン二体の存在も目撃されるが、仮面ライダー電王に変身したモモタロス、リュウタロスの二名が撃退。イマジンが何故レリックの

傍で待ち構えていた理由についてはレリックが目当てではなく、それを確保する際に出現すると思われる仮面ライダー電王を撃退する事が真の動機

だと判明する」

モニターの画面が切り替わり、ソード電王とガン電王が映し出され、ペレグリンイマジンも映っていた。

「確保した刻印ナンバー9のレリックは現在中央のラボにて保管、調査中。初任務として問題なしだと部隊長のはやてちゃん、六課の後見人騎士カリム、

クロノ提督達も満足されているようです、と」

キーを叩く速度が上がってきていると自身でも実感している。

もうすぐ終わりだからだ。

「あつ、確か赤鬼さん達の事は記録にはいけないんだっですー！」
リインは、八神はやてに注意されたことを思い出して電王に関する部分を消去した。

本音を言えば凄くもつたない気持ちだった。

「リイン曹長」

声が出たので、顔を向ける。

廊下を歩いていたシャリオ・フィニーノが歩を止めていた。

「シャリー♪」

「ご休憩中ですか？」

「休憩半分、お仕事半分。個人的な業務日記をつけていたですよ」

リインは笑顔で、キーボードとモニターを消してから椅子から飛び上がってシャリオの前に浮く。

「なるほど」

シャリオは納得した。

「シャリーは？」

今度はリインがシャリオに訊ねてきた。

「新しいデバイスたちの調子を見に訓練場まで行ってきたんですよ」

「なるほどおそうでしたかあ。みんな元気でした？」

「フワード陣もデバイス達も絶好調です！よほど野上さんとの模擬戦が刺激になったのかもしれないね」

「アレですかあ」

リインは数日前の模擬戦の事を思い出す。

ガジェットドローンを訓練通りに倒して、絶好調となった直後に起きた完全な敗北をフワード陣は味わった。

しかも相手は変身せずに、テクニカルノックアウト T K O 勝ちをしてきたのだ。

敗北の中身は誰から見ても、『完敗』である。

「魔法を使えなくても魔導師と対等以上に戦える、ある意味では『希望』ですね」

リインの言う通り、良太郎の行為は魔法を使えない者にとっては希望になる事だ。

努力をすればいつかは勝てるという事を現しているのだから。

「でもリイン曹長。野上さんの行為は魔導師にとっては『恐怖』にもなりますよ」

シャリオはリインの逆をついた。

魔導師にとつて、魔導師は下手をすれば足元をすくわれるという事も現しているのだから。

「仮面ライダーの存在でこのような考えが出てきちゃうんですね」
「ええ。でもだからこそ味方であるからこそ、頼もしいんですよ」
「敵だともさにサイアクですよ」

上司と部下の会話は『仮面ライダー』談義になっていた。

野上良太郎と桜井侑斗は機動六課の医務室で部屋の主であるシャマルの表情を見ていた。

シャマルは真剣な表情でモニターに表示されている二つのデータを凝視していた。

二人のこれまでの検査に関するデータである。

「良太郎君も侑斗君も、あれだけの外傷を負ってはいても内蔵に関するダメージはほとんどなかったからその当たりの心配はなしで、脳はっと……」

シャマルはモニターをタッチして、データを切り替えていく。

「脳も後遺症になる心配となる症状はなし。うん、二人とも大丈夫よ」
先程まで難しい表情をしていたシャマルは笑顔で言う。

その笑顔を見て、良太郎と侑斗は同時に安堵の息を漏らす。

「でも、戦闘後には必ず検査に来ること。デネブちゃん達にも伝えてほしいの」

途端に真面目な表情になって、シャマルは二人に告げる。

「一回の戦闘ごとに、ですか？」

「ええ。しつこいようだけど今のところ、イメージを倒すことができるのは貴方達しかいないのよ。だから貴方達の健康管理の把握は決して大きなものではないわ」

良太郎は大きさでは？と訊ねるがシャマルは表情を崩すことはなかった。

「そんな難しい顔しなくてもいいわよ。単純な検査だからそんなに時間はかからないわ。それにこの手の検査は部隊によっては義務付けられているのよ」

シャマルの一言に、二人の身が一瞬だけ硬直した。飛行機のパイロットが健康診断を受けて、基準以下だった場合勤務できないという話を思い出したのだ。

シャマルが自分達に要請する検査はそのような厳しいものではないが、それでも小言の一つや二つが飛んでくるのは確実だろう。

「わかりました」

「……わかったよ」

良太郎と侑斗は折れた。

「言っておくがシャマル。健康管理にかこつけて薬膳料理は作るなよ？」

「作りませんよー」

シャマルならやりかねない事を侑斗は言い、抗議された。

*

空間シミュレーターに設定されている部隊は様々である。ステージ

市街地はもちろん、ハイウェイ、遺跡跡地に砂漠なども設定されていたりする。

今回はその中で森林が舞台となっていた。

自然あふれ、森林浴をすれば『安らぎ』の効果を得られそうだ。

しかし、この森林は仮想であるため天然ものの効果は得られない。いわば絵に描いた森林を眺めているようなものだったりする。

なお、余談ではあるが森林には必ずついていると思われる昆虫類は一匹もいなかったりする。

この辺りも監修の意図なのかもしれない。

モモタロスはウラタロス、キンタロス、リュウタロスとは別行動で一組の訓練風景を見ていた。

スターズ副隊長ヴィータとスターズ3のスバル・ナカジマの訓練をだ。

「オラアア!! じっくりぞおお!!」

バリアジャケットではなく、訓練着姿のヴィータが下げているグ

ラーフアイゼンを振りかぶりながら、対するスバルを睨んでいた。

掛け声が引き金となり、スバルも身構えていた。

(赤チビの一撃は結構痛えぞお。どうすんだ青髪)

モモタロスはスバルがどのような方法を用いるのかを興味を持っていた。

振りかぶっているヴィータは魔力を使わずに加速せずに前へ向かっていく。

モモタロスの目から見たら、防御はもちろん反撃だって十分にできるものだ。

自分が良太郎に戦い方を教える際には防御はほとんど教えていない。

その手の事は自分が仮想敵となる際には本人任せにしている。

自分は特に苦に感じたことはないが、ヴィータの動きには自分が知っている彼女特有のキレがなかったのだから。

(訓練つてのも何かと大変だなあ)

そのような事を考えながら、モモタロスはスバルがどのような対策をとるのか拝見することにした。

「マツハキャリバー!!」

リボルバーナックルを装着している右手を前に出して、スバルは両脚に履いているマツハキャリバーに命令を下す。

『プロテクション』

マツハキャリバーは主の名に応じる結論を導き出した。

リボルバーナックルのスピナーが回転する。

水色の魔力光が出現して、薄い壁となる。

ヴィータが助走を終えて地を蹴って一気に間合いを詰めると同時に、振りかぶっていたグラーフアイゼンをスバルに振り下ろす。

グラーフアイゼンのハンマーが水色の薄壁に直撃する。

バチバチバチとハンマーと薄壁から火花が飛び散る。

(重い!!)

眼前の人物の身体から噴出す力とは思えないものだった。

ズルズルと踏ん張っているのにマツハキヤリバーのタイヤが地面を削っていく。

「くっ!!」

スバルは苦悶の表情を浮かべながらも、眼前のヴィータの攻撃からは目を離してはいなかった。

グラーフアイゼンのハンマーが自分が構築した水色の薄壁から離れた。

(諦めた?違う。何かくる!!)

今の攻撃をやめたからといって、諦めたという事にはならない。むしろ第二撃が来ると考えた方が自然だ。

これは以前の良太郎との模擬戦から学んだ事だ。

『戦いの空気』を感じ取る事だ。

この空気がまだ途絶えていないと肌で感じているので必ず何かがあると確信している。

グラーフアイゼンのハンマーが先程とは違う角度から薄壁を打ち付けてきた。

ヴィータはグラーフアイゼンを振り下ろして、スバルが構築した水色の魔力光で構築された薄壁を見る。

ハンマー越しに感触を確かめる。

(悪くはねえな……)

防御としての機能は十分に発揮しているので、合格点を与える事はできる。

(なら!!)

グラーフアイゼンを一旦引き寄せてから、別の角度——左横から薄壁へと打ち付けた。

「でえやああああああ!!」

ヴィータの気合のこもった第二撃を食らったスバルは正面からの一撃には中々持ちこたえられたが、角度を変えた途端に後方へと下がってしまった。

ドン、とスバルの背中は木に激突した。

「いったった〜」

スバルが悲鳴を上げているが、声色からしてそれほど深刻なダメージではないと判断できた。

その証拠にスバルの両目はこちらを見ているのだから。

「なるほど。やっぱバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「あ、ありがとうございます」

ヴィータの言葉に、スバルはリボルバーナックルから展開していた水色の薄壁を消した。

そして、スーツとマツハキヤリバーのタイヤを滑らせてこちらへと寄ってきた。

「お前やあたしのポジション——FAはな、敵陣に単身で斬り込んだり最前線の防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ」

空いた左手が説明と同時に巧みに動いていた。

「防衛スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間を長くとれるしサポート陣にも頼らねーで済むって。これは、なのはに教わったな？」

「はい！ヴィータ副隊長」

スバルの返事をヴィータは信じる事にした。

「受け止めるバリア系。弾いてそらすシールド系」

右手で紅色の魔力光で構築された薄壁を展開させてから、左手で紅色の三角形が主体となっているベルカ式の魔法陣を展開させた。

「身に纏って自分を守るフィールド系」

両手に展開した防御魔法を消してから、紅色の魔力光を身体全身に纏った。

「この三種を使いこなしつつ本部をぶっ飛ばされねえように下半身の頑張りとマツハキヤリバーの使いこなしを身につける」

「はい！頑張ります！」

『学習します』

ヴィータが提示した課題にスバルとマツハキヤリバーは返事した。

「防御ごと潰す打撃は、あたしの専門分野だからなあ」

グラーフアイゼンを振り回しながら、得意な表情で語る。

適度に振り回してからハンマーをスバルの顔面に突きつける。

「グラーフアイゼンにぶつ叩かれたくなかったら、しっかりと守れよ？
あともうひとつ……」

ヴィータはモモタロスをちらりと見てから、口を開く。

「あそこにいるバカ達の一撃は、常時防御潰しだからな。あたしにぶつ叩かれるようじゃ良太郎にリトライしても結果は同じだぞ？」

「は、はい!!」

スバルに煽るように告げてから訓練が再開された。

ヴィータとスバルの訓練風景を見ながら、モモタロスはどこか空虚なものを感じた。

(十年経つと変わっちゃまうんだなあ)

ヴィータが知的な事を言つてスバルに指導する姿はサマになっていると感じたが、あるモノを感じられなくなった。

それは十年前の彼女が持っていた『荒々しさ』とか『猛々しい』というようなものがなくなったからだ。

(それだけじゃねーんだよなあ)

今のヴィータは十年前に比べて『大人』になったと受け止めれば丸く収まるが、それだけではないように感じた。

「なーんかあるんだよなあ」

それが何なのかはわからない。

そもそもモモタロスは理屈肌のウラタロスと違って、『直感』でそのように思っているため根拠はないしヴィータ本人に訊ねてもはぐらかされるのがオチだ。

「何があるんだよ？赤鬼」

独り言じみた台詞をヴィータが聞いていたらしく、前に立っていた。

その後ろではスバルが一人で何かを練習していた。

「あー何っーかなあ……」

モモタロスは現在座っている状態であり、この位でヴィータと視線が同じになる。

「何だよ？」

ヴィータが訝しげな表情を浮かべる。

「オメエ、つまなくなつちまつたなあ」

モモタロスは自分の思ったことをヴィータにぶつけた。
ヴィータの両目が丸くなってからすぐに吊り上った。

「どういう意味だよ？それ……」

グラーフアイゼンを握る右手がカタカタと震えていた。

自分の言った言葉が彼女の神経を逆なでする事ももちろん自覚している。

「わかんねーよ。そんなもん」

「これも正直な意見だ。」

モモタロスは立ち上がって、歩き出す。

「おい、どこ行くんだよ!?何だったら今から始めてもいいんだぜ!？」

グラーフアイゼンを構えて、こちらを睨んでいた。

場の空気が変わりだしているのは、肌で感じられた。

その証拠に、一人で練習をしていたスバルが止めに入ろうとする。

「冗談言うなよ？今のオメエとやりあつてもちつとも面白くねえんだからよ」

モモタロスはヴィータにそのように告げてからその場を歩き去った。

空間シミュレーター内の別地点では、訓練着を纏ったフェイト・T・ハラオウンがエリオ・モンディアル、キャロル・ルシエ、フリードリヒ、そして好奇心で

リュウタロスにこれから行う訓練内容を説明した。

彼女の周辺には半透明であるが、実体の木のような障害物が数本立っており、宙には球体に串が刺さったかのような自動機械が数機浮上していた。

「エリオやキャロはスバルやヴィータのように頑丈じゃないから、反応と回避がまず最重要」

身体がまだできていない二人に『撃たれて倒れるな』なんて事はあまりに酷な話だ。

それに『撃たれるくらいなら上手く避ける』の方が理に適っている。「たとえば……」

フェイトがチラリと自動機械に目をやると、応じるようにして二機が金色の光を纏って水色の光弾を発射した。

二発の光弾をフェイトはきちんと見切ってから、必要最小限の行動範囲で身体を動かして避けていく。

一発目をどのようにして避ければ二発目もリスクなく避ける事を把握しての動きだ。

光弾は二発とも、地面にぶつかって消滅した。

「まずは動き回って狙わせない」

ジグザグにフェイトは走り出す。

自動機械はウインウインと全体を動かしながら、狙いをつけようとする。

「攻撃が当たる位置に……」

走り回ったフェイトは停止する。

自動機械は狙いをつけて光弾を放つ。

「長居しない！」

教え子二人と一匹とオマケのイメージに告げると同時に、右へと駆け出す。

光弾は障害物に激突して、消滅した。

「ね？」

手本を見せてから二人と一匹と一体を見た。

「はい!!」

「キククー」

「はーい」

それぞれが返事する。

「コレを定速で確実にできるようになったら……」

直後にフェイトは右方向へと駆けだす。

「スピードを上げていく」

フェイトの速度も上がっていく。

自動機械の射撃も鋭さを増しているが、最初の三発をそのまま軽く跳躍して避ける。

足が宙に浮いている間に身体の向きを百八十度変えてから後方へと飛び退いてから、また前進する。

その間にも自動機械は攻撃を繰り返しているが、フェイトには一発も当たっていなかった。

自動機械が次にどのように攻撃を繰り返すかを予測するために、出方を伺う。

（挟み撃ち……）

フェイトの予想は当たり、彼女を囲むようにして攻撃を仕掛けてきた。

先程のような単体の連続ではなく、一斉射撃だった。

フェイトと自動機械を中心にして、爆煙が立った。

エリオ、キャラ、フリードリヒがフェイトの心配をしているが、リュウタロスの視線だけは別の方向へと向いていた。

「キュ？」

リュウタロスの様子に最初に気付いたのはフリードリヒだった。

「どうしたの？フリード」

「？」

次にキャラが気付いて、釣られるようにしてエリオもリュウタロスを見る。

「どこを見てるの？リュウタロス」

「フェイトちゃんが走ってる方向」

エリオの質問にリュウタロスは答える。

「え？え？フェイトさんはあそこにいるんじゃない……」

リュウタロスの回答にキャラは混乱していた。

キャラの指差す方向は先程の爆煙が立っているところだ。

「いないよ。そろそろこっちに来ると思うなく」

顔を動かすだけでは追いかける事が出来なくなっただのか、身体全体の方向を変えていく。

二人と一匹もリュウタロスが向いている方角に身体を向けた。

「こんな感じにねって、あれ?」

二人と一匹と一体の眼前にフェイトが出現した。

「ね?」

「「本当だあ」

「キュー」

フェイトは二人と一匹と一体の反応についていけない。

「どういう事なの?」

「リュウタ君が見ている方向を同じように見てたら、こうなったんです」

キャロが代表して答えた。

「リュウタロスは見えてたの?」

「うん!ハッキリと見えてたよ」

「今更ながらにイマジンの身体能力の高さには驚かされるね……」

爆煙が晴れると、フェイトがここまで来た足跡が残っていた。

「す、すごい……」

エリオの言うように、その足跡とは靴の跡のようなものではなかった。

地面がUの字に抉れていたのだから。

「ほえ〜」

フェイトの動きを把握できているリュウタロスでも、この足跡には声を上げるしかなかった。

「今のもゆつくりやれば誰でもできる基礎アクションを早回しにしてるだけなんだよ」

解説を聞いて、首を傾げているのはリュウタロスだけだった。

「スピードが上がれば上がるほど、勘やセンスに頼って動くのは危ないの。GWのエリオはどの位置からでも攻撃やサポートができるように、FBのキャロは

素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように確実に有効な回避アクションの基礎をしつかり覚えていこう」

フェイトがしゃがんでエリオとキャロの目を見て、肩を掴んでそのように方針を伝えた。

「はい!!」

「はい」

「キユクー」

ここにいる誰もがやる気十分だった。

だいたい橙色の魔力球が桜色の魔力弾を空中で相殺していった。

桜色の魔力球の構築者は高町なのはであり、橙色の魔力弾の構築者はティアナ・ランスターである。

ティアナが訓練着であるに對して、なのはは教導官服とこの空間シミュレータの中では一番浮いていたりする。

「うん。いいよティアナ。その調子」

ティアナの的確な行動に称賛する。

なのはの足元には桜色の円形のミッドチルド魔法陣が展開されており、彼女の周囲には様々な魔力球が宙に浮いていた。

「はー」

称賛されたことに返事で返すティアナだが、手は休まっていない。両手に握られているクロスミラーージュで襲い掛かってくる魔力球を打ち消していく。

ティアナの足元には空になったマガジンの役割を担っているバレルが散らばっていた。

「ティアナみたいなの精密射撃型はいちいち避けたり受けたりしてたんじゃ、仕事ができないからね」

右人差し指が合図となり、宙に浮いている魔力球がなのはの元に集まる。

「!!」

ティアナは、なのはが何かを違うパターンを仕掛けてくると直感し

た。

「バレット！レフトV、ライトRF!!」

発射させる魔力弾のタイプを選択した。

『オーライ』

二丁のクロスミラージュは主の命に応じて、エンブレム部分を明滅させていた。

(来るー！)

後ろをちらりと見ると、桜色の魔力球が三個ほど弧を描きながらこちらに向かってきた。

受け身を取って、タイミングよく一発目を避ける。

一発目が地面に激突して爆煙を立てて間もなく、二発目が狙ってきたのでそのまま転がって避ける。

三発目が狙いをつけてこちらに向かってきても、転がって避けると同時にそのまま身体を上手く動かしてそのまま起き上がった。

「ほら、そうやって動いちやうと後が続かない！」

なのはの表情や口調からして今の行動は適切ではなかったと理解した。

(どうすれば……、今の標的を的確に捉えるには……)

いわばこれは一対多数の戦いだ。

そうになると、何が一番必要だ。

(野上さんは私達を相手に怯まないどころか躊躇なく向かっていった……)

良太郎との模擬戦を思い出す。

完全に叩きのめされた苦い一戦だった。

だが、今はこの戦いに感謝せざるを得なかった。

何故なら自分が相手の立場に今立っていると理解できるのだから。なのはの右手が射撃するようなしぐさをする。

水色の直進弾と湾曲しながら動いてる茶色の誘導弾の二種類が一度にこちらに向かってきた。

(野上さんは私達と戦う際に、間合いに入り込んでから相手を狙うなんて事はしていない。始まる前に見てたんだ。私たち全体を……)

右手に握られているクロスミラーージュのハンマーを親指でぐいと下げる。

そして引き金を絞る。

銃口から発射されたのは鏃のような形をした橙色の魔力弾だった。一直線で速くなく、ゆっくりでユラユラと上下に移動していた。茶色の誘導弾を標的として追尾していく。

二発の弾丸の動きは螺旋を描くようにして空を上昇していく。すかさず左手に握られているクロスミラーージュの引き金を絞って橙色の直進弾を発射させる。

弾と弾がぶつかって二色の直進弾は相殺して、爆煙が立った。

「そうーそれー足を止めて視野を広くー!」

なのはの声が聞こえた。

だが、今はこの精神状態を維持する事に意識が集中していた。右斜め上からこちらから向かってくる魔力球を三発連射して落とす。

左斜めから向かってくる魔力球を撃破していく。

「射撃型の神髄は……」

「あらゆる相手に正確な弾丸をセレクトして命中させる……」

なのはの言葉に続くように、ティアナは足場を動かさずに目標を視野に入れて二丁のクロスミラーージュの引き金を絞る。

「判断速度と命中精度!!」

バレルをを切り捨てると、左太腿に巻かれているホルスターにクロスミラーージュを挿入する。

それだけでバレルは装填されていた。

『リロード』

クロスミラーージュが告げ終わると、ティアナは構えて向かってくる魔力球に狙いをつけた。

次の標的を繰り出す準備をしているのははどのタイミングで繰り出すかを見計らっていた。

ティアナの視野を捉える力は彼女には失礼だが、もう少し時間がかかると思っていた。

それだけ自分が繰り出しているそれは難度が高いものだからだ。だが、ティアナが自分からして失態と思えたのは死角に近い場所からの三発くらいだった。

その時に彼女は今自分に置かれている状況を把握したのだ。

一対多数に限りなく近い状態になっているのだと。

(良太郎さんの視点になって学び取ったんだね)

ティアナが視野の広さを学んだのは、見本となる人間がいたからだ。

「チームの中央に立って誰よりも早く中長距離を制する。それが私やティアナのポジション——CGの役目だよ」

「はい!!」

なのはがポジションの解説を説明しているが、ティアナは今の状態を完全にモノにする事に集中していた。

この訓練は終了のチャイムが鳴るまで続いていた。

なお、フォワード陣の声と身体が悲鳴を上げたことは言うまでもない事である。

第二十三話 「その名は……」

傍から見ると、空間シュミレーターは色んな色の魔力光が森を抜けて空に向かっていく。

それが魔力によるものだという事を知らない者が見れば天変地異の前触れと思ってしまうだろう。

ヴァイス・グランセニックとシグナムが眼前のモニターに映し出されている映像を見ていた。

ヴァイスは腰を手に当て、シグナムは腕を組んでいた。

「いやあ、やってますなあ」

台詞がどこかオヤジじみている。

「初出勤に加えて、野上との一戦がいい刺激になったようだな」

フォワード陣が燃え上がっている原因をシグナムは冷静に言う。

「いいつすねえ。若い連中は……」

更にオヤジ化が進行していた。

「若いだけあって成長も早い。まだしばらくの間は危なっかしいだろうがな」

「そうつすねえ」

ヴァイスは同意をしながら、シグナムを見る。

「シグナム姐さんは参加しないんで？」

ヴィータが参加しているのに、彼女がここにいるのが気になった。

「私は古い騎士だから……。スバルやエリオのようにミッド式の混じった近代ベルカ式とは勝手が

違うし、剣を振るうしかない私が後衛型バックスのティアナやキャロに教えられることもないしな」

モニターを見ながら、シグナムは自身がフォワード陣に指導するメリットがない事を語る。

「ま、それ以前に私は人にモノを教えるというガラではない。戦法など『届く距離まで近づいて斬れ』ぐらいしか言えん」

騎士としては模範解答なのだが、新人達には最も最悪な解答でもあ

る。

「ははは。すげえ奥義ではあるんですけどねえ」

当たればまさに『一撃必殺』である。そう当たれば、だが。

「みんな、頑張ってますね」

温厚な声がシグナムとヴァイスの耳に入った。

二人が振り向く。

「野上」

「野上の旦那……」

それぞれの呼び方で声の主——野上良太郎に声をかけた。

「完治したのか？」

「ええ。シャマルさんからも戦闘に参加していいって言われています」

良太郎は笑顔で右手を拳にしたり、開いたりと交互に繰り返して完治したことをアピールする。

「そうか」

シグナムの表情が柔らかくなったのをヴァイスは見逃さなかった。

「よっ」

空間シュミレータから一人隊舎へと戻ってきた。

「モモタロス」

良太郎はモモタロスがどこか浮かない表情をしている事が気になった。

*

訓練終了のチャイムが空間シュミレータにいる全員の耳に入った。

「じゃあ、午前の訓練終了！」

教導官高町なのはの一声が上がった。

隊長二人、副隊長一人は平然としているのに対し、フォワード陣はへたり込んでいた。

エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエと同伴していたリユウタロスは対照的に涼しい顔をしていた。

全員肩で息を整えようとしていた。

「はい、お疲れ。個別スキルに入るとちよつときついでしょう？」

「ちよつとというか……」

「その……かなり……」

ティアナ・ランスターとエリオがツツコミを入れるが、弱弱い。

スバル・ナカジマとキャロに至っては何も言わない。

ツツコミに反応する力も失せているのかもしれない。

「フェイト隊長は忙しいからそうしよっちゅう付き合えねえけど、あたしは当分お前等に付き合っつてやるからな♪」

ヴィータは先程のモモタロスとのやり取りとは一転して上機嫌にグラーフアイゼンをへたばつている四人に突きつけた。

「ははは……」

隣にいるフェイト・T・ハラオウンは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「あ、ありがとうございます……」

似たような表情をしていたのは、ツツコミに混ざらなかつたスバルだった。

「それからライトニングの二人は特にだけど、スターズの二人もまだまだ身体が成長してる最中だからくれぐれも無茶はしないように」

「……はい！……」

フェイトが注意し、四人は返事で返した。

「じゃあ、お昼にしようか？」

「……はい!!」

「やったー！お昼お昼♪」

なのはの言葉に四人は先程よりも大きな声を上げて、リュウタロスは諸手を挙げて喜んでいた。

*

八神はやてはシャリオ・フィニーノ、リイン、桜井侑斗を連れて隊舎から出ようとしていた。

デネブは厨房でデネブキャンディーを補充するために調理してい

たりする。

シャリオとリインは口の中をカコンカコンと何かを動かしていた。

「甘いですう〜」

「本当。こんなおいしいキャンディー食べた事ありませんよ〜」

二人とも笑顔になっている。

デネブキャンディーを食べた時になる現象といつてもいい。

ちなみにリインには本来のデネブキャンディーは大きすぎるため、彼女に合わせてデネブが作ってくれているものを口に含んでいる。

「デネブキャンディーのファンがどんどん増えてくるなあ」

味を堪能している二人の表情を見ながら、はやては支給されているジープに乗る。

「作ってる奴の正体知ったら、何人かは確実にショック受けるぞ」

侑斗は製作者がイマジンであることは伏せておいた方がいいと考えている。

機動六課の面々はデネブを知っているし、彼の料理に虜になっている者も多い。

だから作り主がイマジンであっても、驚くことはないし偏見も持っていない。

厨房スタッフに置いてはデネブと共に仕事をするのが楽しくて仕方がないと言っていたらしい。

だがこれが他の課となるとそうはいかない。

機動六課以外の管理局員達がイマジンに関して偏見や差別、恐怖といった感情を抱いている事は否定できない事実だ。

(ま、そんな物好きいるわけないか……)

デネブの料理食べたさに機動六課の食事に足を運ぼうとするアドベンチャーはいないだろうと侑斗は踏んでいる。

「侑斗さん。どないしたん？考え事か？」

「ん？いやつまらない事だ」

はやても特に詮索しようとは思わなかった。

「あ」

はやての視線と声に、侑斗、シャリオ、リインも顔を向ける。

そこには、なのはを始めとする空間シミュレーターで訓練を受けている面々がこちらに歩を進めていた。

「みんな、お疲れさんやなあ」

はやての劳いの言葉に、フォワード陣は返事で返す。

「はやて達は外回り？」

ヴィータの言葉に「その通りですう」とリインは返す。

「ちよつとナカジマ三佐とお話してくるよ。それにもう一人の仮面ライダーも連れてきてほしいって頼まれとったしね」

「俺だけ連れてこいってのも変な話だ。野上の事はまるで知ってるみたいだし……」

侑斗の言葉に一番反応したのはフェイトだった。

頬を赤くしていたのだから。

「なるほど……」

侑斗はフェイトの表情を見てから、納得したようだ。

「スバル、お父さんとお姉ちゃんに何か伝えとく事あるか？」

はやてはもしスバルがその手の事があるのなら、引き受ける気だった。

「いえ、大丈夫です」

スバルは左手を軽く手を振って、特にないと表現した。

「そっか」

はやては首を縦に振って、ジープの運転席に座る。

イグニツションキーを回してエンジンを噴かす。

助手席に侑斗が座り、リインは運転手のはやての邪魔にならないように侑斗の右肩に乗っていた。

「じゃあはやてちゃん、リイン。行ってらっしゃい。桜井さん、二人の事をお願いします」

「ナカジマ三佐とギンガによろしく伝えてね」

なのはとはやてが一言二言告げる。

「うん」

「行ってきまーす」

はやてがアクセルペダルを踏んで、ジープがタイヤを回転させて走

り出した。

昼時は食堂も混んでいた。

陸士隊服に身を包んだ男女がテーブルに席を着いて胃袋を満たそうとしている。

フォワード陣とシヤリオは一つのテーブルで食事をしていた。

リュウタロスはモモタロス達のところで食事をしていた。

「なるほどお、スバルさんのお父さんとお姉さんも陸士部隊の方なんですわね」

キヤロは昼食のナポリタンをフォークでくるりと巻いていた。

「うん。八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだった」

スバルはナポリタンを口に放り込みながらも解説した。

「はあ」

「しかし、ウチの部隊って関係者繋がり多いですよな」

キヤロはスバルの説明に納得し、ティアナはナポリタンを口に放り込みながら機動六課の内部事情に斬り込んだ。

「隊長達も幼馴染同士なんでしたっけ？」

ティアナはこのメンツの中で機動六課の事情に一番詳しいシヤリオに訊ねる。

「そうだよ。なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃はそこの世界で生活していたとか……」

パンをちぎって口の中に放り込みながらシヤリオは話し始める。

「えーと、管理外世界の97番……」

エリオが口にナポリタンを放り込んだ状態でシヤリオの代わりに答える。

「97番ってウチのお父さんのご先祖様が住んでいた世界なんだよねえ」

スバルがトングでナポリタンを二、三回掴んで自分の皿に放り込む。

「そうなんですか」

「うん」

更にエリオの皿にもナポリタンを放り込んだ。

「そういえば名前の響きとかも何となく似てますよね。なのはさん達と。あれ？そうなると良太郎さんや桜井さんも97番の出身って事ですか？」

「地球出身ってところは同じだけど、僕達は海鳴市のない完全な別世界の地球だけどね」

キャロの疑問に突如回答が返ってきたので、全員が視線を向けるとそこには良太郎がいた。

椅子を空いている席から一つ借りて、スバルの隣に座る。

「それって並行世界——パラレルワールドって事ですか？」

「まあ……そうなるね」

ティアナの質問に良太郎は答えるが、自信は今ひとつだった。

良太郎にとつて、SFというジャンルとしてあまり話題に出さなかったとしても彼女達にとつてはごく当たり前の話題らしい。

「あれ、だとすると野上さん達ってどうやって来たんですか？」

スバルが訊ねてきた。食べる作業を続けたままだが。

「そういえば以前は私が質問した時は、答えませんでしたよね」

ティアナは以前にも似たような事を訊ねたことがある。その時ははぐらかされたのだ。

「まあね。今後一緒に行動するか否かがわからない人達を巻き込ませるわけにはいかないうから言わなかったんだだけどね。これからは一緒に行動するから教えて

おいた方がいいね」

良太郎が一瞬だが真面目な表情になった。

だからといって、戦闘時に出すような雰囲気はなかった。

「僕が住んでいる世界と君達がいる世界で共通するものってなに？」

「時間、ですね」

良太郎の問いに即答したのがシャリオだった。

「うん。世界は違っていても時間という概念が存在しているなら、『時の空間』が存在している事になるからね。後は各々の空間を繋いでいる『橋』を渡れば行けるってわけだね」

「デンライナーはタイムマシンだから次元航行は不可能ですからね。気になってたんですよ」

「ほとんど裏技ですよね……」

タイムマシンで次元航行をした方法を知り、シャリオは納得しティアナはそれが正攻法でないと眩き、残りの面々は目を丸くしていた。「そういうえばエリオはどこ出身だっけ？」

話題を切り替えたのはスバルだ。もちろん食べる事は中断していない。

「あ、僕は本局育ちなんです」

エリオは表情を崩すことなく食べながら答える。

「住宅育ちって事？」

スバルは問い続けるが、ティアナ、シャリオ、キャロは表情を曇らせていた。

良太郎には彼女達が何故表情を曇らせているのかがわからないため、何も言えない。

「本局の特別保護施設育ちなんです。八歳までそこにいました」

エリオの回答にスバルも表情が変わった。

自分の質問がエリオの過去の傷を抉っている事を理解したのだ。

ティアナがじーつと睨んでいる。

二人の間で念話の回線が開かれて、ティアナがスバルを罵倒したのだと傍から見て推測した。

そんなやり取りを見たエリオは何とかとりなそうとした。

「あ、その気にしないでください。優しくしてもらってたし全然普通に幸せに暮らしてましたんで……」

「ああそうそう。その頃からフェイトさんがエリオの保護責任者なんだもんね」

エリオが幸せを堪能している表情で言いながら、シャリオがその事についてフォローを入れた。

「はいーもう物心ついた頃から色々よくしてもらって、魔法も僕が勉強するようになってから時々教えてもらってて、本当にいつも優しくしてくれて僕は今でもフェイトさんに育ててもらってるって思っ

ます」

エリオがフェイトの事を思い出しながら語っている。

その表情を見て、同じ食卓に着いている者達は安心していった。

ただ一人、良太郎を除いては。

*

陸士108部隊隊舎。

隊舎の規模は機動六課が海上付近である事を考慮すると若干劣っている。

建物は中古物件を改築したのか外観は『隊舎』というよりも『校舎』を髣髴させるものだった。

「陸士108部隊隊長、ゲンヤ・ナカジマ三佐だ」

「桜井侑斗です。今は機動六課の民間協力者となっています」

ゲンヤと侑斗が互いに握手を交わしていた。

「ま、座ってくれ」

「ほな、お言葉に甘えて」

「失礼します」

ゲンヤがソファに座るように促し、はやと侑斗は座る。

「新部隊。なかなか調子いいみたいじゃないか。イメージを唯一倒せる部隊って事でも一目置かれてるぞ」

「そうですね。今のところは、です。任務で遭遇したイメージも仮面ライダーの皆さんが戦ってくれてるおかげで被害は出てませんしね」

ゲンヤの称賛に、はやては内心喜びながらも平静を装っていた。

「しかし今日はどうした？古巣の様子でも見に来たか？それに俺が仮面ライダーに会ってみたってワガママ言ったものの、こんな短期間で叶えてくれるほどヒマでもねえだろうに」

「えへへへ。愛弟子から師匠へのちよつとしたお願いです♪」

はやてが来た目的を素直に打ち明けた直後に、部隊長室のドアが開いた。

入ってきたのはギンガ・ナカジマとリンだった。

「ギンガ♪」

「お久しぶりです、八神二佐」

盆にお茶を乗せたギンガが笑顔で応じた。

「おう、紹介するぜ。こちらは部下のギンガ・ナカジマ陸曹。ギンガ、こちらは……」

「仮面ライダーゼロノス。桜井侑斗さんですね」

ゲンヤが紹介する前にギンガは予習をしていたのか、侑斗の名前を口にしました。

「ギンガ・ナカジマ陸曹です」

「桜井侑斗だ。ナカジマというと……」

「ナカジマ三佐は私の父で、スバルは私の妹になります」

侑斗が訊ねたかったことをギンガが先に答えてしまった。

「なるほど」

そう言う以外に侑斗は何も出てこなかった。

*

良太郎は現在シヤリオと共にフェイトが待機している駐車場まで歩いていった。

「シヤリーさん、教えてほしい事があるんだけどいい？」

「何でしょうか？野上さん。私でわかる範囲でしたら」

シヤリオは笑顔で応じてくれたので、良太郎は真面目な表情で口を開き始める。

先程の食堂の件でどうしても聞いておきたい事があるからだ。

「エリオの出身をスバルちゃんが聞いた時、みんなの表情が曇ったよね？あれはどうして？」

シヤリオの笑みも消えて、真面目な表情になる。

「……野上さん。この事は他言無用でお願いしますけどよろしいですか？」

「もしかして管理局の『闇』の部分？」

確認するかのように良太郎が訊ねると、シヤリオは黙って首を横に

振る。

二人は立ち止まって近くの壁に背を預ける形となる。

先にこの形をとったのはシャリオだ。

歩いてペラペラ喋れるほどお気楽な内容ではないという表れだろう。

天井を見上げながら、シャリオが口を開き始めた。

「野上さんの想像通りです。エリオがいた特別保護施設は決しいところとは言えませんが、あの子もそこで良くしてもらったというわけではないですね」

「やっぱり……」

シャリオの回答は良太郎の想像通りなので、動揺する材料にはならなかった。

「でも、どうして野上さんはその事に気づいたんですか？さっきのやり取りではこの手の内情を知らない人達——部外者に近い野上さんが気づくとは思えないですよ。」

フェイトさんから前もって聞いたって事は……ないですね。聞いていれば私に訊ねるようなことはしませんし……」

シャリオは自身が組み上げたロジックに矛盾が存在している事に気づいて打ち消した。

「シャリーさんやランスターさんだけならともかくキャロちゃんまでが同じような表情を浮かべたし、エリオに質問したスバルちゃんも自分がどんな質問をした事かを」

気づいた時には、やっぱり同じような表情を浮かべてたというのが、一つかな」

良太郎はシャリオが持った疑問に答えていく。

「もう一つは、何ですか？」

「もう一つはエリオが『幸せに暮らしてた』と公言した事、かな。できるならそれが彼の本心だと思ったんだけどね。フェイトちゃんが保護者みたいなものだと聞かされているから」

鵜呑みにはできなかったんだよ」

「フェイトさんが保護責任者だから鵜呑みにできないというのはどう

いう事ですか？」

「シャリオの視線は対面の壁のままだ。

「フェイトちゃんって自分の事より、周りの人の事を優先しちゃうでしょ。エリオやキャロちゃんがその姿を見ていたとしたらさ、きつとフェイトちゃんを始めとして周りの人達に

迷惑をかけないように気遣ったりするって十分に考えられるんだよ」

良太郎の言っている事は自身がイメージできるフェイト像が起すかもしれない行動を言ったただけだ。

十年で変わってしまったえば、それまでだが。

「シャリオが何も言わないところからして、概ね正解と判断していいのだろう。」

「それにしても野上さんとフェイトさんは十年会ってないんですよ？よくそこまで……。勝手知ったる間柄、だからですか？」

「友達以上だとは断言できるよ」

良太郎はフェイトに告白されたことを思い出しながら答えた。

「ティアナやスバルに訊ねられた時は『友達』と言ったのは質問された故に即答したものだ、今になるともう少しマシな言い方があったのでは？」と反省してしまう。

「さて、行こうか。フェイトちゃんを待たせたら悪いしね」

「はー。」

二人は壁から預けていた背を離れ、駐車場まで向かった。

*

108部隊長室には現在、はやてとゲンヤの二人が話を詰めていた。

はやてはソファから立ち上がり、予め持っていたデータをモニターとして展開していた。

映像には赤色の結晶体——レリックが映し出されていた。

ゲンヤは娘が淹れてくれた緑茶を啜りながら、モニターを見てい

る。

(また茶の葉変えたな……)

休憩の合間に淹れてくれていいるお茶とは違うと見抜けるのは自分の舌がまだ腐っていない証拠だとゲンヤは納得づける。

「お願いしたいんは密輸物のルート捜査なんです」

「お前のところで預かってるロストロギアか」

はやてが本日の来訪目的を打ち明け始める。

ゲンヤとしては娘の茶の味を楽しむことを中断した。

「それが通る可能性のルートがいくつかあるんです。詳しくはリインがデータを持ってきていますので後でお渡ししますが……」

ロストロギアを正規のルートで運搬するなんてことは現実にはあり得ない。

それは質量兵器をハンドバッグのような感覚で往来を歩くに等しい行為だ。

「ま、ウチの捜査部を使ってもらうのは構わねえし、密輸調査はウチの本業つちや本業だ。頼まれねえことはねえんだが……」

手は貸したいが、ゲンヤとしては渋ってしまう理由もあった。

直接108部隊に調査依頼をするととなると、後々面倒なことになりかねないという心配がある。

イマジンという怪人までを相手にしなければならぬ今日、身内で小競り合いをしたくないものだと考えてしまう。

「八神よお」

ゲンヤはひとつハッキリさせてみる事にした。

「他の機動部隊や本局捜査部じゃなくてわざわざウチに来るのは、何か理由があるのか？」

はぐらかすよりストレートに訊ねる方が、はやても答えやすいだろうと踏んでだ。

「密輸ルートの調査自体は、彼等にも依頼しているんですが地上の事はやっぱり地上部隊がよく知っていますから」

彼女の言う『地上の事』というのは、何かと規制が厳しい組織系統の事も指しているのだろう。

(実績がねえに等しい機動六課がデカイツラして頼みに来たって思ってたんだろうなあ。連中)

新設部隊を軽視するというのも地上部隊の『負』の風習になっていたりすることも知っている。

(だから、108部隊を本命にしてきたわけか……)

はやてが先に依頼した二つの部隊は機動六課の風当たりを悪くしないためのカモフラージュとも考えられる。

「ふむ。まあ筋は通ってるな」

先の二つを差し置いて、108部隊を通して来たら『頭越し』となつて揉めるのは確実だからだ。

避けたかったことをしてくれたので、ゲンヤは内心褒めておくことにした。

茶を啜る。

「いいだろう。引き受けた」

腕をテーブルに置いて、足を組みながら了承した。

「ありがとうございます」

「捜査主任はカルタスでギンガ……ナカジマは副官だ。二人とも知つた顔だし、ナカジマならお前も使いやすいだろう」

はやては協力の依頼が成功したことに笑顔を浮かべながらも、ゲンヤの方針を聞き漏らさずに聞いている。

ギンガを『ナカジマ』と呼称したのは公私混同しないための割り切りだろう。

「はい。機動六課の方はテストロッサ・ハラオウン執務官が捜査主任になりますから、ギンガもやりやすいんじゃないかと……」

ソファに座って茶を啜る準備をしながら、はやては機動六課での方針を話していく。

手には腕が収まっていた。

108部隊隊員事務室。

「なるほどな。だからあんた達はイマジンを『天災』扱いしているってわけか」

「はい。私は直接アレを体験してきたわけでも見てきたわけでもありませんけど、訓練校生時期でも嫌というほど聞かされましたから」

「リインもはやてちゃん達から教えてもらったです」

侑斗がギンガとリインに教えてもらっている事とは『時空管理局員が何故、イマジンを『天災』扱いしている理由』だ。

この事を話してくれているギンガとリインの表情には『恐怖』の色が浮かび上がっていた。

二人に教えてもらった出来事とは、『0069年の悪夢』だ。（第三部第十一話参照）

時空管理局がイマジン事件と関わる中で一大汚点といってもいい事件だ。

「その事件のせいで、イマジンに対してできる手段として高ランク魔導師への戒厳令が敷かれたわけか」

「イマジン一体の戦闘能力は最低でも魔導師ランクAAA―だと聞きます。ランクの低い魔導師が一部隊総出で互角に戦えたとしても、被害は甚大になる事も確実です」

「イマジンが絡む事件に関してはどの部隊も積極的にならないのはそういう理由があるんです」

ギンガとリインの言い分を侑斗はしっかりと聞く。

「殉職者を増加させないための苦肉の策、か……」

侑斗は右手を拳にして強く握ってしまう。

自分達が課せられている責任と期待は思っている以上に大きいものだと自覚した。

戦いたくても戦えないという無念。

戦えても力不足ゆえに何もできないという無念。

『イマジンと戦える者』というのはそういった者達の無念も背負っているという事になる。

（だからといって、今更それらを背負って戦いますとも言えないしなあ）

侑斗の本音としてはそんな気持ちを持つとうという気にはなれない。今までだって、『自分が決めた事』だからやってきただけなのだから。

『義務』でやってきたわけではない。

この部屋にいる陸士部隊員を見回す。

(この中にイマジンと戦って人々を守りたいって気持ちを持っている人達は多いんだろうなあ)

そのような風に考えても、侑斗は『義務』で戦うつもりはないが。

「心の片隅にでもおいておくか……」

侑斗の呟きは今後の方針を話しあっているギンガとリインの耳には入っていないかった。

108部隊隊長室。

「スバルに続いてギンガまでお借りするかたちになってしまっ、ちよつと心苦しくはあるんですが……」

「なあに、気にしないでくれ。スバルは自分で選んだ事だし、ギンガもハラオウンのお嬢と一緒に仕事で嬉しいだろうよ」

二人は話を終えて、今のところ世間話をしていた。

「しかしまあ気づけば、お前も俺の上官なんだよな。魔導師キャリア組の出世は早えなあ」

しみじみとゲンヤは、はやてを見ながら言う。

それはかつての部下が上司へと逆転されたというような嫉妬ではなく、教え子が自分の手元から離れて無事にやり压せている事への満足と一抹の寂しさがあつた。

「魔導師の階級なんてただの飾りですよ。中央や本局に行ったら一般士官から小娘扱いです」

苦笑いを浮かべながら、はやては自身の体験談を語る。

「だろなあ。あ、すまん。俺も小娘扱いしちまったなあ」

「ナカジマ三佐は今も昔も尊敬する上官ですから」

「そうかい」

はやての言葉をゲンヤは素直に受け取る事にした。

『失礼します。ラット・カルタス二等陸尉です』

橙色のモニターが出現して、中央に映し出されているのは陸士隊服を着た青年だ。

「おう。八神二佐からの外部協力任務だ。ナカジマを連れてちよいと会議室で打ち合わせしてくれや」

『はっ。了解しました』

青年——カルタスは任務と方針を告げられて了承した。

同時にモニターが消滅した。

「っーこった。ところで八神よ」

「何ですか?」

「お前、あの兄ちゃんどこまで進んでるんだよ?」

ゲンヤの瞳の色には『好奇心』が浮かび上がっていた。

「へ?兄ちゃんって誰です?」

はやてはゲンヤが何を言っているのかわからない。

仕事の話ではないという事を理解しているのだが。

「お前、事件や他人の事には察しがいいくせに自分の事になるとてんでだな……」

ゲンヤは先程までの切れ者と今日の前にいる天然娘が同じ人間なのかと呆れている。

「桜井侑斗だよ」

「なっ!?わ、わ、私と侑斗さんが、ど、どないしたんですか!?!」

はやては思いつきり動揺していた。

「わかりやすいなあ」

「ずずーっと茶を啜っているゲンヤは落ち着いていた。

「その様子だと大して進展してねえみてえだな」

「し、進展も何も私と侑斗さんはそういう関係やないですし……」

はやては顔を赤くしながら言い訳をする。

「そうかあ。俺から見たらものすごくわかりやすいけどな」

ゲンヤはにやにやしなから、はやてを見ている。

「へ、変な詮索せんとしてください……」

顔を赤くしながら言うから、はやてには迫力がなかった。

「お前があのお兄ちゃんとうそういう関係じゃねえってんだつたら、スバルかギンガのどっちかを見合いさせてみるってのもいいかもなあ」

「み、見合いですか……って駄目です駄目です!!」

「何でだよ？お前には関係ねえんだろお？」

反対するはやてに対して、ゲンヤは面白そうににやにやとしている。

「スバルとギンガの将来のために言うてるんです！侑斗さんはコーヒー飲まへんし、椎茸は残すし、意地悪言うし……」

文句をぶちぶちとはやては言い始める。

「無愛想やし、お世辞の一つも言わへんし、デネブちゃんをすぐ絞めようとするし……」

まだ続く。

ゲンヤとしては「よくそれだけ言えるもんだな」と内心で感心していた。

「でも本当は間違ったことをした人がいたら誰であろうと本気で怒れるし、思いやりがあつて優しくてちよつと寂しがり屋な人なんです……」

最初の剣幕と違い、どこか懐かしく思い出すように語っていた。

「なんだよ。最後はノロケかよ……」

ゲンヤは涼しさを味わうためにパタパタと右手を団扇のように振っていた。

「ま、その辺りの話はまた聞かせてもらおうとして、打ち合わせが済んだらメシでもどうだ？」

「はい……」緒します」

「あの兄ちゃんは連れてこいよっ」

「うううう」

ゲンヤの一言に、はやては先程のやり取りを思い出して顔を赤くしながら睨んでいた。

*

時空管理局首都中央本部。

時間は既に夜へと切り替わっていた。

ミッドチルダの夜は天候が良ければ、星を一面に見る事ができる。

良太郎は初めてその光景を見た時、心を奪われた。

彼の住んでいる世界では場所にもよるが、人工的に作られた光のせいでこの天然の光を拝むことはなかなかできない。

田舎にでも行けば話は別なのだが。

(隊舎から距離があるにしても、何だかんだで到着したのが夕方だもんなあ)

まず車両事故による渋滞。

その後は、調査する資料を忘れてきたための往復。

最後には端末使用が満席だったための空席待ち。

(これってやっぱり僕のせい……)

自分がただ同伴するだけでこのようになるという自覚はある。

機密事項などを調査するために設えているためなのか、室内は薄暗く陰気な雰囲気があった。

良太郎は端末に一つしか椅子がないため、受付係に頼んでパイプ椅子を二つ借りてセッティングした。

「ありがとう。でも、どこで?」

「受付さんに聞いてみたら、貸してくれたよ」

フェイトが礼を言いながら、パイプ椅子の出所を訊ねてきたので正直に答えた。

シャリオはカタカタとコンソールを操作している。

「レリック自体のデータは以上です」

モニターに映し出されている内容を凝視しても良太郎には首を傾げるしかない。

全くわからないからだ。

ただ、ファイリングでレリックが『危険なモノ』だという事だけはわかるつもりだが。

「封印はちゃんとしてるんだよね？」

「はい。それはもう嚴重に」

危険物を何の制御もかけずに外に放り出すような愚行は行わない。

「それにしてもよくわからないんですよね。レリックの存在意義って……」

「それ、本当なの？」

シャリオの言葉に、良太郎は耳を疑った。

あれだけ調査しているのに、何一つわかっていない事にだ。

「はい。わかつている事と言えばエネルギー結晶体にはよくわからない機構がたくさんあるし、動力機関としても何だか変なんですよね……」

「それってつまり有効利用ができないって事？」

「そうなるね。それどころかレリックを使う事で、私達に恩恵をもたらすのかそれとも災厄を招く事になるのかも今のところは五分五分ってところになるね」

シャリオと良太郎のやり取りを聞きながら、フェイトが口を開く。

「それに、すぐに使い方がわかるようならロストログア指定はされないからね」

そしてまとめた。

シャリオがコンソールをカタカタと操作する。

「そういえば良太郎達はお給料は五月からだよね？四月分もまとめたの計算になるんだよね」

「うん。民間協力者ってどのくらいもらえるの？」

金銭に卑しいわけではないが、良太郎にしてみれば気になる事なので訊ねてみる。

「そうですね。民間協力者は正局員よりも扱いは下になりますから

……。六課で例えるならエリオやキャロよりも下ですね」

「アルバイトみたいなものか……」

シャリオの説明に良太郎は納得する。

「でも良太郎は今回は多分、私達よりも貰う事になるよ」

フェイトが納得している良太郎に口をはさんだ。

「あ、そうか。『イメージ報酬』ですね」

「イメージ報酬？」

シヤリオの聞き慣れない言葉に良太郎は返す。

「イメージを倒した人に与えられる特別報酬だよ。はやてが申請してくれているから口座に入ってるよ」

フェイトが簡潔に説明した。

「ちなみにそれってどのくらいなの？」

懸賞金扱いならばまばらだが、もし額が設定されているのならば大した額にはならないと良太郎は予想する。

実際、警視総監賞といっても感謝状と本当に些少の金額しかもらえないというのは既に知れ渡っているものだ。

「次元犯罪対策捜査本部にかかる総額、かな。規模にもよるけど最低でも五千万だね」

「%&\$#!」

あまりの額に良太郎は場が場だけに、大声を張り上げる事は自粛したためむせてしまった。

「大丈夫？」

「う、うん。額が額なだけにビックリしただけ……」

むせている良太郎の背中をフェイトがさする。

「仕方ありませんよ」

シヤリオはむせるの無理はないと言う。

「あ、こっちはガジェットの残骸データ？」

「はい。こっちはシグナムさんやヴィータさんが捕獲したものと大差はありませんね」

モニターには破壊されたガジェットドローンが幾つものウインドウで表示されて映し出されていた。

「新型も内部機構も大差ありませんし……」

ウインドウの数が増えて、映像は外観ではなく内部がメインになっていた。

「「あ」」

良太郎とフェイトが同時に声を上げた。

二人の顔つきも真剣なものになっていた。

「シャリー。ちよつと戻して。さっきのⅢ型の残骸写真」

「は、はい」

フェイトの指示に従うようにシャリオはコンソールを操作する。

「多分、内面機関の分解図……」

モニターに表示されているウインドウが遡行されていく。

「それ！」

フェイトの声にシャリオは手の動きを止めた。

「これ宝石？それともエネルギー結晶ですか？」

シャリオには覚えがないようだ。

だが、自分とフェイトには忘れられないものだ。

何せ二人が出会い、そこから現在に至るまでの経緯をもたらしたロストログアだからだ。

「ジュエルシード」

二人は示し合わせたわけでもなく、同時に名称を口にした。

「随分昔に私となのはが捜し集めてたもので、良太郎達と出会うきっかけになったロストログア……。今は局の保管庫で管理されているはずのロストログア……」

「なるほどお。ってなんでそんなものが!？」

シャリオが納得し、驚嘆の声を上げる。

「横流しした人がいるって事になるね」

良太郎の一言に二人は、納得するしかない。

それは同僚にガジェットドローンの製作者と繋がりのある人物がいるって事になる。

「あとシャリー、この部分を拡大して。何か書いてある」

フェイトが指定する部分——ジュエルシードの右斜めには金のプレートが付着していた。

プレート部分が拡大される。

何か文字の様なものが書かれていた。

「これって名前ですか？」

「ジェイル・スカリエツティ」

シヤリオの問いにフェイトが即答した。

彼女の声色に某かの『想い』が含まれている事を良太郎は見逃さな
かった。

第二十四話 「動き出す闇の者達」

「ジェイル・スカリエツティ……」

フェイト・T・ハラオウンが眼前のモニターに映し出されているガジェットドローンⅢ型の分解図の金色のプレートに刻印

されている文字を読み上げた。

フェイトの声に某かの『想い』が含まれている事を野上良太郎は見逃さなかった。

「誰それ？」

少なくともカタギではないという事はフェイトの口調から理解できるがどういふ存在なのかはわからない。

フェイトがシャリオ・フィニーノに替わってコンソールを操作する。

モニターに映る映像には長い文章が流れるように表示されていく。ミッドチルダの文字をある程度は読めるようになった良太郎は目で追いかけてながら黙読する。

(罪状。ジェイル・スカリエツティのだね)

それでも専門的な言葉が多すぎるため、途中で匙を投げた。

「ドクター……。ジェイル・スカリエツティ、ロストログア関連の事件を始めとして数えきれない罪状で超広域指名手配されている一級捜索指定の次元犯罪者だよ」

フェイトが良太郎とシャリオに教えるように語る。

モニターにはスカリエツティの全体写真とバストアップ写真が映し出されていた。

外見年齢は二十代中頃から後半、もしくはは三十路とも考えられるが罪状の数と年齢が合わないし別世界（こ）では外見と実年齢がイコールにならない事は体験済みだ。

「次元犯罪者……」

「ちよつと事情があつてね、この男の事は何年か前からずっと追つて
るんだ……」

良太郎もシャリオも今ここにいるフェイトが自分達が知っている
フェイトではないと感じた。

彼女の口調からは先程から感じた『想い』があつたし、写真を見て
いる彼女の瞳にも某かの『想い』が宿っていた。

(どう見ても、友好的つてわけじゃなさそうだね……)

口には出さなくてもそのくらいはわかる。

フェイトが語つた『ちよつとした事情』というのが気になった。

(恐らくこの犯罪者を追いかけている背景は、なのはちゃんや八神さ
んも教えていないはず。という事は出生繋がり?)

飛躍した推測だと思う。

「そんな犯罪者が何でわざわざこんなわかりやすく手がかりを？」

「本人だとしたら挑発。他人だとしたらミスリード狙い。どちらにし
ても私やなのははもちろん、別世界から来た良太郎達の事を知つて
るんだ」

「君やなのはちゃんが絡んでいる事を知っていると、僕達の事
も知っているつて何故思えるの?」

シャリオの質問に適切にフェイトは回答するが、良太郎が更に質問
を投げかけた。

「今まで計画的にかつ狡猾に事を進めてきた男だよ。自分達が敵に回
したら最も厄介な相手の事を知らないまままで済ますとは思えないか
らね」

「なるほどね」

犯罪にも色々と種類がある事を良太郎は記憶の底から引つ張り出
す。

「本当にスカリエツティが首謀者だとしたら、ロストロギア技術を
使つてガジェットを製作できるのも納得できるし、レリックを集めて
いる理由にも大体の想像がつく……」

「この人がイマジンに興味を持つ事つてある?」

「十分にあり得ると思うよ。イマジンのエネルギーはスカリエツティ

には魅力的だからね」

フェイトは横から発した良太郎の言葉も耳に入っており、内容に首を縦に振った。

「シャリー。このデータをまとめて急いで隊舎に戻ろう。隊長達を集めて緊急会議をしたいんだ」

「はい。今すぐに」

フェイトの指示に従い、シャリオは今まで停めていた両手を動かしてコンソールを操作する。

「良太郎達にもこの会議には参加してもらいたんだけどいいかな？」

「もちろん。この人が『サイキョウニシテサイアクナルモノ』に繋がっているとも考えられるしね」

*

和食を売りにしている小料理店にゲンヤ・ナカジマの引率で桜井侑斗、八神はやて、ギンガ・ナカジマが食事をしていた。

「兄ちゃん。どうした？さつきからしかめっ面じゃねえか」

斜向かいとなっている侑斗の表情が食事とかけ離れているのでゲンヤは訊ねた。

「ああ。和食っていつでもデネブが作るヤツの方が美味しいと思って……」

喫煙経験もなく、味覚は狂っていないので侑斗の舌は確かなものだ。

「侑斗さん。それは贅沢すぎや」

隣で味噌汁を啜っているはやてが窘める。

「デネブさんというのは？」

左利きのギンガは箸を左で持っており、刺身を掴んでいた。

「侑斗さんと契約しているイマジンさんや。ちなみに料理の腕は私と同等かそれ以上やね」

質問に答えたのは契約者の侑斗ではなく、はやてだった。

「お前とタメ張れる奴がいるとは驚きだな……」

ゲンヤは、はやてが研修の際に夜食を作ってもらった事があるのでその時の味を思い出していた。

「もし六課に来る機会があったら一度は食べた方がいいですよ」

「お前、宣伝してどうするんだよ……」

はやての言葉に、侑斗がツツコミを入れた。

「そういえば桜井さんは、八神二佐と同じ日本人なんですよね？」

「別世界だけだな」

ギンガの質問に、侑斗は短く答える。

「日本の料理もこの店みたいなモンなのかい？」

ゲンヤも好奇心を隠してはいなかった。

侑斗は即答はせずに、お品書きを手にしてからパラパラと捲っていく。

「郷土料理はこの店にはありませんが、外国人が思い描く和食のほとんどはこのお品書き通りだと思えます」

お品書きを戻して、侑斗は感想を語る。

はやての眼前に、モニターが出現する。

送信者はフェイトだ。

「フェイトちゃん。何か進展あったん？」

『もしかして食事中？だったら改めようか？』

「いや、構へんよ。どうしたん？」

『実はね……』

フェイトが語る内容は侑斗の耳に入らない。

音声が届わってこないのだ。

そうなつてくるとフェイトの肉声は、はやてのみに伝わっているという事になる。

大衆食堂とはいえ、どこで誰が聞いているかもしれないのでこのよな通信方法を取るのはいい選択と言ってもいい。

ギンガは気になっていられるらしく、箸が進んでいない。

対してゲンヤはとくに気にならないわけではないが、落ち着き払った態度で箸を動かしていた。

(この手の職場に長くいた故に身に着いた度胸だな……)

侑斗も見習って、気にしない素振りで箸を動かすことにする。

「うん。了解や。すぐ戻るから対策会議しよ。うん、侑斗さんも参加すると思うから伝えとく。ちょうど捜査の手も借りれた事やしね。うん、そんならまた後で」

伝えたい事を簡潔に伝え終えたらしく、はやての眼前に出現していたモニターは消えていた。

「ふう……」

一息吐いた。

(本当に二十四時間勤務だ)

はやての横顔を見ながら、侑斗は思った。

これで慢性的な人手不足なのだから、一人にかかる負担は半端なものではないだろう。

超過勤務に耐えきれずに退職をするのもある意味では領けるといふものだ。

「何か進展ですか？」

「俺も参加すると思うって事は、俺達の目的にも繋がっているって事か？」

ギンガと侑斗が、はやてに即座に質問する。

「うん。事件の犯人の手掛かりがちよつとな……。確実に繋がっているとは言い切れへんけど、知っておいて損はないかもしれへんで」

「今でも暗礁状態なんだ。それを抜ければなら藁でも掴むさ」

はやてが立ち上がった、背もたれにかかっている上着を掴む。

侑斗も最後のお茶を啜ってから席から離れる。

「というわけで、すみませんナカジマ三佐。私達はこれで失礼します」
上官が帰ろうとするため、礼儀正しいギンガは席から立ち上がる。

「おお」

ゲンヤは立ち上がらずに、食事をしている。

はやてが伝票を取ろうとするが素早くゲンヤが引っ手繰った。

「さっさと行ってやんな。部下が待ってんだろ？」

ひらひらと伝票でゲンヤは『勘定は払ってやる』と仕草をした。

「はい。ギンガはまた、私とフェイトちゃんから連絡するな」

「はい。お待ちしています」

ギンガは快く応じた。

「あ、兄ちゃん」

ゲンヤは侑斗に顔を向ける。

「八神の事を頼むぜ」

「最善は尽くします」

はやてが顔を赤くしたが、何も言わなかった。

正確には言いたいけれど、言えないというのが本音だという事を侑斗にはわかっていた。

*

「お帰り。そしてお疲れ様」

「いえ、ちょうどいい退屈しのぎにはなりましたよ」

天井も床も金色でホルマリン漬けのようになっていて無数の全裸の人間が入っているカプセルが両側に陳列されている。

そのような場所を科学者風の男と金髪の青年が並んで歩いていた。

科学者風の男——ジェイル・スカリエッティは遠方へと出向いて

いた金髪の青年に労いの言葉を送った。

金髪の青年は特に気にした風もなく、涼しい顔をしていた。

『將軍』と『王子』はなんて?」

「それぞれが次元世界を侵略し終えた後でしたからね。随分退屈そうにしていますよ。怪人は手配するとの事です」

「そうかい。それにしてもさすがだね。ある存在がなければ実際に管理外世界97も掌握できていたくらいだからね」

スカリエッティはしみじみと呟く。

「そうですね」

金髪の青年も同意する。

「父さん。『塾』の方はどうなっているんですか?」

「かなりの人数が集まっているよ。彼は実に口のまわる男だからね」
「いつ頃、あちらに送るつもりですか?」

「クライアントの意思を尊重するよ。こちらが勝手に送り込んで資金の援助が打ち切られるのはよくないからね」

スカリエッツィは金髪の青年の顔を見る。
曇っていた。

(そういえば彼とは折り合いが今ひとつよくないんだったね……)

隣の青年と『塾』の中心人物は決して良好な関係を築いてはいない。(珍しいものだ。『將軍』や『王子』とは互いに認め合っているというのに……)

スカリエッツィがふうつと息を吐く。

「やはりまだ反対かい？彼等を使うのは……」

「彼等が役に立つとは思えませんね。『將軍』や『王子』のような高い戦闘力はありませんよ」

「わかっているさ。彼等は特殊な手術を施されているとはいえ、成功作ではないからね」

スカリエッツィは『塾』と呼ばれている団体のメンバーのリストをモニターで展開する。

「驚きましたね。彼等、一度死んでいるんですね……」

「そういえば君は彼等の事をあまり知らなかったんだね。驚いただろ？」

目を丸くしている青年の表情を見て、スカリエッツィは『してやつたり』という表情を浮かべていた。

「じゃあ、彼等は二度死んだって事ですよね。現に死霊になっているんですから……」

「一度目の死は蘇生を施せる状態で、二度目は恐らくその条件が整っていないかったのだろうね」

モニターを操作しながら、スカリエッツィが言う。

「蘇生を受けるうえで最低条件としては、まず肉体が完全に残っている事ですよね」

青年の言葉に、スカリエッツィは首を縦に振る。

「しかし、魔法が浸透していない文明の世界で蘇生技術が存在するのは実に興味深いね」

舌なめずりしている『父』をみて、青年はため息を吐く。

「しかも、その世界名が『地球』なのですからさらに驚きますよ」

「現在、私達が確認しているだけで『地球』というのは三つも存在している事になるね」

さらにモニターを操作すると、今度は地球が三つ映し出されていた。

「二つ目は野上良太郎達が生活している地球、三つ目は『將軍』が標的にして『王子』が生活していたともいえる地球。そして三つ目は『塾』の面々が生活していた地球だ」

「共通するところといえば、魔法文化が発達していないところですね」
「だが、『王子』が生活していた地球にはごく稀にだが突然変異で高い魔力資質を持った人間が誕生するらしい」

さらにモニターが出現する。

ギル・グレアム、高町なのは、八神はやての三人が表示された。

「この三人のようにね」

「彼女達二人は今、自分が生きている事に感謝するべきなのかもしれないですね。『王子』や『將軍』は日本を拠点に世界征服を企んでいたわけですからね」

「日本侵攻で計画が頓挫したために、他国侵攻は打ち切りですからね」
二人の前に出現しているモニターが出現した順番とは逆に逆行するように消滅していく。

「侵攻の妨げになったのは仮面ライダーだけだね」

スカリエツティと青年は歩き出す。

『ゼストとルーテシア、活動を再開しました』

二人の眼前にモニターが出現すると、足が止まる。
モニターに映っているのは一人の女性だった。

彼女は時空管理局の関係者ではない。

総務を担当している戦闘機人——ウーノである。

「クライアントからの指示は？」

『彼等に無断での支援、援助はなるべく控えるようにとのメッセージが届いております』

「自律行動を開始したガジェットドローンは、私の完全制御下というわけではないんだ。勝手にレリックのところ集まるのは大目に見てほしいね」

『お伝えしておきます。それと……』

ウーノが青年を見る。

『例の物がホテル・アグスタのオークションで出品されるようよ。どうするつもり？ 機動六課が黙って見過ごすとは思えないわ』

「その点なら大丈夫です。その事を伝えたら、『王子』の部下の三人が直接取りに行くとの事です」

『ならば大丈夫ね』

青年が告げると、ウーノは安堵の表情を浮かべながらモニターを閉じた。

ガーツという音が鳴りながら、床の一部がスライドしてカプセルが出現する。

そこには両サイドに陳列されているカプセル同様に中身は同じだった。

だが違う部分もあった。

女性ではなく、男性が入っていた。

『『適合者』だと知ったのは、この人物が死んだ後だからね……』

カプセルに手を当てながらスカリエッティが言う。

「蘇生技術を使えばよかったのに……」

青年の言葉にスカリエッティは首を横に振る。

「確かにそれもいいが、蘇生技術を使えば今後の課題はクリアできないからね」

「あつちが立てばこつちが立たず、ですね」

「仕方ないさ」

スカリエッティは台詞とは裏腹に笑みを浮かべていた。

それが合図になって、カプセルはまた地下へと沈んでいった。

*

訓練終了のホイッスルが響いた。

「はぁーい。夜の訓練、おしまい」

高町なのはの一声で訓練が終了した。

ぜえはぁ……ぜえぜえはぁ……。

夜間の空間シュミレーターから激しく乱れた息が聞こえている。

疲弊しきったフォワード陣が座り込んで、息を整えていた。

ちなみに昼間と違って『森林』ではなく『市街地』となっていた。

ありがとうございますましたあ。

半ば屍同然の状態で、フォワード陣は声を出した。

お疲れ様でしたあ。

階段を上って寮へと戻っていく。

「ちちゃんと寝ろよ」

ヴィータは念押しで帰っていく教え子達に釘を刺しておいた。

その間にも、なのははタッチパネルモニターを展開させて空間シュ

ミレーターを調整していく。

その慣れた手つきで片手操作している。

なのはの背中を見ながら、ヴィータは歩み寄る。

「しっかし、お前本当朝から晩まで連中に付きつきりだよなあ。疲れんだろ？」

「私は機動六課の戦技教官だもん。当然だよ」

なのはの声に疲れは含まれてはいなかった。

『あの出来事』以来、ヴィータはなのはの前向きな台詞には常に警戒心を抱いてしまう。

(やな癖、身に着いちまったな)

仲間の台詞を疑うというのは、彼女の的には気乗りしない事だ。

だがそれでも、同じ轍を踏むよりはマシだと自分を納得させる。

「あと、アレだ。なんつーかもつと厳しくしねーでいいのか？あたし等が昔受けた新人教育なんて、歩き方から挨拶まで何でもかんでも厳しく言われてたじゃんか」

鼻頭を搔いてから、腕を組んで当時の事を思い出しながらヴィータは訊ねる。

正直、もう一度経験してみるかと訊ねられたら「二度とやりたくねー」と言い切れる自信がある程だ。

「戦技教導隊のコーチングって、どこも大体こんな感じだよ」

ヴィータを一瞥してから、なのははまた作業を再開した。

「細かい事で叱つたり怒鳴りつけたりしてる暇があったら、模擬戦で徹底的に打ちのめしてあげる方が教えられる側は学ぶことも多いって、教導隊ではよく言われているしね」

「おつかねーなあ。おい……」

戦技教導隊のモットーを知ったヴィータは若干引き気味になる。

タッチパネルモニターのボタンを押すと、空間シミュレータの市街地全体が原型を崩すように揺らいで姿を消した。

「私達がするのは、まっさらな新人を教える教育じゃなくて「強くなりたい」って意思と熱意を持った魔導師達を今よりもハイレベルな戦闘技術を教えて導いていく戦技教導だからね」

展開されているタッチパネルモニターが消滅し、左手に握られているレイジングハート・エクセリオンを待機状態にしてから首に引っ掛ける。

「ま、何にしても大変だよな。教官ってのも……」

ヴィータにしてみれば『性に合わない』とか『面倒だからあんまりやりたくねー』という部類だ。

「でもヴィータちゃんもちゃんとできてるよ。立派立派♪」

なのはは歩み寄って、ヴィータの頭を撫でる。

「な、撫でるな〜!!」

上手く逃れようとするが、なのはの可愛いモノを愛でる時に放たれる雰囲気には何故か勝てない。

とてもその絵面は勤続十年同士とは思えなかった。

「今日の戦闘データ。分類してデータルームに送つといてくれるかな？」

『了解しました』

察へと足を進める中で、前に進んでいるのはとレイジングハート・エクセリオンとやり取りしていた。

仕事の事だという事は聞いていてわかる事だった。

（連中は自分達がどれだけ幸せか気付くまで、かなり時間がかかんだろうなあ。自分勝手に戦ってる時もいつだって、なのはに守られてる幸せに）

ヴィータの表情が引き締まる。

（あたしはスターズの副隊長だからな。お前の事は、あたしが守ってやる！）

なのはの背中を見て、決意を新たに固める。

前を歩いているのはが歩を止めて、こちらを見ている。

「何でもねーよ」

無愛想な返事で返した。

「オメエ、つまんなくなっちゃったなあ」

午前にモモタロスに言われたことが不意に甦った。

（あのヤロオ。好き勝手言いやがって……）

この言葉は今の自分に見れば、核心に触れるものでもあった。

あれから十年経っている。

『闇の書事件』の際の荒々しさはなりを潜めているとも自覚はしている。

（アイツが言ってるのはそういうことじゃねえんだろうなあ……。バカ鬼のくせにこういう事だけは鋭いんだよなあ）

そんな事を考えながら、なのはを寮まで送ってから隊舎に戻って着替える。

着替え終えた自宅である八神家へと帰路を向かおうとしていた時だ。

「まったく、クマの奴。うるさくって眠れやしねえ」

出来る限りなら今最も会いたくない奴と出会ってしまった。

「赤鬼……」

「赤チビかよ……」

現実には残酷なものだった。

ヴィータは現在、モモタロスと歩いている。

進路は八神家だ。

モモタロスがついてきている理由は「眠くないから身体を動かして疲れさせる」ためだ。

「何か言えよ……」

ヴィータが沈黙に耐えられずに隣に歩いているモモタロスに話しかける。

「浮かばねえんだよ」

モモタロスが歩きながら、答えた。

(はやてと侑斗だったら、もっといろいろ言ってるだろうなあ)

口喧嘩はするが、互いに信頼し合っている者同士だ。

会話が弾むだろう。

しかし、自分とモモタロスは違う。

口喧嘩にしても戦うにしても本気になっちゃダメ。

そこには、はやてと侑斗のような穏やかなものはない。

互いに沈黙したまま、歩を進める。

「オメエ、なのはと何かあったのかよ？」

次に先に口を開いたのは、モモタロスだ。

「何でそんなこと聞くんだったよ？」

ヴィータがモモタロスをちらりと見上げるようにして見てから訊ねた。

「暇さえあったら、なのはのいる方に目え向けてたじゃねえかよ」

モモタロスの言葉に、ヴィータは目を丸くし内心では驚愕した。

(見てやがったのかよ……)

普段何も考えてなくせに、目聡いから性質が悪いのだ。

「……まあな」

ヴィータはそっぽを向きながら肯定した。

「それよりも、あたしがつまんなくなっただってのはどういう意味だよ？」

昼間に言われたことをもう一度訊ねる。

「まんまの意味だよ。オメエ自身にわかんねーんだったらわかんねーんだよ」

「何だよ。ソレ」

まるで「自分で捜せ。俺に言わせるな」というような意味合いにも取れた。

一人と一体はまた沈黙のまま歩き出す。

それから十分後。

「おい……」

「何だよ……」

「腹減ったな……」

「言うな。余計腹減るだろうがよ……」

八神家までの途中、モモタロスとヴィータは空腹と戦っていた。

それから更に十分後に屋台ラーメンを見つけ、最後の一食をかけてこの一体と一人がガチンコでジャンケン勝負をしたりするがそれはどこの記録にも残ってなかったりする。

第二十五話 「機動六課 海鳴へ①」旅行気分？」

私の住む世界は時空管理局の管理が行き届いていない世界——
管理外世界だ。

その次元世界はとある一族が全ての実権を握るといふ独裁社会が
浸透していた。

いわばその一族が存在する限り、私を含めてその世界に住む者達は
地獄の毎日といつてもよい。

そしてこれからもその地獄は続くと思われていた。

だが、それはある日突然に幕を閉じる事になった。

その一族が突如現れた者達に滅ぼされたのだ。

私を始め、その世界の住人達はその者達を『救世主』と崇めようと
した。

しかし私達はすぐに知る事になる。

自分達を支配していた者達がまだ、『天使』に見える事を。

その一族を滅ぼした者達こそが真の『悪魔』である事を。

悪魔はわずか半日でその世界を蹂躪し、破壊し、殺戮をした。

その悪魔は自らをこう名乗った。

ゴルゴム

と。

*

「このような手記が残っていたとはな……」

かつてこの次元世界を支配していた一族の城にある玉座の上に
座っている青年がパラパラとページを捲っていた。

その表情は無表情と言ってもいいほど、冷たいものだった。

「燃やしますか？」

玉座の前で膝をついている三人のうちの一人が顔を上げて進言した。

上から下まで白色のロープで必要最小限しか肌しか露出していなかった。

「ダロム、構わん」

青年はその進言を却下した。

パタンと手記を閉じると、玉座の肘置きで頬杖をつく。

「バラオム」

「既に我らがかつていた地球には刺客を放っておりませす」

バラオムと呼ばれた白色ロープの一人が、顔を上げて報告した。

その顔は緑色の岩を顔面に彫刻したかのようなものだった。

とても『人間』と呼べるものではなかった。

ちなみに最初に青年に進言した白色ロープ——ダロムは顔が白く、老人じみた声だったりする。

「あの男の言うように、世界を股にかける仮面ライダーが足を踏み入れているのならば私達が赴いた方が……」

白色ロープの最後の一人が、青年に指示を仰ごうとする。

「ビシユム。今回の刺客は何も仮面ライダーを仕留める事が目的ではない。素性を知ることが目的だ」

「このビシユム。浅はかでした。申し訳ございません」

ビシユムと呼ばれた白色ロープは深く頭を下げ謝罪をした。

「気にするな。どういう因果かはわからないが既に命尽きた我等がこうしてまた地上に足を踏み入れている。ならば果せなかつたことを果たすまで！」

青年が玉座から立ち上がって高らかに宣言する。

ははあ!!

ダロム、バラオム、ビシユムは深く頭を下げた。

*

管理外世界97番 地球 海鳴市。

ボワツと人型ほどの青色の炎が五つ空から地へとゆつくりと降下した。

ググユグユグユググユグユ。

奇妙な鳴き声を上げながら、五体の蜘蛛型の怪人が青色の炎から抜け出た。

そして、互いに目配せをしてから五体は散開した。

*

機動六課フオワード陣がデスクワークをしている頃、野上良太郎と高町なのはが将棋で対決するという構図がレクリエーションルームで行われていた。

なのはが難しい表情をしているのに対し、良太郎は涼しい顔をしていた。

「むむむむむ……」

唸り声まで上げているが、なのははよい手が浮かばない。

良太郎は茶化さずに待っている。

その態度がさらに、なのはを追い詰めていたりする。

(この強さ、フェイトちゃん並みだよ)

泣き言を心の中で言う始末だ。

なのはは、一度たりともフェイト・T・ハラオウンとボードゲームで勝った事がない。

将棋はもちろん、オセロやチェスそして双六に至るまで一度もだ。

「良太郎さん」

「なに？言っておくけど『待った』はなしだよ」

「あのそうじゃなくて、フェイトちゃんにこの手のゲームを教えた事ってありますか？」

フェイトの強さのルーツは良太郎にあるのではないかと推測しての事だ。

「いや、僕はフェイトちゃんとチェスなら何度かした事があるけどその頃から強かったよ」

「ふえ？そうなんですか。てつきり良太郎さんが教えたものだとばかり……」

なのはの言葉に良太郎は首を横に振る。

「フェイトちゃん。テレビゲームはてんで弱いんですけど、この手のゲームはメチャクチャ強いんですよ」

もしも良太郎がフェイトの『ゲームの師』ならば何か教えを請おうと思ったのだが、なのはの期待は見事に裏切られることになった。

「どのくらい強いのか？」

興味がわき、良太郎が訊ねる。

「私やはやてちゃん、すずかちゃんではまず相手にはなりません。アリサちゃんでもいい勝負に持ち込めますけど一度も勝っていません……」

二人は将棋を指す手を止めている。

「クロノ君だと十回戦えば二回くらい勝てばいいくらいですね。ユーノ君やリンディさん、エイミィさんと四回ですね」

「それだけのメンツと戦っても勝率は五割以上をキープしてるなんて……」

「だから男性局員内ではボードゲームでフェイトちゃんに勝ったら、恋人になる権利が得られるという噂まであるみたいですよ」

「うわあ……」

何とも言えないというような想いをこめて、良太郎は声を上げるしかなかった。

ミッドチルダは本日も快晴である。

雲一つない青空。

太陽の光は万物に平等に温かさを与えてくれている。

「本日も良い天気じゃのお」

「巡礼日和ですなあ」

聖王教会で巡礼することを日課としている老夫婦が笑顔で言っ

いた。

「これも聖王のご加護です」

「まったく、まったく」

別の老夫婦が本日の晴天を『奇跡』か『思し召し』のように言う。シャツハ・ヌエラはそのような声を聴きながら、幸せに満ちた顔を浮かべている巡礼者を見る事が好きだった。

聖王教会のシスターという立場上、表沙汰になつてはならない聖王教会の『裏』というものも知っている。

シスターといえども人間、時としてやり切れない気持ちを抱くこともある。

そういう憤懣を払ってくれるのが、巡礼者の笑顔だった。

給仕場で上司が好物のお茶を淹れる。

茶を淹れたシャツハは上司の部屋へと足を運ぶ。

ドアの前に立って、ノックをする。

「失礼します」

部屋へと入る。

「シャツハ」

上司——カリム・グラシアが笑顔で迎え入れてくれた。

「ご休憩の時間ですよね？お茶をお持ちしました」

「ありがとうございます。シャツハ」

カリムは礼の言葉を述べてからお茶を受け取る。

彼女の好みは紅茶系なら何でもありである。

淹れる側としては楽なようにも感じるが、飽きないように色々と模索しなければならぬのが実情だ。

シャツハとしてはそれ自体は大して苦にはならないのだが。

「先程の緊急連絡は何か荒事でしょうか？」

「そういう事じゃないんだけど……」

シャツハの疑問に対して、カリムはタッチパネルモニターを展開させて操作していく。

「ロストログア発見の報告、管理外の異世界で……」

「管理局から回ってきた依頼なんだけどね……」

シャツハがモニターに映し出された内容を読み上げて、カリムはため息を吐く。

「遺失物管理部も機動課も捜査課も、今は人手が足りていないみたいで……」

カリムは自分達にお鉢が回ってきた理由を口に出す。

だが、それが『建前』である事をシャツハが見抜けないわけがなかった。

「それで機動六課に依頼ですか？六課はレリック専任ですのに……」

時空管理局が次元世界を護る事を仕事の主としているが、積極的に関わるのは自らが管理下に置いている世界——管理世界だ。

対象が管理局の管理が行き届いていない世界——管理外世界にロストログアが発見されたとしても、途端に消極的になる。

理由としては管理外世界が『未開の世界』だからだ。

たとえ安全だと噂されていたとしても、『未知』というだけで人は足をすくんでしまうものだ。

それを非難することは誰にもできないだろう。

「レリックである可能性も捨てきれないから……」

正論とも言えるし、屁理屈とも言える事を言ってきて依頼をしてきた管理局にカリムは苦笑を浮かべてしまう。

「はあ……、正直六課はあまりミッドから動かしたくはないんだけど……。騎士団もすぐに動ける隊はなくなって……」

自分達側で片を付けれるならばそうしたいが、できないのが現状だ。

カリムも聖王教会で高い地位にいるが、決してトップではない。

自分の一存でできる事もあればできない事もあるのだ。

「仮面ライダーもレリックに関しては門外ですからね……。それで派遣先は？遠くの世界ですか？」

「あ……、まだ見てなかったわ。えっと……」

シャツハに訊ねられるまで、カリムは自分が機動六課へ依頼する派遣先を知らなかった事に自覚した。

「あら……」

「この世界は……」

派遣先を知ったとき、そこは機動六課のごく一部の者達には縁深い場所だと二人は同時に思った。

「派遣任務ですか？」

機動六課隊舎では訓練ではなく、隊員オフィスでデスクワークをしていたスバル・ナカジマが自身の耳に入った単語を訊ね返した。

「しかも異世界に？」

隣でキーボードを操作していたティアナ・ランスターもその手を止めて耳を傾けていた。

「うん決定事項。緊急出動がなければ二時間後に出発だから。スバル、ティアナ。今の作業が終了したら出発準備をしておいてね」

「はい！」

なのはの言葉に、隊員二人は即座に返事した。

「レリックかガジェット、もしくはイマジンの出現なんでしょうか？」
キャロル・ルシエが慣れない手つきでキーボードを操作しながら、指導をしてきているフェイト・T・ハラオウンに訊ねた。

「まだわからないけど、ロストログア関連なのかもしれないね。あ、そこ間違ってるよ。エリオはきちんと確認するんだよ」

フェイトがキャロルの疑問にどこか曖昧な答えしか出せない事を苦に感じながらも、指導の手を緩めない。

「はい」

エリオ・モンディアルの返事は指導に対してなのか、これからの任務に対してなのかはわからないものになっていた。

「前線メンバーは全員出動だし、良太郎達も一緒だからイマジン対策もできてるから、いつもの任務とあんまり変わらないよ。エリオもキャロも平常心でね」

フェイトはまだ不安を抱えているエリオとキャロに優しく語る。

「はい！」

二人は元気よく返事する。

「準備ができたなら屋上に来てね」

フェイトの言い方に何か違和感を感じたが、それが何なのかまでは二人にはわからなかった。

「オメエ等。忘れもんはねえだろうな?」

隊員オフィスにはどこか場違いな声が響く。

今まで黙って作業をしていたモモタロスが仲間である三体のイマジンに確認を取った。

「当たり前でしょ」

ウラタロスが抜かりはないと言い張る。

「いやあ、久しぶりに羽を伸ばせるでえ」

キンタロスが両肩をグルグルと回しながら、笑顔で言う。

「早くいききたいな」

リュウタロスに至っては既に旅行というよりは遠足気分であり、背中にはリュックサックが背負われていた。

初の派遣任務に対して、若干の不安を抱えているフォワード陣に対してイマジン四体は平常だった。

「ウラタロスさん、どうして皆さんはそんなに普通なんですか?」

ティアナが一番まともに答えてくれそうなウラタロスに訊ねる。

「忘れたの? 僕達にしてみれば今の状態が派遣任務みたいなものじゃない?」

ウラタロスの回答で、ティアナの目から鱗が落ちたようだ。

「あ、そうかあ。皆さんも元を言えば……」

「異世界人なんですよね……」

イマジン四体が平常でいられる理由をスバルとエリオ、キャロが特に打ち合わせしたわけでもなく繋がるようにして言った。

知り合って、時間はさほど経っていないがそれでもここにいる事が当たり前のように感じていた。

「でも何だか浮かれてませんか?」

スバルがそのように訊ねなくなるのも無理はない。

明らかに四体は浮足立っているのだから。

そしてその質問に対して、誰も回答はしてくれなかった。

部隊長室では設置されているソファに座っている桜井侑斗と八神はやてが深刻な表情を浮かべて、互いの目を見ていた。

双方ともに退くつもりはないと、互いに理解していた。

その二人をオロオロしながらデネブと彼の肩に乗っかっているリインが見ていた。

「本気なんやね?」

「何度も言わせるな」

はやては確認するように訊ねる。この件に関して確認を取るのには既に何回目になるかはわからない。

「私が出した条件はちゃんと呑むんやね?」

「お前はそんなに俺が信用できないのか?」

疑問で疑問で返すのは、マナーとしてはよくないが互いにそんな事に目くじらを立てる余裕はない。

「そういうわけじゃあらへんよ。でも……」

「俺が今から会いに行く相手が相手だから、か?」

侑斗の言葉に、はやては重く首を縦に振る。

「あんな八神。俺がもし恨みのひとつでも持つてるんだったらとつくに事を起こしてると思わないか?」

「うーん……」

そう言われると、言い返せない。

侑斗がもし、これから会う人物に恨みを持っているなら遠まわしに自分に訊ねて黙って報復をしに行くだろう。

「はあ……、わかった。侑斗さんを信じて場所を教えます」

折れたのは、はやてだった。

「助かるよ」

侑斗の表情に『勝った』というような感情は浮かび上がっていない。かかった。

むしろ、『安堵』の方が強かったりする。

はやては机に戻ってメモに書き記していく。

そしてびりつと千切って侑斗に渡した。

「ありがとう」

侑斗はソファから立ち上がって、頭を下げた。

彼がどうしても会いたがり、彼女がその事に関して異常なまでに慎重な態度を取った相手の名は……。

ギル・グレアム、という。

機動六課隊舎のヘリポートでは前線メンバー（スターズ、ライトニング、その他諸々）が待機していた。

これからヴァイス・グランセニックの操縦でヘリコプターに乗って、本局に配置されている転送ポートを使って派遣任務先へと向かう予定になっている。

「あれ？」

「ヘリがないわね」

一番乗りしていたスバルとティアナはあるべき物がないため、周囲を見回す。

「スバルさん！」

「ティアさん！」

エリオとキャラロが手を振りながら、駆け寄ってきた。

「エリオ、キャラロ」

スバルが手を振って応える。

「すみません。遅れました」

「まだ時間あるわよ。隊長達もまだ来てないしね」

キャラロが謝罪するが、ティアナはやんわりと遅刻ではないと言う。

「みんな、お揃いやなあ」

はやてが遅れて、ヘリポートに現れた。

「八神部隊長にヴィータ副隊長？」

「おう」

スバルが意外な面子に首を傾げる。

「シグナム副隊長にシヤマル先生？」

「ああ」

「はい♪」

スバル同様にキャロも首を傾げていた。

(これって本当の意味での六課の前線メンバーじゃない……)

ティアナはこれからの任務が決して軽いものではないのではないかと考える。

前線メンバーとは、自分達十隊長二人十チームデンライナーの事だと思っていたからだ。

だからこそ部隊長に副隊長二人に医師まで含むとなると、機動六課で戦えるほとんどの面子が駆り出されていることになる。

そうになると、ミッドチルダで某かの事件が起こった場合の対処はどうなるのだろうか。

ロストログアがらみならば他の遺失物管理部が果たせばいいのだが。

相手がイマジンとなると、時空管理局のあらゆる部隊では太刀打ちできないだろう。

(青い狩人頼みになるよのね……)

ミッドチルダでイマジンが出現する場合、今でこそチームデンライナーだが以前は神出鬼没の『青い狩人』が主に戦っていた。

だが立場的に管理局の敵、味方の分別となるとどちらにでも取れるところが悩みどころだ。

「私もいるですよ」

華麗に宙を舞ってリインもフォワード陣の前に現れる。

「リイン曹長まで……」

エリオもとても『いつもの任務』とは思えなくなっていた。

六課はどうなるのだろうかと不安も芽生え始めていた。

「部隊はグリフィス君がしっかりと指揮を執って、ザフィーラが留守を守ってくれるから心配はいらんよ」

はやてが安心させる。

「詳細不明とはいえ、相手がロストログアだし主力メンバーは全員出動って事で」

なのはが補足する。

「あとは行先もちよつとね……」

「「？」」

フエイトの言葉に含みがあるのを四人は逃さなかった。

「行先、どこなんですか？」

代表してティアナがはやてに訊ねる。

「第97管理外世界。惑星名称は地球。その星の小さな島国の小さな街……名前は」

日本 海鳴市!!

はやてが最後まで答える前に頭上から拡声器交じりの声が横槍を入れてきた。

「もういくら嬉しいからって最後まで言わせてくださいよお!!」

はやては妨害をしたモノに向かって睨みの眼差しを向けながら、両腕を挙げて抗議する。

彼女の台詞を妨害した者達が搭乗している物がこちらに向かってきた。

空中に線路を敷設・撤去を繰り返しながら移動している。

遠目からでは何回か見たことがあっても、間近で見るのは数えきれぬくらいしかない。

時間を股に掛けるタイムマシンでありながらも、そこいらの戦闘兵器よりも遥かに優れている特殊車両。

デンライナー、ゼロライナーがヘリポートに停車した。

デンライナーのドアが開く。

「みんな、乗って。今から行くよ」

良太郎がヘリポートにいる全員に促した。

この場にいる全員がまだ知らない。

自分達が向かう世界に未知なる敵と戦う事になる事を。

ヘリポートにいる全員を乗せたデンライナーとゼロライナーは線路を敷設・撤去を繰り返しながら空の一部が

歪んで生じている『時の空間』へと通じる穴へと向かっていった。

第二十六話 「機動六課 海鳴へ②」
く懐かしの地へ

デンライナーとゼロライナーは現在、『時の空間』を用いて第97管
理外世界 地球へと向かっていた。

本来ならば本局へと向かって、転送ポートの使用手続きなどを行わ
なければならぬのだが使用していないので全てが省かれることにな
った。

この事は、八神はやてがカリム・グラシアに既に話を通して
で下手につつかれることはない。

「そういうええヴァイス陸曹のヘリはどうなつたんですか？」

デンライナーの中に馴染み始めたスバル・ナカジマがカウンター席
でくつろいでいる高町なのはに訊ねた。

「実はね。ヴァイス君とアルトがヘリを改造してて間に合わなかつた
んだ……。二人とも急に派遣任務で使用するなんて思つてなかつた
らしくてね……」

「改造ですか!？」

ヘリコプターが使えない動機にスバルは驚きの声を上げる。

「デンライナーやデンバードみたいな万能機にするとかって言つてた
んだけどね……」

なのはは苦笑しながら言う。

「あのヘリが陸地を走ったりするんですか？」

ヘリコプターにタイヤがついて陸地を走る姿をスバルは想像して
いた。

「海の上も走ったりできるよにするんだって、叫んでたしね」

なのはは、ヘリコプターが海上を走っている姿を想像していた。

どちらもシユールなものであり、二人は顔を見合せて笑うしか
なかった。

「地球って昔フェイトさんが住んでいたところなんですよね？」

食堂席に座っているキャロ・ル・ルシエにとって地球の第一印象は『保護者がかつて生活していたところ』だ。

「うん。そうだよ」

フエイト・T・ハラオウンが頷く。

「私とはやて隊長はその生まれなんだよ」

スバルと談話していたなのはが補足した。

「俺達がこいつ等と会ったのも、海鳴だもんな」

モモタロスも付け足していた。

「そういえば僕達に初めて会った時、なのはちゃんとユーノはジュエルシードの影響で生まれた何かって誤解してたもんねえ」

ウラタロスが室内で遊べる釣りの玩具に電池を入れながら、昔の事のように思い出していた。

「イマジンの存在を知らないんだもの。仕方ないわよ」

当時のなのはの行動は、仕方ない事だとコハナは弁護する。

「思い出さないで下さいよお。恥ずかしいじゃないですかあ！」

隊長の威厳もなく、なのはは両腕を拳にしてぶんぶんと上下に振り回して抗議する。

「僕達にしてみれば数か月ぶりの海鳴市か……。あれから変わった所とかってある？」

カウンター席に座っている野上良太郎が訊ねる。

「私達もミッドに住んでからは数えるくらいしか戻ってないからね……。正直なところ良太郎の力にはなれそうにないよ」

「着いてから全部わかるって事だね」

席から立ち上がって良太郎は慣れた感じでカウンターの中に入って冷蔵庫の中身を物色しながら必要な物を取り出していく。

「良太郎。私も手伝おうか？」

コハナが申し出てくる。

「頼むよ」

「任せて」

デンライナーの食堂車両の勝手を知っている二人はテキパキと動きながらデンライナーに乗車している人数分のコーヒを淹れてい

く。

「なあ良太郎。オッサンとナオミがいねえけどどうしたんだよ？」

良太郎が淹れてくれたコーヒー(ナオミスペシャル)を飲みながら、モモタロスが訊ねる。

「オーナーは古い知り合いがいるから会いに行くって言ってたよ。ナオミさんはターミナルで長期休暇だつて」

「ナオミちゃんもワーカホリックになりかけてたしね。丁度いいんじゃない？」

ウラタロスはナオミの判断を素直に称賛する。

「俺はオーナーの知り合いの方が気になるなあ。なんやかんやでオーナーの事、俺等はよう知らんからなあ」

「会いに行った人も同じ顔だったりして〜」

キンタロスはオーナーの不在理由に興味を示し、リュウタロスはオーナーの知り合いは皆、オーナーと同じ顔だと思っていた。

リュウタロスの想像にチームデンライナーは全員噴出したのは言うまでもない事だった。

「本気かよ!?!侑斗!」

ゼロライナー内では全員がババ抜きをしていたが、桜井侑斗が打ち明けた内容にヴィータが声を上げた。

「騒ぐなヴィータ。響く」

侑斗の手札を引いているシグナムがヴィータを注意する。

「シグナム!よくそんな呑気に構えてられるな!!」

今度はシグナムに食って掛かっていた。

「ヴィータちゃん。まずは落ち着いて。ね?」

シグナムの手札を引きながら、シャマルが宥める。

「シャマルまで!!」

シャマルに矛先を向けようとする。

「ヴィータ。シャマルの言う通りやで」

リインと手札を見合っている八神はやてがそれを制した。

「はやて……」

さすがにこの場での最高権力者を敵に回すわけにはいかないので
ヴィータはまた座る。

「ヴィータ」

デネブがすかさず鎮静剤のようにデネブキャンディーを渡す。

「……なあ。侑斗、おデブ。本当に行くのかよ?」

「俺も侑斗がどういった理由で会いに行くのかは聞かされてない。でもきつと八神達の事を考えての事だと思うんだ」

同行するデネブは侑斗の目的を想像で打ち明ける。

「どうなん? 侑斗さん。私は行ってもええと言うたけど目的は聞いてへんのよ」

「どうなんですか? ユウトさん」

はやてとリインが侑斗に詰め寄る。

「ま、お前等もただの一般局員ってわけじゃねえから打ち明けるけど、俺がグレアムに会うのはある事を教えてもらいにいくためだ」

「ある事?」

はやてが返す。

「お前等にとって『敵』となる可能性のある奴を、だよ」

侑斗が口にした『敵』というのが自分達の内か外かを理解できないほど彼女達は鈍くはなかった。

*

『時の空間』を抜けてデンライナー、ゼロライナーが海鳴市の空へと線路を敷設しながら姿を現した。

*

デンライナーの中の雰囲気は緊張とは程遠くまったりとした空気が流れていた。

「少し前に故郷の話をしたのに何だか不思議な感じですね」

エリオはコーヒーが苦手なので、コーラを片手にしみじみと語っていた。

「本当♪」

その意見にコーヒーが嫌いなスバルがコーラを片手に同意した。

キャラロがタッチパネルモニターを展開させて操作していく。

「第97管理外世界、地球……」

「文化レベルB、魔法文化なし、次元移動手段なし……。魔法文化ないの？」

詳しい内容をティアナが読み上げていく。

「ないよ」

答えたのはスバルだ。

「ウチのお父さんも魔力ゼロだし」

「スバルさん。お母さん似なんですよね」

キャラロが父親が魔力ゼロと知ると、消去法で母親の遺伝が強いと推測した。

「うん！」

スバルは元気よく頷く。

「いやでも何でそんな所から、なのはさんや八神部隊長といったオーバースランクの魔導師が……」

ティアナは真剣に考え始める。

魔法文化がないところに『化け物』と呼称されてしまうほどの高い魔力を持った者達が誕生するのは、ある意味で自然の理に反するからだ。

「突然変異……もしくは偶然の産物によるもの、かな……」

なのはが自身の事をそのように語った。

それが彼女自身の本音だからだ。

「あ、すみません」

なのはの耳に入り、ティアナは謝罪する。

「私もはやて隊長も魔法と出会ったのは偶然だしね」

しみじみとなのはは語る。

「魔法文化はないけど、ミッドチルダにはない出来事も色々あったみたいだよ」

飲み物を渡し終えた後、良太郎はある資料を読みながら言った。「何を読んでるの？」

コーヒーカップをカウンターに置いてフェイトが良太郎が読んでいる資料に興味を向ける。

「八神さんとすずかちゃんが趣味で研究していた事の資料のコピーだよ」

「へえ、ちよつと見せて」

「あ、私も見るよ」

良太郎が興味を持ったフェイトとなのはに資料を渡す。

資料を受け取ってしばらくしてから二人の表情がみるみる変わっていった。

「こ、こんな事って……」

「信じられないよ……。私が生まれる前にこんな出来事が立て続けにあったなんて……」

フェイトはただ起こった事実には驚愕しているだけだが、なのはは顔を青ざめていた。

「やっぱり知らなかったんだ」

はやてが何故、なのは達に見せなかったのかは頷けることだ。

これらの資料は、内容が起こってから数十年が経過してからのものなので信憑性は微妙だ。

（八神さんとすずかちゃんは二人で調べてたんだ。明るみになればなるほど怖かっただろうに……）

良太郎は二人の胆力に敬意を表した。

フェイトが手にしている資料をもう一度手元に戻す。

「ゴルゴムにクライシス帝国。日本を世界征服の手始めとして何度も襲撃した組織なんだって。そのために犠牲になった人達も数多いしね」

ページを捲りながら、良太郎は続ける。

いつしかデンライナーの中は明るい雰囲気ではなく、しんと静まっ

ており一つの講義のようになっていた。

『太陽の王子は大いなる闇を切り裂く』の著者である佐原茂さんもクライシス帝国に家族を殺された被害者なんだ」

スバルが拳手した。

「はい。スバルちゃん」

「ゴルゴムやクライシス帝国もイマジンの集まりなんですか？」

「いや、ゴルゴムもクライシス帝国もイマジンとは違うタイプの怪人が先兵として送り込まれてるね」

次にティアナが拳手をした。

「怪人が先兵というのは、それよりも上がいるって事ですよね？」

「うん。二つとも怪人よりも立場が上の連中がいるみたいなんだ。しかも強いって話らしいしね」

ページを捲りながら、良太郎は続ける。

「怪人より強いって……」

「どのくらい強いんだろ……」

エリオとキャロが不安に満ちた表情をしている。パタパタと翼を羽ばたかせているフリードリヒが主を気遣うように鳴いていた。

「でもよ、良太郎。ゴロゴムやプライスレスはとっくに倒されてるんだろ？」

「うん。今でも存在してたら地球は地獄になっているさ」

「それって私やはやてちゃんは存在しているかどうかも分からなくなっているって事ですよね？」

起こってほしくない事実を、なのはは口に出した。

「そうだね。そういう風になってもおかしくなかったのかもしれないね……」

良太郎はありえたかもしれない出来事に真摯に応じた。

「はい。リインちゃんのお洋服♪」

「ありがとうございます。シャマル」

ゼロライナーの二両目内部からの声が漏れた。

男性陣に入る侑斗とデネブは二両目後部のデッキにいた。

理由はリインが着替えをするためである。

その事に異議はなかったもので、一人と一体は即座に外に出ていた。

「そういえばお前と二人でここにいるのは久しぶりだな」

「そう言われればそうかも」

デネブは侑斗に指摘されたことを思い出しながらも、バスケットの中に入っているデネブキャンディー（棒付き）を渡して、自分も舐めていた。

「寝袋を使う事もなくなった」

八神家で寝泊まりしている以上、野宿することもないので愛用している道具は使っていない。

「ベッドで寝ているしな」

ゼロノスとなつてからは、ベッドで眠ることなど皆無に等しいので一般人がごく当たり前に得られる事でも感謝の気持ちを持つてしまふ。

「二人とも、もう入ってもええでえ」

はやてが顔を出して、二人の背中に声をかけた。

「おう」

「了解」

片手にデネブキャンディーを持ったまま二両目内部へと入る。

そこには、はやてとヴォルケンリッターとあと一人見覚えがあるが初見の少女がいた。

「リインか？」

「そうですよお♪」

「大きくなってる!？」

侑斗が確認するように訊ねると、通常に比べると明らかに巨大化しているリインは笑顔で頷きデネブは驚いていた。

「海鳴にはリインサイズや人型でフワフワ浮いてる奴なんていねーしなあ」

「いたらマスコミの餌食になるのは確定だな」

ヴィータの一言に侑斗が更に付け加える。

「ミッドにもいないと思いますよ。念のために言いますが」

更にシャマルが付け加えるがあまり説得力のあるものではなかった。

「目測で言えばモンディアルやルシエくらいか……」

「そうですねえ。大体そのくらいになりますね」

侑斗がリインの大きさを目測して結果を告げると、リインは首を縦に振る。

「普段からその大きさをいればモモタロスにからかわれずに済むのに……」

デネブの一言に笑顔だったリインの表情は少し曇る。

「このサイズだと燃費と魔力効率コンパクトサイズに比べるとよくないんです」

「でも小さいサイズだとモモタロスにハエ呼ばわりされ続けると思う」

デネブは自身の体験で語っている。

何度自分の名を『デネブ』と言っても、『おデブ』で通してしまうのだから。

「それも困るんですよえ」

腕を組んで真剣にリインは自身の事を考え始めていた。

「八神部隊長。そろそろ」

タッチパネルモニターを展開していたシグナムが、はやてに告げる。

「そか」

はやてもタッチパネルモニターを展開する。

「なのは隊長、フェイト隊長、野上さん。私と副隊長たちはちよつと寄るところがあるから」

『うん』

『先に現地入りしとくね』

『わかった』

三人が三様に返事を返した。

*

デンライナーは一軒のコテージがある湖畔の陸地で停車し、乗車している全員が降りるとまた空中に線路を敷設と撤去を繰り返しながら空の一部が歪んで生じている穴へと戻っていった。

懐かしさに耽っている者もいれば、未知の場所に期待と不安と好奇心が入り混じっていたりする者達もいた。

そして、自らの内に滾っている感情の赴くままに動こうとしている者達もいた。

「よし！番号！一！」

「二」

「三や」

「よーん♪」

モモタロスの点呼にウラタロス、キンタロス、リュウタロスが番号を口に出す。

「オメエ等。俺達が今から行く場所はわかってんだろなあ？」

「愚問でしょ」

「俺等に抜かりはあらへんで」

「早くいこうよー。僕待ちきれない！」

モモタロスの確認に三体は『何をいまさら？』という表情で返してきた。

四体のイマジジンが真剣な表情をしているので、フォワード陣は息をのんでいた。

気を抜けばそれだけで彼等の放っている『気迫』に中てられそうだからだ。

「アンタ達。そんな真面目な表情で何言ってるのよ……」

ツツコミを入れる気もないのかコハナは呆れた表情で四体を見ていた。

「バカヤロオ。オメエだつて本心では行きてえんだろがよ？」

「ま……否定はしないけど、アンタ達みたいにテンションは高くないわよ」

モモタロス達ほど表には出さないが、コハナとて彼等の赴く場所に

向かうのは確定事項だった。

「つーわけで良太郎。後は頼んだぜ。行くぞテメエ等あー！」

モモタロスはしゅたつと軽く手を挙げて良太郎に告げると、他の三
体と共に走り出した。

「あの、野上さん」

ティアナが良太郎の横に立つ。

「いいんですか。その……モモタロスさん達を地球で自由にしても
……」

ミッドチルダではイマジンは『恐怖の対象』か『歩く天災』扱いだ。
それはモモタロス達も例外ではない。

管理局の法律が行き届いていない地球でもそのようにカテゴライ
ズされているのではないのかとティアナは懸念しているのだ。

「モモタロス達にしてみれば地球の方がミッドチルダよりもずっと勝
手がいいと思うよ。ここには温かく迎え入れてくれる人達がいるし
ね」

良太郎はティアナとは対照的に何の問題にもならないという表情
で言う。

「「え？」」

スバル、エリオ、キャラは彼の言った一言に首を傾げていた。

「あの、それってモモタロスさん達の事を知っている上での事ですか
？」

フリードリヒを頭上に乗せているキャラが訊ねてきた。

「もちろん。モモタロス達を温かく迎え入れてくれる人達は魔法
や電王の事も知ってるよ」

『仮面ライダー』ではなく『電王』と言ったのは彼に照れが入っている
からだ。

「なのはちゃん。ここって具体的にはどこなの？」

「湖畔のコテージがありますけど……」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員待機所としての使
用を快く受けてくれてるですよ」

コハナ、ティアナの疑問になのはの代わりにリインが答えた。

サイズに感覚を慣れさせようとしているのか、手足を細かく動かしていた。

「現地の方、ですか……」

「まさか……」

エリオがわからないのも当然だと良太郎は思いながら、ある人物の顔を思い浮かべていた。

彼の中で機動六課にコテージを一軒貸してくれる豪胆な人物は一人だけだった。

草木が生い茂っている場に不似合いな音が聞こえてきた。

「自動車だ」

「ここにもあるんだ……」

スバルは目に映るものの名称を、ティアナは自分が思っている以上にこの世界の技術は高いという感想を凝縮した言葉を述べた。

自動車が停車し、ドアが開く。

「ここちに来る際に何だか懐かしい連中と通り過ぎたからもしやと思っただけ、やっぱりアンタ達だったのね。なのは、フェイト」

自動車から降りたのは一人の金髪女性だ。

フェイトとは対照的に、ロングではなくショートヘアだった。

勝気な瞳が印象的ではあるが、全体から醸し出しているのは育ちの良さから表れる気品の様なものがあつた。

アリサ・バニングス。

女性の名前であり、コテージを機動六課に貸してくれている大元である。

「全くお仕事の内容上、いきなりで来るのは仕方ないけどこっちの身にもなつてよね。色々と準備があるんだし」

「にやはは……」

「ごめんね」

アリサのぼやきに、なのはは笑ってお茶を濁しフェイトは素直に謝罪した。

彼女は現役の大学生である。

世間一般的な『遊んで単位を取って就活して卒論書いたら終わり』という典型的な大学生ではない。

成績は優秀、社交的でありどこか仕切り屋気質ではあるがそこに嫌みがないのは相変わらざるようだ。

「お久しぶりです。良太郎さん。ハナも元気？」

幼馴染と一通りのやり取りを終えると、アリサは良太郎とコハナに視線を向けた。

「あ、こちらこそ久しぶり」

「背伸びたわねえ」

良太郎が普通に挨拶をかわすのに対し、コハナはかつて近い身長的人物を見上げなければならぬ現実を突きつけられていた。

「ハナはあんまり変わらんないわね」

「言い返せない……」

アリサがコハナの頭を撫でながら言う。

その光景が『モモタロスがヴィータやアリサをからかう』という構図に良太郎にはダブって見えた。

「アリサさん。お久しぶりですう」

リインが嬉しそうに駆け寄る。

「リインも元気そうだよかったわ」

アリサはリインの頭を撫でている。

コハナと違って喜色の表情を浮かべてくれるのが撫でた側としては気分がいい。

フェイトが置いてけぼりになっているフォワード陣を見る。

「みんな。紹介するね。こちらは、私となのはとやての友達で……」

「アリサ・バニングスです。よろしく」

よろしくお願いします。

四人はアリサに頭を下げた。

「リイン。はやて達はどうしたの？」

他の八神家の者達はここにいない事にアリサは疑問を持った。

「ゼロライナーで別のところに行ってます。ユウトさんとおデブさんはそのままさらに別のところに行くんですよ」

「すずかのところかしら……」

はやての海鳴市での人間関係図を頭の中で浮かべながら、一番優先的に会いに行く人物の名を口に出した。

*

「た、助けてくれええええ!!」

海鳴市のビルの壁に、白い糸で体を巻かれて逆さ吊りになっているサラリーマンが助けを求めている。

また海鳴市の公園の街灯にも一人のOLが白い糸で体をグルグル巻きにされて逆さ吊りになっていた。

*

機動六課と仮面ライダー達の派遣任務はどうやら一筋縄ではないかないらしい。

第二十七話 「機動六課 海鳴へ③」恐怖の白い糸

「にゃあ」

鈴の首輪をつけた飼い猫が能天気にも鳴いていた。

中庭にいる飼い猫は一匹ではない。

『猫屋敷』と呼ばれてもおかしくないくらいにウロウロしまわっていた。

猫好きには『天国』と呼べる場所であり、猫嫌いもしくは猫アレルギーを患っている者には『地獄』としか言いようがない場所だ。

汽笛の音が猫達の耳に入ると、先程の能気な鳴き声とは違って慌てふためくように散らばっていった。

「どうしたの？」

豪邸に住んでいる月村すずかが猫達の鳴き声の原因を探るべく、中庭に出ていた。

最近飼ったばかりの子猫が怯えた表情ですずかに寄ってきた。

「大丈夫だからね。安心していいよ」

「にゃあ」

すずかが不安を取り除く台詞を述べると、子猫は理解したのか安心した表情になって足元に止まっていた。

線路が敷設されて、二両編成の『時の列車』——ゼロライナーが停車した。

ドアが開く。

「ああ。ごめんなあニャンコ達」

降車しながら八神はやてが猫達に謝罪した。

「ごめんなさい。驚かすつもりはなかったのよ」

続いてシャマルが降車しながら同じように猫達に謝罪する。

「はやてちゃん！」

すずかがはやてのそばまで寄る。

「すずかちゃん！お久しぶりや。元気やった？」

二人は手を取り合って、親交を温める。

「うん。元気元気♪」

すずかは、はやての両手を握ったままぶんぶんと振る。

「そうみたいやねえええ」

あまり身体能力が優れている方ではないはやてにはすずかのパワーに振り回されかける。

「メールやニャンコ達の写真、ほんまにありがとうな」

はやてにとつて、それらは『癒し』であり彼女が管理局で働くための『動力』にもなっていた。

「こいつが世話になってるみたいだな」

桜井侑斗がはやての頭を右手でポンと掴んでから頭を下げた。

「桜井さん。お久しぶりです。デネブさんも」

「月村も高町やテストアロツサみたいに大きくなった」

「はい！」

デネブの妙な褒め言葉にすずかは元気よく返した。

「シグナムさん、ヴィータちゃんもお久しぶりです」

「ご無沙汰しています」

「お久しぶりです」

すずかの言葉に礼儀正しく返す。

シグナムは、はやてに対して普段から使っているがヴィータはほとんどタメ口で言っているためどこか不自然だった。

「すずかちゃん。ますます美人さんになって」

シヤマルがどこか親戚のオバサンみたいな台詞を言う。

「あ、ありがとうございます」

そのように言われると、すずかとしてはこのように返すしかなかった。

「お仕事だからあまりゆつくりできないんだよね？」

「そうなんよ。まあ失くし物捜しなんやけどね」

すずかの表情が沈み、はやてとしてもこればかりはどうしようもないとしか言えない。

「頑張つて。時間あるようならご飯とか一緒に食べよう」

「ええねえ」

すずかの申し出にはやては笑顔になる。

「八神。そろそろ俺達は行くぞ」

「なるべく早く戻るから」

中庭にいた侑斗とデネブはゼロライナーに乗車していた。

「うん。気づけてな」

はやての言葉に、侑斗とデネブは首を縦に振った。

ドアが閉まり、ゼロライナーは汽笛を鳴らす。

その音で寛いでいた猫達はまたすばやく移動していた。

線路を空へと敷設しながら、ゼロライナーは走り出した。

自然が生い茂っている湖畔から場所は変わる。

隊長二人にフォワード陣にリインとイマジンを除くチームデブラ

イナーは海鳴市の街中にいた。

「じゃあ、改めて今回の任務を簡単に説明するよ」

高町なのはが歩きながら口を開いた。

街中といっても、歩道のご真ん中で歩を止めていたら後続の者達に

迷惑をかけるのは確実だ。

そのため、現在はビルの裏の広場で説明が行われていた。

もちろん服装は全員私服だ。

隊士服は海鳴では目立つし、浮いてしまう。

ミッドチルダでは隊士服で行動したからといっても、「管理局の人だ」で挨拶もしてくれるだろうがここはその時空管理局の存在そのものが認知されていない地球だ。

そんな服装をした人間が割とそこそこな人数で行動などすれば『怪しい』と思うのが自然だろう。

任務のために赴いているのに、現地の公務員（この場合は警察）に事情聴取なんて笑い話にしかならない。

なのははタッチパネルモニターを展開させる。

「搜索地域はここ。海鳴市の市内全域で反応があったのはこことこことここ……」

人差し指でタッチする部分が点滅していた。

「移動してますね」

ティアナ・ランスターが呟く。

「そう。誰かが持っているのか独立しているのかまではわからないけど……」

フェイト・T・ハラOWNが対象物へのコメントを漏らす。

「対象ロストログアの危険性は今のところは確認されてない」

「仮にレリックだったとしても、地球は魔力保有者が滅多にいないから暴走の危険はかなり薄いね」

隊長二人の言葉を他の面々は真剣に聞いている。

「とはいえ相手はロストログア。何が起こるかわからないし、場所も市街地。油断せずにしつかり搜索していこう」

「では副隊長達も後で合流してもらおうので」

「先行して出発しよう！」

はい!!

隊長二人が締めくくり、フォワード陣は返事した。

「質問」

コハナが挙手をした。

「どうぞ。ハナさん」

「イマジンがそのロストログアを狙っている可能性は？」

ミッドチルダで棲息しているイマジンに行くわしたのは二回しかないが、十分にあり得る可能性だとコハナは思っている。

はぐれイマジンだとしたら自らの意思で、契約者持ちのイマジンなら履行としてだ。

「あり得ないとは、言い切れませんね」

イマジンの中でも知恵のまわるタイプはロストログアの価値を理解している可能性はあり得る。

現にRネガタロス（第二部参照）は『闇の書』を用いて、電王への復讐を果たそうとしていたのだから。

イマジンにロストログアを持たせるといふ事は『鬼に金棒』状態だ。そうなってしまうと、隊長達総出とはいえ苦しい戦いになるのは必須だ。

「良太郎。地元の人達から聞き込みして特定ってできる？」
フェイトはイマジン探索のエキスパートである野上良太郎に訊ねる。

「難しいね……」

実害がない状態で海鳴市にイマジンが潜伏しているか、契約関係を結んでいるかを探すのは自分では難しい。

ここにはいないがモモタロスがいれば随分と楽になるのは間違いない。

「ロストログアとイマジン捜し。どちらも難しい探し物よね」

コハナの呟きに、良太郎、フェイト、なのはは腕を組んで首を縦に振った。

*

「く、来るな！化け物おおお!!」

平日の海鳴市では、自然と人数が少なくなる場所も存在する。

例えばサッカーゴールが常に設置されている河川敷。

現在、蜘蛛の姿をしている怪人に追い掛け回されているこのサラリーマン。

正確にはスーツを着用しているだけの無職男だ。

本日、就職面接があつたのだが好感触を得られなかつたらしく家に帰っても家族に肩身の狭い嫌味を言われそうなのでこの河川敷で時間を潰していたのだ。

息を乱しながら、必死で両腕両脚を駆使して走る。

彼は既に本日の面接の事など頭の中になかつた。

何故なら今自分が直面している事はそんな事よりもずっと大事なものを守るためだと本能で知っているからだ。

(殺される！捕まったら絶対に殺される!!)

後ろを振り向くこともしない。

振り向いたらその時点で何かが終わるような気がしてならない。迫ってくる足音は耳には入ってこない。

「逃げ切れた」と考えてしまい、動かしていた身体全身を急速に停める。

両肩を揺らしながら、息を乱し、直立姿勢が苦痛になっているため両手で膝を押さえてやや前傾になる。

「やった……。逃げ切ったぞ……」

男は安堵の息を漏らした。

スーツの肩に何かがふわりと乗った。

白い糸の様なものだ。

これが綿菓子ではないことだけはすぐにわかった。

手にしてみると、綿菓子のような甘い匂いや特有の粘つきがなかった。

自分を追いかけてきた化け物が何をモチーフにしていたかを思い出す。

白い糸は上から落ちてきた。

恐る恐る頭上を見上げる。

四体の化け物が橋の上にあった。

白い糸を広げており、そこにはグルグル巻きになって糸にベツタリと貼り付かれています。数人がいた。

化け物の一体が、スーツとこちらに向かって降りてくる。

男は本能的に悟った。

「ああ、自分はもう助からないのだ」と。

*

「中距離探査はリイン。お願いね」

「お任せですう」

なのはがリインに指示を出す。

実をいうと、一瞬宙を見てリインを捉えようとしたというのは本人だけの秘密である。

「クロスミラーージュにも簡易版の探索魔法をセットしてあるから、そっちとこっちの二人ずつで離れて歩こう」

「後は市内の各地にサーチャーとセンサーを設置。作業としてはそんな感じなんだけど、良太郎とハナに注意するけどこのサーチャーとセンサーにはイマジンは対応してないんだ」

なのはが指示を続け、フェイトが良太郎とコハナに釘を刺した。

「それってやっぱりモモタロス達も捉えちゃうから、だよね」

「うん」

良太郎の言葉にフェイトは首を縦に振る。

「隊長」

その場に今までいなかった人物の声が響いた。

「すまん。遅くなった」

別行動をとっていたシグナムが現れた。

「シグナムさん。これから始まる場所ですよ」

「そうか」

良太郎の言葉にシグナムは安堵の息を漏らす。

『ロングアーチも準備完了やで』

『あたしも設置と探索をしながらスターズに合流する』

宙に二つのモニターが出現して映し出されているのは、はやてとヴィータだ。

『ほんなら機動六課出張任務、ロストログア探索。任務開始や！』

モニターに映っているはやてが部隊長らしく右手を前に突き出した。

了解!!

と全員が返事した。

スターズとリインとコハナはライトニングと良太郎とは違う方向へと探索を開始していた。

「リイン、久しぶりの海鳴の街はどう？」

「ふう〜。懐かしいですう」

リインは深呼吸をしながら懐かしい街の空気を味わっていた。

文明が優れているミッドチルダと比べると、海鳴市が辺境の地に感じるのは当然かもしれない。

「なのはさんはどうですか？」

リインは懐かしい空気を一通り感じ終わると、海鳴生まれであるなのはに訊ねた。

「私は懐かしいというより、あれ？ 仕事なのに帰ってきちちゃったって感じかなあ」

「なのはちゃん。ワーカホリックになってるわよ」

なのはの感想にリインが声を出して笑い、コハナはツツコミを入れた。

「ミッドの田舎あたりと大差ないわよね。街並みも人の服装とかも……」

ティアナが探索を怠ることなく、周囲を見回しながら感想を述べる。

「うん。私は好きだなあ。こういう感じ」

スバル・ナカジマも任務は怠っていないが、ティアナよりは海鳴の空気に浸かっていた。

「まあ、そうよねえ。何かのんびりしてる感じだし」

喧騒な都市で生活では、こういう田舎のゆったりとした空気を味わう事は到底できない事にティアナは同意した。

「ティア、アレってアイスクリーム屋かなあ？」

「そうかもって、やめなさいよ。任務中に買い食いなんて……」

店へと足を向けようとしてたスバルをティアナが睨みと注意で押さえた。

思ったよりも順応している二人を見て、なのはは笑みを浮かべなが

らも探索を続行した。

海鳴の空は青く、所々に白色の雲が泳いでいた。

飛行機はもちろんヘリコプターも飛行しておらず、貸し切り状態といってもおかしくはなかった。

「そーいやずいぶん久しぶりだなー。海鳴の空を飛ぶのつて」

ヴィータは一人で飛んでいる事を幸いに、口を開いて呟いた。

十年前、初めて海鳴の空を飛んだ時にはこのような感慨にふけるようなことはなかった。

あの頃は主であるはやてを救う事を最優先としていたため、他の事に目もくれる余裕はなかった。

時空管理局に身を置くようになってからは他の次元世界の空を飛ぶことはあつても、海鳴の空を飛ぶ機会は得られなくなったのも確かだ。

「仕事でなきや飛べないつてのも不便だよな」

管理局員である以上、自分の力で空を飛ぶにも何かと面倒な手続きを踏まなければならない。

「ま、いつか。さてと仕事すつかな」

ヴィータの表情が仕事モードへと切り替わる。

「なのは隊長。あたしはロンググーチの直接指示で動いてるからな。上空からのセンサー散布だ」

サーチャーを海鳴の青空へと散布していく。

『了解。ヴィータ副隊長』

念話の回線を開き、なのはが自分の報告を了承した。

『ラインも手伝わなくて平気です?』

更にラインも入り込んで、単独行動で不安がる。

「平気だ。ラインはなのはを手伝ってやんな。お前の探査魔法は優秀だかな」

ラインの申し出をヴィータはやんわりと断る。

『はいです。ヴィータちゃん』

『それじゃあお願いね』

リインとなのはは念話の回線を閉じた。

「おうー」

短く答えてからヴィータはさらに作業を続行した。

湖畔のコテージでははやとシヤマルが自分達の役割を果たしていた。

「サーチャー動作確認。順調です」

シヤマルがタッチパネルモニターに触れて、ヴィータが散布したサーチャーの動作を確認していた。

「うん。これなら夜までには進むなあ」

シヤマルの後ろから、はやては凡その見当をつけた。

「はい」

シヤマルもその見当は間違っていないと判断して返事した。

「侑斗さんとデネブちゃんもそろそろ着いた頃やろなあ」

「そうですねえ」

ここにはいない一人と一体の所在も予想する。

良太郎とライトニング部隊は探索を進めていた。

といつても、大した収穫は得られていないというのが現実だ。

「遺失物探しは根気が必要だが、手がかり一つなしとなると時間がかかるな」

も予め形がハッキリわかっている物を探す事はさほどの苦にはならないが、今回のようにヒントが『ロストログア』だけとなると雲をつかむ行為に等しい。

「そうですね。でも怪人がロストログアに関して知識を持っていたとしたら急がないといけません」

フェイトも時間がかかるという点には同意するが、そう悠長に構えていられないとも考えていた。

「そうだな。怪人は我々の常識などなんのそののでやらかしてくれるかな」

シグナムもフェイトの言葉に首を縦に振る。

しばらく無言で探索をしていると、人だかりを発見した。

「キユクー」

さすがに海鳴市ではフリードリヒを自由に飛ばすわけにはいかないので、鳥籠の中に入れてある。

「どうしたの？フリード」

キャラ・ル・ルシエが窮屈な中で訴えているフリードリヒの向いている視線に顔を向ける。

「赤い光がクルクル回ってる。何だろ？」

エリオ・モンディアルが人だかりの中で光っている赤い光に疑問を持っている。

「赤い光？ああパトカーのランプだね」

良太郎がエリオの疑問に答えると同時に、何が起こっているのかが気になり始めた。

「パトカー？」

聞き慣れない言葉にエリオとキャラは声を揃えて、首を傾げた。

「あの白と黒のツートンカラーの車は見える？」

「あ、はい。見えます」

「何だかパンダみたいです」

「ミッドチルダにもパンダっているの？」

「前にフェイトさんに買ってもらった動物図鑑に載っていたんです」

キャラは良太郎の質問に首を横に振ってから、パンダを知っている理由を答えた。

「へえ」

「僕にはF-1という自動車のレースの映像ディスクを買ってくれたんですよ。車があんなに速いのにミスなく動いて競い合っているのが凄くて凄くて！」

「F-1というより、ハイスピードの中を自在に駆ける事にエリオは関心があるんだね」

「はい！僕もあんな風に速く動けるようになりたいって思ってしまうんです」

魔法を用いているエリオならその目標は適っているのだろうか

んやりと良太郎は考えるが、恐らくエリオの目標ははるか先なのだろうと考えて軽はずみなことは言わない。

「良太郎さん。パトカーって何ですか?」

キャロの一言で、良太郎は脱線から戻る。

「ええとね、地球の警察っていう組織の人達が乗っている乗り物の事だよ」

「あの、ケイサツというのは時空管理局のようなものでしょうか?」

「そうだね。そう捉えてても問題ないと思うよ。僕も管理局に関してはそんな感じで認識してるし」

「あ、そうなんですか」

仲間がいる事でキャロは安堵の表情を浮かべた。

「二人と会話してるところ申し訳ないけど、良太郎。あの人だかりが気になってるんじゃないの?」

フェイトがライトニングの隊長として、上手いタイミングで会話に入り込んだ。

「うん、ちよつと行ってくるよ。すぐに戻るから」

「あ、僕もいきます」

良太郎が人だかりに向かおうとすると、エリオも同伴を申し出た。

二人はパトカーが停車している人だかりへと向かっていった。

人だかりに入り込んだ良太郎とエリオは上手く捌きながら、最前列へと到達することに成功した。

『KEEP OUT』と記載されているテープが侵入を防ぎ、更に制服警官が前に立っていた。

私服警官や鑑識がテープ内で忙しなく作業をしていた。

「あの人達がケイサツカンなんですか?」

「うん。あの、すみません。何かあつたんですか?」

エリオの質問に首を縦に振ってから良太郎は制服警官に訊ねる。

「ああ、何ていえばいいのかわからんのだよ」

「わからない?」

「ああ。確かに被害者は出てる。だがどうみても自殺とは思えないし

他殺にしては変だからね」

良太郎は制服警官の言葉に引つ掛かりを感じた。

「他殺にしては変って言いましたけど、どのように？」

「何て言うのかね。こう……」

制服警官の言葉に良太郎とエリオはゴクリと固唾を飲む。

「蜘蛛の糸のようなもので窒息死しているんだよ。でも、人間一人を楽々覆って窒息死させる事ができる蜘蛛がいるなんて考えにくいしね」

制服警官の言葉に良太郎は人外の者が行ったという確信めいたものを得たが、何か引つ掛かりのようなものを感じた。

「良太郎さん。コレってやっぱりイマジンの仕業なんでしょうか？」

隣にいるエリオが自分の推測が正しいか否かを確認するようにして訊ねる。

「わからない。だけど人が行ったものじゃないというのは断言できるけどね」

良太郎の表情は真剣なものになっていた。

「そうですね……」

放たれる雰囲気のエリオは呑まれていた。

ロストログア探しに怪人が関わっていると断言はできない。

「行こう」

「はいー」

良太郎は静かにライトニングメンバーがいる場へとエリオを促した。

*

すずかを運転手に、アリス・バニングスを助手席に乗せて一台の自動車海鳴市の道路を走っていた。

途中までは快適に走っていたのだが、渋滞となって現在は鈍行を余

儀なくされていた。

「なのはとフェイト達。相変わらず頑張ってるみたいね」

「晩御飯は私達で用意してあげよう。折角コテージなんだしバーベキューとかいいよね」

「いいわねえ。なのはの生徒達は予想だけとたくさん食べそうだし、モモタロス達もいるから多めに越したことはないわね」
「うん」

今後の予定を組み終えるが、いまだに渋滞だった。

「それにしても道路工事でもないのに何で混んでるのよ……」

「事故とかなのかな？」

渋滞の原因を二人は想像する。

制服警官が誘導している姿が目に入る。

「すみません。免許証を」

すずかは即座に免許証を呈示する。

「あの、何かあったのでしょうか？」

アリサが訊ねる。

「実は近くで事件があつてね。現場保持のために一部の道路を規制しているんだよ」

「そうですか。どうもありがとうございます」

制服警官の説明にアリサは納得する。

「お気をつけて」

すずかは制服警官の言葉を合図にアクセルペダルを踏んだ。

徐行ではあるが、自動車は前へと進んでいく。

「何かしらね」

「事件っていつてたけど……」

「いくらなんでも、なのは連絡みじゃないわよね？」

「どうなんだろう……」

アリサとすずかはまさかの予想をしてしまい、打ち消すことはできなかった。

彼女達は深くではないにしろ、それなりに知ってしまったのだから。

第二十八話 「機動六課 海鳴へ④」 〈隠れた偉人？前篇〉

『ロングアーチからスターズとライトニングへ、さつき教会本部から新情報が来ました。問題のロストロギアの所有者が判明、

運搬中に紛失したとの事で事件性はないそうです』

シヤマルから伝えられた新情報は現在、探索を行っている二チームと海鳴のとある場所にいる四体にとっては朗報だった。

『本体の性質も逃走のみで攻撃性はなし。ただし、大変に高価なものなので出来れば無傷で捕らえてほしいとのこと。まあ気い抜かずにしつかりやろ?』

八神はやてからの追加情報は捕獲条件だった。

了解!!

念話の回線を開くことができる魔導師達は返事で返した。

*

野上良太郎の隣で、エリオ・モンディアルが一人、明らかに浮いていると思われるを取っていた。

「新情報?」

「あ、はい。ロングアーチからですけど捕獲対象のロストロギアに事件性はないそうです。それと所有者の希望で高価な物らしく可能な限り無傷で捕ら

えてほしいとのことですよ」

「そうなってくると、僕達は門外になるね」

良太郎がエリオの報告でロストロギアの捕獲は自分達では助けになりそうにないと告げる。

破壊が可能ならば何とかなるが、それが不可となると手の施しようがないのも事実だ。

「あの良太郎さん」

「なに？」

「蜘蛛の糸の事は報告しなくてもいいんですか？その……」

「イマジンかもしれない、でしょ？」

良太郎はエリオが言いたい事を先に言った。

「蜘蛛の糸で殺人を起こすなんてことは確かに普通の人じゃ無理なのは確かだけど、イマジンだとどうもしっくりこないんだよね」

「どういう事なんですか？」

エリオが良太郎と視線を合わせるとなると、見上げる姿勢になっている。

歩く上では前が完全に見えないので危険だが、彼の身体能力なのか訓練のたまものなのか人とぶつかる事はなかった。

「イマジンが契約者の望みをどんな手段を用いても、叶えるつてのは知ってるよね？」

「はい」

「だとしたら蜘蛛の糸で窒息死なんて手口はどうもね。よほど契約者と信頼関係ができていないとまず実現は不可能だよ」

良太郎は意見を述べながら、頭の中でとあるイマジン関連の事件を思い出していた。

それはイマジンと契約を果たして、復讐を果たした悲しき父親の事件だ。（第二部参照）

「僕が知る限りでは感性の合う者同士でない限り、契約者とイマジンの従来の関係は超えられないよ」

それは最早、『偶然』や『奇跡』の領域という事になる。

「良太郎さんとモモタロスさん達も感性が合っていたという事ですか？」

エリオの質問に良太郎は笑みを浮かべて首を横に振る。

「いや、今でこそそんなふうに見られてるけど最初の内はバラバラだったんだよ。揉めたりする事も二度や三度じゃなかったね」

「そうなんですか……」

「だからこそ言えるんだけどね。短期でイマジンと関係を得るのは才能や運の域に縋るしかないってね」

良太郎の視野にライトニングのメンバーの姿がハッキリと見える。

「蜘蛛の糸で窒息死していたって事は報告しておこう」

「はい！」

それから二分後に二人は合流した。

ライトニングが得体の知れない海鳴での事件に関わろうとしている頃、スターズはロストロギア探索を続けていた。

「ちよつと肩の力は抜けたかな？」

高町なのはが先程ロングアーチからの情報によってリイン、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスターが余計な緊張が解けていればいいと思っていた。

「はいですう」

「ほつとしましたあ」

「はい」

三人とも先程より表情が柔らかくなっていた。

「そろそろ陽も落ちてきましたし、晩御飯の時間ですなあ」

空は青色からオレンジ色へと変わっており、帰宅を目的としている社会人もちらほら見えていた。

『ライトニング。そっちはどう？』

なのはは念話の回線を開く。

受信相手はフェイト・T・ハラオウンだ。

『こっちも一段落したから待機所に戻るよ。あとちよつと報告しなきゃいけない事もあるから。』

『それって怪人絡み？』

更に待機所にいるはやても念話の回線に入り込んできた。

『鋭いね』

フェイトがはやての推測に驚きの声を上げる。

『実は民間協力者さんからその手の情報をもらったんよ。何やら殺人

事件が起こったって』

『そうなんだ』

なのは達はライトニングとは違う方向を探索していたため、その手の情報に当たらなかったのだ。

『あと、本日の夕飯は民間協力者さんが用意してくれるそうや』

『あ、そうだ。良太郎から伝言があつてモモタロス達も連れて帰ってきてほしいって』

『了解。フェイト隊長』

一通りの会話が終わると、念話の回線は閉じられた。

「といつても、手ぶらで帰るつのもね。それにモモタロスさん達も連れて帰らないといけないし」

携帯電話を取り出して、アドレスの中から『翠屋』を選択する。

「あの、なのはさん」

「なあに、ティアナ」

「モモタロスさん達の居場所に心当たりがあるんですか？」

ティアナの質問に、なのはは苦笑するしかない。

「まず、間違いなく今から行く所なんだけどね」

なのはにしてみれば下手な推理や可能性などではなく、『確信』めいたものだ。

「あ、お母さん。なのはです。うん、お仕事で近くまで来てて……え、知ってる？あ、そうか」

翠屋で電話の相手をしてきているのは、母親である高町桃子だ。

携帯電話で会話している内容を端々に聞きながら、スバルとティアナは目を丸くしていた。

「なのはちゃんだって、地面から生えてきたわけじゃないんだから母親はいるって」

コハナが二人に変に特別視する必要はないように促す。

『魔導師としての高町なのは』、『上司であり教導官である高町なのは』しか知らないのだから無理はない。

「そ、そうですよね」

「何当たり前のことを変に感じてたんだろ。私」

スバルとティアナも我に返って、平静を取り戻す。

(母親か……)

コハナの母親とは良太郎の姉である野上愛理だ。

愛理は自分の事を娘だとは知らないし、自分も最初から知っていたわけではない。

事実を知ったからと言っても、コハナにしてみれば『実感がない』の一言で片が付いてしまう。

それに彼女が住んでいた『時間』はイマジンによって消滅させられてしまっている。

母親に甘えるという行為をコハナがとる事はほぼ永遠にかなわないのだ。

それを寂しいと思ったことはないが、それでもそういう行為ができるのは眩しいものでも見るような目で見てしまう。

「ハナさん？」

「ん？なに、スバルちゃん」

「スバルでいいんですけどね……」

コハナも良太郎同様にスバルを呼び捨てにはせずに、『ちゃん』付けしていた。

ちなみにティアナは『ティアナさん』と呼んでいる。

彼女の場合は良太郎と違って、単純にその方が『呼びやすい』という感覚であって『苦手意識』からなるものではなかった。

「どうしたんですか？」

「ああ、親に甘えられるって羨ましいなあって思ってた」

「そうなんですか」

スバルが余計な事を訊ねる前に、ティアナが話題を切り上げた。

「じゃあ十分くらいでお店に行くから」

なのはが携帯電話に向かって言う言葉に、リインは喜色の表情を浮かべていた。

「さてと……」

コハナは指をバキボキと鳴らしてから手足をブラブラさせていた。

「あのおハナさん」

「何かしら？ リインちゃん」

「リイン達が向かうところって、あそこのはずなのにどうして準備運動みたいなことをしてるんですか？」

この行動はこれから向かう先を知っているリインにしてみれば不審と取られても仕方がないようだ。

「そうよ。間違いなく私達がこれから向かうところは『あそこ』よ」
「だったら変です。どうしてそんなに体を動かしてるんですか？」

コハナは当たり前のように答え、リインは更に理解不能というような表情を浮かべる。

「それは行けばわかると思うよ。リイン」

携帯電話をたたんで、なのははコハナの代わりに返答した。

「あの、お店って聞こえましたけど……」

ティアナが電話の会話の端々で得た情報を元に訊ねた。

「そうだよ。ウチ喫茶店なの」

なのはは普通に答える。

「喫茶『翠屋』ですう♪」

リインが待ちきれないようにしてはしゃいでいた。

『翠屋』は夕方であり、客層は学生にサラリーマンにOLとまばらだった。

店員はあれよあれよと休む間もなく、店内を歩き来していた。

カウンター席には現在、昼間は四つの席が座られていた。

モモタロス達四体である。

しかし、現在彼等はこちらにはいない。

その彼等というと。

「さつきから洗っても洗ってもキリがねえな」

洗い場で皿洗いをしていた。

洗っても洗っても汚れたお皿は続々と追加されていく。

「センパイ。まだそのお皿汚れついてるよ。キンちゃん。洗い終わったお皿は絶対に割らないようにね。リュウタ、追加があるなら持つてきて」

ウラタロスが的確に指示を出していた。

戦闘面ではモモタロスがリーダー的存在になるが、この手の家事面でのリーダーはウラタロスだったりする。

「カメの字、張り切ってるなあ」

キンタロスがウラタロスの指示通りに丁寧に棚の中にお皿をしまつていく。

「ほーらモモタロス、おかわりだよお」

リュウタロスが洗い場に汚れているお皿を追加してきた

「まだあんのかよ!？」

終わりがどんどん遠ざかっていくのでモモタロスとしてはぼやいてしまう。

そもそも何故彼等は皿洗いのような裏方をしているかということ。

久しぶりに『翠屋』に訪れて、コーヒーを飲んでプリンやスイーツを食べてバカ話をして盛り上がっていた。

しかし、夕方ごろになると人が増え始めてきた。

現在の店員たちではハッキリ言えば対応できていない部分も目立ち始めていた。

モモタロス達とてかつて短期とはいえ、居候させてくれた大恩人ともいえる者達の職場が窮地に追い詰められているのを見て見ぬふりをするほど

薄情ではなかった。

言い出したのはモモタロスだ。

「なあとつつあん、カミさん。俺達を手伝ってやろうか？」

「もしかして今日、食べた分の埋め合わせとか考えてないだろうね。」

駄目だよ。今日のは我々の奢りなんだから、君達がそのような事を考える必要はないんだって」

『翠屋』のマスターである高町士郎がモモタロスの申し出をやんわりと断った。

「そうよ。皆さんと十年ぶりに会ったんだもの。私も年甲斐もなくはしゃいでしまったわ。だから変な気遣いはしなくていいのよ」

桃子も笑顔で断りの台詞を入れる。

「でもさ、モモ君達が裏方を手伝ってくれたら大助かりなのも確かかなんだけどね」

眼鏡をかけたおさげの女性——高町美由希はモモタロスの言葉に甘えようとしていた。

「美由希さんも言ってるんだし、士郎さんも桃子さんもセンパイの行為に甘えたら？」

さらに促してきたのはウラタロスだ。

「カメ、言っておくけどオメエ等もやるんだぞ？」

「当然わかってるよ。センパイ一人だと大惨事になりかねないしね」
ウラタロスは定位置のポーズを崩すことなく涼しく言う。

「一宿一飯の返させてもらおうでー」

右親指で首を捻ってから腕を組んで堂々とキンタロスは言う。

「お手伝いー!!」

リュウタロスは両腕を高く天に掲げて、やる気をアピールしていた。

イマジン達は全員やる気になっている。

士郎、桃子、美由希とて彼等の人となりは十分知っている。

これ以上の戦力がないという事も知っている。

士郎は右手をモモタロスの前に出す。

「モモタロス君」

「おうよー」

モモタロスは差し出された手をしっかりと握った。

そしてウラタロス、キンタロス、リュウタロスを一瞥してから言う。

「準備はいいか？野郎ども!!」

その一言が開始の合図となった。
そして現在に至るわけである。

なのは、スバル、ティアナ、リイン、コハナの五人が『翠屋』に訪れる頃にはピークを過ぎていた。

そのため、店員が慌ただしい素振りを見せる事はなかった。

「ただいまあ。お父さん、お母さん、お姉ちゃん」

なのはが声をかけるとカウンターにいる士郎と桃子が笑顔で返してきた。

「お久しぶりです。士郎さん、桃子さん、美由希さん」

コハナも十年ぶりの再会に頭を下げてあいさつする。

「なのは、お帰りなさい。ハナちゃんも久しぶりね」

「は、はい……」

コハナは、桃子、士郎、美由希の容姿を見て目を丸くしていた。

三人とも十年前の時間の時とあまりとか全く変化がないのだから。

(本当にただの一般人なのかしら……)

と、疑いたくなるのも無理のない事だった。

「お母さん。若……」

「本当だ……」

ティアナとスバルもやはり桃子の外見を見てそのように呟く。

「あれ、十年前と全然変わってないわよ」

「え!?!」

コハナの呟きに二人は『次元世界七不思議』に匹敵するものを生で見ることになってしまった。

「もしかしてお父さんの方も……」

スバルはおそろおそろ小声でコハナに訊ねる。

「十年前から全然変わってないわよ」

「……………」

コハナの一言にフオワード二名の高町夫妻を見る目には確実に『未知の恐怖』が混じっていた。

「モモ君達がいるからやっぱりと思ってたけど、ハナちゃん久しぶり」

美由希がコハナの前まで歩み寄って、頭を撫でる。

「あの、美由希さん。モモ達は？」

撫でられながらも、コハナは自身にとって肝心な事を訊ねる。

「裏方をやってくれて助かってるよ」

「そうなんですか……」

迷惑をかけていないなら自分が鉄拳制裁を繰り出す必要もないので、コハナとしては先程の準備運動は徒労になるがそれでいいと納得させた。

「この子達、私の教え子なんだ」

なのはが桃子と士郎にスバルとティアナを紹介していた。

「こんにちは。いらっしやい」

士郎が笑顔で応対する。

「は、はい！」

「こんにちは」

スバルはいきなりの事で上擦った声を上げてしまい、ティアナは平静を保っていたのか普通に挨拶を返した。

「ケーキは今、箱詰めになっているからね」

桃子が手際よくトングを使って、ケーキを箱の中に収めていく。

「モモ君達にハナちゃんが来ているって事は良太郎君も？」

「ええ、来てますよ」

「そっかあ……」

（もしかして美由希さん……）

コハナはどこか憂いを秘めた表情をした美由希を見て推測する。

美由希と良太郎が最初に会った際には、年齢は良太郎が年上だった。

だが十年経った時間においてはそれは既に逆転している。

それに彼女とて良太郎とフェイトの事は、なのは経由で知っている

のだろう。

無論これは、コハナの推測であつて根拠はない。

美由希が良太郎に対して秘めたる想いがあつたのでは、ということ
を。

それを美由希に訊ねるのは野暮というものなので、コハナは黙つて
おくことにした。

「コーヒーと紅茶もポットに入れておいたからな。持つて行つてあげ
な」

士郎がポットを二つ用意して、入れ始めていた。

「ありがとうございますう」

リインが深々と頭を下げる。

「お茶でも飲んで休憩していつてね。ええと……」

桃子がフオワード二人とコハナを促す。

「スバル・ナカジマです」

「ティアナ・ランスターです」

まだ自己紹介をしていなかったため、二人はした。

「スバルちゃんにティアナちゃんね」

桃子が笑顔で名前を記憶していく。

「二人ともコーヒーとか紅茶とかイケるかい？」

士郎が好みを訊ねる。

「あ、はい」

「私はコーヒーはちよつと……」

ティアナは大丈夫と言い、スバルは嫌いな方を告げた。

「リインちゃんはアーモンドココアよねえ？」

美由希がリインの好みを淹れはじめる。

「はいですう」

笑顔でリインは頷く。

「なのは」

士郎が穏やかな表情から真剣な表情に変わる。

「な、なに？お父さん」

「最近ユーノ君はどうしてる？」

「ふえ？」

士郎の質問はごく普通のものだろう。

知人の安否を知りたがっているものなのだから。

だが、なのはは件の人物を名を耳にした時に心臓が跳ね上がった。

「ユ、ユーノ君がどうしたの？お父さん」

心臓が跳ね上がったことなど誰にも気づかれることはないが、なのはは気が気ではなかった。

「最近、姿を見てないからな。少し気になってな」

「お父さん。ユーノ君ってよく来るの？」

「月に一度は来ていたな」

士郎の回答に、なのはは目を大きく開いていた。

それは、彼女が『初めて』知った情報だからだ。

「私、知らないよ……」

「まあ、特に教える事でもなかったしな」

士郎の言葉にどこか裏切られたという気持ちを持ってしまったなのはは、それをしつこく詮索する権利はないと自制する。

「それで、どうなんだ？」

「今のお仕事になってからは全く会ってないんだ」

「そうか。会う機会があったら顔を出すように言っておいてくれ」

士郎の言葉には『常連客を呼ぶ』というよりは『心配しているから安心させてくれ』という意味合いの方が強いように思えた。

なのはの中で、言い知れない不安があった。

「お父さん。ユーノ君の事が心配なの？」

彼女の言葉に、身内ではなく他人の心配する事への『嫉妬』は含まれていない。

「彼は天涯孤独の様なものだろ？一人くらい心配する人間がいてもいいはずだろ？」

(そ、そうだった……)

こちらが苦しくても何事もないように接し、悩みでも何でも聞いてくれるのがユーノ・スクライアだ。

だが、彼は悩みがあれば誰に相談するのだろうか。

職場の同僚に打ち明けるだろうか。

自分が同じ立場なら多分しないだろう。

友人、知人に打ち明けるだろうか。

気遣わせたくないという気持ちが行先して、打ち明けないだろう。

そうなる最終的に頼れるのは家族だ。

自分には両親や兄や姉がいる。

だが、天涯孤独といってもいいユーノにはそういう人物はいない。

(私、考えたことなかった。ユーノ君が悩んだりしたら誰に話しかけるのかって……)

それだけではない。自分はユーノという人物のプライベートなどを全く知らない事に気づいた。

十年の付き合いで、『大切な幼馴染』と称しておきながらだ。

「お父さん……」

「なのは。お前も社会で働いているからわかっていると思うけど念を押して言うぞ。人間関係は決して永遠不変じゃないんだ」

士郎は『父親』というよりも『社会の先輩』として、なのはに忠告した。

その言葉は、隣で座っているスバルとティアナにも突き刺さった。

「ところで二人とも、ウチのなのはは先生としてはどうだい？お父さん、どうも向こうの仕事の事はよくわからなくて」

先程の雰囲気になかったかのように、士郎が教え子二人に訊ねてきた。

二人は、まずこちらを見てきた。

その眼には「言っていないんですか？」という意思がこもっていた。

なのはは首を縦に振る。

「あ、その凄くいい先生で……」

「局でも有名で若い子達の憧れです」

悪評を言われることはないと思っていたが、褒賞を言われるのも居心地の悪さの様なものを感じてしまう。

家族に感心の声を挙げられることで、加速的に居心地の悪さが身体に襲い掛かってきた。

風芽丘図書館では、隊長を除くチームライトニングと良太郎が調べ物をしていた。

隊長であるフェイトは自動車を借りて、『翠屋』にいる面々を迎えにいった。

その間、ただボーっとするのもよしだったのだが良太郎はある事を知らるために訪れる事にした。

自分の中にある渦巻いている靄をスッキリさせるのが第一の目的でもあるため、単独で行うつもりだった。

だが、生真面目な三人は付き合うと言い張りその言葉に甘んじる事にした。

現在、エリオとキャロ・ル・ルシエは過去数十年に起こった殺人事件関連の記録本を探しており、良太郎とシグナムはそれらに目を通していた。

「野上」

「何ですか?」

ページを捲っている良太郎は手を止めることなく、隣で声をかけてきたシグナムの声に反応した。

「お前のやる気を削ぐわけではないが、話が飛躍しすぎていると私は思うんだが……」

シグナムの言う通り、自分の考えは飛躍しすぎているといってもおかしくない事だ。

「僕も実体験がなければこんな考えを口にした人の事を鵜呑みには多分しませんね」

「実体験ってまさか……」

キャロが言葉の意味を想像して、青ざめる。

その証拠にフリードリヒが入っている鳥籠を持つ手に力がこもっていたし、震えてもいた。

「あの……良太郎さん……」

キャロが質問を切り出さない代わりに、エリオが確認するように訊ねる。

「廊下に出ようか。続きはその時に話すよ」

続きを話すとどうなるか想像がついた良太郎はシグナム、エリオ、キャロを廊下へと促した。

「幽霊列車!？」

良太郎が口にした単語をエリオとキャロは反復した。

二人の表情は驚愕と恐怖が混じる複雑なものだった。

シグナムも声は出していないが、目を丸くしていた。

「死者を常世に運んだり、常世の住人を現世に運んだりする列車だよ」
幽霊列車に乗車（この場合、拉致）させられた経験があるのは仲間内をひっくり回しても良太郎だけだ。

「冷凍庫の中に閉じ込められる感じで、あまりいいものじゃなかったね」

生者には死者を運ぶ列車は、居心地の良いものではない。

現世と常世の中間地点であるデッドライナーも同じだ。

「もしあの蜘蛛の糸がイマジンさん以外の怪人さんだったら、それについてもかして……」

「か、勝てるんですか？そんな相手に……」

話を聞いた後なので、キャロとエリオは更に青ざめていた。

「野上。怯えさせてどうする……」

部下二人の態度を見て、シグナムが良太郎を睨む。

「まだ続きがあるんですよ」

怯えさせるつもりはなかったのだが、結果的にそうさせてしまったのでその責任は取らなければならぬと判断する。

「これも僕の体験からでしか言えないんだけど、幽霊列車から降りた

死者——死霊は現世に足を踏み入れると、実体を持ってしまいうんだよ」

「実体？つまり我等の攻撃が通じるといふ事か？」

シグナムが口を開く。

「はい。ただ……相手は死霊なんで死ぬ事はありませんけどね」

こちら側の攻撃が通じる事は、死郎との戦いで知っている。

そして不死身といえども攻撃を食らう事がダメージになり、それは決して無限ではないという事もだ。

それでも単純に体力は生者よりもあるのも確かだろう。

「僕達の攻撃が通じるといふ事がわかってホッと思いましたあ」

「それでも相手がお化けだから怖いですけど……」

エリオは胸をなでおろしていたが、キャロはまだ怯えていた。

単純に『生者以外の者』という種族的恐怖が勝っているのだろう。

良太郎はしゃがんでキャロと同じ目線になる。

「キャロちゃん。もし戦う事になったら相手をガジェットと思って戦えばいいよ」

「はい？」

「お化けだと思うから怖いんでしょ？ガジェットはどう？」

キャロは少しだけ天井を仰いでいた。

「ガジェットは怖くありません」

「ね。ガジェットは怖くないんだから相手をそう思えば怯えなくて済むんだよ」

「そうですね！ありがとうございます！良太郎さん」

キャロはこちらの意図を察してくれたようで、感謝の言葉を述べてくれた。

「いやいや、もしそれでも駄目ならエリオを頼ればいいんだし、ね？」

良太郎の言葉で一番狼狽したのはエリオだろう。

「え、ええと。うん。だ、大丈夫だからね!!」

エリオは狼狽しながらも、安心させる台詞を精一杯引き出した。

先程の恐怖に満ちた雰囲気から、一転して穏やかな雰囲気になっていく。

「わかりました。そのように伝えます」

シグナムが誰かと話していた。

彼女の方向に顔を向けると、携帯電話を用いていた。

(八神さんかな)

シグナムが丁寧語を使う相手は限られてくる。

「野上。時間切れだ」

それは探索の切り上げを意味する言葉だった。

第二十九話 「機動六課 海鳴へ⑤」 〽隠れた偉人？
後編〽」

桜井侑斗とデネブがイギリスから海鳴へと戻ってくると、拠点となるコテージから煙が立っていた。

ゼロライナーから降りると鼻腔をくすぐる匂いがした。

「もう夕飯時か」

「俺も手伝わなきやー！」

侑斗は夕飯時だと判断し、デネブは料理をしている人間に手伝うためにコテージの台所へと向かっていった。

「侑斗」

声をかけられたので振り向くと、野上良太郎がいた。

「野上、帰ってたのか」

「うん。それで何か有力な情報は得られたの？」

良太郎の口ぶりからして、自分が誰に会いに行ったかを八神はやて経由で知らされているのだろう。

特に黙っていてほしいと釘を刺したわけでもないので構わないが。

「機動六課で敵になりそうな奴の情報は一応得た」

「その様子からすると、相当厄介な相手？」

良太郎がこちらの表情を読み取って訊ねてきた。

「ああ。相手は『政治家』だ。『政治屋』でないのが余計厄介だ」

「信念を持った相手か……。確かに厄介だね」

「俺達。そういう奴と戦った事はほとんどないもんな……」

「うん……」

今までの戦いで『信念を持った相手』という敵と戦った事はほとんどない。

カイにしろ牙王にしろ死郎にしろ、信念というよりは己の欲望に忠実に従っただけというようにも捉える事ができる。

ネガタロスは少なくとも、欲望というよりは『美意識』で戦っていたとも取れる。もつとも海鳴で復讐を果たすために挑んできたRネガタロスの際には美意識よりも復讐心、つまり欲望が勝っていたので結局は信念で戦っていたと取る事はできなくなってしまうが。

「でも今すぐ戦うわけじゃないし、そもそも戦うと決まったわけでもないからな。変に気張る事もないだろ」

侑斗は良太郎に言いながらも自分に言い聞かせている。

「そうだね。戦うと決まっているわけじゃないから片隅にとどめておく程度でいいかもね」

良太郎も同意した。

侑斗と良太郎が場所を移ると主な面々がいた。

チームライトニングとスターズ、そしてロングアーチにデンライナーのメンバー全員が集まっていた。

そこにどこか見覚えがあるが、誰なのかわからない二人がいた。

その二人は八神はやて、高町なのは、フェイト・T・ハラオウンと楽しく会話していた。

「誰だ？見覚えはあるんだが……」

二人の顔を見て、侑斗は首を傾げたままだ。

「オメエ。どうしたんだよ？ボケーっとしてよ」

モモタロスが気にしてくれているのかこちらに来た。

「お前、わかるのか？」

モモタロスは首を傾げている良太郎の様子を信じられないような表情で見えており、侑斗は答えを知っていると踏んだのか

訊ねた。

「ボケてんじやねえよ。金髪チビと紫チビじゃねえかよ」

「誰が金髪チビよ！」

「私、紫チビじゃないですよー！」

モモタロスの台詞に反応するように二人が抗議してきた。

「金髪チビに紫チビ……」

「見覚えはあるんだよな。でも、十年経ってるから今ひとつなあ……」
良太郎はモモタロスの発した単語を反芻しながら突破口を見出そうとし、侑斗は確信がないので今ひとつ自分の推測に自信を持つことができなかった。

「もしかして、バニングスと月村か？」

侑斗はモモタロスが発した名称を反芻して導き出した結果を、口に出した。

三人との会話を一時中断してアリサ・バニングスと月村すずかが歩み寄ってきた。

「お久しぶりです。桜井さん」

「お元気そうで何よりです」

それぞれが軽く会釈してきたので、倅って返す。

侑斗はすずかとは、はやてとの繋がりですれなりに面識があるがアリサとはあまり面識がないといえられない。

過去二度にわたって海鳴に訪れた事があるが、それでも面識は数えるほどだ。

フエイトと同じ金髪だが活発なのがアリサで、なのは以上に大人しそうな雰囲気をしているのがすずかというくらいだ。

(今思い返すと、すごく失礼な覚え方のような気がする……)

絶対に口に出さないと侑斗は誓う。

「あ、えーと……」

この二人を前にすると、何を言えばいいのかわからない。

何せ話題らしい話題が出てこないのだから。

「私達って共通の話題がありませんね」

アリサはこちらの心中を察してくれたのか先に切り出した。

「まあ……な」

「そういえば、はやてとすずかが趣味で作ったアレってもう見たんですか？」

アリサが言うアレに心当たりがあるのは一つしかない。

「もしかして、ゴルゴムやクライシス帝国に関するファイルのこと？」
確認するかのように言うと、アリサは首を縦に振ってくれた。

「はやてちゃんと頑張りましたからね。アレをあそこまで完成させるのは……」

「あそこまで綺麗に作ったのはほとんど私よ……。アンタ達だけだったら凄いや量になってたわよ。間違いなく」

「さすが胸を張って、誇るほどの出来だというのは読者の良太郎としては納得できるがその後のアリサのぼやきは正直気になつた。」

「このファイル、どう見ても八神や月村だけで作ったわけじゃないとは思ってたけど大元はバニングス。お前だったんだな」

「侑斗がファイルを閲覧しながら、どこか納得したような口調をしていた。」

「どういう事？このファイル、八神さんとさすがちゃんが作ったものじゃないの？」

「ファイルのネタを集めたのは八神と月村で間違いない。ただ、ここまで人に理解しやすい内容となると二人では無理なんだよ」

「何でさ？」

「このファイルを作った人間は文系はもちろん理系も卓越していないと作れないんだ。八神の学業成績はシャマルから教えてもらったが、

コレを作るほどのモノじゃないな」

「それだと八神さんの成績しかわからないじゃない。さすがちゃんが頑張つたと取れるんじゃない……」

「侑斗の言い分だと、はやて一人で作る事はできない事がわかるだけですずかを込みにしても作れないという理由にはならない。」

「これもシャマル情報なんだが、月村が八神家に遊びに来ていた時の事なんだが文系、理系の科目が危ないかもと嘆いていたらしい」

「シャマルさん、そんな事まで覚えてたんですか!？」

「さすがにしてみれば『閉じておきたい歴史』だったようだ。」

「このファイルが作成されたのは今から四年前。いくら八神が現職管理局員だったとしても、片手間ではできるほどチャチな出来じゃない

し

月村がいくら中等部から成績を上げたとしても、これほどの出来になるまでには至らないと推測してるが？」

「降参します。桜井さんの言う通り、ファイルの資料を集めたのは私とはやてちゃんですけどまとめたのはアリサちゃんです」

さすがが両手を小さく挙げて打ち明けた。

その表情は暗くなく、逆に尊敬の表情を浮かべているくらいだ。

「そうか」

侑斗は納得したらしく、それ以上は何も言わなかった。

「それで良太郎さん。そのファイル、役に立つ……ちやっぴたみたいですね」

アリサは昼間、自分が得た情報とファイルの中に入っている情報で合致する部分がある事を思い出すと途端に声が沈んだ。

「うん。できればこんなかたちで役に立ってほしくはなかったんだけどね……」

良太郎の声も沈んでいた。

ファイルが役立つという事は、ゴルゴムがクライシス帝国の怪人が存在しているという事になるのだから。

「このファイルは今から数十年前の出来事だから、今この怪人達が地上にいるとしたらそれって……」

すずかは口にしながらも、それが現実であってほしくはないと願っていた。

「そこから先は僕達が調べるよ」

良太郎は安心させるように笑みを浮かべてから、すずかの言葉を中断させた。

侑斗も同じような表情で、アリサに下手な考えをさせないように中断させていた。

それ以上、下手な事を言わないところからしてアリサとすずかが事情を察してくれたことに良太郎と侑斗は内心で感謝した。

自動車が停車すると、三人の女性が出てきた。

「お姉ちゃんズ。参上!!」

モモタロスならポーズをとること確実な台詞を言ったのは高町美由希だ。

その後、十年前より髪を伸ばして落ち着きのある雰囲気を出しているエイミイとどこか見覚えのある子供が降りてきた。

「エイミイさん」

「アルフ！」

エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエが真っ先に反応した。

「それに美由希さん……」

「さつき別れたばかりなのに……」

スバル・ナカジマとティアナ・ランスターは突然の来訪に戸惑う。

「いやあエイミイが、なのは達に合流するって言ったから私も丁度シフトの合間だったし……」

「そうだったんですか……」

美由希の言葉に、スバルが納得する。

「エリオ、キャロ。元気だった？」

エイミイがフォワードの年少組に、離れて住んでいる家族の再会を喜ぶようにして声をかけた。

「はい！」

二人は元気よく揃って返事する。

「二人ともちよつとは背伸びしたか？」

「どうだろう……」

「少し伸びたかも……」

どこか見覚えのある子供はエリオとキャロの成長を伺うが、二人は実感がないため曖昧な返事しかできなかった。

子供の視線は良太郎に向く。

「良太郎!!」

「アルフさん！」

子供がアルフだという事は良太郎は見抜いていた。

アルフが駆け寄り、良太郎も視線を合わせるようにしてしゃがむ。

「アンタ、久しぶりじゃないか！全然変わってないね」

「アルフさんは十年前より大分変わったね。どうしたの？その身体」
良太郎の知るアルフは自分よりは背が低いものの、メリハリのある
プロポーションをした『少女』と『女性』の間くらいの
容姿をしていた。

それが今は完全に『少女』もしくは『幼女』といってもいいくらい
に小さくなっていった。

アルフが大型の狼や可愛らしい『こいぬフォーム』になる姿を見て
きているので、今更このような姿になっても大声出して

驚くほどの事ではなかった。

「まあ、あれから十年も経ってるんだからいろいろ変わるさ」

「その姿で言っても、何か変なだけだよ」

言ってる内容はどこか昔を懐かしむ大人な台詞なのだが、言ってい
る者の外見は子供なのでおかしかった。

「しつれーだぞー」

アルフは抗議するが、会話を弾ませるためのものなので本気で怒っ
ているわけではない。

「アルフー！」

アルフの犬耳がピクピクつと反応する。

彼女にとつて最も会いたかった人物の声が入ったのだ。

「フェイト！フェイトー！」

主のそばまで寄ると尻尾までピコピコさせる始末だ。

「アルフ、元気そうだね」

飛びついてきたアルフをフェイトは抱き留める。

「元気!!」

満面の笑顔で答える。

「ほんと、アルフには世話になりっぱなしだね」

エイミイが頬を掻きながら実情を打ち明け始める。

「ウチの子達の世話に遊び相手、本当に助かってるんだよ」

「そうなんですか」

エイミイは感謝しきれないという口調で語り、高町なのはは納得し
ながら頷いていた。

「ハラオウン家の使い魔だからな―！」

アルフはフェイトから降りて、胸を張って言う。

「チビ達の世話は楽しいし♪」

そのように付け足す。

「あのお、ちよつといい？」

良太郎がゆっくりと拳手をしてから、話に入ろうとしていた。

「エイミイさんの言っているウチの子達とかアルフさんの言うチビ達ってなに？もしかして養子？」

真顔で良太郎は質問する。

「良太郎。エイミイは結婚してるんだよ」

フェイトがまず十年間に起こった事実の一つを話した。

「え!?あ、それはその……おめでとうございます」

「あ、いえいえこちらこそ」

事実を教えられた良太郎は一瞬だけ驚いてから、エイミイに頭を下げて感謝の言葉を述べる。

エイミイは笑顔で返す。

「でも誰と結婚したの？僕の知ってる人？エイミイさんだったら候補者募ったら十人二十人じゃ足りないでしょ？」

「そんなにはいないよ。私そんなに魅力ないしね」

良太郎の言葉を謙そんしながら、エイミイは笑う。

「そんな、エイミイさんみたいな女性はなかなかいないと思うけどなあ」

「どうして？」

良太郎は納得いかないという顔をし、フェイトが訊ねた。

「仕事はできるし、家事は完璧で相手への気配りだってできるし偏見で人を見る事はしないんだよ。僕の世界の女性ではなかなか出会えないよ」

フェイトの疑問に良太郎は真顔で答えていく。

「いや〜何かそんなふうに褒められると照れちゃうな〜」

エイミイは自分をそこまで高く評価してもらったことはあまりないので、照れていた。

「……………」

そんな光景を見ながら、一人だけおっかない雰囲気醸し出そうと
している人物がいる事をここに居る誰もがまだ気づいてはいない。

「……………」

おっかない雰囲気醸し出そうとしているのはフェイトだった。
もちろん本人が意識しての事ではない。

(な、何だろう……………)

胸のあたりがちくりと痛むような痛みを覚えてから身体の内
に眠る何かがまるで長年の眠りから目覚めたような何かが一
気に身体を駆け巡った。

(良太郎がエイミィを褒めただけなのに……………)

そう、ただそれだけの事なのだ。

自分にとって義理の姉が他人に評価される。

悪い事ではなく、むしろいい事なのだ。

「あの……………フェイトちゃん」

なのはが何かに恐れている表情を浮かべながら、声をかけてきた。

「なに?」

訊ね返したただけなのに、なのはは更にビクツとした。

「怖いよ……………」

「え?」

言われても何なのかはわからない。

「だからその……………何でそんなに機嫌が悪いの?」

「私が?」

「フェイトちゃん以外にはいないって」

なのはが何を言っているのかフェイトには本当にわからない。

(機嫌が悪い?私が……………)

どうしてそうなったのかという経緯はひとつしかない。

(良太郎がエイミィを称賛した事が私は嫌だったってこと?)

フェイトは胸に手を当てて、冷静になろうとする。

(どうして。今までこんな事は一度もなかったのに……………)

心臓の鼓動が聞こえてくる。

激しかったものがゆつくりと普通に鼓動している。

(私、嫉妬してたんだ……。エイミイに)

今までどんな局面に立っても明らかに嫉妬だと感じたことはなかった。

これが初めて自覚できる嫉妬なのだ。

自覚することでフェイトが行う事は自己嫌悪だ。

(私、嫌な女になっちゃったのかな)

他人を嫉妬するというのは道德概念でみれば褒められる行為ではない。

だが、今のフェイトの行為を真っ向から避難できる人間がいるだろうか。

「フェイトちゃん」

「良太郎……」

自分の異変を彼が感付かない筈がない。

「どこか行こうか？」

「うん」

月を鏡のように映す湖畔へと移動した。

「どうしたの？」

彼は心配の表情を浮かべたままだ。

自分が彼にこのような表情をさせるのはやっぱり『恋』絡みだけだ。

「う、うん……。あのね……」

心配してくれている相手をはぐらかす気持ちはフェイトにはなかった。

それが自分が行為を抱く彼なら尚更だ。

「さっき私ね……。その……」

罪悪感を感じているので、即座に切り出すことはできない。

「エイミイに嫉妬したんだ……」

「エイミイさんに？」

「うん……」

フェイトは告白し、良太郎は訊ね返した。

「僕がエイミイさんの事を言ったから……だよね」

嫉妬する原因が何なのかを見抜けないほど、良太郎は鈍くはなかった。

「うん……。でも良太郎が悪いわけじゃないんだよ。良太郎の言うてる事、本当だし……」

フェイトも身内鼻肩を抜きにしても、エイミイへの評価は良太郎と同じだ。

「そんなに気にする事じゃないと思うよ」

どんどん深みにはまろうとしている中に、この台詞が耳に入った。

「でも……」

「誰だって嫉妬はするよ。僕だってモモタロス達だっけね」

「例えば？」

深刻な表情をしていたフェイトが興味を持ったのか、横にいる青年の顔を見る。

「君達魔導師は空が飛べる。でも僕達は飛べない、とか」

「陸戦魔導師っていつて空を飛べない魔導師だっているんだよ」

「でも僕達が最初に見た魔導師は君達だからね。どうしても君達が基準になっちゃうんだよ」

良太郎も民間協力者であるが、時空管理局に関する最低限の知識は教えられている。

それでも、その手の知識を有する前の方が印象深いためか良太郎にしてみれば『魔導師は空が飛べる』とインプットされてしまっているらしい。

「僕もモモタロス達も自力ではどんなに頑張っても空は飛べないからね。息するみたいな感じで空を飛んでる人を見たら妬ましいと思う事はあるよ」

自分とは逆に、良太郎は穏やかに語っていた。

「でもどうして、空を飛べる事に嫉妬したの？こう言うては何だけど良太郎達は空を飛べなくても強いじゃない？」

フェイトは電王が過去に空戦魔導師とカテゴライズされる魔導師と戦っていた出来事を思い出す。

自分を始めとして、空戦可能な魔導師と戦っても善戦している事実がある。

「土俵が違う相手と戦うって事は、それだけでも普通に戦うよりも体力や精神力が消耗するってのは知ってるでしょ？」

善戦できるといっても、傍目から見ても『不利』を背負って戦っている事は確かだ。

「それに嫉妬することは悪い事じゃないよ。大事なのはその後じゃないかな」

「その後？」

良太郎は鼻の頭を掻きながら言い始める。

「嫉妬したことを反省するか、強引に正当化させるかはその人次第だよ」

「……うん」

そう言うと良太郎は踵を返す。

「行こう。そろそろ戻らないと八神さんに茶化されそうだしね」

フェイトは頷き、彼の背を負った。

その後、合流すると予想通りにはやてに茶化された。

エイミイとアルフと話す機会があり、その中で先程のエイミイの亭主となった人物の正体を知り良太郎としては頭を悩ませる事になった。

「モモタロス達。絶対に弄るよね……」

「うん。間違いなくね」

「絶対に弄るね」

「あははは……」

真面目な顔をして言う良太郎、フェイト、アルフに対してエイミイはその未来があまりにハッキリ見えているためか笑うしかなかった。

イマジン達は現在、アリサ、すずかと話し込んでいるのが見えた。

「やっぱり夕飯時に自己紹介とかってあるよね」

「余程非常識でない限りは間違いなく、やるね」

「エイミイの番になったら、モモタロ達は暴れだすよね」

「良太郎君。ハナちゃん、来てるよね？」

「来てるけど、まさかエイミイさん」

四人の話し合いが深刻化し、今後起こるイベントでエイミイの事情を知ったイマジンが暴れだすタイミングを予想しどのように対策を練るかと進んでいた。

「この場にいる面子で確実にモモタロス君達を鎮静化できるのはハナちゃんだけだからね」

折角の社交の場でコハナ一人に汚れ役をさせる事にエイミイは罪の意識を感じていた。

だが彼女も、独身の際は時空管理局の局員だ。

時には非情にならない面がある事も知っている。

「まあ、ハナさんに事情を話せば二つ返事で応じてくれると思うから心配はないと思うけど」

「あれ？そうなの……」

良太郎の意外な答えに、エイミイの両肩の力が抜けたのは決して気のせいではない。

「何かいい匂いがするね〜」

「そうですね。何だか食欲をそえられる匂いですね〜」

「お腹すきましたね〜」

「キユク〜」

「あんた達。意地汚いわよ」

フォワード陣のティアナ・ランスターが窘めるが、三名と一匹は鼻腔をくすぐる匂いの誘惑に負けかけていた。

そこで四人は従来の常識を疑う光景を目の当たりにする。

はやとデネブが向かい合って、鉄板で調理をしていたのだ。

デネブが作る料理を四人は食べたことがある。

といっても、休憩中にヴィータから配られるデネブキャンディーだが。

元来部隊長が現場に姿を見せる事があっても、ほとんどが指揮を

執って泰然自若としているものだ。

少なくとも、参加者全員のために自らが厨房に立って両手にヘラを握って自在に操ったりはしない。

「デネブちゃん。悪いけど今回は勝たせてもらうで」

「前回も引き分けだった。俺も一回は勝っておきたい」

ヘラを自在に操りながら、はやとデネブは今回の料理に対して抱負を語っていた。

「あー、言つとくが自分達が替わりにやるなんて言うなよー」

フォワード陣が切り出そうとする出鼻をヴィータが挫いた。

「はやて隊長とおデブの料理はギガうまだからな。ありがたくいただけ」

ヴィータの言葉を真に受けて、四人は訓練を受けるくらいに気合のこもった返事をした。

「あの、ヴィータ副隊長」

「何だ。キャロ」

「どうしてシャマル先生はあそこからこちらをじっと見ているのでしょうか?」

キャロの言う通り、シャマルは距離を離れて木の陰に隠れてじつとこちらを、正確には料理をしているはやとデネブを見ていた。

「あーあれはな……」

「気にするな。いつかは自分もあの場に立ちたいというシャマルの心の表れだ」

ヴィータが答える前にシグナムが簡潔に教えた。

「立てるんでしょっか?」

エリオの問いに、シグナムとヴィータは顔を見合わせる。

「無理」

非情な答えにシャマルは涙を流して、どこかに走り去ってしまったことは言うまでもない。

第三十話 「機動六課 海鳴へ⑥」 第一回異種怪人戦」

機動六課の現拠点となっているアリサ・バニングス貸出のコテージでは、現在大所帯となっていた。

この間、サーチャーの結果待ちとなり魔導師サイドとしては小休止のような状態だ。

だが、仮面ライダーサイドはそういうわけにはいかない。

野上良太郎は自身の仮説を他の面々にも報告した。

普通なら鼻で笑われて一蹴されるような話だが、誰もがその話に耳を傾けていた。

仮面ライダーサイドの誰もが『幽霊列車騒動』の体験者だからだ。それに良太郎の話を信じる理由はもう一つある。

それはモモタロスの嗅覚が何の反応もしなかったからだ。

相手がイマジンならば間違いなくこの嗅覚の対象になるのに、それがなかったという事は別の存在という事を意味している。

そして海鳴市の住民を恐怖に落としている謎の怪人は蜘蛛の糸を用いており、過去にも似たような殺人事件が行われていた

事が明らかになった。

八神はやて、月村すずかが資料を集めてアリサがまとめたファイルにも事件は記載されていたが、犯人が誰なのかまでは公表されていなかった。

だが、蜘蛛のような怪人が偶然にも事件記者がシャッターチャンスを得て写真に収めてしまい、それが大々的に新聞に報道された。

読者の誰もがこの怪人が犯人だと結びつけることに疑いは持たなかった。

だが、読者はこの怪人がどのような末路を辿ったのかという情報を得る事は出来なかった。

何故なら新聞には一度も取り上げられず、テレビにも報道された

ことがなかったからだ。
だから誰もが推測で判断するしかなかった。

誰かが怪人を倒した。

という事を。

その『誰か』というのはファイルを一読した良太郎にはわかって
いた。

(僕達以外にもいたんだ。いや、シグナムさんは知っていた感じだっ
たな……)

十年前の時間で良太郎はライナー電王に変身して、シグナムと戦っ
ている。

その際に彼女は自分の姿を見て、『仮面ライダー電王』と言った。

ここから考えられる事は『仮面ライダー』という言葉を某かの方法
で知ったという事になる。

そして、その原因も知る事が出来た。

仮面ライダーBLACK。

ゴルゴムをたった一人で滅ぼした仮面ライダー。

今から数十年前に存在したと思われる伝説の英雄。

それ以外の事は何一つ明らかにはなっていない。

(今から数十年前だから土郎さん達は知ってると思うけど……。なの
はちゃん達はまるで聞かされていないみたいなき感じだったし……)

その事を子供達に口外しなかったのは親心なのかもしれない。

また、話したところで『おとぎ話』か『トンデモ話』として受け止
められてしまったらそれまでなのだから。

(怪人絡みは目撃者と体験者以外は絶対に信じないしね)

人間は自身の常識範囲外の事象を決して認めたりはしないのだか
ら。

それを責める気は良太郎にはなかった。

自分がもし、電王にならずに平凡な人生を歩んでいたとしたら信じないからだ。

自分達はもしかしたら伝説の英雄が相對した怪人の亡霊と戦うのかもしれない。

そう考えると、不安よりも『必ず倒す』という決意が強くなっていった。

考えをある程度までまとめ終わると、目の前の出来事に意識を向ける。

地元協力者がフォワード陣に自己紹介をしていた。

自己紹介はアリサ、月村すずか、アルフ（幼女）は既に終えていた。

エイミイの番だった。

「良太郎。そろそろ本腰入れるわよ」

隣に座っているコハナが呟く。

「わかっている。モモタロス達が暴走したら頼むよ」

このメンバーの中での確かかつ迅速にイマジン四体の暴走を鎮める事が出来るのは彼女しかない。

「まかせて。これからエイミイさんが言う事はそうなくてもおかしくない事なものね」

これらのやり取りは現在、誰の耳にも入らない声量で行われている。

「えー、恐らく立場が複雑なミッド人。エイミイ・ハラオウンです」

この時、ウラタロスが一瞬だが首を傾げたのは決して見間違いではない。

また、モモタロスが右耳の中に小指を突っ込んで耳垢を取り除く行為をしていたのも決して見間違いではない。

「元は次元航行隊の通信士で執務官補佐。アースラでの通信主任をやっていた縁で、なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、それに良太郎君達」

と会いました。もう十年も前だねえ……」

この時、キンタロスが首を縦に振っていたが相槌を打っているのであつて寝ているわけではない。

その隣で、リユウタロスが寝ていたら頭を叩こうとしている素振りをしていたのは見間違いではない。

「それから色々あつてこつちで美由希ちゃん達と仲良くなったり、フェイトちゃんのお義兄さんでもあるクロノ・ハラオウン提督と結婚したりして……」

「「「なにいいいいいい!!」」」

突然の大声にエイミイの自己紹介は中断された。

大声を出したのは四体のイマジンだった。

同時に席から立ち上がってもいた。

「クロイノの姉ちゃん……」

「何て早まったことを……」

「血迷ったんか!」

「どうしちやったのさ! エイミイちゃん!」

イマジン四体も自分同様にエイミイという人物を高く評価している。

もしかすると、自分以上かもしれない。

何せ彼女は『時空管理局員で初めて何の偏見も持たずにイマジンに普通に接した人間』なのだから。

「やっぱ君達からしたらそう捉えちゃうんだね……」

良太郎とコハナが手を打とうとする前に、エイミイが切り出した。

その表情は暗くなく、苦笑いを浮かべていた。

「だってクロイノだけ……」

「どうしてわざわざハズレを選んだのさ?」

夫を、『クロイノ』と呼んだり、『ハズレ』呼ばわりしたりしているがエイミイの表情に『怒り』は出ていない。

「まあ、エイミイがクロイノの稼ぎを目的にして結婚するとは思えん

しなあ」

「エイミィちゃん、どうしてなの？」

キンタロスはエイミィの結婚動機となりえる一つを切り捨て、リュウタロスは本人から聞いただそうとしていた。

なお、エイミィとイマジン四体のやり取りを聞いている他の面々はというと。

この手のやり取りに慣れている者達は割と平然としているが、慣れていない者達や初めての者達は必死で笑いをこらえていた。

「ええとね。その……ずっと好きだったから……愛してしまったってのはダメかな……」

エイミィが照れながら言う。

その表情を見て空気が読めないイマジン達ではない。

「カメ。これはどーゆーことになってんだよ？」

モモタロスはこの手の話に一番聡いウラタロスに訊ねる。

「釣られちゃったみたいだね。クロイノに……」

「手遅れっちゆうことか……」

「そんなあ〜」

自分達ではどうしようもない状態になっているのだと理解した。

「私が出す必要ってないわよね？」

「うん。モモタロス達も半分は本気かもしれないけど、半分は冗談だろうしね」

「あ、やっぱりわかってた？」

「完全に本気だったら、デンライナーに乗ってクロノの所に行ってるだろうしね」

自分達の心配が杞憂に終わろうと判断しながら、コハナと良太郎はイマジン達の行動の真意を見抜いていた。

彼等にクロノ・ハラオウンを襲撃する気はないという事を。

そもそも彼等はクロノを『クロイノ』と称して、弄る事はあっても暴行にまで発展した事はない。

先に手を出そうとしたのはむしろクロノの方だったりするが、これも未遂で終わっているので何の問題にもならない。

エイミイもその事は彼等の態度を見て見抜いてはいるが、この場に
いるほとんどもが額面通りに受け止めているので上手く取り繕わなければならぬ。

現にイマジン達の真意を知らない者達はオロオロしているくらいだ。

「だからさ、折角心配してくれてるところ申し訳ないんだけどさ……。私、大丈夫だからね」

エイミイがイマジン達を始め、他の面々に安心させるように笑顔で言う。

「センパイ。どうしよつか?」

「モモの字……」

「モモタロスう」

ウラタロス、キンタロス、リュウタロスがモモタロスに視線を向ける。

自然と他の面々も彼へと視線を向けていた。

「姉ちゃんがそれでいいってんだったらよ、俺達は何も言えねえじゃねえかよ」

腰に手を当てて、渋々納得したような表情を取る。

「でもよ、もしクロイノが浮気とかDVDとかされたら言えよ」

「センパイ、DVでしょ。クロイノがそんなことしたら遠慮なく言ってくれればいいからね」

モモタロスが夫婦不和になる原因の二つを述べるが、一つは明らかに違っているため二番手のウラタロスに訂正された。

「まずは適当に締め上げてから、素っ裸にして……」

「どこか適当に目立つところまで逆さ吊りの刑だよね」

キンタロスとリュウタロスが執行する刑の内容を公言する。

聞かされている側は皆、このように思っているだろう。

この人達なら絶対にやる、と。

「ありがとう。そんな風に言ってくれてさ。あとクロノに会っても私に遠慮しなくていいからね？」

エイミイの一言はイマジン達にとってはお墨付きだった。

そう、『クロノ・ハラオウン弄り』という行為に対してのだ。

イマジン四体の顔がすごく悪そうな顔をしていたのは決して気のせいではないだろう。

エイミイの紹介が終了し、その後美由希の紹介が行われた。

美由希の紹介内容は主に、妹であるのに対しての想いだった。

だが、その内容を良太郎は他人事のように聞くことはできなかった。

自分にも身内がいるからだ。

野上愛理という家族がだ。

(姉さん。心配してるだろうなあ)

そんな事が顔に出ていたのか、隣のコハナが心配げな表情をしていた。

「愛理さんのこと？」

「まあ、ね」

コハナが確信を突いてきたので、良太郎としては頷くしかない。

「一か月帰ってないからね。何事もないとは思うけど……」

信頼しているというか、肝が据わっているところがある姉だからトラブルに巻き込まれても難なく乗り越えているだろう。

「あれ……」

「どうしたの？良太郎、あ……」

本世界にいる姉の安否を考える事をやめた良太郎の目に、斜向かいで妙な光景が映った。

キャラがティアナを心配しているというものだ。

「珍しい光景よね……」

「うん」

二人のやり取りをきちんと聞いていたわけではないので、状況は把握していなかったが妙に気になる光景でもあった。

地元協力者達の紹介が終わると、今度はフオワード四人の紹介へと切り替わった。

*

ガサゴソと音を立ててコテージに向かっているが、誰も気づいてはいなかった。

*

宴も最高潮へと向かっていた。

そうなつていくと、予め用意していたものはどんどんなくなっていくというのが自然の摂理だ。

ストックはしてあるので、後はそれを取りに行くだけで万事収まる。

フオワード陣がジュースの予備を取りに行くと言い張り、湖へと向かっていく。

イマジン達もジャンケンで誰が同伴するのかを決めていた。

グーが二体、チョキが二体という結果になり勝ったのはモモタロスとリユウタロスだった。

「おしー！」

「やったあ！僕の勝ちー♪」

勝者のモモタロスとリユウタロスは勝ち誇っていた。

「しょうがない。いきますか」

「そりゃな」

敗者であるウラタロスとキンタロスが勝者の二人を見てから、フオワード陣の後を追う事にした。

いくら鍛えられているといっても、女子供に重いものを持たせるといふのはどうだろうという部分もあったりする。

「ウラタロスさん、キンタロスさん。どうしたんですか？」

真っ先に訊ねてきたのはスバル・ナカジマだった。

「ジャンケンで負けちゃってね……。その罰ゲーム」

「ま、女子供だけに重たいもんを持たせんのどうかというわけであらうわけや」

ウラタロスは定番のインテリポーズを、キンタロスは親指で首を一回ひねってから腕を組んで答えた。

「ありがとうございます」

感謝の言葉を二体に述べたのはティアナだ。

湖に向かう中で、ティアナが自身の成長に疑念を抱いている素振りがあつたがそれをスバルがフォローしていた。

「どうしたんや？カメの字」

「ん？ティアナさんを見てたらさ、ちよつとユーノの事を思い出してね」

「そーいや、来てから一度も会ってへんな。元気しとるやろか？」

チームデンライナーにとって、忘れてはならない存在がいる。

ユーノ・スクライア。

高町なのはをこの世界に導く原因となつた少年である。

また、良太郎と合流するまでや時空管理局と共闘関係になるまでは彼が作戦などを立てていたりもしていた。

魔法の世界に関する知識やジュエルシードの事などは彼から教えてもらっていたくらいだ。

「翠屋でのなのは、憶えとるか？」

「ユーノが翠屋に割と訪れているって知った時、結構驚いていたよね」

「ま、会ってへんねやろな」

キンタロスの推測は間違っていないとウラタロスは思っている。

「あれから十年か……」

「何や？急に」

「前に僕がユーノと二人で無限書庫に行つたでしょ。その時の事を思い出してね」

フォワード陣が湖からジュースを取ろうとしている姿を見ながら、危なくなつたら助けようというポジションを二体は取る。

「何かあつたんか？」

「男が好きな女の子を守りたいために一番最初に望む事をユーノも言ってたんだよ」

「ユノ助がか!？」

眼前の動向を見守っているキンタロスが信じられないという表情をしていた。

「信じられないって顔してるね。キンちゃん」

「当たり前や。あのユノ助やで。そういうのとは最も縁遠いヤツやろ?」

キャロが持ち上げようとしたので、キンタロスが歩み寄ってジュースの入った袋を持ち上げる。

「でも男だからね」

ウラタロスの一言にキンタロスは反論する言葉を閉じてしまう。

「俺等のせいなんか!？」

「どうだろ。でも、僕らがまるつきり無関係とは言い切れないしね」

自分達の存在は力無き者にしてみれば『希望』であると同時に『劇薬』だとウラタロスは思っている。

『希望』として解釈している間はただ盲目的に見ているだけなので、下手な事はしない。

しかし、これが『劇薬』となると何かと面倒なことになる。

刺激が強すぎて、悪影響になる事が確実だからだ。

できればユーノには自分達を『希望』という形で見ていてほしいというのがウラタロスの願望だが、現実そんなに甘くない事も知っている。

十年前に彼が放ったあの台詞は決して『少年特有の青さから出てくる憧れ』のようなものが混じっていなかった。

羨望、嫉妬、渴望というようなものがむき出しになっていた。

最も人間が進化しやすく、同時に堕ちやすいものだ。

「カメの字はどない思ってるんや」

「何が?」

「ユノ助がなのは等と上手い事やってると思ってるんか?」

キンタロスの両手の握られている袋には二リットルのペットボト

ルのジュースがぎっしりと入っていた。

「やってるとは思うよ。でもねキンちゃん。土郎さんが言ってたように人間関係に永遠不変なんてないのは確かだよ。どちらにも今の関係をこじらせる

原因はあるだろうしね」

詐欺師的な性格のウラタロスだからこそ言える台詞だ。

ウラタロスの両手にもティアナから取ったペットボトルぎっしりの袋が握られていた。

先頭を歩いている二体の足が止まった。

「いるね」

「ああ、俺等を待ち伏せてるで」

後ろを歩いている四人も二体の反応を見て、足を止めた。

「あ、あのどうかしたんですか……」

エリオが切り出した。

「何が出てきても驚いたり動揺しちゃダメだよ」

ウラタロスが後ろの四人に釘を刺す。

「スバル、エリオ。悪いけど俺等の荷物持つとつてくれ」

「は、はい」

「わかりました」

二人は二体から両手に握られている袋を受け取る。

「いい加減に出てきなよ。僕等は逃げも隠れもしないからさ」

ウラタロスの挑発が林の中で響く。

ガソゴソと音を立てて、何かがゆっくりと出てきた。

キシヤーという音を立てながら、牙を横に動かしながら現れる。

黄色と黒色の保護色で、六本の腕を持つっておりその外観や醸し出す

雰囲気は明らかに『イマジン』ではなかった。

そして出てきた何かは一体ではなく、五体だった。

全員の視界にハッキリと映った。

イマジンとは違う蜘蛛型の怪人が五体出てきた。

「グギユギユギヤー」

蜘蛛型の怪人——クモ怪人がこちらに向かって何かを言っている。

だが、人語ではなかった。

「ヨクワカッタナ、って言ってます」

そのように言ったのはキヤロだ。

「「「??」」」

三人と一体は首を傾げている。

「グギヤギヤギヤアギヤアギユギユギヨギヨギヨ」

クモ怪人の一体が更に口を開いて何かを言う。

「ワレワレハごるごむノくもかいじんダ、って言ってるね」

あの鳴き声を訳したのはウラタロスだった。

「「「???」」」

鳴き声を訳した一人と一体以外は首を傾げていた。

そして思った。

何でこの怪人の言葉がわかるんだ!?!、と。

自分達の言葉が通じる事にクモ怪人達の目元にうつすらと涙を浮かべていたりするが、誰も見てはいなかった。

第三十一話 「機動六課 海鳴へ⑦」
くカイジンガル
で怪人狩りく」

夜の林の中で、五体のクモ怪人と対峙する四人と二体。

その中でウラタロスとキヤロ・ル・ルシエはこれから事を構える事が必須の怪人の言葉を理解していた。

もちろん、この事に驚いていたのは当人達だったりするのだが。

「カメの字、お前いつの間に英会話なんか習ったんや?」

「キンちゃん。これ英語じゃないからね。あとさ、僕習った覚えもないからね」

キンタロスの言葉をウラタロスはやんわりと否定する。

「キヤロ。アンタ、前の部署にいた時に覚えた、何てことはないわね……」

ティアナ・ランスターが仮説を立てるがそれには矛盾が存在している事に気づいて声がしぼんでいく。

「はい。自然保護隊といっても怪人さんは含まれてませんから……」

「いたら大問題だと、キヤロ・ル・ルシエが補足する。

「じゃあどうしてキヤロとウラタロスさんにはわかるんだろ?」

スバル・ナカジマが議題を振り出しに戻す。

「共通点があるんでしょうか?」

エリオ・モンディアルがキヤロとウラタロスに共通する何かがあるのではないかと疑う。

「キヤロとカメの字にか?ある意味、正反対の位置における二人やで」

キンタロスが隣にいる青一色のイマジンと、自分よりはるかに背の低い位置にいる少女を見下ろしてから比べる。

「正反対ってキンちゃん。ちよつとそれって失礼じゃない?」

ウラタロスもカチンと来たらしく反論しようとする。

「合ってるやないか。キヤロみたいな純真な子とお前みたいな女たら

しが同じ位置におけるわけないやろ」

付き合いが長い分、キンタロスも容赦なく言う。

一人と一体の突然開眼した能力についての談義はまだ続く。

その間、クモ怪人達が攻撃を仕掛けてくることは何故かなかった。

クモ怪人達は輪になって話し合っていた。

「グギョギョグギョギョ (あの人間の女と青い気持ち悪い奴)」

「グギョギョ (俺達の言葉が通じていたな)」

「グーギョギョゴギョギョグギョ (怪人になって三神官様以外で初めてだな)」

「グギョ (ああ)」

怪人になって数百年くらいが経ち、通じる相手は同輩であるゴルゴム怪人か上司である三神官くらいだ。

ほぼ不死身に近い命を手にはしたが、命令がない場合は薄暗く陰気くさい場所で待機しておかなければならない。

唯一の楽しみはゴルゴム怪人共通の好物である『ゴルゴメスの実』を食べることくらいである。

ただし、今の自分達は既に死亡している存在だが。

「グギョゴギョギョギョゴギョゴギョゴ？ (三神官様をお願いしてあの二匹を仲間にするってのはどうだろう)」

「グギョギョギョギョ (でも仲間は募集してないはずだ)」

「グギョギョギョギョギョギョ (補充はあの場所から召喚すればいいとバラオム様もおっしゃっていた)」

「グギョギョギョギョギョ (勧誘は諦めるか……)」

「グギョギョグググギョギョギョグギョ (最後に一度、勧誘してみよう。それで駄目なら……)」

クモ怪人五体が揃えて首を縦に振った。

「グギョギョギョ (そこの人間と青い奴)」

クモ怪人の一体が前に出て、キャロとウラタロスを見ながら言った。

「なに？今ちよつと忙しいんだけどさ。あと僕はウラタロスっていう名前があるから覚えておくように」

「は、はい。何ででしょうか？」

クモ怪人の呼びかけに反応したのは言葉が理解できるウラタロスとキヤロだ。

「グギョギユグギョギョギョギョギョ（俺達の仲間になる気はないか？）」

クモ怪人の言葉を聞きながら、ウラタロスとキヤロは目を丸くした。

「いや、無理でしょ」

「すみません。それはできません」

一体と二人は即座に断りの返事をした。

「キヤロ。あの怪人は何て言ってたの？」

「ええとね。オレタチノナカマニナルキハナイカって言ってたんだよ」

エリオの問いにキヤロは律儀に答えた。

「スカウト!？」

「よつぽど言葉が通じてる事が嬉しかったのね」

キヤロの言葉を聞きながら、スバル・ナカジマとティアナがクモ怪人に同情していた。

「カメの字、だから即答やったんやな」

ウラタロスがキヤロより先に、クモ怪人のスカウトに即座に反応していた事をキンタロスは思い出す。

つい先程の出来事なので比較的に楽だった。

「あんなグロテスクな姿になる趣味は僕にはないしね」

スカウトを断った大元の理由も述べた。

「」「グギヤギヤギヤガー!!」「」

クモ怪人が五体一斉に喚き散らす。

何を言っているかはわからないが、ウラタロスの一言に本気で怒っ

ている事だけは彼等の身体から吹き出ている雰囲気でわかった。

「キャラ。あの怪人達が怒っているのはわかるけど、何て言ってるの？」

エリオがまたも、キャラに通訳を頼む。

「オマエニダケハイワレタクナイ、て言ってるよ」

「ウラタロスさんへの抗議だったんだね……」

「しかも五体揃ってハモるんだ……」

「イマジン以外の怪人と戦う事確定のはずなのに、緊張感がどんどんなくなってくるのは何でなのよ」

キャラが訳し、エリオとスバルが内容に対して感想を述べてティアナが現在自分達に纏われている緊張感がどんどん薄れていく事を肌で感じた。

「ねえキンちゃん。こいつ等、自分達の所属している組織をゴルゴムって言ってたよね？」

「そうやな。て、カメの字！ゴルゴムって!!」

「!!!!」

間の抜けた雰囲気から急激に身の毛のよだつものへと変わっていった。

ここにいる誰もが事実を知っている。

それは、彼等は既に壊滅しているという事だ。

それがここにこうして存在しているという事実を受け止めると、エリオとキャラは野上良太郎が教えてくれた事がすぐに脳裏によぎった。

「あの、キンタロスさん」

「どうしたんや？キャラ」

自分に訊ねてくるのは珍しいと感じたが、キンタロスは返事する。

「あの怪人さん達ってその……死霊っていうんですよね？」

「キャラちゃん。どうしてそれを!？」

キャラの質問に反応したのはウラタロスだ。

「りよ、良太郎さんが教えてくれたんです」

エリオが答える。

「良太郎がその事を教えるという事は、こうなる可能性を考えとったんやろな」

「ありえるね。知ると知らないのでは天と地ほどの差があるからね」

そう言いながら、キンタロスとウラタロスはパスを取り出してクモ怪人との間合いを詰める。

「さあて、やりますか。キンちゃん」

「そうやな。鈍つとった身体を動かすにはええ相手やで」

二体は既に先程とは別人と言ってもいいほどの雰囲気と迫力を醸し出していた。

歩を止めて、腰にデンオウベルトを巻きつける。

「二変身!!」

同時にデンオウベルトのターミナルバックルにセタッチする。

『ロッドフォーム』

『アックスフォーム』

デンオウベルトの電子音声は各々のフォーム名を発する。

そこには銀色と黒色がメインカラーのプラット電王へと変身する。

彼等の周りには各々のフォームにちなんだオーラアーマーが中空に出現して各箇所装着されていく。

そして、頭部に青色で亀をモチーフにした電仮面、斧と『金』という文字がモチーフになっている電仮面が頭部のデンレールを走る。

それぞれの電仮面が頭部で『仮面』としての形をなしていく。

ウラタロスは青色がメインカラーとなっている電王——仮面ライダー電王ロッドフォーム。(以後：ロッド電王)

キンタロスは金色がメインカラーとなっている電王——仮面ライダー電王アックスフォーム。(以後：アックス電王)

それぞれの電王へと変身した。

二人の電王からフリーエネルギーが噴出す。

それだけで、一瞬の風となる。

ロッド電王がお決まりのインテリポーズを取る。

「オマエ、僕に釣られてみる?」

アックス電王が親指で首を捻ってから、四股を踏む。

「俺の強さにお前が泣いた!!」

電王達の眼光にクモ怪人達は怯んではいなかった。

「極端すぎるわよ……」

「ティア?」

ロッド電王とアックス電王の背中を睨むような視線で見ているティアナをスバルは訝しむ。

「普段はあんなにおちゃらけてるのに、いざ戦闘になったらあれだけの迫力を出すなんて……」

心底悔しがつているようにも見えた。

「ここから動いちゃダメだよ。あいつ等五匹もいるから逃げる素振りを見せたらそれだけで襲われるからね」

ロッド電王はクモ怪人を睨みながら、注意してきた。

「あと、念話でなのは等を呼んでもアカンで」

「え、どうしてですか?」

アックス電王の忠告にスバルは訊ねる。

「良太郎から聞いているよ。今のなのはちゃん達はリミッターをかけられているんだってね。そうなると、余計に守る対象が増えちゃうわけだから」

やりにくくなるんだよね」

ロッド電王が解説する。

「初めて戦う連中や。それなりに時間経つとるのにモモの字等が来おへんところからして、臭いを掴んでへんねやろな」

アックス電王はチームデンライナーの増援も期待できないと告げ

る。

「いいじゃない。センパイじゃないけどあのガジエツトドロ^ガローン^ラの相^タ手^形ばっかりついていい加減飽きてたしね」

「それもそうやな」

モモタロスのように好戦的ではないが、彼等もイマジンだ。

戦って快楽を得るといふ性癖を持つていないが、自分よりもはるかに格下を相手にして喜ぶような歪んだ性癖も持つていない。

未知の相手となると、『恐怖』よりも『好奇』の方が強かったりする。

「お先に!!」

言うと同時に、ロッド電王は一気に駆け出してクモ怪人と間合いを詰める。

軸足とする左足を大地に踏みつけて、腰を捻って右足を構えて上段回し蹴りをクモ怪人の左こめかみに狙いをつけて繰り出す。

「ペギヤ」

間拔けな声を上げながら、クモ怪人の一体は背にある木に激突した。

「あら？受けるかなあつて予想してたのに……」

挑発に近い台詞を述べているロッド電王を残ったクモ怪人達が睨む。

蹴られたクモ怪人がむつくりと起き上がる。

「不意打ちを狙ったんだけどね……」

ダメージを受けているようにも思えない態度のクモ怪人を見ながら、ロッド電王の声色にはまだ余裕が含まれていた。

「カメの字。どうや？感触は？」

『駆ける』ではなく『歩み寄る』という仕草でアックス電王も戦場へと入り、ロッド電王に訊ねる。

「さてね。まだ戦ってるわけじゃないからね。何とも言えないよ」

談話をしている二人の電王を囲むようにしてクモ怪人が陣形を作っていた。

そして五体が同時に跳躍して、襲い掛かってきた。

「ふん!!」

アックス電王が飛びかかってきたクモ怪人二体の首を両腕で掴んだ。

「グギャ、ギャギャギャ」

掴まれている二体は苦しそうに何かを言っているが、アックス電王にはわからない。

「カメの字。こいつ等、何て言ってるんや?」

掴んだままでクモ怪人の攻撃を難なく避けているロッド電王に訊ねる。

「ハナセ、クルシイ。だつてさ」

左右交互に繰り出してくるクモ怪人の攻撃を見切つて、ロッド電王は質問に答えた。

「そりやすまんかった……なあ!!」

アックス電王は掴んでいる両腕を勢いよく振つてクモ怪人二体を地面に叩きつけた。

さらに妙な鳴き声を上げるが、怪人二体は特に致命的なダメージを受けているような様子はなかった。その証拠にすぐに

起き上がった。

「さすがに死んだらだけあって、『痛み』とかないんか。こいつ等」「どうだろうね。鈍いだけであるんじゃないの?」

過去の戦いで、死霊と戦闘していた時の事を思い出す。

死霊イマジンは攻撃を受ければ、それなりに痛みをアピールするよ
うな声を上げていたが眼前の怪人達はどうもその当たりの反応が

希薄らしい。

「さてと手早く片付けますか」

「そりゃな」

二人の電王は、腰元に携帯している専用武器デンガツシャーに触れた。

コテージでは、まだ宴は続いていた。

勝手知つたる間柄というか、野上良太郎と子供姿のアルフは様々な

話題で盛り上がっていた。

といっても、良太郎が聞き手でアルフが話し手とポジションは固定されていたが。

アルフは色々話し、良太郎はそれらを全て聞いている。

意見を述べたり、批判をしたりなどはしない。

それが話す側のアルフにとって、ありがたいものだったりする。

心理学的にも人が最も必要とするのは『意見をしてくれる人間』よりも『ただ聞いてくれる人間』の方が、何かと重宝するとされている。

意見をするという行為は、誰でもできるが必ずしも成功がついて回るわけではない。

何故なら、失敗すれば大きなものを失うからだ。

決して目では見えない『信頼』をだ。

「十年って出来事が起こるには十分すぎる数字だよね」

「そうだねえ。フェイトも色々大きくなったりするさ」

アリサ・バニングスと話し込んでいるフェイト・T・ハラオウンを見ながらアルフは言う。

「アルフさん。何か意味ありげな言い方だね」

「もく、わかってるくせに」

アルフが良太郎の脇腹を悪い顔をしながら肘でつつく。

「アンタ、こっちはどれくらいいるつもりなんだい？」

機動六課に足を運んでいるわけではないので、アルフは良太郎達がどのくらい滞在するのは知らない。

「わからない。事件が解決するまではいる事は間違いないけど、どのくらいかかるかなんてね……」

「そうだね。事件なんて短期になる事もあれば長期になる事もあるからね」

アルフも前線を退いているとはいえ、完全に荒事と手を切っているわけではないので『事件』というものが一定の物ではない事を承知していた。

「手がかりも何もない状態だしね」

良太郎は現状をぼそりと呟く。

「ま、何か困りごとがあつたら遠慮なくあたしに言いなよ？あたしとアンタの仲だ。できる事は惜しまないよ」

アルフの言葉に嘘偽りがないと良太郎は判断する。

「ありがとう」

笑顔で良太郎はアルフに感謝の言葉を口にする。

「気にしなさんなって♪」

アルフも笑顔で返した。

ロッド電王がデンガツシャーの左パーツ二つを縦に連結させる。

が腰元に携帯している右側のデンガツシャーのパーツの一つをクモ怪人の一体に投げつけた。

クルクルと回転し、カンという音が鳴りだしそうな勢いで顔面に直撃する。

その間に、残った右側のパーツを腰元から抜き取って、先に縦連結させていたパーツの後部に連結させる。

投げつけたパーツがロッド電王の元へと返つてくると、そのパーツを右手に握られているパーツの先端へと縦連結させた。

フリーエネルギーが伝導されていき、ロッド電王の身の丈を越すデングアツシャーロッドモード（以後：Dロッド）になる。

両手を巧みに操ってDロッドをクルクルと回す。

その勢いで、上段から叩きつけるようにしてクモ怪人へと向けていく。

Dロッドは地面を叩く結果となる。

「何しとるんや？カメの字」

アックス電王がぼやきながら両手にデンガツシャーの右と左のパーツを手にして、縦に連結させる。

「イマジジンだったら間違ひなく直撃だったんだけどね……」

Dロッドの初撃を避けられたことにロッド電王の声色には落胆はなかった。

アックス電王は更に右パーツの一つを先程縦連結させていたパーツの上に縦連結させる。

「イマジンよりは動きええって事か？」

残った左パーツを腰元から抜き取って、縦連結させたパーツの一番上の横に連結させると斧の刃が出現した。

フリーエネルギーを伝導させて、『武器』として巨大化させる。

デンガツシャーアックスモード（以後：Dアックス）がアックス電王の右手には握られていた。

アックス電王はゆっくりと歩み寄りながら、Dアックスを上段に構えて一気に振り下ろす。

「ギャンー！」

悲痛に近い声なのだろうが、人間やイマジンのそれとは違うので判断は攻め手に全て委ねられてしまう。

斬りつけられた個所から火花が飛び散り、もくもくと煙が出てはいた。

「どう？キンちゃん」

「わからん。ダメージ与えたんやけど反応が薄いから食らつとるんかどうかはわかりにくいわあ」

ロッド電王は初撃を与えたアックス電王に感想を問うてみるが、芳しいものではなかった。

「でも、あいつ等の動きで見えないものとか対処できないものってキンちゃん、あつた？」

「あるわけないやろ。あいつ等、腕が六本あつてもそれぞれが指一本程度の役割しかあらへんからなあ」

クモ怪人の腕は確かに六本ある。だがその先端は人間でいう『手』ではなく、

「足運びも今まで戦ってきた奴等と比べても、そんなに飛び抜けてもいなかったしね」

彼等とて相手の攻撃をただ単に避けていたわけではない。

動きや速度を見て、どの程度の力量なのかを推し量っていたのだ。幾多の死線を乗り越えてきた故にできる技術である。

クモ怪人達も距離を置いていた。

近接戦闘では分が悪いと判断しているのだろう。

「!!」

何かを仕掛けてくると、二人の電王は直感した。

「「ギシャアアアアアア」」

クモ怪人が五体同時に口を開いて、何かを吐き出した。白い繊維の様なものが向かってくる。

だが、それが二人の身体に触れる事はなかった。

こちらに向かって放ってくる瞬間に、跳躍して宙に移動していたからだ。

クモ怪人達は獲物もないのに、一直線に白い繊維を吐き続けている。

その行動に妙なものを感じた二人は、クモ怪人達の背後に回るように身体を動かす。

互いに怪人の背後に回って攻撃を開始する。

ロッド電王はDロッドを両手で握って槍で突くような構えを取って繰り出す。

クモ怪人は背中をつつかれて、ちよこちよここと前進せざるを得なくなっている。

適当な回数をつつき終わると、右前蹴りを繰り出して前のめりに倒す。

「あの飛び道具、オマエの意思で止めたりするのは難しいみたいだね？」

Dロッドを右肩にもたれさせながら先程の攻撃を批評する。

「しかもずーっと同じ量を吐いてるみたいやないみたいやしな」

こちらを向いてきたので、アックス電王は堂々と正面からクモ怪人二体を切りつけた。

斬りつけられた二体はもくもくと煙を出しながら距離を取ろうとする。

「ギョー！」

クモ怪人達は背中をぶつけていた。

クモ怪人五体が二人の電王に追い詰められているという図式が出来上がっていた。

「そろそろ王手といこか？」

「いつでもどうぞ♪」

アックス電王の促しにロッド電王は乗る。

二人は同じようなタイミングでパスを取り出す。

第一回異種怪人戦も千秋楽を迎えようとしていた。

「野上さんは、あの人達に戦い方を教わったんだよね？」

「そうね。後はモモタロスさんとリュウタロスにもでしょ」

スバルは、五対二という劣勢状態をひっくり返した二人の電王の戦い方を見ながらあることを確認するかのようにしてティアナに訊ねる。

『劣勢でありながらも、状況を把握して活路を見出して的確に敵を倒す』

理屈はわかるが、実際に行うと非常に難度の高いものだ。

自分の力量と相手の力量、自分が現在どのような状況に置かれているか、そしてどのように行動すれば効率よくそれらを行う事ができるのか、という

事を正確に見極める力が必須になる。

それは『才能』として占める部分もあるが、大元になっているのは『経験』だ。

考えて行動して、成功と失敗を繰り返して力にするというものでそれらは日々の訓練もさることながら実戦によつての経験でこそ研ぎ澄まされるものだろう。

流派のない剣士や武人が強くなる一番手っ取り早い方法は実戦で戦って生き残る事をひたすら繰り返す行為に類似しているのかもしれない。

「あの模擬戦の映像が残ってるうちに野上さんの戦い方を何度も繰り返し見て見てみたのよ」

ティアナが口を開く。

チームデンライナー、ゼロライナーの戦闘記録は原則として抹消が義務付けられている。

だが、記録としての『足跡』が残っていないのであれば最終的に抹消しておけばいいので一日、二日の閲覧の名目で観賞することは黙認されている。

「実に実戦的な戦い方だったわ。ハッキリ言っただけで今の私達じゃ次元が違いすぎて到底敵わないわね」

負けず嫌いのティアナがハッキリと公言した。

「ティア……」

「でも、今は無理でも必ず追いついてみせるわ。必ずね」

「ティア！うん。頑張ろう！」

相棒が闘志を失っていない事にスバルは純粋に喜びの声を上げた。

「……………」

エリオは黙って戦いを見ていた。

瞬きもせず、一日も早く追いつけるようにという気持ちが拳が強く握るという行為を現していた。

「エリオ君？」

隣にいるキャロとフリードリヒは若い騎士がいつもと様子が違うと感じた。

理屈ではなく、どちらかといえば動物的直感に近いものではないか。

「あれが仮面ライダー電王……」

保護者であるフェイトやその相棒のアルフから何度も聞かされたことがある。

イマジンを屠り、悪事を働く仮面ライダーをも倒してきた存在。

今のこの世界があるのも間違いなく彼等のおかげだという事を。

「もしかして、エリオ君もなりたいの？その……仮面ライダーに」

キャロの問いかけに、ティアナもスバルもエリオを見る。

「前に言った事があるんだ。フェイトさんやアルフにね。その時のフェイトさん達の顔は今でもハッキリと憶えてるよ」

キャラもティアナもスバルも喜んでくれたのではと想像していた。
「で、エリオ。フェイトさん達はこういう顔をしたの？」
スバルが回答を急かす。

「とても悲しい顔をしていたんです……」

エリオの表情はその事を振り返るような感じで様々な感情が入り混じっていた。

「どういう事？」

ティアナが更に訊ねる。

「フェイトさんが言っていました。本来、良太郎さんは『戦い』とは無縁な生活を歩んでいる人だったって……」

「だからキャラがあんなに短かったのね」

エリオの言葉にティアナは納得した。

「もしかしたら、電王にならなければ幸せな生活を送っていたのかも
しれないって言っていました」

夢を叶える場が時空管理局に存在していた自分達とは明らかに異なっている。

イマジンを倒しても、『時の運行』を守ったとしても彼等に『夢』を持てるとは思えなかった。

あるのはただただ『終わりのない戦い』のみ。

幕引きを決める事ができる自分達とは違い、世代交代でも起こらない限り変化はまずない。

野上良太郎の代わりに、仮面ライダー電王となって『時の運行』を守るという行為は誰でも彼でもができる行為ではない事は周知の事実だ。

「でも、もしもだよ。野上さんが電王にならなかつたらどうなつたんだろ……」

「わからないわよ……」

スバルの疑問にティアナは答えなかった。

本当は想像はできていたが、あまりにスケールが大きいので口で説

明すればするほどややこしくなると感じたのだ。

「良太郎さんに助けられた人は、良太郎さんの分まで幸せになる義務があるって僕に言っていました。それが唯一できることだって……」

仮面ライダーは自らの幸せを代償にして人ならざる者と戦う力を得る。

エリオの言葉に三人の胸に突き刺さる言葉だった。

そのように解釈をしてるのならば家族が無邪気に告げた言葉でも、身を割かれる想いだっただろう。

だからフェイトやアルフは悲しい表情をしたのだ。

自分の身内から『幸せ』を代償にして終わりのない戦いへと飛び込もうとする者がいた事にだ。

「あ、必殺技が出ますよー！」

エリオの話が締めに入ると、キャロがロット電王とアックス電王がクモ怪人に止めを刺そうとする姿が目に入った。

第三十二話 「機動六課 海鳴へ⑧」 〈任務終了 帰還〉

林の中での戦闘も終盤となっていた。

数で有利のクモ怪人五体も自分達の攻撃がことごとく崩されている事に狼狽を隠さなかった。

『フルチャージ』

『フルチャージ』

ロッド電王とアックス電王がパスをデンオウベルトのターミナルバックルにセタッチする。

「新技を編み出してるんはモモの字だけやないで！」

アックス電王は専用武器であるDアックスをその場に落とす。

彼の右手には先程フルチャージした際に生じたフリーエネルギーが伝導されていた。

「それってもしかして良太郎に教えたアレ？」

「そうや。空手の極意やで！」

ロッド電王の問いに、アックス電王は得意満面に言う。

「極意って言ってもキンちゃんの場合、それ以外全部相撲じゃない……」

この呟きは聞こえていないと呟いた側は思っていたりする。

「グギャアアアア!!」

「ギャギャアアアア!!」

クモ怪人が二体、アックス電王へと向かっていく。

陣形としては二体並列ではなく、二体直列だった。

一体を倒しても、残りの一体が攻撃を繰り返すというものだ。

「言わなかったか？」

アックス電王は先程より低い声でクモ怪人に向かって言う。

「一撃必殺の極意やってな!!」

左足を強く踏みつける。その拍子に地面が少しだけ抉れる。抉れた地面の欠片がいくらか飛び散る。

腰を捻って、右拳を大きく振りかぶる。

右手はまだフリーエネルギーが纏われており、バチバチと稲光が光っている。

その色はアックス電王のメインカラーである金色だ。

飛びかかってくるクモ怪人は重力に逆らう事は出来ないため、そのままこちらに向かってくる。

「どすこおおおおおい!!」

振りかぶっていた右拳を一直線に繰り出す。

クモ怪人の胸部に直撃する。

これがイマジンならば外部からのフリーエネルギーが注ぎ込まれて、肉体を維持するエネルギー許容量を超えてしまう上で爆発が起る事になる。

だが、今回の相手はイマジンではない。

フリーエネルギーを注いだところで、爆発するとは思えない。

そうになると、体力をゼロにして細胞維持ができないまでのダメージを与えるしかない。

アックス電王の右拳に纏われている金色のフリーエネルギーがクモ怪人へと伝導していく。

「ギャギャギャアアアア」

クモ怪人は自身に外部からかつて自分を屠った相手とは違う未知のエネルギーが身体中に注ぎ込まれ、嫌悪感を露わにする声を出していた。

「ふんー」

踏み込んでいる左足を指を浮かせて踵を前へと滑らせて少しだけ前へと踏み込む。

身体は先程よりも少しだけ前傾姿勢へとなっていく。
それだけで、クモ怪人の身体に刺している拳は奥に入り込む。
そうになると、もちろんフリーエネルギーはより深く注ぎ込まれるわけだが。

「ギャアアアアアアア」

クモ怪人が口から上げたのは完全な悲鳴だった。

その証拠に身体全身から青い焰が出現していた。

青い焰に纏われたクモ怪人は弾かれるようにして自らの身体に刺さっていたアックス電王の拳から離れていき、後方へと下がっていく。

「グギャアアアアアアア」

後方のクモ怪人には青い焰の塊がこちらに向かってきているという事だ。

驚異的な身体能力を持つ怪人でも、宙に浮いている状態から急速に地面に着地することはできない。

そうになると、後方で追撃を行おうとしていたこのクモ怪人の末路は一つしかない。

青い焰の塊となってしまった同胞を受け止めるだけだった。

クモ怪人二体は青い焰に包まれて爆発した。

静寂な場に不釣り合いな爆発音が響き、爆煙が夜空へと昇っていた。

「これぞ新技。アトミックパンチや！」

天に昇る黒煙を見ながら、アックス電王は空いている左手で直角に曲げている右手をパンという音を響かせながら掴んだ。

「やるね♪キンちゃん。ガラじゃないけど僕もお披露目しましょうかね！」

青色のフリーエネルギーを伝導させているDロッドを両手で巧み

に回転させながらロッド電王が言う。

Dロッドを回転させている際に生じている風が木々に切断とまではいかないまでも傷をつけていた。

ブオンブオンという音を立てながらも、豪快に音を立てている。

残ったクモ怪人三体は同胞を倒されたことにより、怖気ついたのでそれとも慎重になったのか全く攻めてくる様子はない。

同胞を倒されて、憎しみをむき出しにして襲い掛かってこない事は素直に評価することにした。

頭上に回転させている Dロッドを回転を続けながら自らの正面へと持ってくるようにゆっくりと降ろしていく。

Dロッドに纏われている青色のフリーエネルギーは『輪』のようになっっている。

「一応聞けどき。遺言とかつてある?」

今から繰り出す新技の威力をロッド電王は知っている。

自分のイメージ通りならば怪人三体を屠るくらいは容易いものだ。それ程の威力のあるものだ。

クモ怪人三体は顔を見合わせるだけだった。

「ないんだね」

ロッド電王は怪人達の態度をそのように受け止めた。

正面へと持ってきたDロッドはまだ回転を続けている。

「じゃあ、チェックといくよー!」

Dロッドを回転させている両手を更に速く動かす。

ぼんやりと象っていた青色のフリーエネルギーの『輪』もハッキリと輪郭を帯びていく。

更に回転速度を上げる。

「光栄に思うんだね。お前達は僕の新技の威力を味わう第一号なんだからさ!!」

ロッド電王は高らかに勝利宣言を言いながら、Dロッドを回転させている両腕を勢いよく振り下ろす。

Dロッドの回転で青色のフリーエネルギーで構築された『輪』は回転しながら、クモ怪人三体へと向かっていく。

『輪』はまるで水のような見栄えをしてはいるが、その実はフリーエネルギーの塊である。

食らって待つている結末は水に溺れての溺死ではなく、外部からのエネルギーを注ぎ込まれるうえで起こる爆死だ。

クモ怪人達は逃げようとするが、『輪』の方が速い。

背を向けようとした時には、『輪』から吹き出ているフリーエネルギーがチリチリと襲っていた。

一番行動を移すことが遅かったクモ怪人が最初の餌食となり、その姿はなくなっていた。

怪人一体を餌にしても『輪』は満腹になっていないのか、速度は損なわれていない。

むしろロッド電王が発射させた時よりも増している。

まるで先程のクモ怪人を自らのエネルギーとしているかのように。

二体目は潔いのか、足掻きなのか逃げる事を辞めて向かってくる

『輪』の前に立っていた。

「ギャギャギャアアア!!」

と高らかに叫びながら、クモ怪人は『輪』に向かっていく。

自分が盾になる事で、残り一体を生還させようと考えているのかも
しれない。

だが、現実はそのなにかんはできてはいなかった。

『輪』は果敢に向かっていったクモ怪人を非情にも食らった。

断末魔の悲鳴を上げさせることも許さずに。

残りの一体を食らう事にさほどの時間はかからなかった。

怪人三分のエネルギーとして取り入れた『輪』は満足したのか、それとも許容量のエネルギーを食ったうえで暴発なのかはわからない

が爆発を起こした。

「デッドエンドホイールってところかな」

ロッド電王は先程の技に名称を付けながら、爆煙を眺めていた。それから二分後に数人の足音が耳に入った。

先程まで戦闘が行われた現場には機動六課の隊長と副隊長、そして別世界の民間協力者達がいた。

現地協力者とその関係者はこの場にはいない。

怪人がいるかもしれない場所に一般人を招くという事は、地雷を設置している地面に赤ん坊をハイハイさせるようなものだ。

「蜘蛛型の怪人と戦ってたって……、もしかしてコレ？」

民間協力者の梓の中では中心人物となっている野上良太郎は現地協力者と機動六課部隊長が趣味で作り上げたファイルを開く。

「うん。こいつ等だね」

「間違いないで」

「間違いありません」

「はい。この怪人達です」

「この怪人さん達で間違いません」

現場で戦闘を行っていた二体とその場で待機するように言われていた四人の証言は一致した。

「あと、この怪人達ですがウラタロスさんとキャロをスカウトしてました」

ティアナ・ランスターの報告に首を傾げる者達が多数いるのは言うまでもない事だ。

「何でカメとキャロなんだよ？あまりに意外じゃねえのか？」

切り出したのはモモタロスだ。

「赤鬼の言う通りだな。ありえねー組み合わせだぞ」

ヴィータも同意する。

「ウラタロスとキャロに共通する何かがあったという事になるのだが……」

シグナムが手を顎に当てて、件の一体と一人を交互に見る。

「キャロとウラタロスさんは怪人の言葉がわかるみたいなんです」

共通しているものをエリオ・モンディアルが言う。

「凄く嬉しそうっていう感じでしたよ。怪人達」

スバル・ナカジマが怪人達の様子を思い出しながら、想像を含めた事を言う。

「でもどうしてウラタロスとキャロなんだろう……。キャロは何となくだけどウラタロスに関しては良太郎、わかる？」

フェイト・T・ハラオウンがキャロに何故、『怪人対話能力』が備わったのかは想像がついておりイマジンであるウラタロス

に関して完全な門外なので、良太郎に訊ねる。

「モモタロスやリュウタロスの特殊能力みたいなもの、かな……」

モモタロスとリュウタロスには『特殊能力』と区別できるようなスキルが存在する。

モモタロスには『イマジンを探知する嗅覚』

リュウタロスには『人間を操作する能力』

対して、ウラタロスとキンタロスには今までそういった能力は存在していなかった。

イマジンの生態は不明な部分が多いため、先の二体が先天的なものならばウラタロスの特殊能力は経験の積み重ねによって開眼

した後天的な能力だとも考えられたりする。

「あり得るかもね。僕のスタイルには反するけどね」

ウラタロス自身はこの能力を得たことに戸惑いはなく、あっさりとして受け入れていた。

「さつき、キャロちゃんの方は想像がついているって言ってたけど……」

良太郎がフェイトに訊ねようとする。

「キャロの前の職場だよ」

「たしか、管理世界61番スプールスでの管理局自然保護隊だったよね」

サラリとキャロ・ル・ルシエの前の職場を口に出す。

「……………」

「なに？」

「いや、そこまでサラリと言えるなんて思わなかったから……」

「君達が色々している間に僕等ができる事なんてたかが知れてるからね」

目を丸くしているフェイトに良太郎は何事もないように告げる。

「まさかとは思うけど、色々な動物と接したりしたから気持ちを理解できるようになった延長線とか……」

「よくわかるね」

良太郎が口に出したことはフェイトの想像と同じだったようだ。

「キャロとウラタロスさんのみが使ええる怪人対話能力……、さしずめバイリンガルならぬカイジンガルやね」

八神はやてが一体と一人の能力に名称を付けた。

「はやてちゃん。カイジンガルはレアスキルになるのでしようか?」

シャマルが訊ねると、はやては首を傾げる。

「レアスキルってのはある意味では魔法繋がりな部分もあるから、カイジンガルは当てはまらへんと思うよ」

「ゴルゴムの怪人さんはイメージさんとは違うって事はハッキリわかった事があるよ」

高町なのはが今回の一戦で確信を持ったことがあると言う。

「何なんですか?なのはさん」

スバル・ナカジマがなのはを見る。

「モモタロスさんの嗅覚が反応しなかったことだよ。もし、ゴルゴムの怪人さんがイメージさんと何らかの繋がりがあるんだとしたら

モモタロスさんが見逃すはずないからね」

「そうなってくると、事前対策を練るのは難しくなるで」

はやてが深刻な表情になる。

イメージンの出現の際にはこれまで散々な痛手を負っている時空管理局は『イメージンサーチャー』というものを匿名希望の技術者からの恩恵を受けて、開発して実用にまで持ち込んではいない。

しかし、初期段階であるためか小型化が難しい上に大量生産も思った以上に進まないという現実の中で数少ない完成品は優先される部署

に回されることになっている。

設立されてから二か月も満たない機動六課がこの高級機材を入手することは不可能といってもいい。

それでも相手がイマジンならばモモタロスの嗅覚があればサーチャーと同じ役割を担っているので、大した問題にはならないと考えていた。

だが、今回交戦した相手はイマジンではない。

もし、そのような怪人がミッドチルダや他の次元世界に現れたら時空管理局は完全に後手だ。

「イマジンだけでもこっちはほとんどお手上げなのに、他にも違うタイプの怪人がいる事がわかってしもた以上は報告はせなあかんやろね」

はやての脳裏には、今回のゴルゴム怪人の報告で頭を抱えているお偉方が簡単にしかも鮮明に浮かび上がっていた。

「とにかく、このお話はこれでお開きや。みんな戻るか？」

はやての言葉に、部下と協力者達は声を揃えて返事をした。

拠点であるコテージには現地協力者達とコハナが待っていた。

彼女達は食事の後片付けをしていた。

「今の爆発って何だったの？もしかして怪人？」

アリサ・バニングスの質問に全員が首を縦に振った。

「ゴムゴムの怪人だろうぜ。俺の鼻に引つかからなかったしな」

怪人の詳細を話したのはモモタロスだ。

「ゴルゴムだって」

ウラタロスがかかさずツツコミを入れる。

「ま、戦ってみて思った事はタフやいう事と俺等が負ける事はないって事やな」

「蜘蛛型だけに蜘蛛の糸を吐いたけど、欠点も丸わかりだったしね」

イマジン以外の敵と戦った事は何度もある。

その経験がなければ苦戦は必至だったかもしれないという事は戦った二体は決して言わない。

「さつすがだね♪」

エイミー・ハラオウンが信頼している証として、明るい声で言う。

「それにしても何やかんやでみんな、結構汗かいとるなあ」

はやてがコテージにいる全員を見回しながら言う。

昼間から炎天下ではないとはいえ、外を歩き回っているのなら汗は掻く。

「サーチャーの様子を監視しつつ、みんなでお風呂いこか」

「監視といってもデバイスを身に着けておくだけで大丈夫ですし……」

はやての言葉にシヤマルが補足する。

「最近は本当に便利だよね〜」

「技術の進歩ですう」

なのはのオバサンの発言にリインは現実を語る。

「あ、でも湖で水浴びって季節でもないし……」

「!!」

アリスの発言に狼狽の表情を浮かべていたのは良太郎と桜井侑斗だ。

「あく、野上さんと侑斗さん。さては私等の裸を想像したなく♪」

身構えるような仕草をしているが、はやての表情は明らかに男性二人をからかっているものだった。

「や、八神さん……」

良太郎は、はやての目論見通りのリアクションを取っていた。

「誰がお前の貧相体型なんざ想像するか」

侑斗は、反撃するかのような一言をはやてにぶつける。

「だ、誰の身体が貧相やて!!」

はやては侑斗の言葉にカツとなっていた。

「お前だが」

「見たことあんの!?!」

「あるわけないだろ」

「見てないのにそんなこと言うなんて許さへん!!私、脱いだらすごいんやで!!」

売り言葉に買い言葉の応酬が始まっていた。

二人のやり取りにデネブはアタフタし、ヴォルケンリッターは見ても見ぬふりをしていた。

「ねえ」

フェイトが良太郎に声をかける。

「えと……なに？」

良太郎の声色にはどこか『恐れ』のようなものが含まれていた。

「もしかしてだけど、良太郎も想像したの？その……私の裸を」

徐々に声量が萎んでいくが良太郎は聞き取っていた。

「まあ……その……あの時の事を思い出した」

「あの時の事？」

「十年前の事だよ。事故とはいえ……ね……」

顔を赤くしながら頬を掻く良太郎を見て、フェイトは彼が何を言っているのかを理解して顔を赤くした。

「もう！そんな事を思い出さなくてもいいから!!それにあの時とは色々事情は違ってるし……」

十年前、事故とはいえ良太郎は入浴中のフェイトという現場に足を踏み入れてしまったことがある。

その時は湯を浴びせられた後、顔面に洗面器を叩きつけられるという洗礼を受けたものだ。

「あの時とは事情が違うって事は……。そうか……。今度こそバルディッシュで……」

「良太郎。絶対に誤解してる……」

どんどんネガティブな方向に考えを向けている良太郎にフェイトは何と声をかけたらいいか戸惑う。

「あんた達、痴話喧嘩は余所でやってくれない？そういうのに免疫がないのもいるって事を忘れてるんじゃないわよ」

アリサが痴話喧嘩同然といわれても仕方のないやり取りをしている二組に注意する。

イマジン達に囃し立てられる中で二組の痴話喧嘩はとりあえず終了した。

*

結果、全員が赴く場所は海鳴スパラクーアとなった。

*

女性側の脱衣所は花が咲きそうなくらいに、会話が弾んでいた。
男性側の脱衣所はそんな声をBGMとしながらも不気味なくらいに静かだった。

原因は間違いなく彼等である。

「良太郎さん。何だかその……みなさん、急に出て行ってるんですけど……」

エリオ・モンディアルが明らかなる異常事態に戸惑い、良太郎に訊ねてきた。

「まあ、無理もないけどね。モモタロス達がいれば大抵こうなるよ」
「でも、モモタロスさん達はその……刺青みたいなものをしてないですよ」

エリオは純粹にそのように思っているし、実際にその通りなのだ。
「ミッドチルダではどうかはしらないけど、地球ではモモタロス達の存在は刺青をしている人達以上に怖いんだよ」

「みなさん、いいイメージさんなの……」

振り回されたりしながらも、エリオはモモタロス達が世間で騒がせているイマジンとは違う事をわかっていた。

「人間、みんながお前みたいな考えだったら少しは平和になるんだけどな」

侑斗が服を脱ぎながら、エリオの言葉を全人類へのメッセージへと変換させる。

「あの……お客さん」

番頭が良太郎に声をかけてきた。

「何ですか？」

「お連れの皆さんの事ですけれど、大丈夫でしょうか？」
番頭は不安でたまらないのだろう。

頭に『ヤ』のつく方々ではないが、外見は間違いなく凡人にしてみれば恐怖の対象であることは否定できない。

「大丈夫ですよ。十年前にもこちらには何つても問題なかったし」
良太郎はそう言いながら、浴場へと入っていった。

浴場に入ると、モモタロス達を見てビビった者達が多数いたおかげで十年前と同様に貸切り状態となっていた。

既にイマジン達はそれぞれ好き勝手な行動をとっていた。

泳いだり、打たせ湯に打たれたり満喫していた。

「十年経ってもあまり変わり映えはしていないな」

「そうだね。その方が勝手がきくからいいけどね」

侑斗と良太郎は周囲を見回しながら感想を漏らす。

「これってどこから入ってもいいんですか？」

一人落ち着きなくキョロキョロしているエリオは二人に訊ねる。

「好きなどころとか気になるところに入ればいい」

侑斗が簡潔に教えると、エリオはサウナ室へと入っていった。

「あいつ、意外に渋い趣味してるな」

侑斗も湯船につかるよりも滅多に経験できないサウナに目が向いており、エリオの保護もかねてサウナ室へと入っていった。

「前に行った時には入ってなかったっけ」

良太郎も吊られるようにしてサウナ室へと入っていった。

現在、サウナ室には良太郎、侑斗、エリオの三人が入っていた。

「エリオ、きつくなったらすぐに出るんだよ」

「はいー」

良太郎の言葉に、エリオは首を縦に振る。

室内は当然、熱いが檜がサウナ室でしか堪能できない独特の香りを醸し出しているので精神的に快楽を与えていたりする。

「なあ、野上」

「ん、どうしたの？」

「お前、テストロッサとはどうなんだ？」

侑斗が前を向いたまま、訊ねてきた。

「なに、急に？」

「聞かせろよ。テストロッサがお前にベタ惚れだつてのは八神から聞かされているが、お前の事は聞いた事がないからな」

侑斗が恋バナを振ってきたことに良太郎は目を丸くしており、エリオはこの手の話に交わるのは初めてなので、興味津々だった。

「僕がフェイトちゃんの事をどう思ってるかって事でしょ？」

「ああ」

「……………」

良太郎が確認し、侑斗は首を縦に振ってエリオは真剣な表情になる。

「『好き』か『嫌い』かの二択なら、間違いなく『好き』だと答えるよ」
「……………」

良太郎の真剣な告白に、侑斗とエリオは固まる。

「これってその……………両想いつて事なんですか？」

エリオが侑斗に訊ねる。

「一応はな。だがテストロッサが告った事は明らかになっているが、コイツが告ったって話は聞いていない」

「フェイトさんは良太郎さんの気持ちを知らないって事ですか……………」

保護者的存在に知らせたいとエリオは即座に脳裏に浮かび上がらせた。

「モンディアル。今、考えている事はテストロッサには言うなよ？」

「え!? どうしてですか？」

侑斗に心中を読まれたことにエリオは驚きと疑問が混じったような声を出してしまう。

「言うなら野上が筋つてもんだろ。それにコイツの場合は恥ずかしいとかいう奥手な理由ってわけじゃないだろ。テストロッサの気持ちに返事を返すのは」

「まあ……………ね」

侑斗の指摘に、良太郎は首を縦に振る。

「その言えない理由は俺達絡み、つまりテストタロツサの時間に大きく影響しているからだろ」

「うん」

良太郎は頷く。

「フェイトさんの時間、ですか?」

「野上とテストタロツサが会ったのは十年前の時間。その間に、コイツは色々な真実を知ったんだろ。その中でその時のテストタロツサには絶対に話してはならない事も知ってしまった。違うか?」

「まあね」

これにも良太郎は短く答えた。

恋バナからどんどん深く重い話へと切り替わるが、エリオは逃げようとは思わなかった。

恩人の恩人の胸中を知る事ができる少ない機会だからだ。

「それってその……、フェイトさんがプロジェクトFで生み出された存在って事ですか? だったら……」

エリオは自分が知る限りのフェイト関連の『闇』という部分を口に出す。

「いや、僕もその事は知ってる。彼女がその事を受け入れている事もね」

「その更に深い『闇』こそが、想いに応えられない最大の理由か」

「先に水風呂にいますよ」

侑斗の仮説に、良太郎は背を向けたままサウナ室を出た。

「良太郎さん。答えませんでしたね……」

今までの質問は正解にしろ間違いにしろ答えてはいたのに、最後だけは何もしなかった事にエリオはどういう事なのかわからなかった。「あれは正解だ。答えなかったのは口に出してしまいそうになったのを防ぐためだったんだろ」

良太郎の背中を見送った侑斗はエリオに優しい眼差しで告げる。

「そこまでしなきゃいけない事なんですか!? 何だか悲しいですよ……」

「女の一途な気持ちに応えるって事はそういう事なのかもしれない

な。今時珍しい純愛だしな」
「？」

エリオには侑斗の呟いた言葉の意味が理解できていなかったが、それが何か大切な事だという事は本能的に知った。

エリオは知らない。

自身に降りかかる災厄？を。

その災厄？は決して電王もゼロノスも助けてはくれない事を。

*

海鳴スパークアを出た全員を狙ったかのように、サーチャーからの反応はあった。

「ロストロギア。反応キャッチー！」

ラインの一声が完全にその場の空気を変えた。

現地協力者達がこれから出動する面々に激励の言葉を送る。

なのはが的確な指示を繰り返す。

「それじゃスターズ&ライトニング。出動や!!」

はやての一声でスターズメンバー、ライトニングメンバーが行動を開始した。

そこにはチームデンライナーとゼロライナーが残っていた。

「あれ？アンタ達、どうしたのよ？」

アリサは残っている事に疑問を抱き、訊ねる。

「俺達はロストロギアとか捜せねーんだよ」

「僕達、そういう能力ないしね。下手に動き回ると余計に足引っ張るだろうし」

「ロストロギアにイマジンとか怪人とか絡んでたら俺等も出張れるんやけど、俺とカメの字が倒した奴は関係ないみたいやったしな」

「僕達、おるすばーん」

「八神達が帰ってくるまでにコテージを綺麗に掃除しておかないと……」

モモタロス、ウラタロス、キンタロス、リュウタロス、デネブがそれぞれ主張する。

「私達がロストロギアを発見しても、大して何もできないわよ。何せ封印とかできないし」

コハナが正論を述べた。

「ジュエルシードみたいに大人しいタイプなら、拾って渡すこともできるけどね」

「今回のタイプはどうみても、そういうのとは違うだろ。だったら餅は餅屋だ」

良太郎と侑斗も出来る事は可能な限り、行方が今回は範疇外だと言った。

*

舞台は河川敷。

海鳴市の数多あるサッカークラブがグラウンドとして使用する場所。

軟体動物ともいえる物体が自らの体の筋肉を駆使しながら移動していた。

脚がないため、移動手段はピョンピョンと跳ねていた。

「何これ!?!」

「ぶよぶよスライム!?!」

「ちよつとかわいい……」

「キユ!?!」

スバルがターゲットの正体に驚き、ティアナが目を丸くし、キャロが個人的感想を漏らしてフリードリヒが主のセンスに狼狽した。

「これ、全部本体なんですか?」

エリオの言うように、スライムは一体ではなく、数十体ピョンピョンと跳ねていた。

『危険を感じると複数に分裂してダミーボディを増殖する。せやけど本体は一つや!』

『本体さえ封印すればダミーは全て消えるです!』

はやてとリインが前線に説明した。

海鳴の夜空。

「放っておけば町中に広がりかねない」

甲冑姿のシグナムが最悪の出来事を予想して口に出す。

「空戦チームは広がったダミーを回収する。そっちはお前等がやってみろ」

同じく甲冑姿のヴィータが地上に向かって指示を出していた。

「素早く考えて素早く動く!」

「練習通りにいけるはずだよ」

海鳴の夜空を駆けているバリアジャケット姿の、なのはとフェイトが櫂を飛ばす。

地上のフォワードメンバーが声を揃えて返事した。

地上にいるスライム達は危機意識を感じているのか否かわからないが、ピョンピョンと跳ねていた。

これからそれと真剣に対処しなければならぬ者達にしてみれば挑発しているような動きと捉えても文句は誰も言わない。

リボルバーナックルのシリンダーを回転させて、マツハキヤリバーの車輪を回転させながらスバルが右腕を振りかぶって前進する。

「うううりゃあああああ!!」

スライムに向かって右拳を放つ。

しかし、スライムには何の効果もなかった。

「はあああああ!!」

エリオがストラーダを頭上で回転させてから間合いを詰めてスライムを上段から斬りつける。

スライムには何の効果もなかった。

「無効!?!」

ティアナがクロスミラージュを構えて、スライムに狙いをつけて引き金を絞る。

魔力弾が発射されるが、スライムには何の効果もなかった。

キャロがフリードリヒに炎を浴びせるように命じる。

フリードリヒは吸い込んでから、炎を吐く。

しかし、スライムには何の効果もなかった。

「火炎も通常魔力弾も効果なし!?!」

「見た目はかわいいですけど、さすがロストログアです!侮れません」
ティアナも中間報告をし、キャロとフリードリヒはターゲットであるスライムを睨んでいた。

スライム達はピョンピョンと跳ねている。

危険を感じるとダミーを生み出して分裂するという能力を持っている以上、長期戦は不利だ。

度の超えた増殖は本体を見つけ出す事の難易度を上げる事になる。

「エリオ。アレでいけない? ストラードを地面に刺してバリバリつてやつ!」

「やってみます!」

「電気で止まるかどうかわからないし、無傷でつて指示よ。ダメージコントロールのしづらい攻撃はなし!」

スバルの案にエリオは乗っかっていたが、ティアナの理に合った意見に却下された。

「スバルとエリオは、こいつ等がこれ以上増えないように止めてて! 私とキャロが本体を特定してフリーズする!」

ティアナがプランを提示すると同時に両手に握られているクロスミラージュを構える。

「了解!?!」

三人が即返事した。

「新人達、いい動きね。入隊当時から比べたらまるで別人みたい」

ティアナがなのはの指示で施したオペティックハイドによって

シヤマルの姿は不可視状態になっている。

それは、はやとリインにも当てはまっている。

ターゲットが攻撃的なタイプならば外見が非武装の者を狙うのは定石だろう。

「なのはちゃんの教導の成果かな。後は野上さんに負けた事も訓練に熱が入る原因の一つにもなってるやろね」

「ヴィータちゃんも最近は教導、頑張ってくれてるです」

不可視状態になっているからといっても、絶対に安全というわけではない。

実質は、『高みの見物』というよりはいつ見つかるかという『緊張』の方が勝っていたりする。

この手の事は何度も経験はしていても、『慣れ』というものは中々ない三人だった。

ティアナとキャラクが無数のスライムの中からオリジナル、つまり本体を特定することに成功した。

「反応が違う。これが本体……」

クロスミラージュの銃口から発射される魔力弾をスライムが避けていた。だが他のスライムと違って動きが機敏だった。

スライムの本体といっても、外見的には大きな違いがあるわけではない。ダミーと遜色ない姿だ。

「捕まえます。錬鉄召喚……」

キャラクが足元に魔方陣を展開させて、詠唱を始める。

ケリユケイオンが輝きだす。

「アルケミックチエエエン!!」

スライムの足元に魔法陣が展開して、無数の鎖が縛ろうとする。

しかし、魔力で構築された鎖が身体に触れる事はなかった。

タイミングを見計らったかのように、身体全体を覆うようにバリアを展開させていた。

キャロが展開した無数の鎖は役目を果たすことなく、無残にバラバラになった。

「エリオ！アサルトコンビネーション。いくよ!!」

すかさずスバルが構えを取っており、エリオに促す。

「はい!!スバルさん！ストラーダ!!」

エリオもストラーダを構える。

ガシユンとカートリッジをロードするストラーダ。

「マツハキャリバー!!」

スバルも足元のデバイス呼び掛ける。

『ロードカートリッジ』

ガシユンとリボルバーナックルがカートリッジをロードする。

二人がバリアを展開させているスライムに向けて、攻撃を繰り出す。

「ドライツクドライブアアアアアアア!!」

二人の息の合った一撃が、スライムが展開しているバリアを粉碎する。

まるで、そこそこに厚いガラスを簡単に砕くような感覚でだ。

「バリア破壊！バレットS!!」

相手に付け入る隙を与えないために、ティアナはクロスミラージュに命じる。

『ロードカートリッジ』

クロスミラージュがカートリッジをロードする。

「我が請うは捕縛の檻、遊星の射手の弾丸に封印の力を……」

キャロが両目を閉じて、詠唱を開始する。

『ゲットセット』

ケリユケイオンが輝く。

「シーリングシュウウウトオオオ!!」

キャロの加護を受けた魔力弾がクロスミラージュから発射される。
一直線に、速く。

スライムに直撃する。

一瞬だけ視界を奪う光がその場にいる全員に襲い掛かるが、すぐに収まる。

視界が回復するとそこには魔力で構築された檻に閉じ込められているスライムがいた。

「よし、動作停止確認。完全封印処理しよか、シャマル」

オペティックハイドの効果はまだ継続しているが、何もできないというわけではない。

「あの……すみません。八神部隊長、シャマル先生」

キャロがおずおずとしながらも口を出してきた。

「完全封印、あたしがやってみていいですか？」

申し出てきた。

「練習しておきたいんです……」

「うーん。いい心がけです」

リインはキャロの積極的な態度を褒める。

「じゃあここから見ているからやってみて」

シャマルも自身の役割をキャロに譲る事に異は唱えなかった。

この後、キャロは無事に封印を成功させることができた。

*

ロストロギアの封印処理を無事に終えた機動六課の面々が帰ってくる頃にはコテージの清掃をチームメンライナー、ゼロライナーが無事に終えていた。

観光旅行に来たわけではない事は重々承知しているのだが、息抜きを打診する現地協力者の申し出を申し訳ない表情をしながらも

断りを入れた。

その後、回収したロストロギアはシグナムが運ぶことになっていった。

はやてはその任に良太郎も同伴してほしいと願い出た。

断る理由も特にないので、良太郎は首を縦に振る。

帰りも行きと同様にデンライナー、ゼロライナーを用いる事になっている。

別れの挨拶も終えて、全員が乗り込んだ。

二台の『時の列車』が夜空に線路を敷設しながら、歪んだ空間に向かって走り出した。

こうして機動六課の海鳴市での任務を無事成功という事で幕を閉じた。

*

だが、事件は海鳴市だけで起こっているわけではなかった。

そう、ミッドチルダでも起こっていたのだ。

第三十三話 「六課のいないミッドチルダ 前篇」

機動六課隊舎ではメインメンバーが不在の状態といっても、業務が休止という事はなかった。

慢性的な人員不足である時空管理局で働いている以上、『暇』と『休息』という言葉は比較的無縁に近いものだったりする。

グリフィス・ロウランは様々な書類と睨めっこをしていた。

ただ単に睨めっこしているのではなく、自身で片付けられるものを手元に部隊長である八神はやての指示を仰ぐ必要のある

ものは別枠に置いている。

こうしておかないと部隊長は自分一人で片付けかねないからだ。

余計な手間を部下に押し付けずに片を付けるというのは『理想の上司』とカテゴライズされてもおかしくないが、新米が育

たないというデメリットも備わっていたりする。

(特にこの怪人に関しては司令の指示を仰がないと無理だな)

グリフィスが手にしていた資料には『謎のドクロ怪人』と記載されていた。

ヘリパイロットのヴァイス・グランセニックはヘリコプターのメンテナンスをしながら、近くに置いてあるポータブルTV

のニュースを聞いていた。

「ドクロ怪人ねえ」

現在彼が聞いているニュース番組はミッドチルダ以外の次元世界での出来事も教えてくれることを趣旨としているものだ。

正直、六課に向向するまでは『他人事』か『まゆつば話』と受け止めていただろう。

だが、現在は違う。

イマジジンという怪人は間違いなく存在しているし、そんな連中と共闘しているのが現在の自分なのだから。

否定するという事は自身を否定することと何ら相違ない事だ。

「ヴァイス陸曹お」

考え事をしてしまい、作業を中断していたヴァイスに声がかかった。

「おう、アルトか。どうした?」

「例のやつ、シャリーリーさんをお願いした結果ですよ」

通信士アルト・クラエツタが書類を渡してきた。

「お、早いな」

「……何だこれ」

「それが結果だそうです」

『JF470式に『時の列車』の技術を取込もしくは模倣することは物理的にも経済的にも不可能』

「詳細は次のページから記載されてますんで」

アルトの言うように、ページを捲っていく。

「こんなにかかるのかよ!」

経済面つまりコスト面のページを開いた時、ヴァイスは大声を張り上げてしまった。

作業をしている数人がこちらを見ていたが気にしない。

「はい。私も見た時は驚きましたよお」

「これ、あと十機以上はヘリを買えるぞ。しかも最新型の……」

「改めてこう数字で突きつけられるとグサつときますねえ」

「ああ……」

この二人の野望ともいえる計画は初っ端から暗礁だった。

「ヴァイス陸曹とアルト通信士がそんな事を……」

あらかた資料との睨めっこを終えていたグリフィスはシャリオ・フィニーノ、ルキノ・リリエの三人で休憩を取っていた。

『時の列車』の技術をJF470式に組み込むというアイデアはよかつたんだけど……」

シャリオが語る前にヴァイスに渡した書類のコピーを二人の前に見せる。

ルキノが手にしてパラパラと捲っていく。

「これ、冗談じゃないですよね……」

内容を疑うわけではないのだが、ルキノは書類作成者であるシャリオの顔を見る。

「冗談なら私もよかったんだけど紛れもない事実なのよ」

眼鏡が少しずれたのでシャリオは直しながら、ルキノの言葉を否定した。

「これはもはや、改造と呼べるものじゃないね……」

グリフィスも書類を見ながら感想を述べる。

正直、これだけ費用が掛かるのならば新品を購入した方がマシというものだ。

「それに酷な現実もあるの。『時の列車』は今の管理局の技術の十年以上先を進んでいるという事が明らかになったの」

つまり、今の段階ではどんなに費用を積んでも不可能という事になる。

むしろ『ただの無駄遣い』と揶揄されるだろう。

実績が無いに等しい機動六課ではそれだけでイメージダウンになつてしまう。

「でも諦めるとは思えないね。あの二人は……」

グリフィスの呟きにシャリオとルキノは首を縦に振る。

それだけあの二人が『時の列車』の性能に魅了されているのは傍目から見ても分かる事だった。

(特に何の問題もないようだ)

大型の狼の姿をしているザフィーラは隊舎内を回りながら異常がない事に安堵していた。

懐かしい面々に会う事が出来ないのは残念だが、誰かがやらなければならぬ役割なので自分がやるしかないと思っっている。

(桜井や野上、イマジン達も旧交を温める事はできただろうか)

自分にできなかつた事を桜井侑斗と野上良太郎、そしてイメージ達に託していた。

『本日、クラナガン××地区で女性が殺害されました』

レクリエーションルームに設置されているテレビで本日の出来事が放送されていた。

『目撃者の話によりますと、犯人は黒いフードを被ってドクロの仮面を被っていたそうです』

「愉快犯か？」

テレビから流出される情報を脳内でまとめた結果、ザフィーラはどのように呟いた。

（電王、ゼロノス不在となると頼れるのはスクライアだけか……）

事情を知るザフィーラは解決策を早急に導き出していた。

*

時空管理局本局。

ここは管理局員が『最も配属されたくない場所』というアンケートで一位あり、『理想の上司』アンケートでも一位でもある

無限書庫だ。

その『理想の上司』にあたるユーノ・スクライアは右肩に妙な毛並みをしたフェレットを乗せて司書長室で専用端末に映る内

容と睨めっこしながらも、端末から放映されている内容を聞いているた。

「ドクロの仮面か……」

「イメージではないですね。イメージはそんな恰好はしませんよ」

右肩に乗っている妙な毛並みのフェレットが犯人はイメージではないと断言する。

それは無理もない事だ。

このフェレットはただのフェレットではない。フェレットの姿に擬態したイメージなのだ。

擬態フェレット——プロキオンもテレビに放送されている目撃

者の証言から得られる情報をきちんと聞いていた。

「イマジン以外に怪人っているんでしようか？」

「調べてないからね。何とも言えないよ」

あらゆる情報入手し、請求者が望む有益な情報を書面にまとめるという職場のトップである以上、迂闊な事は口には出さない。

宙にモニターが開く。

『司書長。アコース査察官がいらしてます』

司書の一人がバストアップで映し出されており、内容を説明した。

「わかりました」

それから数分後にはヴェロツサ・アコースが司書長室に入室した。

「お久しぶりですね」

「そうですね。といっても、あれからさほど月日は経過していませんよ。」

ヴェロツサの言葉に、ユーノはすぐさまツツコミを入れる。

「そうですね。どうも、最近真面目に仕事をこなしていたせいか時間の間隔が狂っているみたいですね」

「それは大変だ。明日の天気予報は雨になるかもしれませんね？」

「かもしれませんね」

互いに笑みを浮かべながら、くだらない雑談をする。

ヴェロツサは仕事人間の巣窟とも世間から見られている時空管理局の中では極めて『異端』の存在だ。

時にルールを飛び越えるような真似をしても飄々としている態度はこちらとしても頼もしく思えたりもする。

司書長の机の専用端末に映し出されているディスプレイをヴェロツサは見る。

「噂のドクロ……ですね」

「ええ。目的は不明ですが、自分の存在を秘匿する様子はないみたいですね」

「おっしゃる通りです。だからこそ頭を抱えているというのが現状です」

言葉通りにヴェロツサは頭を抱えている。

「目撃者さんがどうしているんでしょうか？」

プロキオンも脳を回転させながら、浮かんでいる疑問を口に出した。

「プロキオン君の言う通り、殺人が目的なら目撃者を残すというのはセオリーに反する行為だ」

ヴェロツサは顎に手を当てて、両目を鋭くする。

『査察官』としての顔つきになっていた。

「殺人……目撃者……セオリー……」

ヴェロツサが口に出した単語をユーノは呟く。

ヴェロツサが言うように、殺人を『結果』とするならば目撃者を作る事は得策ではない。

目撃者が加害者にとって首を絞める存在になる事は間違いないからだ。

「この事件ってミッドでは数は少ないんですね？」

無限書庫にいなながらも、その手の情報は自分で調べなければならぬ。

多方面からの資料請求をこなすだけで、時間の大半は削られるのが無限書庫だ。

逆に現在起こっている出来事を情報として入手するのは結構後だというのが現実だったりする。

「多いか少ないかの判断は難しいですが、現在までに既に三件起こっています。他の次元世界でも似たような事件は起こっていたようですね」

ヴェロツサが知りうる情報を口にした。

「それだけ起こっていても目撃者は必ずいるんですね……」

犯人は逃げ切る事に自信があるという風に解釈も取れるが、故意に残しているようにも取れる。

プロキオンは端末を操作しながら、じーっとディスプレイを睨んでいる。

「被害者さんに共通点を見てみても、ないですね……。でも、被害者さんと目撃者さんには共通点があるんですね」

「被害者と目撃者は赤の他人じゃないって事でしょ？」

プロキオンが言い出す前に、ユーノが先に答えた。

「あー!!ずるいですよー!!」

イマジン状態ならともかく、フェレット状態のプロキオンの抗議ともいえる前足をグルグルさせての攻撃は大した威力はない。

「家族、友人、恋人。『他人』とはいえない関係の人達ばかりだね」

ヴェロツサの言葉に、ユーノは目から鱗が落ちた。

「プロキオン、アコース査察官。僕、犯人の目的がわかっちゃったかも……」

「え？」

ユーノの言葉に、一人と一匹が声を合わせた。

*

「ぎゃああああああ!!」

悲鳴を上げた男はその場にうつぶせになって倒れる。

彼の意味で倒れているのではない。

外部からの攻撃で強制的に全身を支える力が抜けてしまったのだ。

倒れている男から血が大量に流れだし、水たまりのようになっていた。

「お父さああああああん!!」

「いやあああああ!!」

男の家族とも思える女性二人が大声を上げる。

大鎌には赤い血液がベツトリと付着しており、数滴がピタリピタリと地面に落ちていく。

男を屍にしたのは、魔術師などが好んで着そうな黒いローブでドクロの仮面を被っていた。

ドクロは残りの二人を見る。

「ひっ!!」

蛇に睨まれた蛙状態になっており、腰が抜けてその場から離れるという行動をとる事が出来なくなっていた。

そうなった者達に待っているのは『死』しかない。

だがドクロは残りの二人に手をかけることなく、その場から姿を消した。

なお、これはミッドチルダの西部で起こった昼間の出来事である。

*

昼休みに食堂で日替わり定食を食べる事は無限書庫司書長の数少ない楽しみだったりする。

ヴェロツサが提供してくれた情報からユーノは一つの結論を導き出していた。

これらの事件は『誰かを殺害する』事が『目的』だったのではなく、『過程』でしかなかったという事を。

真の『目的』は『誰かに殺害する現場を目撃させる』というものだ。

目撃者は被害者と『他人』ではこの計画は今ひとつの結果しかない。極めて近い存在だからこそ効果的になる。

(目撃者を近い相手にすることで犯人は『恐怖心』を煽る事ができる) 本日の日替わり定食は和食である。

ユーノは器用に箸を持って、白米を食べてから味噌汁を啜る。

(他人でも問題ないけど、他人事にされてしまう可能性が高いから除外してる)

その事からしてこの事件を企てた犯人は、人間の心理を知っている事になる。

焼き魚を綺麗に骨だけ状態にして食べ終えてから、白米と味噌汁を食べ歩いていく。

(問題は次にどこに現れるか、か)

犯人の目的がわかったとしても、次に出現する可能性がある場所を特定しないといつまでも事件は解決しない。

電王とゼロノスは現在、ミッドチルダにはいない。

相手が魔導師ならばこちらが出しゃばる事はしないが、怪人ならば別の話になる。

(事件現場か……)

本日、早急に急がなければならぬ資料請求はなかったはずなので司書達に任せても問題ない。

ユーノは宙にモニターを展開させる。

バストアップで映し出されているのは本日の現場責任者となる司書だった。

『どうしました？司書長』

「確認ですけど本日が期限の請求は、ありませんよね？」

『はい。本日が期限のものはありません』

司書は慇懃に穏やかな表情で答える。

「午後から、外出しますので何か問題が起こったら連絡をください」

『わかりました。司書長』

「はい？」

『お気をつけて』

「ありがとう」

司書の気遣いにユーノも笑みを浮かべて返した。

足を踏み入れると、管理局員数名が現場保持をしていた。

ミッドチルダで最初に発生した事件現場はデートスポットや家族で癒しのひと時を満喫できる公園だった。

殺害されたのはデート満喫中のカップルの女性だ。

目撃者であり恋人の男性は突然の出来事に、気が動転していたという。

理性を取り戻すのに、一時間くらいが必要となってようやく証言を取る事が出来た。

『いきなり現れて手にしている大きな鎌を振り下ろしてきた』

との事だ。

捜査をしている管理局員の一人に聞いて得た情報だ。

なお、本来このような直聴を行っても相手にされないとというのが常だがユーノは自身の身元を明かすと相手は恐縮して包み

隠さず情報を開示してくれたということだ。

念のために被害者が殺害される動機があるのかと訊ねてみると、白昼堂々殺される程の恨みは買っていないとの事だ。

次に二件目の現場へと赴く。

一件目と同様に公園だった。

殺害されたのは家族の中の夫と呼べる男性だった。

殺害方法は従来と同じ大きな鎌による斬殺だ。

被害者遺族はいきなりの出来事だったため、気が動転していた。

現場保持をしていた管理局員から聞き出した情報は一件目とあまり変化はなかった。

ただ角の生えたドクロの仮面だったという事を除いては。

三件目、四件目、五件目と回っていくとドクロが単体なのかという事自体が怪しくなり始めていた。

「ドクロさんは一人だと考えてましたけど、複数の可能性もありますよね」

プロキオンも得た情報を脳内でまとめながらそのような仮説を述べる。

「角なしと角ありのドクロ。わざわざ現場ごとに一人が仮面を付け替えるなんてことをするとは思えないしね」

「二人以上いるって事です」

「そうだね」

複数犯でいる以上、相手が自分よりはるかに高い戦闘能力を持たない限りは負けはないと考えている。

五年近く修羅場をくぐってきたうえで得られる『自信』のようなものだ。

(今日中に片を付ける！)

そう強く誓うと、一人と一匹は次に出現されると予測される場所へと足を運んだ。

次に出現すると予測されるミッドチルダ中央地区の公園。

「これで大ハズレだったらシャレにならないけどね……」

ユーノはベンチに座って、公園内で色々と満喫している人達を見ていた。

その数は決して多くはない。

「不吉な事を言わないでくださいよー」

プロキオンは怒りながらも、主が買ってくれたクレープをハムスターのように食べている。

「今が午後三時だから、人が集まりだすとしたら二、三時間後ってところかな」

「どうしてですか？」

何故今ではないと断言できるのかプロキオンにはわからない。

「五時や六時だと残業とかイリーガルな出来事がない限りは、仕事や学校の授業は終わっているからね。家族で外食とか友

人同士でハメを外すとかデートするとかになると、ここはもともと適した集場所なんだ」

「となると、ドクロさんは……」

「必ず来るね。その時間に的を絞ってね」

スーツのジャケットの懐のポケットから黒いケースを取り出す。

名刺入れではない。Aゼロノスに変身するためのゼロノスカードだ。

中に入っている枚数を見る。

電王が現在、ここにいるおかげでカードの消費速度は抑えられているため自身の予想よりはるかに遅かった。

カードケースをもう一度、懐のポケットに収める。

ユーノの目の色が変わっていた。

無限書庫司書長の瞳ではない。

『青い狩人』の瞳となっていた。

ドクロが出現するまであと三時間。

Aゼロノス初のイマジン以外の怪人戦が始まろうとしている。

第三十四話 「六課のいないミッドチルダ」 後編

ミッドチルダ中央部の公園でユーノ・スクライアは時がたつのを待っていた。

その間に職場である無限書庫からの電話はなく、問題なく過ごさせているのだろうか考える。

(平和だな……)

公園にいる人々は幸せな笑顔を浮かべて、そのように思ってしまった。

だが彼は知っている。

この平穩の裏に絶えず、血と涙と死が蔓延している事を。

(誰だって平穩に生きていく権利はあるんだ。それを壊されれば人生観すら変わってしまう……)

かつて『恩人』と呼べる人達を死なせてしまっている自分はそれを嫌というほど理解できる。

彼等の死が今の自分を確立させているのは紛れもない事実だ。

(あれから五年か……)

この五年間。一度たりとも胸の奥に激しく猛っている復讐の炎が絶えた事はない。

イマジンと戦うたびに増してくる。

手掛かりを探ろうとするたびに燃え上がってくる。

最初に正体を明かした面子以外ではばれたのは、ヴェロツサ・アコースだけだ。

(自分で計画しておいてなんだけど、よく今までばれてなかったと思えるね……)

自らが立案した『プランA Z』というのはそこまで周到に練った計画ではない。

自分の知り合いの一人が「ちよつと怪しいなあ」と思って探りを入れたらすぐに明るみになるものだ。

それでもある程度の期間までは隠し通せる自信はあった。

まず『無限書庫』の住人に関心がいくことがないという自信があった。

人々の関心がいかない⇨変化がないという風に捉える心理を利用していただけなのだ。

後は、自分が不在の間は司書の一人に変身魔法で偽ってもらえればいい。

司書が一人消えたとしても、その事をわざわざ調べる者はいないというタカも括っている。

「実際、ここまで上手くいくとはね……」

ユーノの発した言葉には『呆れ』と『寂しさ』が混じっていた。

(人間関係は永遠不変じゃない……)

十年の幼馴染関係でも決して『永久』というわけではない。

それが生きていく者が絶対に避けては通れない真理なのだ。

「やっぱりダメですね。臭いは全くしきないです」

クレープを食べ終えたプロキオンは鼻をクンクンさせて、ドクロの臭いを探ろうとしていたが失敗に終わったようだ。

「相手はイマジジンじゃないからね。仕方ないさ。もしかして臭いを憶えたら今後は嗅げたりする?」

「やってみないとわからないです」

主の期待に応えようとするプロキオンだが、大言壮語は吐かない。

公園を見回す。

明らかに人の数が増えていた。

考え通りなら、ドクロはそろそろ出現するはずだ。

「プロキオン。聞くけどどう?」

ユーノの問いに、プロキオンは首を横に振るだけだった。

「出たところ勝負か……」

彼の性格上、あまり行いたくないものだった。

*

次元世界と次元世界を経由する空間では、明らかに従来の次元航行

艦とは異なる物体が我が物顔で移動していた。

外観はどうみても、『乗り物』としてのフォルムではなく『生き物』と形容する方がよかった。

そのくらい、その物体の動きは生々しいのだ。

その物体をクライス要塞という。

「アテンション、アテンション」

その中では、一体の小型ロボット——チャックラムが宙を飛び回っていた。

ガシユンガシユンという音を立てながら、頭部が金色の強面の男が歩いていった。

「マリバロン」

金色の強面の男——ジャーク将軍が幹部の一人の名を口に出す。

「はっ」

呼ばれた赤色目立つ服装をしている女性幹部——マリバロンが姿勢を正す。

その瞳にはジャーク将軍に対しての『尊敬』と『絶対的な忠誠』が籠っていた。

「此度の計画、順調に進んでいるようだな」

「スカル魔の容姿は人間どもに恐怖を植え付けるには最適だったと思われ、私自身も驚いております」

「うむ。だが計画の要を忘れてはおらんだろうか？」

「もちろんでございます。最大の要となるミッドチルダに頻繁に出現する仮面ライダーのデータ収集の事は忘れてはおりません」

ジャーク将軍とマリバロンが今回の計画が順調に進んでいる中、残りの三幹部はドクロ——スカル魔の行動をモニターで見っていた。

「マリバロン。お前にひとつ聞きたい事がある」

緑色と白色の貴族風の服を着用している赤色が目立つ男が、マリバロンに顔を向ける。

「どうしたというの？ボスガン」

貴族風の男——ボスガンが真剣な表情をしていた。

「スカル魔に我等の事を名乗らせるように、命じたか？」

「……………」

モニターに映っているスカル魔の行動は自らの存在をアピールするだけのようには見え、一言も発してはいなかった。

「これじゃあ、ドクロの格好をした変な奴って事で片付けられちゃうぜ？」

青い身体に革ジャン、そして腰元に銃をぶら下げている軍人風のサイボーグ——ガデゾーンが呆れた声を出す。

「これから現れる仮面ライダーに名乗れば問題はないはずよ」

マリバロンがガデゾーンとボスガンを睨む。

「これで仮面ライダーが現れなかったら、マリバロンは罰決定だな」

小柄で猫背で白色がメインカラーで青色の斑点がまだら模様になっている男——ゲドリアンが言う。

「現れる」

そのように告げたのはジャーク將軍だ。

「これから現れるのが我等を散々苦しめた仮面ライダーと同じなら、必ず現れる」

ジャーク將軍の声音には『確信』が混じっていた。

そこにはかつて暴君に人生を狂わされた『哀れな司令官』ではなく、一人の『軍人』がいた。

*

午後五時。

授業が終わった学生やら、定刻で帰宅しようとする社会人の姿がかなり目立っていた。

「ユノさん」

プロキオンが主を呼ぶ。

「どうしたの？」

「臭い、ではないんですけど感じるものがあるんです」

「感じるもの？」

イマジン以外の怪人ではプロキオンは自慢の嗅覚を働かすことができなかったが、黙っていた時間で『何か』を掴もうとする努力は惜しまなかった。

「僕の全身の毛が起っちゃうんです……」

彼自身、何故そのようになるのかはわかっていないようだ。

「悪寒みたいなものか……」

「オカン？僕、タヌキさんじゃありませんよ」

プロキオンの天然な言葉に、ユーノは吹き出す。

「違うよ。はやての事じゃなくて、悪寒。寒気の事だよ」

「春ですよ。寒気なんてするんですか？」

ユーノが悪寒を説明しても、プロキオンは首を傾げていた。

「悪い予感とかの時には使われるんだよ」

「それって今みたいな時ってことですか？」

「そうだね」

これ以上、犠牲者を出さないためにもプロキオンのそれに頼るしかない。

ユーノの腰元にAゼロノスベルトが出現する。

後はバックル上部のチェンジレバーをスライドさせて、ゼロノスカードをアプセットすれば変身はできる。

(焦るな……)

相手は神出鬼没な相手で、おまけに何時に出現するかなんてのはこちらの推測でしかない。

それが外れてしまえば、犠牲者が出る。

「!!」

プロキオンが身体の向きを変えていた。

「多分ですけど、来たと思います……」

自分の感性が当たっているのかどうかを確かめるためにプロキオンは駆け出した。

「先に行って。怪人が現れたら力づくで抑えるんだ！」

ユーノは先導していくフェレットに指示を出しながらも、走ってい

た。

主の命を返事はしなかったが、心中で受諾したプロキオンは自らの感性を信じるままに走っている。

(ユノさんの言っていた『オカン』はこちらから強く感じます……)

フェレットの姿をしていても、彼はイマジンだ。

全体的な能力が人間より高いため、余程の事がない限りは『恐怖』に直結する『悪寒』を感じる事はない。

だがイマジンとて、感情があるため『恐怖』がないわけではない。

モモタロスが『犬』を怖がったり、デネブが『幽霊』を怖がったりするのは彼等が『本能的』に恐怖を感じているからだ。

(初めての感覚です)

前足後足をこれでもか、というくらいの勢いで振りながらプロキオンは駆ける。

「あれは……」

プロキオンの瞳に明らかにこの場に似つかわしくない黒い三体が大釜を上段に構えているのが見えた。

「変身!!」

プロキオンの身体が白色に輝く。

フェレットの原型がなくなり、ヒト型の両腕両脚が白い光で構築されていく。

両腕には専用武器であるプロキオンクロウが出現されている。

身体もがっしりとしており、頭部もフェレットと仮面ライダーが混濁したイマジンとしての頭部へと構築されていった。

イマジンモードへの切り替えが完了されると、両脚を揃えてぐつと力を入れて跳躍した。

フェレットモードではたどり着けない飛距離を軽く到達できる。

(目標三。初撃対象は中央!)

攻撃目標を即座に決めてから右腕を振りかぶる。

中央にいるドクロとの距離がほぼゼロになると同時に振り下ろした。

布を切り裂く感触と、生物の『肉』を傷つける感触がプロキオンクローから伝わってきた。

(!?)

妙な感覚があったが、倒れているドクロを踏み場にしてすかさず左右にいるドクロを右手左手のプロキオンクローで腹部を突き刺す。

(さっきと同じ……)

どさりとどさりと力尽きるように左右のドクロも倒れていく。

ドクロに襲われかけたカップルがこちらを見ていた。

全身が震えてはいるが、彼氏は彼女を守るポジションを貫いていた。

(ユノさんとなのさんもこんなふうになったらいいのに……)

主に幸せになってほしいとプロキオンは思う。

しかし、その主は今はそのよりも大事な事がある事も知っている。

「ここは危険です。早く逃げてください」

プロキオンはフェレットモードとは違う声色で、カップルに告げた。

*

ミッドチルダ西部時空管理局陸士108部隊隊舎。

「愉快犯かよ……」

隊長室でゲンヤ・ナカジマは眉間にしわを寄せて、本日に起こった事件の報告書を見ていた。

「このドクロがイマジンか否かで編成を考えねえとな……」

ドクロがイマジンだと『戒厳令』が発令される。

時空管理局は『0069年の悪夢』の再現を極度に恐れているため、イマジン出現の際には高ランク魔導師の出勤を規制している。

現在、彼が組んでいる編成は『イマジン以外での事件の際の編成』なのだ。

ゲンヤの眼前に『ALERT』という文字と赤色のモニターが出現した。

「ちっ、この忙しいときに……」

舌打ちしながらモニターを睨む。

場所はミッドチルダの中央部の公園。

対象は手配中のドクロが三体とイマジンが一体。

出動する部隊は『戒厳令』に則った編成で活動せよ、との事だ。

「よりによってイマジンとダブルかよ。最悪だぜ……」

108部隊には『戒厳令』に抵触する魔導師は存在しない。

だが、いないからといって負け確定の相手がいる戦場に無慈悲に

「行つて来い」と背中を押す隊長はいない。

「待てよ……」

『イマジンが一体』という言葉に妙な疑問を感じた。

「ドクロはイマジンじゃねえって事が……」

ドクロがイマジンなら『イマジン三体』というはずだ。わざわざ分別する必要はない。

「となると奴等は何なんだよ……」

苦々しい表情を浮かべながら、ゲンヤは後頭部を搔く。

「全くこういう時ほど、歳をとりたくねえって思つちまうな……。カルタス」

ぼやいてからモニターを展開させる。

『はい』

バストアップで映し出されているのはラッド・カルタスだ。

「イマジンは脅威だが、ドクロを捕まえるには絶好の機会だ」

『出動するか否か悩まされますね』

「だろ。イマジンは108部隊じゃ手に負えねえ。もしドクロが人間が変装したものならイマジンから護らなきゃいけねえ」

管理局員の本分は『犯罪者の殺害』ではなく『犯罪者の逮捕』だ。

「出動してくれ」

『了解』

ゲンヤはカルタスに短く命じた。

*

「人間じゃない……。でもイメージでもない」
倒れている三体のドクロを見下ろしながらプロキオンはつぶやいた。

プロキオンクローで突き刺した感触は機械ではなく、生体だった。だが生体特有の温度の様なものがなかった。まるで、氷を削ったような感じがした。

「貴様、イメージか」

倒れていたドクロの一体がゆっくりと起き上がる。

プロキオンクローでつけられた傷からは血液の様なものが出ているが、止血をするつもりはないようだ。

「奇襲とはいえ、我等に傷をつけるとは大した奴だ」

右側のドクロが起き上がる。

同じように傷つけられているが、全く問題ないような態度だ。

「だが、この程度では何百回攻撃しても倒すことはできん」

左側のドクロが起き上がってきた。

「プロキオン！」

「被害者は出ていません」

現場にやってきたユーノに報告する。

「ありがとう。さてと……」

感謝の言葉を述べた直後、ユーノの眼光は鋭くなる。

「サーチャーに反応がなかったからイメージじゃない。プロキオンが悪寒を感じる事からして人間じゃないって事まではわかってる」

「初撃を与えましたが、あまりダメージになっていないです」

プロキオンが耳打ちをする。

「君達は誰なんだ？」

ユーノは直球でドクロに訊ねる。

「二我等、クライシス帝国怪魔妖族所属スカル魔!!」

ドクロ——スカル魔が三体自らの自己紹介をした。

角ありドクロ——スカル魔スターが大鎌を構える。

「クライシス帝国？」

「聞いた事ない犯罪組織ですね……」

ユーノもプロキオンも無限書庫で働いている以上、下手な管理局員よりも知っている。

その一人と一体の記憶をもつてしても『クライシス帝国』なる組織名はなかった。

「白昼堂々、殺人を犯して目撃者に恐怖心を植え付ける。君達の目的の一部なんだろう？」

ユーノの一言に怪魔妖族三体は動揺した。

「何故、その事を!？」

スカル魔が訊ね返してきた。

(どうする? マリバロン様の計画の半分が見破られているぞ)

(おのれ、どうみてもそこいらの民間人めが!)

(待て。お前達、我等クライシス帝国を滅亡に追いやったのはその民間人ともいえる連中だぞ)

スカル魔二体とスカル魔スターがテレパシーの回線を開いて相談していた。

(RX……)

クライシス帝国はかつて仮面ライダーBLACK RX(以後:RX)に滅ぼされている。

RXの変身者である南光太郎は世間でいうところの『民間人』だ。警察官でもなければ自衛隊員でもないのだ。

そして、彼に加担した者達もほとんどが『民間人』なのだ。

クライシス帝国は警察や自衛隊に負けたことはなくとも、民間人に負けたという事実がある。

過去の過ちを繰り返すのは『愚の骨頂』であると出撃の際にジャーク将軍に警告されている。

(お前達。目の前にいる民間人を甘く見るな。現にあの妙な怪人の主のようにも見えない)

スカル魔スターがこれから殺害する相手ともいえる人間と妙な怪人を睨む。

「計画の半分を見抜いたところで、これから死んでいく者には残りの半分はわかるまい！」

スカル魔スターが大鎌を振りかぶる事が合図となり、残りのスカル魔も大鎌を出現させていた。

そして、人間と妙な怪人へと向かっていった。

「残りの半分はわからないけど……」

ユーノの右手にはゼロノスカードが握られている。

左手でゼロノスベルトのバックル上部にあるチェンジレバーを右へとスライドさせる。

直後に、バイオリンで奏でられているミュージックフォーンが響く。

「簡単に死ぬわけにはいかないんでね!!」

ゼロノスカードの白色のラインが入っている側を表にしてクロスディスクへとアプセットする。

「変身!!」

『シリウスフォーム』

ゼロノスベルトが電子音声で発すると同時に、ユーノとプロキオンの身体が輝き出す。

ユーノの身体がオーラスキンで包まれていき、両腕両脚胸部にオーラアーマーが装着されていく。

オーラアーマー部分に先端に二センチほどの突起が出現する。

本来ならここで頭部のデンレールからネドケラトプスを髣髴させた電仮面が出現するのだが、今回は最初からプロキオン憑依のシリウスフォームであるため、その電仮面は出現しない。

フリーエネルギー体となったプロキオンはユーノの体内に入り込んでいく。

上半身に白色がメインカラーで裾の部分が青色で装飾されているプロキオンクロークが出現する。

両肩には三本爪の飾りが施され、両下腕にはプロキオンの固定武器であるプロキオンクロークが装備される。

胸部にプロキオンの顔が施されたアーマーが装着される。

最後に頭部にデンレールを無視して、ミサイルの弾頭部分が中央で停止するとその場で回転しながら六芒星状に開かれて電仮面となった。

仮面ライダーANOTHERゼロノスシリウスフォーム（以後：Sゼロノス）の完成である。

「レッツゴーバトルです!!」

Sゼロノスが一度だけ構えを取ってから、駆け出した。

「は、速い!?!」

「遅いです!!」

スカル魔スターが防御の姿勢を取るよりも速く、Sゼロノスの拳が顔面に直撃していた。

すぐに繰り出した右拳を引っ込めてから、左側にいるスカル魔（以後：スカル魔B）の胸元をプロキオンクロークで突き刺す。

血液のようなものが飛び出るが、Sゼロノスはすぐに下がってから、残った右側のスカル魔（以後：スカル魔A）を睨みつける。

「はあっ!!」

左足を軸足にして、腰を捻って右下段回し蹴りを素早く繰り出す。

「ぐうっ……」

スカル魔が痛みをこらえる声を出す、がくんと膝を地につけてしまふ。

シリウスフォームは攻撃と速度に特化したフォームだ。

ただの蹴りでも、並みの怪人ならそれだけでもかなりのダメージになる。

並みの怪人では、だが。

スカル魔スター、スカル魔二体がこちらを睨んでいる。

（ダメージは受けてるけど、立ち直りが早い。快復能力があるわけで

もないからダメージ箇所はそのまま……)

深層意識のユーノが三体の怪人を分析している。

「今まで戦ってきたイマジンと違って何か変です」

(うん。何て言うんだろ。生きている相手と戦っている感じがしない)

今まで戦っている相手は『生きている』といういわば自分達と同じ土俵で戦っている者だ。

だが、この三体との戦っていると同じ土俵で戦っているような感じはまるでしなかった。

(でも今までの攻撃を受けて、痛がっているところかして痛覚はあるみたいだけどね)

だからこそわからなくなってくる。

「攻撃は決して鋭いとはいえませんね。防御でも回避でも反撃にはすぐに移れます」

Sゼロノスは自らの身体能力と相手の攻撃速度を比較した。

スカル魔A、Bが左右から同時に駆けてきた。

Aが大鎌を振り下ろしてから、すぐさまBが大鎌を振り下ろす。

「わっとー!」

時間差攻撃だが、Sゼロノスは難なく避ける。

「シヤアアア!!」

スカル魔A、Bが横に並んで左右から横薙ぎに大鎌に振るう。

「!!」

Sゼロノスはプロキオンクロークの裾をばたつかせながら、空中へと足場を移動する。

(徒党を組んでるだけのイマジンより、ずっと統制がとれている)

「帝国と違ってだから軍人さんなんでしょうか?」

(かもしれない……。ん?)

深層意識のユーノが何かを発見した。

「どうしたんですか?」

(管理局が来るね)

契約者とイマジンとの対話は打ち切りになった。

「とっ!!」

地上からスカル魔が大鎌を回転させながら投げつけてきたので、片手で掴んだ。

両手で掴んでバキリと真つ二つにする。

そのまま両腕を振りかぶって、地上にいるスカル魔A、Bに向かって投げつける。

折れた大鎌の上半身と下半身がスカル魔二体の頭部に見事に刺さった。

ばたりと仰向けになって倒れるが、それが『即死』という言葉に直結できるとは思わなかった。

すうーっと地上へと降下していく。

地に足つくすれすれの位置で停止する。

ホバリングのような状態だ。

「やっぱり立ちますね……」

頭に突き刺さっているままでも、スカル魔二体は立ち上がったいる。

スカル魔スターが正面から向かってくる。

Sゼロノスは滑るようにして、後方へと下がる。

大鎌を上段、中段、下段と巧みに操って攻撃を仕掛けるが全てをSゼロノスは避けていく。

(攻めるよ)

「はいー!」

Sゼロノスは回避をやめて、攻撃へと転じ始めた。

スカル魔スターへの間合いを詰める。

「はああああああ!!」

腹部へと右、左と正拳を連打する。

速度と威力の両方が備わっているため、その破壊力を見た目と一致している。

「がっはっ……はっは……ああ……ああ……ああ……ああ」

息を整えようにもその間もひたすら撃たれ続けているため、それすらも叶わない。

くの字に曲がっているスカル魔スターから少しだけ下がって、ステップを踏んで右横蹴りを腹部に狙いをつけて繰り出す。

「げはっ!!」

スカル魔スターが苦悶の声を上げながら後方へと吹っ飛んだ。

ベンチへと激突して、やっと止まった。

（プロキオン、出し惜しみせずに行くしかないね。フルチャージ、やるよ）

「はい!!」

Sゼロノスは三体を同時に仕留めるように、動き出した。

*

108部隊の専用護送車と中継車両は現在中央区の現場へと向かっていた。

部隊員の前線メンバーは皆既にバリアジャケットを着用している。

ギンガ・ナカジマもその一人だ。

左手に装着されているリボルバーナックルを撫でる。

（相手はイマジンとドクロ。正直私達でどうなるか……）

現在、時空管理局でイマジンや得体の知れないモノと対等もしくはそれ以上に戦う事が出来るのは妹が所属している

機動六課だけだ。

（イマジンとの戦闘……。初めて、になるのかな……）

ギンガとて実戦経験はそれなりにある。

だが、イマジン戦となると経験はないに等しい。

妹のスバル・ナカジマが魔導師ランク試験でイマジンと遭遇して無事に生還できたのは紛れもなく『奇跡』だろう。

自分にその『奇跡』が訪れると思うほど、楽観主義ではない。

前線に駆り出される同僚達を見る。

今までにないくらいに暗い表情をしていた。

現場出動で明るい表情をする者達はいないが、今回は相手が相手だけに余計に暗く感じた。

中継車両に乗っているゲンヤも護送車の背を見ながら、暗い表情をしていた。

わざわざ部下や娘を『死』が確定している場所に無表情で送り込むほど、彼は非情ではない。

(くそつたれが……)

相手が次元犯罪者ならこのように毒づくことはあまりない。

自分の部隊に殉職者が高確率で出ると想像してしまったからだ。

「隊長」

「何だ？現場で何か起きてるのか？」

部下が声をかけるのはこれから向かう場で某かの変化が確実に起こっている時にしか声をかけないように厳命している。

「今、現場では『青い狩人』とドクロが三体と戦っています」

「どうなってやがる……。イマジンは？」

「いなくなっています」

「『青い狩人』が戦っているって事はドクロは人間じゃねえって事になるな……」

ゲンヤが知る限りの『青い狩人』情報では、彼は人間(この場合、魔力を持たない者)を相手にしない。

ドクロが人間ならば現れる必要はないという事になる。

だが現に彼は現れてドクロと戦っている。

「とにかく現場へ向かうぞ」

ゲンヤは運転手を急かした。

*

怪魔妖族三体の攻撃を避けたり、防御しながらもSゼロノスはフルチャージの機会をうかがっていた。

一回しか使えない必殺技。

使いどころを誤ればこちらが劣勢になる事は必定だ。

(何だろ？変にタフなくせに、動きが鈍くなってきている……)

怪魔妖族三体の攻撃は、最初に比べると明らかに鈍くなっていた。防御や回避をするにしても、かなりの『余裕』をもって行える。

(殴った時に感じた異様な冷たさ。まさか……)

深層意識のユーノはこれまでの戦闘で一つの仮説を立てた。

通常の攻撃もダメージにはなるが、恐らく今から何百という拳や蹴りを繰り出しても死なないだろう。

外見に刺し傷や打撲痕や擦過傷が目立っても、何の決定打にもならない。

あらゆる生きとし生けるモノが『生命力』をあらゆるエネルギーの根源としているのならばダメージを受ける事でそれは

削られていく。

もし、その『生命力』がないモノがいたとしたらどうなるのだろうか。いくらダメージを与えても『生命力』がない以上、『死』には直結しない。

最初から『生命力』がないモノ——死人という事になる。

目の前にいる相手が死人ならば攻撃を食らってもすぐに立ち上がれるタフネスも、殴った際に感じた異様な冷たさも納得

できる。

(死人が生きて行動することに某かの条件があると思うんだけど……)

物事に無代償というものはない。

魔法を発動するにしても適切な知識がなければ決して上手くいかないように、必ず何かがあると考えられる。

今までのSゼロノスの攻撃にしても、常人ならば即死レベルだしイマジンにしたって運が悪ければ死に至る事もあるものだ。

なのに、眼前の三体は『死』に近づく気配はまるでない。

彼等を確実に倒すためにフルチャージを発動させた攻撃を繰り出すしかないという選択はあくまで『賭け』や『勘』のよう

なものだ。

Sゼロノスはゼロノスベルトのフルチャージスイッチを押す。

『フルチャージ』

電子音声が発せられて直後に、両腕にフリーエネルギーが伝導されていく。

スカル魔スターを先頭に、スカル魔二体が一列になって向かってくる。

中腰になって、フリーエネルギーが纏われている右腕を振りかぶる。

そして、地面に突き刺した。

プロキオンクローが見事に地面に刺さり、アスファルトに亀裂が入る。

直後、向かってくる三体の怪魔妖族が宙に舞った。

正確には、宙に飛ばされたという方が適切だろう。

その原因は先程地面を突き刺したSゼロノスだ。

フリーエネルギーを纏った右腕を地面に突き刺すことで、フリーエネルギーは地中を走り怪魔妖族三体の足元で一気に噴出したのだ。

不意打ちに近い大打撃を受けているので受け身を取る事も出来ずに地面に落下する。

「もう一発!!」

すかさず左腕を振りかぶって右腕同様に地面に突き刺す。

もう一度怪魔妖族三体は宙に舞う。

今度は先程とは違い、三体ともバチバチと身体全身に火花が吹き出ている。

やがて爆発した。

地面に突き刺した左腕を抜く。

その拍子にアスファルトの粉塵が宙に舞う。

「クライシス帝国怪魔妖族スカル魔って言ってましたね」

(うん)

Sゼロノスの耳に、タイヤが鳴く音が入った。

(アイツらの情報だけ教えたら退散するよ)

「わかりました」

ぞろぞろと管理局員がこちらにやってきたのはそれから三十秒もかからなかった。

「お前さんには礼を言うべきなのかもしれねえな」

本来ならこの場にいる事が適切とはいえない人物——ゲンヤがそこにいた。

「ミッドチルダを騒がせていたドクロはイマジンではなかったですよ」

Sゼロノスが結論を述べた。

「それはわかっている。108部隊にもサーチャーがあるからな。で、イマジンはどうなったんだい？」

ドクロがイマジンでない事はわかっているが、この公園に出現したイマジンが突然消息を絶った事はわからない。

「えーと……、そのイマジンって僕の事だと思えます」

素直に白状した。

「てことはお前さんも電王、ゼロノス同様に俺達に味方してくれるイマジンってわけかい？」

「まあそうですね……」

それが真実であると、ゲンヤは納得することにした。

「相手は怪人です。クライシス帝国怪魔妖族スカル魔と言っていました」

告げると同時に、Sゼロノスの足元が地面から離れる。

「それじゃ後はよろしくお願いしますね〜」

と、告げながら宙へと上がっていきそのまま飛び去ってしまった。

「クライシス帝国か……、何だかとてもねえ事が起こる前触れなんじゃねえかあ？」

後頭部を掻きながら、ゲンヤは飛び去っていくSゼロノスを見送りながらミッドチルダの未来に不安を感じた。

*

「ドクロの正体は怪人だったんですか」

「ええ。ご丁寧に組織名に所属部隊に氏名も名乗っていましたよ」

夜となり、ユーノとプロキオンはヴェロツサ・アコースと司書長室で夕食を取っていた。

本日の夕飯はピザである。

「それで結果はどうだったんですか？ 貴方の事ですから調べたのでしょう？」

「ええ。これが調査結果です」

ユーノは調査結果をまとめた報告書一枚をヴェロツサに見せた。

一枚だけというのは簡潔にまとめたうえでのことだろう。

ヴェロツサは受け取って目を通す。

そして、ある部分で目の動きは止まり確認するかのようにしてユーノを見た。

「嘘を記す必要性はない事はわかっていますが、本当の事なんですよね？」

ヴェロツサの両手が震えていた。

やり手の査察官とはいえ、報告書の内容は彼をもってしても受け入れがたい事実なのかもしれない。

「ええ。にわかには信じられないかもしれませんが、それが事実なんです」

ピザの一切れを食べ終えて、ユーノは手に付着したソースをナプキンでふき取る。

「クライシス帝国はかつて、地球制圧を企てて仮面ライダーによって滅ぼされた組織なんです」

滅亡した者達が現世に足を踏み入れているという現実。

自分達が遭遇した者が本物の『死神』のように思えてならない二人と一匹だった。

ホテル・アグスタ 第三十五話 「奇妙な縁」

ティアナ・ランスタールは現在、出生地であるミッドチルダ西部エルセアへの墓地と足を運んでいた。

両親は早くに死別し、唯一の家族である兄も六年前に死亡している。

彼女は正真正銘の『天涯孤独』というわけだ。

そうなつてくると、家族の墓の世話をしてくれる者なんて当然いるはずもない。

ここ数か月は何かと忙しかったので、『休暇』はあつてもほとんどぐったりしているか相棒であるスバル・ナカジマに引つ張られて外出するかの二択だった。

(こういう仕事に就くと、この手の行事に関してルーズになつちやうのよね)

現在の自身の状況を振り返りながらも、歩を進める。

彼女の手には花束が握られていた。

花の種類は菊の花に近い種類の花だった。

(兄さんが死んで、六年か……)

兄の死因や背景は唯一の遺族であるティアナは当然聞かされていた。

「くっ……」

あまり思い出したくないものまで脳裏によぎつたので思わず唇をかみしめて、花束を握っている手の握力に力が入る。

今日は命日でもなければ当然、月命日でもない。

不規則に与えられる休暇なので、有休を取るか欠勤でもしないと狙った日を休むことはできない。

物わがりのいい上司ならば、融通が利くのだが逆の存在ならば平気で無視されることもあつたりする。

以前の職場の上司はこちらの身辺を気遣って、このような行事の際の有休の申請は迷わず受諾してくれた。

そして、現在の職場の上司達もあっさりと受諾してくれた。

あと数歩でランスター家の墓に到着するところでティアナは足を止めた。

「誰？」

思わず呟く。

墓前には自分の記憶が確かならば、初対面の人間がしゃがんで手を合わせて黙祷をしていた。

*

機動六課隊舎の空間シミュレーターの中ではティアナ抜きでも訓練は行われていた。

スバルがヴィータとマンツーマンで指導を受け、エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエはフェイト・T・ハラオウンの指導を受けていた。

野上良太郎は現在、運動会などでよく使われるテーブルの前に座っていた。

テーブルの上には黒いパーツが四個並べられていた。

良太郎の横には同じようにモモタロスも座っていた。

そして同じように黒いパーツが並べられていた。

「最後に説明するよ。良太郎、センパイ」

「うん」

「おう」

一人と一体の前に立っているウラタロスが確認する。

「ルールはいったって簡単。テーブルの前に置かれているシャーリーさん特製のレプリカデンガツシャーをフォームに合わせて先に連結させるんだ。今回の相手はセンパイだから連結させる」

形態は……説明しなくてもわかるでしょ？」

ウラタロスはこれから競い合う一人と一体を見る。

両者ともに「何をいまさら」という表情だった。

「連結を終えたら手を挙げる事。手を挙げなかったら完了の合図にはならないからね。判定が難しい場合はタイムの速い側と連結の出来がいい方が勝ちになるから、そのつもりで」

「良太郎君の記録係は私がやりますから」

「モモの記録係は私ね」

医務室で自身の業務を粗方終えたために、散歩をしていたところをキンタロスとリュウタロスに連れてこられたシャマルとコハナだ。

「それじゃ準備はいい？レディイイイイイ」

ウラタロスの言葉に従うようにゼブラカラーのフラッグをキンタロスが高く掲げる。

「ゴオオオオオオ!!」

フラッグを振り下ろすと同時に、両者は連結を開始した。

シャリオ特製のレプリカデンガツシャー（以後：レプリカガツシャー）は外見と重量はデンガツシャーそのものだ。

しかし、このレプリカガツシャーには戦闘機能は一切備わっていない。

あくまで連結速度向上用に開発されたものだ。

シャリオ曰く「この武器を製造するうえで一番の難点はエネルギーを伝導するシステムですね。デバイスにAIを組み込むくらいに難しいんですよ」とのことだ。

つまりその難点を最初から無視したうえで、製作するとなれば時間は全然かからない。

実際に、製作から完成までにかかった時間は五時間とデバイス一機を製作することを考えればプラモデルを一体作るくらいに簡単に来たのだ。

それでも戦闘機能ゼロといっても、そこはシャリオのこだわりがあり見慣れている者達から見てもわからないくらいの精巧な出来なのだ。

「はい!!」

良太郎とモモタロスは同時に挙手をした。

「シャマルさん、ハナさん。タイムは？」

同時拳手の場合、拳手をするタイムが速かった者もしくはは連結がきちんと完了しているか否かで勝敗が決まる。

ウラタロスはシャマルとコハナのストップウォッチを見る。

「タイムだけだとセンパイの方が速いね。そうなる、連結の出来はというと……。リュウタ、お願い」

「はい」

リュウタロスが右手を挙げて、競技者たちのテーブルの前に立ってレプリカガツシヤーを握る。

そして上下にぶんぶんと乱暴に振る。

両者ともにパーツが外れたりすることはなかった。

「こうなると、タイムが速かったセンパイの勝ちだね」

「おっし!!」

「練習してただけどなあ」

ガッツポーズを取るモモタロスとは逆に良太郎はレプリカガツシヤーを分離させながら悔しい表情を少し浮かべていた。

「さて、次は僕の番だね。センパイ審判よろしく」

「おう、カメ」

「なに？励ましの言葉？」

「オメエ、ズルはするなよ？」

「あのね。僕そこまでセコくないって……」

モモタロスとウラタロスはそんな事を言いながら、ハイタッチをして交替した。

*

ティアナは墓前で黙祷を捧げている青年を凝視していた。

正直、兄——ティエダ・ランスターの職場においての人間関係はほとんど知らない。

兄は仕事の特に人間関係に関しては家には持ち込まなかったからだ。

血生臭い現場の話を唯一の家族に持ち込むことはある種の『弱さ』
と思っていたのかもしれない。

何故自分は眼前の青年を見て両親ではなく、兄と断定したのかと考
える。

まずは外見だろう。

両親の知り合いだとするならばあまりに若すぎる。

歳の頃からして、上司のなのはくらいだろうと推測する。

ただ、問題は性別だ。

横顔と長い髪から自分と同じ性別なのではと思ってしまう。

(もしかして男性?)

訊ねてみたいが、初対面の人間に「あなたは男性ですか?女性です
か?」と訊ねるほど自分は冒険者ではない。

相棒ならやりかねない、とふと考えてしまう。

「あ、すみません。ご家族の方ですか?」

青年はこちらを見て、訊ねてきた。

「あ、はい。そうですけど……」

訊ねられたので首を縦に振る。

「失礼ですけど、貴方は?」

青年は立ち上がって、こちらを見ている。

背は良太郎や侑斗程ではないが、自分よりは明らかに高い。

「申し遅れました。僕はユーノ・スクライアです」

青年——ユーノは礼儀正しく自己紹介をした。

「ティアナ・ランスターです」

ティアナも礼儀に応えるようにして自己紹介をした。

(あの時の女の子か……)

ユーノは一度どこるか過去に何回かティアナに会った事がある。

だが、彼女は自分を見てもまるで初対面の人物を見るかのような表
情だった。

(カードの影響か……)

ゼロノスカードの代償である『使用者に関する記憶消去』には優先順位が存在している。

優先して消去対象になるのは『顔は知らないが、名前は知っている』と『名前は知っているが、顔は知らない』という印象を持っている人物たちの記憶だ。

次に対象になるのは『顔も名前も知っている』という人物達だ。

このカテゴリーになると、さらに細かい優先順位が設定される。

対象者の使用者に対する『親密度』だ。

『他人』なら優先的に消去対象となり、『友人』がその次となり最終的に『親友』、『家族』、『恋人』が最後に回される。

だがこれはあくまでユーノが独自でカードの消去対象を凡その感覚で割り出したものでしかない。

現に『家族』とカテゴリーズされているスクライアの部族の者達で自分を知っている者はいないのだから、この仮説には穴が既にできている事になる。

(明確な理論と厳密なまでの数値で明らかにしない限りはね……)

学者である以上、「直感でこのように感じとりました」では納得できないのだ。

なお、これらは現実の時間においては三十秒にも満たない事だったりする。

「あの、スクライアさんは兄とは……」

いきなりファーストネームを呼ぶのも馴れ馴れしいと思っているらしく、ティアナは苗字で呼んでいた。

「昔、お世話になった事がありました。それから付き合ひになります。自分とティータの関係となると、正直自分でもうまくいえないが考えに考えた言葉を発する。」

「そうですね……」

彼女の声が弾んでいないところからして、疑っているのだろうと予想はできる。

「それでは僕はこれで……」

ユーノは一礼してから去っていく。

これ以上は間が持たないから離れようとする『逃げ』だ。

(彼女には言えないな……)

ティータ・ランスターの死について自分には一つの疑念がある。

だがそれはあまりに曖昧なもので唯一の遺族であるティアナの動揺を煽るには十分すぎるものだった。

(ティータさんの墓参りに来る同僚がいないってのもおかしいな……)

知る限りで彼は同僚から敵視されるような人間ではないはずだ。

「あの……ランスターさん以外に親族の方は？」

足を止めて、振り向いてから親戚関係を訊ねてみる。

「いません」

即答された。

「そうですか。すみません。無神経な質問をしました」

「あ、いえそんなお気になさらずに」

謝罪をすると、変に気を遣われてしまった。

「あの、スクライアさんはこれから？」

「お昼を近くで食べたらくラナガンに戻ろうと思っています。職場のみんなに『今日一日休んでくれないと仕事しない!!』なんて脅されたもんですから……」

「ははは……」

ユーノに合わせるようにしてティアナも笑っていた。

ティアナは目の前にいる男性の職場がどういうところなのかは知らないが、そんな事を言われるという事はそれだけ慕われているという事だけはわかった。

(普通言わないわよ。どんな職場だろうと)

そのようにツツコミを入れてしまいたくなるが、ぐっところらせる。

「ところでランスターさんはこれからの予定は？」

今度はユーノが訊ねてきた。内容は先程自分が訊ねてきたことそのままだった。

「昼食を終えたら、特に何も」

(墓参りすんだら特に決めてなかったわね。六課に戻るのもちよつと
気まずいし)

今後の予定は特に決まっていない。というよりも本日一番優先す
べきことは既に終えている。

「もしよろしければですけど、お昼一緒にしません？一人で食べると
粗食になりそうなので……」

「それは……」

男性としかも今日初めて会ったばかりの人物と食事をするとい
うのもティアナとしてみれば未知の体験の一つだった。

「食事代は僕が奢りますよ」

「一緒にします」

ティアナも金銭的にひっ迫しているわけではないが、財布から金銭
が出て行かずに空腹が満たされるのならばという考えが脳裏によ
ぎって即座に返答した。

ユーノの案内で連れられた場所はこじんまりとした洋食屋だった。

「墓参りに行くからそれなりにこの辺りの地理は詳しいと自認してい
ましたが、このような場所がある事は知りませんでした……」

「ここは最近できた場所なんですよ。といつても僕も職場の人に薦め
られて知った口なんですけどね」

苦笑いを浮かべてユーノはメニューを閲覧する。

ウエイトレスが来たので、ユーノは手を挙げる。

「日替わりをお願いします」

「あ、私も同じもので」

「かしこまりました」

その数分後にウエイトレスが日替わりランチを持ってきた。

「スクライアさんはその職場に勤められてどのくらいになるんですか
？」

「十年になりますね」

ティアナも何故、眼前の人物に興味を抱いたのかはわからない。

だが好奇心を押さえる事は出来なかった。

社会に出て『休んでくれないと仕事しない!!』なんて言われるなんて異常としか言いようがない。

大抵は逆の『仕事しないと休ませない!!』と言われるものだ。

しかも、どう見ても二十歳になっているか否かの人物が言われているなら余計だ。

(騙されちゃダメよ。外見が若くても実年齢がとんでもない人って過去にもいたじゃない)

ティアナはそう言い聞かせながらも、日替わりランチのコーンスープをスプーンで掬って口の中に含む。

「ちなみに僕の年齢は十九ですよ。なんなら身分証も見せましょうか？」

ハンバーグをナイフでこま切れにしてから、フォークで指してユーノは口の中に入れる。

「あ、いえ、そこまでしてもらわなくても結構です」

ティアナは心を読まれたのでは？と感じ、ユーノの申し出を断った。

天井に吊られているテレビを見る。

そこにはニュースキャスターがドクロ仮面の事が話題となっていた。

「……………」

ユーノは手を止めて、映像を見ていた。

「スクライアさん？」

ティアナは何が興味を惹かれるのかわからなかった。

*

食事を終えて、ティアナと別れたユーノはクラナガンに戻り、無限書庫司書長室に直結している地下私設訓練場へと足を運んでいた。

「あ、おかえりなさい。主」

『おかえりなさいませ。ユーノ様』

出迎えてくれたのはプロキオン（イマジン）とAIのアルフレッド

の声だ。

「ただいま。何か変化はあった？」

『機動六課も今度のホテル・アグスタには任務として赴くという情報が入りました』

アルフレッドが慇懃な口調で報告する。

「あと、アコースさんから電話がありました。相談したい事があるので連絡がほしいとの事です」

プロキオンが不在中にヴェロツサ・アコースから電話があった事を告げる。

「携帯にかけてくれればよかったのに」

ヴェロツサには携帯電話の番号は教えてある。無限書庫で連絡をとれないならかけてくる事はできるはずだ。

「気を遣ってくれたんですよ。多分」

『私もプロキオン様と同じ考えです』

イマジンとAIがヴェロツサの『優しさ』からでた行為だと言う。「そっか……」

一体と一機の言葉を胸に刻みながら、ズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

送信先はヴェロツサだ。

「アコース査察官ですか？」

『スクライア先生……。まさかこんなに早くかけてくるとは思わなかったものですから……』

「いえ、用事が済んだので今は私設訓練場で調べ物でもしようかと思っていたところですから……」

そう言いながら、訓練場に不似合いな高級な椅子にもたれながら、ペンを走らせてメモ帳を切り取ってプロキオンに渡す。

『そうですか。何だか申し訳ありません』

「お気になさらずに。それでどうしたんですか？」

前置きを終えて、ユーノはヴェロツサに本題を訊ねる事にした。

ヴェロツサは優秀な査察官だ。

自分に訊ねてくる事なんて、彼の範疇外に近い『怪人』や『仮面ラ

イダー』関連だとユーノは高をくくる。

「捜査官殺人事件ですか？資料は持っていますけど」

偶然の一致だと思いたかった。

何故ならプロキオンに持ってきてもらった資料がまさにそれだからだ。

『捜査官殺人事件』とはティーダ・ランスターが殉職した事件の事を指す。

解決してはいるのだが、どこか釈然としないものがあるような感じがする事件でもあった。

「これがどうかしたんですか？」

『実はですね。改めて見直してみるとこれっておかしいと思いましたがね』

「おかしい？ですか」

パラパラとプロキオンから受け取った『捜査官殺人事件』のファイルを捲っていく。

『ええ、遺体の写真のページを見てみてください』

ヴェロツサの指示に従い、目的のページまでめくっていく。

そのページには遺体——ティーダの全体写真が写っていた。

「おかしなところというのとは一体？」

どうみても何の不思議もない遺体の写真だった。

『でも、何かおかしいんですよね。僕の査察官の勘というものがそう訴えてくるんですよ』

「勘、ですか……」

ヴェロツサがそのような事を言うってくるのも珍しい事なので、ユーノはその写真をじっくり見る。

それこそ、穴が開くくらいに。

死因は供述書通りだ。

写真で見ても遺体そのものに何も不審な点はない。

ヴェロツサの言う『おかしい』というのは単なる気の迷いではないかと思ってしまう。

「あ……」

ユーノはじーつと睨むようにして見ている中で、妙な感覚が襲ってきた。

『どうなさったんですか?』

先程呟いた声はヴェロツサの耳にも入っていたようだ。

「確かにおかしいですね」

『何か分かったんですか?』

「いえ、僕も正直に言えば勘の域なんですよ。それを前提で聞いてください」

『はい』

ユーノは、一拍おいてから口を開いた。

「この遺体、きれいすぎませんか?」

その一言でヴェロツサの目から鱗が落ちたのは言うまでもないことだった。

*

ホテル・アグスタでの任務まであと四十八時間。

第三十六話 「ホテル・アグスタく前日く」

機動六課隊舎でシグナムとヴィータが鞆を片手にしている姿が見えた。

それが観光旅行ではない事が誰もがわかっている事だった。

二人は『ホテル・アグスタ』で開催されるオークションでの警護のために向かうのだから。

「それじゃ、はやて……じゃなかった。八神部隊長、行ってまいりませう」

「うん。頼むでヴィータ」

「それでは八神部隊長」

「うん。明日には私等も合流するからな」

二人を八神はやてが見送っていた。

「釈迦に説法かもしれないが、気を付けてな。これデネブからの餞別だ」

「わかってる」

「ああ」

はやての隣に並んでいる桜井侑斗がデネブキャンディーが入っている袋を一つずつ渡す。

「ありがと♪」

「すまないな」

デネブキャンディーの虜になっているヴィータは『副隊長』の仮面をあつかりと脱ぎ捨てた。

シグナムは虜になっていないわけではないが、ファンになっている事は間違いない。

「侑斗、ゴルゴムとか来ると思う？」

ヴィータが袋から一つ取り出して、口の中に放り込む。

「さあなあ。連中がロストロギアを狙うなら、可能性は大だと思うが動機が分からない」

侑斗は、はやてから貰った資料の情報を思い出しながら口を開く。

ゴルゴムにしるクライシスにしるロストロギアと絡めるには異様

に思えてならない。

「動機とはどういう事だ？桜井」

「八神と何度か話してるんだが、スカリエッツィならリック以外のロストロギアを手に入れても有効に使うからメリット

があるという事がわかる。だけどゴルゴムやクライシスがロストロギアを手に入れてもメリットがあるとは思えないんだよ」

ロストロギアは『お宝』とジャンルすることができるとは分けるとなると『万能アイテム』ではなく『いわくありげなアイテム』になるだろう。

何故ならば、無知無学では決して有効に扱う事が出来ないからだ。

ゴルゴムやクライシスがロストロギアの知識を有しているとは考えにくい。

だからといって、『バカ』と決めつけているわけではないが。

「イマジンは損得度外視してる奴もいるからな」

この場合における『損得』とは第三者からの視点でしかない。

侑斗の今までの経験からして深く見ない限りはそれが『損得』だと判別しにくいものばかりだからだ。

「ゴルゴムやクライシスはイマジンと違って、組織系統があるみたいだからな。油断はするなよ」

それは、はやて達が趣味で作ったファイルの中にある事だ。

「わかってるって」

「元より油断をする甘い相手ではない事は承知している」

はやての時と違って、二人の返答はかなり真剣なものだった。

それはガジェットドローン程度ならば、リミッターを設けられている状態でも問題なく戦う事ができるが怪人達となると

現在の状態で戦う事は自殺行為に等しい。

「それでは行ってきます」

二部隊の副隊長は敬礼をしてから、ホテル・アグスタへと向かった。

*

ホテル・アグスタに到着した二人は身分証明書を提示して、予め手配された部屋へと向かう。

機動六課が試験部隊であるため、贅沢な事を大っぴらにすることはできない。

というよりも、元々『娯楽』や『浪費』といった類と真逆に生きている彼女達は一泊最低限快適に過ごすことができればそれでいいのだ。

もちろん部屋数は一人一部屋ではなく、二人で一部屋だ。

荷物を置いて、ヴィータはベッドに転がりシグナムは椅子に座る。

「ヴィータ」

「ん」

シグナムの言葉にヴィータは寝転がりながら、向きを百八十度変える。

レヴァンティンを介して、宙にモニターを展開させていた。

映し出されていたのは、明日のオークションで出展される品ばかりだった。

「こんなの奪いにくんのかな。わざわざ」

ヴィータの言うように、出展される品は一見するとガラクタに近いものだった。

「あたしだったら、絶対に盗まない」

ロストログア関連の部署についているといっても、ヴィータはその手の価値を知っているわけではない。

任務だから守る、というのがヴィータの考えだ。

「それには同感だ」

シグナムも同じだった。

「スクライアは今回のオークションに解説役として出席するようだな」

「だったら詳しい事知ってんのかな？」

「あり得るな。この手の事に関して、あいつの右に出る者などここに

はいないだろう」

警備に回る時間まで達していないため、二人は件の人物がこのホテルに宿泊しているか否かを確かめるために、フロントへと向かった。そして件の人物が宿泊している事を知り、自分達よりもはるかに豪華な部屋で宿泊している事を知るのとはそれから五分後の事だった。

ユーノ・スクライアとその相棒であるプロキオン（フェレット）は主催者側に案内された部屋の豪勢ぶりに目が点となっていた。

彼等は機動六課と違って完全なVIP待遇のゲストだ。

扱いが違うのも当然と言えば当然だろう。

「ひつろーいお部屋です」

あまりの広さにプロキオンは駆けまわっていた。

「壺とか壊しちゃダメだよ」

駆けまわっているフェレットは人語を理解する聡明なものだ。

だからこそユーノも強くは言わない。

出展されるオークション品の解説役という立場でここに赴いている。

しかし、それはあくまで表面上のものだ。

真の目的はロストログアを奪いに来る可能性の怪人の撃退である。

（イマジンならば契約者の指示か、はぐれイマジン。前に戦ったクライシスだとその裏に誰かがいるって考えた方がいいかもね）

スカル魔の動きは間違いなく、無頼ではなく洗練されたものだった。

それは彼等が正規軍に所属している正規兵という事を指していた。（なのは達の住んでいる地球にはかつてイマジンと同じかそれ以上に脅威な秘密結社がいくつも存在していたってのは驚きだね）

スカル魔戦以降、ユーノは仕事の傍らでクライシスやスカル魔の事で調べていた。

その結果として様々な秘密結社が、高町なのはの生活している地球に存在していたことが明らかになった。

しかもその秘密結社が互いの存在を知ってか知らずか、今となって

は知る由もないが必ずと言っていいほどダブルブックキングをしたこと

がないという『奇跡』があった事もだ。

「あれだけの事をやらかしている連中なのに、なのは達が知らないつてのもどういう事なんだろう……」

たしかにどの秘密結社も、なのは達が生まれる前のものばかりだ。だが日本国民を恐怖に陥れてきた者達の存在は明るみになっていない部分もある。

「どこの世界も政府と秘密結社の癒着は濃厚か……」

日本政府がこの秘密結社達を明るみにすれば首をくくる覚悟をしなければならぬのは間違いなく政府側だからだ。

「どうしたんですか？ ユノさん。独り言なんて……」

「ん？ ちよつとね……」

椅子に座っていたユーノは立ち上がって、窓から景色を眺める。

澄み切った青空で雲が所々、模様となつて一枚の絵画として描く事ができるだろう。

「この一件、揉めるね」

コンコンとドアを叩く音が一人と一匹の耳に入った。

「はい」

ドアを開けると、シグナムとヴィータがいた。

「随分広い部屋にいるんだなー。お前」

ヴィータは腰に手を当てて、窓の景色を眺めながら部屋の感想を述べた。

「VIPだからね」

ユーノは短く言いながら、二人分の紅茶を淹れる。

「シグナムさん達は今回のオークションの警護ですか？」

「ああ。そこでお前に訊ねたい事があってな」

シグナムはレヴァンティンを介してモニターを宙に展開させる。

「今回のオークションの展覧物ですね」

「ユーノ、この中でどれが怪人が狙ってるってわかる？」

ヴィータは本題に入り込んできた。

「どれを狙ってくるかなんて……」

かつて『海鳴市の存在する地球』に潜伏していたゴルゴムも当然調べている。

「ガジェットドローンが狙ってこないかもしれないけど、ゴルゴム怪人なら狙ってくる可能性が高いものならわかったよ」

「どれどれ?」

「これ」

出展品名 四つの石

詳細 天の石 地の石 海の石 王の石

「これだね」

「ジュエルシード系か?」

「いえ、正確にはある事をするために必要な物なんですけど、それ以外では全く何の役にも立ちません」

ユーノが指した出展品の見てくれからシグナムは推測したが、彼はそれを否定した。

「ある事って何だよ?」

ヴィータが回答を急かす。

「世紀王を生み出すために使うみたいです。その名前はブラックサンとシャドームーンだそうです」

「シャドームーン!?!」

機動六課副隊長二人が目を大きく広げて、驚きを隠そうとはしなかった。

「知っているんですね。その名前に……」

「ああ。主はやてとすずかさんが研究していた中にその名があった」

「たしかゴルゴムの一番偉い奴の名前!」

部屋の雰囲気さがらりと変わったのか部屋内を駆けまわっていた

プロキオンの足も止まって話し合っているこちらを見ていた。

「スクライア。怪人がコレを奪うとなると、世紀王を生み出すという事だが何故そのような事をする必要がある？」

わざわざ自分達にとって目の上のコブを作るような行為をしたがる者はいないというのが、シグナムの見解だ。

「どーいう事だよ？シグナム」

ヴィータは首を傾げる。

「私はゴルゴムの怪人というものはほとんど資料でしか知らないが、イマジン並みの戦闘力を持っていると考えている。このま

まならば自分達の自由に動き回る事ができる。だが世紀王を作れば自分達の動きを制限される事になるそうならば怪人達にとつ

てはどちらが自分達にとって得かはわかるだろう？」

「あたし等にとつては陸みてーなもんか」

ヴィータは考えた結果、一番なじみ深い例えを口に出した。

彼女の言う通り、時空管理局の地上部隊は完全なる縦社会であり融通はほとんど利かない。

そのため、解決できた案件を取りこぼしたという例は珍しくない。

「そんなものでいいと思うよ」

ユーノの言葉はヴィータにしてみれば及第点という風にとる事が出来た。

(なあ、シグナム)

(どうした?)

ヴィータが念話の回線を開き、シグナムはその行動に怪訝になる。

(ユーノの奴、何でこんなに詳しいんだろ)

いくら無限書庫が『調べればわからない事は絶対にならない』と言われている場所で司書長をやっていたとしても納得できない部分もある。

(私達がここに来到ることに備えて下調べしていたというわけではなさそうだな)

それができるのならばユーノ・スクライアは怪物だろう。

(スクライアは今どこ前線から離れてはいるが、十年前は我等同様に仮面ライダーと共に戦っている。そこで何か思うところがあるの

だろう)

それが何なのかまではわからない。

元々、シグナムもヴィータもこの手の心理戦といったものは苦手なのだ。

(なーんか他にも隠してる事あるんじゃないやねーの?)

(どうだろうな。あいつは一部署のトップだ。下士官に言えない事もあるさ)

偉くなればなるほど身内相手に、秘匿しておかなければならない事情というものもある。

(偉くなるって難しいもんだな。はやて見ると全然そんなふうに感じなかったけどなー)

主であるはやての顔を念話の回線を切らずに思い浮かべる。

はやてはそういう部分を普段はおくびにも出さないから、その手の感覚がマヒしてしまっていたのかもしれない。

(主はやてがある種では特異なのかもしれない)

(ふーん)

シグナムは妥当な言葉がこれしかなかったことに少し後悔しながらも、ヴィータに告げた。

(ヴィータ。私はスクライアそのものの方が気になっているがな)

(何でさ?)

(気付かなかったとは言わせんぞ。お前とてこの部屋に入ってから薄々と感じていたのではないか?)

シグナムがチラリとヴィータを一瞥する。

(前線に何年も離れてる奴の雰囲気じゃねーって事だろ?)

(わかっているならいい)

二人はこの数年間、ゆっくりと現在話している人物と対談をしてはいなかった。

だからこそ、一つの部屋でゆっくりと話していると彼の纏っている雰囲気の内勤者のモノとは違うという事がわかってくる。

(何ていうかさ、上手く言えねーけど今のユーノって似てなくない?)

(野上や桜井、モモタロス達にか?)

「どうかしたんですか？二人とも」

「いや、柄にもなく考え事をしていた」

「慣れねーことはするもんじゃねーよな」

怪訝な表情を浮かべているユーノに対して、シグナムとヴィータは適当にごまかした。

なお、この口頭が発せられると同時に念話の回線は既に切れていた。

「ふう……」

機動六課の副隊長が去ると、ユーノは一息ついていた。

「大丈夫ですか？」

プロキオン（イマジン）が冷蔵庫からミネラルウォーターが入っているペットボトルを渡してきた。

「ありがとう」

笑顔で答えると、キャップを素早く開けてのど元を潤す。

ごくごくつとボトルの中に入っている水は勢いよくユーノの喉を潤していく。

「はあ……」

一息つくくと、ユーノはペットボトルを口元から離す。

「イマジンや他の怪人さんと戦っている時でもそんな風にはなりませんのに……」

「昔からねシグナムさんとヴィータ、一人ずつなら普通に大丈夫なんだけど二人一緒だと妙に緊張しちゃうんだよ」

相手が本物の『騎士』だからなのかもしれない。

だからこそ、自分のような『にわか戦士』は見抜かれるのではないかという『恐れ』が本能的にあったのかもしれない。

「確かに怖いですものね。あの二人は……」

イマジン状態になっているプロキオンはフェレットの時と違って、口調に子供っぽさがなくなっている。

「シヤマルさんやザファイラさんがバラすとは思えないけど、隠しているというのはね……」

「主……」

ユーノが今の中で弱音を吐くことができるのは、プロキオンだけだ。

『同志』もしくは『共犯者』ともいえるシャマル、ザファイラ、アルフ、無限書庫のスタッフにも決して吐くことはできない。

プロキオンもその事は知っている。

だからこそ、彼は自分が弱音を吐いたとしても決して口外はしないだろう。

「イマジンにクライシスにゴルゴムに僕達の仇となる相手……」

「多いですね……。いつそのこと全部を電王さんやゼロノスさんに打ち明けてしまえば……」

思い切った事をプロキオンは言う。

(良太郎さん、侑斗さん、モモタロスさん達にか……)

それができればずっと自分のしている事は楽になるだろう。

(どんな顔して言えばいいんだよ……)

楽になろうと考えた時、自分の立場を思い出した。

「……やっぱり言えないよ。言えるわけがない」

今の自分はとてもではないが、自分が尊敬の念を抱いている男達に顔向けできる事をしているわけではない。

自分がAゼロノスになったのは、『力』を欲したためだ。

その力を手にして果たす目的、いや果たしたい目的があるのだ。

だがそれは決して『仮面ライダー』と呼ぶに相応しい者達と相反するものだ。

(もう引き返すことはできないし、元には戻れない……)

「それに僕が本当に誤った道をたどっているなら、あの人達は是が非でも止めてくれるよ」

なのは達ではダメだ。

五年間の誤魔化しに全く疑念を抱いている素振りを見せなかった時点で、この役をする権利は彼女達にはとうに失っている。

任せられるのは異世界から来た『仮面ライダー』だけだ。

ペットボトルに入っている残りの水をユーノは一気に煽った。

*

機動六課訓練場では野上良太郎とスバル・ナカジマが対峙していた。

「……………」

「……………」

互いに中腰となつて、互いの出方を伺っている。

ちなみにこの申し出をしたのは意外にも良太郎である。

本来ならモモタロス達とスパーリングをしているところだが、今回はスバルをお願いしたのだ。

スバルは断るとも考えたが、二つ返事で了承してくれた。

表情には「これまでの訓練の成果を活かしたい」という感情が浮かび上がっていた。

「行きます……………」

「お願いします……………」

スバルが切り出し、良太郎が応じる。

間合いを詰めて駆け出しながら、左足を軸に腰を捻って上段回し蹴りを放つ。

(速い!!)

以前とは自分が認識している速度が違っている事に一瞬だけ驚くが、表には出さずに左腕で防御する。

バシツとスバルの右足と良太郎の左腕がぶつかる。

「痛い！」

蹴りの鋭さに良太郎は表情を歪める。

スバルを見る。

彼女の表情に一瞬だが、『喜び』が浮かんでいた。

良太郎は左足を軸に、右前蹴りを放つ。

紙一重の所をスバルはバック宙をして下がる。

(スバルちゃんとは初めてだけど、正直魔法抜きに純粋な格闘技だったら勝てる相手じゃない……………)

スバルを相手にしたのは彼女が習得しているシューティングアーツの対策だ。

未知の格闘技術を楽観視して受け止めるほど、良太郎は豪胆ではない。

振り上げた足を下ろして、また構えてスバルを見る。

汗が流れる。

冷や汗ではないが、それでも頬に伝うものを拭う気はない。

良太郎は駆け出す。

左足を軸にして腰を捻って右拳を矢のように一直線に放つ。

スバルは両腕を×字にして防御する。

「痛あー！」

スバルが声に出す。

反撃とばかりに、右腕を振り上げて拳を放つ。

防御はせずに、タイミングを合わせて左手で払う。

「!!」

スバルが攻撃を繰り出す前に、アッパーではなくボディブローを繰り出そうとする。

そこでタイマーが鳴った。

「はあ……はあはあ……はあ……はあ……」

「はあ……お疲れ……」

スバルは緊張の糸が解け、その場に座り込んでしまう。

良太郎も労いの言葉をかけながら、座り込む。

「す、凄いですね。野上さん……」

「そんな事はないよ。一対一でスバルちゃんと戦って勝つ自信なんてなかったからね」

スバルも良太郎も嘘のない言葉を述べる。

十分が経過すると、両名は同じタイミングで立ち上がる。

「もうすこしだけ付き合ってくれる？」

「はいーもちろんですー！」

良太郎の申し出にスバルは快く受けてくれた。

間。
ホテル・アグスタで主催されるオークション開始まであと24時間。

第三十七話 「ホテル・アグスタ 〔当日〕」

ヴァイス・グランセニツクは本日も快適に機動六課専用のヘリコプターを操縦していた。

目的地はホテル・アグスタ。

任務は無事に乗客（この場合は六課メンバー）を目的地に送り届ける事だ。

それが完了すると『待機』ではなく、そのまま『帰還』となっていた。

ヘリコプターはただでさえ、発着場になにかと面倒がかかる。

この『帰還』という判断は別段間違っていない。

（そーいや、野上のダンナ達は先に行ってるんだったよな……）

ヴァイスは野上良太郎を『野上のダンナ』と呼んでいる。

理由としては、あのフェイト・T・ハラオウンの意中の相手という事もそうだが、二人が一緒にいると、どうしても『恋人』というような甘い感じがせず、互いが互いの長所や短所を知った上で補い合っている『夫婦』のように思えたからだ。

（アレでまだ結婚はおろか、付き合ってもねえんだから信じられねえよな）

正直、それしか言いようがないものだ。

二人は『夫婦』でもなければ当然、『恋人』でもない。

（たまに前の職場の奴等に聞かれたりするけど、そうとしか答えられねえしな）

人付き合いということであつての部署の同僚と飲み会をすることもあるが、そう答えると質問してきた連中は何とも言えない表情をしていた。

勝ち目があるのかなのか、というものだ。

（でもフェイト執務官は間違いなく、野上のダンナ以外は眼中にねえだろうしなあ）

ヴァイスは大人しく座っているフェイトをちらりと見る。

彼自身、同僚からフェイトへの告白で撃沈した噂話は何度も聞いた

事がある。

(それにシグナム姐さんもなんだよな……)

自分にとつて『姉御』と呼ぶべき存在のシグナムも良太郎に特別な感情を抱いている事は知っている。

(姐さんに想われてるって改めて考えるとすげえとしかいいようがないよな……)

その毅然としたたたずまいから異性はもちろん同性からも黄色い声がシグナムにはあつた。

当然のことだが彼女は同性愛者ではない。

だが初対面同然の異性の告白に心動かされる程、彼女は『乙女』でもなかつたのだ。

そういつた場面をヴァイスは何度か見たことがある。

(同情しちまうよな……)

そんな事を考えながらも、ヴァイスは操縦桿を握る力を抜くことはしなかつた。

ヴァイスがそのような事を考えていることなど、露知らず今回の作戦参加メンバーは最終ブリーフィングを行っていた。

*

ホテル・アグスタへと先に赴いていたチームデンドライナー、ゼロライナーの面々は前日から警護をしているシグナム、ヴァイータと合流していた。

「お前達、その格好で行くつもりか？」

「もしかして場違い、ですか？」

「うん。間違いなく」

シグナムとヴァイータは良太郎と桜井侑斗の姿を一瞥してダメ出しをした。

二人の姿はいつもの私服姿だ。

「とはいっても、僕達が持ってきているスーツは現在クリーニング中

ですし……」

滅多に着ない物でも、定期的に手入れをする必要がある。

「その事なら心配ない。後から来るシヤマルが今回用の仕事着を持ってきてくれるみたいだ」

侑斗は事前に知らされている情報を開示する。

「それだと、残る問題は一つだな」

「モモ達、ね」

ヴィータが言う問題に、早く反応したのはコハナだ。

「あたし等は赤鬼の事を知ってるから問題ねーけどさ。今日このホテルに来てる全員はそうもいかねーだろ？」

ヴィータの言う通り、モモタロス達イマジンは機動六課をはじめとして縁のある者達の間では対等の扱いを受けている。

だが、世間はそういう目で見てくれるわけではない。

大抵が『危険な存在』か『自我を持ったロストロギア』か『自我を持ってコンパクト化した天変地異』などというような扱いだ。

だがヴィータの心配は杞憂で終わる。

何故なら良太郎、侑斗、コハナは『問題ない』という表情を浮かべていた。

「手は打っているのか？」

「そんな大それたことじゃないんですけどね。本当に」

コハナにしてみれば本当に大したことではなかった。

何故なら、彼等にはいつも使用している着ぐるみを着せているだけなのだから。

オオカミとペンギンとゾウとドラゴンとカラスがホテル・アグスタにいる客に風船を渡していた。

たまにペンギンが女性にナンパを仕掛けようとするが、オオカミとゾウが後頭部を叩いていた。

ドラゴンとカラスはそれを尻目に風船を手当たり次第に配りまくっていた。

着ぐるみが風船を配っているという光景は浮いているという感じはしない。

それは配っている場所がホテルの入り口だからだ。

「なあ、俺達っていつまでこんなことしてなきやいけねえんだよ？」

オオカミがペンギンに訊ねる。

「だって僕達、招待状もフリーパスも持ってないんだよ。ましてやオークション会場なんて場所に着ぐるみが入ったらその時点で不審者扱いだよ」

金銭と希少価値のある品物があふれている場所に入るには明らかに浮きまくっている姿だ。

「なのは等が来んかぎりは俺等はここで待機って事やな」

ゾウが風船を配る。

「がおー」

「かー」

手持ちの風船がなくなったドラゴンとカラスは通り過ぎる客を驚かしてみるが、その愛嬌のある着ぐるみの姿では迫力がなく頭を撫でられたりしていた。

「ん？」

オオカミの視界に妙なものが入った。

「どうしたの？ センパイ」

「何か変な毛の色したユーノを見たんだけどよ……」

「変な毛の色したユーノ？」

オオカミの言い回しにペンギンは首を傾げる。

「ああ、フェレットの事？」

「おお」

付き合いが長いため、ペンギンはオオカミの言いたい事を理解できた。

「フェレットぐらいいるでしょ」

ペンギンは特に疑問を抱かなかった。

「でもなんか妙なんだよな……」

「何が？」

オオカミが抱いている疑問がどのようなものかはわからないが、ペンギンにしてみればいい加減に面倒になったのは言うまでもない。

「さっきな、イマジンの臭いがしたんだよ」

子供向けの愛想のいいオオカミの着ぐるみを着てはいるが、声色は真面目そのものだった。

オオカミが見た変な毛の色したユーノ——プロキオンは物陰に隠れていた。

「あのイマジンさん達がユノさんが尊敬しているイマジンさん……」

彼の契約者であるユーノ・スクライアから聞かされたことだ。

そもそもこのミッドチルダもとい時空管理局が管理している世界において、『人間がイマジンを尊敬している』という行為自体が極めて異質なものだ。

『人間がイマジンを敵視する』というのが当然の流れだと、プロキオン自身が知っているからだ。

着ぐるみを着ているとはいえ、彼にはイマジンか否かを判別することができない『嗅覚』がある。

だからこそ、ホテル内で風船を配っている妙な五体の着ぐるみが人間ではない事はすぐにわかった。

プロキオンは今まで『人に害なすイマジン』しか見たことがない。だからこそ『自分と同じイマジン』というものに興味が湧いた。

「着ぐるみを着てるから本来の姿はまだ見れないね」

頭上から声がしたので、顔を向ける。

そこにいたのは主であるユーノ・スクライアだ。

「ユノさん！どうして？お部屋にいたんじゃない……」

「僕にとってもあの人達は特別、だからね」

「そうですよね」

プロキオンも主が何故そのような感情を抱いているかは理解して

いた。

「僕にとつては十年経ってるけど、あの人達にとつてはほんの数か月だからね……」

「変な感じですね……」

主の言葉にプロキオンは複雑な感情を隠さずに、相槌を打った。

「あの着ぐるみ達が仮面ライダー電王とゼロノスの仲間達なんですね？」

確認するかのような言葉が一人と一匹の耳に入った。

ヴェロツサ・アコースだ。

「お疲れ様です」

ユーノは笑みを浮かべて軽く挨拶する。

「いえ、先生はこれからですよね？」

ヴェロツサはユーノがオークションに参加することを知っている。

「ええ、そうなんですよ。何回参加してもこの手の講義とか解説というのは慣れないんですよ……」

あはは、とユーノは笑う。

「またまた、ご謙遜を……。見ている側からすれば威風堂々としてますよ」

「内心ではいっぱいいっぱいなんですよ……」

更にユーノは小さく笑う。

「来ると思いますか？」

ヴェロツサの言葉に、主も自分も緊張が走った。

「来ますよ。この機を逃すわけがありませんしね」

笑顔だったユーノは真面目な表情になっていた。

「お宝たくさんですよんね」

プロキオンの感覚では、今回オークションに出展される品はロストログリアであろうとなかろうと『お宝』でしかない。

そして『お宝』を盗む者は『悪者』なのだ。

「狙ってきそうな物は既に機動六課には言っています。開催中に襲撃

されると僕自身、安心して変身できるかどうかかわからなくなりますからね」

ユーノは立場上というより、目的達成のために大っぴらに変身することはできない。

「変身したら即逮捕でAライナーは間違いなく没収ですからね」

それは秘密裏に協力しているヴェロツサの首を絞める事にもつながる。

「機動六課と仮面ライダー電王、ゼロノス頼りになりますね」

「そうですね……」

*

機動六課のヘリコプターがミッドチルダ首都南東地区の空を航行していた。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今回の任務のおさらいや」

今回は部隊長である八神はやても現場に参加していた。

一部隊の隊長が現場に赴くことは時空管理局という組織の中ではとりわけ珍しいわけではない。

戦闘能力のある者（この場合は魔力を有している者）が隊舎で椅子を温めているという方が少なくないのだから。

「これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は現状ではこの男……」

はやてが告げた直後に、宙にモニターが展開された。

映し出されたのは一人の男のバストアップ写真と主な経歴だった。

「広域指名手配されている次元犯罪者、ジェイル・スカリエツティの線で進める」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、みんなも一応憶えておいてね」

はやての言葉に続くように、フェイトが真面目な表情で告げた。

「はい！」

フォワード四人も真面目な表情で返事をする。

「で、今日向かう先はここー！」

後方にいたリインがすーっと宙を移動しながら、モニターのそばまで移動する。

「ホテル・アグスタ!!」

リインが告げると同時に、スカリエツティからホテル・アグスタへと切り替わっていた。

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが来ちやう可能性が高いとのこと警備に呼ばれたです！」

高町なのはが説明している際は、フォワード四人は真剣な表情をしていたのだが、説明者がリインになると『癒し』効果のためか表情が緩んでいた。

スバル・ナカジマに至っては近くで『おすわり』しているザフィーラ（獣）の頭を撫でていた。

「この手の大型オークションになると、密輸取引の隠れ蓑になったりするし色々油断は禁物だよ。特に怪人にはね……」

现阶段のフォワードの実力からガジェットドローン相手に後れを取る事はないとフェイトは考えており、最大の障害となるのは怪人だと判断して告げた。

「侑斗さん等は既に昨日から警備に入ってるシグナム副隊長とヴィータ副隊長等と合流してる」

はやての説明を聞きながらも、キャロル・ルシエは対面に座っているシャマルの足元にある六つの箱が気になった。

「私達は建物の中の警備に回るから、フォワード前は副隊長達の指示に従ってね」

「はい!!」

なのはが指示を出すと、フォワードはすぐに返す。

「あの、シヤマル先生」

キヤロが先程から抱いていた疑問を解決するタイミングと思い、拳手をした。

「さっきから気になっていたんですけど、その箱って？」

「え？ああ、これはね。隊長達、侑斗君、良太郎君、ハナちゃんのお仕事着♪」

キヤロが指差す六つの箱を、シヤマルは笑顔で答えた。

フォワード四人は同時に首を傾げた。

ヘリコプターが、着陸したのはそれから十分後の事だった。

*

ホテル・アグスタで合流した良太郎と侑斗は、シヤマルから箱を受け取った。

その箱にはオークション会場に入場しても自然に振る舞えるための衣装が入っていた。

従業員の更衣室に二人はいた。

「こんなのもらっていいのかな……」

「仕事に必要なものだからいいんだろ」

良太郎と侑斗は箱の中身を見て、感想を述べていた。

互いに私服を脱ぎながら、箱の中に入っていた衣装に袖を通していく。

「サイズがピッタリだ。この仕事をしたのは八神じゃないな」

「誰？」

「シヤマルだよ。あいつなら六課にいる全員のサイズを頭の中に入れてるからこのくらいの事は造作もないさ」

着ていた私服をロッカーに入れる。

「シヤマルさん。すごいもんね」

良太郎の中では、シヤマルは才色兼備な女性となっている。

「言っておくが、シヤマルに対して妙な過大評価はするなよ？アイツはアレでも抜けてるからな」

「ふうん」

八神家の身内同然である侑斗の言葉なのだから、嘘ではないだろう。

「よし！侑斗、それ……」

「言うな。八神は俺を何だと思ってるんだ……」

侑斗の格好を見た良太郎はどういえばいいのかわからなくなっていた。

良太郎は主流とも呼べる黒色のタキシードだが、侑斗は白色という着る人をかなり選ぶものだった。

見方によつてはとて『カタギ』とは言えない雰囲気も出ていた。

「似合ってるんだからいいじゃない」

「アイツにはとりあえず拳骨一発はしておくか……」

侑斗は、はやてのおちやめに対する報復を宣言した。

更衣室を出ると、女性四名と鉢合わせした。

四人ともドレス姿だった。

なのは彼女の魔力光と同じ桜色をメインカラーにしたキャミソールタイプのドレスで、髪型はいつものサイドポニーではなく、ストレートにおろしていた。

フェイトはバリアジャケットに近いカラーをした肩が露出し、スリットが入っているロングスカートドレスで髪型はストレートで変化はないが下の方に巻いてあるリボンはなかった。

はやては青色をメインにしたドレスで両耳にはクロスのイヤリングをつけており、髪型はアップにしていた。

コハナは白色のドレスで、髪型はいつものストレートでもなければポニーテールでもないツインテールだった。

「二人とも、サイズはぴったりみたいやな」

はやてが二人を一瞥してから満足げな表情をしていた。

「ところで侑斗さん、野上さん。何か言う事あらへんかな？聞きたがっている人もおるんやけどな」

はやてがその服装とは反する悪戯な表情を浮かべて、催促を始める。

「高町、テストタロツサ、ハナ。よく似合ってるよ。八神、お前はさつきとタイムマシンに乗って二十二世紀に帰れ」

侑斗の一言は、なのは、フェイト、コハナに喜びの表情ではなく、いかにも吹き出しそうなくらいに笑いをこらえていた。

「侑斗……」

拳骨ではなく、こういうやり方で報復するとは予想していなかったがあからさまな暴力ではないだけマシだと良太郎は納得しておくことにした。

「まさか、このドレスのカラーを見て即座にそんな返し方するとは思わなかったわ……」

はやては言い返すどころか、瞬時に高度なボケをした侑斗の技量に高さに恐れをなした。

だがそれは、自身の事を『タヌキ』と認めていないと成立しないものなのだが。

「アレって確か『タヌキ』じゃなくて『ネコ』だったような……」

フェイトは記憶の奥にあったものを引っ張り出して口に出すが、良太郎を始めとする日本人四人に「しーっ」と黙るように言われる。

侑斗とはやての売り言葉に買い言葉的な応酬が終わってから、その場の『ほのぼの』とか『笑い』に満ちた雰囲気は変わり真面目なものとなる。

「さて、これから私達は中の警備へと入ります。不自然な行動を避けるためにも二人一組のツーマンセルで行動しますんで、組み合わせは今からクジで決めたいと思います。この中から

一枚引いて、同じ絵柄の人同士がコンビって事になるんでよろしくな」

はやてが説明口調が辛くなったのか、最後だけ本来のモノに戻っていた。

いつの間に用意してたんだろうとはやてを除く五人が思ったが、口には出さずにクジを引いていく。

その結果。

なのは&コハナ。
フエイト&良太郎。
はやて&侑斗。

という組み合わせになった。